
世界の枠から外れた者

裂やん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

世界の枠から外れた者

【Nコード】

N6941U

【作者名】

裂やん

【あらすじ】

世界に存在を消されかけた少年が神に助けられチートな能力を貰ってネギま！の世界へ転生することに。面白おかしく愉快に痛快に事あるごとにOHANASHIされながら2度目の生を謳歌します。

第0話 1つの終わり、1つの始まり（前書き）

素人によるネギま！を原作とした駄文。処女作です。

色々と至らぬところがありますがそれでもいいという方はどうぞ。

第0話 1つの終わり、1つの始まり

Side・主人公

「知らない天井だ」

周りは何もないし壁もないから天井もないんだろうけど、一度は言ってみたい台詞だったしな。

言えて満足満足つと。

さてまず此処が何処か知らんが現状把握といこうか。

確か昨日は普通に学校に言つて本屋とかに寄り道しながら帰宅して、

食事をして入浴して歯磨きをして0時前には寝たはず。

それがどうなつてここにいるんだ？

んー此処が私が思つてる通りならそろそろ自称神とかいう爺さんとか幼女とか美人さんが現れ「もう気付いておつたのか、遅くなつて済まんの。私は神じゃ」・・・た。

爺さんだった・・・。せめて美人さんか幼女がよかつたぜ・・・。

「何か失礼なこと考えておるが、実はお主は死んで「テンプレ乙」・・・話してる途中なんじゃがのう」

「どうせあれだろ、部下のミスとかで間違つて殺してしまいましたみたいな二次創作系小説の転生モノのテンプレなんだろ？」

「ふむ、何か誤解しておるようじゃがお主を殺してしまったのはわし達神なのは正解じゃがミスではないぞ？」

「はっ？」

「さてさてこの爺さんは何を言っているんだ？」

「今の発言の意味はミスではなく故意的に殺したと？」

「あれか？神たちの暇つぶしの的な方なのか？」

「それも誤解じゃな」

「思考を読んだと・・・？いや神なら可能か。」

「読心術は神の必須能力じゃよ。それに気付いてなかったのかもしれんが最初から読んでおったぞ？」

「最初からってのは美人さんとか少女とかって件かな？まあいいや。」

「さてご老人、このままじゃ話が進まなくなるから説明をしていただきたいのだが？」

「さつき説明しようとしたのに話の腰を折ったのはお主じゃないか・・・」

「それは済まなかった。でも何故か言わなきゃいけない気がしたから。反省はしている。後悔はしてないがな」

「後悔もして欲しい気もするが些細な問題か。さてお主が死んだ理由なんじゃがのう、実はお主、世界に存在を消されるところじゃったのじゃよ」

世界に存在を消される？それが何故死ぬ理由に・・・？

ん？存在が消される？物理的に殺されるではなく、存在を殺されるでもなく消される・・・？

いや、待て待て、私の考える通りなら最悪ではないか。その通りなら・・・

「お主意外と察しがいいのう。たったあれだけで気付くとは。そうお主の想像通り世界に存在を消されるという事は世界に存在していたという事実がなくなるという事じゃ」

「つまり某化物よろしくな存在に食われて残り滓同然となって存在の力的なものを磨耗していづれ消えてしまつて、誰の記憶にもどの記録にも残らないということか？某討滅者みたいな例外もなく？」

「その通りじゃよ。じゃからお主の存在が消される前にわしら神が殺してここに連れてきたのじゃよ。時間的にもギリギリじゃつたしのう」

「それなら怒る理由がないな。それよりも感謝しなければならぬな。流石に家族にも友人の記憶にも残らないのは流石に悲しすぎる。私が思う人間の死は肉体的ではなく記憶的な方だしな。

それで何故私は世界に存在を消されようとしていたのか、教えていただきたい」

「ふむ、お主は個人が世界に与える影響力と言うものを考えたことがあるかのう？」

影響力？会社などの組織での発言力とかか？

「うむ、考え方は間違っておらんのか。まあ、今回は歴史に名を残すことが出来るかどうかみたいなのじゃがな」

名を残すことは偉人ってところか。
それで何故消されることになるんだ？

「人はそれぞれ少なからず世界に対する影響力がある。ここでは『器』としておこうかのう。『器』の大きさは生まれたときに大体決まっておるのじゃが、若干増減する場合があるのじゃ。それでの、『器』にもそれなりに許容量というものがある。お主の『器』がその許容量を超えてしまふところじゃったのじゃ。今回の場合は世界がお主の『器』が大きすぎてを支えきれなくなるところだったと考えてくれればよい」

『器』ってのは世界に対する影響力なんだろ？

私は基本平凡な高校生で、真人間とは程遠いただのオタクだぞ？
そんな私がそんな大物なわけないじゃないか。

そういえば過去にも私みたいに消されたか消されかけた人っていたのかなー？

「今までではなくこれからそうだったってことじゃ。それとわしらの知る限りお主以外に消されそうになった人間はおらんかったよ。今までで一番『器』が大きかったのは同量で2人だけじゃ」

2人？誰だろう？それ程大きいってことは私でも知ってる程の人物だろ？

2人って聞くと双子とか兄弟を連想するな。まさかライト兄弟とかその辺なのかね？

「ライト兄弟ではなのう。正解は聖母マリアとイエス・キリストじ

「やよ」

「ああーそれなら納得できるな。」

「そういえば多少なりとも普通の人間にも影響力があるって言うだけど数値的にどれくらいなんだ？偉人とかも数人交えて教えて欲しいかな。」

「うむ、平凡な人間は大体1000かのう。聖母とキリストは最大値の10000で、エジソンやライト兄弟、織田信長や徳川家康とかは8000後半から9000前半、作者が知らん偉人は6000から8000前半、企業の社長とかは規模にもよるが3000から6000じゃな。お主の場合生まれたときは平凡な人間よりも少なくとも50から70程度だったんじゃがのう。増加自体は珍しくないんじゃが、それも数年に10か20程度なんじゃ。それがお主は日に日に1か2ぐらい増加しておつてのう、誕生日には190前後増えていたんじゃよ・・・」

「多少は増減するって言うてたが、それはおかしすぎないか？」

「日に日につてことは大体18年×365日+4日(閏年)マイナス18として」

6556+60で6616で3384を190×18で3420・

・あ、私が死んだの誕生日の前日だ。

「てことは3420から190引いて3230か。本当ギリギリだったんだな・・・」

「現状は理解した。で、私はこれからどうなるんだ？」

「わしがお主に示せる道は2つじゃ。1つはお主の『器』を神格に変えて神になる。もう1つはお主の望む世界への転生じゃな。転生と言つても赤ん坊から再スタートつてわけではないがの。わし的に

は前者を選んで欲しいがのう」

「個人的には後者かな。無闇に神の数を増やしていいわけじゃないだろう？世界のバランスが崩れてしまつてはかなわんからな。そういえば今更気付いたんだが爺さんの後ろにいる美人さんは誰だ？」

「すっかり忘れておつたの。こやつはお主が転生を選んだときに呼んでおつた、転生を管理しておる神の一柱じゃよ」

「挨拶が遅れてしまいましたね。私は転生を管理している神の統括神です」

「ご丁寧にどうも。私の名前はえーと・・・なんだっけ？」

「ここに来た者は例外なく生前の名をなくすんじゃよ」

「そうか。記憶はあるのに不思議なものだな。そういえば役職みたいなのは聞いたが名前は聞いてないが？」

「それはですね、私達神には名はありませんよ。名がなくても意思疎通は可能なので」

「そういうものか」

「そういうものです」

「それじゃ転生に関しての話をしよう。私が望む世界への転生だったな。例えばアニメや漫画の世界ってのは可能なのか？」

「可能ですよ。アニメや漫画の世界はきちんと存在しています」

「ふむ、そういった世界に送った場合、私というイレギュラーが存在するということに関して修正力は働かないのか？」

「そういったことはありませんね。送るのはその世界の平行世界です。でオリジナルが存在しきちんと物語通り進んでいけば並行世界に修正力は働きません。でも、物語の世界なので必要なイベントは発生しますよ」

「なら転生先はネギま！の世界で。その場合必須イベントはネギが麻帆良に来ること、魔法世界に行くこと、20年前に大分裂戦争が起こり、その600年前にエヴァンジェリンが真祖にされ、さらに2000年以上前に創造主が魔法世界を作るってところかな？」

「そんなところですね。いつの時代に転生しますか？」

「んー、個人的にはエヴァより前に生まれて婚約者になって一緒に真祖にされてエヴァの悲哀を癒してあげたいわけだがな。原作開始3000年前にしようかな」

「世界と時代は決まりましたから次は能力とかですね」

「そうそうお主の場合でふおるとで魔力と気は無限で身体能力は高く不老不死じゃからな？ついでにいうと誕生日で増加する分もここでなら世界から干渉受けないから増やしておいた。それによってお主はむしろ神の位を得るに足る者になったからお主らが言うところの神通力を使えるようになったぞ。神通力は十全に使いこなせるように修行しておいてくれよ。いづれお主には神になってもらうからの」

「デフォルトっていいのか？それとさりげなく勧誘してんなよ」

「うむ、お主の『器』を鑑みればこれはでふおるとでなければいけないのじゃよ」

「そうか、神になるとかつて突っ込みはスルーか。それならまずは私の知っているアニメや漫画、小説に出てくる全ての能力と力を副作用なしで。そしてそれを十全に理解し十全に使いこなすための知識がほしい。

次にあらゆるものを創造する力を。創り出すものを十全にするための知識も。

3つ目、拳法や剣術といった武に関するあらゆる知識を」

「チートですね。でもあなたの『器』的にはまだ余裕ですね」

「じゃ4つ目。1つ目の能力を他人に発現させることの出来る能力を。例えるなら禁書の超能力をエヴァに与えて魔法や魔術を使っても内出血しないみたいなところか。

5つ目あらゆる魔眼を副作用なしでの使用・魔眼の完全掌握・魔眼に関する知識を」

「4つ目は大丈夫です。魔眼のほうは能力であり力であるので1つ目で完了してますね」

「そうか。次は外見の完全変化。内面の方はいらんな。他人の眼を誤魔化すためだからな。

次に魔力や気は無限だからそれ以外の筋力と言ったステータスの上限撤廃。どこかのサイヤ人みたいに死にかけから復活すると強くなるってのは上限撤廃があれば十分だしな。ああー幸運は最大値で頼む。後忘れてたが黄金律もつけてくれ。金に困る生活はしたくな

い
「

「今ので大体6割ってところですかねー？」

「今のでまだ6割なのか？　そういえば自身の外見変化を頼みはしたが他者の外見変化・・・と言うよりも成長は可能かな？」

「それなら自身の外見変化を少し変えて自身他者を問わず外見変化もしくは外見の成長にしますね」

「さて能力的なのは次で最後だ。アカシックレコードへのアクセスの許可が欲しい。制限として他者の記録の閲覧は可だが記憶の閲覧は不可。未来の情報閲覧も不可。過去と現在の記録だけの閲覧だけがいい」

「私の一存では許可しかねま」「最高神たるわしが許可しよう」・・・
だそうです」

「・・・爺さん、あんた最高神だったのか」

「そういえばわし、神とは名乗ったが役職的なのは名乗ってなかったのう」

「んじゃこれで最後だ。この肉体のまま転生しようとは思わないかな。転生したら私は私であって私ではなくなるからな。せめて肉体だけでも家族の許に送って欲しい。死因は原因不明の発作による心停止つてことで頼みたい。じゃ肉体年齢14歳くらいで性別は男。顔は【空の境界】の両儀式を多少男性に近づけた感じで。髪は肩より少し下くらいの長さかな。名前は転生して尋ねられたら考えよう。要求は以上だ」

「それじゃ新しい肉体を作成してそっちに魂という名の情報を移しますね。少し目を閉じててくださいね。んーとこんな感じでしょうかね？目を開けていいですよ」

「若干手足の感覚が違うな。体の確認したいから姿見とかないかな？」

「ちょっと待ってくださいね、今出しますから。よっと」

おー要望どおりになってる。

あれ、そういえば今どこから姿見出したんだ？

「禁則事項ですよ？」

さいですか……。

「それじゃこれでお別れかな？」

「そうじゃな」

「そうですね。それではそちらの門を通っていけば転生先に行けますので」

門なんてあったかな？いや、ここは神が住む（？）場所だ。言うただけで実現するのもかな。

「ああー何から何まで感謝するよ。それでは縁があったらまた会おう」

私は挨拶をしながら現れた門へ、そしてその先にある出口へと進む。2度目の生を謳歌するために。

S i d e . e n d

第0話 1つの終わり、1つの始まり（後書き）

理論とか色々と変だったりします。

その辺は作者の独自解釈ということ。

因みに作者はハーレムものにしようとか考えてます。

本編で1人だけ名前だしてるんですけどね。

予定としては、

エヴァ様、茶々丸、アリカ姫、このか、刹那、ちうたん、アキラ、
桜子と言ったところですかね。

でも刹那あたりは義娘になりそう。

明日菜やたつみもなんかそうなりそうです。

第1話（前書き）

とりあえず修行編開始です。

というより面倒なのでキンクリしまくるかもしれませんが・・・。

それでは1話をどうぞ。

S i d e ・ e n d

S i d e ・ 神（美人）

「最高神様、忘れていたんですが通路の仕掛けって解除してましたっけ？」

「あつ」

彼大丈夫かしら・・・？

S i d e ・ e n d

S i d e ・ 紫稀

あ、危なかった・・・。

能力と力の知識を貰っておいて良かった・・・。

まさか早速力を使うことになるとはな・・・。

いや落下しても不老不死だから平気だけど流石にグロテスクにはなりたくないな。

舞空術かぁー。龍珠？玉？知ってて良かったみたいな。

さて地面も見えてきたし着地着地と。

んー舞空術もなかなか早いけどやっぱりりなの飛行魔法にす

るかなー？

そういえば現代から3000年前ってことは紀元前1000年？
てことは縄文時代とか弥生時代？

年台はあまり覚えてないんだよなー私。

まあー造物主ライフメーカーがなんか大戦期に2600年の何とかがって言った
気がするんだよなー。

とりあえず400年修行でもするか。

この時代の人種？に見られたくないしダイオラマ魔法球でも作る
か。

倍速はエヴァが持つてる24倍速の半分の12倍速でいいか。

さて創造創造つと。

中のは後で変えるとして今は海に囲まれたそれなりの大きさの島
でいいかな。

おっ簡単に出来るもんだな。

後は200年分の魔法球を囲うように一回り大きい人払いと認識
障害の結界を誰にもばれないレベルで作成つと。

さーて現実時間200年、魔法球内時間2400年分の修行しま
すかつと。

名前は修行しながらでいいか。

とりあえず表と裏で名前変えようかな。

Side・end

Side・神(爺)

「そういえばあやつに伝え忘れておったことがあったのう」

「どうしたんですか、最高神様？」

「ネギまの世界って属性魔法があったじゃろ？あれの適応属性とかの話をな」

「そういえばありましたね、雷とか氷とか」

「それ以外にもまだ1つあるんじゃがのう。紙に書いてあやつがいる場所にするかのう」

さらさらさらーっと。

さてあやつはどこにおるのかのう。

ん？結界を張っておる上に座標が特定しづらいな。

ネギま！の世界には魔法球とかいう位階を異にする魔法具があったか。

やっと座標が特定できたわい。

んじゃ紙を転送っと。

あれを読んだあやつの反応が見てみたいのう。

Side・end

S i d e ・ 主 人 公

修行を開始してから魔法球内では既に50年くらいか。
現実世界だと12倍速だから4年くらいか？

とりあえず50年は魔法より体術関連と魔力運用の効率化しか考
えてなかったわけだが。

瞬動は入りも抜きも完璧で既に縮地に到達したしな！。

おっと何か紙が落ちてきたぞ？

んー魔法球内に物を入れるには魔方陣を起動しないといけないん
だが、一体誰だ？

まあー読んでみれば分かるか。

えーと・・・

『元気しておるかのう？』

わしらの方では30分くらいしか経ってないんじゃないじゃがそっちは
どのくらい経ったのじゃ？

前振りはいいか。

今回これを送った理由じゃがな、伝え忘れたことが2つほどあっ
たのじゃ。

1つ目はネギま！世界の魔法のお主の適正属性の話じゃ。

魔法を使う修行しておれば気付いておるかもしれんが、お主は全
てじゃ。

闇・光・氷・雷・風・火・土・水・癒。

他にも属性があるかもしれんがわしは興味ないからそのくらいしかしらのでな。

で2つ目。こつちが本題じゃ。

実を言うとお主その世界と繋がっておるんじゃ。

つまりは呪文詠唱じゃったかのう？あれ必要ないんじゃよ。

でも、術式とかをきちんと理解するまでは無詠唱は出来んから注意するようにな？

それじゃ元気でのう B Y最高神』

ふむ結構大事なこと書いてんじゃね？

あれなんかまだ続きが・・・

『 P S そういえば通路の仕掛けどうだった？

かなり昔に仕掛けたまま忘れておったんじゃが、お主が行った後に気付いたのでな。

引つかかってたらすまんのか？』

あの爺・・・。

今度会ったら何発か殴るか。

情報には感謝しとかないとな。

さて、体術関連は既に習得自体は終わっていたからな。そろそろ魔法関連の習得に入るとするか。

手始めに魔法の射手でいいか。

適当に縦横50cmくらいの看板創つて的にするか

看板から少し離れてっと。

「えーっと、始動キー考えてなかったな。初期のでもいいか。」

プラクテ・ビギナル セブテンデキム・スピリトタミキアーレス・コエウンテニエス・コンキダント
魔法の射手・連弾・氷の3矢 サキタ・マギカ セリエス グラキアーリス

とりあえず3矢出て看板に向かっていったな。

でも、たつた3矢で木っ端微塵なんだが……？

込める魔力量多すぎたのかな？

とりあえず要修行ってことでいいか。

Side・end

第1話（後書き）

そつえば主人公の名前まだ考えてなかった・・・。

裏の方の名前は零崎使いたいんですけどね。

と言いつつ戯言シリーズ読んだことないんですけどね！
物語シリーズは読んでるんですが。

とりあえず次話までに名前考えておくことにします。

始動キーの方はエヴァ様と会うときまでに考えてればいいか。

第2話（前書き）

何故か内容が変わっていました。
それでは修正した第2話をどうぞ。

第2話

1. 名前を考えよう

Side・other

少年には後回しにしまくっていた悩みが何個かある。
その1つが名前である。

この世界に転生してきて現実時間では約25年、魔法球内時間では300年が過ぎていた。

それなのに未だに名前を後回しにしていたのだ。

理由を挙げるとするならば、

自分以外に意思疎通の出来る生物がないからである。

呼んでくれる相手がいないのだから焦る必要がないとも言えるのだが。

「さて、やっぱり型月作品や西尾先生の作品のキャラから取りたいなあー」

Side・end

Side・紫稀

「さて、やっぱり型月作品や西尾先生の作品のキャラから取りたいな

あー」

んー顔の造詣は『空の境界』の両儀式を多少男性よりにした感じ
なわけだしなー。

ファーストネームは式をもじって紫稀にすればいいとして、苗字
が大変だな。

西尾先生の作品の方から少し持ってくるか……。

神原後輩の神と両儀の儀で神儀でいいか。

カミギ
神儀 紫稀。
シキ

何か色々痛い感じがするが気のせいだと思いたい

次は裏の名前だな。零崎 識を使うからなー。

ここは型月辺りから選ぶとするか。

ここはやっぱり式の関係者の橙子さんの苗字の蒼崎から取らせて
もらうか。

ゼロザキ
零崎 アオンキ
蒼識。

これいいかなー？

まあー当分誰かに向かって名乗ることもないんだろっけどさ……。

Side・end

Side・other

こうして少年の表と裏の名前は決まった。

表は神儀 紫稀。

裏は零崎 蒼識。

裏の名前が最初と最後を抜くと蒼崎になるのは紫稀や作者の意図したことはない。

Side・end

2・爺（最高神）との連絡手段を考えよう

Side・other

少年改め紫稀は名前を考えた数日後再び悩んでいた。

「最高神の爺さんとの連絡手段考えるか・・・」

そう天界にいる最高神との連絡手段である。

転生してから最高神との接触があったのは、属性や無詠唱に関する手紙を貰った1度きりである。

だからこそ悩んでいるのだ。

現在はまだ修行中なため最高神と接触する必要性がない。

だが、現実世界（新旧世界問わず）を旅することになったときに不都合が生じた時のための最終緊急措置としてすぐに連絡が取れるようにしたいのだ。

その為の連絡手段の模索である。

「んーとりあえず1度接触しないとー。」

何回か叫びながら呼べば反応あるかなー？試してみるか。

おーい！最高神の爺さあー！ー！ー！ー！ん！ー！

即断実行。

28

魔法球内で叫びだす紫稀の姿がそこにはあつた。

魔法球の中でなければ間違いなく痛い子認定されていただろう。

Side・end

Side・爺（最高神）

ふおっふおっ、あやつは元気にやっておるかのう。

天界とあやつを転生させた世界は時間の流れが違つからどれくらい経つたのかわからのが今は修行中じゃろつな。

あやつが気になるしちょっと様子見でもしてみるかのう。

えっと、修行中ならまだ魔法球とやらに入ってるおるんじやろうから手紙を送った座標でいいかのう。

『おい！最高神の爺さあー！！！！！たまに覗いてたりするんだらう？聴こえてたら返事してくれないかー！！』

「失礼じゃのお主。今まで覗いたことなんかいいわい！今回は気になったから様子を見ておこうと思ったのじゃよ」

『そーなのか。てつきり能力くれた美人さんとかとちよくちよく覗いてるもんだと思ってたよ』

「それで、なんかあったのか？些事なら解決してやれるが？」

『いやなに、今回は爺さんとの連絡手段を作ろうと思ってな。毎回こうやって叫ぶのは流石に恥ずかしいわけだし。それに一から作るのが大変なんで爺さんの私物で同じのが何個かあるのを送ってもらおうと思ってたんだ』

「ふむ、天界の物質で出来たわしの私物を使うことによつて電波的なのをスムーズに送るためと言ったところかのう？」

『そんな感じだ。で、使えそうな物はあつたりするの？』

「少し待っておれ、探してみるから」

んー同じのもで複数あるやつか・・・。

同じ形、同じ形・・・。

そういえばあれがあつたかのう。

「丁度良さそうなのがあつたぞ」

『どんな物だ?』

「杯じゃな」

『なるほど。それは結構使いやすそうだ。それじゃ2つこつちに送つてもらつていいかね?』

「うむ、今そつちに送るぞ」

送つたがどんな風にするのか楽しみじやのう。

Side・end

Side・other

「うむ、今そつちに送るぞ」

最高神が言い終わった時には既に紫稀の目の前に2つの杯が送られていた。

「(あまり鑑定眼はないが、流石に天界の物質で作られてるだけあつて中々に上質なようだな)。

さて、それじゃ術式を刻むとしますかね」

そう言つと紫稀はどこからか儀式用短剣を取り出しつつ、1つの杯に術式を刻んでいく。

するともう片方の杯も同じ術式が刻まれていく。

術式は仮契約カードバクティオーの念話機能テレバティアの応用版。

触れてない杯に術式を刻んでいる方法は、めだか箱エンカウンターの不慮の事故を改造し、自分以外マイナスのダメージも押し付けられるが押し付けられるのは半分だけという新しい過負荷マイナスである。傷み分けイブンといったところだろうか。

そんな能力の無駄遣いをする事十数分。

「よし、完成つと。」

爺さん出来たから片方回収してくれ。回収したら使い方説明するから」

『もう出来たのか？じゃ回収するぞ』

その言葉通り2つあった杯は1つになっていた。

紫稀はそれを確認してから説明を開始する。

「素材が杯つてことで連絡方法には水を使う。

この杯に水を注ぐともう片方の杯にも水が注がれるようになってる。

それである一定量まで注ぐと水面に相手の顔が映るようになる。

この場合私のほうには爺さんの顔が、爺さんの方には私の顔がって感じだな」

『ほー中々器用じゃの』

「まあー試してみた方が早いな。水を注ぐぞ」

『ふむ、こっちの方も自動で注がれておるよ』

紫稀が杯に水を注いでいると最高神のほうの杯にも同じように水が注がれている。

「どうやら成功のようだな。あともう一つ機能があって水面に向かって物を入れればもう片方の杯の方に転送されるようになっていいる。手紙の時、私の座標を特定して転送したんだろ？これなら座標の特定は必要ないから手軽に送れる。何かあったら紙に用件書いて送ってくればすぐに連絡が取れるから」

『お主のほうも何かあったら連絡するとよいぞ』

「そうさせてもらうさ。それじゃあ」

『うむ、またのう』

こうして、無事、最高神との連絡手段を作創った紫稀であった。

S i d e . e n d

第2話（後書き）

さて主人公の名前は決定したのですが、
仮契約のアーティファクトが作れません。

万能すぎる主人公にアーティファクトって邪魔ですよね・・・。

第3話（前書き）

4 投目。

それでは第3話でしつぞ。

第3話

Side・other

神儀 紫稀が修行を開始してから魔法球内時間で約1200年、
現実世界時間で約100年。

本来なら現実世界時間であと100年分修行するつもりだった。

だが紫稀がいるのは魔法球の外、つまり現実世界（旧世界）である。

魔法球内で約2000年掛けて体術から剣術、暗器術、魔法（ネギま！世界）、魔法（リリなの世界）、魔術（型月世界）、超能力・魔術（禁書世界）といった超常現象系を極め、帝王学などと言った学問をも究めるつもりでいた。

それが何故半分ほどの1200年程で魔法球の外に出ているかというと簡単である。

「まさか1200年で本家本元で習いたかった神鳴流や例外的なもの以外の全てを習得してしまうとはな。・・・予想外にも程がある。武器や防具、宝具も大抵のものを創ってしまったしな・・・」

そう、現実世界時間約100年で例外以外を全て極め、究めてしまったのだ。

となると、魔法球内時間で1200年も反復するのはつまらなすぎる。

習得自体は1000年で完了していたので、残り200年は只管に技を錆付かせないように反復し、創造の精密製を高めていただけだった。

そのお陰か武器や防具と言ったものは普通の剣や刀でも業物と呼ばれる物と同等とはいかなくも通常のものよりは圧倒的に良質になった。

因みに武器の類は王の財宝に、ゲイト・オブ・バビロン 日常雑貨などと言われる類の物は魔法球の仕組みを応用し自身の影を倉庫にして収納していた。

「さて原作開始までまだ2900年程あるわけだが・・・」

問題はそこなのだ。

数百年間修行（今ここ）

大戦開始前に造物主ライフメーカーに接触

西暦380年前後の封印される前の両面宿儺リョウメンスクナに接触

百年戦争時期に真祖にされる数年前のエヴァンジェリンに接触、10歳になる前に一旦別離

エヴァンジェリンが真祖にされてから数十年くらいのとくに再度接触、鍛える

エヴァンジェリンを連れながら旧世界・魔法世界を放浪、この時京都で神鳴流を習得

大戦に紅い翼アラルプラとして参加

オステイアの崩落を神通力を使い防ぐ

アリカ姫の処刑日にMM・帝国問わず老外の除去、アリカ姫の名誉回復

原作開始までぶらり旅、追ってくる可能性のあるエヴァンジェリン

はナギに登校地獄の呪いを掛けさせ麻帆良へ行かせる

木乃香・刹那・真名に接触、可能なら裏に引き込み鍛える

イギリスでネギに一般常識といったものを教育、英雄の息子としてではなく戦友の息子として扱う

木乃香たちが中学に上がるころに麻帆良へ

エヴァンジェリンの呪いを解呪し、さよに肉体を与え、千雨に仄めかし可能なら裏に引き込む

ネギの麻帆良入りまでに2・Aの一部を魔改造

原作開始

紫稀が考えていた流れとしては大体こんな感じなのだ。
基本的に予定とはその通りになるわけではないので流れに任せるつもりだった。

だが、初っ端から予定外となったしまったのだ。
造物主に接触にするにしても最低でも300年、長くても600年掛ける。

その間、どうやって過ごすか悩んでいるわけである。

「そつだ、魔法球の逆倍速使おう」

魔法球の逆倍速。

つまりは竜宮城である。

中の1時間が外の1日。これならすぐに500年程度潰すことが出来る。

「んーと中の1年が外の100年でいいか。5年間反復してればすぐだな。」

そういえば今の時代に魔法は存在しているのかねー？」

紫稀の悩みはもう1つある。

それが先ほどの口から漏れた魔法の存在である。

実を言うと既に造物主によって火星に魔法世界が出来ていて、魔法が存在している。

アカシックレコードにアクセスすればすぐに分かることなのに紫稀はそれをしていない。

何故かと聞かれればアクセス許可の存在を忘れているからである。そしてそれを思い出すのは魔法球時間で5年過ごして現実世界に戻ってきた時であることを、紫稀はまだ知らない。

S i d e . e n d

第3話（後書き）

次回、魔法球と言う名のキンクリ後のお話。

魔法球の設定倍速っていじれるって話なので通常の竜宮城も可能じゃね？って思ってたやってみました。

始動キー次回出します。

第4話（前書き）

竜宮城という名のキンクリ。

今回初めての戦闘描写です！！

第4話

Side・紫稀

「なんかだいぶ景色がかわってるなー」

魔法球に入ったときは更地っぽかったんだがなー。草原になってるよ。

体感的には5年ぶりだけど現実時間では何百年だしなー、しょうがないか。

ところで今何年だ？計算どおりなら紀元前400年ってところだろ？

えーと、こつゆう時に使う能力って何かあったかな？

んー。。。

「そうだ、アカシックレコードあったじゃないか！さて、早速アクセスっと。

紀元前340年ってところか？魔法球の時間設定少し間違ったかな？」

あつ。。。これアクセスしていたら前回魔法球に入る前に魔法の存在確認できたじゃないか。。。orz

閑話休題

「さて時期的にはちょうどいいかな。造物主ライフメーカーに会いに行くか。」

でも、流石にこの格好はいただけないか。まだ原型の外見を見せ

るわけにはいかないし。

名前も今は偽名使うとするか。誰にしようかなー。そつだ残虐的なやつにするか。

「完全変化、モード白純 里緒」

鏡鏡つと。おー、完全に外見変わってるな。

口調はどんな感じだったかね。いや、あいつの特徴は殺戮で狂気か。

んー魔法世界に行くにはゲート使うんだよなー。

でもめんどいな、あれを使うか。

「スキマ、スキマつと。やっぱりいつ見てもたくさん目の目に慣れないな。でも移動には便利だよな『境界を操る程度の能力』は」

つと感慨に耽ってないで目的地どうしようかなー？
適当につないで見るか。

Side・end

Side・???

なつ、なんだこの強大な気配は！！まるでいきなり現れたような感じだ。

それに私よりも圧倒的に大きいだつ！！これ程の気配と力は今まで感じたことがないぞ！！

だが、このまま放置するわけにもいくまい。私の敵となるか確かめねば。

Side・end

Side・other

「ついたかな？ん？何か近づいてきたな。魔法世界で一番気配が大きいってことは造物主か？」

スキマから出てきた紫稀は向かってくる気配があるにも構わず暢気に空に浮いていた。

すると悠然と佇んでいた（？）紫稀に魔法が飛んできた。

それを紫稀は左手を魔法に向かって伸ばした。ただそれだけ。

その魔法は紫稀を多い飲み込む。・・・はずだった。

「貴様つ、何者だ！今何をした！！」

「いきなりご挨拶だな。何をしたかって？ただ左手を翳しただけだが？それに、名前を聞くときは自分から名乗るものだぞ、なあ造物主さん？」

造物主の質問も当たり前ではある。自分の魔法が予兆もなく霧散したのだ。魔法無効化という能力もあるが、それとは何かが違うていた。

それに対して紫稀は飄々と答えていく。

その言葉を聞いて造物主は驚愕する。表情なんて隠れてて見えな
いけど。

「何故私の名を知っている！！それに翳しただけだと！！それだけで私の魔法が破れるわけがないっ！！」

造物主は再び質問をする。が紫稀はまともに答えようとはしなかった。

「聞きたいなら自分の力で聞き出して見せるよ。そっちから攻撃してきたんだ問題は、ねえーよな！？」

それどころか喧嘩を売り始めた。というよりは造物主が先に攻撃をしたわけだから買ったと言うべきか。

その言葉を言い終わった時には紫稀の姿は唐突に消えていた。

(ヤツはどこだ！)

紫稀が消えた。それだけならば問題はなかった。しかし、その消えた速度が異常だった。

(私ですら認識出来ないような速度だと！！)

その事実により再び驚愕し、焦り始めた。

造物主は消えた紫稀の気配を探ろうとしていた。その時だった。

「どこを見ているんだ？」

紫稀の声が背後から聞こえたと思ったなら、既に地面に向かって蹴り飛ばされていた。あり得ないほどの威力と速度で。

「がはっ！！！」

瞬間、造物主は地面に衝突した、凄まじい轟音と共に。

「なんだ。造物主、この程度だったのか。今のはまだ全力の3割も出してないんだぞ？失望させてくれるな」

「なん・・・だと！？（今ので3割以下だと！あり得ない。本当に何者だ、あの男）」

紫稀の言葉に造物主の怒りは増していく。それに比例して絶望感までもが増していく。

自分を嘗めている紫稀に対する怒り。
紫稀との圧倒的なまでの実力差による絶望感。

(これほどまで自分の無力さを思い知ったのは初めてだ)

造物主が己の無力さを嘆いていた時、紫稀が口を開く。

「反撃してこないのか？まあいい。使う気はなかったが1つだけ手札を見せてやろう」

ゲート・オブ・バビロン
そうとうと紫稀は王の財宝から一本の日本刀を取り出し呪文を詠唱し始めた。

「この刀自体に力はないんだがな裏技があるんだ。

アギター・エネブラエ・アヒュシイ
ファル・ラス・セ・ラウス・セツト・リリス 来れ深淵の闇
エフシス・インケンデンス エト・インケンデカワキニス・ウンプラエイニエト 来テ邪王イオー 来テケンダント・エト・メー・エト・
燃え盛る大剣 闇と影と憎悪と破壊 復讐の大焔 我を焼け彼を焼
エラム シント・ソールム・インケンデンス インケンティウム・ゲヘナエスタグネット
け 其はただ焼き尽くす者 奈落の業火 術式固定 術式付与・対
象【無銘】 術式兵装『贄殿遮那』
プロ・アルマティオーネエトノシヤナ

贄殿遮那。本来はあらゆる力の干渉を受け付けられない炎髪灼眼の討ち手が持つ大太刀型の宝具。

炎の力はフレイムヘイズの固有能力。それを紫稀は【無銘】に闇^{マキ}の魔法^{ア・エレベア}を応用して奈落の業火を付与することで再現した。

（あの刀は先刻まで何の力も感じなかったはずだ！それなのに今は理解しがたいが何か刀の中に在る。ヤツは一体何をしたんだ！？）

紫稀の創造能力によって作られた日本刀【無銘】。名のとおり銘がない刀。

武器に闇の魔法で術式兵装を施すためだけに作られ、付与した術式によって名を変える刀。

「これを防ぐか耐え切れたのなら偽名だが名を教えようではないか、造物主」

そういうと紫稀は刀身に炎纏わせ造物主に向かって振り被り一閃。その威力は取り込んだ奈落の業火の最大威力の2倍以上の破壊をもたらせるほどだった。

先ほどの攻撃で周辺一帯が土煙で見えなくなっていた。数十秒後、風が吹き土煙が晴れていく。

其処には悠然と立つ紫稀と辛うじて耐え切った（であろう）造物主の姿があった。

「耐え切ったか。なら先ほどの宣言どおり偽名だが名を教えよう。

俺の名は【破滅を齎す黒】ノワールとでも名乗っておこう。

リベンジしたくなったらいつでもかかって来い。俺は不老不死だ。いつでも待とうではないか。

じゃあな、縁があつたらまた合おう」

こうして紫稀ノワールの初戦闘は勝利で幕を閉じたのだった。

「そういえば、造物主の魔法を破った力、最後まで見破られなかったな」

飛びながら口に出す。

そう、造物主と対面していたとき紫稀は左手を翳しただけと
言っていた。

だが、実際はスキマを開いて別の場所の出口を繋げてやり過
しただけなのである。

「さて暫くは白純と荒耶の外見で正反対のことでもして遊ぶかな」
そうしてあつという間に飛び去っていくのだった。

S i d e · e n d

第4話（後書き）

主人公無敵になってしまった・・・。

あれです、大戦期の造物主の実力にするための強化フラグってことで。

それにしても戦闘描写難しいですね。
誰か文才ください。

第5話（前書き）

さて造物主戦、どうしてああなった・・・。

作者ですら予定外。

あそこまで無双するつもりなかったはずなんだが・・・？

なおぼん様、感想感謝です。

第5話

Side・other

「造物主ライフメーカーとの喧嘩で俺TUEEEEEEEし過ぎた……。どうしてこうなった……。？」

造物主の方もなんか原作のイメージよりも弱かった気がするな……。そうかまだ原作の強さほどではないってことか。ん？てことはもしかして喧嘩の件で原作よりも若干強化される可能性が出てきたぞ？ナギたち危くないか？もう一度言っておこう。どうしてこうなった……。？」

大事なことなので2回言いました。

因みに原因は作者が阿呆でそのせいだっけです。

「作者も予想以上のバグだと気付いたわけか。……。能力何個か封印させるか？」

おい、紫稀。メタ発言するな！それは作者の仕事だ！！

「何か空耳が聴こえた気がするが無視だな、無視。さてこれから偽善で自己満足な行動を取ろう」

現実逃避から復活し、紫稀は荒耶の外見に変化する。服装は本来の荒耶とは正反対でシャツからズボン、コートまで何から何まで白である。唯一違つのは右胸の部分にある黒の片翼をあしらったマークだけである。

そうして【無銘ムスミ】を片手に持って目の前で燃えている集落の中へ進んでいく。

因みに造物主戦から約500年ほどキンクリしたが、現在紀元約160年、未だに弥生時代である。

Side・end

Side・集落の少年

気付いたら集落が全体が燃えていた。
きっかけは分かっている。

僕や他の子供が松明を持って遊んでいたからだ。

友達の1人が転んでしまった。

それだけなら何も問題なかった。

けれど転んだ友達が持っていた松明が近くにあった倉庫の柱の真横に飛んでいってしまった。

暫くすると柱に火が燃え移っていた。

僕らも何とか火を消そうと頑張った。けれども数十秒後、瞬く間に火は炎になっていた。

それから倉庫が燃え落ちるのにさほど時間は掛からなかった。
拳句には回りにあった建物に火が燃え移って最後には集落を囲っていた塀も燃えていた。

その時だった。

「これは予想以上に大変だな」

そんな言葉が聞こえてからすぐ意識を手放した。

Side・end

Side・other

「これは予想以上に大変だな。まずは出入り口のところから火を消ししていくか」

紫稀はそう言うと呪文を詠唱し始めた。

「ファル・ラス・セ・ラウス・セット・リリース ウエニアスベリトウスエグスアールレス 来れ氷精 大気
ダントウル・アーエーサウンドラム・エト グラキエームノルキヤス・アルバエクリユスタリザテイオー・テルストリス
に満ちよ 白夜の国の 凍土と氷河を 『こおる大地』」

出入り口周辺に何本か氷柱が生え周りの炎により段々と溶けていく。
紫稀はそれを確認し、次の行動に移る。

「時雨蒼燕流守式 七の型 『しづくれそつえんりゆう 繁吹き雨』」

先ほどの氷柱が溶けて出来た大量の水を刀で巻き上げ、周囲の炎を消していく。

「ファル・ラス・セ・ラウス・セット・リリース 『ウエンテ 風よ』」

『こおる大地』と『繁吹き雨』のセットを十数回繰り返し、水が使えない場面では『風よ』を使って消化する。

そうして無事、集落の火事を収めることが出来たのだった。

「さて、消火作業も終わったし怪我人の回復にでも回りますかね」

そういつと紫稀は集落内を走り回りながら魔法を行使していく。

瞬動や縮地では方向転換や距離の調整が出来ないため、文字通り走りながらである。

それでも並みの使い手の瞬動よりは速いわけだが。

「『^{クイラ}治療』」

かすり傷や多少の火傷などは無詠唱で。

「^{トウイ・ゲラーティアーヨウイ}ファル・ラス・セ・ラウス・セット・リリース 汝が為に ユピ
^{ス・グラーティア}テル王の ^{シット}恩寵あれ 『^{クイラ}治療』」

死に至らなくも軽傷より酷いものはフル詠唱で、治療していく。

それから十数分後、集落の人間全ての治療は終わった。

Side・end

Side・紫稀

治療も終わつたし、そろそろお暇させてもらおうかなつと。

「そのこの御仁、今回のご助力この集落の長として感謝します」

ちっ、声掛けられちまつたよ。これじゃ少し話さないとダメか。

「気にするな。今回のこれはただの偽善であり自己満足だ。感謝されることではないさ。それじゃあな」

「お待ちください！そうは仰いますがお礼の一つでもせねばこちらの気がすみませぬ！！」

こんな流れになると思ったから声掛けられる前に逃げたかったんだがなあ。

「いらんよ。先ほと言ったとおり自分のための行動だ」

「それならせめて名前だけでもお教えください」

名前、ね……。荒耶の格好だから本名や裏の名前言うわけにはいかんし偽名でいいか。

でもノワールはフランス語で黒って意味だから今回は白の意味のでもいいか。

「それくらいならいいだろう。私の名はブラン。【白き救済者】ブランとでも覚えておきたまえ。まあー忘れても構わないがな。今度こそじゃあな」

名前は教えてやったんだから逃げようつと。後ろから「ブラン殿ですね。この集落で貴方のことは伝えていきます」とかなんとか聞

こえたが、気のせいだと思いたい。

リョウメンスクナ
両面宿儺との接触まで後200年ほどか・・・。
どうやって過ごそう・・・。

S i d e · e n d

第5話（後書き）

大戦期のための伏線的な。

いつになったらエヴァ様ときゃっきゃうふふ出来るんでしょうか・
・？

個人的には真祖になる前のエヴァ様との絡みが早く書きたいわけ
すが。

とりあえず次回冒頭でキンクリします、スクナのところまで。

第6話（前書き）

『総PV』20000、『総ユニーク』30000突破！
約4日でこれって一体？

ネギま！効果ですかね？

それでは6話です、どうぞ。

第6話

S i d e . 紫稀

白純の外見でノワールと名乗り、人体実験を行っていた魔法使いの秘密結社的なのを潰したり、よく知らん国の貴族とかの民を使つた残虐な遊びのことを指摘したらそれに逆ギレされて表と裏の^{一般}魔法使いの世界両方で賞金首にされた。表的にはせいぜい50万ドル、裏的には向かつてきた愚か者達を圧倒的な力で殲滅しすぎて危険だと判断されたのが既に600万ドルとされた。既に私の知る『ネギま!』世界のエヴァと同額である。どうしたものか？

逆に、荒耶の外見でブランと名乗り、以前の集落の救済と同じように、困窮していた集落や村などに立ち寄つた時のみ限りとして、1年ほどは余裕で生活できるのである。量の当時の食料を保存食的に加工したものを渡したり病人や怪我人を治療していたらなんだか知らんが伝承や御伽噺の題材にされていた。まあもつとも、その御伽噺が普及するのが少なくとも500年後なのだから、今の私にはその事実を知る由はない。

とりあえず若干メタ発言しつつ2000年が経過した。

現在、ユーラシア大陸で正義の魔法使い（笑）の前身と思われる集団に追われているわけなのだが、どうしたものか？

さつさか撒いて日本 対外的には4世紀だから倭国が ^{リョウメンスケナ}に渡つて両面宿儺に会わねばならんと言つのに。急がないと私自らの手で封印出来ないではないか!!

だーしつこすぎる。こうなったらあいつらにわざと攻撃させて無詠唱で改造版の『燃える天空』ウーラニア・フロゴシス（範囲を狭めるかわりに火力が通常より数倍。術式が若干違うだけなので使用時の思考次第で通常版も勿論使用可）を正当防衛という名の過剰防衛でぶちかまそうか・・・。

S i d e . e n d

S i d e . 追っ手の魔法使い

今、俺たちは悪名高き【破滅を齎す黒】を追っている。

俺たち自身は別に最初から【破滅を齎す黒】を探していたわけではない。

だが、寄った村であいつを見かけた時仲間の一人が賞金額に目が眩んで追いかけ始めた。

それに同調したのか他の仲間達も次々と追っていく。

仲間達に気付いたのか【破滅を齎す黒】は一目散で走り出した。

それを弱腰と取ったのか仲間達は追いかけていく。

俺も置いてかれないように急いで追いかけた。幸い、俺は風系の魔法が得意だったためすぐに追いつけた。

離ギガされるのを嫌ったのか仲間の数人が各々得意な属性の魔法サキタ・マの射手を放っていた。

仲間は直撃したと思ったのか喜んでた。魔法の射手は威力が弱い魔法だが数が数だった。300矢。流石にかわせないしアレだけの数なら死んでいると思っても仕方がないことだった。だけど土煙が晴れたとき私は恐怖した。

「よしっ！攻撃したな？つまりは攻撃される覚悟があるってことだな？オーケー。ここに正当防衛は成り立った。てことで此処からは俺のターンだ！灰になれ！『燃える天空（改）』！！」

そんな、悪魔のような言葉が聞こえたから。

Side・end

Side・紫稀

基本、私からは攻撃しないから向こうに攻撃させてからでないとして反撃出来ないんだよな。

とか、考えていたら魔法の射手が飛んできた、属性バラバラで300矢ほど。それを全てかわして土煙が晴れると同時に宣言する。

「よしっ！攻撃したな？つまりは攻撃される覚悟があるってことだな？オーケー。ここに正当防衛は成り立った。てことで此処からは俺のターンだ！灰になれ！『燃える天空（改）』！！」

さて、これで日本に渡る頃くらいまでは追っ手はないだろう。

ついでにこういったことは後々役に立つのが分かっているので、

魔法球内で修行していた時に使っておいたビデオカメラで録画なり。

これを原作開始時の魔法先生・生徒（特に正義を盲信してるガン
グロ辺り）に見せたりしたらどうなるか楽しみだな。

それでは日本に向かいますかね。

あー縮地も面倒だ。すぐに移動できるように世界各地に私専用の
転移魔法陣でも作っておくか。

S i d e . e n d

S i d e . o t h e r

飛騨の大鬼神、両面宿儺。

『日本書紀』の文面では、朝廷に背き民衆を苦しめていたとされ
たけふるくまのみこと
武振熊命によって退治されたとある。

一方で当地の飛騨国や美濃国では文化英雄として信仰の対象とな
っている。

一体どちらが真実でどちらが偽りであるかは現代で知る者はいな
い。

これは未来の話であり、今の時代には必要のない話である。

そう、不老不死の紫稀にとってもその他の誰にとっても。

「よーお前さんが両面宿儺か？」

紫稀は空に浮きながら軽い調子で目の前の者に声をかける。
因みに紫稀の外見は本来の姿である。

「貴様は何者だ？」

それに答えるは、五丈（一丈三メートル。15メートル）はある
うかと言つ程の体躯の者である。

「名乗るほどの者じゃねーけど聞かれたなら答えよう。

神儀紫稀。仕事名は零崎蒼識だ」

「それで、神儀とやら。貴様は何しに此処へ来た？」

変わらず軽い調子で喋る紫稀に新たな質問をするスクナ。

「なに、用事と言つものでもないんだがな？朝廷がお前さんを退治
しようと討伐隊を送って来るってだけだ」

「それを教えるためだけに貴様は此処へ来たのか？」

スクナは、朝廷からの討伐隊の情報を教える紫稀の意図が分から
ず聞きかえす。

それに対して紫稀はあっさりと考えを口にする。

「それだけと言われればそれだけなんだが、個人的にはあんたが退治されるのは納得出来ないものがあってな。それならお前さんの霊格をあげて私の力で封印するだけにしようかなって思ってたりするんだがな。まあーその場合、お前さんは封印を解いた術者の力量によつては命令に従わなきゃならなくなるか暴走するか二択になるわけだがな。で、お前さんはどうしたいよ？」

「いきなり問いかけられても答えられないんだが・・・」

紫稀の考えと問いかけに対してスクナは困惑する。が、紫稀は笑いながらそれを無視する。

「と言いつつもお前さんの意見なんて聞く気ないけどな。今の時代、お前さんは生きづらい。いつになるかわからんが、私とお前さんは必ず再び出会う。その時にお前さんを解放してやるさ。だから暫く眠っている」

喋りながら紫稀は神通力を使いスクナの霊格を無理やり上げる。

「なっ、貴様っ！やめんか！！」

「やめろと言われてやめるわけないし。既に霊格はあげ終わったし、すぐに封印の方も完了するしな。討伐隊と飛騨国は私が何とかしてやるよ。てことでじゃあねー」

「貴様っ！この所業忘れんぞー！！いつか殴り飛ばし・・・」

色々問題はあるものの紫稀はスクナを封印することに成功した。

スクナの最後の言葉に若干の冷や汗を流しながらも。

「さて、そろそろ討伐隊が来るか。やつらには幻でスクナを見せて倒させて封印したようにするか」

そう言いながら幻を見せる特殊な結界を周辺に張り始める。範囲は半径5キロ。

紫稀が結界の調子を確認し終えた丁度に武振熊命を中心とした討伐隊が到着し次々と結界に入っていく。

それから約2時間後、幻相手に戦い終えた討伐隊の面々は次々と結界から出て行く。

紫稀は動ける者たちが結界から出るのを全て確認後、仮死状態の者たちを「燃える天空（改）」で処理していく。

そして、処理が終わって結界を消して紫稀はその場から立ち去ったのだった。

紫稀と両面宿儺が再び見えるのはまだまだ先のことである。

S i d e . e n d

第6話（後書き）

今回はまともな戦闘なし。

スクナを封印するのがオリ主って……。

なんかどこかの二次創作にもあった気がします。

スクナはたびたび封印を解かれますが、毎回暴走オチ。

唯一制御されるのが修学旅行編の時。

千草はそれなりの術者であり、媒体として木乃香の魔力を使っているので当然と言えば当然なんですがね。

本契約・仮契約ですが主人公は主にはなれても従者にはなれないって設定にしたいと思います。
流石に主人公にアーティファクト持たせたら無双しか出来なくなるので……。

本契約・仮契約鉄板メンバーは以下。

本契約

エヴァ アリカ

片方だけ本契約でもう片方は仮契約になるかも。

仮契約

木乃香 せつちゃん アキラ ちうたん

木乃香とせつちゃんをハーレムメンバー（好意でなく一夫多妻のほうで）に加えるかが謎。

ほら木乃香は詠春の娘だしね・・・？

木乃香次第でせつちゃんnがどうなるか決まりますから。

このせつはセットでないという意味がないって感じなので。

まあーその辺は流れに任せますか。

以下契約候補メンバー。

茶々丸 桜子 明日菜 真名

茶々丸と明日菜を契約させるかが微妙・・・。

茶々丸には早期から自我を成長させるつもりなのでどうなるか微妙。するなら本契約なり。でも契約方法がR18みたいな話があるから本契約まではいけないのか、ボデイ的に？
てか実際本契約方法って何なんだろう？

明日菜はネギと仮契約させるか紫稀とさせるかで悩みどころ。
アーティファクト自体はハマノツルギ固定で原作開始時には記憶封印はされてなく、それなりに強化予定なので。

つと本契約・仮契約メンバーのアーティファクトのアイデアを募集です。

それぞれの徳性や方位なども指定してもらえれば万々歳です。

このせつは場合によってはネギともさせるので原作とは違う案がほ

しいのです。

このせつ間ならせつちゃんに建御雷ですしね。

そろそろ感想待ってます。って書いた方がいいんでしょうか？

第7話（前書き）

今回かなりの年数をキンクリ。

だって書くことがあまりないですし・・・。

文才無いので描写が難しい・・・。

今回やっとエヴァ様の影が!!

ナラシン八様、感想感謝です。

第7話どうぞ。

第7話

Side・紫稀

リョウメンスクナ
両面宿儺を封印してからは再び世界放浪を続けた。新旧世界問わずに。

結局、本来の姿である式の外見でいることは殆どなかった。着流しの上に革ジャン羽織るのって結構好きなんだけどなー。機会がなくて残念すぎる。

本来の姿でいられないから基本ノワールかブランとして行動していた。

ノワールとして行動していると、必ずと言っていいほど正義の魔法使い（笑）が見かけるたびに追いかけてきた。本当しつこい。平穩に暮らしてる人達には一切手を出していないのに、何故追いかけてくるのか謎過ぎる。

その対策としてブランとして行動しても、物乞いらしき連中が集ってきた。

私の『力』は最高神？美人さん？から貰ったもので自分で習得したものでないことを理解していた。だから私はその『力』を十全に使いこなせるように修行してきた。そう努力はしてきたのだ。別に

誰かにその努力を認めてもらいたいわけではない。

だけれども、全く努力もせず人からお目溢しを貰おうとしている連中は煩わしかった。特にM M元老院の老害共が『立派な魔法使い』^{マキ}に勧誘してくるのが。

私にその称号を与えることによって自分達に政治的な利益を齎そうとしているのが目に見えて分かっていた。うっかり「元老院を抹殺してしまおう」と考えた私は、最高神の爺さんに誓って悪くないと思う、絶対。

だからその対策として本名と本来の姿、偽名時の姿以外に変化しようと考えた。

いい加減『空の境界』から選ぶのはやめておこつ。

そうだ『大嘘憑き』^{オルフィクシオン}の過負荷マイナスが使えるんだから球磨川の外見で生活してみようか……。いやだめだ。あれは会話が面倒だ。括弧つけるなんて疲れるだけだ。口調も面倒だし。

さてこれではスタート地点に戻っただけだ。そろそろ案を出さなければ……。

それなら女性化はどうだ？

「それだあー……！！はっ……／／／」

やばい、何か幻聴を聞いたと思ったたらうっかり声に出してしまっ
た。

恥ずかしい……。周りに人がいないし遮音や人払い・認識阻害の結果を張っておいてよかった……。これで人に見られてたら恥ずかしくて死んでしまう……。

よし、落ち着いた。

幻聴を聞いたときは若干精神的にやばくなったと思ったが、女性化というのはなかなか名案だな。

今までは男の姿でしかいなかったからばれる心配はいらないわけだし。

ふむ。だとすると誰に変化するか……。

レイジングハルネジングハートバキアセツオアズルディッシュ・アサキホルトクロイツ
RHとRHE、BDとBDA、インケンディウム・ゲヘナエ夜天の主の杖は作ってあるから3人娘にもなれる。

いや、それなら【無銘】に『奈落の業火』の術式を付与さえすれば擬似炎髪灼眼の討ち手を再現できるからそつちでいくか……。

「そつと決まればつと。完全変化、炎髪灼眼の討ち手シャナ肉体年齢15歳ver。」

ふむ、成功だな。原作読んででも思ったけど肉体年齢10歳で停止するのは勿体無かった。自分が変化してみても余計に思うぜ。特に胸とかな。まあー若干私の妄想も含まれてるから期待値よりは少しばかりサイズが違うかもしれんが」

変化は完成したから服装はどうするかな。んーオーバーチエアの最初に着ていた革のジャケットとズボンでいいか。後は創造の能力で【夜笠】を作るか。それなら適当にマント作ってそれに空間の術式仕込んで影の倉庫のようにするか。中には【無銘】と数本の剣と刀を入れておけばいいかな。魔法発動体として【アラストール】コキユース（人格は無し）を作っておけばいいか。

「これで一応完成かな？通常時は黒髪で戦闘で炎髪灼眼にするかは

その時に考えよう。それじゃ適当に竜種狩ったりしながら、新旧世界を回りますかねー」

ん？新旧世界のゲート関係はどうするんだって？そんなの今現在新旧世界問わずに私専用で使える扉ゲートを至る所に作ってるから問題ないさ！原作開始したら私と身内で使えるように設定はいじるがな！それに緊急手段としてスキマ移動があるから無問題モーマンタイ！！

てなわけで気ままな旅の始まりだー！！

そんなこんなで大体800年から900年。1000年は経ってないだろうといったところ。

その間何をしていたかって？まずは竜種狩りだね。

竜種の下級と中級辺りは術式兵装の『ニエトノノシヤナ贄殿遮那』だけで大抵は何とかなった。炎属性の耐性のないやつはだけど。

別に下級は問題ない。だけれども中級になると障壁も硬くなる上に耐性にたいしても上がってるんだもの……。思わず【直死の魔眼】を使ってしまったのは悪くないと思う。他の術式兵装をする暇もなかったし。

上級竜種に関しては流石に『贄殿遮那』だけでは厳しかったので『えいえんのひょうが』からの『こおるせかい』を術式兵装した『だいくれんひょうりんまる大紅蓮氷輪丸』(『えいえんのひょうが』で兵装すれば始解状態)と『雷の暴風』を術式兵装した『ヒライトウ飛雷刀』を駆使して狩った。傷自

体は無いに決まってる。造物主相手に無傷なのに竜種に傷を負わされるとか流石に駄目すぎるだろう。

とりあえずは上級竜種も狩れたので満足満足。

そういえば旅を開始して600年が経った頃にトレジャーハンターらしき人たちに会った。

別に財宝とかそうゆうのは創造の能力でどうとでもなるので興味は無かったが戦力として同行を求められた。勿論依頼としてだがな。まあーあまり取り立てるつもりはないから見つけた財宝の約1割程で受けたがな。

そんな感じに何箇所か遺跡を回ったりしていたな。

何時だったかは正確には覚えてないが3箇所目の遺跡探索が終わった時の休息時だったかに、かなり気分が悪くなることがあった。

メンバーの1人の男に襲われそうになりました。激しく拒否ったがな。自分で言うのもアレだが、シャナを成長させた姿をしていたのだから美少女であろうことは分かっている。

だ・け・れ・ど・も！私本来は男で精神的にも男のほうが割合を占めているわけで・・・。

まだ童貞なのに処女をすてるなんて流石に出来るはずがない！！

そんな思考になっていたため、襲ってきたメンバーにはOHA NA SHIしておいた、強烈なのを。

それを傍からから見ていた残りのメンバーは若干引いていたし、恐怖もしていたみたいだ。

でも、平時は心穏やかで戦闘時はメンバーに傷をつけないように気を配っていたのが幸いしたのか、すぐに元の雰囲気に戻れた。あれは良かった。

流石にいつまでも距離をとられていたら居た堪れない……。まあ、私を怒らせないように見たいな暗黙の了解が出来ていたようだが……。

閑話休題

さて、放浪し続けていたが目的の1つをどうするか考えてもいた。

そう、世界樹。霊地、麻帆良の土地権利書の確保。

これを確保していれば後々金銭的・政治的な利益がこちらに流れてくるのは想像に難くない。

だがしかし、これをしてしまえば原作キャラとの絡みがなくなってしまうんだよな……。

当初のプランでは大戦で英雄になりノワール時の賞金を取り消させることと、その後本来の肉体で麻帆良女子中のA組に転入するつもりだった。

麻帆良の土地権利を持つていれば転入とかは簡単に行えるだろうが、あまり現実的ではない。

そんな感じで世界樹に関してはノータッチで行こうと思った。が、やっぱりあいつらが交渉に来たときに大金を搾り取り世界樹から半径5キロの土地だけは持つておくことにした。あいつらに世界樹を利用させてやるわけにはいかないからな。

そうと決まれば善は急げと麻帆良までスキマで移動する。

てな感じでスキマ移動を駆使して世界樹前に。

えーと確か当時はまだ1200年頃、鎌倉時代だ。

幸いなことに金は腐っても腐り足りないくらいにある。それを使って朝廷に取り入り麻帆良の土地の権利を手に入れる。

元々住んでいた民には麻帆良全土の土地の所有権を認めてもらうだけでよかったです、今までどおり生活してもらってる。怠け者にならない程度に資金や資源も抑えて提供していたが、幸い印象は良好だった。

後は世界大戦とかで土地所有の権利が白紙にされないように気をつけるだけだな。

そういえば世界樹に関しては麻帆良全土に認識阻害の結界を張っておいた。

世界樹は長い年月を生きてきた立派な樹程度にしか認識出来ないようにしただけ。

麻帆良の全土にはい異常があつた場合のために数体の分身体を置いてある。スペック的には達人相当の実力を持っているが、これら維持するのに世界樹の魔力を雀の涙ほど借りているので本体にはなんら負担を与えないのだった。

ふむそろそろ本来の話に戻ろう。

世界樹の話は一体なんだったんだって？そんなの勿論私の回想に決まっている。

じゃあ話を戻すぞ？

現在は大体1300年の半ば頃で、いる場所はヨーロッパだ。

何故そこにいるかって？

そんなの、真祖にされる前のエヴァンジェリンとあって愛でるために決まっているじゃないか！！

理由が不純なのは百も承知の介。それでもあんな可愛い生き物を愛でないなんて男じゃない！！

そんなわけで私はエヴァンジェリンを探しているのだ。因みに格好は藍色の着流しに【夜笠】化したマントを羽織ってる。外見は本来の外見の年齢は12歳ぐらいにしている。

アカシックレコードにアクセスしてみてエヴァンジェリンに関することを調べたのだが、9歳としか出てこないのだ。これは最高神の爺さんが制限してるのかね？エヴァンジェリンには確実に会えるようにはしてくれてるんだろううけれども。

そんな感じにヨーロッパの大陸側は調べ終えたのでイギリスの方に来てみた。2、3日歩いていたら迷子になった。

というか地理に明るくないから最初から迷子状態なんだがな。

むっ。なんか山の方から嫌な感じがするな……。それなのに何故が行かなきゃいけない気がするのは何故だろう？
まっいいか。行ってみれば分かるだろうし。

それじゃー適当に瞬動でゴー！

S i d e . e n d

S i d e . o t h e r

「くっ！こんな時になぜ山賊が襲ってくる！！」

山の中。さほど舗装されていない道の上に彼はいた。

彼らは山の向こうに用事のために出掛けていた帰りだった。

周りには数台の馬車と馬車に乗っている者たち。

さらに馬車を囲むようにして近寄ってくる十数人の山賊たち。

生憎と従者達の中には戦闘が出来る人間が一人もいなかった。

そして彼は馬車を進ませようとした。だが、それは叶わなかった。馬車の進行を防ぐかのように立つ山賊たちのボスのような男がいたからだ。

別に轢いてしまっても構わないと思ったが、何故かその男には無意味に思えた。

その時だった。どこからか声が聴こえた。

「その馬車の持ち主の御仁。助けが必要かね？」

その言葉に彼は迷いなく答えた。

S i d e ・ e n d

S i d e ・ 紫 稀

「助けてもらえるなら是非もない。力を借りたい」

ふむ、誰とも知れない声の主に助けを求めるとは懐が広いと言っかなんというか。

まあいいか。助けを求められた。それだけあれば十分だ。

「ならば私の力を貸そう。なに、すぐ終わる。そこで待っていたまえ」

さあーこれで建前が出来た。山賊相手に手加減する必要もないか。

「山賊たちよ、武器を持って人を襲おうとした。ならば自分達が襲われる覚悟があるのだろうか？この者たちに目をつけたことを死んで後悔するがいい」

Side・end

Side・other

戦いと呼ばれるほど高尚ではなく、喧嘩と言うほど低度なものではない。

求められたことによる助力。

紫稀対山賊の戦いは一言で説明が出来た。

ワンサイドゲーム
一方的虐殺。

普通なら1対10人以上の戦いは戦いにすらならない。
数と言うのは脅威であり圧倒的だ。

だが1が紫稀ならば20人にも満たない人数では、無理だ。

山賊たちは紫稀の瞬動すら使っていない速度にすら反応できるものはおらず、

山賊たちは紫稀の斬りつける速度にも気付けない。

対して紫稀は、身体強化の類を一切使わずに通常の状態の本気の

1割も出さずに山賊たちを圧倒する。

その手には一尺程度の一振りのナイフが月光で煌き、その眼には【直死の魔眼】が輝いていた。

紫稀を数で圧倒するなら最低でも達人クラスを100人。一般人のスペックならば500人は必要になる。だがこれは身体強化の類と【直死の魔眼】だけを使った場合でだ。

魔法や超能力、はたまた他の武器（エモ）も使うならばその倍では足りない。最低でもあと100倍は準備すべきだろう。

それほどまでに圧倒的。

紫稀を現すのにこれ以上の言葉は早々無い。

そんな解説をしていたら既に十数人の山賊は『死の点』を突かれて全滅していた。残っているのはボス格の男だけ。

紫稀はその男に向かっていく。走り寄るでも飛び掛るでもなく、普通に歩いて向かっていく。

男はそんな紫稀に対して持っていた2メートルはあるかと言っほどの自身の武器である棍棒を振り下ろす。

それを紫稀はナイフで棍棒の『死の線』を断ち切る。

棍棒があっさり断ち切られたのを見た男は後ずさる。

紫稀は先ほど変わらず歩いて向かう。

男は恐怖に怯え、遂に背中を向けて逃げ出す。

だが、紫稀はそれを許さない。男が背中を向けた瞬間に、音を立
てずに忍び寄り『死の点』を突いて絶命させた。

そうした後、紫稀は山賊たちを一箇所に積み重ねて、無詠唱の『
ウラニア・フロゴシス
燃える天空（改）』で燃やし尽くした。

燃やし尽くしたのを確認してから紫稀はナイフを【夜笠】に仕舞
い、【直死の魔眼】をオフにして馬車の持ち主のところへ向かうの
だった。

Side・end

Side・紫稀

「御仁、山賊は始末した。安心してくれ」

んー何となく力を貸して助けたがいいが、今夜の宿どうするかな
あー。

「黒髪の少年、ありがとう。お礼をしたいのだが、これから用事は
あつたりするかね？」

暇つぶし的に助けただけだから感謝とかどうでもいいんだがねー。

「いや特にないが、別にお礼をしてほしくて助けたわけではない。
それに姿が見えない人間を信用した御仁の懐の広さが謎なのだがな

「？」

「あの時は死が目前に迫っていたから、藁にも縋りたい気持ちだったのだよ。だから本当に感謝している。これでまた妻や娘に会えるのだから」

結構な馬車持つてるからどこかの領主とかなのかね？

「それはよかった。女性の涙にはどうも弱くてね。それならこの馬車の荷物は奥方や娘さんへのプレゼントか何かかな？」

「まあーそんなところだよ。お礼の話がだいぶスルーされているが、どうしてもお礼がしたい。暫くの間私の館にこないかい？見るとこる旅人のようだし、2、3ヶ月くらい滞在していても構わんのだがね？」

滞在ねー。そろそろ疲れが溜まっていたしここらで落ち着いて休息するかなー。

「ふむ、あまり断るのは無礼にあたる。その申し出お受けしよう。ああ、そうだ。まだ名前を名乗っていないかったな。私の名前は神儀紫稀。こちらではシキ・カミギかな？シキと呼んでくれ。東方出身だ」

「ああ、確かに私も名乗っていなかったな。私の名前はアーネスト・マクダウエル。気軽に名前かネストと呼んでくれるとうれしい」

マクダウエルだと……。なんとという偶然。最高神の爺さん、まさかこれ狙ってやったんじゃない？

「暫くの間ネスト殿の館で世話になるとしよう。よろしく頼む」

「ああ、こちらからもよろしくだ、シキ。帰ったら妻達に紹介しなければな」

何だかんだでエヴァンジェリン見つけて安心したわー。滞在中はエヴァンジェリンの遊び相手になってればいいかな。10歳の誕生日まで後どのくらいあるか分からんしね。
暫くは退屈せずに見そうだな。

S i d e · e n d

第7話（後書き）

やっとエヴァ様を出せる・・・。

次回からエヴァ様分が補充されていきます

エヴァ様の名前を確認してみると英語なんですよね。

苗字のマクダウエルも勿論のこと英語。

なので両親の名前もEから始まる英語名にしました。

主人公一味メンバーのアーティファクトの案まだまだ募集中であります。

第8話（前書き）

エヴァ様出せるー！！

やっと原作キャラに絡めるぜ。

リョウタ様、感想感謝です。

それでは8話ぶっど。

第8話

Side・other

現在、紫稀は道中助けた馬車の持ち主、アーネスト・マクダウエルとその従者達と共にネストの館に向かっていた。

「そういえばネスト殿。奥方と娘さんがいると言っていたが、相談せずに私を滞在させてもいいのかい？」

「なに、それなら大丈夫。妻や娘は優しいからシキが私の危機を救ったと聞けば歓迎してくれるさ」

「そういうものなのかい？」

「そういうものだよ。さて見えてきたよ」

「そうか、あれがネスト殿のやか・・・た？」

言葉のキャッチボールをしていた時、ネストの館を見た紫稀は驚いた。それは仕方の無いことだが。

ネストは『館』と言っていた。だが、どう見ても『館』ではなくそれは『城』だった。

その事実には紫稀は驚きを隠し切れずに口を開いた。

「ネスト殿。あれは『館』ではないよ。間違いなく『城』だ・・・」

「『館』も『城』も大して変わらないと思うが？」

「いやいや、全く違うだろうに！『館』とはそれなりの権威があるものたちが住むもので、『城』とはそれらや土地を纏めるものが住まうものだろう！ということとはネスト殿の家系は代々領主か何かなのか？」

「そういえば教えてなかったか。シキの言つとおり私の家系は代々この辺りの土地の領主だよ。と言っても私はあまり権力で支配するというのが好きではないから気にしないでくれよ」

「分かった、もうその辺に関しては言わないことにしよう。言っても意味がなさそうだし」

「ははは、そういうことだ。さてついたから降りよう。妻達に紹介したい」

「了解したよ。あまり大げさに紹介してくれるなよ」

ネストとの会話に若干の疲れを感じつつ先に馬車を降りたネストに続いて降りる。

玄関へ向かうネストの後に続きつつ城を見る紫稀。

「（そういえば原作の麻帆良祭の時にどこかの城に預けられたとかって話があったが、私というイレギュラーの存在で元々の城にいるってことなのかね？）」

少々考えを小声で口に出しながらも歩いていた紫稀は先に進んでいるネストに追いついた。

ネストが開いた玄関の扉の向こうに待っていた景色は

「…………おかえりなさいませ、旦那様」…………

メイドさんの一団だった。

「今戻った。ヴィラとエヴァはどこだ？客人を紹介したいのだが」
いつものことなのか大して反応しないネスト。

「こちらですよ、あなた。おかえりなさい」

「お父様、おかえりなさい」

紫稀が声のした方を向いてみると、声を掛けて来たであろう女性と幼女？少女？の2人がいた。

「（ん？向こうにいるのが奥方か？で、その隣がエ…ヴァ。あれなんか原作より可愛くない？落ち着け私。こういうときはあの言葉だろう。Yes ロリータ！No タッチ！！よしっ、落ち着いてきた。」

原作で知っていた以上に可憐なエヴァを確認した紫稀は危ない人になりかけていた。

「ただいま、ヴィラ、エヴァ。シキ紹介しようこっち「妻のエルヴィラです。ヴィラと呼んでください」……でこっちが娘のエ「エ

ヴァンジェリンです」……。それで彼は私達が山賊に襲われそうになったときに助けてくれた「神儀紫稀、こちらではシキ・カミギですね。気軽にシキと呼んでください」……。ねえ、私泣いていいかな？」

いざ、3人を紹介しようとしていたネストは感じな部分を3人に奪われてかなり落ち込んでいた。

「（奥方のヴィラ殿と娘のエヴァンジェリンだけではなく、私にも台詞を取られたのがそんなに悲しいのか？やりすぎたかな？）」

ネストの落ち込みようを見て紫稀はそう小声で口に出していた。

「ネスト殿、男の涙なんて女性の涙を見たくないとは別の理由で見たくないからやめてくれ」

「そうですね、あなた。シキさんの前でみっともない姿を見せないでくださいね」

「お、お父様、落ち込まないで」

「エヴァ。お前だけだよ、私のことを心配してくれるのは……」

落ち込むネストに追い討ちをかける紫稀とヴィラ。若干困惑しながらもネストを励ますエヴァ、そのエヴァを見て微笑むネスト。その微笑を見て紫稀が思ったことは

（親馬鹿か？）
だった。

そんな状況を回復するように紫稀はエヴァに声を掛けた。

「エヴァンジェリン、子供とはいえ女性に聞くのは失礼だと思うがいくつになる？」

「9歳です。あと1ヶ月ほどで10歳になります」

エヴァはその質問に若干驚きヴィラの服の裾を掴みながら答える。そんなエヴァの行動を見た紫稀は今度は完全に暴走しだした。

「ネスト殿！あなたの娘さん可愛すぎだろ！？私あの子ならいつまでも愛していけると思うぞ！！つつか嫁にください！！マジで！？」

「なっ！いくらエヴァの可愛さを理解して、危機を救ってくれたシキでもそれはダメだ！エヴァは一生嫁に出す気はないし、婿を取らせるつもりもない！！」

「あ、あのっ・・・」

「いいじゃないか、私になら！彼女が嫌がることは絶対にしないから、嫁にくれよ！もしくは婿になってもいいから！！ネスト殿をお義父さんって呼んでもいいから！？」

「ダメだダメだダメだ！！誰がなんと言おうとエヴァは誰にも渡さん！！というかその呼ばれ方は気持ちが悪いからやめてくれ！？」

暴走した紫稀はネストにエヴァを嫁にくれと喚き、ネストはそれに若干の怒りを出しながら却下し、その2人の口論に困惑と動揺を隠せないエヴァ。

「いい加減にしないで、二人とも！エヴァや他のみんなが困っているではないですか！」

「ぐえっ！！」

ドガツという音と共に床に倒れる紫稀とネスト。その二人の近くに立っていたのはヴィラ。その両手には厚さ1センチほどの本があった。

「そこのあなた達、この二人を寝室と客間にそれぞれ運んでおいてネストの方には起きたら応接間に来るようにメモか何かをテーブルに置いて。シキさんのほうには起きるまで誰かそばに付いていて。起きたら応接間に案内して頂戴。私とエヴァは応接間にいつているからよろしくね」

「……分かりました、奥様」

近くにいた4人のメイドに指示を出してエヴァを連れてヴィラはその場を後にした。

時は少し進み、客間に運ばれた紫稀が目を覚めたのはあれから30分経ったころだった。

そして現在、メイドに案内されて応接間にいた。ネストも同じく

らいに起きたのか、紫稀が入って少ししたらやってきた。

応接間にいるのは五人。紫稀とマクダウエル家の三人と残りの一人はメイドだった。

「先ほどはお見苦しいところを見せて申し訳ない。エヴァンジェリンの行動を見ていたらついつい暴走してしまったようだ」

「いえいえ、気にしないでください。暴走したのは夫も同じですから」

「うっ……」

「えっと……」

「……」

先ほどの行動の謝罪から入る紫稀。それを受け取りもう一人を指摘するヴィラ。指摘されて唸るネスト。その状況下でオロオロとするエヴァ。全く反応しないメイド。

「それであなただ、シキさんを城に招待した経緯を話してもらいたいのだけれども」

「ああーそうだな。山向こうの街からの帰りに山賊に襲われそうになったのを助けてくれたのがシキだ。それでお礼として暫く滞在してもらったことになったんだ」

「そうだったんですか。シキさん、改めて夫と一緒にいた従者を救ってくれたことに感謝します。それとあまり盛大な御もてなしは出

来ませんが歓迎します」

「ネスト殿にも道中言ったが感謝されるために行動したわけでないから気にしないでください。あまり断るのも無礼だと思ったので滞在の件は受け入れました。最近はずっくりと腰を落ち着けることがなかったので此方としても感謝したいところでしたから」

紫稀がネスト達を助けたところから道中の話などをして、時間も時間なので食堂に移動する面々。

食事中にも旅の話聞いて興奮するマクダウエルの三人。それに苦笑しつつも話し続ける紫稀。

四人の宴会もどきは城の使用人を多く巻き込み夜遅くまで続いた。

途中からエヴァは紫稀に懐きはじめ、「エヴァって呼んで下さい」といった提案を受け入れた。エヴァがうとうととした時には紫稀の膝の上に座っていた。それを見ていたネストが親の敵を見るかのような目で紫稀を睨んでいたのは余談である。

Side・end

第8話（後書き）

あれ、おかしいな？エヴァ様の影薄くね？
もつと出る予定だったのに、威圧感がないエヴァ様だと影が薄くなる
と言っつのか！？

大丈夫だ。きつと次回には沢山出ると思うんだ。

本契約者・仮契約者のアーティファクトの案まだまだ募集中なり。

知っているアニメや漫画・ラノベは結構多いので、
案の中で私が知っている作品の武器なら、
このキャラに持たせてつても思案対象になります。

アーティファクト未定契約者鉄板メンバー

エヴァ様 アリカ姫 ちうたん アキラ

候補者メンバー

木乃香 せつちゃん 真名 茶々丸 桜子

以上9名分のアイディア募集です。

契約未定 アスナ（明日菜）は仮契約なりするなら既に紫稀と決めて、
アーティファクトは原作どおりハマノツルギになってます。

他にもサブヒロインに追加して欲しいキャラがいれば候補として募

集めます。

第9話（前書き）

これからやっとなエヴァ様の場面が!!

大戦期や学校編は大体頭の中に構想が出来ている。
早く書きたくてしょうがない・・・。

エヴァ様の修行にゼクト絡ませようかなー？

もす様、ご意見感謝です。

恐らく連投かな？それでは9話、どうぞ。

第9話

Side・エヴァ

昨日、お父様が帰ってきたときにお客様を連れてきていた。

名前はシキ・カミギでシキと呼んで欲しいと言っていた。

そういえば自己紹介のときにお父様が落ち込んでいたけれど一体どうしたんだろう？

シキさんに年齢を聞かれた。その時ちょっと驚き、お母様の服の裾を掴みながら答えたらお父様に向かって何か叫びだした。正直、ちよつと怖かった。

「可愛い」とか「愛していける」とか「嫁」って時々聞こえたのは気のせいだと思う。

お父様とシキさんの口論が激しくなってきたときにお母様が両手に本を持ってそれで二人の頭を叩いてた。お母様の後ろに角の生えた何かが見えた気がするけど、これも気のせいだと思う。

気絶した二人を運ぶようにメイド達に指示したお母様と一緒に応接間に向かった。

お母様と応接間でお話していたらシキさんがメイドの一人に案内されてやってきた。そのすぐにお父様もやってきた四人でお話した。

その時、お父様が街からの帰りに山賊に襲われそうになっていたところをシキさんに助けてもらったらしい。それを聞いたときシキ

さんが強くて優しい人なんだと私は思った。

だから食事中やその後の宴会もどきの時に旅のお話を聞いたり、
つつい「エヴァって呼んで下さい」ってお願いしたりもした。シ
キさんはそれに快く受けてくれて嬉しかった。

それとシキさんのお話が楽しくてうとうとするまでシキさんのお
膝の上で聞かせてもらった。その時お父様がシキさんを睨んでいた
ような気がしたけど、一体何だったんだろう？

今日も旅のお話を聞かせてもらおうと。

S i d e . e n d

S i d e . 紫 稀

ネスト殿の城に招待され宴会もどきの歓迎会を受けてから既に1
ヶ月が経っていた。今日はエヴァの誕生日の前日だ。

1ヶ月何をしていたかつて？

ただ飯食らいは流石にダメだと思って使用人の手伝いをしたり、
エヴァに旅の話の話を聞かせて欲しいと催促を受けて話したり。

特に2つ目のが大変だった。

初日のあの発言が不味かったんだろう。

エヴァと仲良くしているとそれを見ると必ずネスト殿が睨んでくる。

滞在してからの始めの2・3日の時にその視線を感じて危うくナイフを投擲しそうになった。その時のネスト殿の顔は引き攣っていた。どうやらナイフを投擲しそうになったのを見ていたようだ。それでも睨んでくるのをやめなかったのには呆れたが。

勿論エヴァにはナイフを投擲しそうになったのは気付かれていない。当然だ。怖がらせてどうするよ？

閑話休題。話が逸れた。

エヴァの10歳の誕生日の前日。

明日。そう、明日だ。

明日の朝、エヴァは起きたら吸血鬼の真祖にされている。

秘術を行使することと、その誰かはおおよその見当はつけてある。

そのことを私は知っている。だが、阻止するつもりはない。

元々エヴァを【闇の福音】ダーク・エヴァンジェルにするつもりだったからだ。

真祖になったときその事を私が知っていたと知れば恐らく軽蔑するのかな。

それでも私は阻止しない。

1ヶ月。そう1ヶ月だ。

原作を読んでいた時も好きだったとはいえ現物にあったとき、私は一目惚れをした。間違いなく。

1ヶ月の間一緒に過ごした日々はとても穏やかだった。今では初めて会った時よりも彼女を愛しく思っている。

だから同じ時を過ごしたいと思ってしまったのだろう。彼女の死に私は耐えれなくなってしまっから。

同じ時を過ごしたいのは最初から思っていたことだ。その思いが更に強まっただけだ。だからこそ女神に他者の外見を成長させる力を貰ったのだし。

明日。やっと私の人生は輝き出すのだと思う。エヴァンジェリンと言う少女の存在によって。

S i d e . e n d

S i d e . o t h e r

12月23日は終わり12月24日を迎えた。エヴァンジェリンの10歳の誕生日である12月24日。

一人の男がエヴァの寝室へと侵入していく。

そして人を吸血鬼の真祖にするための秘術を行使する。

その結果、エヴァは人間の少女から吸血鬼の真祖に成った。成り上がった。成り下がった。そのどちらでも在ってどちらでもない。

エヴァがその事実気付くのはもう少し後の話である。

そして男は秘術が成功したと喜び、エヴァの寝室を後にする。

部屋から出て、城から立ち去ろうと動き出した男が見たのは蒼く輝く一対の眼だった。

その後、その男を見たものは二人だけ。

一人は男を捕まえた彼。

もう一人は男に秘術を行使され人外にされた少女。

その二人だけであった。

S i d e . e n d

第9話（後書き）

キャラ紹介ページ作るべきか。

区切り区切りにその時の能力値とか更新すればいい感じ？

原作開始までにこのキャラに出番を！やここはこうしたら？みたい
なご意見お待ちしております。

それでは10話作ってきます。

第10話（前書き）

連投なり。

キャラの口調が安定しない・・・。
文才がないから仕方がない・・・。

黒部様、ご意見感謝です。

それでは10話、どうぞ。

第10話

Side・other

12月24日の朝。

ヨーロッパのある城に住む少女に不幸が襲った。

少女は自身の状態に違和感を感じつつもメイドに起こされた。

それが悲劇の始まりであるとは知らずに。

その日、世界からその少女はいなくなった。

Side・end

Side・エヴァ

今は私の十の誕生日の朝。

起きてみると体に違和感があった。なんだか自分の体でないかのような感じ。

少し軽く腕を振ってみた。腕を振った先にあったのは、私を起こしに来たメイドのお腹から下だけだった。

私は最初困惑した。

何故腕を軽く振っただけでメイドの体が吹き飛んでいるのか。

そして結論に行き着いた。

私は人間ではなくなつて、化物になつたのだと。

他にもいたメイドがさっきのを見て恐怖し悲鳴を上げた。

だがそのメイドも私が体を慣らすように腕を振つてたりしたら吹き飛んでいた。

二つのメイドだつた死体から血が流れる。

その匂いをかいでしまった私の喉はひどく渴いていた。

何故か分からないけれど気付いたら血を飲んでいて。

血を飲むとあれほど渴いていた喉が潤つていくのが分かつた。

「そうか、私は吸血鬼になつてしまつたんだ・・・」

先ほどの悲鳴が聞こえたのか城中からこの部屋に向かつてくる大勢の足音が聞こえた。

最初に部屋に来たのはお母様だつた。

「エヴァ！なにかあつたの!？」

部屋の惨状と私の姿を見て私に近づいてきた。

(ダメッ！お母様来てはダメー！！近づいたら殺してしまうっ!?)

そう思いながらも口からその言葉が出ることはなかった。

お母様の心臓があるあたりに私の腕が刺さっていた。そしてすぐに腕を引き抜く。

お母様はそのまま床に倒れてしまっ、苦しそくに顔を歪めながら。

その次はお父様がやってきた。

「エヴァ！大丈夫かっ！？」

お母様と同じように現状を確認して私に近づいてきた。

お母様の時のように「来ないでっ！！」と思いながらも口から言葉は出なかった。

そして今度はお父様の首を刎ねていた、手の爪で。

その後も次々と城の使用人たちがやってきた。

「だけど私はその全員を殺してしまった。

いくら殺したくないと思っいても体が勝手に動いてしまった。

私の頭には一つだけ。

「誰か、私を止めてください……」

それだけだった。

S i d e ・ e n d

S i d e ・ o t h e r

エヴァが真祖化したことに気付き暴走している頃、紫稀はエヴァを真祖にした男を捕らえていた。

他の面々より遅れて悲鳴のあつたエヴァの部屋へ向かっていた。

そして部屋に着いた紫稀が見た惨状は

紫稀とエヴァを除いた城の住人全ての死体だった。

ネストやヴィラと言ったエヴァの両親という大切な者も例外ではなかった。

その死体の山の中心にエヴァは佇んでいた。

自分をこんな存在にした世界を怨むような憎むような表情と大切な人たちを手にかけてしまった後悔の表情が混ざったような顔をしていた。

「エヴァ」

そこへ紫稀は優しく声を掛ける。

「シキさん。私どうやら人間じゃなくなつたみたいですよ」

「そう・・・みたいだな。一応君をそんな風にしたと思われる男は捕らえてある。それとこれからどうするんだ？」

「さあ、どうなるんでしょうか？復讐するべきなんでしょうか、私をこんな風にしたこととお父様やお母様を殺させたことに対して」

「したいならすればいい。私は一切止めない。それとよかったら私と旅をしないか？」

「シキさんとならそれもいいかもですね。でももしかしたら私はシキさんも殺してしまうかもしれません」

紫稀の提案に興味を持ちつつもそれを言外に拒否するエヴァ。そんなエヴァに向けて紫稀は言葉を放つ。

「その辺は心配しなくてもいい。教えていなかったが私も化物と呼ばれる類のモノだ。そして不老不死でもある。エヴァが死ぬより先に死にはしないし殺されもしない。そういう存在だ」

「そうだったんですか。それじゃあシキさんと一緒に生きたいです」

「エヴァンジェリン・アタナシア・キティ・マクダウエル。私は君を傷つけようとするあらゆるものから君を守るよ。私の君への愛の証明の一つとして。実を言うと私は君に一目惚れしていたようだからな」

「シキさん、私も多分貴方に恋してるのかもしれませんが。だからそれを明確にするために一緒に生きていこうと思います」

「なら、まずはこの者たちの甲いをしよう。エヴァ、この城はどう

したい？」

「持っていけるのなら持って行きたいです。お父様たちとの思い出が沢山あるから。でも流石に無理ですね」

「これくらいなら可能だよ。確か新品の魔法球があったはずだな。ふむ、あったな。持ち運びについては後回しにしよう。ネスト殿たちを先にしよう。火葬か土葬どちらにするかね？」

「火葬でお願いします。人数分の棺や穴を掘るのも大変ですし」

「そうだな。ならば外に運ぼう。ここでは流石にやれない」

「はい」

紫稀とエヴァはネスト達の遺体を全て玄関の前に運び、紫稀が無詠唱で『ウラニア・フロゴシス燃える天空（改）』で燃やしていく。

その光景を見ていたエヴァは涙を流し続けていた。

紫稀ついでとばかりに秘術を行使した男をエヴァの前に持っていく。それに対してエヴァは紫稀から借りた銘のない消耗品の刀で男の四肢を斬り落としていく。そして最後にそのまま燃やしてくれと紫稀に頼んだ。紫稀はその言葉に『インケンティウム・ゲヘナ奈落の業火』で燃やし尽くした。

そして城を新品の魔法球にいれた紫稀と葬式と言う名の過去との訣別をしたエヴァはここから立ち去るのであった。

100年戦争が起こっていたある年の12月24日。ヨーロッパにあつた一つの城が跡形もなく消えた。世間では色々な憶測や噂が流れたが、どれも真実とは程遠かつた。

その事実を正確に知っているのは彼と彼女の二人だけである。

そしてその日からエヴァンジェリン・アタナシア・キティ・マクダウエルという人間の少女は死に、エヴァンジェリン・アタナシア・キティ・マクダウエルと言う吸血姫が生まれたのだつた。

S i d e · e n d

第10話（後書き）

遂にエヴァ様ゲットオオオオオオオオオオ！！

次回からエヴァ様の修行編かな？ キンクリしまくるけど。魔法の修行でゼクトだすかね？

これで麻帆良での学園生活のための下準備の一つに手をつけられそうです。

エヴァ様が日本で合気柔術を習うってのを思考の隅に入れておけば簡単ですね。

まあ他のSSで同じようなことやってるん方がいるんですけどね。

明日菜はネギハーレムには入らず、協力者という立ち位置になり、ネギパーティーのメンバーにはなりません。

と言っても紫稀ハーレムにも入らない場合も。兄妹の立ち位置に落ち着く場合もありますしね。紫稀パーティーには前衛として参戦しませんが。

てか、紫稀パーティーってどうすれば・・・。

誰かに喧嘩売らせる気ないのに戦闘パーティーって必要なの？

ネギハーレム・パーティーに確定しているのは今のところのどかと夕映とまき絵といいんちよの4人ですが、原作準拠にするとまき絵が知るのは魔法世界、いいんちよに至っては一切知らないんですよね。雪広財閥のお嬢様という経路で魔法の存在を知っていたみたいなことになれば話は早そうですが。ネギの教育も出来るしね！ ショタコンだし。

木乃香とせつちゃんがネギパーティーに参戦しそう。ハーレムには確実にいれませんが。ネギと仮契約させるときは血か宝石での手段にさせますしね！唇同士なんて認めない！！

現状ハーレム入り確定の4名。

エヴァ様 アリカ姫 ちうたん アキラ

状況次第でハーレム入りの5名。

木乃香 せつちゃん 真名 茶々丸 桜子

新たに追加の4名。

刀子先生 千鶴 円 シスターシャークティー

ハーレム入りするかは未定ですが以上9名と4名のアーティファクト案も募集します。

第11話（前書き）

あらすじにも書いたのですが、
作者はコミック27巻まで所持、250時間目から317時間目ま
ではうる覚え、それ以降は未読なので正史とは所々設定が食い違
うことになります。34巻まで買わないといけないですね・・・。

ユウト様、今夜のおかず様、なおぼん様、Dai様、黒部様
感想ご意見感謝です。

それでは11話、どうぞ。

第11話

Side・造物主

あの少女の真祖化と目の前で消滅を確認させることに成功したな。

しかし、客人扱いされていたあの男は一体何者なんだ？

いくらあの身が私の分身体が不滅性がなく本体より力が劣っているとはいえあそこまで簡単にやられるとは……。

私が初めて敗北したあのノワールという男と今回の男は我が計画の障害になりかねん。

警戒しておかねばならない。計画を邪魔されるわけにはいかないのだから。

Side・end

Side・紫稀

あれから数ヶ月、私は現実世界と魔法球内でエヴァに修行をつけていた。

エヴァも吸血鬼本来の力を十全とはいかなくも使いこなせるようになっていたし、魔法や体術のほうも中々に様になってきたな。

そういえば、なんでこうなったんだっけ？

確かアレは旅に出て2ヶ月くらいときだったっけ？

エヴァと共に旅を始めて大体2ヶ月。

今、私はノワールの姿で正義の魔法使い（笑）に追われていた。
本来の姿はまだ教える気ないし。

なんか前にもこんなことがあった気がする。今回はエヴァがいるけど。というか抱えながら走ってる。

あいつらの今回の目的はどうやら私ではなく吸血鬼になったエヴァらしい。

ちよくちよく「吸血鬼をこちらによこせ」なんて言ってくる。誰が渡すかってんだよ。私の嫁だ！

というか、吸血鬼よりも危険な【破滅を齎す黒】が目の前にいるのに気付かないってどういうことなんだ？阿呆なのか？

そういえばここ数百年はシャナを成長させたような外見でいたからノワールの話は御伽噺的なものになったのかね？

賞金は最後に見た600万ドルから1000万ドルになってたけど。

エヴァのほうにも吸血鬼ってことで20万ドルの賞金首になつた。

何もしてないのに賞金かけるってどうなんだろう？

「シキ、私のことで追われるなんて大変でしょう？もういいよ、私を置いていって」

なーんて言ってくる。世界的には私のほうが危険なだけかね？
そうそう気付いたら呼び捨てになつてた。いつまでもさんづけは嫌だつたからいいけど。

「エヴァ、気にすることは無い。君は知らんかもしれんが私のほうが追われる理由があるのだよ。彼らはまだ気付いていないがな。」

「えっ！それってどういうこと？」

んー正直に言ってしまうか？でもなーまだ早そうだし。

つと危ない危ない。思考に没頭していたら『魔法の射手』に当たるところだつた。

いや、私は別に当たっても大丈夫だけど、エヴァはまだ魔法の勉強してないから危ないし。傷なんてつけさせられないし。

「さて、諸君。攻撃したね？これは立派な正当防衛だ。ということ
で死にたまえ。『魔法の射手連弾・闇の199矢』」

あつ、やつべ。199矢は流石に過剰威力すぎた。地形も変わったよ。

およつ？何人かまだ意識あるっぽい。ならちよつどいいか。エヴァには強力な連れがいるって広めてもらおうつと。

「まだ息がある者もいるようだね。ならば伝えたまえ。吸血姫の傍には【破滅を齎す黒】がいると。それでは失礼するよ」

さてこれでエヴァを追ってくるものはだいぶ減るかなー？

後はいつからエヴァに魔法の勉強させようかなー？

「ねえシキ。私に戦う術を教えて欲しい。いつまでもシキに護ってもらってばかりじゃ嫌だから」

あら、先に言われちゃった。予定が早まったってことでいいか。

「そこまでいうなら教えよう。ただし『力』の意味を間違っではない。大きくも小さくも『力』は『力』でしかない。『力』自体に意味はなく、『力』に意味を与えるのは自分であることを忘れてはいけない」

「難しくてよく分からないけど、分かった。約束する」

そうと決まれば少し落ち着けるところで魔法球設置して中で修行かな？

「それじゃ少し落ち着けるところにいこうか」

「うん！？」

そんな感じで修行スタートしたんだっけ。懐かしいな！。

魔法球の設定が72倍速だしな！。

もうちよつと倍速大きくてもよかったかもしれんけど。

魔法球の周りに人払い・認識阻害・気配察知の三重の結界張ってたからな！。

結界内に入ってこれるのは魔法使い関係の人間だけだから気配察知したらすぐに魔法球から出て、やってきた魔法使いに向きあって攻撃してきたらエヴァの修行の成果を確認するために戦闘させてたから様になってきたし。

それとあまり倍速大きくすると実戦との間隔が開きすぎて鈍るからちよつとよかったのかな。

追って自体も私が傍にいるって広めたから減ってたし。

まあー戦闘終了後はすぐに魔法球を影の倉庫にしまっただけで結果を消して別の場所に移動を繰り返してたからな！。

移動中に襲ってきた連中は先に攻撃させてからエヴァに仕留めさせた。少ない実戦の機会だから奪うわけにもいかなかったし、襲撃してくるやつらが修行後のエヴァよりも弱かったから、益々私の出番がないわけで……。

それを繰り返してたらエヴァの賞金が最初の20万ドルから10倍の200万ドルになった。

私のほうも100万ドル増えて1100万ドルになってたけど。

それにしてもエヴァの成長速度が速かった……。

真祖になったってのも大きかったんだろうけど、元々素質があっただね……。

あと少し成長したら私じゃ何も教えられなくなっちゃう……。出来ることが実戦形式の模擬戦になっちゃうし……。

それと段々口調が原作のエヴァ様みたいになってきた……。ああー荒んでいくのね、徐々に……。

魔法の師匠として魔法世界でゼクト探してみようかな。あれ確か長命で不老とかって話だったし。

アカシック・レコードにアクセスすれば場所は分からなくても既に生まれてるか分かるはずだし。

おっ、いるっぽい。これでエヴァの魔法の更なる修行は大丈夫っぽいな。

それにそろそろ【ドル・マスター人形使い】への道を示そうかな。チャチャゼロも実物を見てみたいし。

Side・end

Side・エヴァ

シキと旅に出てから数ヶ月。シキに修行をつけてもらって私もそれなりに強くなった。

修行をつけてもらえるようお願いしたのは旅に出てから2ヶ月経ったくらい。

私はそれまで護ってもらってばかりだったから、いつまでも護ってもらわんじゃなくて、私はシキを支えられるようになりたかったから。

修行をつけてもらう前に言われた「『力』自体に意味はなく、『力』に意味を与えるのは自分である」も最初は分からなかったけど今なら何となくだけど分かってきた。

「『力』を意味もなく振るうのはただの暴力だって。

シキは追ってきた魔法使い達に自分からは絶対に攻撃しなかった。攻撃されてから正当防衛といって攻撃をしていた。

それがシキの言う「『力』に意味を与える」という一つの形なんだと思う。

だから私もシキと同じようにした。私からは絶対に攻撃しないし、女子供や無害な魔法使い達に危害は加えなかった。それが私の「『力』を持つ者の意味」だから。

シキが史上最高金額の賞金首【破滅を齎す黒】って知ったときは驚いたけど、どうでもよかったし。

シキはシキだし、私に優しくしてくれて愛してくれてもいるし。

そういえば今日、シキに前衛を人形か何か任せて自分は後衛で魔法を使ってみるのはどうかと言われた。

確かに今までの魔法使いは前衛後衛のペアはあまりいなかったから困らなかったけれど、一人で対処出来ない魔法使いがいつ来るかわからないから従者は必要だと思った。

最初はシキと私で組めばいいと思ったけどやめた。いつまでも頼ってばかりじゃシキを支えることが出来ないから。

後でシキの持っている魔法書とかで戦闘人形について調べることしよう。

それと魔法世界に行くって話しにもなった。シキが行くなら私はついていくから二つ返事で了承した。

今日も修行や勉強に励もう。いつかシキを支えられる女性めになりたいから。

S i d e . e n d

S i d e . 紫 稀

チャチャゼロ作成フラグも無事建てれたし魔法世界にも行くことにもなった。

「ねえ、シキ。どうやって魔法世界に行くの？」

「どうしようかなー」

移動方法何にしようかな？

新旧世界各地に作った『扉』^{ゲート}はここから若干遠いからな。やっぱりスキマ移動か。

「よし、スキマで移動だな」

「スキマ？聞いたことないけどなに？」

そりゃそうだ。これが使えるのは幻郷のスキマ妖怪だけだしな。

「見てれば分かる。どこに繋げようかなー。多分どこに繋げても遭遇できるようになってると思うし。作者の都合的に」

「シキ、メタ発言はダメだよ。あれ？メタ発言ってなんだろう？」

およっ？エヴァも電波を受信したのか。まーいいや。そうなんども受信しないと思うし。

「適当にアルギユレー大平原に繋げるか。それじゃ開くか」

「シキ！あれはなんだ！？なんかこっち見てきて怖い！！」

やっぱり初見じゃ怖いか。仕方ないかね。

「大丈夫、あれは無害だ。そろそろ抜けるぞ」

「本当に無害なんだな？つて急に眩しい！ここが魔法世界？というかさっきの転移魔法かなにかなの？」

「まあーそんなところだな。詳しくは私もしらんし」

妖怪の力つて言っても信じないだろうし。それ以前に人外ではあるけど妖怪じゃないしな、私。

「シキ、向こうに誰がいるっぽいぞ？」

ん？本当だな。ガキっぽいな。あれ？もしかしてゼクト？都合が良すぎだろう。鎌かけてみるか。

「その少年、中々の実力者だな」

「なんじゃ、お主らは？」

「別に大したもんじゃねーよ、ただの旅人だ。世間じゃ【破滅を齎す黒】とか呼ばれているがな」

「【破滅を齎す黒】じゃと！？そんな大物がここに何のようじゃ？」

「すげー驚きようだ。そんなに有名なのかね？」

「何、この辺にかなりの実力を持ったのがいるって聞いてな。そろそろ私だけじゃキツくなった連れの修行を手伝ってもらおうと思つてな」

「ほう、【破滅を齎す黒】の連れといえば【闇の福音】と聞いていたがの。それ程の実力者なら別に指南役はいらんであるつに」
ダイク・エヴァンジェル

「そうでもない。私は魔法を全部使えるが人に物を教えるのはそれほど得意でなくてな。実戦形式の模擬戦なら出来るんだがな」

嘘は言っていない。準最強クラスまでになら教え鍛えられるけど。

「それだけでも十分だと思っただろう？まあ最近退屈しておったから別に構わんがな」

「そうか、それならよろしく頼む。本名は紫稀だ。シキと呼んでくれ、フィリウス・ゼクト？」

「っ！？何故わしの名を知っているかは問わんでおこうかの。よろしくじゃ、シキ」

「あれ？何か勝手に話が進んでる！私に関することなのになんで私には何も聞かないの！？」

だって決めるの私だからエヴァに了解取る必要ないもの。

「んじゃ、魔法球使うか。倍速どうするよ？私達不老不死だから時間有り余ってるから1倍速でも可なんだけど」

「そうじゃな。わしも不老じゃし、のんびりやるつかのう」

「どの魔法球出そうかなー。アレとアレはダメだし、アレでいいか」

適当に作ったコロッセオと住居用の城・食料調達のための森がセツトのを影の倉庫から出してっつと。

「倍速を調整してつと。よし結界張るかな。二人は先に入っているぞ」

「それじゃ先に入っておるよ」

「すぐに来てね、シキ」

「分かってるって」

んー魔法球を中心に半径1キロで人払い・認識障害・気配察知の三重結界つと。

結界もきちんと起動したし私も入ろうつと。

エヴァがどこまで強くなるか楽しみだなーつと。

S i d e . e n d

第11話（後書き）

この物語はどうなるんだろうか？

作者の妄想のハーレムメンバー9名

エヴァ様 アリカ姫 ちうたん アキラ

木乃香 せつちゃん 真名 茶々丸 桜子

読者様からの追加候補メンバー4+1名

刀子先生 千鶴 円 シスターシャークティー ゆーな

以下のメンバーのアーティファクト案を募集します。

アーティファクトの形と能力募集

エヴァ様・アリカ姫っぽいもの

ちうたん・茶々丸は電子・情報系

木乃香・千鶴・桜子は回復・補助系

アキラは水流操作系

アーティファクトに付加する能力募集

せつちゃん・刀子先生は刀剣 シャークティーは十字架

円のアーティファクトは楽器系 ゆーな・真名は銃系

大戦期開始まで紫稀ハーレム・パーティーメンバーとネギハーレム・パーティーメンバー募集します。

作者妄想メンバーはほぼ決定のようなものなのでそれ以外で追加してほしいキャラでお願いします。

因みにアスナはどちらのハーレムにも加えないのでご容赦のほどを。さよも同様の扱いになるかと。

のどか・夕映・まき絵・いいんちよの4名はネギハーレム確定と思ってください。

古・朝倉・パール・楓はネギパーティーかな？

どうやってもいいんちよは紫稀側には来れないと言っ腹。

夏美はコタローとくっ付けます、多分。

第12話（前書き）

ゼクト参戦。だけど今回は出番がないよ。名前だけしか出ないよ。

今回は紫稀サイドオンリー。

派遣社員様、Dai様、権田 へいたろう様、つぐ様、なおぼん様
感想ご意見感謝です。

それでは12話、どうぞ。

第12話

Side・紫稀

ゼクトを交えて修行を始めて200年？300年？とりあえずそのくらい。

結構早かったなー。

そういえば初めての10年くらいでエヴァが『マキア・エレベア闇の魔法』を完成させたのは驚いた。

ゼクトに魔力運用とか習ってたけど他にも術式構成とか聞いてたっけ。

いきなり実践してくれたからな・・・。

今でも思い出せるよ・・・。

あの時のエヴァは色々な意味で可愛かったなー。

「シキ。シキ。ゼクトに教えてもらって新しい魔法作ったんだけど見てくれる？」

「ん？どんなのだ？」

新しい魔法ね。修行し始めてから10年くらいだよな？10年、10年？何か忘れてるな。

「じゃあやるね。」

リク・ラク・ラ・ラック・ライラック ト・シユンボライオン 契約に従い ディアーコネート・モイ・ヘー 我に従え
氷の女王 来れ ハイオーニエ・クリュスタレ のひよが！！ 全
の命ある者に トシ・イソソ・タオトン 等しき死を ホス・アタラクシア 其は安らぎ也 コスミケー・カタストロフエー おわるせかい
術式固定！！ コンプレクシオネサレーメントウム・マリアマテイオーネ 掌握 魔力充填 術式兵装 クリカウカウカウカウカ 『氷牙姫』

あー「闇の魔法」か。『おわるせかい』を取り込んで『氷牙姫』、ひよがぎ、氷河期、ね。

氷の牙を持つ姫か。吸血鬼で吸血姫らしい名前かな。

「対象に触れたらそこから凍らせて砕けるの。絶対に砕けるから対人戦だと使い勝手は悪いけど無機物相手なら有効なんだよ。どうかな？」

「確かに私達の戦い方だとあまり使い勝手はよくないな。そこらへんは取り込む魔法で対応するしかないってところかな？」

んー私のアレもそろそろ見せた方がいいかなー？

「私の手札を1枚見せようかな。無銘、無銘つと」

「どんなの見せてくれるの？」

「まあー見てなさいな。」

ファル・ラス・セ・ラウス・セット・リリース

アギデー・テネブラエ・アヒュシイ
来れ深淵の闇

燃え盛る大剣 闇と影と憎悪と破壊 復讐の大焔 我を焼け彼を焼
エクス・インケンデンス エト・インケンデカドニクス・ウンブラエ イニテラネテマエイオーニスケンダント・エト・メー・エト・
エラム シント・ソールム・インケンデンス インケンディウム・ゲヘナエスタグネット
け 其はただ焼き尽くす者 奈落の業火 術式固定 術式付与・対
象【無銘】 プロ・アルマティオーネエトノシヤナ 術式兵装『贄殿遮那』

あつ、やつぱ驚いてる。可愛いなー。頭撫でよう。あつ、真つ赤
になった。お持ち帰りしたい。つて一緒にいるからお持ち帰りも何
もないか。

「エヴァー？エーヴァー？」

そろそろ現実に戻ってきてもらわないと。

「シキ。なんで出来るの？さつき一度見せただけで出来たわけじゃ
ないよね？前から出来たの？ねえー？どうなの？」

そういえば見せてなかったもんな。使う機会もなかったし。

「前から出来たけど、それがどうした？」

「なんで一度も使ったり、見せたりしてくれなかったの！わ、私の
この10年間の苦勞は一体・・・」orz

やばっ膝ついて笑ってるけど声が笑ってない！こわっ！！でも、
可愛いからいいや。

「エヴァ、元気出しながら。手札を見せびらかすわけなんて三流や
二流のことをするわけないでしょ。だから今までだって魔法く
らいしか使ってこなかったでしょ」

「そうだけど！そうだけどき・・・。でも、私には教えてくれてた

っていいじゃない……。それともシキにとって私はその程度だったの？」

「エヴァ、そうじゃない、そうじゃないんだ。これはさ、本当に切り札の一つだから容易に使っわけにはいかないんだ。だからね、分かってくれるよね？」

「分かった……」

「ありがとう。それじゃ、今夜は一緒にベッドで寝ようか、久しぶりに」

「本当？本当に本当？嘘じゃない？」

「本当だよ。嘘じゃない」

やっぱり満面の笑みだ。どうしよう。今夜、理性保てたまま寝れるかな？

あの時は大変だった……。ゼクトは遠くでニヤニヤしながら覗いてやがったし、寝るときなんてエヴァが抱きついてきて朝方まで寝れなかったな……。まあー愛らしい寝顔が堪能出来ただけいか。

それから更に20年か30年くらいになってチャチャゼロ作った

んだったな。

アレも大変だった……。

エヴァが「闇の魔法」作って喜んで見せに来たのが20年だったか30年前だったっけ？

あれから時々ベッドに侵入してくるようになって大変だった……。

いや、一緒に寝るのは吝かではないけれど、理性を保つのが大変だった……。

そういえば最近またエヴァが何か作ってるんだよな。自動人形に関する書とかゼクトに解説頼んだりしてたな。人形関連は基礎くらいしか分らんからな。

あれ、人形？ってことは、チャチャゼロ誕生フラグ？どんなかなー？

およっ？エヴァが何か持ってこっちに来るっばいな。チャチャゼロでも完成したのかな？

「シキー。見てみてー。シキが言ってた人形を前衛にってのをやってみようと思って作ってみたー。どうかなー？」

「ケケケ、アンタガ旦那力？強ソウダナ。チョット殺^ヤり合^アワナイカ？」

「うおっあぶねー。物騒な人形だ……。エヴァ、魂の作り方間違ったんじゃないか……？」

いきなり斬りかかってきたし……。最初から殺戮人形だったってことか！そうなのか！？

「え、えつと……。あはは……。orz」

あつ、また膝ついてる。可愛いから撫でよう。

「隙アリダゼツ、旦那ツ！！」

「誰が、隙ありだつて!?!」

流石チャチャゼロかな。戦闘技術が半端じゃないな。でも、相手するの面倒だから踏んどくか。

「グエツ!?!」

「安心しろ。壊れないように押さえつけてるだけだ。大人しくしてろ。で、エヴァ。こいつの名前は付けたのか？」

確認しとかないとな。チャチャゼロじゃなかったら大変だし。

「あつ、うん。チャチャゼロって名前にしたの」

「そうか、チャチャゼロね。それじゃ、私はこれからゼロって呼ぶ

「ことにしよう、楽し」

「話八終ワツタノカ？ナラ、旦那。キチント勝負シネーカ？」

「さつき誕生したばかりみたいなのに、もうバトルジャンキー戦闘狂かよ……。やだよ、面倒だ」

「ソウ言ワズニ、殺ロウゼ」

「字が違うわ！！殺し合いなんて、誰がするか。本気になってっかり殺しかねん。人形だろつと、魂だろつとだ。ゼロ。お前はエヴァの従者だろつ。なら私の家族でもある。そういう存在を私に殺させるきか？」

「シキ……」／／／

「ツマンネーナ。ナラ今度手合ワセツテコトデ勝負ハシテクレヨ。ソレモ駄目ツテコトハナインダロ？」

あれ？エヴァが真っ赤になってる。そろそろ私の理性も危ないかも。

「その程度なら構わんよ」

「旦那、今の言葉ワスレンナヨ？」

「ああーわかってる。で、エヴァ。そろそろ戻ってこーい」

「はっ！私は一体何を？」

「さあー？最近はずロ作るために一生懸命だったから疲れてるんだろ。今夜一緒に寝るか？」

「寝る！一緒に寝る！！えへへ・・・」(〃・・〃)ゝ

「ケケケ、頑張レヨ、ゴ主人」

あの日から一人でいるとよくゼロが襲ってきたからな・・・。精神的に辛かった・・・。

疲れたと言えば100年くらい前だったかに麻帆良関連で大変だったな・・・。

1600年代だったかな？麻帆良の世界樹を狙ってMM元老院の使者が来たって分身体から連絡あったからスキマで向かったんだっ
メカロメセンブリア
たな。

取引とか面倒だったな。

最初の使者が初っ端から土地をよこせとか言ってきて煩わしかっ

たな。

そいつは正義の魔法使い（笑）だったから断つたらいきなり攻撃してきたしね。

一応殺さない程度に痛めつけてやったら、本国に戻って大軍連れてやってきたっけ？

あの時には既に麻帆良の土地にいた人たちもいなくなってたから別に困らなかつたんだよな。

2度3度大軍でやってきたけどこっちが無傷で向こうを全員半殺し状態だったかな。土地すらも無傷だしね。

創つてあつた【不殺刀】（じふせつとう）使つたら向こうさんが半殺しになつてたからな。後で確認したら人間だろうと妖怪だろうと化物だろうと必ず半殺しにする刀だつて。凄いやな！。

創つた時の思考は「殺さない刀」だったけど、まさか半殺しとはな。自分が一番驚いた。てっきりダメージすら与えられないのかと思つてたからな。

で、結局私が圧倒的に勝ちすぎたのか向こうがプライドを捨てたのか知らんけど最初にきた使者に指示してたらしいお偉いさんが話し合いしようとかやってきたんだっけ。

その時に使者の態度を録画しておいた映像見せてやったらいきなり顔が真っ青になって謝ってきて面白かつたな！。勿論それも録画しておいたけど。ついでに土下座もさせてみたら本当にしたしな。

で、最終的に土地を貸すってことになった。年間750万ドル（円で7億5千万くらい？）。計算やマネー価値は現代を参考にして

みた。因みに貸す土地は全体の3分の2。世界樹を中心に半径500メートル、直径1キロ内には進入禁止。一応私が認めた人以外の不可侵の結界は張っておいた。球体でなくて円柱型で。地下5000キロくらいまで伸びてる。

年間750万ドルじゃあまり負担にならないっばいけど、どうでもいいや。原作開始時には大体30億ドルくらいになるのか？

それと貸し出した場所以外の土地に入ろうとすると結界に弾かれる上に、侵入出来ても私の分身が迎撃するようにしてる。

あれ？当初の予定は世界樹周辺以外は売りに出すんじゃないっけ？

で、学園側の土地に私とエヴァと身内のための一軒家を作る予定だった気がするな？

どうしてこうなった？

まあーいいか。大戦期乗り越えれば平穏な生活を手に出来るな。

大戦期を過ぎたら麻帆良のトップはぬらりひよんになってるだろうから学園側の土地に家作っても大丈夫か。学園側の麻帆良の警備員やってやれば喜んで家建ててもらえるな。

それに貸し出したけれど権利書はこちらが握ってるしな。

学園生活は楽しく平穏に過ごせるだろう。その辺は後々考えればいいな。

麻帆良の問題も解決したし、エヴァの修行の方も終わったようなもんだからな。

そろそろ現実世界に出るか。ちよくちよく3人で遠出といえないものもしたつけ。基本スキマ移動だからすぐだし、遠出してゐる間隔がなかったしな。

それはそれとして今回はどこ行こうかなー。

そうだ、京都に行こう！神鳴流、神鳴流っと。

そうと決まれば、エヴァとゼクトを誘おうっと。

S i d e . e n d

第12話（後書き）

魔法世界と旧世界での懸賞金の通貨はドラクマとドル。

原作第21巻193時間目で30万ドラクマで3年遊んで暮らせる発言があります。

つまり1年で10万ドラクマ。日本で遊んで1年暮らすなら毎日10万として365日で3650万円。

100円前後＝1ドルとして大体35万から36万ドル。つまり10万ドラクマ＝35～36万ドル。よって1ドラクマ＝35ドルなのですよ。

エヴァ様の原作額の600万ドルなので約172万ドラクマ。

現在の紫稀の1000万ドルなら約286万ドラクマとなりますね。

アーティファクト案とハーレム・パーティーメンバー募集中。

大戦期突入と同時に鉄板以外の候補キャラのアンケとるのでどんどんどうぞー。

第13話(前書き)

【総PV】10万、【総ユニーク】14000突破!

なおぼん様、赤白黄色様、派遣社員様
感想ご意見感謝です。

やっとまとも?に会話が出たゼクト。

もしかして必要なかった?いやそんなはずは。

そんな13話、どうぞ。

第13話

Side・エヴァ

魔法世界に魔法球を設置してゼクトを交えて修行して2、300年が経った。

時々魔法球から出て旧世界の暗黒大陸などにも3人で赴いたりした。

シキに貰った白紙の魔法球で気に入った城があったから貰ってきたけど、まあ構わないだろう。名前はレーベンスシユルトと言ったな。

それにしてもシキは理不尽すぎる！全知全能に近くないか！？

私が一生懸命頑張って！頑張って10年も掛けてっ！！創った魔法を前から使えただなんて！！

くっ、！私の10年はなんだったと言うのだ！！あの時、初めてシキに殺意を持ったぞ！！

私よりも錬度が高いとか……。この10年を返して欲しいと思っってしまうほどだぞ？

でも、その夜、久しぶりに一緒にベッドで寝てくれたから帳消しにしてもよかったな。

そういえば時折シキは一人でいなくなっている。早ければその日に、遅くても2、3日で帰ってきたことがあったな。大抵無傷だっ

たけれど。治癒魔法すら使っていないのは見ただけで分かるんだがな。

一体何をしてるんだろうか？そういうえば私ってシキのことあまり知らないんじゃない？

あれ？おかしい？名前と数多の手札の一部と戦い方と魔法を全部使えることと物質を創り出すことくらいしか知らんぞ？

あいつ、私に一目惚れしたと言っておいて！私の過去は知ってるのに！！自分だけ話さないだど！？後で問い詰めなければならんぞ！それにそろそろいいと思うんだ、うん。けど、肉体年齢が10歳のままつて、なんか虚しい…。不孝者でも成長できる薬開発しようかなー。。。。

「エヴァー！ゼクトー！ちょっと話あるから来てー！！」

ん？どうかしたのか？

「今行くー！！」

「わかったのじゃー！！」

なんか面白そうなことが起きそうじゃないか。

Side・end

Side・ゼクト

2、300年前かの？ふと私の前に現れた男女（男は20代前半、女より少女）の二人組み。

一方は【破滅を齎す黒】。史上最高懸賞金1100万ドルの賞金首、ノワールことシキ。

もう一方は【闇の福音】ダイク・エヴァンジェル。額は200万程じゃが真祖の吸血姫、エヴァンジェリン。恐らくじゃが、今、魔法球から出て行動すれば一気に跳ね上がるじゃろう。

中々に面白そうじゃったからあやつらの願いを聞いてみることにした。まあ一体の良い暇つぶしのつもりじゃったのじゃがな。

それだったのに熱中してしまって、なし崩し的に師匠みたいな立ち位置になってしまった。

それにしてもシキは一体なんなんじゃろ？

軽く診ただけなのに魔力や気の総量があり得ないほどに膨大なのじゃ。観測できないほどに。

拳句に魔法は全て使えるといったバグっぷり。剣術や体術、戦闘技術なんかも一流の類じゃった。修練や弛まぬ努力もしてきたんじやろうが、総合においてあれほどの者は1万年に1人いるかどうかじゃろう。

人類であやつに勝てるやつはいないんじゃないか？神や魔王と呼ばれる存在なら勝てるかも知れんが、それより下位のものじゃ勝てんじゃろうな、多分。

それにシキは本当に面白かった。ちよくちよくわしやエヴァと3

人で旧世界を放浪もしたのう。

スキマじゃったか？あの移動方法は一体なんなんじゃ？魔法とも違うようじゃし……。ゲートを取らなければ行き来が出来ないはずなのに、魔法世界と旧世界をあんな気軽に移動するなんて、バグ以外の何者でもないじゃろう。

そして、エヴァンジェリン。あやつもバグとはいかずとも大概チートじゃったようじゃ。

適正属性は闇と氷。苦手なのは光と火と治癒。それ以外は平均の魔法使いよりあるくらいじゃった。

じゃが、適正があるないで威力や範囲は増減するが、一通りの魔法が使えると言うチートっぷり。

更に助言をしたりはしたが、10年で新しい魔法を創るとはの。学者タイプの魔法使いじゃな。しかも、戦力としても一級品とか、そこの魔法使いどもに喧嘩を売っておるのう。

売ったとしても余裕で勝てるんじゃろうな、余程のことがない限り売らないんだらうが。

あやつらは確固たる自身の信念を持つておるから、『力』に溺れて自分を見失うこともないじゃろう。

だから、途中からは喜んでエヴァンジェリンの師匠役をやっておったのじゃがな。

2,300年。そろそろ行動を別つ頃合かのう。寂しいものじゃのう。

「エヴァー！ゼクター！ちょっと話あるから来てー！！」

「今行くー！！」

「わかったのじゃー！」

はてさて今度は何が始まるのかのう。

「今度は京都に行こうと思っただ」

「は？」

やはりこやつらは面白くて退屈せんでいいの。今回の旅に一区切りついたら寂しいが別行動することにしよっかのう。

S i d e . e n d

S i d e . 紫 稀

「今度は京都に行こうと思っただ」

「は？」

あれ？反応がいまいち芳しくないな。

「それで京都とはどこにあるんじゃ？」

あつ、そうか、知らないからか。ゼクトのお陰で反応の意味が分かった。

「旧世界の日本と言う島国だ」

「日本？んー何か知っているような気がする」

そりゃそうだ。ヨーロッパ圏ならマルコ・ポーロの話くらい聞いたことはあるだろう。

「マルコ・ポーロ？誰じゃそれは？」

あつ、ゼクトは魔法世界で生きてたから知らないか。

「今から約400から500年前に生きていた旧世界のヴェネツィア共和国の有名な冒険家。で、その冒険家が冒険の数々を載せた本の名前が東方見聞録。その一説にある国を紹介するものがある。それは『黄金の国、ジパング』。それが日本のこと」

「黄金の国、ジパング？なんじゃそれは。黄金が沢山ある国なのか？」

「いや、そういうわけではない。マルコ・ポーロが訪れた場所に金箔や金を使って建てられた建築物があっただけだ。黄金がそこかしこにあるわけではないよ」

「ふむ、そうか。黄金がそこかしこにあったのなら貰ってきても平気だとおもったのじゃがな・・・」

意外と俗物的ですね、ゼクトさん。

「そういえば、エヴァ。確か古い建築物とか好きだったよね？」

「ん？そうだが、それがどうかしたのか？」

「いや、なに。日本は木造建築が主でな、古い建築物はかなり丁寧に保存されてるんだ。更に京都は古都とも呼ばれるほどだ。だからエヴァが生まれる前に建てられたものも色々と残っているんだ」

「それは本当か？是非観たいぞ！行こう！今すぐ、行こう！」

「んじゃ、満場一致で京都行きというか日本行きはオーケー？」

「勿論だ！」

「わしは構わんぞ」

エヴァの興奮度が怖いです！！そしてゼクトは変わらない感じだな。

まっ、京都行きが決まったからいいかな。

京都についたら神鳴流教わるうっつと。

Side・end

Side・エヴァ

古都・京都か。

古い建築物が今もなお残ってるなんて素晴らしいじゃないか！

是非とも拝まねばなるまい！！待ってるよー、日本！！

なにより、この機会にシキと一線を越えてみせる！！

覚悟しておけよ、シキ！？

S i d e · e n d

第13話（後書き）

エヴァ様に始まりエヴァ様で終わる今回の視点。

あれ？おかしいな。前回の最後から時間が全く進まなかったぞ？
体的に半日すら。

今回で京都入りするつもりだったのに、どうしてこうなった？

アーティファクト案と鉄板以外のハーレム・パーティーメンバー
はまだ募集中。

現時点では候補者のみの募集。

大戦期に関わる話に突入と共に募集は打ち切り、候補キャラの昇格
アンケに移ります。

鉄板 『エヴァ様・アリカ姫・ちうたん・アキラ』

候補 『木乃香・せつちゃん・真名・茶々丸・桜子・刀子先生・千

鶴・円・シスターシャークティール・ゆーな』

ネギ側候補 『のどか・夕映・まき絵・いいんちよ・古・朝倉・パ
ル・楓』

ハーレム除外者 『明日菜^{アスナ}・さよ』

第14話(前書き)

ようやく時は動き出す？

COCO様、なおぼん様

感想ご意見感謝です。

やっぱりゼクトって影薄くなるよね？
そんな14話、どうぞ。

第14話

Side・紫稀

「日本よ！私は帰ってきた！！」

「やっぱこれって定番だよな！1000年前からちよくちよくMM元メガロメセンブリア老院のせいで麻帆良には来てたけどさ。

「シキ。お前は何がしたいのだ？」

なん・・・だと？

「このお約束が分からないというのか！？私はそんな子に育てた覚えはないぞ！？」

「育てられたのは確かだが、別にそうゆう風には育てられてないからな？」

「ふむ、ここが日本の京都というところか。なかなか風情があるのう」

「そりゃ当然だろう。18世紀はまだ江戸幕府が存在している時間軸だからな！」

「そういえばこの頃ってまだ陰陽師とか忍者っていう裏側が表にあっただっけ？」

「ここでみんな疑問に思ったはずだ。」

ゼクトはまだ魔法世界人の人間で、私もギリギリ人間だとしても流石にエヴァは吸血姫。

この時代はまだ妖から京の都を護るっていつて気配察知の類の結界が張り巡らされてるだろう。

だが！しかし！エヴァや私達に襲ってくるものはいないさ。

なぜなら私が結界を誤認させる道具を創ってエヴァに持たせてたからさ！！

やっぱいらんいざごさは御免被りたいわけで。

と言いつつもそのまま神鳴流の道場がある場所に向かつてるわけですけどね！！

近くまで来たら力を過剰に抑える必要がないから私は大体1割、エヴァは4割、ゼクトは2割ほどかな？だけ解放している。

私達が全力で本気に解放したら京の民衆が圧迫死してもおかしくないから当然の配慮だよね、殺したいわけじゃないし。

てことで門前に着いたわけですが、四方から殺気は駄々漏れ、気配は隠してないんじゃない？ってレベルで話しにならないわけですけどね。

とりあえず「御免くださいーい」って軽く入ってみるか？いや、しかしな。悩むぜ！

「シキ、入らんのか？（いい加減回りの連中が煩わしいのじゃが？）

」

「私達との実力差を正確に測れないような短絡者ばかりってことじゃないか？」

剣士たちが大振りになったところを紫稀は持っていた不殺刀を3回振る。

それだけで多勢であった剣士たちは全員戦闘不能に陥った。

「それも、そうか！つとなんだ、私が三振りしただけで全員終わるのか。神鳴流も大したことないのか。この程度で京の都を護るなんて粋がつてるのか、残念な連中だな」

「確かにこの程度の実力で護れると考える傲慢さは頂けないのう」

「こいつら、シキが相手する程じゃなかったね。私がやればよかった」

「こらこら、エヴァ。女の子がそんなこと言っちゃ駄目でしょ？」

剣士たちのだらしのなさを観察していた3人の下に一人の男がやってくる。

その気配を感じ3人は3人とも油断なく隙もなく待つ。

そして3人の前に来た男は言葉を出す。

「神鳴流当代当主、あおやまとはる青山素春と申す。お主らはここに何用で参られた？」

Side・end

襲ってきた連中は弱かったけどこの男はかなり出来るな。恐らく
当代神鳴流の上位5人あたりだな。

「神鳴流当代当主、あおやまもとほの青山素春と申す。お主らはここに何用で参られた？」

とりあえず話し合いは出来そうだな。

「ああー先に謝罪しておこう。約束もないのにやってきた上にここに来る途中から力を少々解放してきたのは此方の不手際だからな。だがそいつらのことについては向こうから斬りかかって来たのだから其方の不手際と思ってよろしいな？」

「話し合いから始めなかった此方の不手際。ですので、とんとんという事で手打ちにしてもらいたい」

これくらいは、話し合いが通じるなら妥当だよな。

「それが妥当だろう。後、道場破りまがいな発言したこの子のこと
も謝罪しておく。それでここに来た理由だが、当代最強か歴代最強
の剣士がいれば試合あしって見たかった。それと神鳴流の技を秘伝など
も含めて全て見せてもらいたく来た。こちらは見せてもらえれば儲
けものみたいにしか思っていないがな。」

一通り見せてさえ貰えれば見稽古のスキルでコピーは可能だし、
それを魔法球内で修行すれば現実時間ではすぐに身につくからな。

それにしても見稽古のスキルがあるとは思っても見なかった。これって一種の魔眼扱いなのか。それとも能力扱いなのか不明だよな。

「試合の方は構いません。ですが、秘伝なども含めた技を一通り見せることはまだ承服致しかねる。その者の人柄を見て神鳴流に危害を加えないと信用に足るものでないと流石に・・・」

それも当然っちゃ当然だよな。見せた技を見よう見真似で身につけられて、拳句襲われたら堪ったもんじゃないだろうし。ここで切り札まがいを切るか。

「そうだな、それなら私たち3人の正体を明かしておくか。エヴァとゼクトも構わんだろ？不利なことは言わんし」

「別にわしは構わんぞ。不利なことはあまりないしの」

「私も構わん。私は平穩さえ約束されれば暴れる理由もないしな」

そういえば忘れてたけどゼロは今、私の影の倉庫に入れてある。通りがかりで人を斬ったりされたら困るし、さっきの剣士たちのもゼロがいたらこの程度じゃ済まなかっただろうしな。

「素春殿、4人で話せる場所を準備していただきたい。あー部屋だけ準備してくれるだけでいい。遮音や人払いの結界はこちらでやらせてもらう。別に殺したりはせんから安心したまえ、転がってる剣士諸君」

さつきから半殺しにした剣士たちが睨んできて気分的にいいものじゃない。意識自体は戻ってきてるようだけどまだ肉体的には感覚が戻ってないんだろうから、怖くはないけど。いや、最初から怖く

なかつたけど。

「分かった。それなら私の後についてきてくれ」

Side・end

Side・other

そんな流れで準備された部屋に通してもらい素春以外が部屋を出て襖を閉めたと同時に結界を張る。

「今の一瞬で此処までのものを。素晴らしい技量だ」

「まあー時間はたくさんあったわけだしな。で、私達の正体だが、簡単に言えば皆不老者と言ったところか。私とエヴァは不老不死、ゼクトは不老だ。私の場合は人間のまま不老不死に、エヴァはある秘術によって吸血鬼・西洋の鬼にされた。ゼクトは知らん。あつたときから不老者だったからな。それと私の名前は神儀紫稀だ。」

「フィリウス・ゼクトじゃ。そういえばわしの経緯については話したりしてなかつたのう。でも、大して変わらんじゃろ?」

それもそうだ。ゼクトはゼクトだしな。と紫稀は思っていた。

「気になったのだが、不老不死者と不老者とは一体何が違うのだ?」

「簡単に言えば不老者は寿命がなくなった、不老不死はよっぽどのことがない限り死ななくなった、くらいじゃないか?」

「ああーそうだな。不老不死と言うのは老いることも死にも遠くな
った存在と言ったところか？私はエヴァンジェリン・A・K・マク
ダウエルだ」

「その通りじゃな。不老は肉体に致死傷を与えられれば死ぬが、不
老不死は致死傷食らおうとも指の一本でも残っていれば再生するか
らのう」

「つまりは死ぬ攻撃を受ければ不老者は死に、体の一部でも残って
いれば死なないのが不老不死と言ったところですか？」

「そういうことだな。不老不死者と不老者は永遠の歩く雑多事典と
いった感じだな。私達が忘れなければ後世に伝えることも可能だし
な」

紫稀たちが全ての流派を修めればその流派が滅びようとも紫稀た
ちによって復活させることも可能である。

「あー人間のまま不老不死になったとは言ったがある意味私は人外
だよな。というかバグだしな」

「「確かに・・・」」

エヴァにも肯定されて膝をつく紫稀。

「何故自身を人外だと自称するのですか？」

そんな質問に紫稀は何を当たり前なことを。と思いつながら答える。

「それは簡単だ。不老不死は忌避される存在。そして、鬼や悪魔といった人外は口約束だろうと必ず守る。それこそが化け物としての在り方だ」

「なるほど……。そういうことならば神鳴流全ての技をお教えしましょう。神鳴流に敵対しない、直接的間接的問わず神鳴流に不利になることをしないと約束して頂けるのならば」

「その条件飲もう。というより門下生になって神鳴流史上最強になっても構わんのだがな。その辺は後回しにするとして、まずは試合たいのだがお相手は誰がするのか？」

現在の紫稀のテンションはハイになっている。今まで機会がなくて使えなかった見稽古をやつと使えるのだから。

「当代暫定最強の私がお相手を。と言いたいのですが、実戦対応の試合になると流石に私では無理なので、私の娘のお相手を願いたい。娘は当代暫定2位です。才能も史上最強になれるほどのものなのですが、如何せんそう言った事情で少々天狗になっておりますので、紫稀殿のような強者がこの世にはいると教えてやりたいのです」

紫稀を娘のための踏み台にしようとする素春。その意図をきちんとして理解した上で紫稀は答える。是と。

「素春殿の思惑を理解した上で、敢えてその話に乗ろう。私を踏み台にするというなら心の強き者でなければ到底無理だ。『力』の意味を真に理解出来なければその『力』に溺れるだけだからな」

「例え紫稀殿と刀を交えて潰れるならそれまでだったと。だが、私は娘を信じます。あの娘こなら必ず乗り越えれると信じて。試合は明

日の昏に。長旅だったと思いますので今夜はゆっくり体をお休みください。3部屋用意させます」

「あー二部屋で構わんよ。私とエヴァは一緒の部屋で構わん。布団も一組で十分だ」

この言葉に素春は驚く。エヴァもこうも堂々とゼクトを除いた他人の前で宣言され顔が真っ赤になる。

そんなエヴァを胡坐にした自分の足のの上に乗せて頭を撫でる紫稀。そうして更に真っ赤になるエヴァ。頭を撫でることで反応するエヴァに癖になりそうになっている。

実を言うと紫稀とエヴァは300年ほど一緒にいるが、キスすらまだである。

紫稀はエヴァが夜這いしてきたりしたら、逆に自分から可愛がるつもりである。それよりも出来れば自分から攻めて行きたいところなのであるが、その機会がなかなか訪れない上に、紫稀は初心ではなく若干ヘタレなのであった。

「こういうことだから」

未だに足の上でいいように撫でられてるエヴァとそうしている紫稀を何度か交互に視線を動かし素春は言う。

「野暮なことは言いませんよ（頑張ってください！）」

なんか最後の方、変なのが聞こえた気がするけど気のせいだよな？うん、まあもうちょっとエヴァを愛でてよう。と思った紫稀であった。

それは夕餉の準備が出来たと呼びにきた門下生が襖を開けるまで
続くのだった。

因みに目撃されたエヴァはかなりの時間、身悶えていたらしい。

S i d e · e n d

第14話（後書き）

前回よりは時間は進んだ！・・・多分。
半日ほどは進んだと思うんだ。

なんていうか、下手にキンクリ出来なくなったような？

それにエヴァ様もなんかまた影薄くなって・・・ない？

おかしいな。もっと活躍できるはずなのに？どうしてこうなった？

鉄板以外のハーレム・パーティメンバーまだまだ募集中。

現時点では候補者のみの募集。

大戦期に関わる話に突入と共に募集は打ち切り、候補キャラの昇格
アンケに移ります。

鉄板 『エヴァ様・アリカ姫・ちうたん・アキラ』

候補 『木乃香・せつちゃん・真名・茶々丸・桜子・刀子先生・千
鶴・円・シスターシャークティール・ゆーな』

ネギ側候補 『のどか・夕映・まき絵・いいんちよ・古・朝倉・パ
ル・楓』

ハーレム除外者 『明日菜^{アスナ}・さよ』

以下に付随する感じで案募集です。

アーティファクトの形状と能力

エヴァ様・アリカ姫っぽいもの　ちうたん・茶々丸は電子・情報系
木乃香・千鶴・桜子は回復・補助系　アキラは水流操作系

アーティファクトに付加する能力

せっちゃん・刀子先生は刀剣　シャークティ―は十字架
円のアーティファクトは楽器系　ゆーな・真名は銃系

エヴァ様に関してだけは早くアーティファクト考えないと・・・。
早ければ次回には本契約してる流れだぞ？

計画性がなさ過ぎるうううううううう・・・orz

第15話（前書き）

時間が12話からあまり進まない！

12話から数えても多くて2日くらい？1日しか進んでない気がするのだが・・・？

【総PV】 12万、 【お気に入り】 200件突破！

なおぼん様、派遣社員様

感想ご意見感謝です。

やっぱりゼクトは空気になりやすい。

そんな15話、どうぞ。

第15話

Side・エヴァ

神鳴流の素春の屋敷で夕食を頂いて風呂に入ってから、私は風に当たるために屋敷の屋根の上に座っていた。お酒を持って。

すると私の後に風呂に入ったシキが私と同じようにお酒を数本持ってやってきた。

「エヴァも風に当たりながら酒か？」

「そついうシキこそだろ？」

「月が綺麗だったからな。肴に丁度いいと思って」

「で、本当にそれだけで屋根に上ってきたわけじゃないんだろ？」

それだけの理由なら別に屋根に上ってこなくてもいいはずだから、何かあるのだろう。

「やっぱばれるか。いや、なに。エヴァと大事な話をしようと思っただから」

大事なこと？大抵のことは些事だから余程重要な話か？

「そろそろ覚悟というか決心しないとイケないと思ってね」

ん？覚悟？決心？あれ、この雰囲気と流れってまさか！そうなの

か！？

「一度、君には伝えたことがあったけど、もっかいきちんと伝えたいと思ってね」

S i d e ・ e n d

S i d e ・ 紫 稀

「一度、君には伝えたことがあったけど、もっかいきちんと伝えたいと思ってね。」

エヴァンジェリン・アタナシア・キティ・マクダウエル。

私は君を300年前のあの時から変わらず愛している。いや。あの時よりももっと愛している。だからパートナーとしてずっと私の隣にいて欲しい。

私の、神儀紫稀のパートナーになってほしい」

これが私の本当の想い。やっと伝える勇気が持てた。

「・・・300年か。長かった。やっと私達は手と手を取り合って生涯を一緒に進んで行けるんだな。」

シキ。私は、エヴァンジェリン・アタナシア・キティ・マクダウエルは300年前のあの時よりも大きくなったこの想いで、神儀紫稀を愛し続ける。それは生涯なくなることはない。

だから私を貴方の妻にしてください」

あーこれはやばい。涙が止まらないな。

「キティ。どうして泣いているんだい？」

「それは嬉しいからだよ、シキ。シキこそ泣いてるじゃないか。それと何故いきなりキティなんだ？」

「私だって嬉しいんだよ、キティ。いいじゃないか。二人きりのときはこっちで呼ばせてくれよ」

そう言いながら私はキティにキスをする。何気にお互いファーストなんだぜ？

「いきなりするなんて・・・」

真っ赤だな。私もそうなんだろうな。自分でも分かるし。

「300年も待たせて悪かったね。中々決心がつかなかったんだ」

「そうだな。お互い近くにすぎて積極的に前に進めなかったのかもしれないな。最近の私なら、機会があれば襲っていたかもしれないかな」

そんなの分かっていただき。自分に向けられる好意に気付かないほど、鈍感ではないつもりだよ。だから決心したんじゃないか、共に生きていこうと。

「そろそろ部屋に戻ろう。明日の試合のこともある。キティが風邪を引いてしまっても大変だし」

「別に明日の試合なんて楽勝だろう？それに私は真祖だぞ。風邪なんて引かないさ」

「それはどうか分からんさ。念の為だよ。私の気分的な問題さ」

試合自体はそこまで大変じゃないだろうな。キティを一人でここにいさせて何かあつたら私の精神的に耐えられないからだけだね。

「キティ。今夜はキスと一緒に寝るだけで我慢してね。そこから先は他人の家でする度胸は流石にない。魔法球に入ったとしてもだよ。京都に来た理由が一段落したらまた世界を放浪しよう。多分ゼクトは京都で別れると思うから」

恐らくゼクトは私の京都での用事が住んだら魔法世界でまた暫く一人でいることを選ぶだろうから。

「そっか。だとしても私達は不老者だから、いつか再び会えるだろうさ」

「そうだね。まあー京都には短くても一月はいるつもりだから、もう暫く時間はあるさ。もしものときはレーベンスシユルトの魔法球に入っのんびりすればいいしね」

「そうだな。それじゃあ観光を楽しむことにするさ」

そう言っって私達は用意された部屋に戻って一組の布団で寝ることにした。

因みにこの恥ずかしいやりとりは撮影していた。キティにばれな
いように。

恐らくこの映像を見たら私とキティは二人とも身悶えるんだと思
う。だけど処分したりはしない。これは大事な記録で記憶だから。

S i d e ・ e n d

S i d e ・ o t h e r

昨晚、思い出すと身悶えるようなやりとりをした紫稀とエヴァの
二人は朝っぱらからイチャついていた。

ゼクトと素春はそんな二人をニヤニヤしたり、暖かい目で見守っ
ていた。お手伝いさんといった人たちは、動揺したり困惑の目を向
けたりしながら、昨晚何があったのかと思っていた。

「そついえは素春殿。あなたの娘さんは一体どこだ？今日の昼に試
合うのだろう？」

朝食を食べながら試合の確認をする紫稀。

「娘の素香^{もじか}は一昨日から遠方についておって今日の昼前に戻ってく
る予定なんじゃ。それまで京をのんびり見て回るか道場で鍛錬を見
たり、自由にしてくれて構わぬ。素香が帰ってきたら呼びに行くか

声を掛けるから大丈夫だ」

事情を説明する素春との会話で試合までの時間をどう過ごすか決める紫稀。

「それなら鍛錬を見ながら得物の準備をするか。試合に使うのは木刀でいいのだろう?」

木刀ならあの樹の枝使って準備すればいいし。と続ける紫稀。鍛錬を見ながらという事は、見稽古を使用する気満々である。

「あー刃さえ潰れているなら何を使ってくれて構わんよ」

「ああー分かった。別に無手だろうと私は戦えるのだがね。一応木刀は準備しておこう。ご馳走様。美味しかった」

そう言って紫稀は借りた部屋に戻っていった。

その後、少し遅れて食べ終わったエヴァも「ご馳走様でした」と言って紫稀を追いかけていったのだった。

残っていたゼクトと素春は二人の行動を見ながらニヤニヤしていたのだった。

Side・end

Side・紫稀

朝食を終えてから不審に思われないように部屋に戻ってから、私は影の倉庫から【無銘】と同じくらいの長さの世界樹の枝を取り出した。

「これを錬金すればいいかな？」

「シキ。お前って確か木刀は……ってなんだその枝？魔力とか色々と凄いで？」

およっ？もう食べ終えてきたのか、キティ。

「まあー本体の樹が内包する魔力とかいったものは無限といっても過言でない代物の枝だからね。それくらいは当然でしょ」

「は？」

「やっぱり驚くか。ん？あーそうか。世界樹のこと話してなかったっけ。」

「そういつた大樹があるわけだよ。私はそれを世界樹と呼んでる。今度その場所に一緒に行こうか」

「あ、ああ」

それじゃキティを連れて道場にも行こうかね。おっとその前に錬金しないかね。

「錬成陣を書いてその上に枝を置いて、ホイっと」

世界樹の枝を原料にしたからか予想以上に素晴らしい代物が出来

てしまったよ。名前がないのも勿体無いしな。何かいいのはないかなー？

「そうだ。【木刀・無銘】でいいや」

ん？どっかの執事な漫画に出てくる木刀の名前と似てるって？いいんだよ。インスパイアってやつだ。問題ない。

「なんだそのネーミング？」

キテイもそんな反応なの？いいじゃないか分かりやすくて。

「シキがいいなら私は何も言わないよ」

最初からそういえばいいのに。んじゃそろそろ鍛錬も始まってるだろうし道場にいくとしますかねー。

何故か今、門下生全員に睨まれています。

あれ？どうしてこうなった？

いやいや理由は一つしかないか。昨日のことですね。どうでもいいや。

ん？なんか素春殿と同等かそれ以上の気配が1つこっちに向かってくるな？来れば分かるから放置でいいな。

おっ、扉が開く。

「父上。青山素香、只今戻りました」

「素香か。よく戻った。それで、どうだった？」

「はい。そこまで強力な妖はおりませんでしたのでそれ程時間は掛かりませんでした」

ふーん、彼女が娘さんね。別嬪さんだね。あだっ！

キ・・・エヴァ肘鉄しないでっ！痛いよ！エヴァが一番だから！
ね！？

ふうーようやく落ち着いてくれた。それで遠出って妖退治だったのかな？

「そうかご苦労だった。それで今日はお前と試合いたいという者が来ている。戻ってきたばかりで疲れているだろう。2時間休息を取ってからやってもらいたいと思うのだが、問題ないな？」

「はい。それは勿論大丈夫です。ですが、相手はどこに？」

「それならあそこにおる」

ちょっと人を指ささないでくださいよ。あら？お嬢さん。私を見るなり何嘗めた顔してんのかね？

「父上。お言葉ですが、あの程度の気しか持たぬ者が私の相手になるとは思えないのですが？」

あつ、そういえば今抑えてるんだっけね。忘れてたよ、てへっ。

「素香。お前は少々天狗になっておるようじゃな。紫稀殿の本当の実力すら測れぬとは。紫稀殿、少しばかりご自身の力量を示してもえぬだろうか？」

「別にいいが、どの程度まで示せばいいかね。ああー2割ほどで構わんか。それ以上出すと素春殿や素香殿ならいざ知らず他の門下生では死にかねんな。それでは少し気をつけたまえよ」

「くくくくがはっ！」「くくく」

「ぐっ！2割で此処までとは。流石ですな紫稀殿・・・」

「これで2割やてっ？それなりに死線を乗り越えてきたウチでさえきついだなんてっ・・・」

あれ？2割しか出していないのに素春殿と素香殿、門下生側の数人を除いてみんなダウンか。気絶はしてなくてもかなり疲弊しているのしか残らないか。だらしのないな。

「なんだ、ここの門下生は弛んでるんじゃないか？シキは殺気を出したわけではないのに、少し力を出しただけで気絶するなんて。シキの本気の殺気を当てたらそれだけでショック死しそうだな」

「エヴァ。それは思っても言っちゃいけないよ。私が完全に解放しても立ってられるのは、3人くらいだな、私が知ってるので。それと一般人ならともかく、多少なりともこっち側にいるなら気絶はしてもしにはしないでしょ？」

「3人？私とゼクト以外にもいるのか？それと一般人より少々優る程度なら十分死ねるだろ」

「まあーね。恐らくだけど。おっとそろそろ抑えるところか。いい加減危なくなってくると思うし。素春殿たちは大丈夫か？」

死ぬ死なないはもうスルーことにする。平行線を辿りそうだし。

「ああ。強者であることは分かっていたが、まさか此処までとは思っていなかった」

「そりゃそうだろうな。普段の行動時は3分程度まで抑えているし。よくて門下生より劣る程度だ。まあーお嬢さん。剣士なら相手が力を抑えていたとしても本領を見抜けねば即座に殺されるぞ」

「うっ・・・」

ありや。流石に言い過ぎたかな？これじゃ試合出来ないっばいな。まっいいか。神鳴流の技は見せてもらえるんだし。

「試合は流石に無理っばいな。素春殿。流石に疲れただろうから今日は屋敷の方に戻っているよ。明日からよろしく頼むよ」

「分かりました」

「父上。明日からは一体何の話ですか？」

「それは後で話す。まずは気絶している者たちの介抱をせねばなるまい」

んーこりゃやりすぎた？手間かけさせたっばいな。まあーいいや。
明日からが楽しみだなー！。

後日、何故か素香殿から修行をつけてくれと頼まれた。私は魔法
使いなら鍛えられるけど剣士とかは門外漢だぞ？
それにしても、どうしてこうなった？

S i d e · e n d

第15話（後書き）

時間が進まない……。どうしたものか？

結局、本契約なり仮契約なりしていない罫。大戦期に入る前には本契約済ますから大丈夫！多分。きっと。めいびー……。

鉄板以外のハーレム・パーティーメンバーまだまだ募集中。

現時点では候補者のみの募集。

大戦期に関わる話に突入と共に募集は打ち切り、候補キャラの昇格アンケに移ります。

鉄板 『エヴァ様・アリカ姫・ちうたん・アキラ』

候補 『木乃香・せつちゃん・真名・茶々丸・桜子・刀子先生・千鶴・円・シスターシャークティール・ゆーな』

ネギ側候補 『のどか・夕映・まき絵・いいんちよ・古・朝倉・パール・楓』

ハーレム除外者 『明日菜^{アスナ}・さよ』

以下に付随する感じで案募集です。

アーティファクトの形状と能力

エヴァ様・アリカ姫っぽいもの ちうたん・茶々丸は電子・情報系
木乃香・千鶴・桜子は回復・補助系 アキラは水流操作系

アーティファクトに附加する能力

せっちゃん・刀子先生は刀剣 シャークテイーは十字架
円のアーティファクトは楽器系 ゆーな・真名は銃系

第16話（前書き）

今回で過去京都編終了かな？

なおぼん様、カールマイヤー様、派遣社員様、読書大好きっ子様
感想ご意見感謝です。

大戦期に入らないとゼクトは影の薄い子！！
そんな16話、どうぞ。

第16話

Side・紫稀

私達が京都に来てから早一月。

私は神鳴流の鍛錬で運動不足になることはなかったが、キティとゼクトはのんびり観光しかしていなかった。

そういえばゼクトだけは観光してるとしか知らないんだよな・・・
。一体何してるんだろう？ゼクト曰く「観光じゃよ、観光」としか聞いてないし。謎だ。

ゼクトって見た目子供にしか見えないから色々と危険な気がする。
主に相手が。幻術でも使って何かしてたりするのかな？いや、もう考えるのやめとこう。意味がない。

キティはって？大抵は一緒にいるけど、それが何か？

京都に腰を落ち着かせた頃は京都に攻め入ろうとする妖の類の退治をキティとゼクトと手伝ってみたのだが、5日もしないうちに数が激減していた。なんでも強力な鬼が京を護つてるとか妖たちの中で話題になったらしい。『吸血鬼』だから鬼であることは間違いないんだけどな。

そんな感じで妖も中位以下は殆ど来なくなり、来るのはもっぱら

上位相応の実力を持った輩ばかり。まあ一攻めて来る数が減ったために妖1体に対応する人数が増えたので以前よりも安全になっているとか。それでも一騎当千な妖もいるわけで、その時には私達が対応していたりしていた。

まあ一何だかんだ言っているが、運動不足にならないためにキティとゼクトには魔法球内で発散してもらっているわけだ。1日に1、2時間程度。

そして魔法球内でキティとはイチャイチャしていたんだ。

あれだね。原作でナギたちがイチャイチャしてたのを読んで「リア充爆発しろっ!!」って言うって悪かったよ。今の私とキティもそんな感じなんだ。

すまん、現実逃避もいい加減にしておう。

2週間くらい前に素春殿と素香に魔法球の存在がばれた。

自分にも使わせて欲しいと素香が言い出したのでしようがなく使わせることに。勿論魔法球の仕組みは教えてある。それである魔法具を創造しなくてはいけなくなっただけだよ。どんな効果のだった？簡単だろ、そんなもの。

魔法球内でどんなに過ごしても外に出たら外での時間分しか老いない腕輪。

魔法球内で4、5日過ごしたとしても出れば4、5時間分しか肉体年齢に影響を与えないってことだよ。完全に限定不老効果でもよかったけど流石にやりすぎはよくないと思ったからこんな感じに。

外でも使用可能な不老の腕輪なんかも創る気もなかった。女性の永遠の夢だろうとそれは摂理に反すると思うんだよね、不老不死な

私が言うのもなんだけど。

魔法球自体に不老の効果与えてもよかったんだけど、それだと意味がないと思っただけからやめておいた。あっ、倍速は24倍速。1時間が1日になるあれ。

まあー私は神鳴流を習得するために魔法球は使う気はなかったわけなんだけど、なし崩し的にばれた日から使うことにした。だから今では全ての奥義を使える。

そういえば初対面の翌日に素香には弟子にしてくれって頼まれたわけだけど、それは断った。断ったけれど、実戦形式の手合わせ程度ならすると言って妥協はしてもらった。それに一つだけ条件を出されたわけなんだけど、大したことではなかった。

呼び捨てにしてほしいとだけ。恐らくけじめというかそんな感じなんだろう。弟子にはして貰えなかったけど手合わせはしてもらえるのだから、と言ったところかな？

とりあえず後半の2週間は魔法球で毎日4、5時間過ごしていた。素春殿もたまにストレス発散とか手合わせをしにやってくるので入るときだけ腕輪を貸しておいた。

そんな感じに過ごして私は既に神鳴流史上最強の座についてしまったわけだ。2位は素香。3位に素春殿だ。

魔法球内でのも含めて約70日ほど鍛錬を続けていたからか素香

の才能が完全に開花したわけだ。初日に私の2割ほどでの力を耐えるくらいしか出来なかったのをばねにしたのか、慢心を捨て一心不乱に修行していたからだろう。

素春殿のほうも初見のときよりも力をつけている。今なら二人とも5、6割程度を解放した状態の私と対面しても立っていることは出来るだろう。手合わせも10分程度なら出来るようだし、上位の妖にもさほど苦勞せずには戦えるだろう。

そういえば私達が神鳴流の鍛錬をしているとき、キティは町に出ている武術家のおっさんに会ったらしい。何となく面白そうだったから、そのおっさんの技術を盗んでやるとか言っていた。

大体1週間くらい前に完全に物にしたようでは錬度を高めるだけらしい。魔法球内で反復しているのを見て分かったのだが、どうやら合気柔術だったようだ。正史ならあと200年は先だった気がするが、私というイレギュラーがいるのだから正史とはかわるわな。どうでもいいけど。

まあ一月。当初の予定より若干早かったが神鳴流を免許皆伝してしまったのでしょうがない。京を離れることにした。

だが、問題が出来た。

素香と試合っていないのだ。本来なら試合っていたはずなのだから問題でもなんでもないわけなんだが、素春殿に言われて京を離れる前日に試合うことになった。

まあー素香の成長具合を確かめたいから断る理由もなかったのだけどね。

そうして試合の日。私は【木刀・無銘】を持ってキティとゼクトを連れて試合場に向かう。

S i d e ・ e n d

S i d e ・ o t h e r

紫稀達が試合場ついた頃には、大勢の神鳴流剣士や陰陽師といったそっち方面の関係者でごった返していた。

見物人達は紫稀の姿を確認してすぐに道を空けていく。その先には既に素春と素香が待っていた。

「素春殿、素香。待たせたな」

「いや、私達も少し前に来たゆえそれほど待つてはおらぬ」

「そういうことなので、大丈夫です」

「そうか。なら見物人も待っているようだし始めよう。エヴァ、ゼクトは下がっておけ」

「わかっておる」

「わかってる」

会話を少しで切り上げ試合のために精神を落ち着けさせる紫稀と素香。素春は審判を、エヴァとゼクトは素春の後ろに立つ。

「ふむ、素香。私は4割ほど力を解放する。油断や手加減と言うわけではない。私の場合抑えても抑えなくても技量は全く変わらんから、解放による威圧感で動けなくなってもらっても困るからな」

「分かってます。紫稀殿は覚悟を持ったものに手加減をすることやされることが嫌いであることはこの一月の付き合いで十分に知ってますから」

この一月の手合わせによって二人はそれなりにお互いを熟知していた。

「ならいい。力を解放することによる発する威圧感は全て抑えるがな。見物人たちに気絶されても困る」

「それでは始めましょう」

「それでは神鳴流歴代最強・神儀紫稀と神鳴流歴代2位・青山素香の試合を執り行う」

素香の言葉を合図に素春が試合の開始を宣言する。

「それでは、はじめっ!!!」

素春の宣言と共に相手に迫る二人。その剣速は常人では視界に捉えることすら不可能な程だった。

それを視認することが出来たのは一握り。エヴァとゼクトは当然として、神鳴流当代3位の素春を始め神鳴流当代7位までの実力者5名と高位の陰陽師数名のみ。エヴァとゼクト、素春以外は辛うじて捉えられる程度であるが。

それ程までの速度で斬岩剣や斬鉄閃など神鳴流奥義で肉薄する二人は拮抗していた。

2700年もの歳月を最大限に活用し多種多様な分野を弛まぬ努力で続けてきた紫稀。

そして、その紫稀が来るまで神鳴流歴代最強の剣士になれる程の才能を秘め、この一月でその才能を開花させた素香。

二人の剣技は全くの互角であった。

紫稀が右上から袈裟切りをすると、素香は最低限の動きでかわし即座に瞬動で紫稀の後ろを取り一閃。それを紫稀は振り返りざまに【木刀・無銘】で受け止め弾き飛ばす。そしてそのまま追撃する。

「斬空閃！」

斬空閃を紙一重でかわした素香は瞬動で紫稀の目前まで迫り、手に持った木刀に気を変質させた雷を纏わせて振り下ろす。それに紫稀は気を変質させた炎を纏わせて下から振り上げる。

「雷鳴剣!!」

「炎斬剣!!」

一瞬競り合うも、上からの振り下ろしの勢いで素香が打ち勝つが、紫稀は即座に瞬動で下がる。

ここまで全くの互角であり、お互いにダメージと言うダメージはない。だが、素香は体力の限界が近づいていた。

それもそのはずで、いくら天才と言えどその身は人である。

人であってその身も人の素香には、人であって人外である紫稀の速度についていくのはかなり厳しいものがある。

それを無理をして実行していたのだから精神的に疲弊してもおかしくない。そして次の一手で最後となる。

「素香、今お前が出せる全力でこい!!」

「この刃、あなたの身に届けて見せます!!」

「いくぞ!!」

「はいっ!!」

「神鳴流神儀型炎系最終奥義」

「神鳴流決戦奥義」

お互いの全力を持って最後の1撃を繰り出す。

「極・焰冥剣!!」

「真・雷光剣!!」

両者の剣がぶつかる。それによって出た余波が見物人たちを襲い、周辺に土煙が立ち上る。

そして暫くして土煙がだいぶ薄まると人影が2つ。1つはまっすぐに立ち、1つは木刀で支えながら立っていた。

それから土煙が完全に晴れたとき立っていたのは紫稀であった。素香は既にボロボロで仰向けで倒れていた。

「素香。お前の刃はこの身に届いたぞ」

言葉を発した紫稀の右腕には一筋の小さな刀傷が出来ていた。それを確認した素香は、微笑んでいた。

「一矢、報いたでー」

そう言って素香は気を失うように眠ったのだった。

試合は紫稀の勝利で終わった。
この試合は神鳴流が存続する限り後世に語られていくのであった。

S i d e · e n d

第16話（後書き）

若干の戦闘なり。

次回からゼクトとは別行動。

そして大戦期前の伏線張りかな？

紅い翼アラブルブラとどこで合流させようか・・・。

鉄板以外のハーレム・パーティーメンバーまだまだ募集中。

現時点では候補者のみの募集。

大戦期に関わる話に突入と共に募集は打ち切り、候補キャラの昇格アンケに移ります。

鉄板 『エヴァ様・アリカ姫・ちうたん・アキラ』

候補 『木乃香・せつちゃん・真名・茶々丸・桜子・刀子先生・千

鶴・円・シスターシャークティール・ゆーな』

ネギ側候補 『のどか・夕映・まき絵・いいんちよ・古・朝倉・パ
ル・楓』

ハーレム除外者 『明日菜アスナ・さよ』

以下に付随する感じで案募集です。

アーティファクトの形状と能力

エヴァ様・アリカ姫っぽいもの ちうたん・茶々丸は電子・情報系

木乃香・千鶴・桜子は回復・補助系　アキラは水流操作系

アーティファクトに付加する能力

せつちゃん・刀子先生は刀剣　シャークティ―は十字架
円のアーティファクトは楽器系　ゆーな・真名は銃系

第17話（前書き）

魔法世界での大戦まで日常と非日常。

【総PV】15万、【総ユニーク】2万突破！

今夜のおかず様、なおぼん様
感想ご意見感謝です。

エヴァ様とゼロ空気じゃね？
そんな17話、どうぞ。

第17話

Side・紫稀

私たちは南海の孤島で穏やかに至福のときを過ごしている。

今は1900年代前半、神鳴流を免許皆伝してから2000年程が経っている。

およそ2000年前、素香と試合った翌日に私とキティとゼクトは一旦魔法世界のアルギユレー大平原に戻っていた。理由は設置しっぱなしだった魔法球の回収。一月程度だったから大丈夫だったように、無事に回収できた。それからゼクトとは別れることになった。いつか再会することを約束して。

その後はゼロも出して魔法世界を適当に放浪していた。途中、賞金稼ぎや正義の魔法使い（笑）が襲撃してきた。その度に迎撃していったら更に襲撃の回数が増えていった。

襲撃の回数が激増したのを疑問に思っつて襲撃者達に話を聞いてみ

たら賞金が跳ね上がっていたらしい。

私は1500万、キティは1000万、何故かゼロにも300万の賞金が掛けられていた。勿論通貨はドルで。

私やキティが賞金首になるのは仕方がないとして、何故ゼロまで賞金を掛けられたのか考えてみたら一つの答えが出た。人を殺しすぎたんだな・・・。

そういえば襲撃される際、二つ名で呼ばれるんだが、キティには

ダイク・エヴァンジェル

【闇の福音】 【人形使い】 【不死の魔法使い】 とその他数個と原作

キリングドール

通り、ゼロにも【殺戮人形】 【吸血姫の従者】 についていた。

カウンター・キル

そして私には【吸血姫の守護者】 【後手必殺】 なんてのがついていた。先に攻撃しないからこんなのがついたのか？

まあー何だかんだで襲撃が煩わしかったから放浪するのを旧世界に変えた。

神鳴流には2、30年に1度、一月の頻度で顔を出しておいた。

その度に中々の才能を持っていたのがいたから鍛え上げてみたが、それでも実力は中の中から上の下程度までしか育たなかったな。素香は上の中から上の上辺りまで育ったから、非常に物足りなかった。

素香のような才能は稀という事か！

今から大体170年程前に素春殿が、それから20年後くらいに素香が亡くなった。二人の葬式にはゼクトにも連絡して3人で参列した。悲しくて涙が出たのはネスト殿とヴィラ殿たちを弔ったとき以来だった。二人が私にとってそれほどまでに大切な存在だったと気付いたのはその時だったのを、今でも忘れられない。これから先、大勢の人たちを見送っていくんだと悟りもした。

魔法世界ではあと50年ほどで戦争が起きる。その為の準備も前々から色々としてきた。分身体を使って【コスモエンテレケイア完全なる世界】についても調査し、末端の組織を数百ほど潰してきた。後は時が満ちるのを待つだけ。

戦争で思い出したが、第一次世界大戦の影響で麻帆良の土地権利を奪われるところだったな。なんとか阻止はしたけれど。今は第二次が勃発している。気をつけないと土地を正義の魔法使い（笑）に奪われかねない。皇族に袖の下でも渡しておこうかな。

50年ほど前からここに居を構えた。人払いと認識阻害と気配察知の結界を張ってあるので、襲撃は少ない。襲撃されても気配察知の結界のお陰ですぐに撃退することも出来るからそれほど危険でもない。

それにしてもどうやってこの島の情報を知りえたのかが謎だな。

『……て……?』

ん?誰の声だ?通信用の道具はどこにしまっておいたかな?

『き……て……か?』

「はいはい、ちょっと待った待った」

この道具はあの人の専用通信機じゃねーか。

『聞こえておるか?』

「あー聞こえてるよ。それで何かあったのか、最高神の爺さん?」

何か嫌な予感がするな。

S i d e . e n d

「聞こえておるか？」

『あー聞こえてるよ。それで何かあったのか、最高神の爺さん？』

長い間使ってなかったから故障でもしたのかと思うたわい。っとそんなこと考えている場合ではなかったわ。

「ちょっと大変なことがあってのう。おぬしに関わる問題じゃから連絡したのじゃ」

『私に関わるって一体なんだ？』

「実はのう、新しく就任した神がとんでもないやつでのう。暇つぶしでお主がいた世界に似た世界の人間を殺して能力を少しばかり与えて転生させたんじゃ」

『転生させただけなら何も問題ないと思うんだが？』

それだけだったらわしだって困らんじゃよ……。

「それだけならまあー多少の罰で許されるんじやがな。転生させた世界がまずいんじやよ」

『えっ、まさかとは思っけど、マジで？』

「いやっ、相変わらず察しが良すぎじゃのう。

「おぬしが考えてる通りじゃと思っぞぞ」

そう、転生させた世界は　。

『この世界ってわけね・・・』

「そうなんじゃよ。何故こやつがいる世界に転生させたのかが謎じや。」

「そうなんじゃ・・・。しかもその転生した人間が救いようがなくてのう。道德観が狂っておると言うか、人としての常識がないやつじゃったようだな。それで転生するときにエヴァンジェリンといった原作キャラを奴隷にしたいとか言ったそうじゃ」

『は？奴隷って私の聞き間違いだよな？嘘だと言っ』

「本当じゃよ・・・。最初はエヴァンジェリンが真祖になりたての頃に接触して自分のいいようにするつもりじゃったようじゃが、なんとかわしが介入して今おぬし達がいる時代に送ったのじゃ。元々真祖にされる以前からおぬしがいたから意味はないと思ったが一応な」

『事情はあらかた理解した。それで私は何をすればいい？』

「こやつの手を煩わせるのは心苦しいんじゃないがわしらでは傍観することは出来ても介入することは出来ないからの・・・。」

「その転生者を殺してしまっただけで構わん。そやつは既に輪廻から外れた存在じゃから死んだらもう転生出来ぬからな」

『了解。それでその転生者に与えられた能力ってのはなんだ？』

えーと……。何々？

「Fateの【王の財宝】とゲート・オブ・バビロン【無限の剣製】と全ての宝具の【真名解放】と頭に思い浮かべた人物の居場所を知る能力じゃな。後は不老じゃ。見た目は金ぴか？だそうじゃ」

『Fateの能力なら焦らんでもいいな。それにしても居場所探知か。それならここもすぐにばれそうだな。それと金ぴかか。慢心王ギルガメッシュね。「俺はオリ主だ！」みたいなこと考えてそうだな。ん？』

「どうしたのじゃ？」

『どうやら来たようだ。半径50キロの気配察知の結界に引っかかった。あと20分もすれば島に到着しそうだな。それじゃ早速行ってくるわ。またな爺さん』

「うむ、気をつけていくんじゃぞ」

無事で行ってくれるといいのじゃがのう。

Side・end

Side・紫稀

「うむ、気をつけていくんじゃぞ」

さて、情報は貰ったし撃退することになりますか。今回限りは先手を貰うことにしよう。その前にっよ。

「キティー！ゼロー！」

「はい！」

「ケケケ、呼ンダカ旦那？」

「うおっ。ゼロ、近くにいたのか。気付かなかったぜ」

「ソリヤソウダ。気配消シテタンダカラナ。ソレデ何カアツタノカ？」

まさかまた不意打ちしようとしてたのか……。いや、今はそれどころじゃなかったな。

「あーちよつと厄介なことが起きた」

「シキーどうしたのー？」

「キティ、お菓子作りの途中だったのか？」

「うん。それでどうしたの？」

エプロン姿も可愛いな。っと、それどころじゃなかった。

「襲撃者だ。ある確かな筋からの情報だ。今回はかなり面倒なことになるから、私だけで相手をしてくる」

「それだけならいつも通りじゃないの？」

「オレモツレテケ」

首を傾げないでー！ー！私のライフと言つ名の理性がどんどん削られていくからー！？

「相手の装備が厄介だな。もしかしたらこっちにまで影響が来るかもしれないから気をつけてもらおうと思つてな。あとゼロは相性がかなり最悪だから却下な」

ゼロは【エクスカリバー約束された勝利の剣】使われたらほぼ100%消滅するだろうし。

「ケツ、ツマンネーゼ」

「気をつけてね」

「あー分かつてる。それじゃ行ってくる」

さっさと終わらせてきますかねっと。

S i d e ・ e n d

S i d e ・ 成 二

俺の名前は柳田成二。平凡な高校生だった。

実は俺オタクでよく二次小説の転生モノを読んで憧れたりしたん

だ。

なんだか知らんが、神の暇つぶしとかで殺されて力を貰って漫画の世界に転生させてもらえらるって言われてはしゃいじまったんだ。Fateの能力をいくつか貰ってネギま！の世界に飛ばしてもらったんだ。これで俺は最強オリ主だぜ！！

ネギま！の世界にいけたらやりたいことがあったんだ。それは原作キャラを俺の奴隷にして好き放題することだ！それで今はエヴァンジェリンを探しているんだ。最初はエヴァンジェリンが真祖になった頃に転生させてもらおうと思っただが無理だと言われたから可能な限り原作より前って言ったら約100年くらい前だったんだ。

居場所探知の能力を貰ったからエヴァンジェリンがいるであろう島に向かってるんだ。いろんな手を使ってエヴァンジェリンを落とさせて見せるぜ！！

そうしてもう少しで島を視認できると思った時だった。

「この島に何のようだ」

背後から声を掛けられたのは。

Side・end

Side・紫稀

「この島に何のようだ」

うわぁー情報どおり外見が慢心王だよ。

「お、お前こそ誰だよ!？」

あぁーそういえば本来の見た目だったっけ。式に似てるから焦ってるようだな。

「貴様に名乗る名なんてない。もう一度問おう。この島に何のようだ？」

おっ?顔が赤くなってる。この程度の挑発に乗るのかよ。雑魚だな。

「お前に言う義理はない!両儀式にそっくりなその顔ってことはお前も転生者か何かか?」

ふーん。Fateの力貰ったって聞いたから予測はしてたが、型月ファンか。

「それくらいなら答えてやろう。答えは是だ。暇つぶしに殺された転生者さん?」

「なっ!何でそれを知っている!?もしかしてお前も暇つぶしに殺された口か!？」

そんなわけないだろう。私は神に助けられた口だよ。

「そんなしょうもない理由なわけないだろう。それに私の転生は例

外中の例外だよ。貴様みたいな小物と一緒にしないでもらいたい」

「誰が小物だと！！その身に教えてやる！！俺の力を！！エクスカリバー！！」

おっ？エクスカリバーか。最初から飛ばすねー。

「^{エクス}約束された」

「殺す気で来い、あるいはこの身に届くかもしれん」

一度言ってみたかったんだ、この台詞。

「^{カリバー}勝利の剣！！」

Side・end

Side・other

「殺す気で来い、あるいはこの身に届くかもしれん」

「^{カリバー}勝利の剣！！」

柳田の言葉と共にエクスカリバーの【真名開放】による圧倒的な光の奔流が紫稀に襲い掛かる。

「ふん、ざまあみさらせ。俺を嘗めた罰だ」

先ほどの一撃で海水が蒸発し当たり一帯は蒸気が霧となって視界を閉ざしていた。

それから2分程度で霧が晴れる。そこにいたのは全くの無傷で浮かんでいる紫稀だった。

「なんだこの程度か。多少は期待していたのだがな。せいぜいの上程度ではないか。残念だ。それに嘗めたわけではないよ。嘗める価値もないと思っただけだ」

「な・・・んだと・・・？俺の最強の切り札の一つだぞ！それを喰らって、何で無傷なんだよ！？」

柳田は目の前で起こったことを理解できず、納得も出来ず、受け入れることすら出来なかった。

それも当然と言えば当然だろう。自分の最強の一撃の一つを全くの無傷でやり過ぎされたのだから。

「何、簡単なことだ。貴様が私よりも圧倒的に弱いというだけだ。後は宝具の力を知っているからとしか言えんな」

「なっ！？まだ俺を馬鹿にするのか！？覚悟しろ！！」

紫稀の何気なく言った軽い挑発に乗った柳田は冷静さを欠き次々と必殺の意味を持つ攻撃をしていく。

「ゲイ・ボルク！刺し穿つ死棘の槍！！」

「ヘラクレスの斧剣！射殺す百頭！！」

「ガラティーン！転輪する勝利の剣！！」

「乖離剣エア！天地乖離す開闢の星！！」

しかし、ゲイ・ボルクは紫稀の心臓を抉る前に？ 折り折られ、9連撃は9つとも手刀で相殺され、ガラティーンは熱を急速に奪われ本来の意味をなさず、乖離剣工アは空間を切断する前に弾き飛ばされて防がれる。

その攻防を見ていた柳田の顔は絶望に埋め尽くされる。そんな柳田に向けて紫稀は言葉をだす。

「安い挑発に乗り冷静さを欠き、ただ必殺の攻撃をするだけ。戦術も戦略もあつたものじゃないな」

そこで一旦区切り、手に【無銘】を持ち目を閉じ、柳田に死の宣告をする。

「さて、これでお別れだ。何か言い残したことがあるか？」

「あう……うあ……」

その質問に柳田は恐怖に吞まれまともに答えることが出来ない。

「何もないのか。それじゃあ」

閉じていた『眼』を開き柳田に迫る。

「ひっ!？」

「永劫に死んでくれ!」

そして刀で死の点を突いた。柳田だったモノは海面へと落ちて、

沈んでいく。

それを確認した紫稀は自分を待つ者がいる場所へと飛び去っていく。

Side・end

Side・紫稀

「最高神の爺さん。こっちは終わったぞ」

『そうか。わざわざすまなかつたな』

転生者を始末した私は最高神の爺さんに報告をしている。

「いや、気にするな。神とて万能ではないのだろう？それに爺さんのせいでもないさ」

『そう言ってもらえると助かる。それで今回の報酬として何か一つないかの？』

報酬ね。まあー貰えるなら貰っておこうか。一つか。ならあれでいいか。

「それじゃ、転生者が私のいるこの世界に来ないようにしてほしい」
『それでいいのか？元々転生させた人間がいる世界には送れないようにしておくはずじゃから気にしなくてもいいんじゃないかな。今回

のようなイレギュラーが、二度と起きないとは限らんからな。気を
つけよう』

送れないはずなのに来ちまったって。どんだけイレギュラーなん
だか。まあいいか。

「気をつけてくれよ」

『分かっておるわ。おぬしこそ何かあったら連絡せえよ？わしら神
はアフターケアは万全じゃからの』

万全ね。確かに色々としてくれてたっばいしな。

「はいはい、分かったよ。じゃあな」

『それじゃあおう』

んじゃさつさとキティの待つ場所に帰りますかね。安心させない
とね。

S i d e . e n d

S i d e . o t h e r

紫稀は魔法世界での戦争に向けて準備を進める。

魔法世界とそれに付随する者たちを救うと言つ自己満足を果たす
ために。

物語は進む。魔法世界での戦争へ向けて。

S
i
d
e
.
e
n
d

第17話（後書き）

次回、ナギの強化フラグ立て？

ゼクトとの再会はいつになるのかな？

鉄板以外のハーレム・パーティーメンバーまだまだ募集中。
現時点では候補者のみの募集。

大戦期に関わる話に突入と共に募集は打ち切り、候補キャラの昇格アンケに移ります。

鉄板 『エヴァ様・アリカ姫・ちうたん・アキラ』

候補 『木乃香・せつちゃん・真名・茶々丸・桜子・刀子先生・千鶴・円・シスターシャークティール・ゆーな・柿崎』

ネギ側候補 『のどか・夕映・まき絵・いいんちよ・古・朝倉・パル・楓』

ハーレム除外者 『明日菜^{アスナ}・さよ』

以下に付随する感じで案募集です。

アーティファクトの形状と能力

ちうたん・茶々丸は電子・情報系

木乃香・千鶴・桜子は回復・補助系 アキラは水流操作系

アーティファクトに付加する能力

せっちゃん・刀子先生は刀剣 シャークティ―は十字架
円・柿崎は楽器系 ゆーな・真名は銃系

読書大好きっ子様と今夜のおかず様の意見を参考にしてエヴァ様と
アリカ姫のアーティファクトの土台部分は思いつきました。
それは後日紹介という事で。

候補者昇格アンケート

次話は大戦期突入前の紫稀とエヴァの設定公開予定。

その次は恐らくナギとの邂逅となります。

それに伴い前々から予定していた、紫稀とネギ両方のハーレム・パーティーメンバーのアンケートをしようと思います。

現状ハーレム・パーティー確定者

紫稀側

エヴァ様 アリカ姫 ちうたん アキラ
の4名。

ネギ側

のどか 夕映 まき絵 いいんちょ
の4名。

現状候補者

紫稀側

木乃香 せつちゃん 真名 茶々丸 桜子 刀子先生 千鶴 円
シスターシャークティール ゆーな 柿崎
の11名。

ネギ側

古 朝倉 パル 楓
の4名。

ハーレム除外者

明日菜^{アスナ} さよ

基本は候補者から確定への昇格アンケートです。

このキャラを紫稀側（ネギ側）のハーレム・パーティーに加えた
い！と言った意見も承ります。

締め切りは麻帆良入りする前、原作でナギが行方不明となる大戦
10年後の時までです。

出来るだけ1人1票でお願いします。

暫定的に現在候補者になっているメンバーのアーティファクト
案を募集です。

以下に付随する感じで案募集です。

ちうたん・茶々丸は電子・情報系

木乃香・千鶴は回復・補助系

アキラは水流操作系

上記5名のはアーティファクトの形状と能力

補助と言ってもどういった類のものか。敵の機動力を奪つ 味方の機動力を強化と言った感じをお願いします。

せつちゃん・刀子先生は刀剣類

シャークティーは十字架

ゆうな・真名は銃系

上記5名はそれぞれの形状のアーティファクトに付加する能力

せつちゃんなら草薙の剣を持たせて特殊能力を付加するとかいったところ。

円・柿崎・桜子は楽器類で補助系の能力

この3名はチア部でこびんロケットなので形状は楽器類で能力は補助系と言った感じですね。

それではみなさんお待ち兼ねの紫稀とエヴァ様の大戦期突入時の

ステータス紹介です。

明日中には公開出来るかと思えます。F a t e 風に紹介したほうがいいのかな？

紫稀側現状設定（前書き）

20回目でやっと主人公達の設定公開です。

Ultrider様、杉ちゃん様、柚木様、世界保険機関様、BOO
S様、ちや様、識様、
takag様、なおぼん様、赤白黄色様、黒部様、派遣社員様、月
神楽様

感想ご意見感謝です！！

紫稀側現状設定

名前 表 神儀紫稀 (かみぎ しき) 裏 零崎蒼識 (ぜろ
ざき あおしき)

性別 男 年齢 約3000歳(転生前込み)

種族 人間であり人外 不老不死

懸賞金 1500万ドル(ノワール時のみ)

容姿は能力により変幻自在、老若男女問わず

本来は『空の境界』の両儀 式の外見を男性よりに近づけて1
4、5歳くらいにした姿

身長は170cm前後、体重は60kg強、服装は基本着流し
に革ジャンという式リスペクト

大戦時に人前に出るときは狐の仮面を被る

ステータス値(数値はリリなの+ネギま+Fateのをごちゃ混ぜ
にしてみました)

筋力:A	(S)	【SSS】	『SSS+』
耐久:A	(S)	【SSS】	『SSS+』
敏捷:A	(SS)	【SSS】	『SSS+』
魔力:BB	(AA)	【SSS】	『SSS+』
気力:BB	(AA)	【SSS】	『SSS+』
神通:BB	(AA)	【SSS】	『SSS+』

幸運：SSSS+ (SSSS+) 【SSSS+】 『SSSS+』
+ 『E』

通常時はリミッター付き

() 内はリミッター時での【マギア・エレベア闇の魔法】 (種類を問わず)

【】内はリミッターのみ解放時

『』内はリミッター解放+【闇の魔法】 (上記と同種)

内はギャグ補正 基本的に突っ込む側や仕掛る側なので意味はない

リミッターは基本、魔力と気と神通力を優先的に制限 それに伴い
幸運値以外の能力値が劣化

スキル

剣術・武術などに准ずるもの

殆ど超一流レベルで習得済み だが使う機会があまりない

ネギま！の世界の魔法・技術

適正は全て 全種類使用可 オリジナル魔法もあり 今後使用予定

【闇の魔法】

肉体に魔法を取り込む 相応のリスク有なのだが人間であり人
外なのでリスクは無

基本は【無銘】に装填するので肉体へのリスクはなし

余程のことがない限り通常時・解放時であろうと肉体には取り
込まない

例外は治癒系を取り込むとき場合 その時はリスクは無
ある隠し玉もあるが今は未公開

【影の倉庫】

日用品と言われる類のものを収納

本来の姿で使うナイフはここに収納している

【神鳴流】

二の太刀を含む全てを使用可 免許皆伝

神鳴流を原型に自身にしか使えない神鳴流神儀型という亜流を
創る

リリなの世界の魔法

全て使用可 飛行魔法以外はあまり使わない

非殺傷設定のSLBはスライトブレイカーOHANASHIには便利

型月世界の魔法・魔術・能力

作者が知っているものだけ使用可

ゲート・オブ・バビロン

【王の財宝】武器貯蔵庫

アンリミテッド・ブレイド・ワークス

【無限の剣製】使うことはない

【真名解放】宝具を使用しないからやらない

【直死の魔眼】両儀式・遠野志貴を基にした外見のときのみ使用

【魔法】使うことすらない

【その他諸々】詳しくは知らないから使わない

西尾世界の異常・過負荷・能力
アブノーマル
マイナス

ほぼ使用可 基本使いどころがない

【見稽古】使いどころが少ないと言うか既がない

【異常】完成があるため既に完成形しかない だが使うことはあまりない

【過負荷】大嘘憑き、不慮の事故などを使えるが使わない 勝負が一方的になるため

とある世界の魔術・超能力・技術

ほぼ使用可だが殆ど出番はない

能力の使用は演算能力に依存するので魔力・気・神通力は消耗しない 強いて言うなら体力と精神力の消耗

技術は超の未来技術と同等かそれ以上

灼眼のシャナ世界の異能

フレイムヘイズの能力・宝具を使用可

能力の使用には魔力、宝具の使用には神通力を消耗

ぶつちやけ【闇の魔法】で再現できるから陽の目を見ることはない

【アラストール】コキユートスネギま！世界の魔法使用のための魔法発動体

炎属性の魔法の威力を強化 因みに創造の力で創ったものなので人格はない

【夜笠】創造で創った魔法・物理衝撃をそれなりに緩和するマントにダイオラマ魔法球の仕組みを流用してオリジナルを再現 【無銘】を始めとする武器を数種類収納

基本シャナを基にした外見の時のみ使用

その他の世界の能力・技術

BLEACHやONE PIECE、伝勇伝など使用可 だが使うことはない

ネギま！世界の魔法などで再現はする 特にBLEACHの斬魄刀とか

特殊スキル

創造

あらゆるものを創ることが出来る

仕組みなどの知識も同様に貰っているため完璧なものが出る

完全変化

外見を老若男女問わず完全に変化させることが出来る

副次的なもので他者の肉体を成長・退化させることも可（不老者にも作用する）

後者の使用は大戦終了後から原作1巻開始までの20年間に1度のみ予定

アスナには使用不可 薬などで成長を阻害されているため

【ノワール】モデルは白純里緒

【ブラン】モデルは荒耶宗蓮

【シャナ】モデルはシャナ 変化するときには肉体年齢15歳Ver

アカシック・レコードへのアクセス

あらゆるものの現在と過去の『記録』を閲覧可

稀に未来を閲覧することも出来るが基本、未来は閲覧不可
生物の『記憶』を閲覧することは出来ない

黄金律

お金に困らない 数値的にはSS相当

幸運

数値的には最大値 それでも麻帆良のラッキー仮面・椎名桜子のほうが高い

能力発現

他者にネギま！世界以外の能力を副作用なしで発現させることが出来る

とある世界の超能力など

【王の財宝】などといった強力ものは不可

【魔眼】劣化品のみを発現させる

現状使う必要性がない

上限値撤廃

鍛えれば鍛えるほど強くなる だが現状では殆ど意味がなくなっている

本契約・仮契約

バクティオー

紫稀の力が強力すぎるため従者にはなれず主にしかねない

ミニステル・マギ

マスター

紫稀と仮契約すると不老者になり、本契約すると不老に加え軽い

不死になる

本契約は破棄出来ないが、仮契約は破棄出来、破棄後不老性がなくなる

1人が本契約しても他の人との仮契約は無効にならない

本契約は最大7人、仮契約は20人くらいまではいける、多分アンケ次第で本契約人数は変更

現在、契約しているのは本契約でエヴァのみ

二つ名

紫稀時 現状はなし

ノワール時 【破滅を齎す黒】 【吸血姫の守護者】 【後手必殺】
カウンター・キル

ブラン時 【白き救済者】 【幻の聖人】

シヤナ時 【炎髪灼眼】

名前 エヴァンジェリン・A・K・M・神儀 (エヴァンジェリン・アタナシア・キティ・マクダウエル・かみぎ) 大戦時 零崎音織 (ぜろざき おとおり)

性別 女 年齢 約600歳

種族 吸血鬼(真祖) 不老不死

懸賞金は1000万ドル

容姿は原作どおり

大戦時には紫稀と同じく狐の仮面を被る

ステータス値

筋力：S	(SSS+)	【SSS+】
耐久：AAA+	(SSS)	【SSS+】
敏捷：AAA+	(SSS)	【SSS+】
魔力：SS	(SSS+)	【SSS+】

気力：A A A	(S S +)	【 S S S + 】
神通：A A +	(S S)	【 S S S 】
幸運：S S	(S S)	【 S S 】
		E

基本リミッターなし

() 内は【闇の魔法】使用時

【】内は紫稀からの供給時

神通力は紫稀との本契約によるもの
 幸運値の高さも本契約によるもの

スキル

剣術・武術に准ずるもの

基本的に使用可

メインは合気柔術 錬度は既に超一流

合気柔術以外の錬度は達人クラスの2、3歩手前

超一流 >>> 達人 >>> 一流 >>> 二流 >>> 三流 >
 >>>> 付け焼刃 > 素人

錬度的にはこんな感じ

ネギま！世界の魔法

適正は氷・闇 一応全種類使用可 適性により威力などが増減

氷・闇 >> 水 >> 雷・風 > 土 >>> 光・火・癒

【闇の魔法】

肉体に魔法を取り込む 吸血鬼の真祖なため肉体的リスクは無
取り込むのは氷・闇系統が主流 たまに風や雷も取り込む

本契約・仮契約

紫稀と本契約

名前表記 ATHANASIA ECATERINA MACDO
VELL EVANGELINA

称号 月に愛されし者

色調 虹 (prisma)

徳性 愛 (caritas)

方位 北 (septentrio)

星辰性 月 (Luna)

アーティファクト 月の加護

形状は防具類なら自由に变化する

能力

名の通り夜間に最大性能を發揮、日中は1ランクダウン

1. 最大で準最強クラスの魔法攻撃を無力化、最強位下位クラスからは緩和する

日中では上位の上クラスまでを無力化^効

2. 対象を不可視にする 同時に気配遮断なども発動 最大で最強位中位クラス相応まで發揮

ただし気配遮断は日中に最大性能を發揮する

これは日中でも月が出ているのに見えにくいというのを逆手に
とっている

契約

チャチャゼロとドール契約

二つ名

ダーク・エヴァンジェル

【闇の福音】 【人形使い】 【不死の魔法使い】 【童姿の闇の魔王】

マガ・ノスフェラトウ

他

名前 チヤチヤゼロ

性別 不明 年齢 約500から600歳

種族 自動人形

懸賞金は300万ドル

ステータス値

筋力：A A A +

耐久：A A +

敏捷：S S

エヴァから供給される魔力量によって増減する
人形だから魔力も気も神通力も幸運も関係なし

スキル

剣術？

とりあえず切断に関しては超一級クラスと達人クラスの間

契約

エヴァとドール契約

二つ名

【殺戮人形】キリングドール 【吸血姫の従者】

紫稀側現状設定（後書き）

書いてみて、改めて分かった。

紫稀がバグ以上にひどいことに！

勝てるやついるのか？

あつ、エヴァがいるか、殺し合いじゃない意味で！！

アンケート現状 7 / 20 / 14時

紫稀側

5票 せつちゃん

4票 木乃香・茶々丸

3票 真名・刀子先生・シャークティ

2票 千鶴・円・桜子・ゆーな

1票 古・アスナ

このせつセットで合計9票にして確定でよくな？

ネギ側

1票 アーニヤ・木乃香・古・楓・朝倉

小太郎側

1票 夏美 決定でよくな？

出来るだけ1人1票をお願いします。

第18話（前書き）

【お気に入り登録】 300件突破！！

黒部様、悪・即・斬様、パンチ様、ユウト様、潔魚様、なおぼん様
感想ご意見感謝です。

大戦期突入初めての本編です。
それでは18話、どうぞ。

第18話

Side・紫稀

私はキティを連れて麻帆良に来ている。麻帆良祭の期間だと知っていたからだ。

と言うより私達はいつでもここに来ていいと思うんだがね、土地の持ち主として。

ただ土地を貸しているだけなのに、借りている側の正義の魔法使い（笑）たちが我が物顔で歩いているのが気に入らないな。いっちょ、シメるかなー。いや、やめとこう。やることあるし。

今年は1978年。原作1巻開始の24年前だ。

原作で描かれていた麻帆良祭の武道会で超は25年前と書いていたのだから間違いなく今回の武道会にナギは出場するだろう。絶対にすると思うんだ、あの自称最強なら。

だから、世界には自分より強者がいることを教えてやろうと思うんだ、無手だけで。

武道会の際は手加減に手加減を重ねてわざと引き分けに持つていこうと思うんだ、うん。

そして武道会が終わったら人目がないところでボコボコにしてやろうと思うんだ、成長させるために。

「てことで、いってきまーす」

「おい！待て！……てことでってどういう意味だ！……どこに行く気だ！？」

おいおいキティ。今から手加減に手加減を重ねて一般人より少し上のレベルの身体能力で武道会に無手で参加してくるんだよ、調子に乗った魔法使いのガキにお灸を吸えるために。

「いやいや！どついう理屈だよ！？それと人前なのにその名で呼ぶな！！」

「いいじゃないかよ、キティ。可愛いんだから」

あつ、真つ赤になった。いつも沢山言ってるのに人前だと恥ずかしいのかな？まあいいや。お姫様抱っこして連れて行こうつと。

『キヤー』 『お姫様抱っこなんて初めて生でみたー』 『うらやましー』

なんだか周りが騒がしいな。どうでもいいか。

さてと武道会に参加しますかねーつと。キティに応援してもらおうつと。いや、決勝を引き分けにする気なんだから応援意味ないか。

Side・end

Side・ナギ

よつす。俺はナギ・スプリングフィールド、10歳だ。

本来10歳なら魔法学校で勉強するんだが、その勉強の仕方が俺

に合わなくて中退してきたんだ。そして俺は今、麻帆良ってところに来ている。なんでもじいさんがここの学園関係者と友達らしいんだ。

それでやってきたら麻帆良祭って言う学校でやるお祭りの時期だったらしい。じいさんの友達の名前は聞いてメモしてあるから後回しでもいいと思ってお祭りを楽しんできるところだ。

そんで、小耳に挟んだんだが武道会って言うのがあるらしいんだ。詳しく聞いてみたところ何でも俺たち、魔法使いのための大会らしい。それならつえーやつがいるかと思っただけで参加することにしたんだが。

はつきり言っただけで拍子抜けだった。呪文は禁止って話だったから素手だけで戦ったんだ。だけど、予選から準決勝の相手は瞬動で近づいて一発殴っただけで終わっちゃった。張り合いがなさ過ぎるんだ。この様子じゃ決勝の相手も弱いんだろうな。つまんねーぜ。こうなったら速攻で終わらせて武者修行の旅に戻るかな。

あーあ、つえーやつと戦いたいぜ……。

Side・end

Side・other

『今大会も残すところあと一試合、決勝戦だけとなりました！決勝まで駒を進めたのは二人の少年！どちらが今大会最強の名を手に入れるのか！ではそろそろ入場してもらいましょう。まずはここまで一撃で対戦相手を圧倒してきた10歳の少年、ナギ・スプリングフ

イールド選手

「ッ！！」

アナウンサーの言葉と共に入場するナギに観客は興奮して叫ぶ。

『そしてこちらも少年！名前以外は不明ですが決勝まで上がってこられる実力は本物！神儀紫稀選手』
「ッ！！」

そして紫稀の登場により更に観客の盛り上がりは最高潮に達する。

『それでは決勝戦』

「おいガキ」

「あ？んだよ？」

紫稀の言葉に構えなら返事をするナギ。

「あんまり油断してると」

『Fight！！』

「終わるぞ？」

「なっ！？」

試合開始と共に紫稀は瞬動で一気にナギの懐に入り右拳で殴った。ナギは殴られた勢いのまま舞台端まで飛ばされるが、耐え切る。

「お前っ！まさか今までの試合全て手加減してたのか！？」

「あー今までのやつらでは私に本気を出させることは不可能だからな。手加減に手加減を重ねて自分と同格だと思わせてたんだよ」

紫稀に瞬動で迫りながらナギは疑問を口に出す。

ナギの近いとも遠いとも分からない疑問に、律儀に答える紫稀。

その言葉を理解したのか強敵を前にしたかのような笑みをこぼすナギ。

「だったら本気で来いよ！つえーやつと戦いたかったんだ！」

「やれやれ、本気ってどういう本気だよ。無手での本気か？武器で（エモ）の本気か？折角私が手加減に手加減を重ねてこの大会を引き分けて終わらせてやるうと言っのに。あー面倒だ。飽きた」

何だかんだ話しながらも瞬動を駆使しながらお互い攻撃しては防がれて、防いでは攻撃してを繰り返す。それは試合が終了する15分間続いたのだった。

観客やアナウンサーを置いてけぼりにした高速戦闘による試合は引き分けて終わり、今大会の優勝は二人という形で幕を閉じたのだった。

S i d e ・ e n d

S i d e ・ 紫稀

思ったよりナギが弱かった。いや、私が圧倒的過ぎるのか。

私はナギの実力に結構期待していたので裏切られたような気分になった。

だから表彰式が終わってすぐ、キティと合流して再び麻帆良祭を楽しむことにした。

したのだが。思わぬ邪魔が入った。

「なーなー。今度は使える手札を使って全力で勝負しよーぜ？」

そう、ナギだ。ナギに邪魔されている。

どうやらナギは私が魔法を使えると気付いたようで、しつこく勝負、勝負と言ってくる。

「勝負しよーぜー？いいだろー？なー？」

「えーい、貴様さつきからしつこいしうるさいぞ！？邪魔だ！！どこかいけ！？」

キティが遂にキレました。怖いです。でも可愛いな。写真写真と。

「シキも何をしている！？お前も何か言っただれ！？」

「えーとキティの写真撮っている。それと言おうとしたら先にキティが言ったから」

「他人の前でその名を呼ぶなー！！」

キティはからかうと楽しいからなー。他人がキティをからかったら殺すけど、私のは愛があるからいいよね？」

「何をいつとるかー！！人をからかうな！？」

「あれ？まさか口に出てた？まあーいいか、本音だし」

「なーなー勝負してくれよー」

あれ？お前まだいたの？忘れてたわ。

「ひでー！ずっといたのにお前らが急に二人で話し始めたんだろうが！？」

「私も忘れていた。とつとと失せろ、ガキ」

「あ？お前こそガキじゃねーか」

「殺すぞ？私のほうが貴様より年上だ」

「あつそ。どうでもいいわ。そんで勝負してくれよー」

「あーもうしつこいな！？一回だけ勝負してやっから静かにしろ！？」

「おつしゃーんじゃ、早速やるーぜ！？」

「待て、ここじゃ人目がある。ついてこい」

いい場所あつたかなー？

Side・end

紫稀はナギについて来るように言って、貸し出してない土地の方に来ていた。

「この辺でいいか。ここなら麻帆良の魔法使い達は来れないから存分に出来るぞ」

（そういえばここでまともな戦闘するの初めてか？あの時は戦闘と言っよりも蹂躪だったしな）

貸していない麻帆良の3分の1の土地には紫稀とエヴァと二人が許容した人間以外は入れないようになっている。

今回は麻帆良にいる魔法使い達に横槍を入れられたくないためこっちにまでやってきたのだ。

「んじゃ、始めますか。希望通り手加減に手加減を重ねてではなく手加減だけしてやるよ」

そう言って紫稀は【ゲート・オブ・ハビロン王の財宝】から【ころみずとつ不殺刀】を取り出して構える。

「それじゃ俺からいくぜ。ト・シユンボライオンディアコネット・祇ギレウ・ウーラニオ土ビギネア契約により我に従えルイス・ケラウホス・ティーターナス・フティレイン神殿の王 来れ巨神を滅ぼす燃え立つ雷霆」

どこからかアンチヨコを取り出しながら呪文を詠唱するナギ。それに対して紫稀は。

「うへっ、アンチヨコないと魔法も使えないのかよ」

「うるせー。」

ヘカトントタキス・カイ キーリアキス アストラブサト
百重千重と重なりて走れよ稲妻！」

そんな漫才みたいなのをしつつナギが呪文を唱え終わるのを待ち、狙うよう紫稀も魔法を放つ。

「『『キーリブル・アストラベー
千の雷！』』」

お互いの『千の雷』が拮抗したのは僅か一瞬。その後は紫稀の雷がナギの雷を飲み込み消える。

「おいおい、無詠唱で俺の完全詠唱の『千の雷』に打ち勝つのかよ」

「当たり前だ、積み重ねてきた歳月が違う。と言うかお前はアンチヨコやめろよ。だから術式が滅茶苦茶で威力が下がるんだろっが」

「うっせーな！覚えんのが面倒なんだよ！？それに魔法なんて使えればいいじゃねーか」

紫稀の指摘に軽く逆切れするナギ。そしてその他の魔法も入り交じった近接戦闘が始まった。

と言っても紫稀は魔法は魔法の射手サギタ・マギカしか使っておらず、殆ど【不殺刀】か素手で攻撃をしたり防いでいる。

それに対してナギは、ヨウイス・テンベスターズ・フネゾオエツエユコス『雷の暴風』や『雷の斧』、サギタ・マギカ『魔法の射手』を詠唱無詠唱と交えながら紫稀に迫るが有効打どころか受け流されたり相殺される。

それをそれなりに離れた場所で（アーティファクトを使用していれば近くてもほぼ安全）観戦していたエヴァとチャチャゼロ。

「中級以上の魔法の術式が殆ど意味を成してないな。あれでは魔力で無理やり発動させてるようなものじゃないか」

「ケケケ、アンナ動キジャア、旦那二八何時マデ経ツテモ勝テナイナ。旦那ハアソソンドルゼ」

そう言いながら二人はこの状況を肴に酒を飲んでいた。後でそれを知った紫稀は仲間はずれにされたと言いながら泣いたとかいないとか。どっちか知らんけど。

「なあー飽きたんだがもうやめないか？」

「いやだね。やめるにしても一発くらいは当ててからだ!」

「あつそ。面倒だから次で最後にしようか」

「そうだな。残った全力で一矢報いてやるぜ!？」

ナギの方がそろそろ限界だったようで、紫稀が提案するとそれに乗り最後の勝負の準備をするナギ。

ト・シユンホライオネリアコネート・ギギレウ・ウーラニオエビギ多ヲイタルース・ケラウネホス・ティテーナス・フティレイイン
「。契約により我に従え高殿の王 来れ巨神を滅ぼす燃え立つ雷霆」

「

残っている魔力を全て使い呪文詠唱をするナギを尻目に紫稀も最後の一撃の準備をする。

「契約に従い我に従え闇の魔王 来れ光を閉ざす闇」

「ヘカトインタキス・カイ キーリアキス アストラフサト
百重千重と重なりて走れよ稲妻！」

「全てを飲み込みし暗き黒！」

「キーリブル・アストラバー
『千の雷！』」

「『昏き闇！』」

ナギは最初に使った『千の雷』にこめた魔力の2倍を込めた『千の雷』を。

紫稀はそれよりも若干少ない魔力を込めた『昏き闇』。

いつもなら紫稀の『昏き闇』が圧倒していただろう。だが、今回は紫稀は遊んでいたためナギが込めた魔力よりも若干少ない魔力を込めて迎え撃った。

だからナギの『千の雷』と、紫稀の『昏き闇』は拮抗した。そしてその拮抗は爆発と共に終わり、周辺は爆煙に包まれた。

数分後煙が晴れたときには二人とも立っていた。

しかし二人の状態は明らかに正反対。片やボロボロ、片やほぼ無傷。勝敗は完全に決していた。

「ふーん。爆発の余波とはいえ私の体に傷を数個作るか。まあ十分なんじゃないか？」

「なんで、あんな、爆発の中で、ほぼ無傷、なんだよ、てめえ！」

紫稀は冷静に状況を分析し、ナギはあまりの理不尽さに吼えていた。

「そう吼えるな。過程はどうあれ私に一発当てることが出来たんだ。十分だろ？やめていいよな？」

「納得できねーけど、もうそれでいいわっ！！流石にもう動けねーし」

そう言っただけは仰向けに倒れる。

「で、お前はアンチヨコやめとけよ？いつまでもアンチヨコ使ってるようじゃいつか死に掛けるぞ？」

「そう、だな。頑張っつて、みるわ・・・」

紫稀の指摘に答えつつも力尽きて眠りだしたナギ。それをどうしたものかと眺める紫稀。

そして、「仕方がないか」と言っただけはナギを持ち上げエヴァの元に向かう。

その後エヴァと合流した紫稀は貸している側の土地に建てられた宿泊施設に向かい個室と二人部屋の二部屋を取り、個室の方にナギを放り込んでメモを残してエヴァと二人部屋の方に向かうのであった。二部屋とも紫稀が武道会の賞金で払ったわけなのだ。

因みにナギは朝まで起きることはなく、起きたときに「夕飯食い損ねたー」と叫んだとか叫んでないとか。

S i d e · e n d

第18話（後書き）

最初からナギが上位の上クラスにいるわけで。感覚系の天才ってマジ手に負えねーです。

アンケート現状7/20/19時54分

紫稀側

- 7票 せつちゃん
- 6票 木乃香
- 5票 茶々丸
- 4票 真名・刀子先生・シャークティ・ゆーな
- 3票 桜子
- 2票 千鶴・円
- 1票 古・アスナ

このせつが人気過ぎる！

ネギ側

- 1票 アーニヤ・木乃香・古・楓・朝倉
- 小太郎側
- 1票 夏美 決定でよくな？

出来るだけ1人1票でお願いします。

アーティファクト案もまだまだ募集中です。

第19話（前書き）

【総PV】 21万【総ユニーク】 2万7千突破！！

三異常世様、世界保険機関様、エース様、杉やん様、カリン様、
彼岸花様、ちゃん様、トキ様、ultrider様、なおぼん様、
派遣社員様

感想ご意見感謝です。

ゼロの出番が・・・！！
そんな19話、どうぞ。

第19話

Side・紫稀

昨日、麻帆良祭の「まほら武道会」でナギと無手での試合後、手札の制限なしで勝負。圧倒的な力量差で勝利するも、キティとのイチヤイチャデートを邪魔された。因みにされてもいる。

はつきり言おう！あいつ殺^{ナギ}つちや^ヤつていい？

「シキ。何そんな邪悪な顔で笑っているんだ？」

おつと暴走するところだった。キティありがとう。うっかり麻帆良ごとナギを殺るところだったよ。

「キティの愛らしさを再確認していた！！」

あつ、つい本音が！！

「い、いきなり天下の往来で何を言っているんだ！？」

人前で言われるとまだ真っ赤になるんだね、可愛いからいいけど。

紫稀が大分壊れてきたな・・・

壊してんのお前だろーが！！

とりあえず現実逃避はやめることにしよう。幻聴まで聞こえてきたし。

何故かナギがまたついてきている。ある意味悪霊も真つ青な憑きつぶりだと思っ、念的な意味で。

「で、お前はいつまで来るつもりだ、ガキ？」

「そつだ。さつさと出てこんか」

「気付いてたんならもつと早く言えよな。意味ない尾行してたじゃねーか」

こいつ人の話聞いてないだろ・・・？私は「何故、ついてくるのか」と聞いているのに、何で質問に質問で返すかな？鳥頭か？鳥頭だからか？いや流石に鳥に失礼だな、うん。

「なんか気に触るような気配を感じたが、まあいいか。で、一緒に魔法世界行かないか？」

「パードウン？なんで？その台詞を言えるのは普通はこつちだろ。」

「どうせ暇してんだろ？だったら一緒に魔法世界で暴れないか？」

意味が分かんねー！！

まず、私が強いから一緒に旅をして自分も強くなるつ。つて考えはまだ分かる。分かりたくないけど！！

だが何故自分を負かせた相手を誘うんだ？謎だ。果てしなく謎だ！？あれ？別に謎じゃないのか？

「キティ、どうする？」

困ったときは愛しのキティちゃん!! さあー私達の進むべき道を示してくれ!?

「何か変なことを考えられたような気がする。まあー別にいいんじゃないか? 暇なのは確かだし」

あれ? まさかの一緒フラグ? てつきり「貴様なんぞと一緒に旅なとせん!」ってナギに言ってくれると思ってたのに……。

「しょうがない。キティがいいなら私が断る意味もないしな」

「やつりー。これからもちよくちよく勝負してくれるってことでいいんだよな?」

「やっぱりこいつ駄目だ……。早く何とかしないと。この戦闘脳バトルマニア……。

「で、魔法世界への行き方は知っているのか?」

私の能力で行くのは簡単だけど手札は出来るだけ露見しないようにしないとね!! ついでに正体も気付かれないように認識阻害の魔法を掛けた狐の面をキティとお揃いで被ろう。

「どっかにゲートがあって、それで行くのは知ってるけどよくは知らん」

「お前、本当に駄目だな……」

「うっせっ!! 適当に魔力解放してぶらついてりゃその辺のこと知

「つてるやつに会えるだろ」

行き当たりばったり過ぎる……。いや、もう何も言つまい。こいつの勝手にさせよう。こっちに被害が来ない限りは。

「因みに私達は解放しないからな？お前だけ解放して誘き出せよ？」

「俺だけ疲れるじゃねーかよー!!」

残念ながらお前に拒否権は存在しない!!

Side・end

Side・????

私の名前は青山詠春。神鳴流宗家・青山家の者だ。

私は、婚約者である近衛木乃璃殿の父親である近衛近右衛門殿に会いに関東魔法協会のある麻帆良に来ている。

近右衛門殿は関西呪術協会と関東魔法協会の友誼のために関東魔法協会の幹部の役職についている。

ちょうど、お互いの用事が済んだので「婚約者の父親」と「娘の婚約者」として世界樹に近い広場でお酒を飲んでいた。

その時だった。いきなり膨大な魔力が現れこちらのほうへ向かってきていた。

「近右衛門殿、この魔力はかなりの使い手と見えます。どうしまし
よう?」

「うむ、そうじゃな。他の魔法先生・魔法生徒達は下がらせてワシ
ら二人でどうにかしよう」

確かに下手に力のある魔法使い達では返り討ちに合うのが関の山
だろう。それならいつそ私達で対処したほうが被害が少なくすむか。

「そうですね。麻帆良に害をなすならなんとかせねばなりませんね」

。とは言ったものの、最悪の事態にならなければいいのだがな・・・

S i d e ・ e n d

S i d e ・ 紫 稀

私達はナギに魔力を解放させてながら世界樹に近い広場に向かっ
ている。とりあえず周りの魔法使い達は遠巻きに観察しているよう
だな。

広場の方には気配が二人分あるからそちらが対処するつもりなん
だろう。恐らくそれなりの実力者であることは分かりきっているな。
私的には意味がないが。

「さて、おぬしらは一体何者じゃ?」

おつ、ぬらりひよんじゃん！既にこの時代にはこっちにいたのか。

「（なあーシキ。あいつって人間か？妖怪の類にしか見えないのだから？）」

初見なら誰だってそう思うよね？よし、人間か調べてみよう。この時の為にアレを創っておいたのだからな。

「来い、【袷々切丸】」

手元に【袷々切丸】を呼び出してぬらりひよんの背後へ瞬動して一閃。

「ふおつ！？」

手ごたえがないな……。

「本当に人間なんだ……。これでぬらりひよんだったら良かったのに……」

「お主、いきなり何をやるか！？って、フォツ？わし、斬られたはずじゃ？なら何故わしは平気なんじゃ？」

そりゃそうだろ。妖怪だと思つて斬つたんだ。本当に人間でした！。なんてオチで死なすわけにいかんだろうが。

「この刀の名は【袷々切丸】。人外のみを斬り伏せ、人間を護るための刀だ。人間を斬ろうとしても傷すらつかん」

「な、なんじゃ、そうじゃったのか。それならいきなり攻撃しない

「でくれんかのう？」

「知ったことか。貴様は妖怪の類より悪質な思考をしそうだ、元関西呪術協会所属、現関東魔法協会所属の近衛近右衛門？」

「何故わしの名を知っておる！？一体何者じゃ！？」

こいつ世話してやったこと忘れたのか？最低だな。

「失礼なヤツだな。元であろうと関西の人間だったのなら私のことを知らんはずがないだろう。特にその神鳴流宗家の青山家の坊ちゃんは今更だ」

「何故、私の実家のことも！？それに神鳴流のことも知っているだと？一体何者だ！？」

えー。せっかく神鳴流の名前出したのに気付かないの？青山家もお仕舞いかなー？

「お前達魔法使いが麻帆良を我が物顔で歩いているのは虫唾が走るな、いくら許可していたとしても」

「どづいつ意味じゃ？」

お前に発言権はない。黙れ、ぬらりひょん！？

「そして青山詠春。私に刀を向けるか。ならば私の剣技を見せてやるぞ」

あれ？どうしてこんな流れに・・・？ていうかこれじゃ私、悪役

じゃん！！なにやってんだ私！？

Side・end

Side・other

その場のノリで悪ふざけをした紫稀はそのまま詠春と剣術で勝負することになった。と言うか自業自得である。

「うるええ！！」

声を出して、地の文に突っ込むなよ。痛い子に見られるぞ？

(ぐっ！？)

因みにこんな漫才中でも瞬動を駆使した高速戦闘は行われている。

詠春は斬岩剣と斬鉄閃や百烈桜華斬、果ては雷鳴剣で攻めてくる。だが紫稀は神鳴流の奥義はまだ一度も使用していない。純粋な剣術のみで凌いでいるのだ。

そんな感じに中々流れが動かないのをどうにかしようとして詠春は決戦奥義を使おうとしていた。その時だった。エヴァが口を開く。

「いい加減にしろ、シキ。いつまで遊んでる。本物を分かせてやれ！」

「やれやれ。せっかく遊んでいたっていうのに、無粋だな。愛しの

キティ。まあーいいさ。青山詠春。本物と言つものを教えてやろつ」
詠春は、紫稀の雰囲気さがさっきまでのとは違つのを察し先手を取
ろつと攻める。

「神鳴流決戦奥義」

だが紫稀もそれと同時に動き出す。そして宣言する、同じ神鳴流
の技の名を。

「神鳴流神儀型雷系最終奥義」

紫稀の宣言に驚愕の表情を浮かべる詠春と近右衛門。しかしそれ
でもお互いの奥義は放たれる。

「真・雷光剣！！」

「越・天雷剣！！」

強大な雷のぶつかりあいには凄まじい爆発を巻き起こす。だが、そ
れらは全てエヴァが即座に張った結界により被害は広場以外には出
なかつた。

爆発の中心地点には二つの人影。片方は立ち、片方は倒れていた。
立っているのは紫稀で、倒れているのは詠春。

紫稀の両腕には数筋の傷跡が出来ていた。まるで300年ほど昔
の再現とも言える。

「青山詠春。今お前は青山素香を超えた。歴代2位？いや鶴子がいるから3位か。今からお前は歴代3位を名乗れ」

「そうですか。やはりあなたは。しかし今もある違和感は一体……？」

答えにたどり着いた詠春だが未だにある違和感の正体は分からない。そんな時エヴァの口から出る言葉に紫稀は愕然とするしかなかった。

「おい、シキ。今更言つのも何なんだがな。……お前認識阻害の魔法解いてないぞ？」

「えっ……？」

Side・end

Side・紫稀

「おい、シキ。今更言つのも何なんだがな。……お前認識阻害の魔法解いてないぞ？」

「えっ……？」

「じゃーなにか？私が今まで悪役やってたのは遠坂家の呪いかりなわけだ……」

「鬱だ、死のう……」orz

「何をいきなり死のうとするか！！というかお前は死ねんだろーが！？」

そういえばそうだった。というかそろそろ認識障害解こう・・・。

「さて今認識障害を解いたんだが、お前ら二人、理解できたな？」

「は、はいっ！！神鳴流史上最強の座の神儀紫稀殿！！」

「う、うむっ！！まさかここで生ける伝説に会えるとはおもわなんだ」

生ける伝説？一体なんのことだ？ていうかお前とは前にあったことがあるぞ、じじい？

「僅か一月で神鳴流を免許皆伝し、当時人としては最強だった青山素香を倒し、新しい型を創ったと」

そんな大げさなものかね？

「免許皆伝はともかく素香殿を倒し新たな技を創るなんて凄いの一言しか出ません！！」

「えー。でも素香は初対面の時はかなりの格下だったしなー」

「確かにシキの2割ほどでも耐えるのが精々だったな」

「それは本当ですか！？？」

「本当だけど？素香が当時歴代2位に、今でも歴代4位にいれるのは私が何度も手合わせをしてやってたからだしな」

いやー私もまさかあそこまで強くなるとは思ってなかったもんね！今も生きてたら普通に2位のままだっただと思っよ、うん、絶対。

「まあー、その辺の話は置いておいて。本題に入ろう。おいっ、ナギ。お前が提案したんだ、お前から事情説明しろよ？」

「あ、ああー分かった」

そんな感じでナギが事情を説明し、最終的に近衛と青山の名前を使い、イギリス・ウエールズのゲートを通れるように手配してくれるらしい。

武者修行のために魔法世界に行くとナギが言ったときに、詠春が「私も行きます！」って言ったときは驚いた。いや、原作でもこんな流れだったのかもしれない。あとは私はいくからでもあるんだろつな。男に付き纏われても嫌悪感しか感じないんだけど・・・。

まあーゲートが開くまでまだ暫く日にちがあるらしくて、一旦京都に行くことに。

何故か私のことに気付くと、神鳴流の師範代や門下生がはしゃいでいたけど、アレは一体なんだったんだ？いや、深く考えない方がいいな、絶対。

そして気付いたら宴会になっていた。どんちゃん騒ぎの大宴会と

か個人的にどうでもいいし！でも和食をたらふく食べたのは良かったな。

京都での大宴会から数日、今私はキティとナギと詠春と共にウェールズのゲートにいる。もうすぐゲートが開くのだ。実は私、ゲート初体験だったりする。だっていつもはスキマ移動が各地に配置している『扉』^{ゲート}で移動してたんだもの。

そんじゃー、魔法世界へ行きますかー！

S i d e . e n d

第19話（後書き）

紫稀エ・・・。

認識障害を解き忘れるなんて・・・orz

近右衛門が妖怪だと思って斬りかかった。後悔も反省もしていない！

アンケート現状7/21/07時

紫稀側

7票 せつちゃん・真名

6票 木乃香・千鶴

5票 茶々丸

4票 刀子先生・シャークティ・ゆうな

3票 桜子・円

2票 アスナ

1票 古・さよ・愛衣

真名と千鶴が上がってきた！怒涛の展開だ！？

ネギ側

2票 楓

1票 アーニヤ・木乃香・古・朝倉・鳴滝姉妹

候補者が上がった面々のアーティファクト案まだまだ募集中なり。
千鶴ってどんなのが合うんだろう？

第20話（前書き）

ぬらりひよん疑惑なくす必要なかったな・・・。
なくすにしてももう少し後の方が楽しくなったのに、何故早まった私！！

赤白黄色様、COCO様、アルス様、かのこ様、kira2001
76様、

Cro-C様、ブルック様、kinji様、Dai様、なおぼん様
感想ご意見感謝です。

あとがきに紫稀を登場させて会話するべき？分からん。

少しキンクリしてまた少しキンクリします。
そんな20話、どうぞ。

第20話

Side・紫稀

ナギたちと共に魔法世界にきてずいぶん時間が経った。

いつ頃からか自分たちのことを『アルブレオ紅き翼』と名乗り、自称【千のサウザ呪文の男】なナギに、知らない間に仲間になっていたアルブレオ・イマ。

注意すべきはやはりアルブレオだろう。ことあるごとに私のキテイをいやらしい目で眺めやがって！いつか後悔させてやろうと思う。死んだ方がましだと思えるくらいには。

そんで今、私達は戦場にいる。

「くっ、遅かったか。ちっ・・・気に入らねえぜ」

現在帝国側が連合側に攻め入っている。帝国の主な兵力は鬼神兵と艦隊。

「黄昏の姫御子・・・なんだってそんなもん!？」

「歴史と伝統だけが売りの小国に他に手はないでしょう」

「だが王族だろ!？まだ小さな女の子だって話も聞かぬぜ」

「冷静になれナギ。やかましいぞ」

「俺は常に冷静だっつーの」

「どこが冷静だ。怒りの感情に飲み込まれかけてるじゃないか」

「そつだ。冷静さを欠けば死ぬのが戦場だぞ」

喋りながら戦場を翔けるってのもあれだと思っけどな。死なないから大丈夫でしょう。

「戦争ですからね・・・向こうの真の目的もおそらく。それに少女の年齢も私同様見ためどおりとは・・・」

「その通りだ、アルビレオ」

「アオシキは黄昏の姫御子について何か知っているのですか!？」

戦争中は人前では狐の仮面を被って零崎蒼識ゼロザキアオシキと呼ばせるようにしている。キテイの方も同じく仮面被ってもらって零崎音織ゼロザキオトオリと呼ばせてる。ダイク・エヴァンジェル【闇の福音】の音から取ってみた。

「ああー。彼女の見た目が少女のままなら恐らく成長阻害といった類の薬や魔法を掛けられているはずだ。なんたって私が彼女とあったのは100年ほど昔だからな」

あの鬼神兵が向かっている塔はまさか!？

「喋ってる暇はなさそつだ。ナギ先行してあの塔に向かっている鬼神兵を駆除しろ!」

「へいへい、人遣いが荒いぜ。一応俺がリーダーのはずなんだがな」

そうはいつでもあまりリーダーぽくないわけだしな。

よしっ。ナギはきちんと阻止できた様だな。俺たちも急がないと。

「そんなガキまでかつぎ出すこたねえ。後は俺に任せな」

「お・・・お前は・・・赤き翼・・・千の呪文の・・・」

「そう！！ナギ・スプリングフィールド！！またの名をサウザンドマスター」

「自分で言ったよコイツ・・・」

「フッフ、ノリノリですね」

「うわぁー痛い子がいるわー」

「全くだな。こんなやつと私達を同格扱いされたくない」

本当本当。

あつ。そういえばナギはまだ『千の雷』キリーブル・アストロペーはまだアンチヨコないと無理だったつけ・・・。

「百重千重と重なりて走れよ稲妻・・・」ヘカトンタキス・カイ キーリアキス アストラフサト

無詠唱をあわせてやるか。

「行くぜオラアツ！！」

「『千の雷』」
キリーブル・アストラベ

なんか後ろの魔法使いが驚愕というか驚いてるけどうざいな。詠春とアルビレオもきちんとしてるようで、関心関心。キティはちゃんと働いてくれるの分かってるもんね!!

「安心しな俺達が全て終わらせてやる」

さてナギが話してる隙にアスナのところへ行こうと。

「な・・・しかし・・・敵の数を見たのか！？お前達に何が・・・」

「俺を誰だと思ってるジジイ」

馬鹿じゃないの？

「俺が最強の魔法使いだ。魔法学校だきや中退だがな」

人間としては最強だと思うよ？全世界最強は私だろうけど。

「あんちよこ見ながら呪文唱えてるあなたが言っても今ひとつ説得力がありませんね。フッフッフッ」

「そこの変態の言うとおりだな。せめて得意魔法だけでもあんちよこなしで唱えられるようになれ」

「あーあーるせーよ。だから中退っつてんだろ」

キティとアルビレオの言うとおりだと思うよ？流石にそろそろあんちよこは卒業してくれよ。

「るせーつつつてんだるオトオリ、アル。俺は俺のやりたいよーにやってるだけだバーカ」

「お前の方がバカだけだな。さて、アスナ久しぶりだね。約100年ぶりになるかな？」

「お前はっ!?! 【全てを統べる者】!!」

モブの癖に空気読まないとか……。それになんだ、その厨二病な二つ名は……。

「シ……キ……?」

おっと。鬱ってる場合じゃなかった。

「そうだよ、シキだ。元気してたかな？」

「ワカ……ラ……ナイ」

「嬢ちゃん名前は？」

「ナ……マエ……?」

ナギエ……。お前も少しは空気読んでくれよ……。

それにしても精神や感情の阻害関係の薬とかも使ってるな。ふざけたことをするようになったもんだな。

「アスナ……アスナ・ウェスペリーナ・テオタナシア・エンテオフユシア」

「なげーなオイ。けど・・・アスナか。いい名前だ」

「アスナ待ってて」

「いくぞ、アオシキ！オトオリ！アル！詠春！」

「憂さ晴らしにはなるかな？」

「なつてもらわんと困る」

「はいはい」

「やれやれ」

「敵は雑魚ばかりだ。行動不能で充分だぜ」

それ力による蹂躪。戦いというのもおこがましかった。

私とキティとナギで『千の雷』キリーブル・アストラ・イラニア・フロゴシス『燃える天空』コスミケー・カタストロファイといった広域殲滅呪文を唱え、アルビレオが重力魔法を駆使し、詠春が広範囲用の神鳴流奥義を使用する。

爺どもは私達が戦闘中にアスナを下げたか。また空間魔法を使った牢獄に繋ぎとめてるんだろっ！戦争が終わったら必ず自由にさせてやる！！

「アオシキ。落ち着け。さっきの魔法使いが外道なのは分かったがここで怒っていても意味がない」

そつだな。来るべき時期が来れば助け出せるはずだ。

S i d e · e n d

第20話（後書き）

今回は会話がメイン。

描写が少ないね……。はい……。

次回、ラカン登場までキンクリ！

ゼクトとの再会シーンもカットだ、カット！！

どこで出会ったのかわからんに書けるか！？

アンケート現状 7 / 21 / 14 : 30

紫稀側

9票 真名

8票

7票 せつちゃん・木乃香・千鶴

6票 ゆーな

5票 茶々丸・アスナ

4票 刀子先生・シャークティ

3票 桜子・円

2票

1票 古・さよ・愛衣

真名の独壇場？アスナと千鶴の怒涛の追い上げ！？

おかしい……。アスナはハーレムにはならないはずなのに……。

ネギ側

2票 楓

1票 アーニャ・木乃香・古・朝倉・鳴滝姉妹

候補者に上がった面々のアーティファクト案まだまだ募集中なり。
千鶴のアーティファクトに関しては真面目なものを募集します。
ギャグ関連しか思い浮かばないんだ……。葱エ……。

第21話（前書き）

約2週間で【総PV】25万9千、【総ユニーク】3万1千突破！！

黒部様、幻影様、SILVER様、ササノ八様、ウエンド様、零崎煌識様、

アフロン様、深鎖様、なおぼん様、Dai様、派遣社員様、杉ちゃん様、

カールマイヤー様、オルスレイン様、銀盤様、ウィッチーズ様、k
urumi様、悠手様

感想ご意見感謝です！

今回はなんと18名！おでえーた！

あのキャラにスポットを！

そんな21話、どうぞ。

第21話

Side・紫稀

私達は今、飯の支度をしている。

「んっふふっこいつが旧世界は、日本の鍋料理ってやつかあ」

ほら、原作でもあったじゃないか。ラカンがやってくるどころだよ。

「じゃ、早速肉を」

「あつ、ナギ、おまつ・何、肉を先に入れてるんだよ」

「トカゲ肉でも旨いのかのう？」

鍋のやり方がなっていないな……。その辺は詠春に任せるが、面倒だから！

それにしても何だかんだでゼクトと再会出来てよかった。

あの時は結構大変だったな。

私とキティは認識障害の魔法掛けて狐の仮面被ってたからゼクトには気付かれなかったからな。解く前にナギのやつが話し掛けてたしな。なんだか知らんがナギとゼクトが戦ってたしな……。

今、私達は戦争で活躍しすぎたのか辺境に左遷させられていた。

「おい、なんかあそこにガキが一人いるぞ？」

ん？どれどれ？ってあれってもしかしてもしかするんじゃない？

「（なあーシキ。私の気のせいじゃなければ見覚えのあるヤツじゃないか？）」

「（私もそう思う。だけどまずはナギに任せてみよう。仮面と認識障害は解かないようにな？）」

「（分かった。あれが本人なら厄介なことにはならんだろうしな）」
と、思ってた時期が私達にはありました。

「って、何で戦闘になってんだよおおおおー！？」

キティと話している間に一体なにが・・・？しかも、あの實力はまさしくゼクトじゃねーか！！

「おや、見てなかったのですか？ナギが話し掛けてたらどうやらあの少年を怒らせたようで、戦闘になったんですよ」

え？マジで？ゼクトが怒ることって一体・・・？私達ですら知らんぞ？一体何を言ったんだ、ナギ！？

「最初は穏やかに話してたようなのですが、小さいとか言われて何か言い返してナギが怒り出したようで、その後にナギが何か気に障るようなことを言ってたようですが、生憎その辺は聞こえなかったんですよね」

小さいって言われたくらいなら別に怒りはしないだろうけど・・・
。本当何を言っただ？あいつの沸点はかなり高いんだぞ？

『お主のようなガキに心配されるような年でもないわー！？』

え？まさか年のこと？いやいや、まさかね・・・？

『どう見たって俺より小せえーじゃねーか！！ガキは大人しく家に帰って飯食って寝てやがれ！！』

なんてー言い争いだ・・・。

「おやおや、大変ですね。お互い広範囲用の上位魔法唱え始めましたよ？」

「はっ？ナニヲオツシャル、ヘンタイ？」

「いえいえ、見て下さいよ？」

と、私はアルビレオに指差された方向を見てみると。

『エビゲネヲイトタルス・ケラウネ ホス・ティデーナス・フティレイイン
来れ巨神を滅ぼす燃え立つ雷霆』

『エビゲネヲ山クス・カタルセヨギキネー・ロンファイア
来れ浄化の炎燃え盛る大剣』

「おいおい、やめてくれよ、このままじゃ余波が俺たちにまで影響するじゃねーか！キティ！今すぐゼクトを抑えろ！なぎは私が抑えるから！仮面と認識障害解いていいから！？」

「分かっている！くそっ！！めんどうな！？」

「このバカ共が！周りを考えて使う魔法くらい選べ！！」

ゼクトのほうはキティに任せて、私は縮地でナギに話しながら蹴りを入れる。

どうやらキティのほうもゼクトを抑えることが出来たようだ。まあゼクトがナギの近くに移動した私と自分の近くにいたキティの存在に気付いて詠唱を中断したようだけど。

すぐに起きたナギにはOHANASSIしておいた。

その後何だかナギとゼクトがお互い謝ってたな。で、気付いたらゼクトが師匠になってた。

すまん、嘘だ。私とキティが推薦したんだ、ナギの矯正のために。

そのお陰か雷系の魔法はアンチヨコなし、フルクワティオー・アルビカラスランティア・ルビカンス『白き雷』や『紅き焰』

と同等とそれ以下の他属性の魔法もアンチヨコなしで使えるようになった。ヨウイス・テンベスターズ・フルクリエンス『雷の暴風』と同等かそれ以上のだと流石にアンチヨコ

いるっぽいけど。

「いいじゃねえか、旨いもんから先だよ、ホラホラ」

これで使える魔法も一応二桁になってたから原作よりは少しばかりは強いだろう、きっと。バカなのは相変わらずだけど、うん。

「バツ、バカ。火の通る時間差というものがあってだな。まずは野菜を入れて・・・あーちよッ」

「あーうっせ、うっせーぞえーしゅん」

「あっ、しらたきのそばに肉を入れるんじゃない。肉が硬くなる」

「フフ・・・詠春、シキ。知っていますよ。日本では貴方たちのような者を、【鍋しょ「奉行な」うぐ・・・ん・・・」

【鍋將軍】に見事に被せてみたぜ。実はこれやってみたかったんだよ。かなりの精神的ダメージを受けたようだ、ざまあ。

「奉行？なんだそれ」

知ってるわけないよね、バカだもんね。

「確か奉行と言うのは昔の日本の職業の一つじゃったかのう？」

おっ、流石ゼクト。覚えてたんだね

「それで鍋奉行ってのは鍋料理を実質的に仕切るやつのことだな」

「へー」

「詠春、全て任す。好きにするが良い」

「あ、あぁー……」

なんか詠春の反応がいまいちだな。まぁーいいや。早速いただきますか。

「おお、これは醤油か。相変わらずうまいのう」

「ホントだ。うめえっ!？」

「これこそが日本の誇る醤油だよ」

「それに大根おろしですね」

ていうかアルビレオの日本知識ってどこから仕入れてるんだ？私達は一切話してないんだがな？

「これがしょうゆか、スゲエうめえっ」

「ナギ、お前は日本に来たとき寿司食ったろ」

やっぱりナギは、三歩あるけば忘れる残念な脳なのか……。因みに私とキティは黙々と食うだけだ。きちんと野菜もな！肉しか喰わんやつらとは違うのだよ！

「姫子ちゃんにもくわしてやりたいくらいの旨さだな」

「姫子ちゃんって……。なんて残念なネーミング。」

「姫子ちゃ……？ああ、オスティアの姫御子のことじゃな？」

「まあ……戦が終われば彼女を自由にする機会も掴めるやも……です」

「その戦だが、やはりどうにも不自然に思えてならん」

「今更か。いや、戦う力しかないからしょうがないのか。」

「何が？」

「何もかもだよ。お前が言い出したんだろうが、鳥頭。それと肉ばかり喰うな」

「詠春、ナギはバカだから自分で言ったことも覚えてないだけだ。それとナギは野菜だけ喰ってる」

「あつ、なんか来た。鍋引っくり返っちまってるな。ナギたちは肉しか取ってないし……。私とキティは万遍なく回収してるよ？予備の器も引つ張り出して取り残されたのも全部回収したものだ。てことで、これは全部私達のもの！」

「食事中失礼〜ッ。俺は放浪の傭兵剣士、ジャック・ラカン！！
いっちょやるっぜッ」

「失礼だと思っならやめろよ、筋肉だるま……。もしくわ鍋に直撃させるな。」

「何じゃ？あのバカは？」

「帝国のって訳じゃなさそーだな。えいしゅ・・お、お!？」

「フ・・フフフフ・・」

あれま。回避しそびれたか、詠春。剣士ならこれくらいは回避してほしいもんだがな。

「どーしたー来ねーのかあー!。来ねーならこっちから・・いつ」

中々の瞬動だな。詠春も大分、腕を上げてきたしな。鶴子のところまでは流石にまだ遠いけど。

「おほ？」

「斬る」

語尾に？なんてつけんな、筋肉達磨。きしよい!

「お？詠春の攻撃凄いでるぜ」

「あの大男やりますよ。見たことがあります。ちよつと前、南で話題になった剣闘士ですよ」

「ただの筋肉達磨だよ。詠春がんばー」

ってシキはシキは棒読みで応援してみる。

「ちよつタンマタンマ。あんたマジでつええな。ちよい待たね？」

「ふざけるなつ。やる気なら本気を出せ貴様ツ！」

「へっそースカ。けど6対1だし本気を出す訳にはいかんのよね。あんた達の情報はリサーチ済みだぜっ!？」

6対1だから本気を出す訳にはいかないってどういう意味なんだ？その後の相手するために力を温存しておきたいってやつか？ん？カプセル出したな。これで詠春の負けだな。

「情報その1・生真面目剣士はお色気に弱い」

「くっ・・・卑劣な。いや、何のこれしき。心頭滅却すれば火もまた」

何故目を閉じる？

「フ。ホイー丁あがり。ぬんっ」

ん？今のは『ヨウイス・テンベスターズ・フルグリエンス雷の暴風』か。てか、ナギ。不意打ちって仕返しのもりか？

「おう、出たな・・・情報の4。赤毛の魔法使いは弱点なし。特徴、無敵」

それって情報なのか？と言うか特徴って赤毛の魔法使いってところだろ。それに弱点ならあるんだがな？アンチヨコないと使えない魔法がまだあるし。

「てめえら、手エ出すなよ」

「言われずとも」

「バカの相手はバカにさせるのが一番じゃ」

「面倒だから元々やる気ないし。音織、鍋作り直そう」

「私もやらん。そうだな、蒼識」

それに私が出たら筋肉達磨が大変なことになるしね。

「奇遇だな小僧。俺も南じゃ無敵と滅法噂の男だ。まあー1回だけ負けたことがあるんだがな」

「へっ、おっさんいいのかよ？剣なしで。ついでに俺も1人だけ勝てないヤツがいるんだよな」

「心配すんな。俺は素手のが強え。そいつどこにいるんだ？」

「そこにいるだろ、狐の仮面の。は」

「フン。あんま強そうに見えないな」

戦闘始まったつばいね。のんびり観戦するか、宙にコンロごと鍋浮かせ喰いながら。それと人のこと話題にしてんじゃねーよ。

それにしても気合だけで『キラブル・アストラペー千の雷』を耐えられるってのはおかしいよな、本当。ていうか広域殲滅魔法を気軽にポンポン使ってるんなよな。

んで13時間後。環境破壊も甚だしくなってきたところで終了と。

「フ・フフ・フフ……やるじゃねえか小僧」

「あんたこそな」

なんか男同士の友情ってヤツが発生したようだ。

「いや、6対1で挑んでおいてこの様じゃあ……俺の完敗か」

「俺は……俺に並ぶ人間が3人もいたってことで満足だぜ」

「そろそろいいか、バカ共。久しぶりだなジャック・ラカン」

「なっ、てめえはまさか……!?!」

仮面外して声掛けてみたんだ。きちんと覚えていたようだし、よかったよかった。

「そのまさかだ。お前が無敵と呼ばれていたときに唯一勝てなかったシキ・カミギだよ。んじゃあな」

「コラ、てめえ……シキ・カミギ! ナギ・スプリングフィールド! リベンジすんぞ。必ず決着……つけてやる……ぜえっ」

「やだよ、めんどくせえ。それに私はキティと過ごすので忙しいんだ！」

「その通りだ。シキは私と過ごすので忙しいんだ！」

「おお いつでも・・・こいや、筋肉ダルマあ。戦争やってるより気が晴れらあな」

「止めを刺せばよいのじゃ」

「気に入ったんだろ」

地味にゼクトの台詞は酷いよな。止め刺そうと思えば刺せるけどな、【直死の魔眼】的に。

さて、これからどうなることやら・・・。

その後、度々筋肉達磨から襲撃された。主に飯時が多かったのは嫌がらせか何かか？

それと、なんか知らんがいつの間にか筋肉達磨が仲間になってた。・・・原作読んでた時も思ったが一体何故？

Side・end

第21話（後書き）

カットするつもりだったんだけどね？何故か書きちゃった、テヘツ
（エヴァの顔でご想像ください）

次回は恐らくアリカ姫の出番なり！

アリカはハーレム確定者なのでナギ側のためにオリキャラの王女出
します。

テオドラはラカン側でいいですよ？面倒だし。

アンケート現状7/22/10:15

紫稀側

17票 このせつ（合計）

~~~~~

12票 真名

11票 アスナ

10票 ゆーな

09票 木乃香（単体）

08票 せつちゃん（単体）・千鶴

07票

06票 茶々丸

05票

04票 刀子先生・シャークティ

03票 桜子・円

02票 さよ

01票 古・愛衣

真名の独壇場！アスナとゆうーなの怒涛の追い上げ！？

このせつ単体で上に三人と同格が一人・・・。

このまま変動しなかったらせつちゃんまでかな？茶々丸は仮契約はさせるつもりだけど。

単体でアスナが1位になればハーレムメンバーにします。

2位以降なら当初の予定通り妹分の立ち位置のままです。

ネギ側

2票 楓

1票 アーニャ・木乃香・古・朝倉・鳴滝姉妹

候補者に上がった面々のアーティファクト案まだまだ募集中なり。

## 第22話（前書き）

アンケート途中経過。

予想とは違うぞ？

なんてこつたい・・・。

zero様、じー様、ナラシン八様、六白、七赤様、黒部様、月神様、  
楽様、

んんん（・・）様、手酢様、喜古様、照鶉様、売油様、ピヨリ様、  
キナコ様、ハラニ様、Dai様、東雲斎様、なおぼん様、フサフサ  
様、ヴァル様

今回も多くの感想ご意見感謝です！！

やっぱり誰かが空気になる。

そんな22話、どうぞ。

## 第22話

Side . end

いつの間にか筋肉達磨ジャック・ラカンが仲間になっていた。ナギとの殴り合いで漢の友情ってやつが芽生えたのか？まあそれはどうでもいい。私にさえ喧嘩を売ってこなければ。

何度か喧嘩を売られました。そして理解しました。筋肉達磨はまさにバグキャラだと！

いくら【不殺刀ゴキヤウ】が半殺しまでしか出来ないとはいえ、斬られてから復活するまでにかかなりの時間が掛かる。掛かるはずなのだ！なのに、筋肉達磨が復活するのが僅か10分だと！？ありえねーよ、マジで……。

そういえば前に意味深な発言しましたね、私。筋肉達磨に勝ったとか何とかって。

あれはですね、奴隷から解放されて剣闘士で名を馳せて調子こいてたので、他人に被害が出ないような場所で勝負吹っ掛けて、無手でボコボコにしてください。それから此間まで筋肉達磨の前には姿を出すようなことしてなかったんですよね、勝負仕掛けられるの目に見えて分かってましたし。

### 閑話休題

話を戻しましょう。

私達【紅き翼】アラルブラは帝国の大規模転移魔法の実戦投入により、「グレートブリッジ」を陥落されたことよって前線へ復帰。八面六臂の大活躍。「グレートブリッジ奪還作戦」を制した。私はあれから改造した【夜笠】を纏って【闇の魔法】マキア・エレベアで『燃える天空』ウラニア・フロゴシスを付与して翼を生やして行動してみた。思ったよりも上手くいったな。

バカは敵兵には「連合の赤い悪魔」と恐れられ、味方には「千の呪文の男」と讃えられ、私は全魔法の効果を劣化させずに使用出来ることで「全てを統べる者」、「不殺刀」や非殺設定だったので死人を出さずに鎮圧したことよって「不殺の帝王」ノットキル・エンペラー、「グレートブリッジ戦で炎の翼を生やしたことで「炎翼の担い手」なんて呼ばれていた。

キティは闇・氷属性の魔法を使い無傷で鎮圧していたことと、私とよく行動していたこともあって、私の帝王に対して「闇氷の女帝」ダークネスアイス・エンプレス（あんひょうのじょてい）「なんて呼ばれていた。

よ。こんな厨二な二つ名って一体誰が広めたんだろう？ 本気になるよ。

因みにナギとキティのファンクラブが出来たのもこの頃だ。ラカンのはずっと前からあったらしいがな。それに何故か私のファンクラブも10年ほど前からあったらしく、一気に会員数が増えたらしい。しかも表立っては零崎蒼識なのに、一部ファンでは本名の神儀紫稀を知っているようなのだ。一体どうして・・・？

その理由は後々知ることになるんだがな。この時はまだ知らないんだ。



そして新たな仲間として元・MM元老院の捜査官、ガトウ・カグラ・ヴァンデンバーグとその弟子、タカミチ・T・高畑が加わった。「俺の故郷がある旧世界じゃ超強力な科学爆弾が発明されて、こんな大戦はもう起こらねえそつだ。戦を始めたが最後、みんなまとめて滅んじゃまうからだつてよ」

まあ核はえげつないからな……。それにしても、ナギが核について知ってることの方が驚きだ。

「だがこつちの、この戦はいつ終わる？ 帝都ヘラスまで攻め滅ぼすつてか？」

私一人でもそれは可能なんだけどね。実際はそうじゃないし。

「やる気になりやこの世界にだって旧世界の科学爆弾以上の大魔法はある。こんなこと続けてどうなる？ 意味ねえゼツ！！まるで……」

「まるで誰かがこの世界を滅ぼそうとしているかのようだしですか？」

筋肉達磨はどうでもよさそうな顔してるな。

「ある意味そのとおりかもしれないぞ」

「ガトウ」

タイミングよすぎないか？ああー原作と言つご都合主義ですね、分かります。

「俺とタカミチ少年探偵団の成果が出たぜ」

いちいち間を持たすな。もったいぶらずに話せよな。

「やはり奴らは帝国・連合、双方の中枢にまで入り込んでいる。秘密結社」コスモエンテレケイア【完全なる世界】」・・・ってシキ！お前知っていたのか！？」

「コスモエンテレケイア【完全なる世界】はかなり前からあった。それも数百年前くらいからな」

「資料か何かはないか？」

「コスモエンテレケイア【完全なる世界】の全容までは把握できていないが、下部組織ならあらかた把握できている。ほれ、これがその資料だ」

と言つて、私は影の倉庫にしまっていた資料を渡す。勿論幹部以上の情報がないやつだけだがな。今教えるわけにはいかないからな。

「助かる。これで少しは動けるだろう。と言つか今まで帝国兵を殺さずに鎮圧してきたのは」コスモエンテレケイア【完全なる世界】が裏に知っていることを知っていたからか？」

「それが分かったのはつい最近だ。不殺にしていたのは気分だ。戦争中だから人を殺しても罪にはならないってのが気に食わなかっただけさ。殺したのならそれを背負わなければならぬんだ。だから私は戦争で人を殺しはしない」

「私もシキと一緒にだ。私達の素性を知った者は覚悟を持って必ず私達を狩にくるだろう。だとしても殺されはしない。逆に殺すだけだからな。だからこそ、私達は殺した命を背負うのさ」

そんなやり取りをしたのも大分前。え？時間が飛びすぎだっけ？知らねーよ、そんなもん！

今私達はガトウに呼ばれて本国首都まで来ている。

「何だよガトウ。わざわざ本国首都まで呼び出してさ」

「音織音織との時間を奪奪いおっつて！！」

「それは悪いとは思っている。だが、あってほしい人がいる。協力者だ」

それが誰かは知ってるけどね！！

「協力者？」

「そうだ」

「マクギル元老院議員！」

「いや。わしちゃう。主賓はあちらのお方たちだ」

およっ？なんか二人いるっぽい。どういうこった？

「ウエスペルタティア王国……王位継承権第一位・アイネ王女、同じく第二位・アリカ王女」

顔立ちがそっくりだな。となると双子？私というイレギュラーのせいかな、やっぱり。

「私は第一王女アイネ・アナルキア・エンテオフュシア」

「妾は第二王女アリカ・アナルキア・エンテオフュシアじゃ」

あれー？なんか見たような気がするなー。原作がどうたらじゃなくって生で。どこでだ？

「ん」

なんかジャックが変な声出してるな。最近やっとなジャックって呼んでやる様にしたんだよ。んで、そのジャックが見てるのは……ナギか。そんでナギが見てるのは……アイネ王女？アリカじゃないんだな。ん？なんか視線を感じるな？どこからだ？ええーつと、あれ？アリカじゃね？おかしいな。フラグなんて建てた覚えはないんだけどな？

「アラルケフ【紅き翼】のリーダー、ナギ・スプリングフィールドだ」

ん？今度はこちらの自己紹介か？

「京都神鳴流剣士歴代第三位、青山詠春です」

俺が許可したからな第三位って名乗れって。

「お初にお目にかかります。アルビレオ・イマと申します」

うわー、いつもどおりの胡散臭い笑顔。

「フィリウス・ゼクトじゃ。ナギの師匠じゃな」

「傭兵剣士のジャック・ラカんだ!!!」

ナギの方がまだ品があるな。

「気安く話し掛けるな下衆が」

「もう少し品と言うものがないのか」

おっ、きつい一言だね。

「零崎音織せいきねむねだ。仮面を外すことは出来ん。王女方が噂だけで人を判断しないのなら別だがな」

そりゃそうだ。【闇の福音ダーク・エヴァンジェル】と知られたら大変だわ。

「何か訳ありのようだな。そのいい様だと人格で判断するのなら素性を教えるということか？」

「その通りだ。だが、人前では外さない。信用の置ける者たちしかいないときにしか外さん」

「理解した。それならば無理に外せとは言わない」

アイネ王女も中々肝が据わっているな。キティと軽く言い合えるなんて。それじゃそろそろ私の出番か。」

「京都神鳴流史上最強、零崎蒼識せうきそうしきだ。名前の通り音織とは家族だ。私のほうはこれと言って訳があるわけではないから素顔を見せよう」

そう言いながら仮面と、一応認識障害も解いてみる。

「やはりお主は……。零崎蒼識よ。お主は他にも名を持っておらぬか？例えばかみ「ストップだ」……。何故じゃ？」

「事情があるわけではないが、場合によって名を使い分けている。これで理解してもらいたい。そして、その話は音識同様【紅い翼アールブラ】のメンバーしかない時にだけ話そう」

「分かった。それなら後で構わぬから少々時間を取ってもらえるか？」

「了解した。それなら今夜、私達が首都で拠点としている場所に来て頂きたい。アルビレオとゼクトを迎えに行かせる。アイネ王女も来てもらっても構わない」

「ならば今夜時間をとろう。姉上も構いませんか？」

「私も構わない。アリカが言おうとした名前には少々覚えがある」

「それでは今はこれで失礼する。今夜また」

アリカは本名を知っている。アイネ王女も知っているようだし、何かしたのか、私は？

『シキ。今のは一体どういうことだ？あの王女共は本名を知っているような口振りだぞ？』

『私にもさっぱりだ。しかし、アリカ王女のほうには何か見覚えがある気がする・・・』

『殆ど一緒に行動をしていた私は覚えてないぞ？一人のときに何かしたのか？』

『最近一人で行動してたのってどれくらい前だ？』

『確か10年くらい前だ。「ちょっと魔法世界に行ってくる」って軽い感じで3、4日出掛けたではないか』

『10年？10年前ね・・・。あれ？もしかして。いやいや、まさかね？でも、それなら辻褃が合うわ・・・』

『何か思い出したのか？』

『それは今夜、王女二人が来たときに話そう。今は拠点に戻って休むことにしよう』

『そうだな。今夜きちんと聞き出すからな？覚悟しておけよ』

なんか冷や汗が出てきた。夜解散した後が怖いな・・・。

王女方との対面から数時間。

「現在、私達は本国首都に作っておいた拠点にいるわけだ。

「ワハハハハ。上手いことやりやがってこんガキヤ！」

「ああ！？何の話だ!?!」

「バカ共が相変わらず煩わしい……。」

「とぼけんじゃねーよ。姉の方のお姫様とイチヤイチャキヤイキヤイおしゃべりしてたろーがッ！」

「してねっつの。何がイチヤイチャだ、バカ」

「なーに言っただよ俺なんか妹の方のお姫様には「気安く話しかけるな、下衆が」、姉の方には「もう少し品と言っものがないのか」だぜ~~~~?・・・いや、ありゃイイ女たちだぜ。一本芯の通ったな」

「そこには私も同意しておこう。アレほど芯が通った人間はそうそっういないからな」

「頭大丈夫か、シキ?ジャック?マゾかお前ら?俺あ、あんなおっかねえ女たち見たコトねえぞ」



「これだからガキは困る」

「グハハハハ。そーゆートコはまだまだカワイイガキなんだよな、てめーはよ」

「んっだ、そりゃ。意味わかんねえ。触んなっつーの。勝負すっか、てめ」

「（仲いいな）」

詠春、黄昏るな……。

「しかしよ、ウエスペルティアの王女ってことはアレか？例の姫子ちゃんの姉君ってことかよ？」

「いや……姫子ちゃんのこと……なんか話しくいみたいだった」

「へえ……？」

「アイネ姫にアリカ姫……か」

「ジャック言っておくぞ。黄昏の姫御子に姉はもういない。いるのは甥や姪と言った家系図的に下の者だ」

「どついう意味だよ、そりゃ？」

「アスナに会ったときはまだお前はいなかったんだっただな。黄昏の姫御子のアスナは既に100年も生きている。見た目が少女なのは成長阻害の魔法か薬を使われているだろう。後は空間を操作して時

間が流れない空間に閉じ込めているかだ」

「なんでシキはそんなこと知ってたんだ？」

「言っでなかつたか？私はお前達よりも数十倍は生きてるぞ？大体100年前にアスナ本人に会っている」

「初耳だぜそりゃ。それで何歳なんだ？」

「教える必要性はないな。と言うか正確な歳月がわからん。たまに12倍速や24倍速の魔法球にランダムで入ってたからな。それとこの話は一旦終わりだ。王女方が到着したようだ」

「お出迎えはよろしくーっと。話し掛けてまたあんなこと言われたんじゃかなわんからな」

「そうかい。キティ。ついてきてくれ。ほれ仮面」

「ありがとう。分かった」

んじゃまあー事実確認と行きますかねー。

「ようこそ。アイネ王女、アリカ王女、こちらへ」

「邪魔をする」

「分かった」

さっきまでジャックたちと話していたテラスではなく、リビング的なところへ案内する。

「いきなりですまんが本題に入ろう。アリカ王女、あなたが口に出そうとした名を知ったのは大体10年前だな？」

「その通りじゃ。それを知っているという事は本人で間違いないという事でいいのか？」

「恐らくその通りだ。では、改めて名乗ろう。零崎蒼識改め神儀紫<sup>かみぎ</sup>稀<sup>しき</sup>だ。10年前、お前さんを助けた男だ」

「やはりか。それならこちらでも改めて礼を言う。あの時は世話になった」

「姉である私からも礼を言う。妹を救ってくれて感謝する」

「気にするな。あの時はただの偶然だ。もしくは、お前さんが世界にとって大事な存在だったから私があの場合に居合わせたのかもしれないがな」

「シキ、話が見えん。きちんと説明しろ」

「分かっている、音織<sup>おとおり</sup>。これから説明してやる。大体10年前、私がウエスペルティアに用事があつて近くまで来ていたら、魔法使いや魔法剣士の集団が少女を襲っているのを見掛け、それを助けた。ただそれだけだ。まさか、助けた少女が王族の人間だとは思わなかったけどな」

「それで何故シキの名を知っていることに繋がる？」

「その時は本来の姿でいたからな。集団を鎮圧した後、名前を聞か

れたと思つて、うつかり本名を名乗つちまつただけだ。」

「相も変わらずの遠坂家の呪いだな、お前は。それで襲われていた理由は何なんだ？」

「それは私も知らん。憲兵に連絡した後は早々に立ち去つたからな」

「それは妾が説明しよう。あの日はちょうど護衛をつけて遠出する予定だったのじゃが、どうやら護衛の一人も襲撃者の仲間だったようでな。人通りの少ない場所に差し掛かったときに襲撃を受けて、残りの護衛もやられておつたのじゃ。その時こやつが助けてくれたのじゃ。舞を踊るかのような動きで見惚れておつたのじゃがな」

「それは襲われた時の説明だろうが。私が聞きたいのは理由だ、理由！」

「おっと、すまぬな。襲われた理由は簡単だ。王女は二人。二人とも結婚すれば他家との繋がりが二つ出来てしまう。それをよく思わぬ輩が自身の息子と姉上を結婚させる腹積もりでもう一人の王女である妾を殺そうとした、それだけの話だ」

政争の一種か。どうでもいいな。

「そういうことが。災難だったな。そんな経験をしたのなら私の素性も明かしてやっても平気そうだな」

「いいのか、音織？」

「構わんさ。それにこの王女達は気に入ったからな」

そう言いながらキティが狐の仮面を外す。そして素顔が露に！

「だ、【闇の福音】ダイク・エヴァンジェル！！！」

「何故、お主のような者が【紅き翼】アラルブラにおるのじゃ！？」

やっぱり驚くよね。間違った認識されるのも勘弁だしなー。いつそ私を知ってること見せようかな？

「ただの気紛れさ。暇だったときにあのバカにシキナキと一緒に誘われた。それだけだ」

「なあーキティ。お前の半生、姫さん方に見せたほうが早くないか？」

「そんな事出来るのか？」

何をおっしゃる、キティちゃん。

「私に不可能なことは多分、時間跳躍と生物の創造くらいだ。まだ他にも何個かあるかも知れんけど、把握できてないし」

「相変わらずのバグを超えたバグ振りだな・・・」

「ってことでお姫さん方。心の準備は十分か？」

「あ、ああー構わぬ・・・」

「妾も大丈夫じゃ」

「んじゃスタートだ」

「再生中」

第8話から第17話まで参照のこと。  
描写するのがめんどいからな、作者が!!

「再生終了」

「こんな感じだ」

「まさか本当に見せれるとは思わなかった」

「今までののは全て事実か？」

「脚色なしの事実だけだ」

紫稀の内面とかエヴァの内面は今回の鑑賞会では描写しなかつたんだよ

うん、電波が飛んできた。どうやらキティたちのほうも受信した

らしい。

因みに今回の鑑賞会に【紅き翼】アラルセラは未参加だよ。ヘンタイが見たら色々大変だからね！後、ポルノ法的に流しちゃいけない映像も端折ってるからね！！

今度は私にだけ電波が来たようだ。どうでもいいよ、そんなこと。

「今すぐにお主の賞金を取り消させよう、ダーク・エヴァンジェル【闇の福音】」

「どうでもいいさ。人を殺したと言つのは事実だからな」

「それともう一つ聞きたいのじゃが【破滅を齎す黒】は今どこにいるのじゃ？」

「何を言ってるんだ、アイネ女王？お前達の目の前にいるじゃないか」

「目の前？はて、私達の目の前にいるのはお主とシキではないか？一体どこにいるというのじゃ？」

「流石に分らんか。シキ。あれをみせてやれ」

「それもそうだな。なら、私の半生見せたほうが早いな。そんなじゃまたスタートだ」

「再生中」

第2話を飛ばして第1話から第6話まで参照のこと。

また言うが、描写するのがめんどいからな、作者が!!

ライフメーカー

造物主のところには認識障害掛けておいたよ！説明が面倒だから

ね！作者が!!

「再生終了」

「そんなわけで私が【破滅を齎す黒】で【白き救済者】で【炎髪灼眼】だ」

「まさかここまでとは……。私ですら知らなかったぞ？」

「バグを超えたバグすぎるじゃろ、これは……。伝説の人間ではないか……。」「

「ありえんじゃろこやつ……。御伽噺の住人ではないか……。」「

王女二人の頭の抱えっぷりがおかしいな？まあいいや。

「まあーこれで説明は終了でいいな？そろそろ時間も時間だ。今度は私とキティで送ろう」

「そうだな。今の状態の二人をアルビレオに任せるわけにもいかん



しな」

「てことで長距離転移魔法発動なり。座標はウェスペルティア王国の宮殿近くでいいんだよな？」

「あ、ああーそれで構わぬ」

「んじゃ行くぞ」

その後、アイネ王女とアリカを送った私とキティは、すぐに帰り布団の中に潜ったのだった。

それと、アルビレオ<sup>ヘンタイ</sup>が私達の半生を見れなくて地味に悔しがった。どうでもいいな、うん。

Side・end

## 第22話（後書き）

色々と端折ってたりキンクリしてるけれど気にすんな!?

次回はめられて、王女と皇女救出？  
そんな感じですよ。

アンケート現状 7 / 22 / 21 : 30

紫稀側

21票 アスナ

17票 このせつ（合計）

14票 ゆーな

13票

12票 真名・千鶴

09票 木乃香（単体）・茶々丸

08票 せつちゃん（単体）

04票 刀子先生・シャークティ

03票 桜子・円

02票 さよ

01票 古・愛衣

アスナの独壇場！負けじとゆーなど千鶴も上がってきて？このせつはもうセットでないと勝てない!?

茶々丸は這い上がってこれるのか！？  
流れるにアスナはハーレムメンバー入り？でも、動かさじつらいんで  
すよね……。

ネギ側

2票 楓・古

1票 アーニャ・木乃香・朝倉・鳴滝姉妹

こちらはこちらで全然投票されませんし……。

候補者上がった面々のアーティファクト案まだまだ募集中なり。

1人1キャラにつき1票アンケート中。

## 第23話(前書き)

【総ユニーク】 3万5千 【感想】 100件 【ストーリー評価】 10  
0Pt突破

Dai様×2、カルト様、mkt様、キアラン様、零崎煌識様、  
ナナシ様、なおぼん様、ダフ様、オメガ様、悪・即・斬様、  
ultrider様、月神楽様、十六夜様、派遣社員様  
感想ご意見感謝です！

色々と省くよ！  
そんな23話、どうぞ。

## 第23話

Side・other

「帝国」と「連合」

二つの巨大勢力に挟まれて翻弄され続けてきた王国の王女。

アイネ・アナルキア・エンテオフユシアとアリカ・アナルキア・エンテオフユシア。

彼女らは自ら調停役となり戦争を終わらせようとしたが力及ばず、  
アラルブラ【紅き翼】に助けを求めてきた。

「要するに戦争やりたいやつらがいるんだろ。まあた「あいつら」か!？」

「コスモエンテレケイア【完全なる世界】・・・帝国・連合だけでなく、歴史と伝統のオスティア内部にまでシンパがいるようだ」

「世界全てが彼らに操られているようです・・・やはりこれは思った以上に根が深い・・・」

「その通りだな」

(何がしたいかは大体知っているがな)

「コスモエンテレケイア【完全なる世界】・・・この謎の集団を彼ら、  
アラルブラ【紅き翼】は当初、国際マフィアや死の商人・・・つまり「戦争があると儲かる」奴ら  
が作った組織だと踏んでいた・・・その真の正体と目的を知っている  
紫稀以外は。」

そこで彼ら【紅き翼】は休暇を利用し、【コスモエンテレケイア完全なる世界】について独自の内偵を開始した。

ナギやジャックと言った戦闘担当と、ガトウやタカミチ、アルビレオといった調査担当に分かれていた。

そんな中でも彼らは思い思いの休暇を満喫していた。・・・多分。

S i d e . e n d

S i d e . 紫 稀

一応私は戦闘調査、両方担当であるが、今日は休みだった。そう。だ。っ。た。の。だ。

それなのに今、私は街中を歩いている。勿論認識障害の魔法を掛けてだ。

そこまではまだ、許容範囲だ。じゃあ、何が許容範囲外かといわれると、私の隣にいる人物たちだ。

まず右にキティがいる。うん、妻だからこっちは大丈夫だね。そして左。そこにはなんと・・・アリカがいる。

Why? 一体何故? 誰か説明してくれよ?

そうだな。こうなった経緯を思い返してみよう。

数時間前のことだ。

「ナギ、買い物に付き合いなさい」

「なんで俺がツ！勝手に一人で行ってる！」

あつ、アイネ王女に殴られてら。王家の魔力をこめられると地味に痛いんだよね。ジャックもナギのほっぺにある紅葉を見て笑ってやがる。

「シキ。妾の買い物に付き合ってくれぬか？」

え？アリカさん、貴方はいったい何を言ってるんですか？

「おい、アリカ。貴様、妻がいる前でよく人の夫を誘えるな？」

あれ？キテイさん、なんでそんなに怖い笑顔なんですか？私のせいじゃないですよ？

「別に良からう、買い物くらい？それとも【闇の福音】ダイク・エヴァンジェルは心が狭量なのか？」

あの、それ、挑発してますよね？ねえ！？これから私は一体どうなるんですか！？

「ほう、そうくるか。まあー買い物くらいは良からう。ただし、私も同行させてもらうぞ？」

「構わぬが？」

あつるえー？私っていつの間にアリカさんにフラグ建てたの？

10年前の襲撃のときだ

ああーなるほど。それはつまり、「吊り橋効果」って奴ですね？

正解だ。てことでアリカも一緒に攻略しろよ？

えっ？キティを一途に想う人生じゃなかったのか？

そんなわけないだろう？それと愛人が何人いようととも気にしないようにエヴァをちょうk・・・ゲフンゲフン。しt・・・じゃなかった。教育・・・そう教育だ！教育しとけよ？これから先、お前はフラグを乱立させる予定なんだからな？

はっ？なんだこの電波？私がフラグを乱立させるって？一体なんのこつちゃ？私はあくまで紳士だぞ？どこその不幸なフラグ建築士じゃないんだぞ？いやいやマジで！？

そうは言っても無理なものは無理だ。宇宙意思とかじゃなくて読者の希望だからさ？諦めろ。勿論正妻はキティだからそこは安心しとけ

現実逃避から逃避するために現実を見ることになるなんて・・・でも、現実の方がまだ精神的にはつらくない・・・はずだ！多分・・・きつと・・・めいびー・・・。

「それじゃ、シキ出掛けるぞ！？」

「いくぞ、シキ！？」



「私の意見は？」

「そんなものは存在しない!？」

結構仲いいじゃないか……。

それが数時間前のことだ。鬱だ、死のう……。あつ、不死だから死ねなかつたわ。

それと何か見張られているような気配がするんだが……。

ズズンッ

なんか爆発音が聞こえたな。あーあいつらか……。

それとなんかこっちに向かってくる人影が……。あれ？ナギとアイネ王女じゃね？何で目の前に降りてくんだよ……。原作っていうご都合主義ですか、分かりましたよ……。

「大丈夫か姫さん」

「うむ」

あれ？まだ私達に気付いてない？

「くそっ、こんな街中でデカイ魔法使いやがって。死人出てねえだろっな」

「やはり今のは・・・」

「あいつらだろうな。私達かお前達が狙いかは知らんが」

「あ？シキじゃねーか。エヴァとアリカ姫も一緒か」

「まあーな。気付いたらこうなってた。そんで手は打ったのか？」

「ああー追尾魔法掛けておいた。んじゃ姫さんたちはシキとエヴァと一緒に皆のところに戻ってる。俺は奴らの本拠地をぶっ潰し・・・ぐえっ」

あ、アイネ王女がナギのローブ掴んだ。若干首が絞まったようだ。どうでもいいや。

「私も行くっ」

「ああ？」

やっぱりそういう流れですか・・・。

「シキやエヴァが一緒でもここに私達王女二人を残しておく方が危険だと分らんか、愚か者め。それに私達の魔法は役に立つ。忘れたいとは言わさんぞ、鳥頭」

「・・・ハッ・・・いいぜ姫さん。ついてきな!!」

「んじゃ、私達もいくとしますかね。護衛対象は二人。護衛は三人。ナギはアイネ王女を、キティはアリカを優先に護れ。向かってくる奴らは私が沈める」

「いいぜ。でも、少しはこっちにも分けるよ？」

「残ったらな。それじゃ行こうか」

「」「」「おう（ああ）！」「」「」

そんなこんなで数時間が経った。本拠地は完全に潰した私達は拠点に戻っている。

「紫稀殿とエヴァ殿と貴様は一昼夜、アイネ王女殿下とアリカ王女殿下を連れ回した挙句、その敵本拠地を壊滅させてきたのですか！  
！どんな夜遊びだそれはっ！！」

「まあ……。後は警察に任せてきたけど」

ただいま詠春に説教されています。キティも受けてるんだぜ？  
勿論、私達は無視してるけど。

「敵の下部組織を潰しても意味はないっ！何の為に秘密裏に調査してると・・・大体、万が一王女殿下たちにお怪我でもあったらどうす

る気だ！！」

「姫さんたちはノリノリだったぜー？「楽しかったー」とかって」

「そうだぜ、詠春」

「それにナギはともかく私達はアリカに連れまわされたんだ」

キテイの言うとおりだ。

「嘘をつかないでくださいっ！どうせ貴様が無理矢理連れ回したんだろっ！姫にこんなご迷惑をおかけするとは。どうぞ詫びすればよいか、国際問題級の……」

長い……。いい加減にしてくれ。

「詠春さーん」

ん？タカミチとゼクトか。

「あのコワイお姫様たちが今、廊下で僕に向かってニッコリ・僕ビククリしちゃって・あ、なんかナギさんとシキさんにお礼を伝えて、だそうです。確かに笑いましたよねっ」

「うむ、驚いたのじゃ」

ナイス天の助け！！今度修行見てやるか。でもコワイなんて言っちゃいかんよ。

「……ッ」

「な？」

「だから言ったる？」

あつアルビレオが後ろで笑ってら。笑いをこらえようとしてるけど、こらえきれてねーよ？

「それに・・・ちゃんと証拠も見つけてきたぜ」

「な・・・それは・・・」

とりあえずお小言は終了ってことでいいんだよな？

それから更に数時間。

「あの証拠があれば戦を終わらせられるのだな？つまり」

「ま、多分な」

「では。それはお前に任せる」

「あんだ達もよくやるぜ。戦火の中、こんなボロ舟で帝国第三皇女と接触しにいこうってんだからな」

「なんじゃ、心配しているのか？」

「へ？心配？何の？」

やっぱりナギはバカだったか……。女心くらいは察しろよ……。アイネ王女のほうも自身の気持ちにはまだ気付いてないようだけど。

念のためにアイネ王女とアリカの影にキティを潜らせておいたけど大丈夫かなー？まあ大丈夫だろう。死にそうになるまで影から出ないようには言っておいたけど。

そんじゃこちらも動くとしますかね。

『あの執政官コンスルがテロに関与！？確かなんだね、ヴァンデンバーグ元捜査官』

「ハ。確たる証拠があります」

『よくやった。これで上手くいけば……。これ以上の無意味な戦線拡大を止められるやもしれぬ。弾劾手続きだな。法務官フラエトルを呼ぼう。証拠の品とナギ君を連れてきてくれ』

「了解しました」

そして再び数時間。

今私達は議員のところに来ている。

「マクギル元老院議員」

「御苦勞。証拠品はオリジナルだろうね？」

「ハ・・<sup>ブラエトル</sup>法務官はまだいらっしやいませんか」

「<sup>ブラエトル</sup>法務官は・・・・来られぬこととなった」

「・・・・・・・・・・ハ・・？」

偽物、偽物つと。

「・・あれから少し考えたのだがね、せつかくの勝ち戦だ。ここにきて・・慌てて水を刺すのも、やはりどうかと思つてね」

「・・・・・」

「ハア」

『ナギ、気付いたか？』

『あー本物じゃないな』

「いや・・その。私の意見ではない。そう考える者も多いという事だ。時期が悪い。時を待つのだ。君達も無念だろうが、今回は手を引いてだな・・・」

別に時期が悪いとは思わんがね。まあー所詮は偽物だしな。

「待ちな」

「？」

「あんたマクギル議員じゃねえな、何もんだ？」

おっ？無詠唱の『フラグランティア・ルピカンス紅き焰』か。まあー私は【直死の魔眼】発動させて、その背後に回ってるんだけどな。気配を断つて。

「「な・・・」」

「ちょー！っ！？ナギおまつ・・・何やってんだよッ。元老院議員の頭いきなり燃やしておまつ・・・」

「バーカ。よく見てみなおっさん」

「何っ・・・」

「・・・よくわかったね、千の呪文の男。こんな簡単に見破られるとはもう少し研究が必要なようだ。それと【全てを統べる者】も気付いていたようだね」

「ちっ、狙いがそれか。せっかく一撃であの世に逝かせてやれたつてのによ。まあー左腕を落とせたのは僥倖かね、アーウェンルクス」

「一体どうやって背後に回ったんだい？全く気付かなかったよ。そ



れとそれを知られているとはね」

「それは企業秘密つてな。で、議員は？」

「本物のマクギル元老院議員は残念ながら、既にメガ口湾の底だよ」

「てめえっ」

「通しませんよ」

「くらえ」

あれが炎と水の魔法使いか。まあーいいさ。殺しても構わないだろっし。

「強えぞやつら！」

「ハツハ。だが、生身の敵だ。政治家だ何だとガチ勝負できない敵に比べりゃ、万倍！！戦いやすいぜツ！！」

「フ・・」

あっ、まつずー。

「奴を止める！」

「わ、わしだ！マクギル議員だ・・うむ、反逆者だツ！ああ、うむ、確かだ。奴らに暗殺されかけたっ・・は、早く救援を頼むツ。スプリングフィールド、ゼロザキ、ラカン、ヴァンデンバーグ。奴らは帝国のスパイだった！奴らの仲間もだ！今も狙われている。軍に連

絡をツ・・・」

「げ」

「あぁーあ」

「やられたな」

逃げるための準備しておこうと。

「君たちは少しやりすぎたよ。悪いが退場してもらおう」

「そうは問屋が卸さない。そういうことで、強制転移。対象・ナギ、ジャック、ガトウ。自身転移。じゃあな、‘地’のアーウェンルンクス」

「昨日までの英雄呼ばわりが、一転、反逆者か。ヌッフフ、いいねえ。人生は波乱万丈でなくっちゃな」

なんでお前はそこまで軽いんだ・・・。

「タカミチ君たちは脱出できたかな」

「・・・姫さんたちがやべえな」

「そんじゃ、捕らわれのお姫様たちを助けに行きますかねー。とりあえずはアルビレオたちと合流するのが先だな」

さーてキティたちは無事かな？そこまで心配はしてないけどな。

S i d e ・ e n d

S i d e ・ アリカ

妾たちがここ、『ノクティス・ラビリントゥス』『夜の迷宮』に閉じ込められて2、3日といったところか。

助けはまだ来ぬのか？

「遅いな、奴らは・・・」

姉上も若干苛立ってきておるようだ。

「奴らとは一体なんじゃ？」

「あー、テオドラ第三皇女。奴らとは我らの騎士のことだ」

ん？何か表が騒がしくなっておるの？

「騎士？そなた等には騎士がいたのか？」

「それは当然であろう？いない方がおかしいと思うのだが？」

ズズウンとか聞こえてくるのじゃが、もしかして？

「やっと来たか。アイネ王女、アリカ、テオドラ第三皇女。迎えが来たようだぞ」

「なっ、エ・・・オトオリ！お主いつからそこにいた！」

「今回の会談に向かうときからに決まっているだろう」

「ならば何故、ここに閉じ込められる前に助けなかった!？」

「アオシキの指示で、殺されかけたりしない限りは極力影に潜んでいるとな」

なるほど。エヴァンジェリンは発信機みたいなものか。

と想っていたらいきなり壁が崩れた。そこにいたのは。

「よお、来たぜ姫さんたち」

「待ったか？」

「遅いぞ、我が騎士」

「妾たちを待たせるとはいい度胸だな」

シキとナギだった。

Side・end

S i d e ・紫稀

私達はお姫様たちを連れて、ノクティス・ラビリントゥス『夜の迷宮』から脱出後、オリンポス山の『アラルツラ紅き翼』の隠れ家に来てきた。

「何だ、これが噂の【紅き翼】の秘密基地か！どんな所かと思えば掘立小屋ではないか！」

「俺ら逃亡者に何を期待してたんだ、このジャリはよ」

「と言うか私の魔法球あるから外見なんてどうでもいいしな。」

「何だ、貴様、無礼であろう」

「へっへーん、生憎ヘラスの皇族にや貸しはあっても借りはないんでね」

「何い？貴様何者だ」

「あのやけに元気な少女が・・・」

「ええ、ヘラス帝国第三皇女ですね。アイネ姫とアリカ姫との交渉の為に出向いた所と一緒に敵組織に捕縛されていたのです」

「元気すぎじゃないか？」

「さーて姫さんたち。助けてやったはいいけど、こっからは大変だぜ。連合にも帝国にも・・・あんたの国にも味方はいねえ」

「恐れながら事実です。王女殿下方。殿下たちのオステイアも似たような状況で・・・最新の調査ではオステイアの上層部が最も「黒い」・・・という可能性さえ上がっています」

「やはりそうか・・・我が騎士よ」

「だからその「我が騎士」って何だよ、姫さん。クラスでいったら俺は魔法使いだぜ？」

ナギもいい加減その問答はスルーしろよ。

「もう連合の兵ではないのだろう。ならばお前は最早私のものだ」

「な・・・」

アイネ王女も言うねー

「連合に帝国・・・そして我がオステイア。世界全てが我らの敵という訳じゃな」

「じゃが・・・お前とお前の【紅き翼】は無敵なのだろう？」

ジャック・・・。お前は無敵って言葉に反応するなよ。そしてそろそろ降ろしたらどうだ？

「世界全てが敵　　良いではないか。こちらの兵は9人。だが最強の9人だ。」

「ならば我等が世界を救おう。我が騎士ナギよ。我が盾となり剣となれ」

「・・・へ。だから俺は魔法使いだっつーのに・・・やれやれ、相変わらずおつかねえ姫さんだぜ。」

「いいぜ。俺の杖と翼、あんたに預けよう」

名シーンだねー。それとなんかアリカが私の目の前に来た上に、アイネ王女も何か言おうとしてるんだけど、一体なんだ？

「そしてシキよ。我が妹の騎士となれ」

「は？」

いきなり何を言ってるんだ、このお姫様は。

「誰の騎士でもないのだろう？ならばアリカの騎士になってもよからう？結構仲は良いようだからな」

面倒なことになった・・・。これ受けたら受けたでキティに色々いわれるだろうし、断ったら断ったらで王女二人に問い詰められるんだろうな・・・。しょうがない。腹を決めるか。

「いいだろう。私の持てる力全てで、アイネ王女の、アリカ王女の助けとなるう」

それを聞いたアリカの顔がとても穏やかだったのを私は知らない。

結局その後、キティにいろんな意味で絞られたとさ……。

S i d e . e n d



## 第23話(後書き)

色々と端折ってる上にメタ発言満載！  
そして無理やり感たっぷり！

次回、反撃開始かな？

アンケート現状7/23/13:10

紫稀側

26票 アスナ

21票 このせつ(合計)

14票 ゆーな・千鶴

12票 真名

11票 木乃香(単体)

10票 せつちゃん(単体)・茶々丸

06票 刀子先生・シャークテイ

04票 円

03票 桜子

02票 さよ

01票 古・愛衣

まだまだ続くよアスナの独壇場！負けじとゆーなと千鶴、このせつも食らいつく！

流れるにアスナはハーレムメンバー入り？でも、動かしづらいんですよね……。

茶々丸は一体どうなる？

ネギ側

2票 楓・古

1票 アーニヤ・木乃香・朝倉・鳴滝姉妹

こちらはこちらで全然投票されませんし……。

1人1キャラにつき1票

候補者上がった面々のアーティファクト案まだまだ募集中なり。

## 第24話(前書き)

【総合評価】 10000PT 【総PV】 31万6千突破!!  
これからも頑張ります!!

零崎煌識様、なおぼん様、サク様、last様、いかずち様  
感想ご意見感謝です!

新規アンケ。

超の家系どうするべきか。

A、原作どおりスプリングフィールド家  
B、紫稀の子孫

さあーどっち!!

遂に最終決戦!!  
そんな24話、どうぞ!

## 第24話

Side・other

『ノクティス・リビリントゥス夜の迷宮』に捕らわれていた王女二人と第三皇女を救出し、反撃を開始した【アラルブラ紅き翼】。

敵と味方の判断をする頭脳担当と、判明した「敵」を打倒する肉体労働担当に分かれ、味方を増やしていき、大活躍。

ラカン曰く、映画なら3部作、単行本なら14巻分くらいは行くであろう6ヶ月の死闘の後、遂に【コスモエンテレケイア完全なる世界】の本拠地を突き止め追い詰める。

その本拠地こそ、世界最古の王都オステイア空中王宮最奥部「墓守り人の宮殿」！！再び、ラカン曰く、ラストダンジョンである。

そして、遂に最終決戦の火蓋が切って落とされようとしていた。

Side・end

Side・紫稀

やっと終わりが見えてきたか。それにあの魔法や隠し玉を使えるのか。

「不気味なくらい静かだな、奴ら」

「なめてんだろ。悪の組織なんてそんなもんだ」

「そんなことはどうでもいいさ。向かってくる奴らを落としていけばいいだけだ」

「ちげえーねえー!」

テオドラかは分からんがヘラスの皇女に髪を切られたんだな、ゼクト……。

「ナギ殿！帝国・連合・アリアドネー混成部隊、準備完了しました」

「おう。あんたらが外の自動人形や召還魔を抑えてくれりゃ俺たちが本丸に突入できる。頼んだぜ」

「ハツ。それで、あの……ナギ殿、蒼識殿」

「ん？」

「なんだ？」

「ササ、サインお願いできないでしょうか」

「おお？ああ、いいぜそれくらい」

「別に構わんが」

私のサインってそんなにほしいものなのかね？そこまで人気があるとは思えんのだがね、いつも仮面被ってるし。

「そ、尊敬していました」

ジャック、笑ってんなよ？後でOHANASHIするか？

「うおっ！なんかいきなり寒気が・・・」

ジャックは何か感じ取ったのか？

ん？通信だな。ガトウのほうか？

『連合の正規軍の説得は間に合わん。帝国のタカミチ君と皇女も同じだろう。決戦を遅らせることはできないか？』

そういえばいつの間にかクルトがいたんだよな。今はないけど。詠春から神鳴流習ってるっぽいし。まあー私としてはどうでもいいんだけどさ、その辺は。

「無理ですね。私達でやるしかないでしょう」

「既にタイムリミットだ」

「ええ、彼らはもう始めています・・・世界を無に帰す儀式」を。世界の鍵「黄昏の姫御子」は今彼等の手にあるのです」

「ああ」

「そうだな」

「よおしつ。や「待て、ナギ」ろ・・・んだよ、アオシキ？」

「最初に大技を使う。露払い代わりだ。それから突入しろ。そして外の安全が確保出来次第私もそっちに合流する」

「分かった。一発派手に行ってくれよ？」

「もとからそのつもりだ。音織、あれをやるぞ」

「あれ？ああーアレか。アレは一人じゃ無理だしな」

「という事だ。闇と氷側を頼む」

本当は一人でも出来るんだけどな。色々と制御が大変なんだよね、一人でやると。

「任せておけ。そっちこそ残りを頼んだ」

「当然！？セラス、総員に魔法障壁を全力で展開させるように通達しろ」

「ハッ！？一体何を」

「それは見てのお楽しみってなー。そんじゃ行こうか」

「ああー」

そう言っつて私とキティは味方の最前線の宙に浮かぶ。

互いに額と額をくっ付け、私の左手とキティの右手を繋ぎ、私は右手をキティは左手を敵陣に翳して、呪文詠唱を始める。

「リック・ラク・ラ・ラック・ライラック」

「其は全てを燃やす 始原の炎 其は全てを包む 豊穡の風」

「其は全てを凍らす 永久とわの氷」

「其は全てを恵ます 神の雷<sup>いかずち</sup> 其は全てを照らす 天の光」

「其は全てを呑込む 終焉の闇」

「「そして其らは有であり無 無であり有 全てを救い 全てを救わぬ 『<sup>ヒキニング・エンド</sup>世界の始まりと終わり!!!』」」

詠唱を唱え終わると翳していた私達の手の先から光とも闇とも炎とも雷とも氷とも風とも取れない不可思議なものが放たれ、敵に向かっていき、届いたものから消滅させる。

敵を消滅させたときの余波で爆風が起こるが、事前に魔法障壁を全力で展開するようにさせておいたので、味方に被害はないようだな。

「ナギ！行け！！」

「よ、よおし、野郎ども。行くぜっ！！」

なんか周りが呆然としてるな、キティもだけど。

さて、そんじゃまあー残りの後始末と行きますか！！

Side・end

Side・セラス

私は今、あの【<sup>アラルフラ</sup>紅き翼】に協力して、真の敵【<sup>コスモエンテレケイア</sup>完全なる世界】との最終決戦の場にいる。



ナギ殿と蒼識殿のサインをもらえて私はかなり舞い上がっているのだろう。

ナギ殿が敵陣に突入しようとしたときに蒼識殿が止めに入り、音織殿と一緒に自陣の前に浮かんで呪文を詠唱していた。

どうやら、先手を打って数を減らすらしい。

そして呪文を唱え終わったのか蒼識殿と音織殿の組んでいない方の手の先から敵陣に向けて何かが放たれ、瞬く間に消滅させていた。消滅させたことによる余波なのか、凄まじい爆風が自陣の方に襲いかかってくるが事前に指示されたように魔法障壁を全力で展開していたため、自陣には被害が出なかった。

そして、爆風が治まったのを確認後、私が見たのは、敵陣に向かっていく蒼識殿と音織殿を除いた【紅き翼】のメンバーと、総数が3割を切った敵だった。

Side・end

Side・紫稀

ナギたちを見送った後、私は先ほどの魔法のことを考えていた。

「ふむ、これは色々と拙い魔法を作ってしまったようだな・・・」

「拙いってレベルの話じゃないと思うんだが・・・」

「いやいや、今のって結構思いつきで創った魔法なだけだし、ま

さかここまでバグつてるとは思ってたよ。

これ、私一人でやったら銀河系の惑星一つは壊せそうな勢いだな」

「何をいきなり物騒なことをいつとるかー!!」

「あれ？もしかして、今の口に出てた？」

「私一人で、つてところから口に出てたわ！と言うか、アオシキ。もしかして、お前一人でもさっきのあれ使えるのか？」

「何を今更？私の適正属性は全てだぞ？苦手属性が存在しないんだ。出来るに決まってるだろう。今回は一人でやると制御が面倒だから音織に手伝ってもらっただけだ」

何そんな諦めたような顔して私を見るんだい、キティ？何も間違ったことは言っていないんだぞ？と言うか私は世界と同一だといっていいような存在なんだがな？今までそのこと忘れてたけどさ。後、始動キーは別に同じじゃなくてもよかつたんだよね。でも、今回は息を合わせるって意味でキティのを一緒に使ったわけさ。

「さて、敵さんも慌てて予備兵力出してきたっばいし、さっさと終わらせようぜ？」

「そうだな。『コスミケー・カタストロフエーおわるせかい』を何回か繰り返せばかなりの数を減らせるだろうし」

「んじゃ、私は久々にあれやろうか。つとその前に夜笠、夜笠つと後アラストールもつと」

やっぱあれをやるなら【夜笠】と【コキユースアラストール】見につけない

とね。

ああー。そういえばもう一個やりたいことあったんだった。

「へい、セラス。私より前に出るなと通達。出ているものはすぐに後退させる」

「了解しました!？」

「蒼識。一体、今度は何をするつもりだ？」

「いや、なに。昔にな性能を知るために一度だけやった技があるんだけど、忘れててさ。久々に使おうと思ってな。そんじゃ私の後ろにいてよ」

「分かったよ。だが気をつけるよ？」

「それこそ分かってるって」

んじゃ久々に使いますか。

「火竜伍式 『円!』!』」

空中に円と字を書き、自分の背後に平面の壁を作り出してっつと。

「火竜合成、漆式しちしき 『虚空』、弐式にしき 『崩』。やれ 『虚崩!』!』」

次に空中に虚と崩の字を書く。そして合図と共に放つ。

烈の炎を知らない人のために説明しておこう。

伍式『円』は面の結界。最低三つの点を結んで出来る壁のようなものだ。耐久力はかなり高い。

次に式式『崩』。これはリリなのアクセルシューターのようなものだと思ってくれ。

最後に漆式『虚空』。リリなの魔砲を思い浮かべてくれ。それを圧倒的な炎で放つんだ。

そして火竜合成。数が多い式から空中に字を書かないと合成できない。

そして『虚崩』は物量の『崩』と質量の『虚空』を合成したもの。リリなのStrikersでヴィヴィオがなのはさんからもらったファンネルつきのSLBスタミイザレイカーを連想してくれば簡単だ。

そんな火炎の砲撃を受けた敵さん方は既に満身創痍なようです。投入されたばかりの予備兵力があつという間に消滅してました。すいませんでした!!

「さて、外はもう危険は少なくなつたな。音織！私はこれからナギたちと合流する。ここは任せたぞ」

「今については何も言わん……。分かつたよ。さっさと行つてこい」

んじゃ、いつてきまーす。

それにしても、結局『ニエトノシヤナ贄殿遮那』やらなかつたから【夜笠】とか出した意味がなかつた……。

「見事・・・理不尽なまでの強さだ・・・」

「黄昏の姫御子は・・・どこだ？消える前に吐け」

私が追いついたときには既にナギと初代白髪の決着はついていたようだ。

「フ・・・フフフ・・・まさか君は、いまだに僕がすべての黒幕だと思っ  
っているのかい？【全てを統べる者】は気付いていたようだけど」

「なん・・・だと？」

若干台詞が変わってる気もするがこの後は。やっぱりか！

「ナギ、気をつける！」

「!?!?」

「ナ・・・ナギイツ!!!」

「誰だ!?!」

「いかんツ」クラティステアアイギス『最強防護!!!』

ゼクトはすぐさま最大級の障壁を張るがそれでは足りん。それが分かっていたからすぐさま【無銘】ムネイを取り出し、【無銘】ムネイに取り込んでいた術式を発動させる。

そしてゼクトの障壁が破られると同時に完了する。

「『敵弾吸収』」

ぐっ……流石に造物主ライフメーカークラスの魔力は簡単に吸収できないか。ゼクトが削ったあとの半分の威力程度しか打ち消せなかった。でも、それでも十分だ。削られる前の半分以下なら他の面子には、死ぬほどのダメージはないだろうし。

「コンプレクシオ 掌握 魔力付加 【対象・無銘】 完成型太陰動 『無銘太極』」

造物主め、2400年で大分力をつけたじゃねーか。やはり最強クラスの上位にまで上ってくるか。

「ぐっ……バカな……」

「まさか……アレは……」

かなり無理やり吸収したから、結構体に負担がかかったっぽいな。造物主が引っ込んでくがすぐに追いかけられないな。

「待てコラてめえっ!!!」

「任せなジャック」

ジャックは前の方で防御してたようで両腕が飛んじまってるし。

「い……いけませんナギ! その身体では」

詠春はナギを庇ってたからな。かなり傷が酷そうだ。

「アル、お前の残りの魔力全部で俺の傷を治せ」

「し、しかし。そんな無茶な治癒ではッ」

「30分もてば充分だ」

「ですがッ」

「ふふよかろう。ワシもいくぞナギ。ワシが一番傷も浅い」

「お師匠・・・」

「ゼクト！ たった二人では無理です！」

「ここで奴を止められなければ世界が無に帰すのじゃ。無理でも行くしかなかるう」

「安心しろ、アルビレオ。私も一緒にいくさ。さっき、やつの魔力をそこそこ吸収してやったからな」

造物主がどれほど強くなったのかも知りたいしな。さっきの一撃だけでは判断しかねるし。

「ナギ待て！ 奴はマズイ。奴は別物だ。死ぬぞッ。態勢を立て直してだな・・・」

「バーカ。んなコトしてたら間に合わねえよ。らしくねえなジャック」

「本当、お前らしくもない」

「俺は無敵の【千の呪文の男】だぜ？」  
サウザンドマスター

「私はその無敵よりも上だぞ。俺らは勝つ！！任せときな」

「ナギイ！！シキイ！！」

まあーあんなこといったが、本来の7割出せれば充分ってところだな。

「私が前衛を引き受ける。ナギは後衛で、ゼクトは中衛を頼む」

「そうだな」

「わかったのじゃ」

あそこか！？

「先手を打つぞ。二人とも合わせろ！」

そう言って私達は無詠唱で魔法を使う。

「『千の雷』……」  
キーリブル・アストラペー



ナギやゼクトといえど流石に無詠唱だと威力が落ちるか。だが、充分だ。

「神鳴流神儀型氷系最終奥義 獄・氷淵剣！」

いつもの獄・氷淵剣もかなりの威力を持つが、今回は更に造物主の魔力を吸収した『無銘太極』で放っているから通常の3倍以上の威力を持っている。持っているはずなんだがな……。

「これを受けてまだ立っていられるのか」

「この程度で死ぬわけがない！」

「そうだな。そろそろ自己紹介といこうか。私に関してはあまり情報を得られなかったのだろうか？」

「確かに貴様の情報だけはかなり少なかったが」

「改めまして、【紅き翼】アラルフラ所属、零崎蒼識。またの名を

言いながら肉体変化を使用する。

「【破滅を齎す黒】ノワール。そして

「なっ、貴様は……！」

そして再び肉体変化で白純から本来の姿に戻る。

「真名、神儀紫稀。神の力を持つものだ」

「2400年前の借り、ここで返させてもらおう!!」

「てめえーじゃ無理だよ、造物主」

「ウーラニア・フロゴシス  
燃える天空!!」

「ヤクラーティオ・フルゴリス  
雷の投擲!!」

「神鳴流神儀型風系最終奥義 絶・風纏剣!!」

「ナイスタイミングだったな、二人とも。」

「やつも今のでかなりのダメージをおったはずだ。此処からは私とナギで前衛、ゼクトは後衛で支援に回ってくれ」

「いくぜっ!!」

「援護は任せるのじゃ!!」

私は『無銘太極』を使いながらナギと共に造物主を追い詰めていく。

そして遂に、造物主の方も限界に近づいたのか再び喋りだす。

「フフ・フフはは、はははははははは。私を倒すか人間。それもよかるうツ。私を倒し英雄となれ。羊達の慰めともなるう。だがゆめ忘れるな。全てを満たす解はない。いずれ彼等にも絶望の帳が下りる。貴様も例外ではない」

「造物主。お前の絶望の帳とは魔力資源の枯渇のことか？」

「貴様は何故そこまで知っておる！！」

「情報元なんてどうでもいいんだ。だが残念ながらこの世界の魔力が枯渇することはないんでな。お前の持っているという創造主の力は所詮紛い物だ。本物の神の力つてのを私は持っているんでね」

「信じられるか！！肯定してしまえばこれまでの私を否定することにしかならぬ！？それだけは肯定してはならん！！」

「グダ、グダ、うるせえええッ」

いいところでナギが入ってきてくれた。空気読んだわけじゃなさそうだけどな。

「たとえ。明日、世界が滅ぶと知ろうとも！！あきらめねえのが。人間ってモンだろうがッ」

「くつくく・・・【滅びを齎す黒】のいう事が嘘か真か知らぬが貴様らもいずれ私の語る「永遠」こそが「全て」の「魂」を救い得る唯一の次善解だと知るだろう」

「人。間。を。なめるんじゃねええええーッ！！！」

これで終わったのか？だが微量ながら奴の気配が残っている。この方向は！？

「武の英雄に未来を造ることはできぬ。貴様には結局何も変えられまいよ。だが果たして・・・自らに問うがよい。ヒトとは身を捨てて

まで救うに足るものか？」

ゼクトの身体を乗っ取ったってわけじゃなさそうだな。一時的な憑依か？

「……人間は度し難い。英雄よ。貴様も我が2600年の絶望を知れ」

「たかが2600年で絶望してんじゃねーぞ！？絶望している時点でめえーはめえーの言う度し難い人間と同じだと思え！？」

「……フツ、そうなのかも知れぬな。さらばだ……」

どうやら完全に造物主は消滅したようだ。ゼクトの身体から僅かに残っていた気配も消えたし。

「ナギ。満身創痍のゼクトを回収してアスナの救出するぞ」

「あーそうだな。ところでシキ。さっきのお師匠は一体……？」

「安心しろ。造物主に一時的に身体に憑依されただけだよ。既に気配も消えている。何の問題もないだろう。それじゃあ、さっさといくぞ」

そうやって私達はゼクトを背負い、アスナを救出し、オスティアを犠牲に最終決戦を制したのだった。

Side・end

## 第24話(後書き)

ゼクト生存！

今まで「ゼクトエ・・・」だったのでここらで優遇してあげても構いませんよね？

その代わりに詠春の影がかなり薄くなったけどな！！

アンケート現状7/23/23:25

紫稀側

26票 アスナ

23票 このせつ(合計)

15票 千鶴

14票 ゆーな

12票 木乃香(単体)・真名・茶々丸

11票 せつちゃん(単体)

06票 刀子先生・シャークテイ

04票 円

03票 桜子

02票 さよ・古

01票 楓・愛衣

まだまだ続くよアスナの独壇場！負けじとゆーなと千鶴、このせつ

も地味に再燃！

流れるにアスナはハーレムメンバー入り！でも、動かしづらいで  
すよね……。

茶々丸は一体どうなる？というかハーレムメンバー11人になりそ  
う……。

ネギ側

2票 楓・古・朝倉

1票 アーニヤ・木乃香・鳴滝姉妹

こちらはこちらで全然投票されませんし……。

1人1キャラにつき1票

候補者が上がった面々のアーティファクト案まだまだ募集中なり。

## アンケート状況

現在行っている候補者からの確定への昇格アンケートについて。

ナツ様、ひばり様、魔術使い様、マジすか様、シスターズ様、神のみぞ知る様、無敵生徒会長様、  
ハーレム宣言様、世界 ザ・ワールド様、ライブ様、夜間巡様、カ  
ードマスター様、切り札さま、  
秋色のアリア様、究極キマイラZ様、輪廻転生様、甲斐の鬼様、裸  
の王様様

01票 茶々丸・木乃香・刹那・アスナ  
02票 アスナ・ゆいな  
03票 テオドラ・桜子  
09票 ドネット  
11票 刀子先生  
13票 釘宮  
14票 柿崎

以上の方々と票に違和感があります。

短い間隔で柿崎と釘宮と刀子先生を押している時点で、

全て同一人物なような気がするのですが、如何でしょうか？

違っていたらすみません。

ですが、かなり違和感があったので念のためとして今回載せることにしました。

次に超をどうするかアンケート。

A、原作どおりスプリングフィールドの家系

B、紫稀の子孫

と言つのですが、Bだと超が過去に来る必要性がないのに気付きました。

超が過去に来る理由としては魔法世界の崩壊なので、

紫稀がいればどうにでもなるといふとんでも理論なんですけどね。

なので超が来るなら、正史の未来線から外史への世界線移動、

紫稀が存在しない外史の未来線からの紫稀のいる外史への世界線移動しか考えられなくなりました。

アンケート変更で、

A、原作どおりの超が過去に来る

B、過去に来ない

の改めてこの二つにします。

ハーレムメンバーへの昇格アンケートは明日か明後日までになりそうです。



## 第25話（前書き）

【総PV】 33万【文章評価】 100PT突破！！

SILVER様、黒部様×2、レイト様、パンチ様×2、アサキム様、

ブルック様、レイフォン様、なおぼん様、紅蓮様、派遣社員様、

十六夜様、コンゴロ様、月神楽様、杉やん様、神無月様、Testament様

感想ご意見感謝です！

視点が転々するよ！それと久々にあいつが出るんだ！！  
そんな25話、どうぞ！

## 第25話

Side・other

紫稀とナギ、ゼクトの三人は造物主を倒すも、間に合わず、「世界を無に帰す儀式」の発動を許してしまう。その結果、広域魔力減衰現象が観測された。

しかし、その危機にやってきたのはMM国際戦略艦隊旗艦、帝国軍北方艦隊の協力と、ウエスペルタティア王国現女王アイネ・アナルキア・エンテオフュシアと現女王補佐のアリカ・アナルキア・エンテオフュシア王女の指示により、集結した全艦隊で「墓守り人の宮殿」を取り囲み、魔導兵団 大規模反転封印術式を起動し世界を救うことに成功した。

オスティアを崩落させるという、多大な犠牲を払うことで。

Side・end

Side・紫稀

造物主を倒し、気を失っていたゼクトを背負いながらアスナを救出しなんとか宮殿の外に出た私とナギは、そこで意識を手放した。

そして、目を開けてみた光景は。

「知らない天井だ」

あれ？前にも似たようなことしたな。

「シキ。起きたようですね」

「なんだ、ヘンタイか」

「酷い言い草ですね。宮殿の外で倒れていたあなた達を運んで連れ帰ったのは私と詠春、ジャック、そしてエヴァンジェリンですよ？」

「そうですね。ドウモアリガトウゴザイマス」

恩着せがましいヘンタイだな、相変わらず。

「どういたしまして。当然のお礼としてあなたの半生を記録したいのですが？」

「却下だね」

誰がヘンタイなんかに見せるかってんだ。

「それで結局のところどうなった？」

「アラルフロ【紅き翼】は全員無事生存。アスナ姫のほうも元老院に気づかないところで保護しています。それと・・・」

「オステイアは崩落か？」

「知っていたのですか」

「大抵のことなら知っている」

「2400年前にも一度、造物主と戦っているしな」と、口に出さずに思う。

「ん？そういえばエヴァはどこだ？」

「そこにいるじゃないですか」

おー、ここにいたのか。寝顔が可愛いな。撫でとこう。

「ん・・・」

「おいヘンタイ。ニヤニヤしながら見てるんじゃないか。どっかいけ」

「おやおや、辛辣ですね」

「んあ・・・シキ？起きたのか、シキ！身体は大丈夫なのか！？辛いところとかはないか！？」

「大丈夫だ、キティ。どこも問題はない」

「そうか。それ「シキ！起きたんだってな！大丈夫か！？」は・・・」

空気読めよ……。あつバカだから読めないのか！納得。

「お前こそどうなんだ。私よりも酷かったような気がするんだがな」

「俺は大丈夫だぜ。そんじゃ行こうぜ」

「どこへだよ……」

さすがバグキャラ。そういえばアルビレオヘンタイはどこに行った？

「俺たちの表彰だよ、表彰」

ああーなるほど。それでか……。

「そういえばアルはどこいったんだ？」

「逃げたんだろ。どうせ、上がり症なもので。とか言っただけ」

「まあーいいや。行こうぜ」

「ああー。キティも行こう」

「そうだな」

「ちょうどいいし、あれやるかな」

「何のことだ？」

「まあー後のお楽しみってことで」

反応が楽しみだ。

Side・end

Side・other

式典に参加し【アラルブラ紅き翼】は世界に知らぬ者なしの英雄となった。

それにあわせて紫稀は企み事の一つである、賞金の取り消しをするため、実行に移すことにした。

まずはナギと詠春、ジャックが表彰され、次は紫稀とエヴァ、ゼクトの番となった。

紫稀はアリカ、エヴァはアイネ、ゼクトはテオドラからメダルを承り、紫稀たちは民衆の方へ振り返る。

振り返りざまに、紫稀は自分とエヴァの狐の仮面と認識障害を解除し、自身の外見を白純にする。その行動にエヴァは困惑を隠せない。

そして、彼らの顔を見た民衆は恐怖に駆られ悲鳴を上げる。

突然の騒動に戸惑うアリカとアイネだったが、すぐさま紫稀の意

図を読み取り言葉を発する。

「「みなのもの、騒ぐでない！」」

その言葉と共に民衆はとりあえず落ち着きを見せる。そしてアリカとアイネは次の言葉を発する。

「見ての通り、零崎蒼識は彼の悪名高き【破滅を齎す黒】、零崎音織は【闇の福音】<sup>ダーク・エヴァンジェル</sup>だ。だが、しかし、彼らは我らに協力し、世界の危機を救ったのは紛れもない事実。そして、彼らの行っていたと言われていた悪事の数々だが、彼らはそのような悪逆非道な行いをしていないことが分かった！証拠の資料や映像が残されている。後々その資料などは公開する！それに伴い、此度の件も含めて彼らの賞金を完全に取り消す！？」

「それと零崎蒼識。あの二つも公開してくれ」

「分かりました。アイネ女王」

そう言つて紫稀は荒耶宗蓮の外見になる。

その外見に覚えがある民衆は驚きの声を上げる。

「零崎蒼識には様々な顔がある。その一つが先ほどの【破滅を齎す黒】。次に今の【白き救済者】ブラン。みなも知っておろう、御伽噺にある救済者のことを。彼はその救済者本人だ。そしてさらにもう一つ」

その言葉を合図に、紫稀は外見をシャナ（15歳Ver）に変え、【夜笠】を纏い【アラストール】<sup>コキョートルス</sup>を首にかけ片手に【無銘】を持つ。

「トレジャーハンターの者なら知っておるであろう【炎髪灼眼】でもある」

その発言と共に再び民衆は驚き、一部では歓喜するものもいた。

「つまり零崎蒼識は永いときを生きる伝説の人物である！」

考古学者といった者たちはその言葉で狂喜乱舞していた。

他の民衆達も負けじと歓声を上げる。

「以上で式典は終わりだ！」

その言葉と共に式典は終わりを告げた。多くの民衆の声と共に。

Side・end

Side・紫稀

思った以上に楽に事が進んでしまっただけ気が抜けた。

一応賞金は取り消されたが、納得できない奴らもいるだろうな。特に正義の魔法使い（笑）とか元老院議員の一部とかは。

まあーこれから先はどうなるかな。

おっとそうだった。お姫様方はオスティアが崩落するって焦ってたわけ。どうやって解決しようかな。と言うかオスティア崩落を防



いでもアリカたちは【コスモエンテレケイア完全なる世界】に繋がっていて父王殺しをしたってことで、スケープゴート生贄にされて処刑されんのかね？まあいいか。処刑の方法をこちらで操作すれば。そうすれば色々と事が楽に進めれるし。

さてと。オステイアの民を救いに行きますかねー。

Side・end

Side・other

「空中王都の崩落拡大中！！本艦の中位にも強力な魔力消失現象！即席の対抗呪紋塗装装甲がいつまで持つか・・・」

「泣き言はいらん！！あと数時間持てば充分だ！」

「最も的確に市民を救えるよう最大効率で舟を回せ！！ただし！！捨てて良い命はない！！」

「一人も救いもらすな！これは厳命だ（じゃ）！！」

オペレーターの言葉にアリカとアイネは指示を出す。

そこへ再び、避難状況の報告が入る。

「スラム貧民島の避難作業が難航しています！このままでは！！」

「理由は！？」

「街の構造が複雑な上・・・不法移民が多く、全住民の把握が・・・」

「・・・ッ」

アイネとアリカは報告に言葉を失うもすぐに行動へ移る。

「わかった、ここは任せる」

「陛下！殿下！どこへ！？」

「<sup>スラム</sup>貧民島は私達が直接赴き島ごと不時着させる！」

「しっ、しかし」

「妾たちの魔法ならこの魔力消失減少の中でも無効化されぬ」

「いけません、女王陛下ッ、王女殿下ッ」

クルトの静止を呼びかけることに返事をせずに歩く二人。そこへ通信が入る。

『ゴルアアーツ！こんのバカ姫たち！！やい、アイネ、てめえっ！  
！！どついうこつたコレは！？』

『ナギ・・・』

ナギからの通信に反応を示すアイネ。アリカは一瞬立ち止まるも構わずそのまま先へ進んでいく。

『見てのとおりだ。世界を救う代償に自らの国を亡ぼした。案ずるな。私も遠くないうちに地獄へ墜ちる』

『……ッ。なんで話さなかったこの唐変木!!』

『話しても無駄であろう。戦いしか能のないお前が一人で何の役に立つ』

『くそッ。今からそっちに向かうから待っつけ、てめえ』

『ここにそなたの力はいらない!!私を助ける暇があるのなら避難民の頭上に落下する浮遊岩の破壊を要請する!!まだ崩落を始めていない地区を頼む!ただし、この魔力消失現象の中ではそなたも満身に飛べまい』

『む……』

オスティアの完全崩落の危機を前に彼らはこれからの指針について話す。

『我らの逃亡生活中に使用したボロ舟にも対抗呪紋処理を施してある!それを……』

『もう乗ってるよ……!』

『ならば良い。では救出活動に全力を尽くした後、そなた達はそのままここを去れ。二度と戻るな。最後の命令だ』

『何……?そりゃどーゆー……』

『切るぞ。この通信の間にも民が死んでいく。通信終了』

『オイツ待て！』

「へ、陛下しばしお待ちを！！」

アイネが通信を強制的に切ろうとするのをクルトが止め言葉を続ける。

『アルビレオ・イマ！聞いていますか！？クルトです！！』

『ハイ、何です？クルト君』

『アイネ様のおっしゃる通りにするのが賢明かと思います。もし戻れば・・あなた方はメガロメセンブリアに拘束される可能性が高い！！今は身を隠してください！時が経てば、自体は好転する筈です。とにかくコレが終わったら逃げてください！！いいですね！？』

『わかりました。ナギのコトはお任せを』

クルトとアルビレオが話している最中、後ろでナギは味方に押さえられ、喚いていた。

『すみませんナギ・・これがアイネ様のお望みでもあると思いますので・・・』

『・・・・・！』

『お前達には世話になったな、さらばだ』

『陛下にもご武運を。それとそちらにはシキが』

シキの名を聞いたアイネとクルトは驚きを露にする。魔力も使えない場所で一体何をするのかと。

そして通信は切られた。

Side・end

Side・紫稀

「さて、キティ。どうするよ?」

「なんだ?何も考えてなかったのか?」

そりゃそうでしょ?行き当たりばったりなんだから、今回ばかりは。因みに今、私達は崩落寸前のオスティアにいるんだぜ?」

「誰に言ってるんだ、誰に」

「画面の向いっつの皆さん?」

「疑問系でメタ発言するなーッ!!」

怒った顔も可愛いじゃないか、うん。撫でよう。

「そうだ、キティ。ゼロ出しておいてよ」

「それはいいが、魔力は使えないのにどうするんだ？」

「魔力がなくなつて私達には神通力があるじゃないか」

「なるほど、神通力を供給するんだな」

「その通りだ。そんなじゃ、リミッター外すとしますかね。リミッター完全解除。『<sup>キーワード</sup>解除暗号・世界と共に』」

ふむ。やつぱ長い間完全解除してなかったからな。さてとキテイに供給つと。

「契約執行・無制限！紫稀の従者『エヴァンジェリン』！！」

「契約執行も久々にやったな。大抵は自前のだけで充分だったから、する機会もなかったし」

「ケケケ、久シブリノ出番ダト思ツタラ、メンドクセエコトニナツテンジャネエカ。ゴ主人、旦那。」

「そう言うな。お前が出てると色々と問題が起こるんだ。んじゃ補助魔法使うかね。」

「ファル・ラス・セ・ラウス・セツト・リリース 全てを包みし癒しの風 人々に恵みを 神の祝福を 『神の守護』！！」

よし、神通力できちんと起動したな。これでオスティアの民の耐久力が飛躍的にあがっただろ。

「キテイ、落下してくる浮遊岩を破壊しつくそう。キテイは東側か

ら北側へ、私は西側から南側に向かう！」

「了解した。気をつけるよ、シキ」

「誰に言ってるんだ、キティ。それじゃいくぞ！！」

「ああ（オウ）！！」

Side・end

Side・other

紫稀はエヴァとチャチャゼロと分かれて身動きの取れない人た  
ちを救出しながら浮遊岩を破壊していく。

そして、確認のために視線を動かしていると、見覚えのある人物  
を見かけた。

「あれは、アリカ？何故こんなところに・・・」

紫稀の呟きが聞こえたのかアリカも紫稀のほうへ視線を向け、驚  
きを露にした。

「シキ！何故おぬしが此処におる！！」【アラルアラ紅き翼】の他の者達と一緒に  
じゃなかったのか！？」

「いつも一緒にいるわけではない。それに今回はあいつらじゃ役に  
立たん。だから私とキティが出張ってるんだ」

「おぬしらとて魔法は使えないはずじゃろ！？さつさと避難せんか！？」

アリカの当然の疑問に顔を変えずに逃げ遅れた人を助ける手も休まず答える。

「別に私とキティは魔力や気しかない使えないわけじゃない。だから避難作業を手伝っているんじゃないか。それに怪我人が想像より少ないのを疑問には思わなかったのか？」

「ッ！まさかこれはおぬしがやっておるのか！？」

「正解だ。私は神通力を持っているんだ。それも造物主のようなまがい物ではなく限りなく本物に近いものをだ」

その答えに、だから【紅き翼】の誰もシキに勝てないのか。とアリカは漏らす。

「口を動かしてる場合でもあるまい。さつさと避難を完了させるぞ！キティの方からも連絡があつた。今のところ取りこぼしなしで避難誘導出来ているようだ。それとアイネ女王と合流したと」

「そうか。ならば妾も頑張らねばなるまい。オスティアの民のためにも！」

その言葉と共に紫稀とアリカは更に歩みを進める。「全ての民を救いもらさぬ」と心に刻みながら。



オステイア崩壊という前代未聞の大災厄は、死者は1人もおらず、人口の1%ほどが軽い怪我をしただけと言う、大災厄とは到底思えない、奇跡的な結果で終わった。

そしてオステイア崩壊から2カ月後、アイネ女王とアリカ王女は逮捕され、2年後に処刑されることとなった。

S i d e . e n d

## 第25話（後書き）

色々ご都合になった。

無理やりすぎたね。すいません。

次回、処刑阻止！？

アンケート現状7/24/16:40

ハーレム昇格アンケート

紫稀側

29票 アスナ

27票 このせつ（合計）

17票 ゆーな

16票 千鶴

14票 木乃香（単体）・茶々丸

13票 せつちゃん（単体）

12票 真名

09票 刀子先生

07票 シャークティ・円

05票 桜子

03票 柿崎

02票 さよ・古・愛衣

01票 楓・テオドラ・ドネット・ネカネ

ネギ側

2票 楓・古・朝倉

1票 アーニャ・木乃香・鳴滝姉妹

アスナの独壇場は変わらず！ゆうなと千鶴、このせつも地味に再燃！  
流れるにアスナはハーレムメンバー入り！どう動かせばいいんだ？  
茶々丸は一体どうなる？というかハーレムメンバー10人になるか  
も。

そして真名はハーレムにならない？

現状は茶々丸の14票までの6人を昇格させる予定。

最終結果は不明なり。

ネギ側は全然投票されません・・・。

1人1キャラにつき1票

超の扱いアンケート

A 過去に来る 4票

B 過去に来ない 0票

B案が採用されればありえたかもしれない未来を書くかもしれない。

候補者上がった面々のアーティファクト案まだまだ募集中なり。

## 第26話（前書き）

【総PV】35万【総ユニーク】4万【文字数】10万飛んで11万突破！！

こんな駄文を読んただき感謝です！！  
クオリティを上げていけるように頑張りたいと思います！

マクア様、レイフォン様、ゴンゴロ様、ねこ犬様、ドラグノフ様、  
なおぼん様、

Testament様、ブルック様、レック様×2、薫様、Dai  
様、光月様

感想ご意見感謝です！

ご都合主義乙！

そんな26話、どうぞ！

## 第26話

Side・other

オステイア崩落から約2年。今はなきウエスペルタティア王国の女王アイネ・アナルキア・エンテオフユシアと王女アリカ・アナルキア・エンテオフユシアの処刑の日が迫っていた。

メカロメセンブリア  
MM元老院議員は処刑の日を待ちわびていた。自分達の罪状を押し付けることが出来る生贄スケープゴートの終わりの時を。

彼らは知らない。自分達がある者たちの手のひらの上で踊らされていることだ。

Side・end

Side・紫稀

やっとこの日が来た。アリカとアイネ女王が逮捕された時からガトウやタカミチ、クルトと共に着々と準備を進めてきた。元老院議員に巢食つ老害の処理のために。

私達【アラルブラ紅き翼】は変装をして連合の兵士の中に紛れ込んでいる。

そして衆目の前にアリカとアイネ女王が姿を見せた。

「魔獣つごめくケルベラス溪谷

」

計画開始の時は来た!?

Side・end

Side・other

「魔獣うごめくケルベラス渓谷。魔法を一切使えぬその谷底は魔法使いにとつて、まさに「死の谷」。古き残酷な処刑法ですが・この残酷さをもって、ようやく、魔法世界全土の民も溜飲を下げることとなりま「そうだな。確かにその通りだ。やっと腐った老害を駆逐出来る」しょ・誰だ!？」

処刑の方法を説明していた元老院議員の言葉を遮る声があった。

その声の持ち主は神儀紫稀。

魔法世界では零崎蒼識のほつが有名であろう。

「誰とはご挨拶だな、元老院の腐った老害共。生放送で今回の処刑を流したり、ここに集まつてる人間に関して何か思うところはないのかい?」

「貴様は零崎!?!何故貴様がここに!?!ハッ!?!」

紫稀の言葉に反論するも何かに気付き口を閉ざす。

「そう、その通りだ。お前さんらが思ってる通りだよ。実を言うと

な、今回の処刑を生放送にしたり、ここに集まってる人間を処刑に立ち合わせるように調整したのは私達【紅き翼】アラルブラなんだよ。主に私とガトウ、タカミチ、クルトなんだけどな」

「なにっ！？どういっつもりだ！？」

紫稀の登場と共に老害たちは周りを警戒する。

「別に説明する必要性はないんだけどな、一応説明してやるよ。今回の処刑対象はアイネ女王でもアリカ女王でもないんだ。一部を除いたお前達元老院や帝国の政治家達なんだよ」

「対象が私達だと！？一体何を言っている！？」

「何っってお前達が一番分かっているはずだろう？【完全なる世界】コスモエンテレケイアと繋がっていた老害が！？」

紫稀の言葉を聞いていた一部以外の周りの人間や、生放送を見ていた魔法世界の住人の顔には驚きや憎悪、怨嗟しかなかった。

一部と言っるのは当然、【完全なる世界】コスモエンテレケイアと繋がっていた老外たちで、その顔には恐怖が張り付いていた。

「実はさ、あんたら全員の不正に関する証拠は既に余さず調べ上げて、ここにあるんだわ」

そう言った紫稀の手に、かなりの量の紙束があらわれた。それを紫稀はカメラに向かって掲げ、話しを続ける。

「それとさ、この証拠の数々には【完全なる世界】コスモエンテレケイアのことも書いてあるんだ。つまり、誰が【完全なる世界】コスモエンテレケイアと繋がっていて、繋がっ

ていないかも分かるわけだ」

紫稀の言葉を聞いて逃げようと画策する人間がいたが、隠れていた【紅き翼】の面々や彼等の行動を事前に知っていた個人的な繋がりのある人物たちによって、悉く邪魔されて失敗していた。

「そしてさ、この中に【コスモエンテレケイア完全なる世界】の協力者としてアイネ・アナルキア・エンテオフュシアとアリカ・アナルキア・エンテオフュシアの名前はない。あつたのは前王の名前だ」

その発言と共に魔法世界の住人達は更なる事実<sup>に</sup>驚愕しかなかった。

「まあー、なんだ。前口上が長くなつちまつたけど、処刑対象はこの書類の中に名前が載っている人物達だ。ああー別に名前挙げなくてもいいよな？既に私達の手で拘束してあるし」

紫稀の言葉を聞くまで気付いていなかったのか、多くの人間が既に身動きの取れない状態になっていた。

「というわけで、兵士諸君。拘束されている人物達を問答無用で谷底に落としてくれたまえ。それで戦争を引き起こしていた連中の処刑は終了だ。そして、アイネ元女王とアリカ元王女の拘束を解いてくれよ」

その言葉を合図に、多くの兵士が拘束されていた人物たちを谷底に落としていく。アイネとアリカの近くにいた兵士は拘束を解くほうに向かっていた。

「アイネ嬢、アリカ。ウエスペルタイア王国は滅んだ。お前達は



既に女王でも王女でもない、ただの女性だ。これからは好きに生きるといいさ。ああーアイネ嬢にはナギが言いたいことあるからそっち行ってくれ。私はアリカに用事があるから」

「あ、ああー……。今回のこと感謝するシキ」

「気にするな。私は元老院の老害が気に入らなかつただけだ。お前達が助かったのはただのおまけだ、おまけ。ほれ、さっさと愛しの騎士の方にも行つて来い」

紫稀が言った「愛しの騎士」のところでアイネは真っ赤になるも、ナギの方へ向かう。アイネの背中を見送りながら紫稀は再び口を開く。

「さて、アリカ。実はお前さんに言いたいことあるんだけど聞くか？」

「なんじゃ、その歯切れのない言い方は。お主らしくもないではないか」

アリカの言うとおり、今の紫稀の口調はお世辞にもはっきりしているとは言えなかった。

「まあーなんだ。ある意味最悪な気もするんだけど、正直な気持ちと言いたくてな」

「は？何が言いたいんじゃないか……？」

アリカは紫稀の言おうとしていることを理解できず聞き返す。いや、これだけで理解しろってのが不可能ではあるが。

「ウエスペルタティアの王女でないアリカという女性に言う。私は男としてお前を愛している。私の妻になってくれ」

「は？お主はいきなり何を言い出すのじゃ？そう言ってくれるのは嬉しいが、おぬしは既にエヴァンジェリンと結婚しておるではないか？戯言も過ぎるぞ」

アリカは紫稀の言葉を信じきれない。そりゃあ、既婚者である紫稀からプロポーズを受けるとは思わないだろう。

「いや、この件は既にキティからも許してもらっている。お前が私に只ならぬ恋愛感情を抱いていたことも承知の上でだ」

「そうだとしても、一体何故じゃ？」

「最低なことを言っていることは重々理解している。だがしようがないだろう。私は男としてアリカという女を愛してしまったのだから」

「・・・本当に私でもいいのか？」

紫稀の言葉に恐る恐る言葉を返すアリカ。

「アリカじゃないといけないんだ！キティも愛しているが、同じくらいアリカも愛しているんだ！どちらかを疎かにするつもりもない平等とか均等に愛するのではなく、私の全ての愛を二人に注いで見せる！？必ず二人とも幸せにするさ！？」

「だったら私の返事は決まっている。私はシキの妻になりたい！私

の全てを使って私はシキを愛すると誓おう」

紫稀の宣言にアリカは誓いで返す。

紫稀とアリカがお互いにプロポーズをしている時、もう一組はどうしていたかと言つと。

「アイネ、アンタのことが好きだ」

「なっ!?!」

ナギの唐突な発言に、アイネは顔を真っ赤にして言葉が出なくなっていた。

「俺と結婚してほしい。．．．アンタの言う罪や後悔も．．．まだ残る民への責任つてヤツも．．．全部一緒に背負つてやるぜ」

その言葉にアイネは驚きを隠せない。

「なっ」

「む……」

自分が背負うと決めた全てを、一緒に背負うと言ってくれる最も愛おしい男。

アイネは少し考え、自身に宿る想いを告げる。

「はいっ」

と。

こうして今日、魔法世界で一番有名になる新たな二組の夫婦が生まれ、大分裂戦争の真実は明かされ、×ガロメセンブリアMM元老院の今までの数々の虚偽と不正は正された。多大なる罪を背負った者たちを処刑して。

「災厄の女王」と「災厄の王女」と言う烙印は消え去り、女王と王女は真の英雄となった。そして彼女達二人は表舞台から去ったと言っ。

Side・end

## 第26話（後書き）

文章構成がめっちゃくちゃだ……。  
ついでにご都合主義乙！！

次回大戦終了から麻帆良行きまで！  
何話になるかわからない！！

他作品からあるキャラ出したいです。

エヴァ様 忍 ミスド これで分かりますよね？

アンケート現状7/24/22:44

ハーレム昇格アンケート

紫稀側

32票 アスナ

30票 このせつ（合計）

19票 ゆーな

17票 千鶴

16票 茶々丸

15票 木乃香（単体）・せつちゃん（単体）

14票 真名

09票 刀子先生

07票 シャークティ・円

05票 桜子

03票 柿崎

02票 さよ・古・愛衣・亜子

0 1 票 楓・テオドラ・ドネット・ネカネ

ネギ側

2 票 楓・古・朝倉・鳴滝姉妹

1 票 アーニャ・木乃香

アスナの独壇場は変わらず！ゆーなど千鶴、このせつも地味に再燃！  
流れるにアスナはハーレムメンバー入り！どうかせばいいんだ？  
茶々丸は一体どうなる？というかハーレムメンバー10人になるか  
も。

そして真名はハーレムになれない？

現状は茶々丸の16票までの6人を昇格させる予定。

紫稀側 最終締め切り 2011/07/25/23:59まで！！

ネギ側は全然投票されません・・・。

1人1キャラにつき1票

超の扱いアンケート

A 過去に来る 6 票

B 過去に来ない 0 票

B案が採用されればありえたかもしれない未来を書くかもしれない。

候補者上がった面々のアーティファクト案まだまだ募集中なり。

## 第27話（前書き）

超来訪アンケート圧倒的過ぎる。もう締め切ろうかな・・・。

志貴様、レック様×2、KEN様、神父様、メダル様、水竜様、ゴ  
ンゴロ様、

今夜のおかず様、海斗様、カルト様、なおぼん様、赤白黄色様、十  
六夜様、

シユウ様、派遣社員様、緋皇 龍也様、ゆや様、いぬはち様、大川  
勇輝様

感想ご意見感謝です！

なんかクロスしたんだ！

そんな27話、どうぞ！！

## 第27話

S i d e ・ o t h e r

アイネとアリカの処刑は、メガロメセンブリアMM元老院議員などの粛清に取って代わった。

この処刑は後に、歴史的処刑【一斉粛清】と呼ばれるようになる。

そして、無罪放免となったアイネとアリカは自身の最愛の男と共にいる。

S i d e ・ e n d

S i d e ・ 紫 稀

老害どもの粛清から数日、私達【アラルアラ紅き翼】とアリカ、アイネ嬢、アスナを加えた13人は京都に来ている。

何故、京都かというと、ナギが前にアイネ嬢とデートしていたときにアリカとアスナも連れて行こうとか誘ったとか誘っていないとか。

実際は私とアリカの新婚旅行兼ナギとアイネ嬢の婚前(?)旅行のついでみたいなものだ。

まあー詠春に誘われたからってのもあるけどな。前回来たのは魔法世界に行くときだったから大体7年位か?いつもよりは早かった



かな。

そこで、現在私たちは近衛家、つまり関西呪術協会に来ている。

ここまで来るのが大変だった……。ナギやジャックが清水寺の舞台から飛び降りようとするわ、アルビレオヘンタイが通りすがりの少女をナンプパしようとするわ、タカミチがアスナに言葉の暴力で傷つけられてクルトに背負われたりするわで……。

なんなんだよ！あいつらは落ち着きつてもものがないのか！？今拳げたので比較的ましなのはタカミチの精神的ダメージだけじゃねえーか！私と詠春、ゼクト、ガトウの疲労度が半端ないぞ！？

そんでまともなのはキティとアリカ、アイネ嬢、ゼクト、詠春、ガトウ、クルトと私を含めた8人だけじゃないか……。アスナもまあまとも……。かな？

そして、私とキティとゼクトと詠春との帰還と【アラルブラ紅き翼】の来訪で大宴会が行われた。最初はまあ賑やかと言って差し障りのない感じだったのが、気付いたらどんちゃん騒ぎ……。鬱だ……。orz

そんな時だ。何かを知らせにきた巫女が言葉を出す前に、咆哮が響き渡った。

「詠春。まさかとは思っけど、この咆哮って……？」

嫌な予感がびんびんだぜ！！

「恐らく、アレで間違いないかと・・・」

「うげえー、よりもよつて今かよ。しょうがない、約1600年ぶりに挨拶してくるか」

「挨拶？え？紫稀殿、一体何をおっしゃっているんですか？」

「そういえば、歴史書は正史どおりなんだっけ。私が関与してたと載ってないしな。」

「リョウメンスクナ両面宿儺、アレを封印したのは私だつて言ってるんだけど？」

「は？いやいや『日本書紀』の一説ではたけふるくまのみこと武振熊命によって退治されたとあるじゃないですか！？」

「それ嘘だよ。彼らが退治したのは私が見せたリョウメンスクナ両面宿儺の幻だよ」

「なんですつてー！！貴方は一体何をしてるんですか！？」

「何つてリョウメンスクナ両面宿儺に会いに行ったら討伐隊が向かってたから、それより先にリョウメンスクナ両面宿儺を封印して討伐隊に幻を見せて自分達が退治したように思わせたただけだけど？」

「幻を見せたただけだけど？じゃないでしょー！！ああーそう言えば、この人はバグを超えたバグだったな・・・」

詠春、orzやっつてんなよ。頭を踏みつけたくなるじゃないか！

「いやいや踏みつけないでくださいよ!!」

あつ、既に踏みつけちゃってた、てへっ？

「まあー、どうせ中途半端に封印解かただけだと思っから自我は取り戻してないんだろっな。それじゃあ挨拶できないし、さっさか再封印するか」

てことで、私は一人で先に行くぞ!!

そうゆうことで、先に両面宿儺リョウメンソクナが封印されていた湖に来てるんだぜ。誰に向かって言ってるかって？そりゃ勿論が「言わせねーよ!」め・・・誰だよ邪魔しやがったの・・・。

「おーおー、予想通り中途半端に封印解かれちまつてるのかよ。両面宿儺リョウメンソクナも墮ちたもんだな。あつ、私が墮ちるようにしたんだった」  
てへっ

んーどうやって弱らせて再封印するか。適当でいいか。

そうだ、アレをやるう！そうと決まれば無銘、無銘っと。

「スクナ。今回も再び封印させてもらっぜ！次封印が解かれたとき自我があることを望むぞ」

そう言って私は無銘を構える！やるのは一撃必殺の秘奥義。

「神鳴流神儀型全系終焉秘奥義」

力を込め、十全になったところで一太刀。

「たいきよく しんらばんしゅうけん  
太極・森羅万象剣！！」

振り切ると同時に秘奥義は世界を飲み込み、受け入れ、終わる。  
そして、そこには本来ある風景と両面宿儺リョウメンスクナがそこにいるという事  
実だけしか残らなかった。それを確認した私は、秘奥義の威力が絶  
大であったことを知った。マジ恐怖です。ポンポン使えねーじゃん  
！！

秘奥義に恐怖しながらもスクナの再封印は同時進行してるんです  
けどね！

詠春たちが来る頃には全て終わった後でした。陰陽師や神鳴流の  
皆さん、無駄な労力使わせてごめんね？

そんな感じで、両面宿儺リョウメンスクナの再封印の後、私はアリカとアスナを連  
れて世界を放浪していた。

キティはどうしたかだつて？ほら、一応私とアリカは新婚さんな  
訳だろ？キティとはゼクトやゼロと一緒にいた時もあったけど、基

本二人きりだったわけで。

だから、その二人きりってやつを今はアリカと楽しもうと思って、京都に放置してきたんだ。私は悪くない！

実は、アスナもキティと一緒に京都に置いていくつもりだったんだけど、アリカと二人でいざ出発しようという時にアスナにつかまっただ。引き剥がそうとも説得しようとしても無駄だったのせよ。ようがなく連れて行くことに。

アスナは見た目9歳くらいだ。後10年くらいは薬などの影響で成長することがないからな……。原作を鑑みると12年くらいはこのままのはず。まあいいけどね。

それで新婚旅行な世界放浪の最初の目的地は麻帆良。

どうやらぬらりひょんが無事(?)、学園長になっただらしい。さっそく原作介入のための下準備だ。

「てことでぬらりひょん。麻帆良のどこかに一軒家建てさせる！」

「ふおっ!?! 突然やってきて何をおっしゃる、紫稀殿」

耳が遠くなったのか? それとも遂にぼけ「ぼけとらんわ!?!」た・  
。。。

「地の文に突っ込むなよ、めんどくさい」

「それで何用得ここに？」

突っ込みはスルーか。まあいいか。

「さつきも言つたる。麻帆良の権利者から関東魔法協会が借りている側の土地の方に一軒家を建てさせる。規模的には10人が同時に暮らせる程度の広さだ。地上3階地下1階建て、部屋数は17、8くらいは欲しいな」

「結構広いのう。その規模の一軒家を建てれるちょうどいい広さの土地があるか確認してみよう。・・・それでじゃ。家を建てる条件として裏の警備員として働いてもらえんかのう？」

なかったら、あいつらが借りている側の土地に張つてある結界を若干広げて、建てれるだけのスペース確保するか？まあまずは様子見だな。

「今すぐは却下だ。10年くらい世界中を回る。アスナの状態もあるからな。薬の影響がなくなって中学校に通えるようになったら働いてやってもいい」

実際、アスナをそのままにしておけんからな。いくら学園結界の最悪な認識障害があつてもだ。普通に成長出来るようになってからでないとなかなか危ないしな。

「それでも構わんよ。ふむ、どうやら該当する場所が見つかったよ  
うじゃ」

「なら、麻帆良の技術力を行使して半年で建てさせる」

アスナの身体が成長するようになったら、小学校に転入させるかな。

「急じゃのう。まあー分かった。なるべくその期間で建てさせよう」

「それじゃ、ぬらりひよん。私達は今回はこれで失礼するぞ。じゃあな。それと私達がここに来たとあまり触れ回るなよ?」

「分かっておるよ。それじゃ、また半年後にのう」

本当に分かっているか謎だな。

そんなやり取りがあつたのが大体3ヶ月前。

それで私達はまだ日本国内のとある田舎町にいた。

若干私は焦っている。何故かって?この町にある学校の名前があげられないからだ。

いや、別にそれだけなら焦りはしないけれど、何か嫌な予感がするんだよね!!

だって学校の名前が「私立直江津高校」なんだもの!!

これって死亡フラグ?死亡フラグなんですかー!?

まさか、ここに時代を無視してあれが現れるはずもないだろうし、

平気だよな？うん、平気だよ。平気なはずだ。多分平気なんだって  
ー！！

って思っていた時期が私にもありました。

本当に時代を超えて現れました、アレが。やっぱりあの平気発言が  
フラグだったのか・・・orz

どうする？どうするよ、私！？アリカやアスナも一緒だったのに  
ー！！いや、ここはまず話し合いからだー！！恐らくアレの概念はこの  
世界にあるアレと同種の存在の概念に変わっているはずだー！！そう  
となったら行くぞ、私！！

「はっはー。お嬢さん、随分と楽しそうだね。何かいいことでもあ  
ったのかい？」

そう言っつて、私は手足がなくなっている金髪のお嬢さんに話し掛  
けた。

S i d e . e n d

S i d e . . . . ? ? ? ?

儂の名はキスショット。キスショット・アセロラオリオン・ハ  
トアンダーブレード・・・鉄血にして熱血にして冷血の吸血鬼じゃ。

そんな儂じゃが、日本へ観光しに来たらいきなり吸血鬼ハンター  
に襲われて四肢を奪われてしまい、命から逃げてきたのじゃ。



そして、変な男に出会った。儂を「吸血鬼」としてではなく「人」として扱う男に。

「はっはー。お嬢さん、随分と楽しそうだね。何かいいことでもあったのかい？」

その声はとても軽かったがのう。

Side・end

Side・紫稀

ついつい忍野風味な口調で話し掛けてしまった。どうしたものか？

「さてお嬢さん名前を聞いてもいいかな？ ああーまずは私から名乗らなければいけないか。私の名は神儀紫稀だ。シキと呼んでくれ。そしてこっちの女性は妻の神儀アリカ。こっちの少女は・・・妹分？の神儀アスナだ。それでお嬢さんの名前はなんだ？」

「我が名はキスショット・アセロラオリオン・ハートアンダーブレード・・・鉄血にして熱血にして冷血の吸血鬼じゃ」

どうやらマジだったようです・・・。なんで物語シリーズの「吸血鬼」がどうしてこんなところに・・・。私か？私のせいなのか？私が西尾先生の作品の能力を使っていたからイレギュラーが生じたと？勘弁してつかあーさい・・・。

「それで僕に何の用じゃ」

「ふむ、それは簡単だ。手足がない女性を見かけたから声を掛けた。それだけだ」

嘘じゃないよ？

「嘘だ!？」

「ひぐらしじゃねーよ!？」

はっ!?!つい突っ込んでしまった!!

「のうーシキ。おぬしは一体何がしたいんじゃ？あのものが吸血鬼なら放っておいても構わんのではないか？」

「ワタシモ・・・ソウ・・・オモウ・・・」

そうなんだけども。関わってしまったしな・・・。主に私の考えなしの行動で。

「そこで、お嬢さん。吸血鬼と言ったがあなたは真祖か？」

「真祖？一体何のことじゃ？僕はそのようなもの聞いたことがないぞ?」

ああーやつぱりか・・・。平行世界か並列世界から飛んできたのね・・・。

「吸血鬼。残酷な事実を伝えねばならん。この世界はあなたの知る

世界ではない」

「なんじゃと!?!」

「シキ、それは一体どういう意味じゃ?」

「……?」

「言葉の通りだ。キスショット・アセロラオリオン・ハートアンダーブレードは平行世界、または並列世界の存在だよ。何らかのアクシデントがあつて、この世界に飛ばされてきたのだらう。恐らく時間も逆行しているはずだ。この世界の西暦は1980年代。ハートアンダーブレード、アンタがいた西暦は何年だった?」

「俺が記憶しているのは2000年代じゃ。それなら辻褃が合うのう」

あれ?これってどうやってオチつけなければいいんだ?ええーい、ままよ!!--

「それとアンタはアンタの知る世界の吸血鬼の中でも上位に当たるな?」

「そうじゃ。俺は吸血鬼の中の吸血鬼。怪異殺しと呼ばれておつた」

「この世界に飛ばされたことで存在が変質しているかもしれんな。恐らくこの世界では真祖の吸血鬼に当たりそうだ」

世界そのものの概念がかなり違っていているからな……。この考えはあながち間違いでない気がする、多分だけど。

「真祖というのはよく分からんが、吸血鬼の中の吸血鬼と同意と取ってもよいのか？」

「真祖は吸血鬼の弱点らしい弱点を克服した存在だ。弱点のない、完成された吸血鬼と言ったところか」

「むうー、中々にハイスpekではないか」

「それでアンタはこれからどうする？私の力を使えば元の世界に戻せるかもしれん。後、私の血を少し与えれば体の欠損部分も直せるだろう」

「元の世界に戻るのもいいが、こういうのも何かの縁じゃし、この世界に留まるかのう。それじゃ血をくれんかのう」

そういわれたので、私は腕に一筋の傷をつけてハートアンダーブレードに血を飲ませる。すると見る見るうちにハートアンダーブレードの手足が生えていく。数秒後、彼女の手足は完全に戻っていた。

「ほおー凄いのう。この世界には魔法というものが存在するのか。それにお主はかなりの強者のようじゃのう」

「まあー一応、この世界最強だしな」

嘘は言っていない。それにしてもどこの吸血鬼も血から情報は読み取れるんだな。

「それで、この世界で生きると決めたあんたはこれからどうするつもりだ？」

「どつするかのう」

「この世界でも吸血鬼と言うだけで攻撃されることが多々ある。行く当てがないわけだし、私達と共に行くか？」

このまま放置しておくで大変そうだし。いろんな意味で！

「それも楽しそうじゃのう。でも、良いのか？僕は吸血鬼じゃぞ？その皺寄せがお主等にいかんとも限らん」

「別に私達は平気だ。アリカを妻と紹介したが、実はもう一人妻がいてな。彼女も吸血鬼だ。それも真祖のな。そういったことで慣れるんだよ。それに私達のネームバリューがあれば教われることでもないだろうしな」

「お主は節操なしなのか？それと有名人なのか？」

「私をそこらへんの二股男たちと一緒にするな！！まあー魔法使い、つまり裏の世界じゃ知らない者はまずいないな」

なんとって大戦の英雄で生きた伝説だしね！

「それほどの者なのか。それならば、厚意に甘えさせてもらおうかのう。よろしくじゃ、シキ、アリカ、アスナ」

「こちらこそよろしく頼む」

「ヨロ……シ……ク……」

「よろしくだ、キスショット・アセロラオリオン・ハートアンダーブレード。それにしても長いな。今度から忍つて呼んでいいか？」

「構わぬが、由縁はなんじゃ？ふざけた理由ならひねり潰すぞ？」

「ハートアンダーブレード。刃の下に心あり。日本語に直訳して漢字にするとそうなる。そういう意味だ」

「中々悪くない。これからは忍と名乗るとするかのう。アリカたちもそう呼んで構わぬ」

「分かった」

「ウ・ン・ン・ン」

そういえばいつまでここにいる気なんだ、私達？

「まあーなんだ。ここで話すのもなんだし、そろそろ場所を変えようじゃないか」

「そうじゃな、いい加減、足を休めたい」

「ワカ・ン・ツタ・ン・ン」

こうして私こと神儀紫稀とその連れに平行世界の吸血鬼、キスシ

ヨット・アセロラオリオン・ハートアンダーブレード改め、神儀忍  
が加わったのだった。

あれ？どうしてこうなった・・・？

S i d e . e n d

## 第27話（後書き）

何故か出してしまった。

どうしてこうなった・・・？

もはや原作ブレイクというレベルじゃない！！

次回、キングクリムゾン？

どこまで飛ぶかな？

アンケート現状7 / 25 / 20 : 26

ハーレム昇格アンケート

紫稀側

33票 アスナ

30票 このせつ（合計）

21票 千鶴

20票 ゆーな・真名

16票 茶々丸

15票 木乃香（単体）・せつちゃん（単体）

09票 刀子先生

07票 シャークティ・円

05票 桜子

03票 柿崎・愛衣

02票 さよ・古・亜子

01票 楓・テオドラ・ドネット・ネカネ



ネギ側

3票 鳴滝姉妹

2票 楓・古・朝倉

1票 アーニヤ・木乃香

アスナの独壇場は変わらず！ゆうなと千鶴、このせつも地味に再燃！  
流的にアスナはハーレムメンバー入り！どう動かせばいいんだ？  
現状はゆうな・真名の20票までの6人を昇格させる予定。

最終ラインは現状ではゆうな・真名ですが、どうにか茶々丸に入らないかな……。

そうだ、茶々丸以外の投票拒否しよう。そうすれば、

アスナ、このせつ、真名、ゆうな、千鶴、茶々丸の7人いける！

紫稀側 最終締め切り 2011/07/25/23:59まで！

！遂に4時間を切った！！

ネギ側は全然投票されません……。

1人1キャラにつき1票

超の扱いアンケート

A 過去に来る 11票

B 過去に来ない 0票

A案で決定でいいよね、これ。

候補者が上がった面々のアーティファクト案まだまだ募集中なり。

## アンケート2つ受付終了

7月19日からやっていた  
紫稀のハーレムメンバー昇格アンケートと  
超参入アンケートこれにて受付終了です。

最終結果は以下の通り!!

アンケート最終結果 7 / 26 / 00 : 00

ハーレム昇格アンケ

紫稀側

34票 アスナ・このせつ(合計)

~~~~~

24票 茶々丸

22票 千鶴・ゆいな・真名

17票 木乃香(単体)・せつちゃん(単体)

~~~~~

09票 刀子先生

07票 シャークティ・円

06票 桜子

04票 愛衣・亜子

03票 柿崎

02票 さよ・古

01票 楓・テオドラ・ドネット・ネカネ

当初はこのせつ有利かと思いきや、中盤からアスナ・真名・千鶴・

ゆうなの追い上げが凄まじくなり、  
終盤ではこのせつ人氣が再燃！さらに茶々丸の人氣にも火がつきこ  
のようにになりました。

ハーレムメンバーへの昇格者は以下の通りです。

第1位 アスナ 記憶封印なしで紫稀の名前をもらい神儀姓を名乗  
ります

第2位 茶々丸 原作キャラが中一になったときから出番なり！魔  
改造ならぬ魔成長させます！！

第3位 同票で真名・ゆうな・千鶴！ この中で最初に出てくるの  
は恐らく真名！次にゆうなで最後に千鶴ですね。

第6位 同票で木乃香・せつちゃん！ このせつはセットなので実  
質アスナとの同率一位です

個人的にはゆうな千鶴は脱落してもらいたかった・・・。  
ハーレム予定メンバーはこれで11人。内2人は既に入っています。  
アスナも準メンバー状態。一緒に行動していればきつと振り向いて  
くれると信じて健気に！！

既入

エヴァ様 アリカ姫

準入

アスナ

未入

アキラ ちうたん 木乃香 せつちゃん 茶々丸 真名 ゆうな  
千鶴

やっぱり千鶴とゆーながきつい……。  
ゆーなを参入させるには夕子さん生存 を立てなければ……。

超参入アンケートはAにしか票が入らなかったので、過去参入となります。

問題はどの世界線の未来線から持ってくるかですかね。

私的にはやはり正史か紫稀のいない世界線の未来線から引っ張って来たいと思うんですよね。

大分裂戦争時に魔法世界の魔力枯渇による崩壊阻止を実行していないので、  
超が三年時に強硬手段に出る可能性もあるんですよね。

どうしたものかな……。

## 第27・5話【閑話】（前書き）

【総PV】40万【総ユニーク】4万6千【感想】200件突破！！  
ネギま！のネームバリューは最強ねっ  
本編の文字数が123、456！なんだってー！！

忍を出してしまったけど、どうしよう・・・。

月詩様、ペルソナ様、空知 日向様、パンチ様×2、COCO様、  
水竜様、  
イグナシス様、リョウタ様、元始天尊様、マニツコリ様、なたかさ  
ん様、

Testament様、赤白黄色様、なおぼん様、派遣社員様、零  
崎人識様

感想ご意見感謝です！

閑話的なエヴァ様のお話。

そんな27・5話、どうぞー！！

## 第27・5話【閑話】

Side・エヴァ

アリカとアイネの処刑を阻止し、京都に訪れた私達は、関西呪術協会、つまり詠春の婚約者である近衛木乃璃の実家にお邪魔していた。

滞在初日には宴会をし、その最中に両面宿儺リョウメンスクナの封印が解かれたらしいが、シキが先行して一人で弱体化＋再封印を施したらしい。  
それよりも、まさか両面宿儺リョウメンスクナを最初に封印したのがシキだったとは……。驚くを通り越して呆れるしかないな、もう。

そして滞在して数日、その日もいつもどおり昼頃に起床。すると近くにシキとアリカとアスナの気配がなかった。

少しあたりを探してみたが見つからなく、部屋に戻ったときチャチャゼロに衝撃なことを教えられた。

「ゴ主人、旦那ナラ、アリカタチヲ連レテ世界中ヲ旅シテクルツツ言ツテタゼ？旦那曰ク、新婚旅行ラシイゾ。アリカト二人キリデ行ツテ来ルツツ言ツテタガ、アスナガソレニ気付イテ付イテ行ツタミタイダガナ」

「何だとー！？」

それならそれで言うてくれれば別に反対しなかったのに……。こつなつたら意地でも見つけて邪魔してやるー！

そんな決意をして、シキたちを探すために放浪を始めたのが今から大体3年前。未だにシキたちを見つけれなかった。

途中、ガトウとタカミチの師弟コンビにあつたり、シキ同様世界を旅していたゼクトに遭遇はしたが、どちらもシキたちの居場所に関する情報は持っていなかった。

どちらとも2、3ヶ月、一緒に行動したりしていた。師弟コンビの方はその間中ちよくちよく『別荘』を貸してやっていたがな。

そして、シキたちの居場所を最も知り得るであろう人物と遭遇、行動を共にした。誰かだつて？そりゃ、バカナキしかいないだろう？こいつの強運は中々にいいから上手くいけばシキたちと遭遇できると思つたんだ。

だけど何故か同行を許可しなかったから無理やりついていった。シキと再会するために。

1ヶ月くらいストーキング紛いに同行していたら、いきなり呪いを掛けられた。『インフェルナス・スコラスティクス登校地獄』。なんともふざけた呪いだと思った。と言つかきちんと術式を理解して適量の魔力で使えー！呪いがかなり変質してしまつて私じゃ解呪出来ないではないかー！？

そんな経緯があり、私は麻帆良の警備員をやらされることになった。学園結界によつて魔力もかなり封印されることにも……。何年かしたら鳥頭ナギかシキが解呪しに来るらしい。あの鳥頭がシキに伝え忘れなければいいが……。『インフェルナス・スコラスティクス登校地獄』の呪いが変質してしまつたせいで、学園結界の範囲から出られなかつた。つまりはシキと私が貸し出していない方の麻帆良の土地にすらいけないのだ……。

そんな感じで学校に通うようになった私だが、タカミチが同級生になつていた。かなり違和感があるが、しょうがないだろう。ガトウも麻帆良で表では広域指導員、裏では警備員をやつていた。

退屈で暇だつたので、暇つぶしがてら旅に同行していた時にも貸していたように、たびたび『別荘』を貸しもしていた。タカミチが強くなつてくれれば、私の警備の仕事も減るからな。ちよくちよく



私自ら修行をつけてやったりもした。主に八つ当たり気味に。

私がいくら大戦の英雄であっても、過去に賞金首だった事実は変わらず、未だに襲撃してくる連中もいたが、適当に殺さないようにあしらってやった。罵詈雑言や襲撃によって溜まったストレスを発散するためにタカミチとぬらりひょんをいじってやったりした。ガトウはタカミチの時は可愛い愛弟子だからと頑張って私を宥めようとしていたが、じじいの時は見て見ぬ振りを決め込んでいた。どうやらガトウはじじいに相当、手を焼かされているようだ。

そういえば私が麻帆良に閉じ込められるに当たって、一軒家を与えられたのだが、それは『家』というより『屋敷』に近かった。ぬらりひょんのじじいの言げんを信じるならシキが建てさせたらしい。まさか、麻帆良で警備員をやらせるように仕組んでいたのか？ いやいや、そんなまさかな・・・。

それと屋敷の部屋の扉には割り振られるようにネームプレートがあった。シキとアリカ、アスナのがあるのは建てられた時に確認に来たと聞いていたから当然だと思ったが、私の名前まであった。やっぱり、ここに来るのを仕組んだのはシキなんじゃ・・・？ あと、

知らない名前もあつたが忍つて一体誰だ……？

さらにある部屋の扉には名前ではなく『寝室』と書いてあつた。覗いてみると、大人が同時に10人くらいは寝られるのではないかと思うほどにベッドが何個かくつ付いて置かれていた。この部屋には他には衣装タンスくらいしか目ぼしいものはなかった。勿論、普通にシキたちの自室とも思われる部屋にも一人用か二人用のサイズのベッドはあつたのだが、一体何故こんな部屋を？

そして、驚くことに実はこの屋敷、地下室もあつた。そこにはシキの持っている殆どの魔法球が設置済みで、足りないのは2、3個だった。恐らく地下室は魔法球の設置場兼物置なのだろう。

そう言えば、私に割り振られていた部屋に何かが置いてあつた。どうやらシキからのプレゼントのようだった。やはり今回のことはシキの企みだったようだ……。それを知ってorzになった私は悪くないと思う、絶対に！

そしてプレゼントの入った箱の中身は花をあしらつたヘアピンで、名前は【偽・盾舜六花】<sup>ネ</sup>というらしい。どうやら、それぞれの花弁には名前と特殊な能力があるらしく、魔法発動体としても使えるようだ。これはシキが自身の能力で創つた模造品らしく、オリジナルは別に存在するらしい。

性能はオリジナルよりも頑丈でそれぞれの花卉にあるはずの人格はないらしい。それぞれの能力や発動の仕方については添付された紙に書かれてあつたので、使いこなすために要修行と言つたところだろう。

そうやって暮らして3年。一度目の卒業を迎えたが、鳥頭どころかシキも解呪しにこなかった。  
そして再び中学一年生をやることに……。

S i d e . e n d

第27・5話【閑話】（後書き）

紫稀に置いて行かれたエヴァ様にスポットを！！  
エヴァ様単独話は閑話的な感じでしようか？

紫稀たちが麻帆良入りするまでこんな感じでエヴァ様は優遇されま  
す。

アンケート現状 2011/07/26 12:52

ネギ側

3票 鳴滝姉妹

2票 楓・古・朝倉

1票 アーニヤ

~~~~~

ネギ側のハーレム要員アンケート中。

てかもういらぬ気もするな・・・。

1人1キャラにつき1票

紫稀側ハーレムに昇格した面々のアーティファクト案まだまだ募集
中なり。

第28話（前書き）

【総PV】46万【総ユニーク】5万【お気に入り】500件突破
！！

赤白黄色様、黒部様、パンチ様、Testament様、なおぼん様、杉ちゃん様

感想ご意見感謝です！

エヴァ様閑話を後1話書いたらいよいよ麻帆良入りですね。

一気に行くよ！

そんな28話、どうぞ！！

第28話

Side・紫稀

新たに『家族』となった異世界の吸血鬼、キスシヨット・アセロラオリオン・ハートアンダーブレード改め神儀忍を連れ、私達は旅を再開した。

忍と出会ってからの3ヶ月は日本国内を回り、ぬらりひよんとの約束の6ヶ月が経過したので、一度麻帆良に帰還した。

建ててもらった『家』というより『屋敷』の確認。うん、ぶつちやけ『屋敷』になるなんて考えてなかったよ、どうでもいいけどな。屋敷の確認後、生活に必要なと思われる、寝具や衣装タンス、本棚と言った消耗品な電化製品以外の物を買ひ揃えた。そして、それぞれの個室を割り振って、『寝室』なんてふざけた部屋も作ってしまったな。後悔も反省もしていないけど。

とりあえずは私とキティ、アリカ、アスナ、忍の5人の部屋だけを決めておいた。扉にはネームプレートをつけておいたから大丈夫だろう。

キティが（呪いで）ナギに連れられて、麻帆良に来るだろうと予想は出来ているので、電化製品の類は必要なものをリストアップして買い物メモを残しておいた。ご機嫌取りみたいになってしまったが、ついでとばかりに、創っておいた模造品の【偽・盾舜しゅんしゅんりっか六花】を

キティに割り振った部屋に取扱説明書を添付して置いておいた。
麻帆良に住むための準備は粗方整ったので、いよいよ日本以外に
足を伸ばすことにした。

適当に賞金首を捕らえたり、ブランの時のように物資などを支援
したりしながら、旅を続けていた。

魔法世界にも行ったが、やはり珍しいのか、忍は始終テンション
が高かった。

愉快的旅だったが、問題は必ず起こるわけで。と言うより巻き込
まれるわけで。

魔法世界の新オスティアに立ち寄った時に、麻帆良からメガロメ
センブリアに派遣されていたらしい明石裕奈の母親である明石夕子
に出会い、その命を助けたりもした。

彼女の任務は潜入捜査だったようで、もう少しで麻帆良に帰還す
るところでバレて襲われていたらしい。その危機を助けて、
スキマを麻帆良のぬらりひよんの目の前に繋げて私達も麻帆良に行
くことに。スキマを使用したのは久しぶりだったが、何の問題もな
かった。他の面子には驚かれていたが、私の知ったことではない。

その際に夕子の夫である明石教授と娘の裕奈にも紹介された。二
人とも私が大戦の英雄である『零崎蒼識』と知ったら慌てていたが、
夕子も助けたときに教えたら同じように慌てていたな、サインも求
められたけど。裕奈のことはゆーなと呼んでおいた。変換するのが
面倒だからな。

若干メタ発言したが、その時はまだキティに会うわけにはいかな
いから、そのまま立ち去ったが。

そんな感じで京都を出てからの9年間を過ごし、私達は旧世界の
各地の紛争地帯に足を伸ばしていた。西暦1994年。原作開始の
9年前である。紛争地帯にいるのは特に理由はない。敢えて言うな
ら、ストレス発散兼運動不足の解消・・・かな？

そして偶然か必然か知らないが、ある少女とであった。誰である
か分かるだろうが、一応紹介しておこう。魔族とのハーフである、
マナ・アルカナだ。

出会いは衝撃的だった。援軍として救援に向かったところを、敵
と間違われて撃たれると言う、なんとも言えない感じであった・・・
。一応その時に誤解を解き、敵は撃退したが。

その後は暇がある時に銃の扱いについて手解きをしたりしている
時に、調子に乗ってキンジの「銃弾撃ち」^{ピリヤート}や「鏡撃ち」^{ミラー}「弾丸斬り」
、レキの様な「跳弾」の技術を見せたのがいけなかったのか、「師
匠」と呼ばれるようになった。

「師匠」と呼ばれたのならしょうがないと思い、マナを魔改造す

ることにした。

『バリリ・トウ・ドウ』。通称『バリツ』を仕込むことにした。銃は既に両手で使用出来ていたので、弾切れの時のために、剣の扱方も双剣をメインとして仕込んだ。結果、最終的に『双剣双銃』^{カトラ}となってしまうけど、私は悪くないと思う、絶対に！

詠春に呼ばれていたのをかなり無視し続けていたので、いい加減しつこかったので会いに行くことに。マナとは一旦別れた。日本に行く機会があるなら、麻帆良に行くように言っておいたから大丈夫だろう。その際は「神儀真名」を名乗るようにと、麻帆良にある屋敷に自室を作ってもいいと言っておいた。気付いたら『家族』のよう^{カトラ}に接していたから別に構わないと思った。麻帆良にマナが行ったときに、キテイとの間に問題を起こさないといいんだけどな……。後、仮契約をしたと言われたが、私との仮契約や本契約は不老者になることを意味するので、今は早いと言って断っておいた。

そんな経緯を経て、私達は京都に來ている。詠春から呼び出しを受けていたのも理由だが、既に詠春と木乃璃嬢^{このり}の間に子供が生まれて5年が経っていたからだ。

「紫稀殿、ところでそちらの女性は一体・・・？」

「あつ、忍のことか？旅に出てから麻帆良によってそれから3ヶ月くらいの時に出会った『異世界』の吸血鬼だ。それも真祖のな」

異世界の部分を強調してみたけど、真祖って聞いたところで驚いたか。私の場合は吸血鬼とか真祖じゃなくてキスショット・ハートアンダー・ブレードってところで驚いたんだけどな！

「僕の名はキスショット・ハートアンダー・ブレード。今は神儀忍と名乗っておる。忍と呼んでくれ」

「はぁー・・・」

「それで詠春、話を戻すぞ。流石に木乃香に魔法のことを知らせずにいることは不可能だと思っぞ」

さつきまでこの話をしてたんだぜ？詠春は見知らぬ女性、つまり忍がいたからそちらも気になってたようで、真剣味に欠けていたが。「それは分かっています。いづれ知るかもしれないという事は・・・ですが、知るその時までの間、今の平穏な暮らしをしてほしいのです」

詠春は親バカである。こんなところで明らかになるとは・・・。まぁーたまには真面目に返答するけどな！

「そうは言っても、木乃香の潜在魔力は膨大だ。あのナギよりも多い。その有用性を知れば狙ってくる連中が沢山出てくるだろう。膨大な魔力だけでなく、関東魔法協会の長の孫、関西呪術協会の長の娘という肩書きまである。」

魔法関係者に襲われた時に魔法のことを「知っている」と「知っていない」のでは、危険度はかなり違ってくる。

一人の父親としてなら正解かもしれんが、お前は関西呪術協会の

長としての立場もあるんだぞ。とりあえず、今は教えないで置いてやる。魔法関係者に襲われたら私の独断で魔法の存在を教えるからな？」

「ありがとうございます、紫稀殿」

私も甘くなつたと言つか丸くなったと思う。昔ならすぐにでも木乃香に教えていただろうし。

「それで、紫稀殿たちに頼みたいことがあるのですが」

「木乃香の護衛か？暫くは京都に滞在するつもりだったから構わんが」

「お願いします。それでは早速紹介しましょう」

「ちょっと待て、外見を変える。流石に大人が近くにいると遠慮したりするだろう」

やっぱり遊び相手として接してたほうがいいと思うわけよ。私だけそうするのもなんだから、アリカと忍の肉体年齢も下げるけどな！

「外見は今のアスナと同じくらいでいいか。アリカもそれくらいで忍はもう少し下でいいな」

「私たちもか？別に私たちはいらなと思うのじゃが」

「儂もアリカと同じ意見じゃ」

そうはい神裂！あっ、間違った。そうはいかん。アリカの方は麻

帆良入りする時の為に外堀を埋めとかねばならんだ！忍のほうは・・・原作の忍を生で見たいからだけど！！

「減るもんじゃないんだからいいじゃないか。私と本契約バクティオーしたから不老になつて成長出来なくなったのだから、肉体の変化を味わえよ」

実は二人ともやつちまったんだ。アリカの方は処刑阻止後に京都に滞在していた時に、忍とは気付いたらしてました。うん、何を言っているのかわからねえーと思うが、私にも分らないんだ。しかも、ついでとばかりに本契約もしてたからな・・・。

まあーその辺は横に置いてくとして。何とか説得してみせました！いやっぶうううううう！！

「まあーよいか」

「儂も構わん」

そうと決まれば肉体操作だ！私とアリカはそのまま10歳くらいに、忍は原作と同じくらいまで。忍が想像以上に可愛すぎて萌えました！と言つか蕩れました！！

「詠春、こっちは準備できたぞ。呼んでくれ」

「・・・あつ、はい。木乃香！刹那君！ちよつと来て下さい！」

襖を開けてちよつと声を大きくして呼んでいる詠春。

「はいな〜」

「は、はい...」

その声に返事は二つ。思ったより聞こえた声が大きかったから近くにいたらしい。

「木乃香、刹那君。彼らは私の知り合いで、彼は神儀紫稀君、彼女は右からアリカ君、アスナ君、忍君です。こちらは娘の木乃香、彼女はとある理由で私が引き取った桜咲刹那君です。彼らは暫く京都に滞在するので仲良くしてくださいね」

「紹介があつたように私の名前は神儀紫稀だ。シキと呼んでくれ」

因みに刹那は神鳴流を習ってるらしいから神鳴流最強の神儀紫稀とは別人と思わせるように認識障害の魔法を掛けてある。私を神鳴流最強の神儀紫稀と同一人物であると知らなければ認識できない。キティやアリカ、アスナ、アイネ嬢、忍、【紅き翼^{アラルプラ}】の面々には効かない。便利なのか不便なのかいちまち謎だがな。

「私は神儀アリカじゃ。アリカでよい」

「神儀アスナ。アスナでいい」

アスナはこの9年でまともに喋れるようになったんだぜ。

「僕は神儀忍じゃ。忍と呼んでくれ」

こっちの紹介は終わった。次はそっちだぜ、お嬢さん方。なんてふざけてみたかったけど、自重しておいた。

「うちはこのえこのかっていうんよ。このちゃんってよんでや〜。うちはしーくん、アリカちゃんはアーちゃん、アスナちゃんはアッ

ちゃん、しーちゃんってよぶえ」

「ぞ、ぞくぞきせちゆなです。あう、噛んじゃった・・・」

あつ、噛んだ。なんだこの可愛い生き物は！萌える！というか蕩れる！お持ち帰りしてもいいですか？いやいや、冷静になれ私！まだ会ったばかりじゃないか！まだ早いぞ、私！落ちつけ！！

「じゃよろしく。木乃香」このちゃんや」「いや、あの、木乃香
「このちゃん・・・参った、このちゃん、刹那」せつちゃんや」
・・・せつちゃん」

あの笑顔が怖いです・・・。天然っぽいけど、この時から既に黒いだと！

「よ、よろしくじゃ、このちゃん、せつちゃん」

「よろしく、このちゃん、せつちゃん」

「よろしく頼むぞ、このちゃん、せつちゃん」

こっちの女性陣は私と木乃香のやり取りを見て逃げたようだアリカは若干引き攣っていたけれども

「よろしくや、しーくん、アーちゃん、アっちゃん、しーちゃん」

「よろしくおねがいます、シキくん、アリカちゃん、アスナちゃん、しのぶちゃん」

刹那は普通に呼んでくれるようだ、よかった・・・。おい、詠春

！今までのを見て笑ってんじやねえぞ！？後で覚悟しておけよ？

「なんでしよう……。今、とてつもないほどの寒気がしたのです
が……？」

そんな出会いをしたのが大体2ヶ月前。今回、京都には2ヶ月も滞在した。滞在期間は今までで最長だ。いつもは1ヶ月程しかしなかつたからな。

この2ヶ月、色んなことがあつた。まずは遊んでいるところに来た野良犬を私と刹那で追い払ったり、木乃香が川に落ちそうになつたのをなんとか防いだり。一番衝撃的だったのは、木乃香が刹那の翼の存在を知ってしまったことか。

諭すつもりで刹那が一人の時に呼んで、翼を出させたのだが、その場に木乃香がやってきた。その時はかなり焦つた。木乃香に見られた途端、刹那が焦って逃げ出そうとするのを見て、私は冷静になつた。刹那が逃げ出そうとするのを何とか阻止していたら、木乃香が「天使みたいやなー」と言ったのが聞こえたのか、刹那の抵抗が全くなくなって楽だった。その後、二人は今まで以上に仲が良くなくなっていたな。

魔法に関してだが、鬼や妖怪と言つた人外が存在することを教えるだけに止まつた。まだ、魔法的な危機には陥ってないからな。

前述通りの事件があつたが、今のままなら刹那は烏族とのハーフであることに引け目は感じていない。だが、分別がつくようになれば身分の違いがなんだと言って、原作のように陰から護衛するなんてことになりかねない。そうならないように、刹那には念の為に助言しておくことにしよう。その助言の効果は麻帆良入りしてから確かめることにするが。

そんな感じで木乃香と刹那に関しては充分種を撒けたと思うので、京都から離れることに。

さよならをする時に、木乃香と刹那に頬にキスされ、「しょうらい、けっこうなしょうな〜」なんて二人に言われたときは背筋が凍ったのを覚えている。

詠春には親の敵を見るような目で見られ、アリカとアスナ、忍からは感情の無い眼で見られていた。その後の私についてはご想像に任せる。決して、その時のことを思い出したくないからではない！！

と言うか、刹那はまだ助言云々で分かるのだが、木乃香のほうは一体何故だ？理由が全く分からんのだが・・・？

膝を抱えながら「ごめんなさい」を連呼するような恐怖を味わったが、その後の7年間は再び放浪の旅に出ることに。

途中、木乃香が小学4年になるときにアスナと忍を麻帆良に先行させ、アスナは成長できるようになったのもあるが、木乃香の護衛も兼ねて同学年になるようにした。

忍の方は、警備員として雇われているようだ。正義の魔法使い（笑）に襲撃されることはないらしく、神儀の名と言うか零崎の名は偉大だと思った、今更だが。

因みに、二人とキティとの間に問題が起こったところで、私は一切関与するつもりも、仲介する気もない。キティの怒りの矛先がこちにこない保障はないからな。

アスナと忍と別れてからはアリカと文字通り二人きりで旅を続けたがな。

そして2001年度の4月。キティとアスナ、木乃香、ゆうなが同級生になる年度。事前にぬらりひょんに連絡を取っておいたから準備は万端なはずだ。

私とアリカの姿が麻帆良にあったのは、麻帆良女子中等部の入学式から1週間が経った頃だった。

第28話（後書き）

いきなり年数を経過させたのは書くのが面倒だからじゃない！
書くネタがないからだ！！そんな言い訳。

次回、エヴァ様の苦悩の様な、寂しい日々？

アンケート現状 2011/07/27 14:43

ネギ側

3票 鳴滝姉妹

2票 楓・古・朝倉

1票 アーニヤ・パル

~~~~~

ネギ側は全然投票されません・・・。

1人1キャラにつき1票

紫稀側ハーレムに昇格した面々のアーティファクト案まだまだ募集  
中なり。

第28・5話【閑2話】（前書き）

【総PV】48万突破!!

このような駄文がここまで行くとは・・・。

ナラシン八様、杉やん様、なおぼん様  
感想ご意見感謝です！

エヴァ様閑2話なり。

時は加速度的に過ぎていくよ！  
そんな28・5話、どうぞ！！

## 第28・5話【閑2話】

Side・エヴァ

シキを探しに京都から出て3年、そこから馬鹿ナギに麻帆良に封じられて10年。つまり13年もシキに会えていない。しかも最近になってアスナが麻帆良にやってきた。シキとアリカ以外の謎だった忍という知らん女を連れて。

アスナは魔法薬などの影響も抜けて普通に成長できるようになったらしく、小学4年生から麻帆良の小等部に通うらしい。それと同じ学年に詠春の娘がいるらしく、その護衛も兼ねているそうだ。

そして、問題なのはアスナと共にやってきた神儀忍という女のことだ。どうやら彼女は異世界の吸血鬼でキスショット・アセロラオリオン・ハートアンダーブレードと言う名前らしい。どういう理屈かは知らんが、異世界からこの世界に飛ばされたことで、存在自体の概念が変質してしまって、私と同じ真祖の吸血鬼になったらしい。

まあ別にそこは問題ではないのだ、本当に。問題なのはこの女がシキと本契約パクティオーをしているという点だ。アスナの情報ではアリカもしているらしいが、アリカに関しては私は認めているので、癪だが構わない。

別に忍自体を嫌いなわけではない。と言うよりも好きなほうだ。恐らく同じ吸血鬼ってところが関係しているのだと思う。だが、シキをこれ以上独占できなくなるようになるのだけは勘弁願いたい。。。

いや、その辺はもう気にしてはいけない気がする。気にするだけ

無駄だと思ふことにした。どうせシキのことだ、気付いたらフラグを建てているのだろう。大抵のものは、本人に自覚は無いが。

色んなことを諦めていたところに、再び爆弾が投下された。

それは、アスナと忍がやってきてから数日が経ったころだった。マナ・アルカナと言う少女が訪ねてきた。

私は一目でこの少女が魔に属するものだとして理解した。本人に聞いたところ魔族とのハーフらしい。血統などに私は興味はないので、別に構わんのだがな。

アスナと忍はどうやら少女のことを知っていたようなので、その辺の事情聴取をすることに。

それで分かったのは、マナはシキを「師匠」と呼んでいたらしいこと。マナの実力の一端を見せてもらったが、どうやら本当にシキに師事されたのがわかった。「銃弾撃ち」や「鏡撃ち」なんて常人には出来ないし、出来る人物はシキを除いて知らないからだ。

他には忍の時と同様に、日本人としての名前をもらったらしい。

「神儀真名」。もう、神儀の姓をあげたのならば、シキが『家族』と認めているようなものではないか……。しょうがないからこい

つらが小等部の間は世話を見るしかないようだ。更にシキに仮契約バクテイオーを迫ったとか聞いたときは、うっかり殺してしまいそうになった。私は悪くないと思う、絶対に！

マナはぬらりひょんを脅しと言う名の説得をしてアスナと同学年に転入させた。忍のほうはシキから口添えなどがあったのか、裏の警備員として働いていた。

私とチャチャゼロだけしかいなかった麻帆良の屋敷にはいつの間にかアスナと忍、マナの姿があった。シキたちが魔法世界に訪れていたときにシキに命を助けられたと言う明石夕子やその夫と娘、【アラルブラ紅き翼】の一員だったガトウとタカミチが時々やってくることもあった。娘のゆーなの方は弟子入りとまでは行かずとも、軽く魔法に關して手解きはしてやった。

100年前には考えられなかったような暖かい景色。そんな日常を私は生きていた。そんな感じに2年間を過ごした。

2001年度の新学期から再び中学一年生、数カ月後にはアスナたちと同学年になるといふなんとも言えない感情を胸の中に抱いて

いた時、私に来客があった。

来客は少女の二人組で、2001年度から私たちと同じ麻帆良学園女子中等部に同学年で通うらしい謎の少女『超鈴音』と、同じく同学年に通うらしい噂の天才少女『葉加瀬聡美』だった。

超のほうは魔法の存在を知っている上に何かやらかすつもりらしい。葉加瀬のほうも超の計画について知った上で協力し、魔法の存在も知っていると言うことだ。そして私に接触してきた理由は、その計画に干渉でいてほしくない。その報酬として魔法と科学の粋を込めて作るガイノイドというロボットを私の従者として提供することだ。

いい加減、手間が掛からないとは言え、アスナたちの世話をするのも億劫になつてきていたし、来年度からは私以外は寮住まいになるので丁度いいと思い、その申し出を受けた。超の計画は正義の魔法使い（笑）たちからすれば、自分たち魔法使いの根底を覆すような厄介極まりないものらしいが、私やシキ、私たちの『家族』の間は別に困りはしない。どうとでもなるからな。だから干渉と言うのは都合がよかった。私はあまり他人に干渉する気がないからな。

その交渉から数日、私は魔法に関する知識を超たちに解説したりして過ごした。そして2001年の1月3日。遂にガイノイドが完成した。名前は私が付けても構わないとのことだから「茶々丸」と名付けた。



それから数ヶ月後、私とアスナたちの入学式当日。その数日前の4月1日から茶々丸は起動させ、私たちと同学年に新入生として入学させた。別に4度も経験している入学式はサボってもよかったのだが、サボったらサボったで後がうるさいので、面倒だが毎回出ることになっている。

クラスの方はアスナたちと同じ「1-A」。麻帆良学園女子中等部新一年生の中でも、魔法関係者、ポテンシャルの高い者や素養の高い者が一纏めにされた、ある種の人外魔境だった。詠春の娘とその護衛らしき半妖の少女もいた。しかもこの女子中等部は3年間クラス替えがないので、3年間もこんな中で暮らさないといけないのか……。軽く鬱になりそうだ。後、なにやら諸事情で2人の生徒は入学式に間に合わなかったらしい。

出席番号はアスナが神儀明日菜で9番、10番が飛んで11番に私エヴァンジェリン・A・K・M・神儀、12番がまた飛んで神儀茶々丸で13番、14番に神儀真名でマナだ。あれ？この中途半端に飛んでいる番号ってもしかして？

恐らく私の想像通りだと思う。アスナたちがやってきたときに、アスナが中等部に通うくらいには麻帆良に合流するとか話していたし。

それにしても10番がアリカなのはなんとなく分かるが、12番は一体……。？アスナたちと別れてからまた新しく『家族』でも出来たのか？

その謎が解決されるのはそれから1週間後だった。

S i d e . e n d

第28・5話【閑2話】（後書き）

これで麻帆良入りまでの準備期間終了です。  
エヴァ様閑話なので短いのがあれですけどね・・・。

次は麻帆良入り時の紫稀、エヴァ、アリカ、アスナ、忍、真名の設定公表かな？  
ゆーな自体は紫稀自ら魔改造してないから今回は除外ですかね。

アンケート締め切り

ネギ側

3票 鳴滝姉妹

2票 楓・古・朝倉

1票 アーニャ・パル

~~~~~

どうにかこいつらネギ側参入で頑張ってみる。

問題はアーニャの扱いだが、

原作どおりロンドンで占い師か、麻帆良に魔法生徒としてくるか・・・。

悩むぜ。

紫稀側ハーレムに昇格した面々とパーティーのアーティファクト案
まだまだ募集中なり。

特に忍に関しては可及的速やかに頼みます。

紫稀側現状設定【麻帆良入り時】（前書き）

麻帆良入り時の主人公達の設定です。
数値を決めるのが大変だった・・・。

月神楽様、なおぼん様、杉やん様
感想ご意見感謝です！

紫稀側現状設定【麻帆良入り時】

名前 表 神儀紫稀 (かみぎ しき) 裏 零崎蒼識 (ぜろざき あおしき)

性別 男 年齢 約3000歳(転生前込み)

種族 人間であり人外 不老不死

懸賞金 元1500万ドル 大戦の英雄となったことで完全失効

容姿は能力により変幻自在、老若男女問わず

4、5歳くらいにした姿
本来は『空の境界』の両儀 式の外見を男性よりに近づけて1

身長は170cm前後、体重は60kg強、服装は基本着流しに革ジャンという式リスペクト

ステータス値(数値はリリなの+ネギま+Fateのをごちゃ混ぜにしてみました) 大戦時から変動なし

筋力：A	(S)	【SSS】	『SSS+』
耐久：A	(S)	【SSS】	『SSS+』
敏捷：A	(S)	【SSS】	『SSS+』
魔力：B	(A)	【SSS】	『SSS+』
気力：B	(A)	【SSS】	『SSS+』
神通：B	(A)	【SSS】	『SSS+』
幸運：S	(S)	【SSS+】	『SSS+』

通常時はリミッター付き

()内はリミッター時での【咸卦法】 or 【マキア・エレベア闇の魔法】 (種類を問わず)

【】内はリミッターのみ解放時

『』内はリミッター解放+【咸卦法】 or 【闇の魔法】 (上記と同種)

内はギャグ補正 基本的に突っ込む側や仕掛る側なので意味はない

最大数値はSSS+ EX+にしてもよかつたかな?とか思ってた
りするけれど、結局は全存在最強なので意味が無い

リミッターは基本、魔力と気と神通力を優先的に制限 それに伴い
幸運値以外の能力値が劣化

スキル

剣術・武術などに准ずるもの

殆ど超一流レベルで習得済み だが使う機会があまりない

ネギま!の世界の魔法・技術

適正は全て 全種類使用可 オリジナル魔法もあり 今後使用予定

【闇の魔法】

肉体に魔法を取り込む 相応のリスク有なのだが人間であり人
外なのでリスクは無

基本は【無銘】に装填するので肉体へのリスクはなし

余程のことがない限り通常時・リミッター解放時であろうと肉体には取り込まない

例外は治癒系を取り込む場合 その時は傷や病気といった害と判断されるものを悉く回復するのでリスクは無

【太陰道】

マキア・エレベア

【闇の魔法】の最終到達点 敵の魔法を己に取り込み己の力とする

【無銘】に施した術式を起動し、敵の放出系の魔法を【無銘】に吸収し己の力にする

【咸卦法】

究極技法のひとつ、シユンタクシス・アンテイケイメノイン 気と魔力の合一

たまに神通力と気、神通力と魔力、神通力と魔力と気を合一することもある

三つのときは【神卦咸】になる

【影の倉庫】

日用品と言われる類のものを収納

本来の姿で使うナイフはここに収納している

【神鳴流】

二の太刀を含む全てを使用可 免許皆伝

神鳴流を原型に自身にしか使えない神鳴流神儀型という亜流を創る

リリなの世界の魔法

全て使用可 飛行魔法以外はあまり使わない

非殺傷設定のSLBはスターライトブレイカーOHANASHIには便利

型月世界の魔法・魔術・能力

作者が知っているものだけ使用可

ゲート・オブ・バビロン

【王の財宝】武器貯蔵庫

アンリミテッド・ブレイド・ワークス

【無限の剣製】使うことはない

【真名解放】宝具を使用しないからやらない

【直死の魔眼】両儀式・遠野志貴を基にした外見のときのみ使用

【魔法】使うことすらない

【その他諸々】詳しくは知らないから使わない

西尾世界の異常アブノーマル・過負荷マイナス・能力

ほぼ使用可 基本使いどころがない

【見稽古】使いどころが少ないと言うか既にない

【異常】完成があるため既に完成形しかない だが使うことはあ

まりない

【過負荷】大嘘憑きオールフィクション、不慮の事故などを使えるが使わない 勝負

が一方的になるため

とある世界の魔術・超能力・技術

ほぼ使用可だが殆ど出番はない

能力の使用は演算能力に依存するので魔力・気・神通力は消耗し
ない 強いて言うなら体力と精神力の消耗

技術は超の未来技術と同等かそれ以上

灼眼のシャナ世界の異能

フレイムヘイズの能力・宝具を使用可

能力の使用には魔力、宝具の使用には神通力を消耗
ぶっちゃけ【闇の魔法】で再現できるから陽の目を見ることはない

【アラストール】コキユートスネギま！世界の魔法使用のための魔法発動体

身に付けていると炎属性の魔法の威力が強化される 因みに創造の
力で創ったものなので人格はない

【夜笠】創造で創った魔法・物理衝撃をそれなりに緩和するマン

トにダイオラマ魔法球の仕組みを流用してオリジナルを再現 【無

銘】を始めとする武器を数種類収納 【闇の魔法】でマキア・エレベア『燃える天空』ウラニア・フロゴシス

を付与することで、炎翼を再現出来る様に加工した

基本シヤナを基にした外見の時のみ使用

烈火の炎世界の能力

烈火のように炎術を使用できる

火影忍軍魔道具を全種類保管、使用可

【火竜】壱式から捌式の炎の型がある

壱式碎羽：腕に炎の刃を形成

貳式崩：炎版のリリなのアクセルシューター

参式焰：炎の鞭

肆式刹那：火竜の目が開いたときにその目を見たものを燃やし尽
くす

伍式円：点と点を繋ぐことで出来る面の結界 最低でも3つの点
を必要とする

陸式累：相手の心理的に嫌悪している幻術を見せる

漆式虚空：炎版のリリなのデイバインバスター

捌式裂神：死者の肉体と魂を炎に変えて使役する

【火竜合成】

それぞれの炎の型を合成する 虚 崩のように数の多い方から字を書くことが必須であり、二匹以上を合成するのにはかなりの精神力を必要とする

【魔道具】

土星の輪：力の基礎能力をアップ

風神：風を操りカマイタチや竜巻を起こす

閻水：水を固定化させて刃にする 氷紋剣という剣術を使える

その他諸々

緋弾のアリア世界の技術・物質

銃や剣やナイフの扱いに長ける

ヒステリア・サヴァン・シンドロームという体質はあるにはあるが稀である

緋々色金といった珍しい物質を使った道具がある

その他の世界の能力・技術

BLEACHやONE PIECE、伝勇伝など使用可 だが使うことはない

ネギま！世界の魔法などで再現はする 特にBLEACHの斬魄刀とか

特殊スキル

創造

あらゆるものを創ることが出来る

仕組みなどの知識も同様に貰っているため完璧なものが出る

完全変化

外見を老若男女問わず完全に変化させることが出来る

副次的なもので他者の肉体を成長・退化させることも可（不老者にも作用する）

後者の使用は大戦終了後から原作1巻開始までの20年間に何度か予定

アスナには使用不可 害あるものではないが魔法無効化能力によって弾かれる

【ノワール】モデルは白純里緒

【ブラン】モデルは荒耶宗蓮

【シャナ】モデルはシャナ 変化するときには肉体年齢15歳Ver

アカシック・レコードへのアクセス

あらゆるものの現在と過去の『記録』を閲覧可

稀に未来を閲覧することも出来るが基本、未来は閲覧不可

生物の『記憶』を閲覧することは出来ない

黄金律

お金に困らない 数値的にはSS相当

幸運

数値的には最大値 それでも麻帆良のラッキー仮面・椎名桜子のほうが高い

能力発現

他者にネギま！世界以外の能力を副作用なしで発現させることが出来る

とある世界の超能力など

【王の財宝】などといった強力ものは不可

【魔眼】劣化品のみを発現させる

現状使う必要性がない

上限値撤廃

鍛えれば鍛えるほど強くなる だが現状では殆ど意味がなくなっている

本契約・仮契約

バクティオー

紫稀の力が強力すぎるため従者にはなれず主にしかなれない

ミニステル・マギ

マスター

紫稀と仮契約すると不老者になり、本契約すると不老に加え軽い不死になる

本契約は破棄出来ないが、仮契約は破棄出来、破棄後不老性がなくなる

1人が本契約しても他の人との仮契約は無効にならない

本契約は最大12人、仮契約は20人くらいまではいける

現在、契約しているのは本契約でエヴァ・アリカ・忍の三人

二つ名 外見時で分けてはいるが既に同一人物だと知られているので意味は無い

紫稀時

レジエント・アライヴ

【全てを統べる者】

ノット・キル・エンペラー

【不殺の帝王】

フレイムウイング

【炎翼の担い手】

【生ける伝説】

ノワール時

【破滅を齎す黒】

カウンター・キル

【後手必殺】

ブラン時

【白き救済者】

【幻の聖人】

シヤナ時

【炎髪灼眼】

名前 エヴァンジェリン・A・K・M・神儀 (エヴァンジェリン・アタナシア・キティ・マクダウエル・かみぎ) 裏 零崎音織
(ぜろざき おとおり)

性別 女 年齢 約600歳

種族 吸血鬼(真祖) 不老不死

懸賞金 元1000万ドル 大戦の英雄となったことで完全失効

容姿は原作どおり

ステータス値

筋力	: S	(S S S +)	【 S S S + 】	
耐久	: A A A +	(S S S)	【 S S S + 】	
敏捷	: A A A +	(S S S)	【 S S S + 】	
魔力	: S S	(S S S +)	【 S S S + 】	
気力	: A A A	(S S +)	【 S S S + 】	
神通	: A A A	(S S +)	【 S S S + 】	
幸運	: S S	(S S)	【 S S 】	E

基本リミッターなし

() 内は【闇の魔法】使用時

【】内は紫稀からの供給時

神通力は紫稀との本契約によるもの

幸運値の高さも本契約によるもの

大戦期より神通力がA A +からA A Aに
それに伴いブースト時の出力もアップ

スキル

剣術・武術に准ずるもの

基本的に使用可

メインは合気柔術 錬度は超一流
合気柔術以外の錬度は達人クラス

超一流 >>> 達人 >>> 一流 >>> 二流 >>> 三流 >

>>>> 付け焼刃 > 素人

錬度的にはこんな感じ

ネギま！世界の魔法

適正は氷・闇 一応全種類使用可 適性により威力などが増減

氷・闇 >> 水 >> 雷・風 > 土 >>> 光・火・癒

【闇の魔法】

肉体に魔法を取り込む 吸血鬼の真祖なため肉体的リスクは無

取り込むのは氷・闇系統が主流 たまに風や雷も取り込む

本契約・仮契約

紫稀と本契約

名前表記 ATHANASSIA ECATERINA MACDO
VELL EVANGELINA

称号 月に愛されし者

色調 虹 (prisma)

徳性 愛 (caritas)

方位 北 (septentrio)

星辰性 月 (Luna)

アーティファクト 月の加護

形状は防具類なら自由に变化する

能力

名の通り夜間に最大性能を発揮、日中は1ランクダウン

1. 最大で準最強クラスの魔法攻撃を無力化、最強位下位クラスからは緩和する

日中では上位の上クラスまでを無力化^効

2. 対象を不可視にする 同時に気配遮断なども発動 最大で最強位中位クラス相応まで発揮

ただし気配遮断は日中に最大性能を発揮する

これは日中でも月が出ているのに見えるのにくいというのを逆手にとっている

契約

チャチャゼロとドール契約

二つ名

ダークネスアイズ・エンブレスターク・エヴァンジェル

【闇氷の女帝】 【闇の福音】 【人形使い】 【不死の魔法使い】 【

マガ・ノスフェラトウ

童姿の闇の魔王】 他

名前 チャチャゼロ

性別 不明 年齢 約500から600歳

種族 自動人形

懸賞金 元300万ドル エヴァたちが大戦の英雄となったことで同時に完全失効

ステータス値

筋力：A A A +

耐久：A A +

敏捷：S S

エヴァから供給される魔力量によって増減する人形だから魔力も気も神通力も幸運も関係なし人形のため基本スペックは大戦時から変動なし

スキル

剣術？

とりあえず切断に関しては超一流クラス

契約

エヴァとドール契約

二つ名

キリングドール

【殺戮人形】 【吸血姫の従者】

名前 神儀アリカ (かみぎ ありか) 旧名 アリカ・アナル
キア・エンテオフユシア

性別 女 年齢 大体34歳前後

種族 人間 不老と軽い不死

容姿は肉体年齢を14,5歳に下げたくらい

ステータス値

筋力	: AA +	(SS +)
耐久	: AA A	(SSS)
敏捷	: AA +	(SS)
魔力	: S +	(SSS +)
気力	: AA +	(SS +)
神通	: AA A	(SSS +)
幸運	: S S	(SS)

基本リミッターなし

()内は紫稀からの供給時

神通力は紫稀との本契約によるもの
幸運値の高さも本契約によるもの

スキル

剣術・武術に准ずるもの

基本的に使用可

錬度は達人クラス

ネギま！世界の魔法

全属性に中位魔法使い同等の適正 全種類使用可

上位魔法は高位・最高位クラスの魔法使いに比べれば威力・範囲
が数段劣るものの魔法使いとしては充分

王家の魔力を使用できる

本契約・仮契約

紫稀と本契約

名前表記 CAMIGI ARICA

称号 太陽に愛されし者

色調 虹 (prisma)

徳性 知恵 (sapientia)

方位 中央 (centrum)

星辰性 太陽 (Sol)

アーティファクト 太陽の加護

形状は武具と防具の一体型

武器は剣のみ、防具類なら自由に变化する
能力

名の通り太陽が昇っているときに最大性能を發揮、夜間は1ランクダウン

1・最大で準最強クラスの物理攻撃（衝撃）を無力化（効）、最強位下位クラスからは緩和する

夜間では上位の上クラスまでを無力化（効）

2・対象を不可視にする 同時に気配遮断なども発動 最大で最強位中位クラス相応まで發揮

ただし気配遮断は夜間に最大性能を發揮する

夜間に太陽は昇っていないからである。

3・氷・水・閻属性に対して絶大な攻撃力を誇る剣（晴天時、数值的にS）

快晴時ならばさらに威力があがる（数值的にSS）

曇天時は0・5ランクダウン（AAA+）夜間は1・5ランクダウン（AA+）

エヴァの「月の加護」の反対版であり王家の魔力があるため魔法に対する無力化（効）がない

「月の加護」と違いこちらには剣といった攻撃手段がある

二つ名 なし

名前 神儀明日菜（かみぎ あすな） 旧名 アスナ・ウエス
ペリーナ・テオタナシア・エンテオフュシア

性別 女 年齢 大体120歳

種族 人間

容姿は原作より2年前であるため若干背が低い

ステータス値

筋力：SS

耐久：S+

敏捷：S+

魔力：AAA

気力：AAA+

幸運：AAA

紫稀とはまだ契約していないため神通力や紫稀からの供給は無し

スキル

剣術・武術に准ずるもの

剣術と体術を使用可

メインは剣術 錬度は達人クラス

体術は達人クラスと一流の間

ネギま！世界の魔法

マジックキャンセル
魔法無効化能力

紫稀が創造した偽・破魔乃剣はまのつるぎによって「トメイ・アルカイスアナルキアース無極而太極斬」を行使出来る

咸卦法を使用可

【咸卦法】

究極技法のひとつ、シユンタクシス・アンテイケイメノイン気と魔力の合一

本契約・仮契約

現在はまだなし

二つ名

【黄昏の姫御子】

名前 神儀忍 (かみぎ しのぶ) 本名 キスショット・アセ
ロラオリオン・ハートアンダーブレード

性別 女 年齢 約600歳

種族 吸血鬼(真祖) 不老不死

容姿は阿良々木暦が初めて会った時のまま

ステータス値

筋力：A A A +	(S S S)
耐久：A A A	(S S +)
敏捷：A A A	(S S S)
魔力：S	(S S S)

気力：A A + (SSS)

神通：A A + (SSS+)

幸運：SS (SS)

基本リミッターなし

() 内は紫稀からの供給時

神通力は紫稀との本契約によるもの
幸運値の高さも本契約によるもの

スキル

剣術・武術に准ずるもの

基本的に使用可

メインは剣術 錬度は達人と超一流の間

他の錬度は全て達人クラス

ネギま！世界の魔法

適正はエヴァと全く同じ 威力や範囲などは若干エヴァより劣る

西尾世界の能力

怪異の中の怪異、吸血鬼の力の行使

怪異殺し「心渡り」を使う

本契約・仮契約

紫稀と本契約

名前表記 CAMIGI SINOBU

称号 ????

色調 虹 (prisma)

徳性 信仰 (fides)

方位 北 (septentrio)

星辰性 太陽 (Sol)

アーティファクト ????

形状 ????

能力 ????

二つ名

【怪異殺し】

名前 神儀真名 (かみぎ まな) 本名：マナ・アルカナ

性別 女 年齢 大体13歳

種族 半魔族 (人間と魔族のハーフ)

容姿は原作より2年前であるため若干背が低い

ステータス値

筋力：AA+ (S+)

耐久：A A (S)
敏捷：A A A (SS)
魔力：A A A + (SS+)
気力：A A A + (SS+)
幸運：A A A (AAA)

紫稀とはまだ契約していないため神通力や紫稀からの供給は無し

() 内は魔族化した時のスペック

スキル

剣術・武術に准ずるもの

銃器に関しては超一流

剣の扱いに関しては超一流と達人クラスの間で若干達人クラス寄り
他は一流より若干上

455

ネギま！世界の魔法

魔族とのハーフなので使用可能か不明

左目に魔眼がある

緋弾のアリア世界の技術・物質

銃や剣やナイフの扱いに長ける

紫稀に師事していたこともあり「銃弾撃ち」^{ピリヤード}「鏡撃ち」^{ミラー}「弾丸切り」^{バリッ}「跳弾」を使いこなす

「バリッ・トゥ・ドウ」をこなす

本契約・仮契約
現在はまだなし

二つ名

【双剣双銃】
カトラ

紫稀側現状設定【麻帆良入り時】（後書き）

改めて思った、やっぱりバグを超えたバグだったと・・・。

エヴァ様、アリカ、忍は本契約しているのでバグ化。

アスナと真名も仮契約なりしたら第一段階のチート化、
本契約したら第二段階のバグ化ですね・・・。

忍のアーティファクトを可及的速やかに募集
アリカの二つ名も募集です

第29話（前書き）

【総PV】 54万【お気に入り】 600件【総合評価】 1500P
突破！！

投稿してから約3週間ですね！。

十六夜様、なおぼん様、赤白黄色様
感想ご意見感謝です！

文章が怪しい部分も多々ありますが、ご容赦の程を。

エヴァ様と遂に合流だよ！

ここまで長かった・・・。

そんな29話、どうぞ！！

第29話

Side・other

一つのイレギュラーの存在によって本来の正史から外れた物語。

その物語はさらに正史から外れる。

2001年。

神儀紫稀が麻帆良の地にいるというそれだけで。

この物語の行き着く先は一体どこなのか。
今それを知ることが誰も出来ない。

Side・end

Side・紫稀

キティを放つて16年。やっと再会出来るぞー！！！！

長かったなー……。自分から会わないようにしてたのだから自
業自得だけどさ……。。

まあーその16年間に何があつたかなんて、過去を振り返れば誰
でも知ることできるから割愛するけど。

現在、私はぬらりひょんの目の前、つまり麻帆良学園女子中等部
学園長室にいる。

「よし、ぬらりひよん。外堀は埋めてあるな？」

「勿論じゃとも。紫稀殿とアリカ殿にはエヴァ殿とアスナ君や木乃香たちと同じ「1-A」に共学校を作るためのテストケースとして通ってもらおう」

「テストケースと言う建前で、本音と見せかけたアスナや木乃香の護衛と言う別の建前をさらに準備して、私がキティたちと一緒に学校に通いたいと言う本音を隠してな！」

「シキ・・・お主そんなことを考えておったのか・・・」

あれ？アリカは知らなかったっけ？まあいいか。

「で、担任はガトウかタカミチなんだろう？キティたちには私たちが今日来るってことは話してないんだよね？後は夜にでも世界樹前の広場で実力を示すために模擬戦でもするのか？」

「担任はガトウ君で副担任にタカミチ君を指名しておる。紫稀殿たちと関わりのある人物たちには話しておらんし、新しい警備員として魔法先生、生徒たちに夜にでも紹介しようと思っておる」

「そうか。ついでに広域指導員の仕事もくれよ。特別広域指導員ってことでその辺りの権限くれや」

「紫稀殿が広域指導員になってももらえるのなら、麻帆良の治安ももっと安全になるじゃろう。こちらからもお願いしましょう」

「と言うか無理に敬語使おうとするな、似合わない」

「フオッ、そうかのう？まあー紫稀殿がよいなら普段どおりにしようかのう」

「そうしておけ。それで担任のガトウはまだか？」

「もう少しで来るはずじゃ」

普通なら最初からそばにいるよな。ん？足音聞こえてきたってことは来たか？

「学園長、ヴァンデンバーグです」

「入っとくれ」

さあーどんな反応をしてくれるかな？

「はい、失礼しま・・す・・つてシキにアリカ様じゃないですか！一体こんなところで何をしていますか！？」

「何ってここに通うんだよ？勿論アリカも一緒だけど。お前のクラスに諸事情で遅れる2人がいただろう」

「シキの言っておる通りじゃ。ガトウ、落ち着け。あと煙草もやめるのじゃ」

「はあー。分かりました。あと煙草は精神を安定させるためなので今更やめるのは無理です」

うわあーヘビースモーカーじゃねーか。肺がんになっても知らん。

ってガトウがヘビースモーカーってことは、まさか・・・？

「おい、ガトウ。まさかと思うが、タカミチまでヘビースモーカーになってないだろうな？」

「ギクツ！？ヤ、ヤダナーソンナコトアルワケナイジャナイカ」

「棒読みで言っても信憑性がないぞ？はあー純粹だったタカミチ少年までヘビースモーカーになるなんて・・・」

「師事した相手を間違えたな、タカミチ……。可哀想にのう……。最初からシキに師事しておれば健康体でいられて強くなれてたのにのう……」

「ひ、酷くないですか！シキどころかアリカ様まで！？」

「客観的事実を述べただけだ^っ」

あつ、トドメ刺したっばい。orzなってる。どうでもいいな。

「おい、ガトウ。いつまでも膝ついてないで、私とアリカをお前のクラスまで案内しろ」

「あとクラスの名簿があれば貸すのじゃ」

「あつ、はい。名簿はこれです」

「じゃ、じじい。また後でな」

「フオッフオッフオッフ。では夜にのう」

そして私たち三人は学園長室を後にした。

現在、「1-A」に行くために廊下を歩き中・・・歩き中・・・。

さてと、名簿の確認っと。おっ、10番と12番が空いているってことは10がアリカで12が私かな。

「ガトウ、私とアリカの説明はどういう風になっている?」

「シキがさっき言ってたように、諸事情で入学式に間に合わなかったということになってたと」

「それで、今日はタカミチはどうしたのじゃ?」

「タカミチ君なら「悠久の風」の方の仕事で出張中です」

「そうかそうか。で、このトラップは一体なんだ?」

黒板消しトラップって古風すぎじゃね?

「ああーこれは入学式の日にはトラップが仕掛けてあってそれを私が攻略したら何日かに1回仕掛けられるようになったんだ・・・」

「理解した。じゃーこのトラップは私が攻略してもいいな?」

「いいけど、どうするんだ？」

「なに、第一印象は大事だろ？」

そう言っつて私は勢いよく扉を開けて中に入る。

まずは黒板消し。頭上10センチのところを掴み黒板の方へ投げ戻す。

次に下に張られているロープを踏み、後ろから飛んでくる矢を3本とも振り返らずにキャッチ。

最後のバケツを水がこぼれない方に受け止め床に下ろしながら教壇へ。

『『『おお〜！？』『』』

「『『ちっ』『』」

完全攻略したことによって驚いているようだな。一部は舌打ちしていたが。

その辺はあとにして、ここで挨拶！某魚箱の会長をリスペクトだ！！

「世界は平凡か？未来は退屈か？現実 is 適当か？安心しろ。それでも生きることは劇的だ！そんなわけで本日より、この私が君たちのクラスメートだ」

決まった・・・！？

「お主は何をやっておるのじゃ、シキ」

あいたっ……。誰だ、人が成功の余韻を味わっていたと言つのに……。まあ誰かなんて分かっているけれど。

「アリカ、持つてる名簿で頭を叩くな。痛いじゃないか。と言つがいつの間に隣にいた」

「お主がふざけておったからじゃろう？あと、お主の3歩後ろを普通に歩いてついてたまでじゃ」

アリカの気配ってたまに感じなくなるから困るんだよね……。

「はいはい、二人ともそろそろ落ち着いてもらえないかな？」

「ガトウ、お前影薄かったな」

「シキ……。それを言わないでくれ……」

あつ、そう？どうでもいいけどさ。

「そろそろ紹介してくれよ」

「そうだね。彼らは諸事情で遅れて入学式に参加出来なかった、君たちと同じ新入生だ」

「神儀紫稀だ。シキと呼んでくれ」

「神儀アリカじゃ。アリカでよい」

ふむ、驚いているアスナとマナの反応は予想通りかな？

木乃香と刹那は「もしかして」みたいな顔だな。

キティ？キティはさ、飛びついてくること分かってたから、結婚指輪に仕込んでおいた術式で金縛り中だ。飛びつきたいのに体が動かないと言っジレンマを味わっているところだろう。決してキティの扱いが酷いわけではないぞ？このあと質問攻めにあうんだから、今は落ち着かせておかねば。

『『『『『『『『
『『『『『『『『
『『『『『『『『
『『『『『『『『

「「ん？」

『『『『『『『『
『『『『『『『『
『『『『『『『『
『『『『『『『『
『『『『『『『『
『『『『『『『『
『『『『『『『『
『『『『『『『『
『『『『『『『『
『『『『『『『『
『『『『『『『『
『『『『『『『『
『『『『『『『『
『『『『『『『『
『『『『『『『『
『『『『『『『『
『『『『『『『『
『『『『『『『『
『『『『『『『『
『『『『『『『『
『『『『『『『『
『『『『『『『『
『『『『『『『『
『『『『『『『『
『『『『『『『『
『『『『『『『『
『『『『『『『『
『『『『『『『『
『『『『『『『『
『『『『『『『『
『『『『『『『『
『『『『『『『『
『『『『『『『『
『『『『『『『『
『『『『『『『『
『『『『『『『『
『『『『『『『『
『『『『『『『『
『『『『『『『『
『『『『『『『『
『『『『『『『『
『『『『『『『『
『『『『『『『『
『『『『『『『『
『『『『『『『『
『『『『『『『『
『『『『『『『『
『『『『『『『『
『『『『『『『『
『『『『『『『『
『『『『『『『『
『『『『『『『『
『『『『『『『『
『『『『『『『『
『『『『『『『『
『『『『『『『『
『『『『『『『『
『『『『『『『『
『『『『『『『『
『『『『『『『『
『『『『『『『『
『『『『『『『『
『『『『『『『『
『『『『『『『『
『『『『『『『『
『『『『『『『『
『『『『『『『『
『『『『『『『『
『『『『『『『『
『『『『『『『『
『『『『『『『『
『『『『『『『『
『『『『『『『『
『『『『『『『『
『『『『『『『』

うおっ、想像以上だ、この元気さは。

「ねえねえ、年はいくつ？」「^{彼女}彼女いる？」「趣味は？」

前言撤回。この元気のよさはあり得ん……。と言っより質問が多い。

「はいはい、みんな静かにね」

そっ言っなら最初から抑えろよ……。

「ガトウ、1時間目はお前の授業だったか？」

「確かに私の授業だ」

「ならその時間を私とアリカへの質問タイムに変えてもらえるか？」

「そつだな。ここで質問を禁止したら後で大変だと思うから、そうするか」

『『『やった〜〜!!』『』』』』

いちいち騒がんでくれよ・・・。

「んじゃ、質問形式は出席番号順で1人1つでいいか」

『『『りよ〜か〜い』『』』』

「出席番号1番は、いないようだから2番か。ん？ゆーなじゃないか」

「やつほ〜、久しぶりだね二人とも。んじゃ私からの質問は無難に何故ここに通うようになったのかにゃ〜？」

「各中等部には共学校がないから新設するときのためのテストケースとして通うようになった。と言う建前で、とある人物の護衛のためと言う更なる建前で、私が通いたかったという本音を隠している。まあーほぼ戯言だが」

本当は全部真実だけどな!!

「私は、ついでじゃ。シキが通うからみたいなものじゃな」

「じゃ、次の朝倉和美だな」

「それじゃ、ゆーなやこのクラスに沢山いる神儀姓、お二人の関係は？あと気になる子は？」

「後者は誰か別のやつに質問させる。前者だが、ゆーなどは家族ぐるみの付き合い、アスナ・マナ・エヴァ・茶々丸は『家族』だ。この場合は血縁ではなく、絆とか信頼とかの類で繋がっている『家族』のことだ。これで満足だな？」

茶々丸に関しては今知ったばかりだがな。いや、知識的には知ってたけど。

「次、綾瀬夕映」

「それでは、お二人の趣味は」

「私の趣味か……。あえて言うなら読書、鍛錬、料理と言ったところだな」

鍛錬ってところで反応したのが2人？3人？程いたな……。無視とこつ。

「私は特筆するものはないな」

あれ？アリカって無趣味だったっけ？

「次は6番の大河内アキラ」

「スポーツで何かやっていますか？」

「スポーツねえ。あんまりしてないな。剣術や体術といったものならやってるんだがな」

「私も似たようなものじゃな」

「強いて言えばウォーキングかね？と言うか旅してたからスポーツなんてものじゃないが」

「んー鍛錬もいいが、何かスポーツにでも手出しておくかなー？」

「それじゃ次の柿崎美砂」

「んじゃ、さつき朝倉がはぐらかされた質問の気になる子は？」

「気になるのと言っても一概には言えないほど種類は沢山あるが、まず一番はエヴァとアリカだ。次にアスナ・マナ・茶々丸・木乃香・刹那・ゆーな。いいなと思うのは大河内アキラ、那波千鶴、長谷川千雨だな」

あつ、キティが真つ赤だ。後で撫でとかないと。木乃香と刹那、ゆーな、最後に挙げたのも照れてるっぽい。ちうたんは微妙だが。

「私は同性愛者ではないから関係ないな」

「8番の春日美空」

「んじゃ、年齢は？」

「お前達と同学年なのに質問する意味がわからない」

「女性同士とはいえ年を尋ねるのはどうかと思うぞ?」

「さて、神儀家は飛ばして」「なっ!?!」「……15番の釘
宮田」

「それじゃ無難に好きな食べ物とかは」

「特になし。嫌いな食べ物もない」

『『『おお〜シンクロしてる』』』

「次16番、古菲」

「勝負するアル!」

「はい却下!。次、木乃香」

「もしかしてしーくとアーちゃん?」

「その通りだが、その呼び方はやめてくれ。シキとアリカで頼む・
」

「私からも頼む……」

「むう!。わかつたえ」

「で、18番早乙女ハルナ」

「さっきの気になる人で挙げた人との関係と理由を教えて」

「朝倉のときの最低限しか言わなかったからいいだろう。エヴァとアリカは私の婚約者だ。因みに私たちの家柄的に一夫多妻は問題にならない。そして木乃香と刹那、ゆーなは8年くらい前にあっていて前二人とは幼馴染だ。最後の三人は外見的に好みだからだ。残り
は朝倉のときの回答と同じだ」

『『まじで〜!?!?』』』』

「で、その頭にあるのは触覚か?ある生き物を連想するから引っこ抜いてもいいか?」

「ひどっ!?!?というか普通に髪の毛だから、それだけは勘弁して頂戴」

「そうか、それは残念だ。それじゃ次は刹那だな」

「あつ、はい。質問ではないのですが、後日でいいので剣の手合わせをお願いします」

「いいだろう。同じ流派の史上最強の剣士として手合わせしてやる。それと私からも一つ質問。と言うより『あるとき』の言葉を理解出来たか知りたい」

私たちが京都を離れるときに刹那にいった言葉。

「護りたいものが出来たら立場がどうかでなく最後まで傍で護り抜け。命を賭けてではない。自分の命も一緒に生きて護り抜け」
つまりは木乃香を護りたいなら身分に捕らわれずに常に隣に立ち、そして護り抜き、寿命以外で死ぬなっただことだ。

「大丈夫です」

おおーいい笑顔じゃないか。助言しておいてよかった。

「22番、超鈴音」

「ふむ、それじゃ火星人や未来人についてどう思うか？」

「別にどうでもいい。強いて言うなら私は私であって私以外の何者でもないし、何者にもなれない。そこに外国人や宇宙人、天才なんでものは関係ない。それはただの付加価値、つまりおまけだけで本質ではないからな。簡単に言えば超鈴音、結局お前はお前以外の何者でもないしお前以外の何者にもなれないという事だ『似非中華火星未来人』」

「『ツ！？』・・・貴重な意見だったネ。タメになったヨ」

「次、23番長瀬楓」

「拙者と「はい、却下ー」最後まで言わせてほしいでござる・・・」
「黙れ忍者。忍者なら完璧に一般人に擬態しろ。語尾にござるつける時点で正体を隠す気、最初からないだろ！」

「何のことでござるか？拙者は忍者なんかではないでござるかよ」

「もう、どうでもいいや。次は24番那波千鶴」

「先ほどの気になる発言はどうしたらいいのかしら？」

「なんなら高校卒業したら私のところに永久就職でもするか？」

「何故口説おまのこいてるかー！？」

キティの金縛りも解いてるからアリカとダブルで叩かれた……。

「んじゃ28番長谷川千雨」

「那波さんじゃないが、私も一体どういう反応すればいいんですか？」

「だからさつきも言ったとおり永久就職でもするか？楽しんで暮らせるよ。私の個人資産だけでも莫大だし、エヴァやアリカの個人資産も私よりも少ないだけで莫大なのは変わらないし。女としての幸せも与えられると思うし」

「だから何故口説く！」

いいじゃないか、英雄色を好むって言うんだから……。あれ？

なんかこの16年で私の貞操観念変わってないか？おかしいな・・・
。私に何があつたんだろ？

「31番の雪広あやか」

「では、先ほどからヴァンデンバーグ先生のことを呼び捨てにしていらっしやいますが、どういったご関係で？」

「ガトウと今日はいない副担任のタカミチとは昔からの知り合いだ。因みにタカミチの体術や戦術の師匠でもある。それと実力はガトウよりも圧倒的に私のほうが上だ。よって私はガトウたちから敬われる立場だ」

「ガトウは私の家の使用人みたいなものだったから、今更敬語など無理じゃな」

確かに【紅き翼^{アラルプ}】はアリカとアイネ嬢の個人戦力だったから間違いないではないだろう。

「そうなんですか」

「じゃ32番の四葉五月」

「趣味に料理と言っていましたけど得意な種類はなんですか？」

「特筆したものはない。が、和洋中大抵のものは作れる。」

「次の33番ザジ・レイニーデー」

「特にないです」

「こんなところかな？」

「はい、それじゃー質問タイム終了な。あと、言い忘れていたが、私は1-Aの生徒であると同時に「広域指導員」も兼任している。あまりハメを外して騒ぎすぎると指導室送りにして新田先生からの説教受けさせるからなー」

『『『え〜。横暴だ〜』』』

「適度に騒ぐのは許容するんだ。騒ぎ過ぎなければ問題ないだろう？」

『『『うっ……』』』

「何かに巻き込まれてた時は助けてやる。あとさんとかちゃんとか面倒だから苗字か名前を呼び捨てにするから」

『『『はい!』』』

「じゃ、ガトウ。もういいぞ」

「そうかい？なら時間も半分しかないけど授業しようか。シキはエヴァの隣、アリカさんはその隣で」

「了解つと」

「ガトウにさん呼びされるのは慣れぬな」

「今は生徒なんですから勘弁してください」

「分かっておるわ」

「コントですね、わかります。」

「アリカ、さつさと席に行くぞ」

「ああ」

「じゃ、教科書の14ページを開いてくれ」

「（愛しのキティ。会いたかった）」

「（16年も放っておいてよく言うわ）」

「（これからはずっと『家族』一緒に暮らせるんだからいいだろう）」

「（今回はそれで勘弁してやる。ところでこの呪いをどうにかしろ）」

「（呪いね。てかこれ誰にやられたんだよ）」

「（バカだ。^{ナギ}数年経ったらシキか自分が解きに来るって言うておい
て来なかった）」

「（因みに私はあいつから何も聞かされてないからな。呪いなら後で解く）」

「（やっと自由になれるのか）」

「（あと3年間は学園に通うぞ。いいな?）」

「（いまさら3年なんて大したことはないから構わん。それにシキが戻ってきたという事は退屈しなくて済むだろうしな）」

「（さいですか）」

まあー中学程度の勉強はしなくてもいいんだけどな。学生生活ってのを楽しみたいのさ。

さて放課後は魔法使いとしての集まりまで何をして過ごそうかなー

S i d e · e n d

第29話（後書き）

やっと麻帆良入りしました。

分かってた人も多いようですが、紫稀とアリカは生徒としてA組入りです。

時間が全く経過していない！？

今回は、紫稀たちの歓迎会と魔法先生・生徒たちの顔合わせ模擬戦かな？

紫稀と当たるのは自然とガトウになるかな？

タカミチがガトウを超えているって言うのもありか。

アーニヤの修行内容をどうするかー。

紫稀側ハーレムに昇格した面々とパーティーのアーティファクト案
まだまだ募集中なり。

特に忍に関しては可及的速やかに頼みます。

エヴァ・アスナ・忍・マナを除くハーレムパーティーの二つ名も同時に募集です。

アリカ・木乃香・刹那・ちうたん・アキラ・千鶴・ゆーな・茶々丸
ですな。

第29・5話【未契約閑話】（前書き）

大まかな流れは前から考えてはいますが、細かい描写などはその時のノリで書いてます。ネタが尽きなければいいのだけれども・・・。

SILVER様、赤白黄色様、杉ちゃん様×2、パンチ様、なおぼん様
感想ご意見感謝です！

前回の次回予告と内容が違っているよ。
今回は紫稀と未契約のハーレムメンバー視点！
そんな29・5話、どうぞ！！

第29・5話【未契約閑話】

Side・アスナ

中等部に進級して、入学式から一週間が経った日にシキとアリカが「1-A」にクラスメイトとしてやってきた。

学園からの事前連絡がなかったので、どうやらこれは大分前からシキが企んでいたことで学園長も一枚か二枚噛んでいたようだ。諸事情で遅れるらしかった二人のクラスメイトがシキとアリカの二人だったようだし。

朝倉と柿崎、パルの質問で気になる相手とその理由と言うのでシキは、全部で11人の名前を挙げた。だがエヴァ・アリカに対しての気になると私・マナ・木乃香・刹那・ゆうなに対して気になるの意味合いが違うのをなんとなくだが理解できた。

多分私を含めた5人は全員理解したようで、若干悔しさが顔に出ていたのが分かった。特に木乃香と刹那は8年ほど前に告白と取れるような発言をしていたので尚更だろう。いや、ようなじやなくて正しく告白だったか。

さらにアキラと那波、長谷川の3人を外見的だが好みと言って挙げていたからかなり拙いと判断した。

なんとかしてシキを振り向かせないと。

Side・end

S i d e ・ 真名（以降マナ表記）

師匠がアリカさんと一緒に「1 - A」にやってきたときは正直嬉しかった。また一緒に過ごせるし、修行もつけてもらえると思ったから。

ただ、質問タイムとなったときに、朝倉と柿崎、早乙女の質問に師匠が答えたとき、エヴァとアリカさんに対してと私を含む5人に対しての気になるの意味合いが違うのをなんとなくだが理解してしまった。理解出来てしまったゆえに悔しかった。他の4人も一緒だったようで悔しさが顔に出ていた。恐らく私も出ていたのだと思う。その後に関わりの無かったであろう3人の名前を挙げたときはかなり焦った。

ふむ、アスナもなにやら思案しているようだし、共同戦線を組んで師匠に私たちを恋愛対象として見てもらえるように仕向けるとするかな。

S i d e ・ e n d

S i d e ・ 木乃香

むうー、しーくんがまさか同じクラスにやってくるとはおもわへんかったわ。せつちゃんやアスナたちも知らへんかったようや。同じように驚いてたようやし。

問題はしーくんがアーちゃんとエヴァちゃんに対して恋愛感情を持つことやな。ウチらにも向けられているようやしけど恋愛感情

とまでいくようなものじゃないみたいやし。

んーおじいちゃんに嫌々させられるお見合いを今後はしーくんが相手なら受けるって言ってみようかなー？せつちゃんもしーくんのこと好きだからおじいちゃんに頼んでウチとしーくん、せつちゃんとしーくんのお見合いをセツティングしてもらおかな？

アーちゃんやエヴァちゃんには負けへん！！勿論アスナやせつちゃんにもやけどな。

Side・end

Side・刹那

まさかシキ君が神鳴流最強の神儀紫稀様と同一人物だったとは……。でも、なんで初対面するとき名前聞いたのにわからへんかったのやる？あの頃は既に神鳴流を習ってたし、名前も何度か聞いたことがあったのに。シキ君が認識阻害の魔法でも使ってたんやるか？それなら理解できる。

朝倉さんや柿崎さんたちの質問の時に気になる相手として名前を挙げてもらったのは嬉しかった。けど理由が「幼馴染だから」だなんて……。別れるとき恥ずかしかったけれどこのちゃんと一緒に、プ、プロポーズとも取れること言っただし、ほっぺにちゅうだつてしたのに、全く意識されてないなんて……。うちって魅力ないんやるか？そっだとしたら落ち込むなー……。

それはそれとしてシキ君が京都にいた時に言われた言葉のことは

理解できた。だから私はあの頃以上にこのちゃんと仲良くなれた。

やっぱりシキ君はかっこいいな。そんなシキ君と恋人になれたら
幸せなんだろうな……。えへへ。

S i d e ・ e n d

S i d e ・ ゆーな

シキさんと初めてあったのは8年位前。おかーさんが帰ってきた
ときにおかーさんと一緒に家にやってきた。初めは誰かと思っただけ
ど、おかーさんたちの話を聞いてたら、魔法世界で起きた戦争を終
わらせた英雄だと知った。知ったときは驚いたけれど、とても優し
い人だったのを覚えている。

それと何故おかーさんと一緒だったのかを聞いたら、死にそうに
なったところを助けてくれたらしい。その時、シキさんがおかーさ
んを助けてくれていなかったらと思うと、今でも感謝したりないと
思う。

シキさんたちは忙しかったらしくて数日したら麻帆良から出て行
っていた。お別れの挨拶もきちんとしてきたけどちょっと寂しかった。
た。その後は麻帆良にシキさんの『家族』がいることを知って、お
とーさんとおかーさんと一緒に遊びにいたりしたな。その時にエ
ヴァちゃんにも初めて会ったんだけど。

その数年後にアスナと忍さん、マナがやってきてもっと楽しくな
った。

この数年間シキさんのことを忘れたことはあまりなかった。私の

中でシキさんは「大戦の英雄」ではなく「一人の男性」だった。この想いが恋に近いものだど気付いたのは最近だったけれど。そんな折に同じクラスに同級生としてやってきたのだから私は若干吃驚していただろう。

シキさんはエヴァちゃんとアリカさんを婚約者と言っていたけれども、本来の年齢を知っている人間からしたら既に結婚相手だと分かってしまう。

二人は強力なライバルだけれど、私だってシキさんのことを「一人の男性」として好きなのだから負けるわけにはいかない！おとーさんたちが私のこの想いに知ったときどんな反応するのか分からないけれどね。

S i d e ・ e n d

S i d e ・ アキラ

同じクラスに男の子がやってきた。神儀紫稀君。このクラスの神儀姓の人たちともう一人の転入生(?)とは『家族』らしい。いつになるか分からないらしいけど、共学の中等部を新設するためのテストケースとして彼はA組に編入されたらしい。

朝倉や柿崎、早乙女の質問で気になる相手の一人として私の名前が挙がったとき、私はちょっと恥ずかしかった。他にも名前を挙げられたエヴァンジェリンさんとアリカさんの名前を挙げた理由を聞いたときに、どうやら私の意識が飛んだらしい。

その前後の記憶が曖昧だったけれど、私の名前を挙げた理由で外

見が好みと言っていたのだけは覚えている。私は中学一年生の女子にしてみればかなり背が高い。この身長の高さは若干コンプレックスなのだけれど、正直嬉しかった。

意識が戻ってからの授業中はお世辞にも集中出来たとは言えなかった。気付いたら彼のことを考えていて、それを振り払っても暫くするとまた考えていた。

彼のが気になってしょうがなかった。もしかしてこれは恋なのだろうか？その辺はゆっくり考えていこうと思う。もし、そうだったとしても、彼なら背の高い私を関係なしに受け入れてくれるかもしれない。そう思った。

S i d e . e n d

S i d e . 千鶴

今日、同級生になった彼、神儀紫稀くん。彼の第一印象はよかった。彼の行動の節々に大人のような凛々しさと子供のようなあどけなさが見え出ている感じがした。

初対面だというのにいきなりプロポーズみたいなことを言われてしまった時は焦った。言った彼はエヴァンジェリンさんとアリカさんに頭を叩かれていたけれど。

それにしてもあそこまで直球なことを言われたのは初めてだったわ。私はあまり異性に対して関心を持たないのだけれど、彼には一部の女性を惹きつけるような何かがあるのかもしれないわね。

ふふふ、これから3年間楽しくなりそうだわ。

S i d e ・ e n d

S i d e ・ 千 雨

同級生に男が加わった。正直言ってあり得ないと思った。ここが女子校なのだから私の反応は当然だと思う。この異常を周りの奴らは異常と思わないのだから尚更だ。

さらにあいつは爆弾発言をしてくれやがった。気になる相手として私の名前を挙げた。私は異常なんてものに関わりたくない。女子校にいる一人の男子生徒なんて異常を引き寄せるだろうから尚更だ。

私にも質問をする権利というものが回ってきたので今後、必要以上に関わらないためにも今のうちに情報収集はしておくべきだと思う、発言の真意を尋ねてみたが、結局那波に返したのと同じような答えが返ってきた。個人資産が莫大だと聞いて若干心が揺れたが、人間だからしょうがないと思う。

後、あいつは男子生徒だけでなく「特別広域指導員」なんて肩書きも持っているらしい。生徒なのがいいのか？いや、考えるだけ無駄だな。一応、あいつは一般常識というものは持っているようだから、今まで周りにいた連中よりはマシだろうし。

放課後にあいつともう一人のアリカという女の歓迎会をするらしい。普段ならこういった騒ぎには参加しないのだが、あいつの情報量を少しでも手に入れておくべきだと思ったので参加することにした。

どこかに平穏な世界ってないのかな・・・？

S
i
d
e
.
e
n
d

第29・5話【未契約閑話】（後書き）

予告とは違う内容を書いてしまった。

紫稀とアリカの合流によつて焦る未契約のハーレムメンバーみたいな？

一部のキャラがの頭の中がお花畑になってます。
キャラの順番は適当なんですけどね。

次回、今度こそ歓迎会と魔法使いの会合！

正義の魔法使い（笑）をどう料理すべきか・・・。

その前に出席番号整理したのを載せるかもしれません。

紫稀側ハーレムに昇格した面々とパーティーのアーティファクト案
まだまだ募集中なり。

というかパーティーって誰かいたっけ？あつ、さよか。

特に忍に関しては可及的速やかに頼みます。

エヴァ・アスナ・忍・マナを除くハーレムパーティーの二つ名も同時
時に募集です。

アリカ・木乃香・刹那・ちつたん・アキラ・千鶴・ゆうな・茶々丸
ですね。

1 - A組名簿 現在状況（前書き）

紫稀の介入によって変動した出席番号を整理して1番から載せていきます。

1 - A組名簿 現在状況

01番 相坂さよ

・・・幽霊、一般霊？

02番 明石裕奈

・・・魔法生徒、ハーレムメンバー【未契約者】

03番 朝倉和美

・・・一般人、パパラッチ、彼氏持ち？

04番 綾瀬夕映

・・・一般人、哲学者見習い？、ネギへの生贄、バカ四天王、
夢想する少女

05番 和泉亜子

・・・一般人、保健委員

06番 大河内アキラ

・・・一般人、ハーレムメンバー【未契約者】

07番 柿崎美砂

・・・一般人、チア部、彼氏持ち？

08番 春日美空

・・・魔法生徒、シスター見習い

09番 神儀明日菜^{アスナ}

・・・黄昏の姫御子、ハーレムメンバー【未契約者】

10番 神儀アリカ
・・・紫稀の2人目の妻、元王女、ハーレムメンバー【本契約者】

11番 エヴァンジェリン・A・K・M・神儀
ハイテライト・ウォーカー・エヴァンジェル
・・・真祖の吸血鬼、闇の福音、紫稀の1人目の妻、ハーレムメンバー【本契約者】

12番 神儀紫稀
・・・エヴァ・アリカ・忍の夫、マナの師匠、このせつの幼馴染、大戦の英雄、生ける伝説、神鳴流史上最強の剣士

13番 神儀茶々丸
・・・ガイノイド、エヴァの2代目従者、ハーレムメンバー
【未契約者】

14番 神儀真名
・・・紫稀の弟子、半魔族、ハーレムメンバー【未契約者】

15番 釘宮円
・・・一般人、チア部

16番 古菲
・・・一般人、バカ四天王

17番 近衛木乃香
・・・未だ一般人、膨大な潜在魔力の持ち主、ハーレムメンバー【未契約者】

18番 早乙女ハルナ

・・・一般人、腐女子

19番 桜咲刹那

・・・烏族とのハーフ、神鳴流剣士、ハーレムメンバー【未契約者】

20番 佐々木まき絵

・・・一般人、バカ四天王

21番 椎名桜子

・・・一般人、ラッキー仮面、チア部

22番 超鈴音

・・・魔法関係者、火星未来人、紫稀を警戒中

23番 長瀬楓

・・・忍者、バカ四天王

24番 那波千鶴

・・・一般人、A組一のゲフンゲフンの持ち主、ハーレムメンバー【未契約者】

25番 鳴滝風香

・・・一般人、中学生？

26番 鳴滝史伽

・・・一般人、中学生？

27番 葉加瀬聡美

・・・魔法関係者、天才科学者、マッドサイエンティスト

28番 長谷川千雨

・・・一般人、認識阻害などに掛かりにくい、ハーレムメン

バー【未契約者】

29番 宮崎のどか

・・・一般人、本屋、男性恐怖症、ネギへの生贄

30番 村上夏美

・・・一般人、普通、演劇部

31番 雪広あやか

・・・シヨタコン、一般人？

32番 四葉五月

・・・一般人？料理人

33番 ザジ・レイニーデイ

・・・魔族、基本無口

おまけ

神儀忍（キスショット・アセロラオリオン・ハートアンダーブレイ
ド）

・・・真祖の吸血鬼、ハイテライト・ウオーカー紫稀の3人目の妻、ハーレムメンバー

【本契約者】

チャチャゼロ

キリンゲドール
．．．殺戮人形、エヴァの初代従者

ガトウ・カグラ・ヴァンデンバーグ

．．．ヘビースモーカー、大戦の英雄、タカミチの師匠

タカミチ・T・高畑

．．．ガトウの弟子、紫稀に少々鍛えられる、師匠さえ違えばもっと強くなってた人、デスメガネ

フィリウス・ゼクト

．．．図書館島地下で隠居中、度々旅行に出る、大戦の英雄

アルビレオ・イマ

．．．変態、図書館島地下で隠居中、大戦の英雄

ジャック・ラカン

．．．魔法世界で隠居中、大戦の英雄

クルト・ゲーデル

．．．元老院議員、神鳴流剣士

近衛詠春

．．．関西呪術協会会長、大戦の英雄、神鳴流剣士

ナギ・スプリングフィールド

．．．大戦の英雄、千の呪文の男（自称）（サウザンドマスター）、アイネの夫、行

方不明

アイネ・スプリングフィールド

．．．元女王、ナギの妻、行方不明

近衛近右衛門

・・・関東魔法協会長、ぬらりひょん（人間）

用語解説

バカ四天王・・・アスナがバカじゃないので。今後、成績に関しては成長させます

ハーレムメンバー・・・紫稀側ハーレムメンバー 【内は契約の種類 本契約者、仮契約者、未契約者の3つ

1 - A組名簿 現在状況（後書き）

紫稀が麻帆良入りした時点での1 - A生徒に関する現状

個人的観測なので、色々と変です。

のどかと夕映のところにある「ネギへの生贄」なんて特に

原作だと夕映は好きなキャラ過去3指に入ってたはずなんだけどな
・・・？

第30話（前書き）

【文字数】 15万 【総PV】 62万 【総ユニーク】 6万突破！！
昨日だけで8万PV！怖いです・・・。

SILVER様、なおぼん様×2、コタロウ様、レイ様
感想ご意見感謝です！

とりあえず正義の魔法使い（笑）は滅べばいいと思う
そんな30話、どうぞ！！

第30話

Side・紫稀

とりあえず自己紹介の後のガトウの授業は無視してキティと話していた。授業が終わってからからの休み時間ごとに、私たちの席にやってきて質問をしてきたが、あえて答えははぐらかしておいた。それにしてもガトウが数学教えてるだなんて……。てつきり英語かと思っただがな？

そして全ての授業を終えて、私とキティとアリカの三人は学園長室に来ていた。

「ぬらりひょん、私たちは別に寮じゃなくてもいいよな？アスナたちは寮に住まわせるけど」

「構わんよ。それと今夜23時に顔合わせをしたいから広場に来てほしいんじゃが」

「分かってるさ。アリカも連れて行くべきか？」

「アリカ殿のほうは自由にしてくれて構わんぞ」

「だそうだ。アリカどうする？」

「私は行っても構わんが？無用な混乱を避けるなら行かない方がよいじゃろつが」

「別に顔合わせ程度だ、行くつじゃないか。くくくつ、ここの魔法

先生・生徒たちがどんな反応するか楽しみだな」

確かにどういう反応するかは楽しみだな。特に正義の魔法使い（笑）を指摘してる連中のは。

「あんまりからかったりしてもらいたくないんじゃないか。そうそう、タカミチ君が先ほど出張から帰ってきたんじゃないが、今のうちに会うかどう？」

「別に今じゃなくてもいいだろう、夜に会っただし。まあーそろそろ屋敷の調子とかを確かめたいから失礼するぞ」

「了解じゃ。あつ、それと特別広域指導員としての腕章出来たから持っていっとくれ」

「はいはいっと。じゃあな」

「失礼する」

「また後でな」

そう言って私たちは本日2度目の学園長室を後にした。

学園長室から出たら茶々丸が待機していた。どうしたんだ？

「シキ様、アリカ様。クラスのみなさんが教室で待っているの来ていただけますか？」

「別にいいが？」

「何があるのじゃ？」

「おいつ、茶々丸！なぜ私には聞かん！？」

「お二人の歓迎会です。マスターに聞かなかつたのはシキ様が行くならついていくだろうと思いましたが」

「むっ……」

茶々丸に凶星指されて若干拗ねてるような感じだな。可愛いから撫でるけど。

「シキ、何故撫でる？」

「えっ、さっきの表情が可愛かったからだけど？」

「なっ！？ぶしゅー……」

あっ、ショートした。んーどうするか。

「みんなが待つてるなら早く行くべきだな。キティ、ちょっとじつとしてるよ」

「ん？えっ、ちょー！」

何をしたのかだって？お姫様だっこしただけだ。キティは真っ赤になって動かなくなったけど。

「じゃ行くっか」

「シキ、機会があれば私にもしてくれんか・・・？」

アリカがお願いだと・・・？なんだ、この可愛い生き物は！

「アリカ、今のお前可愛すぎだろ。今度してやるよ」

「か、可愛いなどと。こんなところで言うてないわ！は、恥ずかしいではないか・・・」

「恥ずかしがるのはいいが、さっさと行くぞ」

「あっ、待つのじゃ」

「（録画中、録画中）」

茶々丸がさつきから喋ってなくて、キティばかりを見てて若干怖いんだが・・・。それに気のせいかな録画中って聞こえた気が・・・？ま、まあいいか。

とりあえず、教室に急ぐ。

そんな感じで再び1-Aの教室前到着なり。

未だにキティが真っ赤になって動かないんだけど、どうするか？
いや、あえてこのまま行くか。

「茶々丸、扉開けてくれるか？」

「はい、今開けます」

そう言って茶々丸が扉を開けると同時に

『『『^{神儀} ^{さん} ^{神儀}シキ君！アリカさん！1-Aによっこそー！！』』』

大量のクラッカーが鳴った。

うおっ、耳がいてえー。

「ささ、主役の二人は真ん中、真ん中！」

「あ、あぁー」

「う、うむ」

流石のアリカも動揺？困惑？そんな表情が出ているな。

「ところで、神儀君。腕の中のエヴァちゃんは一体どうしたの？」

あぁー大量のクラッカーのせいで忘れてた。

「学園長との用事が終わって帰ろうとしたときに茶々丸に歓迎会のことを聞いたときに、茶々丸に凶星を突かれてフラフラ状態だから、ここまでお姫様抱っこしてきただけだ」

『『『『おおー！お姫様抱っこなんて生で見れるとは思わなかったー！！』』』』

いちいち騒がしいな……。さて、この状態のキティは危なっかしいから私の膝の上にも座らせておくか。

因みに私の右側にアリカ、左側にアスナ、その隣に茶々丸、対面の右からマナ、木乃香、刹那、ゆーなという席順だ。見事に関係者が固まったわけだな。んー、ここじゃ酒が飲めないな。

ところで、このクラスの担任と副担任であるガトウとタカミチは何処かと言つと、私の背後にある机の方に座っている。座るときに確認したから間違いはない。

「ささ、お二人さん。ジュースだけど飲もう飲もう！」

「食べ物も超包子提供で沢山あるからどんどん食べて食べて！」

「ほおー美味しそうだな。提供つてことはこのクラスに関係者がいるつてことだな？超包子つて言うなら超が関係者なのは間違いないだろ？」

「おおー、的確な情報分析だね。その通り！超が超包子のオーナーで、四葉が超包子お抱えの料理長だよ！よかつたら報道部に入らない？」

「なるほどね。それなら朝の質問も納得が行くかな。それにこの腕前はそこらの料理屋の料理人なんか足元にも及ばないだろうな。誘

いは嬉しいが、放課後は広域指導員の仕事があるから無理だな」

まあー元々部活をする気はないんだけどな！その為に指導員の仕事をもらったわけだし。

「それは残念。それで今朝出来なかった質問してもいい？」

「プライバシーの侵害にならない程度の質問なら構わんぞ」

「本当？それじゃ、まずは名前、年齢、身長、体重、血液型、特技、趣味は？」

「神儀紫稀。13歳、170センチ前後、65kg前後、血液型は忘れた、特技と言えるほどのものはないかな？趣味は読書、鍛錬、料理だな」

「血液型を忘れるって一体・・・？気を取り直して、次は好きなものや嫌いなものは？」

「好きなものは『家族』、嫌いなものは自分だけの信念を持つてない人、正義を自称する奴ら」

「なかなか難しい回答だね。それじゃ女性経験は？」

「黙秘権を行使します」

「ちえー、残念。次は」

こんな感じに朝倉の質問を時には答え、時には黙秘してやり過した。アリカも似たような感じだったかな。

「ガトウには一応今朝挨拶したけど、タカミチ久しぶりだな。最近どうだ？」

「はははっ。出張ばかりですね。師匠が担任なので、副担任の僕は教師の仕事が少ないですね。シキさんこそどうだったんですか？」

「私のほうは変わらんよ。自由に行動してただけだな。それと聞いたぞ。お前へビースモーカーになっちまったんだってな・・・肺がんなっても知らんからな・・・」

「ちょ、リアルに怖いこと言わないでくださいよ！師匠よりはマシンだと思えますよ！」

「タカミチ・・・。お主、最初からシキに弟子入りしておれば健康体でもっと強くなれておったのう・・・。可哀想に」

「アリカ様までっ！？と言つか遠回しに師匠のこと貶してませんか？」

「ばれたか。ガトウの落ち込みようが中々楽しくていじり甲斐があるんだよな。」

「アツハツハ、何を言っているのか分からないな」

「どつ見ても自覚してますよね！それでも師匠、打たれ弱いんですからやめてくださいよ！」

何を言っているのやら。打たれ弱いからこそいじるんじゃないか！

「さて、ガトウをいじるのはやめて、今夜（魔法使いとしての）集会有るのは聞いてるな？」

「あつ、はい、勿論です。と言うかやつぱり自覚してたんじゃないですか」

「多分、私の実力を生で見せるために模擬戦やると思うんだけど、相手誰かわかるか？」

「恐らくですが、師匠か僕だと思いますね。学園長は学園最強ですが、流石に年齢的に厳しいでしょうし」

「だよな。タカミチが相手なら今までの修行の成果みてやるよ」

「その時はお願いしますね」

「あとアリカも集会に参加するから。もしかしたらそつちも模擬戦やるかもな」

「本当ですか？と言うかアリカ様は戦えるんですか？」

「戦えるに決まっているだろう。私とエヴァでかなり鍛えたんだからな。準最強位より下の実力者では90%勝てないくらいにはな」

「そこまですか！？強くなりすぎじゃないですかね・・・？」

「それでもないだろ？世界最強の私とエヴァが鍛えたんだから当然の結果だと思うんだがな」

「確かにそれもそうですね」

だって、私とキティで鍛えたのに高位魔法使い程度に負けたらダメだと思っただよな、うん。

「シキー！ちよつと来てー！」

「お呼びのようだ。じゃあ夜にな」

「はい、楽しみにしてますね」

アリカは途中で元の席に戻ってたよ？ガトウは最初から最後まで空気だったけど。

食って飲んで喋つての歓迎会は2時間程度で終え、後片付けも終わらせて帰宅。私とキティ、アリカ、アスナ、忍、マナ、茶々丸は屋敷でのんびりしている。寮生のアスナとマナが何故いるのかと云うと、顔合わせに参加するようで、今夜は屋敷の方で寝るらしい。寮の管理人さんに許可はもらっているそうだ。忍は普通に昼間は散歩をしたりして留守番していたらしい。

顔合わせまでの時間があつたので、手分けして普段はしないところを掃除したり、地下室に持ち歩いていた魔法球を設置したりしていた。

「さて、そろそろ23時になる。行こうか」

時刻は22:45。歩いていても余裕で間に合うな。

「そうだな。行くとするか。待たせると何を言われるか分からんからな」

「早く行って困ることもないじゃろうしな」

「そうね」

「多分、刹那も行っていると思うよ」

「場所は分かっておるのか？」

「分からなければ私が案内しますが」

「大丈夫だ。仮にも23年前にも来たことあるんだから」

上からキティ、アリカ、アスナ、マナ、忍、茶々丸、私だ。道が分からなければ適当にガトウたちの気配を察知すればいいだけだしな。最終手段として空を飛んでいくってのもあるし。

「さて、今夜の顔合わせはどうなることやら」

そう呟いて私たちは集合場所に向かう。

S i d e ・ e n d

S i d e ・ 刹那

私は魔法関係者の会合に出ている。いつもは一緒に来ているアスナとマナは未だ来ていない。

「学園長、新しく来た警備の人間は信用できるのですか？」

「彼以上に信用できるものは中々おらんと思うがのう」

「ですから、誰が来たのか知らなければ信用も何もありませんか！」

学園長は未だに魔法先生や生徒たちに誰が来るのかを説明していない。1-Aの私と明石さん、明石さんのご両親、ヴァンデンバーグ先生、高畑先生はシキ君だと知っているから、それぞれの顔に苦笑を浮かべている。

どういふつもりで他の関係者の人たちに教えていないんだろう？謎だ。あの頭の形と同じくらいに。

それにしても、シキ君の実力の一端を知ることが出来ると思って、今は式紙にこのちゃんの護衛を任せているが、あまり長居はしたくない。

そう考えているときだった。

「学園長、本当に誰なのか」

「私だよ」

シキ君がやってきたのは。

Side・end

Side・紫稀

私たちは既に広場の近くまで来ている。近づくにつれて騒がしいな……。

「学園長、新しく来た警備の人間は信用できるのですか？」

「彼以上に信用できるものは中々おらんと思うがのう」

「ですから、誰が来たのか知らなければ信用も何もありませんか！」

ぬらりひよんのやつ私^{つひ}が来たとは説明してないのか。私だって知っているガトウやタカミチ、刹那、明石親子は苦笑しているようだな。

誰か知らんが、あの威勢の良さを見ると忍野風に声を掛けたくなくなるのは何故だろ？

「学園長、本当に誰なのか「私だよ」教え……え？」

「聞こえなかったのか？だから新しく来た警備員ってのは私だって言っているんだ」

「あ、あなたは！まさか！？」

ああーまたこの視線か……。うざいな本当。

「零崎蒼識だ。普段は生徒として本名の神儀紫稀で学園に通うことになった。別によろしくしなくても構わん」

ああー名乗ったらまた視線が増えたよ……。これだから正義の魔法使い（笑）は……。

因みに服装は大戦時と同じ狐の仮面をつけて着流しだ。

「彼の自己紹介のとおり、【全てを統べる者】の零崎蒼識殿、本人じゃ。信じきれない者があるようじゃから模擬戦をしてもらおうと思うが、いいかのう？」

「私は別に構わんが、先にいいか？」

「なんじゃね？」

「音織。いや、エヴァに掛けられている呪いを解いてもいいな？」

「ふむ、構わん」あなたは、一体何を言っているのか分かっているのですか！？」「……」

おいおい、最後まで言わせてやれよ、ガングロエ……。じじいが頂垂れてるじゃねーか。

「何を言っているか？そんなもの分かっているに決まっているだろ。ナギは最低でも3年以上経った時に自分か私が麻帆良に来たら解呪すると約束したらしいじゃないか。そうだな、じじい？」

「その通りじゃ。ワシも3年経った時にナギが来なかったから解呪しようと思っておったのじゃが、ナギのやつが適当に掛けたようで、ワシですら解呪出来ないほど変質しておったから諦めていたのじゃ」

「なら、何も問題はないな。早速「その約束が真実だとしても認められません！」・・・おいおい、人が喋ってるんだ、最後まで言わせる。それともなにか？お前は親に「人の話は最後まで聞かずに途中で遮れ」とでも教育されたのか？」

「そうではありません。確かに【闇の福音】ダーク・エヴァンジェル、彼女は大戦の英雄アラルプラ【紅き翼】の1人。ですが、同時に吸血鬼の真祖です。そのような者をこの地の外に出すなんて我々正義の魔法使いのすることではありません！」

「そうですね！この地に封印されてから彼女が人を襲ってないといえ、力が戻っても襲わないと言うことにはなりませんわ！」

ガングロと女子生徒（ああーあれがウルスラの脱げ女になるのか）の言葉に触発されたのか他の奴からも似たような言葉が出てくる。いい加減うるさくなってきたな。

「あなただつて正義の魔法使「黙れ」い・・・一体何を「聞こえなかったか？黙れと言っただ」うっ・・・」

ほんの少し殺気向けただけで情けないな。この程度で粹がるのか。

「人が大人しく話を聞いていれば好き勝手言いやがって。いい加減にしるよ、てめーら！私をお前らのような正義の魔法使いと一緒にするな！正義正義うるさいんだよ、本質を理解してないくせに」

「なっ！？」

「お前達は何にも分かっていないようだな。大戦の英雄が正義なわけないだろう。大戦の英雄はただの大量殺戮者だ。英雄の手は血に染まってるんだよ」

「シキ、落ち着け」

「そうじゃ、落ち着くのじゃ」

ああーかなり頭にきてたようだな。反省反省つと。

「お前らは吸血鬼だから悪と決め付けているようだ「悪でなくてなんだと言っただい！」が……。さっきも言ったよな？人の話は最後まで聞けと？まあいい、続けるぞ。お前らの言う理論を応用すれば吸血鬼からしたら人間が悪だ「そんなわけがあるか！」・・・もついい、突っ込まん。正義の反対は悪だと勘違いしているようだが、正義の反対は別の正義なんだよ。そして悪の反対は善だ。そして、正義とは信念を貫いた先にあるものだ。この意味が理解できたか？いや出来てないだろうな。借り物の正義を掲げているお前らのような奴らじゃ、一生理解出来ないだろうさ」

「正義の反対が別の正義だと？そんなはずがない！正義はどれも同じはずだー！」

「そこから間違っている。同じ正義など存在しない。そんなものは

ただの張りぼてだ。お前らの正義は悪を滅ぼすものらしいが、戦争で親を失った子供が生きるために店から食べ物盗んだらお前らはその子供を殺すんだな？」

「ぐっ……」

「立派だねー。いやー立派立派。流石、正義の魔法使い（笑）様だ。反吐が出るな。お前達の正義がそれなら、私の正義は私の『家族』や大切な者を護り抜く事だ。その為なら人だろうと何だろうと殺すさ。他人に後ろ指を指されることになるうともな。それが私の正義！それが私の信念だ！」

『……』

おやおや、これだけで黙っちゃうなんて。流石、正義の魔法使い（笑）様だな。さてと飽きた。ガトウたちと手合わせするのを楽しみにしてたが、ガングロたちのせいで萎えたわ。

「という事でエヴァの呪いは解呪させてもらう。いいなじじい？」

「どういうことかわからんが、ワシは最初から構わないと言っておったのじゃがな」

それくらい分かってるさ。お前を信頼はしてないが、多少は信用している。

「本来ならここで私の实力を見せるためにガトウかタカミチと模擬戦させるつもりだったんだらうが、さっきので萎えた。だから私たちは帰るぞ？」

「うむ。流石に今日はもう無理じゃろうから、よいぞ」

「ああーそれともう一つ。お前ら麻帆良の魔法使いはこの土地を自分達の物のように言っているが、正確には違うぞ。メガロメセンブリアはある人物からこの土地を借りているだけだ、本来の3分の2の面積をな。そしてその土地の所有者だが、それは私だ」

「なっ！？そんな馬鹿な！！」

「つまり私の言葉一つでお前達魔法使いは一部を除いて、ここから立ち退かなければならないというわけだ。せいぜい私を怒らせるなよ？じゃあな」

このあと魔法先生・生徒たちがどうなるかと知ったことじゃないな。

ああー最悪な気分だ。今夜はみんなと一緒に『寝室』で寝ることにしよう。

Side・end

第30話（後書き）

勢いで書いたので支離滅裂！

正直、正義の魔法使い（笑）をアンチしたかったのでやった。模擬戦を描写出来なかった。

反省はしている。だが、後悔はしていない！！

紫稀のキャラがかなり崩壊している。

気にしたら負けかな？と思いつつも気にしてしまう。

次回以降からは一般人3人のフラグ立てと

茶々丸改造、超との取引と言うか会話？

そんな感じ？

紫稀側ハーレムに昇格した面々とパーティーのアーティファクト案
まだまだ募集中なり。

特に忍に関しては可及的速やかに頼みます。

エヴァ・アスナ・忍・マナを除くハーレムパーティーの二つ名も同時
に募集です。

アリカ・木乃香・刹那・ちうたん・アキラ・千鶴・ゆーな・茶々丸
です。

第31話（前書き）

【総PV】67万【総ユニーク】6万6千突破！！
駄文なのにここまでとは・・・。

神夜晶様、パンチ様、なおぼん様、真実の奴隷様、
ultride
r様

感想ご意見感謝です！

とりあえず復活させよう！
そんな31話、どうぞ！！

第31話

Side・紫稀

私とアリカの初登校の翌日、つまり昨夜の麻帆良の魔法関係者とのいざこざから一晩。

その後、屋敷に戻ってキティに掛かっている『インフェルナス・スコラスティクス登校地獄』は、【直死の魔眼】で呪いを視ることで殺した。呪いが解けた時のキティのはしゃぎっぷりは凄かったな。正直あそこまで喜んだのいつ以来なんだろう？

「フハハハハ。これで修学旅行にいけるぞー！！」

なんて言ってたくらいだもんな。その際も茶々丸が「（録画中、録画中）」なんていいながらキティを撮ってたくらいだもんな・・・。

518

呪いを解呪した後は、魔法関係者との顔合わせの一件で最悪な気分だったから、『寢室』のベッドでみんな一緒に寝たんだよな。それぞれの場所は、私に乗るようにキティ、右側にアリカとアスナ、左側に忍とマナといった感じで。

「ふわぁ〜、眠い・・・」

幸いなことに今日は休日。一日中惰眠を貪っても誰に怒られることはない！てことでおやすみー。

なんてことにはなりませんでした。

9時ごろに木乃香と刹那が訪ねてきた。刹那の用件は手合わせだろうけど、木乃香の用件は一体？あつ、そういえばさつきぬらりひよんに呼ばれたんだつた……。面倒だ。

手合わせはいくら結界を張ったとしてもあまり大技使えないからな。もう木乃香に魔法バラして『別荘』内でやるか？でも、そうすると詠春がうるさいんだよな……。無理やり押し切るか。

「シキ〜？お〜い？」

「シキ君？返事してくださいーい」

ああーそういえばキティの肉体も成長させないといけないんだつた。アスナ以外には肉体操作可能なんだよなー。害のある力ではないと思うんだけど『魔法無効化能力』で無効化されるんだよな。魔法薬ならアスナにも効くのかな？効くなら仮契約して戦力アップさせるんだがな……。

「せつちゃん、どないする？」

「しょうがありません。このちゃん」

「そやね〜。返事しないシキが悪いわけやし」

「それじゃ」

でも、魔法薬はあまり使いたくないんだよな。うーんどうするか
な。。。。

「「えいつ!」」

「いてっ!!いきなり何をするかー!?!」

「何って、呼んでもシキが返事せえへんからやる?」

「そうですよ、シキ君。何回呼んだと思ってるんですか?」

木乃香の右手にあるトンカチが怖いです。刹那の左手にある鞘に入
ったままの夕凧も怖いです。人の眠りを妨げたくせになにを
。

「シキ、何か変なこと考えとらん?」

「いえいえ、キノセイデスヨ。木乃香さん」

何故ばれた?はっ!まさか木乃香は読心術が使えるのか?

「そんなわけあらへんやろ?」

「いやいや、使えてるじゃないか!」

「シキの顔に書いてあっただけや」

えっ、私ってそんなに顔に出やすいっけ？そんなはずは……。
いや、考えるのやめよう。

「ちょい、刹那。いい加減黙ってるの面倒だから木乃香にばらさない？」

「いやいや、いきなり何を言ってるんや、シキ君！長に怒られてまうー！ー！」

「それこそ無問題だ。モーマンタイ私が黙らせる。主に力技でという事で携帯携帯」と

えーと、どこに置いたっけかな。んーどこだー？

「シキ様。どうぞ」

「おっ、茶々丸ありがと。えーと詠春は……。あつたあつた。ポチっと」

早く出ないかな。待つのも面倒なんだけど。

『はい、もしもし』

「あつ、詠春？木乃香にバラすけどいいよな？答えは聞いてない」

『ちょっ、紫稀殿。何をいきなり！？』

「だって、黙ってるの面倒になったから。それにそろそろ選択させる時期だろ」

『それはそうかもしれませんが・・・しかし!？』

「じゃ、もう切るな。またなー」

『えっ、ちよっ、未だ話は・・・』

やっぱりうるさかったな。まあー私の役職的に詠春を黙らせるのは簡単なんだけどさ。

「てことで、木乃香。今までお前に秘密にしてきたが、私や詠春、じじいは魔法使いだ」

「シキ君、ちよっとー！ー！ー！」

「まほーつかい？」

「そぞ。詠春の場合はちよっと違うが、魔法使いだ」

「そんで、なんで今話したん？」

「いや、黙ってるのが面倒になったからだけど」

「シキ君、そんな理由で・・・」

「別にいいじゃないか刹那。遅かれ早かれ2年後には知ることになるし」

「は？一体何故2年後？」

「刹那は未だ知らなくてもおかしくないか。多分だけど私たちが2

年の3学期に私たちの担任として【千の呪文の男】の息子が教師としてやってくる」

「そんな情報どこから・・・」

「その辺は気にしてはいけない。ついでにいうと、その息子は私とアリカの甥に当たる。母親がアリカの双子の姉だからな」

薬味が甥とかマジ勘弁！あんな秘匿の文字を知らないのが親戚なんて・・・。

「さらっと重大なことを話さないでくださいよー!!」

「それでもないぞ？私は薬味のことなんてどうでもいいし。」

「アーちゃんの双子のお姉さんならその人もまだ13歳じゃないん？」

「そういえば教えてなかったな。私とエヴァ、アリカ、アスナ、忍の実年齢は最低でも20は鯖読んでる」

「ほえ〜。その辺の謎も魔法ってやつなん？」

「そんなところだ。まあーエヴァに関してはしたくしてしてるわけじゃないがな」

「そういえばシキ君、あなたは一体何歳なんですか？」

「ウチも知りたいわ〜」

「私？私はざっと3000歳くらいだけど？」

「3、3000・・・」

「因みにエヴァと忍は600歳、アスナは120歳、アリカは35くらいかな？」

「神儀家はどんだけ年齢詐称してるんですかー！！」

別に不思議ではないだろう？私は神と同様な存在だし、エヴァと忍は吸血鬼、そんな私と本契約バクテイオーしたアリカも不老者、アスナは諸事情で成長できなかったただけだしな。

それにしてもいい加減携帯がうるさいな。どうせ詠春だろうし、着信拒否してやろうかな。

「それで木乃香。魔法を習うか？お前の場合は陰陽術関連は必ず習わないといけないんだよな、家柄的に」

「魔法と陰陽術って違うん？それと家柄的につてなんや？」

「細かいことは面倒だから後で教えるとして、簡単に言えば魔法ってのは私やキティたちが使う奴だな。陰陽術は昔から日本で伝わっているものだ。それと家柄ってのは木乃香の実家は関西呪術協会と言って陰陽師が在籍する組織で、私たちのような西洋魔法使いを嫌ってるんだよな。私たち神儀家は例外だけど」

「なんでシキたちは例外なん？」

「詠春の友人つてのもあるけど、300年位前から詠春の実家の青山家と懇意にしていたからだけ。刹那、青山素香は知っているな

「？」

「あっ、はい。確か神鳴流歴代4位か5位ですよね」

「そうそう。あいつを鍛えたの私なんだよね」

「は？なんで何度もそんな重大な話をさらっと言っんですかー！！」

そんなに重大でもないと思うんだけど？

「刹那は置いといて「放置しないでくださいー！」「うるさいぞ、刹那。静かにしないと一生無視し続けるぞ」「うっ……」「それで木乃香。どうする？」

「将来的に知ることになるなら今のうちに知っておきたい」

「それじゃようこそ、危険魔法のある世界へ」

「何か字が違う気もするんやけど？」

「気のせいだ。ついて来い。ほら刹那も行くぞ」

「は、はい……」

うーむ。流石に苛めすぎたか。後で何かしてやるか。

木乃香に魔法に関する知識を詰め込むために、キティを連れてレイベンスシユルト城の魔法球に入り、刹那と割と本気に手合わせをした後、木乃香たちの相手をキティに任せて私は学園長室にいる。因みに手合わせの結果、刹那はボロボロだったな。実力もまだまだ中位の中つてところかな？

学園長室Now。

「紫稀殿、流石に昨夜は言いすぎではないかのう？」

「そうでもないだろ？事実を言ったただけだ。それと木乃香に魔法のこと話したから」

「ふお！？婿殿にはなんて？」

「無理やり黙らせた。と言つかバラすって言って一方的に電話切ったんだけどな」

「まあーワシは木乃香はいつか魔法の存在を知っておったから構わないのじゃがな。後が大変じゃな・・・」

「どうせ2年後にはバラす気だったんだろ？教育実習生として英雄の息子をここに来させるつもりだったんだから」

「紫稀殿、それを一体どこで？」

「元老院にはクルトがいるんだぞ？情報なんて筒抜けだ。まあーメ

ガ口首都に行かせないだけマシだろ。あそこに行かせたら恐らく体のいい操り人形になっていただろうしな」

「じゃよな……。だからこっちで修行のことを引き受けたんじゃし」

「後、相坂復活させていいか？」

「ふお！？紫稀殿、何回驚かせるつもりなんじゃ……。と言っか出来るのかのう？」

「まあー成長する肉体さえ作って、魂をその肉体に憑依させるだけだろ。復活させたあとの戸籍とかはお前が準備してくれるんだろ？」

「勿論じゃ」

「そんじゃ、行って来るわ」

「頼んだぞい」

お前に頼まれなくなっちゃってやるさ。それじゃ1-Aの教室教室つと。

「相坂いるかー？」

『ほえ？神儀さん、私が見えるんですか！？見えるんですね！？』

テンションが凄まじくハイだな。

「見えるし、聞こえるけど？それと、神儀だと混線するからシキでいい。」

『相坂さよです。私もさよでいいです。今までどんなお払い師や霊能者にも見えなかったのに』

おいおい、そこらへんに転がっているような連中と一緒にしてもらっては困る。と言うかそっちが一緒にされても困るのか。私、バグを超えたバグだし。でも、キティも見えてるはずだよな？

「それで何年幽霊やっているんだ？」

『大体60年くらいです・・・』

「は？まさか名簿にあった1940つてのもマジなのか」

てか、幽霊が60年もそのままでいられるとかあり得ないだろ。それとも世界樹の力で綺麗なままなのか？あり得そうで否定できないな。

『やっぱり私ってダメ幽霊なんでしょうか・・・』

「幽霊にダメも何もないと思うんだが・・・。と言うか60年間も悪霊にならずにいれることのほうが凄いとしかいえないんだが・・・」

「

夜に一人で教室にいるのは怖いからって近くのコンビニで過ごしていたらしい。てかさよは自縛霊じゃないのか？自縛霊なら教室から出られないと思うんだが……。謎だ。浮遊霊に昇格させてみようかな？

それとどうやら魔法のことも知っているらしい。それなら話が早い。

「さよ、もう一度学校に通いたくないか？」

『通えるなら通いたいですけど……。無理ですよね』

「いや、出来るけど？」

『そうですよね、出来ませんよね。って、出来るんですか！？』

ノリツツコミか？あまり上手くないけど。

「だから、出来ると言っている。私に不可能と言つ文字は限りがない。とりあえず連れて行くからこの人形に憑依しろ」

そう言つて私はそこらへんで売っているであろうデフォルメされた人形をだす。

『これにですか？やってみます』

人形に憑依しようと言つて奮闘するさよ。何回目かで出来たようだな。

「それじゃ行くぞ」

『はい！』

さーて、家に連れて行きますか。

我が家Now。あまりの大きさにさよはビックリしているようだ。どうでもいいけどな！

「レーベンスシュルトの魔法球でいいな。エヴァたちもいるはずだし」

『一体何のことですか？』

「些細なことだ。実際に体験すれば分かる」

そう言ってキティたちが入っている『別荘』に入る。

『・・・シキさん。これも魔法なんですか？』

おおーう。さっきの木乃香や刹那と同じ反応だな。まあーいいけど。

「ダイオラマ魔法球という異界を作る魔法の一種だな。さーて部屋にでもいるかな？」

城内に向かって歩く。さよは興味津々にあたりをキョロキョロしてるけど。

「エヴァー、ただいまー！」

『おかえり（・）（じゃ）（なさい）』

「ん？おや、全員お揃いではないか。てっきり他は寝てるかと思っただが」

「シキ、何故相坂がいるんだ？」

やっぱりキティは見えてるんですね。

「ん、あー。肉体を与えてやろうかと思って」

「シキ、エヴァ。おぬし達は何の話をしておるのじゃ？」

やっぱりアリカたちには見えませんよねー。

「そつえばば私とシキ以外は見えないのか。いや、マナなら魔眼使えば見えるか。マナ、魔眼でシキの持つてる人形を視てみる」

「あれをかい？まあーやってみるけど。何か憑いてるようだね。輪郭がはっきりしないけど、何となく視えるよ」

「まあー紹介しておくか。今この人形には幽霊が憑依してる。名前は相坂さよ、1-Aの出席番号1番の生徒だ」

『は？』

綺麗にはもったね。私とキティ以外だけど。

「それじゃ、肉体創ってくるから、後でな」

材料は手持ちにあるので充分だから後は創るだけなり。

Side・end

Side・さよ

幽霊になって60年。生前の未練なんかも忘れてしまっほごに長いとき。

その間、誰にも私の姿は見えぬ、声も聞こえない。

寂しかった。

私の60年はその一言に尽きた。

だけれど今日、私の状況は一変した。

昨日、諸事情で初登校が遅れたという神儀紫稀さんという男の子。

彼には私の姿も見えず、声も聞こえた。

そして私にとってこれ以上ないくらいに嬉しい提案をしてくれた。

さよ、もう一度学校に通いたくないか？

再び学校に通える。60年間の寂しさからこれで解放される。

「てことでさよ。この肉体に憑依してくれ」

友達いっぱい作れるように頑張るぞー！

Side・end

Side・紫稀

レーベンスシュルト城、研究室Now。

「出来た。なんかあっさり成功してしまったんだが・・・」

ハガレンの人体練成を参考にやってみたけど、まさかここまであっさりいくとは・・・。

人体練成が禁忌とされているのは魂を創るからであって、肉体を練成することはそこまで難しくないんだよな。真理の扉なんて開きたくないし。開く必要もないしな。

「てことでさよ。この肉体に憑依してくれ」

『あつ、はい』

感慨に耽ってたようだな。んーきちんと意思通りに肉体が動いてくれればいいんだけどな。ゴールデンウィーク明けまでリハビリさ

せるかな。

「そろそろ目を開けるかな？」

「んっ。本当に体がある……」

「さよ、体に不調はあるか？」

「いえ、特に動きづらいつかは 아닙니다。本当にこれで学校に通えるんですよね……？」

目の端に涙が溜まっている。んーここはやはり、スルーしてあげべきだな。

「ああー通えるよ。戸籍とかそういう書類の方は準備するように頼んであるから大丈夫だ」

「し、シキさん。ほ、本当に、あ、ありが、とう、ござい、ます！」

あーあー、大泣きだ。宥めるために胸を貸している。これを他の面子に見られたらどうなることや……ら……。

やっばこついう発言ってフラグなんですね、分かりました。

キティはさよの気持ちを理解しているためか私に対して何も無いようだな。

だが、キティと茶々丸を除いた面々の目から光が……。ああー、私はここで死ぬんですね。いや、死ねないけどさ。

「これ以上周りに女を増やしてどうするのじゃ？」

「主は狙っておるのか狙ってないのかわからんのだ。」

とはアリカと忍の言。

「「そろそろ私の気持ちに気付いてもいいんじゃないかな？」」

とはアスナとマナの言。

「なんでウチらには手え出してくれないんや！」

「そうですよ！私とこのちゃんが何年待ったと思ってるんですか！」

とは木乃香と刹那の言。

「どうやったらこの騒ぎ？を治められるのか知りたいな、猛烈に。」

「あっ、私の体をサンドバックとして差し出せばいいんですね、簡単だ。」

「それが私の胸の中にいたさよをそばから遠ざけたときの最後の思考だった。」

「私が蔑みの目と嫉妬的な暴力によって沈んだ後、さよにも魔法を習わせることになった。さよの住居に関しては屋敷に住まわせるこ

とに。何故か木乃香と刹那にも部屋を与えることになったけど、な
んでさ……。

とりあえず、そんな理不尽を受けたけど、さよに肉体を与えたこ
とだけは間違いではなかったと思った。あそこまで嬉しそうに喜ん
ていたのだから。

S i d e . e n d

第31話（後書き）

描写が面倒だったから省きまくって見ました。特に刹那との手合わせとか。

予定とは崩れて、さよ復活、木乃香に魔法バレ。
修学旅行どうするかな？

程よくキンクリして色々攻略しつつ原作入りしたいと思います。
2週間以内に原作入りしそうですね。

紫稀側ハーレムに昇格した面々とパーティーのアーティファクト案
まだまだ募集中なり。

特に忍に関しては可及的速やかに頼みます。

エヴァ・アスナ・忍・マナを除くハーレムパーティーの二つ名も同
時に募集です。

アリカ・木乃香・刹那・ちうたん・アキラ・千鶴・ゆーな・茶々丸
ですね。

質問などがあればこれまで通り感想ページと新たにここでもお答え
しようと思います。

第32話（前書き）

【総PV】70万突破！！
凄い勢いで増えてます。

グラムサイト2様、杉やん様、
annburera様、なおぼん様
感想ご意見感謝です！

表の仕事はきちんとこなすさ！
そんな32話、どうぞ！！

第32話

Side・紫稀

さよを復活させてから数日、私は特別広域指導員の仕事をするために麻帆良を回っている。

因みにさよはまだ学校には復帰させていない。今は4月の中旬でゴールデンウィーク明けに復帰させる予定だ。

その旨をぬらりひょんにさよを連れて報告に行ったらさよを見た途端泣かれた。気持ち悪かったから殴ったけど、私は悪くないと思う。

戸籍の方とかも無事確認も出来たし、復帰するまでさよには魔法を仕込んでいる。学校に復帰する頃には上位の下くらいまでには行くだろう。

木乃香の方も陰陽術が中々様になってきたと思う。魔法のほうは原作どおり治癒に絶対の適正があったため、治癒に関してなら上位の程度まで育っている。それでも、永久石化なんてのは解呪出来ないがな。総合的には中位の中と言ったところだな。

刹那はアリカやアスナ、マナと実戦形式で手合わせさせている。私はたまに手合わせしてやる程度だが。多分、現状なら本気の月詠ともいい勝負が出来ると思う。上位の下程度まで育ったかな？

私たちが麻帆良に来る前からちよくちよく来ていたらしいゆうなともたまに手合わせや魔法に関して手解きしている。元々素養があったよう、現在は中位の上あたりに位置する。

それと何故か木乃香と刹那、さよと仮契約バクティオーしてしまった。さよとは面倒な手段が多い魔法陣だけの契約、木乃香と刹那とはキスで

の契約だった。そしてそれを聞きつけたのかアスナとマナとも仮契約してしまった。それぞれのアーティファクトは今後機会があれば紹介という事で今は保留だ。契約方法がさよ以外とはキスだったのは、本人達の希望と言う名の脅しだった。今思い出しても体が震えるくらいに怖かった……。

それよりも、問題は仮契約による不老化だよな……。いや、別に私の能力を使えば不老の問題は解決するんだけどさ。例外が存在するわけですよ。そう、アスナだ。未だ不老者にも効く成長薬創ってないのにな……。まあー何とかするか。

成長薬で思い出したが、キティの体も成長させている。一気に成長させると拙いので、中三進級時に160cm程度にしようと思っている。まあーまだ外見はあまり変化したように見えんがな。

まあー何だかんだで思考に埋没していたのだが、指導員の仕事は暇すぎる。未だに指導するような生徒が出てないからなんだがな……。

「や……く……い」

ん？なんだろ。

「い……ね……。俺……。楽し……。よ……」

ナンパか。っとされてるのってうちのクラスじゃないか！しかもあの中の一人はアキラだと！ふふふ、教育的指導の開始かな？

Side・end

S i d e ・ アキラ

私は亜子とまき絵、ゆうなの4人で買い物に出ていた。何軒目かのお店を出て数分歩いていたとき、高校生くらいの男の人数人に声を掛けられた。

最初は普通に話しかけられていたが、誘われるたびに断っていたらどんどんしつこくなっていった。

ゆうなが私たちの前に立って何とかしようとしていたけれど、体格の差であまり変わらなかった。

そして、ゆうなどと亜子の体に男の人たちの手が触れそうになったとき事態は好転した。

「やあーやあー威勢がいいね君たち。何かいいことでもあったのかい?」

そんな事を言いながらこっちに向かってくる彼の行動で。

S i d e ・ e n d

S i d e ・ 紫稀

あぁー面倒だ。だが、クラスメイトを放置するわけにも、仕事を疎かにするのもあれだしね。

「やあーやあー威勢がいいね君たち。何かいいことでもあったのか

準備運動的に居合い拳を使って暴徒を鎮圧してみた。気持ち的には1割が仕事として残り9割はアキラとゆーなを不快にさせたことに関しての八つ当たりな私事しごとなだけどさ！

「それと、そのデスメガネの師匠であるデスモーカーよりも強いんだね、圧倒的に。まっ聞こえてないか」

んー古菲クィフェイあたりに見られてなければ面倒にはならんだろう、きつと。手合わせしてほしいって言われてものらりくらりとぬらりひよんの様にかわすけどね！！

「さて、アキラ、ゆーな、亜子、まき絵。怪我はないか？」

「あつ、うん。ないよ」

「私もないにや〜。それにしても私よりもアキラの名前を先に呼んだのがきになるかにや〜？」

「ウチも平気や」

「私も大丈夫かなー？朝倉かパルが近くにいたらラブ臭がどうとか騒ぎそうだね」

「怪我がないなら重畳。少し落ち着くために喫茶店にでも入るか？金ならあるから奢るけど」

「それじゃーお言葉に甘えますかー」

そこらに転がってる屍の山はそのまま放置するわけにもいかないけど、どうにかなるか。さて、両手に華でお茶を楽しみますかねー。

S i d e ・ e n d

S i d e ・ 千雨

はあー。昔からここは異常だったが、ここ最近はさらに異常度が濃くなっている気がする。

私が所属している1-Aなんて特に異常度が濃い。狙って集められたような感じがするんだよな……。女子中等部唯一の男子生徒なんて存在もいやがるしな……。

いつになったら私は平穏な世界にいけるんだろうか……。

そんなことを考えているときだった。その言葉が聞こえたのは。

「やっば、ここは異常だよな、流石に。」

その声の発信源は件の男子生徒、神儀紫稀くたんだった。

S i d e ・ e n d

S i d e ・ 紫稀

アキラたちのお茶会と言う素敵イベントから数時間。あれから暴徒が出始め、黙々と鎮圧していった。最後あたりは逃げ出す奴らも出たけれど。んー、鎮圧された奴が情報を回してんのかな？

それにしても誰もナンパされてる女子を助けようとしななんだな。不幸少年？青年？なら助けにいくんだらうけど。かくいう私も助けてたけどな。最初のアキラたち以外は完全に仕事としてだったけれど。

「やっぱ、ここは異常だよな、流石に。この土地の所有者が言うことでもないだらうけど」

「おい、アンタ。アンタもここが異常だと・・・思うのか・・・？」

あれ？私の咳きが聞こえた？最後の方は聞こえてなかったみたいだけど。誰だらう？でも、この台詞を言いそうなのに心当たりは一つあるけどさ。

それでは振り返ってみよう。3、2、1、はい！

「ここを異常といわずして世界のどこを異常と言っただい？」

やっぱりちうたんでした！

「アンタから見て、どのへんが異常なんだ？」

「どのへん？そんなの、全てに決まっているじゃないか」

何を当たり前なことを言うんだか。

「そうだよな？ここは異常なんだ。私は間違っていない。そう、間違っていないはずなんだ。それなのに周りみんな私のほうがおかしいと言っただ」

「おい、長谷川千雨。落ち着け、冷静になれ。とりあえず人通りの少ないところに移るぞ」

「あ、ああー。すまん」

そう言っただけ私達は近くの公園のベンチに腰を掛ける。ちうたんも大分落ち着いてきたようだな。

「なあー長谷川。お前は自分と周りの人間の認識の違いについて疑問に思ったことがあるか？」

「そんなの当然だ！クラスメイトに小学生っぽいのもや大学生っぽいのも。ロボっぽいのも。拳銃には男子生徒のアンタだ！それなのに誰もそれに対して疑問すら持たない。それどころかそれが当然と言っている。これで違いについて疑問に持たないほうがおかしいだろ！？」

「その通りだ。長谷川千雨。お前は自分と周りの人間の認識の違い、真実を知りたいか？」

「アンタは何か知っているのか？」

「ああー知ってるよ。私以上にこの土地を知る者はいないほどにな」
「それなら！教え」ストップだ」・・・そこまで言うのになんでとめるんだ」

「そう怖い顔で睨まないでほしいよ。と言っよりちうたんのためなんだぜ？」

「精神が不安定になっているとはいえ、勢いで聞くのは感心しない

な。それにお前のために静止を掛けてやってるんだ。真実を知れば否が応でもお前は巻き込まれるぞ、危険のある世界に。それでも知るか？」

「一体どこの物語だよ。真実を知れば危険って漫画やアニメのような二次元の世界じゃあるまいし」

「残念ならが事実だ。さて、それで聞くか？」

「とりあえず聞くさ。今聞いておかないと後々大変になりそうだし、聞いた後にどうするか決める」

「なら此処でない方がいい。ついてこい」

外で話せるような内容じゃないしな。やっぱり盗聴とかの心配のいらないところでないかね。

そんなわけで我が家Now。ちうたんの表情が硬いです。

「なあーアンタ、こんなところにすんでいるのか？」

「その通りさ。この屋敷は我が家だ。決まり文句だが、いらっしやい。我が家へようこそ。ってな」

そう言って玄関をくぐって靴を脱いで、スリッパを履いてリビング

グに向かう私とそれについてくるちうたん。

「およつ。エヴァとアリカは出てたのか。他のはどうしたよ？」

「大分遅いお帰りだな、シキ」

「忍と茶々丸ときよはまだ入っておる。アスナたちは寮に戻っただけじゃな」

「それで後ろにいる長谷川はどうしたんだ？」
「のじゃ」

何でこういうときは息が合うんだ、こいつら。因みにちうたんはキティたちがいることに質問をしてきたがとりあえずスルーしておく。

「やましいことはない。長谷川に麻帆良の真実を教えてやろうと思っつてな」

「どついう風の吹き回しだ？お前がそんなことするなんてらしくないじゃないか」

「いや、ちょっとした眩きを聞かれたようだな。知りたいって言ったから教えてやることにしたんだ。それに教えるまでならまだ危険度は変わらんからな。それ以降となるとグンと跳ね上がるが」

「おい、いい加減説明してくれよ！麻帆良の真実ってやつとこいつらがここに理由をよ！！」

流石にスルーしすぎたか。若干キレ掛かってるな。

「今説明してやる。まずはエヴァたちがここにいる理由が至極簡単だ。『家族』だから一緒に住んでいる。な？簡単だろ」

「そうか。それじゃ麻帆良の真実つてのを教えてくれ」

「それも比較的簡単だな。この世界には魔法というのが存在している。その一言で説明が出来る」

「は？魔法つてどこのファンタジー小説だよ。ありえねー」

「あり得ないことはあり得ない。誰の言葉だったかな。まあーその辺はどうでもいいさ。魔法は実在する。それが真実だ」

「それで魔法が実在するとして」してるんだよ」・・・するとしてだ、何で麻帆良の真実と繋がるんだ？」

「何でつて、麻帆良が魔法使いの街だからに決まってるじゃないか」

「は？」

あつ、やっぱりそこまでは考えが到ってなかったのか。

「だから麻帆良は魔法使いのために作られた街なんだよ。因みに学園長も魔法使い。他の教師や生徒たちの中にも魔法使いや魔法関係者は紛れている。そしてこの土地の所有権を持っているのは私だったりする」

「おいおい、待ってくれよ。麻帆良が魔法使いの街だつてのはしたくはないが、理解したよ。それじゃ何で私みたいな一般人と一緒に住んでるんだ？」

「さあー？その辺は知らんよ。土地の所有権は確かに私が持っているが、ある組織に土地のいくらかを貸し出してるだけだから真意は知らんね。それでさ、ここで言うのもなんだけど。魔法の存在を一般人が知ってしまったら2つの対処法がある」

「2つ？なんだそりゃ」

「まず1つ目。魔法のことを公にさせないように約束させる。次に2つ目。知った人間の記憶を消すだ」

「き、記憶を消すだと？」

「そう、記憶を消すだ。まあーそこらへんの魔法使いと私たちは別なんだがね。そこで私から長谷川に3つの選択肢を与えよう」

「3？さっきより1つ増えたな」

「まあー実質2つなんだけど。それじゃ1つ目。魔法の存在を知る前まで記憶を消す。その際はアフターケアは万全にしてやる。次に2つ目。魔法の存在を認めて今までどおりに過ごす。これの利点は自分の精神を護ることが出来ることか。そして3つ目。私たちに魔法を習うか。その3つだ」

「最初の2つは何となく理解できたんだが、3つ目の習うって一体どういう意味だ？」

「そういえば危険性について説明してなかったっけか。」

「そのままだ。こっちの世界は常に危険が付き纏う。戦場で余所見

をしたから敵に撃たれて死んだ。みたいなもんだな。それを防ぐために自身の身を護れる程度には鍛えるってところだ」

「そんなに危険なのか？」

「危険だね、マジ危険。魔法世界の戦争の渦中にいた私やエヴァ、アリカはそれを骨の髄まで知っている」

「そうなのか……。そうだったとしても選択肢としては2か3だな。アフターケアが万全であろうと1だけは論外だ。記憶つてのは自己の人格を形成するもので、記憶がなくなるってことは死んだことと同義だと聞いたことがある」

「言ったとおり実質2つになったな。それで、お前はどちらを選ぶ？長谷川千雨」

「私は……。3を選ぶ。知ること危険が付き纏うならどうにか出来る力が必要だ」

「そうか、そうか。自ら渦中に飛び込むではなく巻き込まれたときのための力か。その考えはいいな。気に入ったよ。ようこそ、長谷川千雨。魔法と危険が溢れる世界へ」

「お手柔らかに頼むぜ、師匠たち？」

「安心しろ。そこらへんに転がってる魔法使い程度なら簡単に楽勝であしらえるくらいには鍛えてやるさ。独り立ちできるその時までには命の危険があった場合は助けてやるさ。なんたってエヴァは魔法使いの中で最強で、私は全存在最強だからな」

これはこれは楽しくなりそうだ。

後日、ちづたんを弟子にしたことを知ったアスナ、マナ、木乃香、刹那、ゆいなにOHANASHIされました。なんでさ……。

S i d e · e n d

第32話（後書き）

そんな感じでアキラとちうたんを進行なり。

千鶴とはまだ明確なフラグが出来ていないと言う。

色々千鶴は大変なんです・・・。

次回、超との対話？

茶々丸改造？どうなるかな。

紫稀側ハーレムに昇格した面々とパーティーのアーティファクト案
まだまだ募集中なり。

特に忍に関しては可及的速やかに頼みます。

エヴァ・アスナ・忍・マナを除くハーレムパーティーの二つ名も同
時に募集です。

アリカ・木乃香・刹那・ちうたん・アキラ・千鶴・ゆーな・茶々丸
ですね。

第33話（前書き）

【総PV】73万【総ユニーク】7万2千【お気に入り】700件
突破！！

凄くうれしいです。薬味が麻帆良入りしたらコラボでもしてみよう
かな・・・？

いや、私じゃ無理っぽい。紫稀の口調が安定してないし・・・。

なおぼん様、杉やん様

感想ご意見感謝です！

似非中華に出番を。

そんな33話、どうぞ！！

第33話

S i d e ・紫稀

ちうたんを弟子にしてから、我が家には10人も人間（吸血鬼と言った人外もいるがな）が放課後集まるようになった。

そういえばちうたんを弟子にしたから屋敷内に部屋を与えることにした。何故かゆーなの部屋も合ったのだが、一体・・・？ちうたんの部屋は見事にパソコン関連ばっかりなのらー。

因みにゴールドンウィークが明けたのでさよが学校に復帰。理由としては入学式前に交通事故にあつて入院していたことになっている。その日の放課後にさよの退院おめでとう&歓迎会が開かれたのは記憶に新しい。まあークラスのみんなはただ騒ぎたいだけな気もするけれど。

後は特別広域指導員として仕事に励んだりしたのだが、不良生徒（？）たちからは「鎮圧者」や「死にたくなかったら見かけたら速攻逃げる」なんて、異名なのか警告なのかよく分からないものまでつけられていた。

まあーあれだな。つらつらと最近のこと振り返って何を言いたいかというのだな。うん、完全に現実逃避中だったんだ。実は今、超と葉加瀬たちと対話してるんだよね。対話っていうと何か変だけど会合？それも違うな。対談かな？まあー、簡単に言えば茶々丸の改良について話してるんだよね、うん。自分から声を掛けたのに現実逃避しているなんて、見事に矛盾してるけどね！

「なあーなあー。今の茶々丸に足りない五感ってなに？」

「いきなりやってきてなにを言い出すのかと思ったら、茶々丸に足

らない五感力？確か味覚と触覚、嗅覚力ナ？」

「そうですね。視覚と聴覚は再現出来てますし。それでシキさんは一体何を言いたいんですか？」

そんなの簡単じゃないか。

「茶々丸に足りない五感を全て与えようと思って」

「「は？」」

息ぴったりだな。流石天才。因みにここは工学部の超たちの私設ラボなんだよね！工学部Now！なんてね！

「いやいや、イキナリ何を言うネ！私たちでさえ視覚と聴覚でいっぱいいっぱいヨ！？」

「そうですね！いくら私と超さん、ひいては麻帆良の技術力が世界全体より何世代も進んでいるとはいえ流石に現状じゃ他のは無理ですって！！」

「何を言っているんだ、君たちは？君たちや世界の技術力なんて関係ないよ。私の力使えば簡単に出来るし」

「アナタは神様な力！」

「神ではないけど、それに准ずるものだけど？神通力も使えるし。ついでに神とやらにもあつたこともある」

「「え？」」

本当息びつたりだな。

「それで、茶々丸を限りなく人間に近いガイノイドにしてもいい？」

「本当に出来るのか？」

「出来ると言っているだろう？最近、そう聞き返されることが多いな」

多いと言ってもさよとじじい位だけ？よく思い出してみればそんなに多くなかったな。

「やってみるとイイヨ」

「超さん!？」

「考えてみるネ、ハカセ。これはかなりいい機会ヨ。限りなく人間に近いロボット。実際にはどんな感じになるネ？」

「そうですね……。確かにそれなら」

流石マッド！利点を知ったら暴走特急ですか！！何かぶつぶつ言ってるけどスルーするよ。怖いから！！

「内部は臓器を与えとかではなく食べたものを分解してエネルギーに変える機関を作り、外部はスラスターとかはそのままで間接部とかのつなぎ目をなくす程度かね？スペック的には現在よりも少し上昇するってところか」

「なるほどネ。私たちが度々やってる茶々丸のヴァージョンアップはそれ以降も可能か？」

「可能だな。基本的に足りない五感と食べ物などをエネルギーに変換する機関を与えて人肌を与えるみたいなもんだからな。ガイノイドとしての機能をなくすわけじゃないし」

「それなら構わないヨ。というよりドンドンやってヨ。上手くいったらその状態の茶々丸を参考にそれ以降の機体を作っていくと思うネ」

意外とすんなり通ったな。まあー通ったんだからいいか。参考にして言ってるけど、参考になんてならんと思うんだがな、創造使うわけだし。とりあえず前口上はこの辺でいいか。実際はここからが今日の本題なんだけどな！

「さて、それじゃここからは魔法関係者としての対談と行こうか。聞きたいことがあるんだろ、未来から来た火星人、超鈴音？」

「ッ！？どうしてそれを知っているのが謎ネ。アナタはどこでそれを知ったネ？」

自己紹介のときの念話同様に困惑してるっばいな。あえて口にはせずにスルーするけれど。

「別に不思議ではあるまい？私はアカシックレコードにアクセス出来るからな。お前がここにいるという事は、お前にとっての過去があったという事。それが私から見たら未来だとしてもお前の生きたと言っ記録を見るのだから、過去を見るのと同義だ」

「なるほど、森羅万象力。何でアナタがアクセス出来るかは理解できないけど、それなら納得ネ。それでアナタは私を止める力？」

正直、超の計画には一欠けらも興味ないんだけどさ。

「どうでもいいな。因みにお前の目的としている計画だが、この世界でやっても意味がない。この世界線の魔法世界の崩壊はあり得ないからな。それにこの世界線でお前の計画が成功したとしてもお前がいた世界線にまつた多くの影響を与えない」

「魔法世界が崩壊しない？一体どういう事ネ？」

「それこそ簡単だ。私が止めるからに決まっているからだろ。座に到達さえすれば楽なんだが、到達しなくても可能だからな。魔法世界を今ある形で再び作り出すだけだ」

「なるほどネ。それでこの世界でやっても私の世界に影響がないと何故言い切れるネ？」

「それも簡単じゃないか。この世界線で何かしたとしてもこの世界線から派生した未来にしか影響を与えない。お前のいた世界線には私は存在しなかったんだろう？私が存在しないという事は、影響を与えることが出来ないってことだ」

「並行世界。もしくはわ並列世界という奴力。それならアナタが言っていることも理解できるネ。確かにアナタは私の知る世界には存在しなかったネ」

「ほおー流石未来人。頭の回転は悪くないようだな。それで、それを知ったお前はどうする？」

「どうしようもないとしか言えないネ。私の計画はこの世界線では無意味じゃない力」

「確かにその通りだ。そこで提案があるんだが、その計画を少し変更しないか？」

「変更？何をするつもりネ？」

「何って面白おかしく、愉快にするだけだ。長い年月を生きていると退屈でな。まあーここ600年は比較的そうでもなかったが」

「フム、それでその変更した計画で私のメリットはなにかナ？」

「クラスメイトと一緒に卒業出来る・・・かな？そうそう、世界樹の発光現象なんだけど、今回は1年早くなるんだよね」

「ナンだつて？それなら最初に言ってほしかったネ。なるほどネ。確かにそれならメリットについては納得できたヨ。いいネ、乗ろうじゃない力。それでどういう風に変更するネ？」

「ああーそれはな。」

「力。なるほどネ」

「いやー2年後が楽しみだなあー。薬味にはせいぜい苦勞してもらうとしますか。主に私の暇つぶしとして。」

「それじゃ、私はこの辺で失礼するよ」

「そうだね。また学校で会おうネ」

超との対談が思った以上に上手くいったな。後は茶々丸の改良か。感情といったものは微妙にだが、芽生えてるっぽいんだよね・・・。

まっ、いいか。さーて茶々丸を改良するかなー。

茶々丸を連れて、我が家の『別荘』レーベンスシュルト城、研究室
Now!

「ふうー我ながら完璧だ。流石、神通力！便利すぎだろ」

何をしていたかって？茶々丸の改良に決まっているじゃないか！
あつ、知ってましたね。すいません。そろそろ起きてくれないかな
ー？

Side・end

どこかに出掛けていたシキ様が帰ってくるなり私を連れて地下室に設置してあるレーベンスシユルト城の魔法球へと入っていく。入ってそのまま研究室に連れて行かれたと思ったら、台座に寝かされた。そして、「改良するから暫く眠ってくれ」と言われたので、指示通りに意識を手放すことに。

再起動してみると、改良は終わったようです。それと体から不思議な感覚がしました。一体コレは何なのでしょう？わかりませんが、悪くない気分だと思います。

「起きたようだな。おはよう茶々丸。気分はどうだい？」

「おはようございますシキ様。よく分かりませんが悪くないと思います」

「そいつは重畳だ」

「恐らく問題はないと思いますが、なにやら体から不思議が感覚がするのですが、これは一体何なのでしょう？」

私の問いに少し考える素振りをするシキ様。

「恐らく足らなかつた五感を与えたことによる違和感かな？暫く行

動していれば感じなくなると思うけど」

「五感？そういえばこの改良は一体どういうものだったのですか？」

「ああーそういえば説明していなかったか。至極簡単だ。茶々丸に足らなかつた五感を与えただけだ。食べたものをエネルギーに変換する機関も与えたから飲食も可能になつたし、肌も細かいところを除けば人と大して変わらないよ」

五感を与えた？天才と呼ばれる超と葉加瀬ですら視覚と聴覚を再現するので精一杯だったのに？一体シキ様は何者なんだろうか？

「ところで、今回のことは超たちには説明しているのでしょうか？」

「それは当然だ。許可はもらっている。だから改良したんだ。流石に事後承諾はあまりいいものではないからな」

なるほど、超たちの許可は既にもらっていたわけですね。

「今は問題はなさそうだな。今後問題が起きたときはその時に対応するくらいしか出来ないかな？」

「そうですね。何かあつた場合はシキ様にお伝えすればよろしいのでしょうか？」

「そうだな。基本は私でいいか。私に伝えるより超たちに伝えた方が早い場合はそつちでいい」

「分かりました」

「さて、それではここから出るのでしょうか。はい？」

シキ様はそう言って手を差し出してきた。

「はい」

私はその差し出された手を返事をしながら取ったのだった。

Side・end

Side・紫稀

現状的に茶々丸には何の問題もなさそうだな。さーてみんなに説明せねばな！

564

我が家のリビングNow。今回の茶々丸改良について説明中なり！

「てことで、茶々丸は人間に限りなく近いガイノイドになったとさ

ー！はい拍手ー」

『はっ』

「おいおい、そこは拍手するところじゃないか、さよ以外のみんな。」

せつかく茶々丸がこれから一緒にご飯食べれるようになったって言うのに、酷いんじゃないかい？」

あれ？さよ以外のみんなの表情がなくなったよ？目の光もないし、これってまさか？はい、そうですね。予想通りですね、絶対。すいませんでしたー！！

結局この日もサンドバックにされてボロ雑巾のごとく床に捨てられてました。まあーすぐに復活したけれど。

因みにさよは泣いてたんだ。ほら、60年間食べることにも出来なかったから食べれる喜びってのを知ってるからだと思っただけど、どうかな？

まあーこんな感じに日常は過ぎていくんだよね！

Side・end

第33話（後書き）

色々突っ込みたいだろうけど、茶々丸改良なり！
これで大分薬味来訪までの下準備は進んだかな？
予定よりも早いのもあったけれども。

次回以降どうなるかな？

とりあえず、夏休み時には一度京都入りかな？

紫稀側ハーレムに昇格した面々とパーティーのアーティファクト案
まだまだ募集中なり。

特に忍に関しては可及的速やかに頼みます。

エヴァ・アスナ・忍・マナを除くハーレム・パーティーの二つ名も
同時に募集です。

アリカ・木乃香・刹那・ちうたん・アキラ・千鶴・ゆーな・茶々丸
さよですね。

文才ほしい……。

第34話(前書き)

【総PV】77万突破!!

ここまでアクセスあっていいのでしょうか？

なおぼん様、杉やん様、パン子様、月神楽様、神夜
晶様
感想ご意見感謝です！

書けるようなネタがないよ！
そんな34話、どうぞ!!

第34話

Side・紫稀

木乃香に魔法バレ、ちうたんの弟子入り、さよの学校復帰、超との密談、茶々丸改良と個人的に重要なイベントをこなして来た、多大でもない犠牲を払いながら。主に私がサンドバックになるというアレだが。

今が何月何日かは置いておいて、5月28日月曜日に中等部進級による初めての中間考査、つまりは中間テストがあったが、1-Aは見事に最下位・・・じゃなく17位だった。

原作ではアスナはバカレンジャーだったが、記憶封印をしていないクールなアスナな為、バカレンジャー入りはしなかった。バカレンジャーから一人減ってバカ四天王になったただけだが。

因みに、超と葉加瀬は原作で1位2位だったが、私とキティ、アリカ、茶々丸の4人が全教科100点なんて暴挙を起こしてしまったので、超は同率1位、葉加瀬は6位だった。と言うか、5人が全教科満点なのに10位にも入れないことのほうが凄いというかやばいことだよな？

ついでにいうとアスナ、マナ、刹那、ちうたん、ゆーなの5人は200位から400位にまとまっている。木乃香とさよは100位前後といったところか。神儀家と関係のある人物達の頭脳は原作に比べて格段に性能が上がっている。主に私のスパルタなお陰で。

次に6月22日金曜日から24日までの3日間に亘って行われる麻帆良祭。

私たち1-Aは中華飯店、と言うより麻帆良祭限定で超包子支店になった。売り上げの3割を本店に献上すると言う、超が得をする感じだったが、それを抜いてもかなり儲けることが出来たと思う。因みに私とキティ、茶々丸、木乃香は主に厨房担当で大活躍だったわけだが。

神儀家に入り浸っている女性陣も料理が出来ない訳ではないが、腕前が一般人相応だったりサバイバル料理だったため、主に家で炊事担当だった私とキティ、茶々丸が五月と共に頑張ったわけだ。五月には劣るものの下手な料理人よりは腕前はあったからな。

次に、個人的に楽しむ気満々だった「まほら武道会」なのだが、形骸化が進みすぎて裏側魔法関係者の人間が一切出場しないものだった。一応参加することにしたのだが、参加者が表側一般人の人間だけだったので、身体能力を一般人よりちょっと上くらいまで下げて、体術だけにした。

唯一楽しめたのは達人クラスよりやや劣るものの中々の強者の古菲クフエイとの決勝戦くらいか。それでも一般人である古でもあまり相手にはならなかった。現在の刹那に合わせた状態の私とやって1分持つかどうか位。やはり、気の内容を知らないと出力や錬度は上げることが中々出来ないか。色々と言ってはいるが、結局優勝は私だったってことだな。

そして、最終日に行われた学園全体イベント、スタンプラリー。参加者にはそれぞれのスタンプのある場所のヒントを書いた用紙とスタンプを押す為の用紙が配られる。スタンプの数は全部で15個。スタンプのある場所にはクイズやクロスワードパズルなどと言った障害が配置されている。それらの障害を乗り越え、4時間で全てのスタンプを集めてゴールするという単純明快なイベントだ。まあー障害のレベルが半端なく高いものがあつたのだが。

ゴールした順位によって商品である食券が配られる。参加賞として参加者全員に10枚ずつ配るらしいが。因みにこのイベントは個人参加ではなく、団体参加も認められているわけで。頭脳担当と肉体担当を準備すれば比較的楽だつたりするわけだ。

このイベントには当たり前のように神儀家は参加したわけだ。メンバーは私とキティ、アリカ、アスナ、忍、マナ、茶々丸という反則なパーティーな訳だが。全てのスタンプを集めて当然のごとくぶつちぎりで圧倒的に1位を獲得してみせた。

所要時間は僅か40分。茶々丸にスタンプの場所を探查させればもつと早かつたと思うが、そんな無粋な真似はしない。というよりいくらなんでも早すぎたのか、不正と疑われたわけだが、そんなものしなくたつてこれくらい楽勝なのだ。よって1位は不動のままだった。

神儀家がゴールしてから1時間後の1時間40分程度で2位の団体がゴール。因みに神儀家関係者によるチームだった。木乃香、刹那、ゆうな、さよ、ちうたんの5人だ。日頃鍛えていたお陰で体的にも知識的にも問題はなかったようだ。身体能力が人外な私たちと比べてはいけないだろうし、私たちが参加さえしていなければ彼女達が間違いなく優勝だつたわけだし。

関係者チームがゴールしてから30分後くらいに疎らだが3位以下の団体が次々とゴールしていった。他の参加者の皆さんに言えることは一言しかない。圧倒的過ぎてすいませんでした!!

1位と2位を1 - A関係者で埋めてしまったので、クラスメイト、主に朝倉やパルに食券を集られることになった。2チームで1900枚だった上に、クラス売り上げも合わせて、かなり豪華な打ち上げだったと言えよう。楽しかったから別に構わないのだけどな！ガトウやタカミチまでもちやつかりお零れに預かっていたくらいだしな！

麻帆良祭の余韻を楽しみつつ、それがなくなつてからも日々を変わらず過ごし、7月中旬。初めての期末考査、様は期末テストである。

期末テストも中間テスト同様に17位。下のほうにいる生徒たちはあまり勉強をしたがらないのでしようがないことでもあるが・・・
。再び同率1位が5人も出たが別に構わんだろう？

そして夏休み突入！課題は時間の掛かるものを除いて全て初日に『別荘』内で片付けることに。読書感想文や自由研究といった面倒なものは今のうちに内容が被らないように注意しつつ何個か作成することも忘れずに。1つずつは今年度分、残りは来年度と再来年度の夏休みと今年度を含む冬休みの分だ。あれ？冬休みは自由研究関

係なかつたつけ？まあいいや。

7月29日日曜日の夜に夏祭りを堪能。カキ氷やチョコバナナが美味しかったです。

射的では私とマナ、ゆーなが実力を発揮し、屋台のおっさんが涙目になっていた。みんなに欲しいものを確保してもらい、残りはおっさんに返したわけだが。

8月中旬に1週間京都へ。木乃香の魔法バレに關しての報告である。木乃香と刹那は当然として同行してきたのは、キティと茶々丸の2人だけだった。

関西呪術協会の総本山に出向いたとき、詠春が魔法バレについて怒鳴ってきたが力づくで黙らせてみた。因みに木乃香に魔法がバレているのを知っているのは私たちとじじい、詠春、木乃璃嬢位である。

木乃璃嬢からは魔法をバラしたことについては何も言っただけだった。と言うより、後から聞いたのだが彼女は最初から教えるべきだと主張していたらしく、逆に感謝していたとかなんとか。

詠春の周りは敵だらけだったわけか！あつ、でも刹那は教えない派であつち側だったか。今となつちやあ関係ないわけだが。

京都から麻帆良に戻ってからやることなく暇を持て余していた。やることがないと言っても修行の相手などはキチントやっていたが、暇すぎてしょうがなかったので、アスナやマナ、刹那といった戦闘に關する修行メンバーは『別荘』の時間差を2倍速に下げて暇を潰

していた。木乃香やさよ、ちうたんといった知識方面の修行メンバーは別に『別荘』の時間差を最大にしたのを準備してキティたちに任せておいた。

暇だ暇だといっってはいたが、きちんと昼の「特別広域指導員」の仕事と夜の「警備員」の仕事はこなしている。

最近、広域指導員の仕事をしていると遭遇する人たち全てから「麻帆良の最終兵器」「麻帆良最強パーティーの要」「麻帆良のハレム男」と呼ばれるように……。麻帆良祭の時にはしゃぎすぎたかもしれないが、そこまで大げさなことをしたつもりはない……。はずだ。後者にいたってはあながち間違っただけでなく否定できないのが癪だが……。

変な異名で呼ばれることにストレスを感じるようになって、戦闘関連の修行メンバーや夜に侵入してくるはぐれ魔法使いや悪魔たちに八つ当たりをしてストレスを発散させていたわけだ。正直可哀想だとは思ったが、修行メンバー以外には思うだけなので、どうでもいいわけだが。

超との悪巧みもいい感じに水面下で進んでいる。

後は外堀を埋めながら、薬味が来るのを待つだけ。

その際にはキティに手伝ってもらわないといけないんだよな、自信過剰の薬味の自信は叩き折っておかないといけないからね！

弟子入りさせるかは別だけど、させたくなかったら図書館島地下で隠居しているヘンタイかゼクトに押し付けられればいいな。

他にはアキラや千鶴を筆頭にクラスメイトたちと楽しくお茶をして、それを知ったキティたちに毎回OHANASHIをされて、結果的に毎回サンドバックになりボロ雑巾にされた。既に慣れたものだが。・・・慣れたくなかったけどね！？

そんな日々を過ごしながら2001年の9月3日月曜日。夏休みを終えて、私たちは新学期を迎える。

S i d e . e n d

第34話（後書き）

一気に時間を経過させてみました。

大体4ヶ月くらいですかね？

中間期末考査の結果と麻帆良祭、夏休みですね。

次回も一気に時間経過させて2年に進級になるかな？

体育祭やその時のウルティマホラに關しても描写だけするといった感じかな？

紫稀側ハーレムに昇格した面々とパーティーのアーティファクト案
まだまだ募集中なり。

特に忍に關しては可及的速やかに頼みます。

エヴァ・アスナ・忍・マナを除くハーレム・パーティーの二つ名も
同時に募集です。

アリカ・木乃香・刹那・ちうたん・アキラ・千鶴・ゆーな・茶々丸、
さよですね。

誤字脱字、言い回しなどに変なところがあればご報告ください。

第35話（前書き）

【総PV】80万【総ユニーク】7万6千突破！！
ここまで期待されてもいいのだろうか・・・？

神夜 晶様、なおぼん様

感想ご意見感謝です！

紫稀側ハーレムに昇格した面々とパーティーのアーティファクト案、
二つ名募集中なり。

二つ名はアリカ・木乃香・刹那・ちうたん・アキラ・千鶴・ゆーな・
茶々丸、さよ

原作では一度しか描写されていない2学期！
そんな35話、どうぞ！！

第35話

Side・紫稀

9月3日、新学期開始！と言っても学校に行くだけな毎日なのであまり変わらず。

と思いきや麻帆良全体での体育祭が10月8日の体育の日開催、その準備に忙殺される。

さらに1クラスから出される3人の実行委員に私とアリカと超が選ばれ、忙しさに拍車がかかる。

会場設営やプログラム作成などの仕事を入ってくる情報を冷静に分析し処理していく。1-Aの実行委員である私たちの群を抜いた処理能力が重宝された。結果、当日の情報処理も任せられたため私たちが参加する大会は1つだけで済むことに。

適当に陸上競技にでも出ようと思っていた私だが、気付いたら「ウルティマホラ」に選ばれていた。恐らく武闘派の連中が結託したのだろう……。

10月8日月曜日体育の日、麻帆良学園体育祭当日。準備の時は比べ物にならないくらい程の問題が上がってくる。それを茶々丸とちうたんに協力要請を出して情報処理や指示を出していく。

私は情報処理と並行して見回りも忘れずにする。何かあった場合は近くの委員に指示を出しながら、「ウルティマホラ」会場へと向

かう。

会場には1 - Aの武闘派や中武研、ボクシング部などの武術に関する運動部の中学生高校生問わずが集まっており、総数1000人ほどが参加。参加者が多いためバトルロワイヤル形式の予選会で3人まで選出、4つのブロックに分けてのトーナメント制だ。

ここでルール説明。「ウルティマホラ」は表の大会のため魔法関係者は身体強化の類のみ使用可、武器は殺傷性能のないもののみ。エアガンは実弾でなければ使用可だ。試合時間は10分だ。

以上のルールを踏まえた上で予選を突破したのは、私とアスナ、マナ、茶々丸、刹那、クローフェイ古菲、楓、ガトウ、タカミチに残りの23名は中武研や運動部の上位クラスだけだ。

Aブロックには私とアスナ、マナの3人、Bブロックには茶々丸と刹那の2人、Cブロックには古菲の1人のみ、Dブロックは楓とガトウ、タカミチの3人だ。その他の神儀家+関係者は参加していない。

まずは1回戦。私たち9人は身内との対戦ではなかったため余裕で突破。

2回戦では私とアスナ、楓とタカミチがそれぞれぶつかり、マナと刹那、茶々丸、古菲、ガトウは関係者とはなかったため力を温存したまま3回戦へ。

結果は、私がアスナの攻撃をかわし続け、アスナの一瞬の隙を突いて背後に回り手刀で気絶させて勝利。

楓とタカミチ戦は楓が分身を使ってタカミチを翻弄するが、居合拳で楓の一瞬の隙をついたタカミチが勝利した。

3回戦は殆どが身内同士での戦い。私とマナの師弟、茶々丸と刹那、タカミチとガトウの師弟対決。古菲は一般^{表の人間}人との戦いだっため余裕で準決勝に駒を進めた。

私とマナの対決は、私が飛んでくる弾のことごとくを【木刀無銘】で捌いて接近し、一閃。それをマナがかわして再び弾幕を張り私が捌く。その繰り返しだったが、極度の緊張状態が続いたためマナの緊張の糸が保たず私の一閃を受けて気絶。私が準決勝に進む。

茶々丸と刹那の対決は、開始当初はいい勝負をしていたが、時間が経つにつれ実戦経験の差で刹那が茶々丸の裏をかくことで勝利し、準決勝へ。

ガトウとタカミチの師弟対決は、居合い拳の打ち合いだった。しかし、楓との対決で少なからず疲弊していたのか、タカミチが打ち負けガトウが準決勝へ。

準決勝は私と刹那の神鳴流の同門、古菲とガトウの対決に。

私たちは雷鳴剣や炎斬剣^{えんざんけん}といった派手な技は使えなかったため純粹な剣の腕だけでの勝負となった。

私の身体能力は万全な状態の刹那の實力と同程度まで制限しているが、刹那は茶々丸との対決の時の疲れが抜けきれていなかったらしく、開始当初は互角に打ち合えていたのだが、一合一合打ち合うたびに刹那の反応が遅くなっていった。最終的に私の攻撃を徐々に捌ききれなくなった刹那はかわしきれなくなり、トドメの一閃が入り刹那が気絶したので私の勝利だった。

もう一つの準決勝は古菲に懐に入られ、思ったように試合が進められず、タカミチとの居合い拳の打ち合いでそれなりに疲弊していたガトウが根負けする形になり古菲が勝った。

決勝戦は私と古菲の対決。結果として麻帆良祭の「まほら武道会」の決勝の再現となった。

あれ以来、鍛錬を欠かさなかった古菲の實力はかなり上がって

た。が、まだ現在の刹那の域にまでは達しておらず、万全の刹那の身体能力相応まで制限した私には勝てず、今年度のウルティマホラの優勝者は私となった。

「ウルティマホラ」終了後、私が実行委員の本部に戻るつてみると多少の問題が起こっていたものの、然程時間も掛けずに処理できるレベルのものだったため、指示を出して他の委員に任せて自身の仕事に戻るのだった。情報処理以外にも2時間毎に広域指導員の仕事もこなすと言う多忙極まりなかったが、体育祭開催によって発生した問題などは全て処理しきり無事に体育祭は終わりを迎えた。

ウルティマホラで活躍した為、私と刹那、古菲は朝晩関わらず勝負を挑まれることになった。私と刹那にとって迷惑極まりなかったが……。

体育祭終了から2週間後の10月22日月曜日、2学期中間考査1-Aの面々は一部の例外を除いて体育祭で燃え尽きたのか、19位だった。特にバカ四天王で武闘派の楓と古菲は凄惨だったらしい。因みに例にもれず全教科満点が5人いたのはご愛嬌だ。

11月は特にイベントと言えるものはなく、休日にクラスの面々でボーリングやカラオケにいたりして親睦をさらに深めていた。

ボーリングではパーフェクトを出した猛者が4人もいたが別に不思議ではないと思う。出したのは私とキティと茶々丸と古菲だったのだが。

カラオケでも100点を出したつわものがいた。中の人的に林原めアリカとまき絵と柿崎堀江由衣だったのだが。因みに私とキティ、茶々丸、ちうたんは90点台しか出していなかったが。

そんな感じで日常を楽しみながら過ごしつつ12月10日月曜日、2学期期末考査。今回は特に疲れるようなイベントなどもなかったため、それなりに勉強に取り組んだらしい。結果として12位だった。

例によって例のごとく、今では全教科満点が5人いるのは定番となっていた。木乃香とさよは70位台、その他の神儀家+関係者は170位台に固まっていた。

期末考査も終えて12月21日金曜日、2学期終業式。翌日から「冬休みだ！やったあー！！」な空気が1-A問わず中等部全体から溢れていた。終業式から3日後の24日、クラス一同でクリスマス会を開催。場所と時間は女子寮の学生食堂を14時から17時までの3時間貸し切った。

料理は私とキティ、茶々丸、木乃香、五月、超で振る舞った。クリスマス会の噂を聞きつけたのか、他の寮生たちも学年学級拘わらずやってきて参加していた。疎外するつもりもなく誰彼構わずWelcome状態だったので、料理の方が大変になったわけだが。

時間が来たのでクリスマス会はお開きとなり、神儀家と関係者は神儀家の屋敷へ。

明石親娘やガトウ、タカミチ、魔法先生の中でもまとまった瀬流彦なんかも誘い、魔法関係者による2次会となった。実際の趣旨はキティの誕生日会で、2次会の方はついでだったりするのだが。

無礼講だった為、明らかに未成年なマナと木乃香、刹那、ちうたん、ゆうなどガイノイドである茶々丸を除いた20歳以上の面々は豪快に飲酒していた。実際は『別荘』で修行していたりするから精神年齢的には全員20歳以上を超えてはいるのだが、肉体的にはまだ10代の上に麻帆良が教育現場でもあるため控えさせたのだ。キティは10歳の肉体だったが現在では13歳相応くらいまでは成長させている。ここで飲酒しているキティの肉体年齢を気にしてはいけないことなのだ。

クリスマス会をやったからの冬休みの日々は戦闘関連の修行に入った木乃香とさよ、ちうたんを軽くしごきつつ、昼は「特別広域指導員」の仕事を、夜は「警備員」の仕事をこなし続け、課題も早々に終わらせた。

私は仕事に関しては妥協しないので、きちんと役割はこなす。変な言いがかりもつけられたくないし。

私が指導員の仕事をするとかなりの確立で1-Aのメンバーがナンパされているのだが、狙っているのだろうか？その辺を考えても仕方がないと思い、普通に鎮圧して回るのだが。

1-Aのメンバーがナンパされてた時は鎮圧した後にお茶に誘ったりして心を落ち着かせたり、不安を取り除いてあげている。

というか1-Aのメンバーでナンパに会いやすいのがアキラとゆー私たちの運動部組と千鶴、チア部の3人なので、その辺りとは自然と交流度が高くなっている。キティたちが怖いが。

夜の警備ではちまちま撃退するのが面倒になってきたので、魔法^{サキ}の射手の絨毯爆撃で殲滅することにした。主に1000矢で。土地自体に被害が出ないように気をつけてはいるのだが。

最近、夜な夜な貞操の危機に襲われる予感がする。既にチェリーではないから危機でもなんでもないと思うが、何故か気持ち的に逃げ出したくなるが多くなった。そんな日の翌朝にはアスナかマ

ナ、木乃香、刹那、ゆーなの内誰か1人が私の隣で寝ているのだ。
怖いと思うのは私だけじゃないと思いたい！

そんな感じにバカ騒ぎをしたり、しなかつたりの日々を過ごして
2002年の1月21日月曜日。冬休みを終えて、新学期のスター
トである。

S i d e . e n d

第35話（後書き）

今回も1学期分の時間を経過させました。
独自設定の体育祭がメインです。

今回は1学年3学期のお話ですかね？

恐らく同じように時間経過させると思います。

疑問に答えようのコーナー！

裂「なおぼん様からの疑問『いや、満点取りすぎw』。シキ答えてよ」

紫「私は創造の力を使う為に多種多様な知識をもらってるから仕方がない」

紫「キティは12年間も通っていたから満点取るなんて造作もない」

紫「アリカは元々が勤勉だから普通に満点取れる」

紫「茶々丸は原作ではキティに合わせて点を下げているのだから楽勝なんだ」

裂「再びなおぼん様からの疑問『まあ何より（ry）ドMかよww』」

紫「私は決してドMなんかじゃない！サンドバックにされても数分後には復活するし、」

紫「サンドバックにされているときは記憶に残してないから覚えようもないんだよ」

裂「今回はこの辺で。誤字脱字、言い回しなどに変なところがあれば

「ばい」報告ください」

第36話(前書き)

【総PV】 85万【総ユニーク】 8万【ストーリー評価】 200P
T突破!!

本当にいいのかな、こんなに・・・。

パンチ様、神夜 晶様、なおぼん様、コクイ様×2
感想ご意見感謝です!

紫稀側ハーレムに昇格した面々とパーティーの二つ名募集中なり。
二つ名はアリカ・木乃香・刹那・ちうたん・アキラ・千鶴・ゆーな・
茶々丸、さよ

斬魂刀を刹那とさよに持たせようと思うのですが、何がいいでしょうか？

1学年3学期と春休み!
そんな36話、どうぞ!!

第36話

Side・紫稀

2002年1月21日、01年度の3学期スタート。3学期には特にイベントらしいイベントもなく、のんびりと日々が過ぎていく。休日にクラスで遊びにいたり、神儀家+関係者で理由もなく宴会したりと騒がしく日々を過ごす。

冬休み明けまでに木乃香とちうたん、さよがいい感じに育ってきたのでアリカと木乃香を除いた神儀家+関係者は週2で夜の警備をすることに。実際はちうたんとさよ以外は前からやってはいたのだが。

夜の警備と言っても侵入してくるのは主に、図書館島の貴重書狙いか、関東魔法協会を失脚させる為にやってくる関西呪術協会の過激派とその式紙、魔法使い陰陽師関わらず木乃香狙いの魔法関係者・召還された人外の3種類なのだが。少数の理由に【アラルプラ紅き翼】や賞金首時代の私たちに怨みのある関係者だったりもあるのだが。

基本的に私とキティ、マナや茶々丸は『魔法の射手』サギタ・マキカや銃などで中距離射撃、もしくは無手や刀剣類での近接格闘での全距離で援護をしたりされたりしながら仕留めていく。オールラウンダー

アスナと忍、刹那はアーティファクトなしでアスナは私の創った【偽・破魔の剣】、忍は自身の力で再現した【心渡り】、刹那は詠春から譲り受けた【夕凧】を手に遠距離組の援護を受けて接近戦で仕留めていく。

ちうたん、さよは『魔法の射手』での物量押しが無詠唱の『魔法の射手』を囿に『白き雷』や『紅き焰』のような中級魔法で近接組を援護しながら中遠距離で仕留めるだけなのだが。

ゆうなと夕子は遠距離から魔法銃での射撃で接近されないように近接組を援護しながら仕留めていく。

明石教授や瀬流彦は後方での情報処理やその守りに徹している。

ガトウやタカミチは遊撃として動いている。主に私たち以外のグループの方で。

それぞれの戦い方を説明はしたが、毎回同じ日なわけではないので、その都度コンビやグループが変わるのだが。理想としては近+中+遠距離が揃っていればかなりいい。私やキティ、忍は地力的に関係ないのだが。

2月には節分があつたが大して盛り上がりせず、そのまま過ぎていき3月18日月曜日、学年末期末考査。クラスとしては18位。

範囲が1年度分丸まるだつたため成績中位から下位の面々は若干

酷い結果に。神儀家 + 関係者の面々も順位が少し下がったようだが、200位より下になる者はいなかった。例に漏れず1 - Aには5人の全教科満点がいたのだが。

学年末期末考査も終了し、3月26日火曜日。01学年度終了式。翌日から2週間の春休み。

人によっては天国のような地獄のような春休みが始まる。・・・
・・・多分？

S i d e . e n d

S i d e . アキヲ

春休みのある日、私とゆうなや亜子、まき絵のいつものメンバーで買い物に出掛けた。

たまにあうナンパにその日もあい、私たちは断るもその人たちはしつこく誘ってくる。

嫌がつてる私たちと無理やり連れて行こうとする男の人たち。そこに広域指導員の仕事をしているシキくんが通りかかり助けてもらい、お茶に誘われる。

そんな定番になりつつある風景を私たちは楽しんでいた。

その日の夜。私たちはいつものメンバーとクラスメイトを2、3人誘ってお泊り会をしていた。途中お菓子や飲み物が足らなくなつたので私とゆうーなで女子寮に一番近いけどちよつと離れているコンビニまで買いに行つた。

行くときはなんともなく、買って帰る途中ゆうーなの携帯に着信があり、それを取って内容を聞いたゆうーなの雰囲気を取る前とはちよつと変わっていたのを感じた。

ゆうーなが電話を閉じた後何事もなかったかのように女子寮に向かっているの後方から物音がした。まずゆうーなが振り返り、物音の正体を確認して舌打ちをしていた。その後ゆうーなの舌打ちの理由が分からないまま私は振り返つた。

そして私は振り返つたことを後悔した。

「おぼこい嬢ちゃんたちには悪いが、見られたんなら死んでもらわんといいんのか」

振り返つた先にいたのは、人ではなく異形のモノだった。その外見は鬼。人を喰らうと言われる鬼。

私はその外見と先に言われた言葉に死の恐怖を感じ動けなくなり立ちすくんでいた。

そんな私と鬼の間に立ちふさがるようにゆうーなが入り、「アテアット来れ」と言つた後、どこからだしたのか分からないけれど空いている方の手に銃を持っていた。

ゆうーなは持っていた荷物を私のほうに差し出しながら喋る。

「アキラ、ここは私がなんとかするから逃げて」

そんなゆうな言葉に私は頷くことも逃げることも喋ることも出来ずにいた。

それを察したのかゆうなは迫ってくる鬼に向かって引き金を引いた。その一瞬の隙に持っていた荷物を地面に置き、再びどこから出したのか分からないけれど空いた手に新しい銃が握られていた。

鬼は持っていた岩で出来た金棒？で銃弾を防ぎながら接近しようとするも、ゆうなは両手に持った銃でそれを許さなかった。

ゆうなは私を護る為に攻めることは出来ず、鬼もゆうなの連射を掻い潜れず、お互いに決め手を欠き、完全に膠着状態だった。

だが、それは唐突に終わりを迎えた。

「やあーやあー楽しそうだね。何かいいことでもあったのかい？」

軽口を叩きながら登場した彼によって。

Side・end

Side・紫稀

「やあーやあー楽しそうだね。何かいいことでもあったのかい？」

一般人の生活エリアに侵入したのがあると聞いてやってきたけれど、一体どうなってるんだ？とりあえず声を掛けて登場はしてみた

けれど。

「で、ゆうな。お前がここにいることは不思議に思わないが、何故アキラもいるんだ？」

そこが一番謎なんだよな。アキラも私が登場したことで驚いてるようだけど。

「いやあー、実は私たちお泊り会をやってたんだけど、食べ物とか足りなくなつたから買い足しに来て、帰ろうとしたときにアレが後ろからやってきたってところかな」

なるほど。不可抗力ってやつね。誰だよ、逃がした奴。後で地獄を見せてやるか？

「理解したよ。大方、アキラに流れ弾とか当たるわけにもいかないから攻めに攻められなかつたってところか」

「まっ、そんなところだにやー。てことでよろしくー」

「よろしくってどっちの意味だよ。アレの撃退かアキラの守護か」

個人的には前者の方が楽なんだがな。

「モチ、アキラの守護でしょ？」

「え？え？」

はあーやっぱりアキラの守護か……。それにしても話の流れについていけないか。

「はいはい、ならさっさとアレ撃退してくれよ。個人的には私がかったほうが早いんだからさ」

「そんなこといわなくてもいいんじゃないかやー？久々に実戦でこれ使えるんだからさー」

ああー今日は警備の日じゃないから魔法銃じゃなくてアーティファクトカード持ってきてたのか。

「そうかい。それで何を試すんだ？」

「ふっふーん、私のアーティファクトだからこそ出来る45mm口径の魔力的レールガンとかどうよ？」

「どうよ？っていつておきながら既に撃ってるじゃねーか！なんちゅーもん使ってたんだよ……。大嘘憑きオルフイクション使えば地形的には何の問題もないけどさ……」

「あ、あの二人とも。これって何かの撮影だったりする……の？」

ああーアキラのこと忘れてた。んーどうするべ。とりあえずゆーなと相談かな。

「ゆーな、アキラのことどうするよ？個人的にはどっちでも構わないんだけどさ。ちーちゃんと同じ対応する？」

ちーちゃんってちうたんのことね。呼ぶときはちーちゃんにしてるんだ。心の中とからかう時はちうただけ。

「んー私的には今夜のことは忘れて日常に生きてほしいかにゃー？でも決めるのはアキラだから、説明してどうするか聞こうよ」

「そうしますか。それじゃアキラ。明日の昼でいいかな？今回のこと説明するから私の家に来てよ。場所はゆーなが知ってるから。それじゃおやすみ」

「う、うん、分かった。お、おやすみなさい」

「じゃあー明日ねー」

「今夜はもうないだろうけど気をつけてなー」

んー、アキラのことみんなにどうやって説明しようか……。説明したら説明したで理不尽な目に会う予感がするが……。

帰宅後、神儀家一同（木乃香と刹那、ちうたん含む）にアキラのこと説明したところ、理解はしたらしい。そう、理解はしたらしいのだ。つまり、納得はしていないという事で。みんながにじり寄ってくるんだ。

なんでみんな武器を持つてるの？いやいや、笑ってないで説明してよ！しかも目は笑ってないよね、それ！や、やめっ、やめてー！アッーーーーー！？

翌朝起きてみると、私はリビングにいた。昨夜アキラのことを説明してから記憶がない。服がぼろぼろだけど大事なだろう、うん。

昼ごろにはアキラが来るだろうからシャワー浴びてさっぱりしておくか。

シャワーを浴びていつもの着流しでキッチンに立つ。時間帯的にアリカと茶々丸、木乃香、刹那、さよあたりは起きてくるだろう。6人分の朝食を準備していると、茶々丸から順にやってくる。

「シキ様、手伝います」

「それじゃ、味噌汁よろしく」

「はい」

朝食が出来上がると丁度4人が起きてきた。

私の姿を確認するときよ以外の3人が「やっぱりか」みたいな溜め息をついたのだけれど、一体なんだろう？どうせ大したことはな

いのだろつから、スルーしておこう。うん、鈍感ではないから本音は分かっているんだけど、あえてスルーするのさ！反論は認めない！

それから食卓について「いただきます」をして朝食を取る。

今日の予定を聞いたところ、みんな『別荘』に籠るそうだ。私と本契約・仮契約バックテイクしたことバックテイクで不老になったけれど程ほどにするように言っておいた。

朝食を取った後は茶々丸と食器を洗い、アキラとゆーなが来るまでテレビでも観ながら待つことに。

10時30分。屋敷に向かってくる2つの気配を察知したので玄関に向かう。

そして丁度玄関についたところで呼び鈴が鳴ったので、扉を開ける。

「いらっしやい。我が家へようこそ。ってな」

なんてふざけながら。

Side・end

Side・ゆーな

むうー、昨夜は失敗かな？連絡をもらったときに急いで寮に帰るべきだったね。

そのせいでアキラにこちら側の存在を知られることになるとは。

寮に帰ってからは、一般人であるクラスメイトがいたからそのことについて少しも説明したり出来なかったけど、どうしたものかにやー？

説明とかはシキさんに任せることにしよう。私では力不足だし、上手く説明してくれると思うから。

神儀家宅に近づくにつれてアキラの表情が苦悩から困惑に変わっていた。そりゃそうか。『家』じゃなくて『屋敷』だもんね、あれ。私も最初見たときは呆然としたものだし。

呼び鈴を鳴らすとすぐに扉が開いた。

「いらっしやい。我が家へようこそ。ってな」

なんてふざけながら家主が出てきたわけだけだ。

S i d e ・ e n d

S i d e ・ アキラ

昨夜の一件のことを寮に帰る途中からずっと考えていた。

みんなが待っている寮の部屋に戻ってから、ゆうなに少し聞こうとも思っただけを向けるしてみると、顔を横に振った。多分、みんなはあの件に関わりがない。だからゆうなは、部屋で説明することを拒

んだのだろう。

朝起きてからもあれが何なのかずっと考えていた。だけれど分かったことは鬼や化物と呼ばれるモノが存在していて、それを撃退出来る不思議な力があって、その力をゆうなと彼が使えて、他にも使える人がいるだろうことだけだった。

昨夜別れるときその辺のことを説明すると彼は言っていた。だから私は不思議な力やそれらの存在について自分なりに考えながらゆうなに道案内を頼み一緒に彼の家に向かっていた。

ゆうながもう少しでつくと言ったので、一旦考えることをやめて辺りを確認することに。しかし、周辺に『家』と呼ばれるものはなかった。あつたのは『屋敷』と呼ぶべき大きさの建物だった。

それを確認した私の表情に思うところがあるのか、ゆうなは苦笑を浮かべていた。

いやいや、まさかね？と思いつつながら私はゆうなの後をついていく。

そして『屋敷』の前に立ったゆうなを確認して私は呆然としていた。そんな私を見ながらゆうなは呼び鈴を押していた。そしてすぐに玄関の扉が開いた。

「いらつしやい。我が家へようこそ。ってな」

そんな彼の言葉で私は考えることを放棄した。

Side・end

ちょっとふざけすぎたようだ。アキラの表情が考えるのをやめたような感じになったし。

「とりあえず入りなよ。リビングに案内するから」

その声を掛けると、ゆーながアキラの分のスリッパを出してついでくる。アキラもゆーなに出してもらったスリッパを履いて一番後ろをついてくる。

リビングについてからの第一声は勿論私だ。

「さて、どこから説明するかな？」

んー、やっぱり魔法が存在するといったところからか？ちうたんとは違うケースだからどうやって説明したものか。

「それじゃ、昨夜のアレは何なのか教えてほしい」

そこからか。まあー命の危険に晒されたのだからその晒したモノの正体から知ろうとするよな。

「アレは鬼だ。そのまま受け取ってくれ」

「やっぱり・・・」

一晩あったからそれなりに考えたのかな？ちうたんの時は夕方くらいだったから急いで帰す必要がなかったから一気に説明したん

だっ たっ け。

「それで次は？」

「ゆーなの手にいきなり銃が出てきたことについてとその力の正体について」

その質問は一番簡単だな。一言で済むし。

「力の正体は魔法だね。ゆーなの手に銃が出てきた理由も魔法で説明できる」

「魔法？」

「そう、魔法だよ、魔法。つまりは私たちは魔法使ってやつさ」

「魔法使い……。それでシキくんたちは何で鬼と戦ってたの？」

ふむ、麻帆良の真実を聞くのか。まあーいいけど。

「簡単に言えば世界樹、図書館島の地下にある貴重な魔法書、あるターゲットが狙いつてところかな？」

「・・・簡単って言ったのなら他にも理由があるんだよね？」

「アキラは頭の回転が良すぎだな。そうだな、一番大きな理由だけ教えるよ。麻帆良が魔法使いの為に作られた街だからだ」

「魔法使いの為に作られた街・・・？」

いきなりそんなこと言われてもどう反応すればいいか分からないよー。

「麻帆良学園の上に巨大な組織があつてね。その組織の人間が日本にも影響力を持ちたいから作ったようなものかな？その辺は詳しく知らないし、知る気もないけど。あと麻帆良全体に認識阻害と呼ばれる魔法の結界が張つてあるんだ。効果は異常を普通に、非日常を日常に、非常識を常識に思わせる類のね」

「異常を普通に、非日常を日常に、非常識を常識に思わせる？」

「世界水準よりも遥かに高い技術力、クラスメイトに小学生や大学生に見える人、ガイノイドと呼ばれるロボット、拳句に女子校のはずなのに男子生徒である私がいるのを今まで不思議に思わなかっただろう？そういうことさ」

「そういえば今考えてみると確かにどこかがおかしいね・・・」

「一般人ならその効果を受ける。魔法関係者にとってはこれほど都合なことはないだろ？」

本当、魔法関係者はずっとちうたんの存在を知っておきながらフオーもせずに完全放置だもんな。あのぬらりひょん、一辺殺してみるか？

「それで一番聞きたかったことなんだけど、魔法の存在を知った私はどうなる・・・の？」

おや、かなり怯えているようだ。とりあえずその辺の説明が一番大事だよな。

「別にどうもしゃしない。この家の住人とその関係者以外の麻帆良の魔法関係者は記憶を消そうとするだろうけどな。私たちからはその手段は使わない。相手が望むならその手段を取るけど。それでアキラ。君はこれからどうしたい?」

「記憶は消されたくない。だけど、私はどうすればいいのかわからないんだ。どうしたらいいのか選択肢を教えてほしい」

ん、んー? 精神的にかなり参ってしまったているようだね。ちうたんの時と同様の選択肢しかないからそれを提示してあげるか。

「選択肢は3つある。1つはアキラが除外した記憶の消去。2つ目、魔法の存在を口外せず日々を過ごす。そして3つ目。魔法を習い危険に備える。以上だ」

「2つ目のは口外さえしなければ私に危害を加えないって考えればいいのかな?」

「その通りだ。秘密にしてくれるなら魔法関係者はそれなりのフォロ―をしてくれる」

「それじゃ3つ目の魔法を習って危険に備えるっていうのは?」

「こちら側は御伽噺のような穏やかな世界じゃないってことさ。戦場で気を抜いたら殺される。そんな死が付き纏う世界だ。魔法というのは便利だけじゃないってことさ」

「選択肢をきちんと理解したよ。それで聞きたいんだけどシキくんたちは何でそっちの世界にいるの?」

「こつちの世界にいる理由？生まれたときから魔法の存在を知っていたから。それだけかな？それに私は魔法関係者の中じゃ最強だからさ、悩む必要がないんだよね。（というかA組のメンバーは魔法に関して絶対に知ることになるんだよね・・・）」

「シキくん。なんか最後の方に小さな声で不穏なことを言ってたよ。うな気がするんだけど？」

え？今の聞こえたの？いや、それこそ気のせいだよな？と自己完結したところ、それを覆す発言が！

「絶対に知ることになるって聞こえたよ？」

「マジで聞こえたの？」

「うん、聞こえた。それでどういふことか説明してもらえん？」

あれを聞かれたなら説明しないとな……。しかも若干神儀家＋関係者の女性陣のような雰囲気を感じるよ！？

「魔法関係者の中で地球のことを旧世界と読んでいて、新世界って呼ばれる魔法世界ってのがあるんだよね」

「うん、それで？」

「19年くらい前かな？その魔法世界で大きな戦争があつて、その戦争を終わらせた【アラルブラ紅き翼】って英雄たちがいるんだ」

「英雄たちがいて？」

「その英雄たちの中で結婚しているのが4人いて、その二人が実は私とエヴァで、もう一人が木乃香の父親で、さっきの発言のは残りの1人が関係しているんだよね」

「シキくんたちって一体何歳なの？いや、それは後でいいね。続けて」

「その最後の英雄の息子が私たちが2年生の3学期の時くらいに教育実習生として私たちのクラスにやってくるんだ。因みに私は3000歳、キティは600歳、アスナは120歳、アリカは35歳くらい。それと巷で噂の金髪美人も私の『家族』で600歳なんだよね」

「3、3000・・・一体どれだけ年齢詐称しているんだ君たちは・・・。それでその息子って何歳なの？でもそれだけだと絶対に知ることにはならないよね？」

「確かやってくるときに数えて10歳らしいよ？その少年は魔法使いの村で育って魔法学校に通っているから魔法の秘匿自体は知っているけど、秘匿意識がかなり低いから事ある毎に魔法で解決しようとすると思うんだ。因みにその少年は私とアリカの甥に当たって、アスナとは血縁者に当たるかな」

「神儀家は一体どんな家庭なんだい？つまりは普通に魔法を使うから知ってしまうってことかな？」

「そんなところだね。神儀家については来るべき時が来たら自然と知ることになるよ。それで2か3。どっちを選ぶんだい？」

「そんな話を聞かされて2を選べる人がいたら素直に尊敬すると思う。だから3でお願い」

「よーし、そういうことなら任せたまえよ。神儀家には優秀な教師が最低でも2人はいるからな。タカミチクラス相当の実力まで鍛えようではないか」

「タカミチ・・・？高畑先生って魔法使いなの？」

「あいつは体質的に魔法が使えないから魔法関係者だな。ついでにいうとガトウも魔法関係者だ。タカミチの師匠だしな」

「麻帆良には魔法使いが沢山いるんだね・・・今やっと受け入れられそうだよ」

「まっ、これからよろしくっと。みんなに紹介するかついてきなよ」

「うん、よろしくおねがいます。ところでみんなってどこにいるの？」

「ついてくれば分かるさー」

さーて、みんなにアキラが魔法使いになるって説明しなきゃねー。個人的に嫌な予感がびんびんだけど。

アキラを連れてレーベンスシユルト城の『別荘』に入るとみんな揃っていたので説明しました。

ゆうなとちうたん、さよを除いたメンバーの目から光がなくなつた後キテイとアリカに引つ張られながら個室に連れて行かれました。何があつたかは思い出したくない。という事で想像に任せるよ！みんなはこんなことにならないように気をつけるんだよ。お兄さんとの約束だよ!？

新たに神儀家関係者にアキラを加え知識面の修行と戦闘関連のメンバーに修行をつける。

昼の広域指導員と夜の警備の仕事をこなしつつ残りの春休みを過ごし、4月9日。波乱の3学期が待つ、2学年進級である。

S i d e . e n d

第36話（後書き）

ようやくアキラ参入です！

残すところは千鶴の参入と薬味の登場ですかね？

次回は2学年1学期から3学期まで？

途中千鶴参入話が入るのかな？

疑問に答えようのコーナー！

紫「今回は疑問がなかったのでなしだ」

裂「誤字脱字、言い回しなどに変なところがあればご報告ください」

2 - A組名簿 現在状況（前書き）

1 - A時からの変化状況。

2 - A組名簿 現在状況

01番 相坂さよ

・・・神儀家関係者、元？幽霊、不老者、パーティーメンバ

┆【仮契約者】

02番 明石裕奈

・・・神儀家関係者、魔法生徒、不老者、ハーレムメンバー

【仮契約者】、そろそろ夜這いする時期、神儀紫裕零崎蒼識ファンクラブ会員

03番 朝倉和美

・・・一般人、パパラッチ、彼氏持ち？

04番 綾瀬夕映

・・・一般人、哲学者見習い？、ネギへの生贄、バカ四天王、

夢想する少女

05番 和泉亜子

・・・一般人、保健委員

06番 大河内アキラ

・・・神儀家関係者、魔法関係者、不老者、ハーレムメンバ

┆【仮契約者】

07番 柿崎美砂

・・・一般人、チア部、彼氏持ち？

08番 春日美空

・・・魔法生徒、シスター見習い

09番 神儀明日菜^{アスナ}

・・・黄昏の姫御子、ハーレムメンバー【仮契約者】、そろそろ夜這いする時期

10番 神儀アリカ

・・・紫稀の2人目の妻、元王女、ハーレムメンバー【本契約者】、^{神儀紫稀}零崎蒼識ファンクラブ発足者+会長（シリアルNo.0持ち）

11番 エヴァンジェリン・A・K・M・神儀

^{ハイデライト・ウオーカー}・^{ダーク・エヴァンジェル}・^{アラルブラ}真祖の吸血鬼、闇の福音、【紅き翼】、紫稀の1人目の妻、ハーレムメンバー【本契約者】

12番 神儀紫稀

・・・エヴァ・アリカ・忍の夫、マナの師匠、このせつの幼馴染、^{アラルブラ}【紅き翼】、大戦の英雄、生ける伝説、神鳴流史上最強の剣士

13番 神儀茶々丸

・・・ガイノイド、エヴァの2代目従者、ハーレムメンバー【仮契約者】、そろそろ夜這いする時期？

14番 神儀真名

・・・紫稀の弟子、半魔族、ハーレムメンバー【仮契約者】、そろそろ夜這いする時期

15番 釘宮円

・・・一般人、チア部

16番 古菲

・・・一般人、バカ四天王

17番 近衛木乃香

・・・神儀家関係者、膨大な潜在魔力の持ち主、ハーレムメン
ンバー【仮契約者】、そろそろ夜這いする時期

18番 早乙女ハルナ

・・・一般人、腐女子

19番 桜咲刹那

・・・神儀家関係者、烏族とのハーフ、神鳴流剣士、ハーレ
ムメンバー【仮契約者】、そろそろ夜這いする時期

20番 佐々木まき絵

・・・一般人、バカ四天王

21番 椎名桜子

・・・一般人、ラッキー仮面、チア部

22番 超鈴音

・・・神儀家関係者、魔法関係者、火星未来人、紫稀と悪巧
みの下準備中、薬味の子孫

23番 長瀬楓

・・・忍者、バカ四天王

24番 那波千鶴

・・・一般人、A組一のゲフンゲフンの持ち主、ハーレムメ
ンバー【未契約者】

25番 鳴滝風香

・・・一般人、中学生？

26番 鳴滝史伽

・・・一般人、中学生？

27番 葉加瀬聡美

・・・神儀家関係者、魔法関係者、天才科学者、マッドサイ
エンティスト

28番 長谷川千雨

・・・神儀家関係者、魔法関係者、認識阻害類に強い耐性持
ち、ハーレムメンバー【仮契約者】、そろそろ夜這いする時期？

29番 宮崎のどか

・・・一般人、本屋、男性恐怖症、ネギへの生贄

30番 村上夏美

・・・一般人、普通、演劇部

31番 雪広あやか

・・・シヨタコン、一般人？、お嬢様

32番 四葉五月

・・・一般人？料理人

33番 ザジ・レイニーデイ

・・・魔族、基本無口

おまけ

神儀忍（キスシヨット・アセロラオリオン・ハートアンダーブレイド）

・・・ハイデライト・ウォーカー真祖の吸血鬼、紫稀の3人目の妻、ハーレムメンバー

【本契約者】

チャチャゼロ

・・・キリングドール殺戮人形、エヴァの初代従者、最近影が薄い

ガトウ・カグラ・ヴァンデンバーグ

・・・アラルブラ【紅き翼】、ヘビースモーカー、大戦の英雄、タカミ

チの師匠、デスモーカー

タカミチ・T・高畑

・・・アラルブラ【紅き翼】、ガトウの弟子、紫稀に少々鍛えられる、

師匠さえ違えばもつと強くなってた人、デスメガネ

フィリウス・ゼクト

・・・アラルブラ【紅き翼】、図書館島地下で隠居中、度々旅行に出る、

大戦の英雄

アルビレオ・イマ

・・・アラルブラ変態、アラルブラ【紅き翼】、図書館島地下で隠居中、大戦の英雄

ジャック・ラカン

・・・アラルブラ【紅き翼】、魔法世界で隠居中、大戦の英雄、筋肉達磨

クルト・ゲーデル

・・・アラルブラ【紅き翼】、元老院議員、神鳴流剣士

近衛詠春

・ ・ ・ 【アラルツラ紅き翼】、関西呪術協会長、大戦の英雄、神鳴流剣士、木乃香の父

近衛木乃璃

・ ・ ・ 関西呪術協会長補佐、陰陽師、木乃香の母

ナギ・スプリングフィールド

・ ・ ・ 【アラルツラ紅き翼】、大戦の英雄、千の呪文の男（自称）、ア
イネの夫、行方不明

アイネ・スプリングフィールド

・ ・ ・ 元女王、ナギの妻、行方不明

近衛近右衛門

・ ・ ・ 関東魔法協会長、人間ぬらりひょん、木乃香の祖父

瀬流彦

・ ・ ・ 神儀家関係者、魔法先生、比較的まとも、ファースト
ネーム不明

明石夕子

・ ・ ・ 神儀家関係者、魔法先生？、裕奈の母、神儀紫穂零崎蒼識ファ
ンクラブ会員

明石教授

・ ・ ・ 神儀家関係者、魔法先生、裕奈の父、ファーストネー
ム不明

ガンドルフイーニ

・・・魔法先生、正義の魔法使い（笑）

高音・D・グッドマン

・・・魔法生徒、正義の魔法使い（笑）

葛葉刀子

・・・魔法先生、神鳴流剣士、神儀紫稀零崎蒼識ファンクラブ会員

用語解説

バカ四天王・・・アスナがバカじゃないので。成績に関して成長しなかった・・・。

ハーレムメンバー・・・紫稀側ハーレムメンバー 【内は契約の

種類 本契約者、仮契約者、未契約者の3つ

パーティーメンバー・・・ハーレムメンバーにはなれないけど紫稀

パーティー（戦闘など）に当たる者

神儀家関係者・・・紫稀が認めている人物や懇意にしている人物、共犯者に当たる人物の総称 前提条件として魔法関係者であること

神儀紫稀零崎蒼識ファンクラブ・・・アリカがアラルブラ【紅き翼】が活躍したときに

蒼識神儀紫稀と連想して発足したウェスペルタイア王国公認のファンクラブ

2 - A組名簿 現在状況（後書き）

次話より2年進級になるので現在のA組の状況を簡潔に説明。

紫稀ファンクラブについて今まで触れる機会がなかったのでここで紹介。

紫稀に助けられたアリカが【紅き翼】が活躍しだした頃に蒼識を見て直感で蒼識＝紫稀だと理解したという設定。

事実だったなら紫稀を前から知っていた自分が作らねば！とか思い、ウエスペルティア王国公認として作ったという裏話がある。

王国公認なのを知っているファンクラブ員はNo.0～No.50だけらしい？

現状設定は薬味登場前に書こうと思います。

第37話（前書き）

【お気に入り】 800件突破！！
総合評価ももうじき2000なんですね・・・。

なおぼん様×2、杉ちゃん様×3、コクイ様、パンチ様、神夜 晶様
×2

感想ご意見感謝です！

紫稀側ハーレムに昇格した面々とパーティーの二つ名募集中なり。
二つ名はアリカ・木乃香・刹那・ちうたん・アキラ・千鶴・ゆーな・
茶々丸、さよ

斬魂刀を刹那とさよに持たせようと思うのですが、何がいいでしょ
うか？

刹那：斬月・袖白雪・千本桜

さよ：虹霞・肉雫

2学年進級の4月！

そんな37話、どうぞ！！

第37話

Side・紫稀

2002年4月9日火曜日。今日も今日とて頭が長いぬらりひよんの話を聞く始業式。はつきり言ってサボりたい。けれどサボったら新田先生の説教が待っている……。

個人的に新田先生は尊敬している。人として尊敬出来る人って3000年も生きてきたけどそんなにいなかったね、うん。下衆共が多かったし。特に元老院の老害とか元老院の老害とか元老院の老害とか……。

ぬらりひよんの話は右の耳から入って左の耳から出て行く。というより脳に言葉が入っていかないのだ、ぬらりひよんのは。尊敬できない奴の話なんて聞く価値もないとしかいえない。こんな話聞いているよりだったらアスナやマナ、木乃香、刹那、ゆーな、さよ、ちうたん、アキラに修行つけた方が有意義だ。てことで、意識だけで寝る。おやすみー。

ふむ、始業式も終わったらしい。らしいというのは既に教室にいたからである。

意識だけ眠らせていただけで、肉体的には起きているので、起立の号令や校歌斉唱などは自動的に出来る。便利だなこれ。

でも、キティたちに話し掛けられたときは意識がないので自然と無視する形になってしまっただよな……。儘ならない。

担任は変わらずガトウで副担任にタカミチらしい。薬味来た時はどうなるんだ？タカミチが副担任外されて薬味が副担任になるのか？その辺のことは後でぬらりひょん（なぐさ）と話した方がいいな。

さて、今日は授業もないし放課後はクラスでパーティと進級祝いでもやるか、私のポケットマネーで。

そんなわけで放課後。朝倉とパルに進級祝いのことを話したからクラス全体にきちんと伝わったらしい。

40人が余裕で入れる宴会場を貸し切ってみたわけだ。料理なども万全だ！カラオケに王様ゲーム、ビンゴ大会などもやった。勿論商品などは私が準備したわけだ。

結果、大盛り上がりしたので重畳重畳。クラスメイトの私に対する好感度が上がったらしいが、『家族』や関係者以外とは友人以上の存在になるつもりはないから、どうでもいいわけだが。

大盛り上がりした進級祝いパーティーも解散し、それぞれのグループで二次会をやるらしい。私たちも『家族』と関係者を集めて屋

敷でやるんだがな。勿論酒有りだ。だから一般人なんて呼びはしないのだ。

結論、準備していた酒樽5つの中身が全部綺麗になくなっていった。この酒樽は私の特殊性なので樽1つにおよそ100升入るのだ。つまりそれが5倍なので500升。1升＝1.8リットルなので大体900リットルあったのだ。アルコール中毒者も真つ青な量である。主に私とキティとアリカと忍とアスナとゼロとガトウとタカミチと瀬流彦のせいだったりするのだが。私とキティと忍とゼロ以外は肉体的には人間なので二日酔いにやられていた。私も一応肉体的には人間だったはずなのだが、今回のことで自信がなくなってしまった。

二日酔いにやられた面々はレーベンスシユルト城以外の憩いを求めるためのな『別荘』に投げ入れておいた。一応その中にも茶々丸の姉たちがいるので介抱はしてくれるだろう。時間差も72倍速だから1時間で3日。それくらいあれば二日酔いもなんとかなるだろう。それでも無理だったなら時間的にまだまだ余裕があるからさらに2、3時間籠っていれば大丈夫だろうし。

そんな感じで神儀家宅で行われた進級祝い二次会は終わったのだ。
った。

今更思うのだが、1年前の今頃は波乱万丈というか色々と行動しすぎた気がするな。

木乃香に魔法バレ＋魔法的指導、さよの復活＋弟子入り、ちうたんに魔法バレ＋弟子入り、茶々丸の改良。本当に濃かったな……。

今年は3学期まではそうそう騒がしくはならないだろうな。別に騒動を起こす気もないけど。

そういえば、ゴールデンウィーク前に千鶴から誘いを受けてるんだよな。保育園がどうか言ってたけど、受けてみようかな。木乃香や茶々丸辺りは子供好きだろうから一緒に行くとするか。

主に作者の力技的に、キングクリムゾンッ！？

ゴールデンウィーク前の通常の休日、女子中等部の近くにある保育園Now。千鶴の手伝いに来ました。

いやー子供って元気がいいよね！思わず忍野風に問いかけたくなるのをなんとか我慢してんだよね！

「お……ん、……ね。……ら子……放……い……ち……
……ない？」

「や……さ……。を離……。らえ……か」

ん？外から話し声がする。あれは千鶴と誰か知らんが男数人か。さつきから千鶴が断り続けていたようで焦れてきてるな。ああいう輩はすぐに強硬手段に出るからな。

さて、広域指導員の仕事の始まりだな。

Side・end

Side・千鶴

今日は私がいつも手伝っている保育園に誘った神儀君たちがやってきていた。

神儀君たちが子供達の前で折鶴や兜などを作って見せたおかげか、子供達が折り紙に夢中になっていた。お陰で補充分を注文し忘れていたのですぐに折り紙がなくなってしまい、近くの文房具屋まで買いに行くことにした。

したのだが、保育園の敷地から出たときに男の人たちに声を掛けられた。恐らく狙ったわけじゃなくて、通りかかろうとしたときに私が出てきたからだろう。自惚れるつもりはないが、男性の目には私はそれなりに魅力的に映るらしいから。

何度も誘いを断っているうちに1人の男の人に手を掴まれた。無理やり連れて行こうとしているらしい。素直についていこうとは思わないので私はそれに抵抗する。

私の抵抗に気付いた男の人はさらに力を込めて連れて行くところ。その時だった。

「やあーやあーお兄さん、ずいぶん強引だね。何かいいことでもあったのかい？」

軽口を叩きながら神儀君が私を掴んでいた男の人の手を払ったのは。

Side・end

Side・紫稀

予想通り男の一人が強硬手段に出たので、その手を払いながら声を掛ける。

「やあーやあーお兄さん、ずいぶん強引だね。何かいいことでもあったのかい？」

それにしても事あることに忍野風に話し掛けるなんて、末期かな？何の末期か知らないけど。

「んだあてめえ？」

「おやおや、まさか私を知らないのかい？自惚れる気はないが、麻帆良で私を知らない人間はいないと思うのだけどね」

だってあらか様に強硬手段に出た男以外はすり足で後退していつてるんだもの。その目には恐怖が映っているね。

「しらねーな？俺もそれなりに有名なんだよ。知らないか？【暴虐者】って」

暴虐者？なんだよ暴虐者って。厨二じゃねーか。

「悪いが知らないな。それと私は広域指導員なんだ。だから止めさせてもらったただけだ。もう何もしいって言うなら今回の件は見逃してあげるんだが」

「はっ！生意気いってんじゃねーよ！弱そうなくせによ」

別に生意気じゃなくて正論だと思うんだがな？どうでもいいや。

「そうか、別にいいんだけどな。やめないならやめないで」

「どうやら殴りかかってくるらしい。スローモーションにしか見えないけど。」

「くたばれや！？」

んー、前にもこんなことあった気がするな。どうでもいいか。

「鎮圧するだけだし」

「ぐはっ…！」

ああーかなり威力を落としたのに一撃とか。弱いのはそっちじゃねーか。

「さて、後ろにいる諸君らは私が誰か知っているか？」

これで知らなかったら殴りかかってくるんだろっな、きっと。

「ち、鎮圧者……」

おっ、後ろのモブたちは知っていたらしい。よかったよかった。

「知っているなら話が早い。さっきの彼は私の話を受けなかったが、君たちは受けるかね？」

「あ、あいつにはよく言い聞かせるんで、俺たちは帰ります」

「理解が早くて助かるよ。それじゃ気をつけて帰りたまえ」

「は、はい！」

んー本当利口でよかった。掛かってくる連中を鎮圧するのも大変なんだよね、意外と。

「さて、千鶴。怪我とかはしてないか？」

「え、ええ。大丈夫。腕を掴まれた位だから。それと急いで折り紙買ってこないといけないわ」

「それならよかった。折り紙は私が買ってくる。無いとは思いますがまた同じことがあったら大変だからな」

さっきのを見ていた他の不良？生徒がいたから大丈夫だろうけど、念のためだな。

「それならお願いするわね」

「ああ、任された」

さつさと買いに行きますかねー！。

Side・end

Side・千鶴

私の腕を掴んでいた男の人の手を払って後ろから支えるように彼が私に触れた。他の人に同じことをされても拒絶するつもりはないが、彼に触れられているとなんだか心が温かくなるような感じがした。

今まで一度も感じたことの無いこの気持ちの正体は一体なんなのだろうか？

分からない。分からないけれど、嫌ではない。それどころか、むしろ心地いい。

神儀紫稀君。1年前からの私のクラスメイト。彼には不思議な魅力がある。

私は少なからず彼に魅了されているのだろう。

さらにさっきの一件もあって益々魅了されている気がする。

本当に私のこの気持ちは何なのだろうか、不思議でならないわ。

Side・end

Side・紫稀

千鶴と会話をした後、折り紙を10束ほど購入して保育園に戻った。その折り紙も既に6割ほど消費されてしまっている。まあー保育園の手伝いも終わりの時間になっているので別に困りはしないのだが。

千鶴に今日のお礼を言われて木乃香と茶々丸と共に帰路につく。木乃香は今夜屋敷に泊まるらしいから同じ帰路についているわけだが。

保育園の手伝いをしているときの木乃香と茶々丸、千鶴の笑顔は生き生きしていた。私もそれなりに楽しかったのだけれど。

帰宅した私と茶々丸は夕飯の準備に掛かる。キティたちはどうやら魔法球に籠って修行をしているようで、木乃香はそれに混ざるようだ。24倍速なので1日経ったら出てくるように言っておいた。夕飯の時間まで大体1時間だからな。今夜は中華料理だ。

夕飯時に私と木乃香、茶々丸は今日の保育園でのことを話したり、別の話で盛り上がりたりした。

食後、洗物をして翌日のご飯のためにカレーを作り、入浴。この家の浴室はかなり広く造つてある。大人10人くらいが入つてもまだ少し余裕がある湯船があるのだから、どれくらい広いか理解してもらえらるだろう。

入浴後、それほど珍しくもないがアスナとマナたちから『寝室』で一緒に寝ようと誘われた。特段断る理由もないので、誘われたら毎回寝ているが。

だが、今夜は違った。『寝室』に入りベッドに寝転がった瞬間、アスナ、マナ、木乃香、刹那、ゆーなに押し掛かれる。そして色々と描写出来ないことをされる。アツーーーーー！ってやつです。ご想像にお任せします……。

結論。本契約者が5人増えました。そして創造でそれぞれに合う指輪を創る。指輪の意味は当然のようにエンゲージ。性能は魔法発動体と任意での身体強化である。

これをキティやアリカ、忍が知ったら私はどうなるのだろう……
恐怖しか感じない私って一体……。

これまた結論。何もなかった。いや、何もなかったでは少々御幣

があるな。アレな意味で搾られた。アレが何かはご想像に任せます。

ああー。詠春と明石夫婦にどうやって話をつけよう……。一発くらいは殴られてやるか。明石教授は別にいいのだが詠春に殴られるだけは許容し難いものがあるが……。

その後は平和な日々が続き、4月が過ぎた。

S i d e · e n d

第37話（後書き）

千鶴の心理が変。

紫稀、襲われる。

なんていつか自棄になっただけです、作者が。

次回、2学年1学期+夏休み総集編？

果たして千鶴は裏の存在を知ることになるのか！？

疑問に答えようのコーナー！

裂「なおぼん様から『アーツ！（ry）されました。』」

紫「記憶だけを消去しているだけで肉体的には不死性による回復です。」

紫「実際は記憶を消去しきれないわけですが」

裂「杉ちゃん様から『ゆーなの（ry）』」

紫「簡単に言えばラカンの『千の顔を持つ英雄』の銃版だと思ってもらえればいい」

紫「銃の延長である砲の類にも変化させることが可能だ」

紫「コクイ様から『刹那に完成型変体刀（ry）』」

裂「それは考えた。だけれど刹那に持たせれるのが砲と鈍しかないから諦めたんだ」

裂「神夜 晶様から『女の子に（ry）』」

紫「第7話を読んでもらえば分かるようにシャナの成長Verにか変化するしないので」

紫「着る気はない。本来の姿の素が式だが基本着流しだしな」

裂「今回はこの辺で。誤字脱字、言い回しなどに変なところがあればご報告ください」

第38話（前書き）

【総PV】94万【総合評価】2000PT突破!!
総合PV100万が目前ですね。

十六夜様、月神楽様、なおぼん様、神夜 晶様、ブルック様
感想ご意見感謝です！

紫稀側ハーレムに昇格した面々とパーティーの二つ名募集中なり。
二つ名はアリカ・木乃香・刹那・ちうたん・アキラ・千鶴・ゆーな・
茶々丸、さよ

斬魂刀を刹那とさよに持たせようと思うのですが、何がいいでしょうか？

刹那：斬月・袖白雪・千本桜

さよ：虹霞・肉雫？

アッー！の事後処理！
そんな38話、どうぞー！！

第38話

S i d e . 紫 稀

不死なので死ぬことはないはずなのに、死の危険を感じている神儀紫稀です。

若干メタっぽく説明してみたが、本当に死の危険を感じている。

理由？そんなの簡単だろ。アスナたち5人とアツーーー！なことをしてしまったからに決まってるじゃないか。

いや、それだけなら理由にはならないな。決定的な理由になるのはその5人の中にゆーながいたことだな、うん。

「という事で明石夫婦の目の前で正座しているわけですが」

「何が「という事」なのかにゃー？」

「あれ？声に出てた？」

「ばっちり出てたけど？」

なん・・・だと？

なあーんてふざけてみるんだけど。はっきり言ってふざけてないとやってられない。

ゆーなパパの視線に物量的な概念があったなら、間違いなく私は死んでいると思う。不死だろうと関係なしに。父は偉大ってやつな

のかな？

「それで、シキさん。事情を説明してほしいのですが」

「えーと。ゆうなに襲われて、アッー！ってなったから、法律的にゆうなが16になったら結婚させてもらおうかなつと申告をします？」

マジでそのつもりなんだぜ？不可抗力でなつちまっただけど責任を取るの絶対だと思うんだよね！

「なんで、そんな重大なことをさらつと言えるんですかー！！」

「だって、事実なんだからしょうがないじゃないか！それに一発くらは殴られてもしょうがないって覚悟してきてるんだから、了承してくれたっていいじゃないか！！」

「娘の結婚相手が挨拶にきたら一発殴るのは父親として当たり前じゃないですか！？夕子も何か言ってくれ！？」

「私は別に。シキさんなら逆によるこんでなんだけど？」

夕子さんはやっぱりそっちの反応なのねー！！？

「お、お前は一体どういうつもりなんだー！？私に味方はいないのかー！！？」

「じめんよ、ゆうなパパ。フォロー出来ないわ。」

「どういうつもりも、さっき言ったとおりだけど？それにシキさん

以上に結婚相手としては最高の人いないじゃない」

「そうだけど。そうだけどさー！16歳で嫁に出すなんて、寂しいじゃないか！とりあえずシキさん。落ち着く為に一発殴らせてください」

「よおーし。バッチこいだ。ただし一発しか殴らせないからな？2発目以降は反撃するからな、自動で？」

「分かってますよ、それくらい。覚悟してくださいよー！」

「さあーこい。身体強化の魔法使ってもいいからかかってあぼぶげらー！」

「きゃっ!?!」

話してる途中で殴られた。ゆうなが若干声を上げたのは気のせいだと思っ。

「なんとか冷静になれそうです」

「ああー人の話は最後まで聞けよ。危うく三途の川が見えるところだった・・・」

三途の川見えかけるってやばくね？父は偉大って言葉本当だろ。

「それで、了承してくれるの？」

「分かってますよ。どうせ私が言ったところで覆りそうにありませんし・・・」

「ふふふ、それじゃ今夜はお祝いね」

「なら今夜は私とおかーさんと腕を揮っちゃおうかなー」

「楽しみにしてます」

「あんな小さかったゆーながあと2年したら嫁にいくなんて・・・」

ゆーなパパが黄昏てるけど問題ないよね？正直言って悪いとは思ってるけどさ！私だけのせいじゃないと思うんだ！

そんなやりとりがあったのがゴールデンウィーク初日。現在5月2日。京都Now。

私は木乃香と刹那を連れて関西呪術協会というか近衛家に来ております。

対面には詠春と木乃璃嬢。私の両隣には右に木乃香と左に刹那がいます。全員正座です。

ここにいる理由もこれまた単純明快。ゆーなの時と同じですよ。

「説明するのが面倒だから単刀直入に言う。木乃香と刹那を嫁にもらうから」

「は？紫稀殿、一体なんの冗談です、それは？」

聞き返しながら刀を抜こうとしてんじゃねーよ！

「冗談じゃないけど？理由としては木乃香たちに襲われてアッー！
！ってなったからだけど」

「ややわー、そんなはつきり言うなんて」

「そ、そうですよ！こっちからしたこととはいえ、は、恥ずかしい・
」

木乃香と刹那が真っ赤です。

「・・・斬る!？」

私が言い終えた瞬間に木乃香と刹那が油を注いでせいで抜いてき
やがった。だが、それを無防備に受けるつもりは無い。てことで。

「真剣白羽取り。・・・つと見せかけて無刀取り!」

無刀取りで奪った刀で詠春を峰打ちで沈める。

ゆるなパパには一発殴られて見たけど、詠春が相手だと殴られて
やる気になれない。何故だろう？

「で、木乃璃嬢。返答は是如何に？」

さあーどうでる？私の予想的には

「別にええですやる。木乃香たちがそのつもりなんやから」

ほらねー！やっぱりこうなるんだよ。というか昔から私とくつつけようとしてたの知ってるんですから！

「それじゃ、今夜は宴会ちゅーことでええですやる」

「あまり騒ぎを大きくしたくないな……。特に木乃香が魔法の存在を知っていることは最重要機密だからさ」

「それもそうですな。そんなら二人が法的に16になったときに式を挙げてその場で発表しまひよか。その方がすんなり事も進みそ
うやし」

「そうだな。今夜は私が来たことを建前上の趣旨として盛り上げるくらいが丁度いいだろう」

「それじゃ、そのようにとりはかりますわ」

「せつちゃん。ウチら来た意味あつたんやるか？」

「このちゃん。それを言ってしまったては……」

この後、起きた詠春に再び殴りかかられるも適当に放り投げたおいた。

その時に木乃香が「結婚認めてくれないお父様なんて嫌いや」とか刹那が「認めてくれないなら無いこと無いこと言いふらします」とか言つてトドメを刺してみたいだけだ。

こんな感じで何とか難を逃れることに成功した私。逃れたと思うんだ。だけど、なんだか最近怪しい視線を感じるんだ、2つほど。ありえないとは思いますが、用心はしておくべきだろうな。あんなことがあったわけだし……。でも何故か裏をかがれて用心の意味がない気がしないでもない……。どうなるんだろう、私。

ゴールデンウィークに問題を解決し、新たなる問題が発生しそうな気配を感じて用心しながら日々を過ごして5月27日月曜日。2学年最初の間考査。1学年の範囲も若干ながら含まれているため中々に範囲が広がった。

結果は相変わらず揮わず、学年16位。木乃香とさよは60位台、残りは150位から250位台に入っていた。相変わらず5人が全教科満点だったわけだけ。

さらに時間は進み、6月21日金曜日から23日曜日までの3日間に亘って行われる生徒として2度目の麻帆良祭。

今年は無難に喫茶店。無難といってもコスプレ喫茶だったりするのだが。

メニューは一般的な喫茶店にあるようなものだけ。衣装は自作することに。何故か私の衣装は燕尾服を指定されたのだが……。キティは普段着のゴスロリだったりするが。木乃香と刹那、茶々丸、さよは和風で攻めてきたが。他は洋風だったが。

厨房担当は去年同様私たちだったがな。忙しい時間帯以外はホール担当なのだが……。うう、ウェイターなんてやりたかねーよ！出し物としてはかなりの高評価をもらえ、麻帆中3位らしい。売り上げもかなりのものだったらしい。

次に「まほら武道会」。今回もやはり齒応えの無い参加者のみ。唯一の救いは今回も古菲クイフェイが参加してくれたことだろう。「ウルティマホラ」からもかなりの修練を積んだようでかなり実力が上がった。

だが、やはり明確に気を理解と言つか意識出来てない為か「ウルティマホラ」時の刹那の状態まではまだ到達出来ていない様だ。やはり、気に関して助言したりするべきだろうか……。

そして最終日の学園全体イベント、鬼ごっこ。鬼は学園側から選定され、参加者である生徒たちは逃げるだけ。それを4時間でやるというなんともふざけているイベントだ。因みにトトカルチョで鬼側で誰が一番捕まえられるかを賭けているらしい。因みに私は鬼側である。一応広域指導員の肩書き持つてるからね。

ルールは先程言ったが、選定された鬼によって開始時間が異なる。デスマーカー私とガトウ、デスマガネタカミチの3人はラスト1時間のときにスタートする。

捕まえるといつても鬼は特殊な籠手をつけてタッチするだけである。この籠手は麻帆良大学工学部の技術が無駄に使って製作されたもので、どの鬼がタッチしたのか分かるようになってる。

この鬼ごっこに私は参戦するが、神儀家+関係者からはガトウとタカミチだけである。忍も鬼として参加してほしいと頼まれたらしいが断つたらしい。ついでにいうと他の面子は逃げる側にも参加してない。

結果、スタート時にいた参加者は10万人。終了時に逃げおおせたのはたったの7000人ほどだった。

捕まえた人数はタカミチが約6000人、ガトウが約9000人。魔法先生たちは大体2000人から3000人、一般教師たちは大体が400人から800人である。鬼役になつた魔法先生と一般教師たちはそれぞれが20人ずつ。単純に計算しても84000から86000人にしかならない。なら残りの14000から16000を誰が捕まえたかと言うと・・・私しかいないだろうな！。ついつい熱くなって、やりすぎた感が半端じゃないぜ・・・。とりあえず、神儀家+関係者は私に全賭けしていたらしく、食券がウハウハだったらしい。個人賞としての食券もかなりの量だった。

結論。去年同様打ち上げが豪華絢爛だったとき。

麻帆良祭も終わり7月中旬。2学年初の期末考査。やはり麻帆良祭の後だったため、燃え尽きていたクラスメイトが若干名いて、学年19位。

神儀家+関係者の成績は特段変化せず、当然のように全教科満点が5人いたわけだ。

期末考査も終了し、1学期終業式。翌日より夏休みである。

波乱の夏休みが始まろうとしていた。・・・多分。

S i d e ・ e n d

第38話（後書き）

とりあえず婚約ってことで！

2学年の夏休み突入まで進めてみました。
若干加筆。

次回以降どうしよう・・・。

疑問に答えようのコーナー！

紫「疑問らしい疑問がなかったから今回はお休みだ」

裂「誤字脱字、言い回しなどに変なところがあればご報告ください」

第39話（前書き）

【総ユニーク】9万1千【文字数】20万突破！！
最終到着点が分かりません。
とりあえず魔法世界の崩壊は阻止するけど。

月神楽様、グラムサイト2様、なおぼん様、神夜 晶様、Dai様
感想ご意見感謝です！

紫稀側ハーレムに昇格した面々とパーティーの二つ名募集中なり。
二つ名はアリカ・木乃香・刹那・ちうたん・アキラ・千鶴・ゆーな・
茶々丸、さよ

斬魂刀を刹那とさよに持たせようと思うのですが、何がいいでしょうか？

刹那：斬月・袖白雪・千本桜

さよ：虹霞・肉雫？

まだまだ平和な夏休み！
そんな39話、どうぞ！！

第39話

Side・紫稀

2002年7月某日、夏休み開始。波乱が訪れる。……………
多分な？

夏休み初日に『別荘』内で課題を全て終わらせた私たち。自由研究や読書感想文といったものは去年の内に準備していた為比較的楽だったな。

7月29日から8月4日までの1週間。昼の広域指導員と夜の警備の休みをもらい、神儀家+関係者でハワイへ。国内でも良かったが、3年の修学旅行で京都・奈良に行くのは分かりきっていた為、国外に出ることに。費用は私のポケットマネーから出すのだからどこでもよかつただけだが。今度プライベートビーチでも購入するかな……………。

男が私とガトウ、タカミチ、ゆうなパパ（固定化）、瀬流彦の5人しかいないってどうなんだろう？

女性陣はキティ、アリカ、アスナ、忍、マナ、茶々丸、木乃香、刹那、木乃璃嬢、ゆうな、夕子、ちうたん、アキラ、さよの14人だ。

明石夫婦と木乃璃嬢がいるのに詠春はどうしたかって？もちろん

置いてきたさ。一応あいつの肩書きは長だからな。木乃璃嬢の分身を一緒においては来ている。術者としての木乃璃嬢はかなり優秀だからな。1週間くらいは余裕で分身を保たせることが出来るらしい。相手のいないガトウとタカミチ、瀬流彦が哀れなのは仕方がないことだと、隅に置いといた。

そういえば忘れていたのだが、アスナたちを不老者にしてしまったので、成長薬を作ろうと思ったんだ。『創る』じゃなくて『作る』な？それで成長薬を作ったんだけど、意味が無かった。効果はきちんと出たんだが、成長しないわけじゃなかったんだ……。不老と聞いて先入観があったのは認めるが、まさか普通に成長出来るとは……。

どうやら老いることがないだけで、最盛期の肉体までは成長するらしい。それなら何故キティが成長しないかと言われると、真祖化の術式に成長しなくなるってあっただけだった。

結果、何が言いたいかというと、私と本契約バクテイオー・仮契約しても最盛期の肉体までは成長する。つまりは、20歳の肉体が最盛期ならそこまで成長するんだってさ。それ以上成長するには成長薬とか私の能力を使う必要があるわけだけど。

私の努力は無駄だったってことだな。因みにキティは145cmくらいまで成長してるよ。スリーサイズもそれに伴って成長してるし。

閑話休題それはさておき

若干思考がトリップしていたが、眼福です！美少女や美女の水着姿を見てそう思わない男がいたらそいつは男じゃないってことで。色とりどりのビキニやワンピースタイプの水着です。

茶々丸と刹那、ちうたん、アキラ、さよは恥ずかしがっています。が、その他（木乃璃嬢と夕子以外）は逆に見せ付けたりくっ付いて

きます。ああー周りから嫉妬の視線が……。特に瀬流彦の視線が一番強いんですが。刀子との仲でも仲介してやるべきか？何気に瀬流彦は刀子のこと気になってるっぽいし、刀子のほうも離婚したらしいし……。一般人とはあまり付き合えないだろうから関係者同士のほうがいいわけだし。瀬流彦は外見は中々だし、中身もかなり良質物件だからいいと思うんだよな。

再び閑話休題。

昼間のことを思い出して現実逃避してたんですよ。何で現実逃避してたかって？それは目の前のがね……。

「零崎蒼識！貴様が大战の英雄であろうと、元賞金首！正義の為に貴様をここで倒してくれる！！」

ほら、正義の魔法使い（笑）の妄信者たちです。数にして大体200人くらい？よくそんなに集まったなって思うよ。でも私の敵じゃないんだけどね。

「それで？」

「なにっ？」

聞き返すよな。質問してんのはこっちなんだがらさ。

「だから、私を倒して何かあるのか？既に賞金は完全失効してるから賞金を貰えるわけじゃないのに、お前達のメリットは何だ？」

「そんなもの、元賞金首という事実だけで貴様を討つ理由は十分だ！やれ！！」

そう言って奴さんたちは詠唱を始める。別に詠唱中に攻撃してもいいんだけどね。無粋だから詠唱が完了するまで待つてるだけだし。

魔法の射手・連弾・光(闇)(水)

(氷)(火)(風)の69矢!

フラグランティア・ルビカンス

紅き焰!

ディオス・テュコス

雷の斧!

ニオイス・テンベスターズ・オブスクランズ

闇の吹雪!

ヨロイス・テンベスターズ・フルグリエンス

雷の暴風!

ウラニア・フロゴシス

燃える天空!!

ホ・モノオトメ・ハイドウ

冥府の石柱!!

インケンディウム・ゲヘナエ

奈落の業火!!

キリブル・アストラベ

千の雷!!

うわぁー、一斉掃射か。けど私にとっては意味が無い。あまりアレは使いたくないけど、今回は面倒だから使うか。

放たれた魔法全ては私を捉える。そして次の瞬間、悲鳴があがる。

ぎゃああああああ

勿論私以外から。

「こんなもの不慮の事故ですから。なんてな」

『不慮の事故』。自分に与えられるダメージを怪我、病気、ストレス関係なく全て擦り付ける。『ベクトル変換』で反射しても良かったんだけどね。

「さて、これで終わりかな？生きてる人間はいないな。『それじゃ
『また』とか」

そう言つて『オルフイクション大嘘憑き』で死体をなかつたことにし、戦闘があつたこともなかつたことにして、その場を去る。

戦闘という名の虐殺終了後、泊まっているホテルに戻つてきたのが22時少し前。部屋は金にものを言わせて最上階のスイートルーム。大勢でも泊まれるようになってる。

部屋割り？明石夫婦、ガトウとタカミチと瀬流彦、木乃璃嬢とさよ。他はつて？聞くなよ、野暮だな。既に私が11人に襲われてるに決まつてるじゃねーか。いつのまに茶々丸とちうたんとアキラもだつて？それも聞くなよ……。気付いたら襲われてたんだよ……。ちうたんとアキラの保護者は一般人だから説明にも行きづらいんだよ……。どうしてこうなった？

一度やったのならしようがないと思つて、それ以降は開き直つて私もノリノリだけどさ……。一度に11人の相手は大変なんだ。後が怖いから回数 of 優劣をつけるわけにもいかないから影分身使つてるけど。影分身を消すときすごい疲労度が襲ってくるけどな！それとなんか絶倫っぽいんだ、私。

とりあえず、ごちそうさまでした？

1週間のハワイ旅行後、麻帆良に戻る。ハワイ旅行のことをどこで嗅ぎつけたのか、和美とパルに問い詰められる。説明や感想を言うのが面倒だから話題転換でクラス全員を温泉に連れて行くことに計画は私といいんちよで決定。日にちは8月23、24、25の二泊三日。参加者はクラス全員と一応保護者としてガトウとタカミチも参加。

23日の朝。雪広家所有の大型バスで箱根の温泉旅館まで。流石に朝早くの集合だったため道中は静かだった。

そして昼頃に予約していた旅館に到着。旅館の周りは自然が沢山あり、穏やかだった。人数も人数だったため、今回は旅館を貸し切りらせてもらった。この費用は私持ちだ。いいんちよにはバスの手配を頼んだわけだしな。

1日目はみんなゆっくり温泉に浸かったり、近くを散策していた。夜に少しばかり騒がしかったが、他に客はいないわけだから多少は多めに見ることに。旅館の従業員さんたちの迷惑にさえならなければ

ばいいわけだし。

2日目。昼間は近くの温泉街へ。神儀家+関係者に集られるが、財布的には何の問題も無かった。他の連中にも集られそうになったが、それだけは阻止した。神儀家+関係者は『家族』に分類されるから集られても構わないだけだしな。

そして夜。私とゆーな、桜子、和美、パル主催で肝試し。お化け役はさよと美空、鳴滝姉妹、楓、ザジに任せることに。元（現？）幽霊と魔族とか、パネエーツス！

結果、神儀家+関係者と古菲^{クイフエイ}、いいんちよ、五月以外はほぼ気絶かその一歩手前。ご愁傷様です……。ザジが友達とか言うのを召還してたな。やりすぎだろ……。

3日目。昼食まで自由行動。昼食を取ったら、帰りも雪広家のバスで麻帆良へ。麻帆良に到着したのは21時だった。道中かなり騒がしかったが……。

「ついでに泊三日の2・A温泉旅行は終わったのだった。

その後は夏休み終了まであと4日なのに課題が終わっていない連中の手伝いに、図書館島へ。適度に写させたり、しながら一人で地下へ。

目的地に着いたときドラゴンが行く手を遮ったが、人身支配の言葉の重みで跪かせて難なく進入。

中にはアルビレオヘンタイとゼクトがいたとさ。

「よーヘンタイ。ゼクトは久しぶりだな。こんなところで隠居か？」

「おや、シキではないですか。門番はどうしたんです？」

「久しぶりじゃ。ずっとわしらがここにいるのを知っておって今まで来なかったじゃろ」

だって、ゼクトにならともかくヘンタイに会いに来たくないし。

「門番ならどうぞどうぞって通してくれたぞ。地下に来る機会がなかったし」

「それはおかしいですね。あの子は招待状がなければ私とゼクト以外を通さないとですが・・・」

「まあー実際は言葉だけで跪かせて目の前を通って来たんだがな」

「やっぱり、おぬしはバグじゃな・・・」

それくらい自覚してる。と言うかバグを超えたバグだし。でも最近、それでも表せないようになって来た気がするんだよ・・・。

「ヘンタイ。どうせ来年の麻帆良祭では目立つ行動するんだろ？」

「おやおや、シキは何でも知ってるんですね」

「何でも知らない。知っていることだけだ。まあー知らないことはあまり無いがな、能力的に」

委員長の中の委員長をリスペクトしてみたぜ！

「何の話じゃ？」

「ゼクトは知らなかったのか。来年の2月頃、麻帆良にナギの息子が修行で教師として来る」

「なるほど。ナギの息子が教師とわのう。アイネ姫のおかげかのう？」

「そんなところだろ。頭の中までナギ譲りだったら今頃、魔法学校中退してそつだし」

「それもそつじゃな。で、アルは何かするのか？」

「ええ。ナギとの約束でしてね。それにしても二人とも何気に酷い言い様ですね」

「どうせ、アーティファクト使って遺言みたいなものだろ？あいつが死ぬわけないが。それと事実だからしょうがないだろ？」

「まあーそんなところですね。確かに事実ですがね」

んー大分話し込んだようだな。

「時間も時間だからこの辺で帰るとするか。アルビレオ招待状つてやつよこせ。次からは門番にそれ見せて入ってきてやるからよ」

「はい、これです。それじゃまた」

「またのう。今度はエヴァンジェリンとアリカ姫、アスナ姫も連れて来てほしいのう」

「了解つと。ついでに詠春の娘の木乃香とその護衛も連れてくるわじゃあな」

そう言っつて私は課題が終わってないであろう連中のところに戻る。

結論。やつぱりまだ終わってなかった。まあーあと2、3日あれば自力で終わるくらいまでは減ってたから問題ないだろう。そう思っつて私の持ち物を回収して帰宅したのだった。

帰宅後、ヘンタイとゼクトとお茶会のことをキティたちに話した。みんなゼクトには会いたいと言っていた。ヘンタイはどうでもいいらしい。

そんな感じに遊びと仕事をしつつ9月1日日曜日。特に波乱でもなかつた平穏な夏休みが終わり、翌日から騒がしい2学年2学期が始まる。

S i d e · e n d

第39話（後書き）

1年後の夏休みに比べれば平穏な夏休み！
そろそろ設定を書かないと。

次回で原作開始の3学期まで行くかな？

その後どうなるかは・・・作者にも分からない！！

疑問に答えようのコーナー！

紫「今回も疑問らしい疑問がなかったからお休みだ」

裂「誤字脱字、言い回しなどに変なところがあればご報告ください」

第40話（前書き）

【総PV】100万【文章評価】200PT突破！！
100万なんて何かやるべきかな？

神夜 晶様、なおぼん様、杉子様
感想ご意見感謝です！

紫稀側ハーレムに昇格した面々とパーティーの二つ名募集中なり。
二つ名はアリカ・木乃香・刹那・ちうたん・アキラ・千鶴・ゆーな・
茶々丸、さよ

斬魂刀を刹那とさよに持たせようと思うのですが、何がいいでしょうか？

刹那：斬月・袖白雪・千本桜

さよ：虹霞・肉雫？

多忙の2学期と冬休み！
そんな40話どうぞ！！

第40話

Side・紫稀

9月2日月曜日、新学期開始。今年も今年とて体育祭実行委員に就任。と言うより何故か実行委員長にさせられた。アリカと超、茶々丸、ちうたんは副委員長と委員長・副委員長補佐らしい。去年働きすぎたかな……。

そしてやはり今回も「ウルティマホラ」に参加することに。前回の王者だしね……。しょうがないのかな……。

拳句には広域指導員の仕事も入ってます……。私が死んだらきっと過労死だと思う。不死だから死なんけど……。

10月17日月曜日体育の日、麻帆良学園体育祭当日。準備期間中が上がってきた問題なんて非じゃないほどの問題が上がってくる。それを委員たちでも処理できるものは処理させて、普通の委員では手が出せないようなものを難易度の低い順からちうたん、茶々丸、アリカ、超、私で処理していく。一番難易度の高い問題が私と超に回ってくるってことだね……。

「ウルティマホラ」の予選会の時間になったが、私と古菲クーフェイは前回優勝者と準優勝者のため予選には参加しなくていいことに。今回、神儀家+関係者から参戦するのはアスナと刹那だけらしい。あと楓も出るらしい。前回、マナ、ガトウ、タカミチが参戦した理由は修行の成果を私に確認して貰いたかったかららしい。生憎、ガトウとタカミチのは直接試合を見てやれなかったが。茶々丸の場合は超が戦闘データを取りたかったのと戦闘経験を積ませる為だったらしい。分かりやすいね。

広域指導員の仕事と実行委員長の仕事をこなしていると私の携帯に連絡が入る。どうやら予選会が終わったらしい。30分後くらいに本選開始とのことだ。会場まではそこまで時間が掛からないため広域指導員の見回りをしながら向かう。途中、ストリートファイトをし始める中武研や空手部などを適度に鎮圧する。恐らく「ウルテイマホラ」の予選落ちした連中だろう。

そして会場に着いたときには開始まで5分を切っていた。「ウルテイマホラ」のルールは前回同様、殺傷性能のない武器のみで、エアガンも実弾でなければ使用可。試合の所要時間は10分だ。

私と楓はAブロック、アスナと刹那はBブロック、Dブロックに古菲である。振り分けがなんとも都合主義である。

1回戦第1試合の時、私の登場時に「ウルテイマホラ前回王者、麻帆良女子中等部2 - A所属の神儀紫稀選手の登場です！その実態は特別広域指導員も兼任していて麻帆良の喧嘩っ早い男子生徒たちからは「鎮圧者」と恐れられ、全学生からは「麻帆良の最終兵器」と呼び声高く、麻帆良の男性達から「麻帆良のハーレム男」と嫉妬の視線を浴びています。私の情報源によりますと、クラスメイトの3分の1を侍らせているともっぱらの噂です！！」なんて和美が紹介してくれたんだよね。そのせいで嫉妬の視線がさらに激しくなった上に一部を除いて蔑みの視線が……。めがっさ居心地悪い……。和美は後でOSHIOKIかな？

とりあえず、私たちは1回戦2回戦と身内同士で戦うこともなく3回戦に進出。3回戦では私と楓、アスナと刹那がぶつかった。古菲は余裕綽々で準決勝に駒を進めていた。

とりあえず試合模様見せたほうがいい？電波的にはあまり描写が上手くないからやりたくないらしいけど。

メタ発言したけど、見せたほうがいいね。困るのは電波だし。

Side・end

Side・other

紫稀と楓の3回戦第1試合は出だしから実力差を補う為に楓が分身を使い攻めていく。

「んー、数が多いな。流石忍者」

紫稀は向かってくる楓の分身を、喋りながら手に持っている【木刀無銘】で払っていく。

「よく言っでいける。それほど多いとは思って無いでいけるっ」

それに言葉を返しながらも、楓は分身を出し続けて攻撃の手を一切休めない。忍者の部分はスルーして。

「このままでは勝負がつかないでいけるな」

「そうかもな」

今楓が出し続けている分身の密度自体はそこまで高くないので疲労は感じない。

その分身を払っていく紫稀もただ向かってくるのを払っているだけなため、息一つ乱れていない。

それを3分ほど繰り返し、焦れてきた楓が分身を盾に攻めていく。盾にしていた分身を紫稀が払い、その影から本体である楓が出てきたのに紫稀が驚いた表情をする。それを隙と見た楓が高密度の分身を3つ出し、技を出す。

「その隙もらったでござる！楓忍法！！四つ身分身朧十字！！！」

楓は決まると思った。が、それは脆くも崩れる。

「残念。それは自然に出来たと思わせた不自然な隙だよ」

その言葉と共に紫稀は持っている【木刀無銘】に気を纏わせ回転するように一閃。その一閃で紫稀の周囲で技を出そうとしていた本体同等の密度を持った楓の分身全てが消え去る。

そして直後、紫稀は【木刀無銘】の峰で楓に一太刀。

「安心しろ。峰打ちだ」

「木刀に、峰も刃も・・・ないで・・・ござ・・・る・・・」

紫稀のジョークに律儀に答えながら楓の意識は落ちた。そして紫稀は準決勝に駒を進めたのだった。

Side・end

Side・紫稀

んー別に楓の忍法受けても無傷で立てたけどあえて打ち破ってみ
たんだよな。次はアスナと刹那の試合か。恐らくだが、アスナが勝
つだろうなー。

神鳴流剣士としては刹那は強いが、年季が違う。アスナは10年
ほど私たちと一緒に世界を回った。それに、刹那は派手な奥義も
使えないからな。純粹な剣の腕の勝負だもんなー。どっちみち勝っ
たとしても次は私とだしな。

え？ここも描写しなきゃだめ？試合展開考える電波の身にもなっ
てくれよ。大変なんだからさ。はあー。これも含めてあと3試合描
写しなきゃならないんだな……。頑張れよ、電波。

以上メタ発言だ。

Side・end

Side・other

3回戦第2試合神儀アスナ対桜咲刹那。両者の手には木刀が握ら
れている。アスナのは通常より少し長く、刹那のは夕風と同じ長さ
である。

「刹那、神鳴流の技は使うわけにはいかないだろうけど手加減なん
てしようと思わないでね」

「分かってます。アスナ相手に手加減なんてしてたらすぐ負けてし
まいますからね」

そう言い合いながらアスナは中段に、刹那は下段に構える。

「3回戦第2試合、開始！」

開始の合図と共に二人は瞬動で接近しながら一合二合と打ち合いを重ねていく。二人は同程度まで身体能力と気や魔力を抑えている。瞬動の速度も学園結界の認識障害が優秀だとしても万が一の為に一般人が不審に思わない程度まで抑えている。

それを繰り返すこと約4分。気付くと二人は最初の立ち位置に戻って立ち止まっていた。

「やっぱり、技を出せないと千日手っばいね」

「そうですね。ですが、体力的に私のほうが持ちそうにないかもですが……」

刹那の言うとおり、アスナは若干呼吸が乱れているが、刹那の方は呼吸の乱れだけでなくそれなりに汗が流れている。

このまま続ければ確実にアスナが勝つだろう。だとしても刹那は引かない。引けないのではなく引かないのである。例え引いたとしても刹那にとっては何かを失うわけではないのだ。引かない理由は簡単明瞭。純粋にこの試合が楽しいからである。

「この試合は楽しいですね」

「そうね、私も楽しいわ。刹那とはいつも実戦形式で手合わせしてるって言うのに……不思議ね」

「やっぱり試合独特の緊張感というものなのでしょうか」

「そうかもしれないわね。話してるのも勿体無いし、さっきの続きを始めましょう」

「そうですね。では！」

アスナと刹那はいくらかの言葉を交わして再び打ち合いに戻る。それから3分が経った頃だろうか。刹那の速度が見て分かるほどに落ちていた。アスナのほうも落ちてはいるが、それでも刹那よりはまだ速い。

そして試合開始から9分になったとき決着がついた。

刹那に疲れによる隙が出来て、その隙をアスナは見逃さず、木刀で一閃。その一閃で刹那の緊張の糸が切れたのか、刹那は意識を手放したのだった。

3回戦第2試合はアスナが勝利したのだった。

Side・end

Side・紫稀

さて、アスナと刹那の試合は中々に楽しかったな。その後の一般人同士の3回戦第3試合が盛り上がりがないほどに。第4試合の時は古菲の登場で盛り上がったが。CとDブロック側の決勝戦進出者は古菲で決定だな。

それじゃ、準決勝第1試合。つまり私とアスナの試合と行きませうかね。

S i d e . e n d

S i d e . o t h e r

準決勝第1試合。神儀紫稀と神儀アスナの『家族』対決。両者の武器は木刀。この試合は観客から見ても明らかに紫稀が有利だった。

今までの試合で全く消耗していない紫稀と先ほどの刹那戦でかなり消耗したアスナ。その有利は絶対で覆るものではなかった。

試合開始直後、アスナは残っている体力を鑑みて先手必勝の如く、連打で紫稀に迫る。だが、その攻撃は全て【木刀無銘】で捌かれる。

受け止められるのではなく捌かれる。

消耗しているアスナにとってそれは辛いものであった。

両者の身体能力などが同等であったとするなら、アスナが6の力で攻撃したのを、紫稀は1か2程度の力で避けたり受け流しているのだ。その為アスナの消耗具合は半端じゃないのである。

結果、アスナの攻撃は3分ほどで続かなくなった。紫稀はその隙を衝いてアスナを気絶させる。

そして決勝戦に駒を進めたのだった。

S i d e ・ e n d

S i d e ・ 紫 稀

アスナには悪いけど、あまり打ち合いに付き合うつもりなかったんだよな。

それにしてもやっぱり反対側は古菲が上がってくるわけか。やっぱり、一般人最強だな。もうちょいで去年の「ウルティマホラ」時の刹那の身体能力に追いつけるかな？

まあー去年の「ウルティマホラ」と今年の「まほら武道会」の時と同様に去年の「ウルティマホラ」時の刹那と同等くらいまで身体能力抑えるかな。

そんじゃーまあー。楽しんでできますか。

S i d e ・ e n d

S i d e ・ o t h e r

「ウルティマホラ」決勝戦。実況をしている朝倉が二人の登場時に再び紹介していた。古菲の登場で観客達は色めきたち、紫稀の登場で嫉妬の声や声援で盛り上がる。

「それではウルティマホラ決勝戦・・・試合開始！」

朝倉の試合開始の合図と共に古菲が八極拳の活歩で紫稀に迫り、刺突・足払い・頂肘・掌底で攻める。だが、紫稀はそのことごとくを素手で全て防いでいく。そう、素手である。どちらの手にも【木刀無銘】は握られていない。

紫稀が素手で防ぎ続け、古菲の連打が途切れたほんの一瞬を狙い、紫稀は腹部へ蹴りを放つ。その蹴りに隙を衝かれて反応が遅れた古菲は辛うじて両腕で防いだが、それなりのダメージを腕に受けた。

そのダメージで古菲が体勢を崩したのを機に、足技主体で今度は紫稀が攻め立てる。

紫稀の今回の戦闘スタイルはサバット。外靴での戦闘を前提とした現実的な格闘技である。さらにかなり身体能力を抑えているとはいえ、去年の「ウルティマホラ」時の刹那と同程度なのである。いくら古菲が無意識の内に気を軽く使っているとはいえ、認識できていない為厳しいものがある。

開始直後の攻勢が嘘のように引つ込み、防戦一方になる古菲。それも時間が経つにつれ紫稀の攻撃を捌ききれなくなり、だんだんと蹴りが入っていく。

そして試合開始から5分が経ったときには古菲は既に気力で立っているようなものだった。それを見た紫稀は古菲の首元に手刀を入れて意識を失わせた。

結果、紫稀は2年連続で「ウルティマホラ」チャンピオンになったのだった。

S i d e ・ e n d

S i d e ・ 紫 稀

今回はサバットでやってみたけど、やりすぎた感が半端じゃないです……。後遺症になるほどの怪我を負わせてないのが唯一の救いかな？

「ウルティマホラ」終了後は、表彰式に出て、すぐに実行委員本部へ戻った。大した問題は起こっていなかったようで、簡単な書類仕事で溜まっていただけだった。その書類仕事もすぐに済ませたので、広域指導員としての見回りもしながら残りの体育祭を過ごしたのだった。今年も大きな問題はそれほど起こらず、問題も処理しきり無事に体育祭は終わりを迎えたのだった。

体育祭終了の2週間後。例によって2学期中間考査。今回も成績下位の運動部組は燃え尽きていた。結果、学年20位。

アスナと刹那も「ウルティマホラ」で若干燃え尽きた感があったが、成績自体はそれほど下がっていなかった。定番となりつつある全教科満点は今回も5人だったとき。

イベントの無い11月。平穩にいられるのは今年だけだった為、神儀家+関係者は穩やかに過ごしていた。

時々クラスメイトから遊びに誘われ、それを受ける程度だった。

そんな感じに穩やかに過ごしつつ12月9日月曜日、2学期期末考査。他の2-Aのメンバーも比較的穩やかに過ごしていたようでそれなりに勉強していた。結果、学年10位になった。

過去8回同様全教科満点が5人いたのは想像に難くない。神儀家関係者の中で成績のいい木乃香とさよは50位台、他の面々は140から160位台に固まっていた。

期末考査も終えた12月20日金曜日、2学期終業式。翌日から冬休みに2-Aのみならず中等部が胸を弾ませていた。

今年も24日の昼にクリスマス会をすることに。場所と時間は去年同様、女子寮の学生食堂を14時から17時までの3時間。他の寮生にも声を掛けてあるためかなりの大所帯になるのは目に見えて

いた。

当日は料理担当である私とキティ、茶々丸、木乃香、ゆーな、五月、超が大忙しだったのは言うまでもない。

終了の17時になったため、1次会であるクリスマス会はお開きに。その後は各々のグループで2次会へ移行していた。

神儀家+関係者は去年同様、神儀家宅でお酒ありの2次会へ。一番の新参者であるアキラも『別荘』内での修行期間を含めて既に20歳を超えていたので、飲酒させていた。

こんな感じに神儀家宅で行われたクリスマス2次会も大盛り上がりであった。

クリスマス会後の冬休みは大晦日と元旦をまたぐように参拝したり、神儀家+関係者で一泊二日のスキー温泉旅行に行ったりした。今回は和美たちにバレなかったため、余計な出費はなかった。

残りの冬休みを、広域指導員と夜の警備の仕事をきちんとこなしながら、仕事の無い日は遊んだり修行したり、つけながら過ごして2003年1月19日日曜日。

翌日の20日から平穩が遠ぞかる波乱の3学期が始まるようになっていた。

S i d e . e n d

第40話（後書き）

原作開始の3学期直前まで到着！

ここまでで50部……。長かったです。

次回、薬味襲来の一歩手前まで書きます。

内容はかなり薄くなりますが……。

ぶつちやけると原作のアスナへの魔法バレどうやって対応しようか……。

薬味がアスナたちと同室になることは確実にないんだけどね！！

疑問に答えようのコーナー！

紫「それじゃなおぼん様からの『てかそれは（ry）よ的な』。
作者どうなのよ？」

裂「それだけは確実にありえない」

紫「何故言い切れる？」

裂「刀子が紫稀に思う感情は同じ流派の最強の剣士への憧れだから」

紫「そんなもんなのか」

裂「そんなもんだ」

紫「今回はこの辺で。誤字脱字、言い回しなどに変なところがあれば報告ください」

第41話（前書き）

長かったな・・・。

神夜 晶様、赤白黄色様、杉やん様、なおぼん様

感想ご意見感謝です！

紫稀側ハーレムに昇格した面々とパーティーの二つ名募集中なり。

二つ名はアリカ・木乃香・刹那・ちうたん・アキラ・千鶴・ゆーな・茶々丸、さよ

斬魂刀を刹那とさよに持たせようと思うのですが、何がいいでしょうか？

刹那：斬月・袖白雪・千本桜

さよ：虹霞・肉雫？

薬味襲来までの平穏な3学期！

そんな41話、どうぞぞー！！

第41話

Side・紫稀

2003年1月20日月曜日、2学年3学期の始業式。波乱の3学期の到来である。

本来の3学期には全くイベントことはない。ないのだが、今回だけは特別であった。

英雄『千の呪文の男』の息子、ネギ薬味・スプリングフィールドが魔法使い見習いの修行で麻帆良学園女子中等部で教師をすることになっているのだ。

「で、ぬらりひょん。ナギの息子はどついつ扱いになるんだ？」

「何が、で、なのか知らんが、3学期の間は教育実習生として2・Aの担任になつてもらおうと思つておる」

「はい、却下ー」

「フオ！何故じゃ？」

何故つて……。

「数えて10歳のガキに担任なんてやらせんなよ。よくて副担任、もしくは副担任補佐が妥当だろうが。タカミチと違ってガトウは出張にはあまり行かないんだから担任を変えるなんて不可能だ」

「わしもそうは思うんじゃないがな……。上がうるさくてのう」

「別に担任じゃなくなつて生徒とは触れ合えるんだから副担任か副担任補佐だ。これを呑まない場合は麻帆良からメガロ所属の魔法使い達追い出すと上に伝えとけ。そうすれば何の問題もないだろ」

「フオツフオツ、紫稀殿がその条件を出してくれて安心したぞい。これでネギ君を副担任に置けるわい」

なんだ、元々私頼りだったのか、このじじい。

「他には住む場所とかきちんとしてるんだらうな？」

「それも問題ないぞ」

何か隠してやがるな、この狸じじい。まっその時に反対してやればいいか。

「それならいい。それじゃ私はこれで失礼するぞ。じゃあな」

「フオツフオツ。またのう」

ああーあまり学園長室には来たくないわ……。

学園長室でそんな会話をしたのは数日前。平穏な1月を神儀家+

関係者でのんびりと過ごした。

それと3学期開始と共に頃合と見て実戦経験を積ませるためにアキラも夜の警備に出すことに。

アキラには、アーティファクトの形状上、棒術や槍術をメインに無手での合気術や柔術も、魔法のほうは水・氷属性にかなりの適正だったのでそこらへんを重点に鍛え上げておいた。

結果、並みの魔法使いでは相手にならないほどになった。アーティファクトの能力も使えば上位の下にもやりあえるほどだ。

神儀家＋関係者の戦闘要員が警備する部分だけは学園側に被害が一切ない状態だった。

ここまで来たら何かチーム名でも考えようかな？

そんな感じに日々を平穩に過ごし、広域指導員の仕事をし、夜の警備もこなし2月某日。翌日、薬味が麻帆良にやってくる。

アスナとマナ、木乃香、刹那が薬味のお出迎えに行くらしい。何も問題が起きなければいいのだが……。

問題が起こらないなんてありえないんだろうな……。私たちに火の粉が降りかかりませんように……。

そういえば、原作の「失恋の(r y)」って件はどうなるんだ？

S i d e e n d

第41話（後書き）

薬味襲来まで遂にカウントダウン！

別にさよに斬魄刀持たせる意味なくね？つつか文殊の方がらしくね？
元が現かは分らんけど幽「霊」なんだし。

次回は原作突入時の設定公開です！

木乃香、刹那、ゆーな、茶々丸、ちうたん、アキラ、さよが追加で
すね。

神儀家と関係者で分けた方がいいかな。

疑問に答えようのコーナー！

裂「なおぼん様より『思っんですけど、さよも満点取れませんか
？』『どうなの？』」

紫「別に取れなくもないが、時代が違うから呼称が変わってるから
さ」

紫「いわゆるケアレスマスってやつだよ」

裂「今回はこの辺で。誤字脱字、言い回しなどに変なところがあれば
ばい報告ください」

紫稀側現状設定【薬味麻帆襲来時】（前書き）

追加者の数値設定などが大変だった・・・。

annburera様、杉ちゃん様、なおぼん様

感想ご意見感謝です！

紫稀側ハーレムに昇格した面々とパーティーの二つ名募集中なり。

二つ名はアリカ・木乃香・刹那・ちうたん・アキラ・千鶴・ゆーな・
茶々丸、さよ

さよに斬魄刀か文殊を持たせるならどっち？

斬魄刀が選ばれたら虹霞に決定になります

紫稀側現状設定【薬味麻帆良襲来時】

名前 表 神儀紫稀 (かみぎ しき) 裏 零崎蒼識 (ぜろざき あおしき)

性別 男 年齢 約3020歳(転生前込み)

種族 人間であり人外 不老不死

懸賞金 元1500万ドル 大戦の英雄となったことで完全失効

容姿は能力により変幻自在、老若男女問わず

本来は『空の境界』の両儀 式の外見を男性よりに近づけて14、5歳くらいにした姿

身長は170cm前後、体重は60kg強、服装は基本着流しに革ジャンという式リスペクト

ステータス値(数値はリリなの+ネギま+Fateのをごちゃ混ぜにしてみました) 大戦時から変動なし

筋力：A (S) 【SSS+】 『SSS

耐久：A (S) 【SSS+】 『SSS

敏捷：A A (SS) 【SSS+】 『SSS

魔力：B B (AA) 【SSS+】 『SSS

+
『

気力：BB	(AA)	【SSS+】	『SSS
+ 『			
神通：BB	(AA)	【SSS+】	『SSS
+ 『			
幸運：SSS+	(SSS+)	【SSS+】	『SSS
S+ 『	E		

通常時はリミッター付き

()内はリミッター時での【咸卦法】 or 【闇の魔法】^{マギア・エレベア} (種類を問わず)

【】内はリミッターのみ解放時

『内はリミッター解放+【咸卦法】 or 【闇の魔法】 (上記と同種)

内はギャグ補正 OHANASHIを受ける

最大数値はSSS+ EX+にしてもよかつたかな?とか思ってた
りするけれど、結局は全存在最強なので意味が無い

リミッターは基本、魔力と気と神通力を優先的に制限 それに伴い
幸運値以外の能力値が劣化

スキル

剣術・武術などに准ずるもの

殆ど超一流レベルで習得済み だが使う機会があまりない

ネギま!の世界の魔法・技術

適正は全て 全種類使用可 オリジナル魔法もあり 今後も使用

予定

【闇の魔法】

肉体に魔法を取り込む 相応のリスク有なのだが人間であり人外なのでリスクは無

基本は【無銘】に装填するので肉体へのリスクはなし

余程のことがない限り通常時・リミッター解放時であろうと肉体には取り込まない

例外は治癒系を取り込む場合 その時は傷や病気といった害と判断されるものを悉く回復するのでリスクは無

【太陰道】

【闇の魔法】マキア・エレベアの最終到達点 敵の魔法を己に取り込み己の力とする

【無銘】に施した術式を起動し、敵の放出系の魔法を【無銘】に吸収し己の力にする

【咸卦法】

究極技法のひとつ、シユンタクシス・アンテイケイメノイン 気と魔力の合一

たまに神通力と気、神通力と魔力、神通力と魔力と気を合一することもある

三つのときは【神卦咸】かんかかんになる

【影の倉庫】

日用品と言われる類のものを収納

本来の姿で使うナイフはここに収納している

【神鳴流】

二の太刀を含む全てを使用可 免許皆伝

神鳴流を原型に自身にしか使えない神鳴流神儀型という亜流を創る

リリなの世界の魔法

全て使用可 飛行魔法以外はあまり使わない

非殺傷設定のSLBはO H A N A S H Iには便利
スターライトプレイヤー

型月世界の魔法・魔術・能力

作者が知っているものだけ使用可

ゲート・オフ・バヒロン
【王の財宝】武器貯蔵庫

アンリミテッド・フレイド・ワークス
【無限の剣製】使うことはない

【真名解放】宝具を使用しないからやらない

【直死の魔眼】両儀式・遠野志貴を基にした外見のときのみ使用

【魔法】使うことすらない

【その他諸々】詳しくは知らないから使わない

アブノーマル マイナス
西尾世界の異常・過負荷・能力

ほぼ使用可 基本使いどころがない

【見稽古】使いどころが少ないと言うか既にない

【異常】完成があるため既に完成形しかない だが使うことはあ
ジ・エンド

まりない

【過負荷】大嘘憑き、不慮の事故などを使えるが使わない 勝負
オールフィクション エンカウンター

が一方的になるため

とある世界の魔術・超能力・技術

ほぼ使用可だが殆ど出番はない

能力の使用は演算能力に依存するので魔力・気・神通力は消耗しない 強いて言うなら体力と精神力の消耗
技術は超の未来技術と同等かそれ以上

灼眼のシャナ世界の異能

フレイムヘイズの能力・宝具を使用可

能力の使用には魔力、宝具の使用には神通力を消耗
ぶつちやけ【闇の魔法】で再現できるから陽の目を見ることはない

【アラストール】コキユートスネギま！世界の魔法使用のための魔法発動体

身に着けていると炎属性の魔法の威力が強化される 因みに創造の力で創ったものなので人格はない

【夜笠】創造で創った魔法・物理衝撃をそれなりに緩和するマントにダイオラマ魔法球の仕組みを流用してオリジナルを再現 【無銘】を始めとする武器を数種類収納 【闇の魔法】マキア・エレベアで『燃える天空』ウイラニア・フロコリスを付与することで、炎翼を再現出来る様に加工した
基本シャナを基にした外見の時のみ使用

烈火の炎世界の能力

烈火のように炎術を使用できる

火影忍軍魔道具を全種類保管、使用可

【火竜】壺式から捌式の炎の型がある

壺式碎羽：腕に炎の刃を形成

式式崩：炎版のりりなのアクセルシューター

参式焰：炎の鞭

肆式刹那：火竜の目が開いたときにその目を見たものを燃やし尽くす

伍式円：点と点を繋ぐことで出来る面の結界 最低でも3つの点
を必要とする

陸式累：相手の心理的に嫌悪している幻術を見せる

漆式虚空：炎版のリリなののでイバインバスター

捌式裂神：死者の肉体と魂を炎に変えて使役する

【火竜合成】

それぞれの炎の型を合成する 虚 崩のように数の多い方から字
を書くことが必須であり、二匹以上を合成するのにはかなりの精神
力を必要とする

【魔道具】

土星の輪：力の基礎能力をアップ

風神：風を操りカマイタチや竜巻を起こす

閻水：水を固定化させて刃にする 氷紋剣という剣術を使える

その他諸々

緋弾のアリア世界の技術・物質

銃や剣やナイフの扱いに長ける

ヒステリア・サヴァン・シンドロームという体質はあるにはある
が稀である

緋々色金といった珍しい物質を使った道具がある

その他の世界の能力・技術

BLEACHやONE PIECE、伝勇伝など使用可 だが使
うことはない

ネギま！世界の魔法などで再現はする 特にBLEACHの斬魄
刀とか

特殊スキル

創造

あらゆるものを創ることが出来る

仕組みなどの知識も同様に貰っているため完璧なものが出る

完全変化

外見を老若男女問わず完全に変化させることが出来る

副次的なもので他者の肉体を成長・退化させることも可（不老者にも作用する）

後者の使用は大戦終了後から原作1巻開始までの20年間に何度か予定

アスナには使用不可 害あるものではないが魔法無効化能力によって弾かれる マジックキャンセル

【ノワール】モデルは白純里緒

【ブラン】モデルは荒耶宗蓮

【シャナ】モデルはシャナ 変化するときには肉体年齢15歳Ver

アカシツク・レコードへのアクセス

あらゆるものの現在と過去の『記録』を閲覧可

稀に未来を閲覧することも出来るが基本、未来は閲覧不可

生物の『記憶』を閲覧することは出来ない

黄金律

お金に困らない 数値的にはSS相当

幸運

数値的には最大値　それでも麻帆良のラッキー仮面・椎名桜子のほうが高い

能力発現

他者にネギま！世界以外の能力を副作用なしで発現させることが出来る

とある世界の超能力など

【王の財宝】などといった強力ものは不可

【魔眼】劣化品のみを発現させる

現状使う必要性がない

上限値撤廃

鍛えれば鍛えるほど強くなる　だが現状では殆ど意味がなくなっている

本契約・仮契約

バクティオー

ミニステル・マキ

マスター

紫稀の力が強すぎるため従者にはなれず主にしかなれない

仮契約すると相手に神通力が流れ神性を持つことになり、幸運値が上がり不老者になる

本契約すると上記に加え軽い不死性をもつことになる

本契約は破棄出来ないが、仮契約は破棄出来、破棄後不老性がなくなる

1人と本契約しても他の人との本契約・仮契約は無効にならない
本契約は最大12人、仮契約は20人くらいまではいける

現在の契約者

本契約：エヴァ、アリカ、忍、アスナ、マナ、茶々丸、木乃香、
刹那、ゆーな、千雨、アキラ

仮契約：さよ

二つ名 外見時で分けてはいるが既に同一人物だと知られているので意味は無い

紫稀時

レジエント・アライヴ

【全てを統べる者】

ノット・キル・エンペラー

【不殺の帝王】

フレイムウイング

【炎翼の担い手】

【生ける伝説】

【鎮圧者】

【麻帆良の最終兵器】

【麻帆良のハ-

レム男】

【麻帆良最強パーティーの要】

ノワール時

【破滅を齎す黒】

【吸血姫の守護者】

【後手必殺】

カウンター・キル

ブラン時

【白き救済者】

【幻の聖人】

シヤナ時

【炎髪灼眼】

名前 エヴァンジェリン・A・K・M・神儀 (エヴァンジェリン・アタナシア・キティ・マクダウエル・かみぎ) 裏 零崎音織 (ぜろぞき おとおり)

性別 女 年齢 約600歳

種族 吸血鬼(真祖) 不老不死

懸賞金 元1000万ドル 大戦の英雄となったことで完全失効

容姿は身長が150cm前後、スリーサイズは15歳の平均より大きい

ステータス値

筋力：S+

(SSS+)

【SSS+】

耐久	: A A A +	(S S S)	【 S S S + 】
敏捷	: A A A +	(S S S)	【 S S S + 】
魔力	: S S	(S S S +)	【 S S S + 】
気力	: A A A +	(S S S)	【 S S S + 】
神通	: A A A +	(S S S)	【 S S S + 】
幸運	: S S	(S S)	【 S S 】
			E

基本リミッターなし

()内は【闇の魔法】使用時

【】内は紫稀からの供給時

神通力は紫稀との本契約によるもの
幸運値の高さも本契約によるもの

紫稀の麻帆良入り時より神通力がA A AからA A A +に
それに伴いブースト時の出力もアップ

スキル

剣術・武術に准ずるもの

基本的に使用可

メインは合気柔術 錬度は超一流

合気柔術以外の錬度は達人クラス

超一流 >>> 達人 >>> 一流 >>> 一流 >>> 三流 >
>>>> 付け焼刃 > 素人
錬度的にはこんな感じ

ネギま！世界の魔法

適正は氷・闇 一応全種類使用可 適性により威力などが増減
氷・闇>>水>>雷・風>土>>>>光・火・癒

【闇の魔法】

肉体に魔法を取り込む 吸血鬼の真祖なため肉体的リスクは無
取り込むのは氷・闇系統が主流 たまに風や雷も取り込む

本契約・仮契約

紫稀と本契約

名前表記 ATHANASSIA ECATERINA MACDO

VELL EVANGELINA

称号 月に愛されし者

色調 虹 (prisma)

徳性 愛 (caritas)

方位 北 (septentrio)

星辰性 月 (Luna)

アーティファクト 月の加護

形状は防具類なら自由に变化する
能力

名の通り夜間に最大性能を發揮、日中は1ランクダウン

1・最大で準最強クラスの魔法攻撃を無力化、最強位下位クラスからは緩和する

日中では上位の上クラスまでを無力化^効

2・対象を不可視にする 同時に気配遮断なども発動 最大で最強位中位クラス相応まで發揮

ただし気配遮断は日中に最大性能を發揮する

これは日中でも月が出ているのに見えるのにくいというのを逆手に

とっている

契約

チャチャゼロとドール契約

二つ名

ダークネス・フェイス・エンブレ・スターク・エヴァンジェル

【闇水の女帝】 【闇の福音】 【人形使い】 【不死の魔法使い】 【

童姿の闇の魔王】 他

名前 チャチャゼロ

性別 不明 年齢 約500から600歳

種族 自動人形

懸賞金 元300万ドル エヴァたちが大戦の英雄となったことで同時に完全失効

ステータス値

筋力：A A A +

耐久：A A +

敏捷：S S

エヴァから供給される魔力量によって増減する

人形だから魔力も気も神通力も幸運も関係なし
人形のため基本スペックは大戦時から変動なし

スキル

剣術？

とりあえず切断に関しては超一流クラス

契約

エヴァとドール契約

二つ名

キリンゲドール
【殺戮人形】 【吸血姫の従者】

名前 神儀アリカ（かみぎ ありか） 旧名 アリカ・アナル
キア・エンテオフユシア

性別 女 年齢 大体34歳前後

種族 人間 不老と軽い不死

容姿は肉体年齢を14、5歳に下げたくらい

ステータス値

筋力：A A + (S S +)
耐久：A A A (S S S)
敏捷：A A A (S S S)
魔力：S + (S S S +)
気力：A A A (S S S)
神通：A A A (S S S +)
幸運：S S (S S)

基本リミッターなし

() 内は紫稀からの供給時

神通力は紫稀との本契約によるもの
幸運値の高さも本契約によるもの

スキル

剣術・武術に准ずるもの

基本的に使用可

錬度は達人クラス

ネギま！世界の魔法

全属性に中位魔法使い同等の適正 全種類使用可

上位魔法は高位・最高位クラスの魔法使いに比べれば威力・範囲
が数段劣るものの魔法使いとしては充分

王家の魔力を使用できる

本契約・仮契約
紫稀と本契約

名前表記 CAMIGI ARICA

称号 太陽に愛されし者

色調 虹 (prisma)

徳性 知恵 (sapientia)

方位 中央 (centrum)

星辰性 太陽 (Sol)

アーティファクト 太陽の加護

形状は武具と防具の一体型

武具は剣のみ、防具類なら自由に变化する

能力

名の通り太陽が昇っているときに最大性能を發揮、夜間は1ランクダウン

1. 最大で準最強クラスの物理攻撃（衝撃効）を無力化、最強位下位クラスからは緩和する

夜間では上位の上クラスまでを無力化（効）

2. 対象を不可視にする 同時に気配遮断なども発動 最大で最強位中位クラス相応まで發揮

ただし気配遮断は夜間に最大性能を發揮する

夜間に太陽は昇っていないからである。

3. 氷・水・闇属性に対して絶大な攻撃力を誇る剣（晴天時、数值的にS）

快晴時ならばさらに威力があがる（数值的にSS）

曇天時は0.5ランクダウン（AAA+）夜間は1.5ランクダウン（AA+）

エヴァの「月の加護」の反対版であり王家の魔力があるため魔

法に対する無力化^効がない

「月の加護」と違いこちらには剣といった攻撃手段がある

二つ名 まだなし

名前 神儀明日菜（かみぎ あすな） 旧名 アスナ・ウエス
ペリーナ・テオタナシア・エンテオフュシア

性別 女 年齢 大体120歳

種族 人間 不老と軽い不死

容姿は原作より少し背が高く、スタイルも若干いい

ステータス値

筋力	:SS	(SSS+)
耐久	:SS	(SSS+)
敏捷	:SS	(SSS+)
魔力	:AAA	(S+)
気力	:AAA+	(S+)
神通	:AAA	(SSS+)
幸運	:SS	(SS)

基本リミッターなし

() 内は紫稀からの供給時

神通力は紫稀との本契約によるもの
幸運値の高さも本契約によるものスキル

スキル

剣術・武術に准ずるもの

剣術と体術を使用可

メインは剣術 錬度は達人クラス

体術は達人クラスと一流の間

ネギま！世界の魔法

マジックキャンセル
魔法無効化能力

紫稀が創造した偽ぎ・破魔はまのつるぎ乃劍ぎによって「無極トメイ・アルカイスアナルキアース而太極斬」を行使出
来る

咸卦法を使用可

【咸卦法】

究極技法のひとつ、シュンタクシス・アンテイケイメノイン気と魔力の合一

本契約・仮契約

紫稀と本契約

名前表記 CAMIGI ASUNA

称号 傷だらけの戦士

色調 銀 (argentum)

徳性 勇気 (audacia)

方位 東 (Oriens)

星辰性 火星 (Mars)

アーティファクト キマノツルギ (鬼魔之剣)

形状 ハマノツルギの大剣、『フルトザオガ吸血鬼』の西洋剣、ハリセンの3つに変化

能力 ハマノツルギと『フルトザオガ吸血鬼』の合体版。

魔力や気を流すことで吸血鬼の能力が発動する。

ハマノツルギの能力も付加されているため、『トメー・アル勿イヌアナル無極而太極

キアース斬』を使用できる。

二つ名

【黄昏の姫御子】

名前 神儀忍 (かみぎ しのぶ) 本名 キスショット・アセ
ロラオリオン・ハートアンダーブレード

性別 女 年齢 約600歳

種族 吸血鬼 (真祖) 不老不死

容姿は阿良々木暦が初めて会った時のまま

ステータス値

筋力 : S + (SSS+)

耐久 : S (SSS+)

敏捷：S (SSS+)
魔力：SS (SSS+)
気力：AAA (SSS)
神通：AAA (SSS+)
幸運：SS (SS)

基本リミッターなし

() 内は紫稀からの供給時

神通力は紫稀との本契約によるもの
幸運値の高さも本契約によるもの

スキル

剣術・武術に准ずるもの

基本的に使用可

メインは剣術 錬度は達人と超一流の間
他の錬度は全て達人クラス

ネギま！世界の魔法

適正はエヴァと全く同じ 威力や範囲などは若干エヴァより劣る

西尾世界の能力

怪異の中の怪異、吸血鬼の力の行使
怪異殺し「心渡り」を使う

本契約・仮契約
紫稀と本契約

名前表記 CAMIGI SINOBU

称号 星に愛されし者

色調 虹 (prisma)

徳性 信仰 (fides)

方位 北 (septentrio)

星辰性 太陽 (Sol)

アーティファクト 星の加護

形状 武具と防具の一体型

防具は羽衣のみ、武具は変幻自在

能力

夜明け時と夕暮れ時のそれぞれ2時間に最大性能を発揮、その他の時間は1ランクダウン

1. 最大で準最強クラスの魔法攻撃を無力化、最強位下位クラスからは緩和する

性能ダウン時では上位の上クラスまでを無力化

2. 対象を不可視にする 同時に気配遮断なども発動 最大で最強位中位クラス相応まで発揮

3. 発動時、星の加護を中心に半径20メートル内の月の加護と太陽の加護の性能を1ランク強化

二つとも範囲内であれば1.5ランク強化する

エヴァの「月の加護」とアリの「太陽の加護」の性能補助
「太陽の加護」と違いこちらにはあらゆる武具に変化する。

二つ名

【怪異殺し】

名前 神儀真名 (かみぎ まな) 本名：マナ・アルカナ

性別 女 年齢 大体14歳

種族 半魔族(人間と魔族のハーフ) 不老と軽い不死

容姿は原作と同等

ステータス値

筋力：AAA	(SS)	【SSS+】
耐久：AA+	(S+)	【SS+】
敏捷：AAA+	(SS+)	【SSS】
魔力：AAA+	(SS+)	【SSS】
気力：AAA+	(SS+)	【SSS】
神通：AA	(AA)	【SSS+】
幸運：SS	(SS)	【SS】

基本リミッターなし

() 内は魔族化した時のスペック

【】内は紫稀からの供給時

神通力は紫稀との本契約によるもの
幸運値の高さも本契約によるものスキル

スキル

剣術・武術に准ずるもの

銃器に関しては超一流

剣の扱いに関しては超一流と達人クラスの間で若干達人クラス寄り
他は一流より若干上

ネギま！世界の魔法

魔族とのハーフなので使用可能か不明
左目に魔眼がある

緋弾のアリア世界の技術・物質

銃や剣やナイフの扱いに長ける

紫稀に師事していたこともあり「銃弾撃ち」ピリヤード「鏡撃ち」ミラー「弾丸切り」バリッ「跳弾」を使いこなす

「バリー・トウ・ドウ」をこなす

本契約・仮契約

紫稀と本契約

名前表記 CAMIGI MANA

称号 刀剣と銃を体現せし者

色調 黒 (nigror)

徳性 節制 (temperantia)

方位 西 (occidens)

星辰性 冥王星 (Pluto)

アーティファクト 貌なき剣銃

形状 二振りの刀、剣、ナイフ、二挺の銃への任意による形状変化
能力 障壁を破壊する切れ味の鋭い刀、剣、ナイフと同様の魔力
弾を撃てる銃

二つ名

【双剣双銃】
カトラ

名前 神儀茶々丸 (かみぎ ちゃちゃまる)

性別 女 年齢 大体2歳

種族 ガイノイド

容姿は原作の最新話よりも人間に限りなく近い

ステータス値

筋力：S (SSS+)

耐久：S+ (SSS+)

敏捷：AAA+ (SSS)

魔力：A (AAA)

気力：A (AAA)

神通：AAA (SSS+)

幸運：SS (SS)

基本リミッターなし

()内は紫稀からの供給時

神通力は紫稀との本契約によるもの

幸運値の高さも本契約によるものスキル

ガイノイドのため魔力、気、神通力はほぼ関係なし

スキル

剣術・武術に准ずるもの

無手に関するものは達人クラスよりも上

それ以外は達人クラスより若干劣る

ネギま！世界の魔法

ガイノイドのため使用不可

本契約・仮契約

紫稀と本契約

名前表記 CAMIGI CHACHAMARU

称号 悩み中

色調 白(album)

徳性 愛(caritas)

方位 西(occidens)

星辰性 金星(Venus)

アーティファクト 悩み中

形状 悩み中
能力 悩み中

二つ名 まだなし

名前 近衛木乃香 (このえ このか)

性別 女 年齢 大体14歳

種族 人間 不老と軽い不死

容姿は原作よりもスタイルがいい

ステータス値

筋力：A	(SS)
耐久：A+	(SS+)
敏捷：A+	(SS+)
魔力：SS	(SSS+)
気力：AA+	(SS)
神通：AAA	(SSS+)
幸運：SS	(SS)

基本リミッターなし

()内は紫稀からの供給時

神通力は紫稀との本契約によるもの
幸運値の高さも本契約によるものスキル

スキル

剣術・武術に准ずるもの

合気柔術をメイン

メインの合気柔術の錬度は達人クラス

その他の錬度は一流クラス

ネギま！世界の魔法

適正は癒し・光・風 適正属性の魔法は全部使用可 適性によ

り威力などが増減

癒・光・風 >>>> 水・土 >>>> 火・氷・雷 >>>>>>>>>>

魔法の射手を無詠唱溜めなしで69矢・最大で299矢、詠唱で

最大1001矢まで展開出来る

【陰陽術】

符術や式紙を扱う

本契約・仮契約

紫稀と本契約

名前表記 CONOE CONOCA

称号 癒しを運びし巫女

色調 白(album)

徳性 愛(caritas)

方位 北 (septentrio)

星辰性 木星 (Jupiter)

アーティファクト 医療神の蛇杖、健康神の蛇杯

形状 蛇が一匹巻き付いた装飾のある杖と杯

能力

杖：怪我人を全快、魔力・気を回復させる 1日に6回使用可

杯：病気を全快 1日に2回使用可 体力を回復させる 1

日12回使用可

二つ名 まだなし

名前 桜咲刹那 (さくらざき せつな)

性別 女 年齢 大体14歳

種族 半妖 (鳥族と人間のハーフ) 不老と軽い不死

容姿は原作よりもスタイルがいい

ステータス値

筋力：AAA (SS+)

耐久：AAA+ (SSS)

敏捷：S+ (SSS+)

魔力：AA+ (SS+)

気力：S (SSS+)

神通：A A A (S S S +)

幸運：S S (S S)

基本リミッターなし

() 内は紫稀からの供給時

神通力は紫稀との本契約によるもの
幸運値の高さも本契約によるものスキル

スキル

剣術・武術に准ずるもの

剣術をメイン

メインの剣術の錬度は超一流クラス
その他の錬度は達人クラスか少し上

ネギま！世界の魔法

【神鳴流】

紫稀に教わり二の太刀を使用可 免許皆伝相当

【陰陽術】

剣術の補助程度

本契約・仮契約

紫稀と本契約

名前表記 S A C U R A Z A C I S E T U N A

称号 空を舞いし剣士

色調 黒 (nigror)

徳性 正義 (justitia)

方位 北 (septentrio)

星辰性 太陽 (sol)

アーティファクト 斬魄刀

形状 初期は斬月の始解状態 解号などで天鎖斬月と千本桜景蔵に変化する

能力

千本桜：意思を持つて解号の「散れ、千本桜」唱えると始解と卍解の能力を使用可能になる

斬月：卍解の名「天鎖斬月」を使うという確たる意思を持つて唱えることで使用可能になる

この状態で魔力・気・神通力のどれかを刀に喰わせることで月牙天衝を使用可

二つ名 まだなし

名前 明石裕奈 (あかし ゆうな)

性別 女 年齢 大体14歳

種族 人間 不老と軽い不死

容姿は原作魔法世界突入時と同等

ステータス値

筋力	: A A +	(S S +)
耐久	: A A +	(S S +)
敏捷	: A A A +	(S S S)
魔力	: A A A	(S S)
気力	: A A +	(S +)
神通	: A A A	(S S S +)
幸運	: S S	(S S)

基本リミッターなし

() 内は紫稀からの供給時

神通力は紫稀との本契約によるもの

幸運値の高さも本契約によるものスキル

スキル

剣術・武術に准ずるもの

銃器の扱いと体術全般

銃器の扱いは超一流

体術の錬度は達人クラスより劣る程度

ネギま！世界の魔法

闇・影以外の属性にそれなりの適正 中級呪文までは使用可

魔法サキタ・マジカの射手を無詠唱溜めなしで39矢・最大で101矢、詠唱で

最大333矢まで展開出来る

本契約・仮契約
紫稀と本契約

名前表記 ACASI JUNA

称号 元気な射撃手

色調 金 (aurum)

徳性 勇気 (audacia)

方位 東 (oriens)

星辰性 太陽 (Sol)

アーティファクト 貌なき銃砲

形状 様々な銃や砲に変化

能力 自身が想像した銃や砲に変化 属性などはその時の形状によつて変化

二つ名 まだなし

名前 長谷川千雨 (はせがわ ちさめ)

性別 女 年齢 大体14歳

種族 人間 不老と軽い不死

容姿は原作よりスタイルがいい

ステータス値

筋力：A A (S+)
耐久：A A + (SS)
敏捷：A A A (SSS)
魔力：A + (S+)
気力：A + (S+)
神通：A A (SSS+)
幸運：S S (SS)

基本リミッターなし

()内は紫稀からの供給時

神通力は紫稀との本契約によるもの
幸運値の高さも本契約によるものスキル

スキル

剣術・武術に准ずるもの

体術や槍術、棒術を使用可

錬度は達人クラスより劣る

ネギま！世界の魔法

雷・光・闇に並以上の適正あり 風・影に並程度の適正、その他
は並以下 中級呪文までは使用可

魔法サキタ・マジカの射手を無詠唱溜めなしで49矢・最大で149矢、詠唱で
最大399矢まで展開出来る

本契約・仮契約
紫稀と本契約

名前表記 HASEGAWA TISAME

称号 桃色の閃光

色調 虹色 (prisma)

徳性 節制 (temperantia)

方位 中央 (centrum)

星辰性 土星 (Saturnus)

アーティファクト RHE、BDA

レイアッシュ整クセリボルディアササト

形状 リリなののRHEとBDAと同様
能力

なのはとフェイトの戦闘方法をトレースし実行できる 魔砲
も撃てる 使用時の思考能力の高速化

RHEとBDAは原作千雨のアーティファクト『スケフトルム・ウィルトウアーレ力の王笏』
も兼ねている

713

二つ名 まだなし

名前 大河内アキラ (おおこうち あきら)

性別 女 年齢 大体14歳

種族 人間 不老と軽い不死

容姿は原作魔法世界突入時よりも若干スタイルがいい

ステータス値

筋力：A A + (S S S)
耐久：A + (S S S)
敏捷：A A (S S +)
魔力：A A (S S)
気力：A A (S S)
神通：A A A (S S S +)
幸運：S S (S S)

基本リミッターなし

() 内は紫稀からの供給時

神通力は紫稀との本契約によるもの
幸運値の高さも本契約によるものスキル

スキル

剣術・武術に准ずるもの

棒術や槍術をメインに無手での合気術や柔術

錬度は全て一流クラス相当

ネギま！世界の魔法

水・氷属性に高い適正 他は並程度の適正 中級呪文まで使用可
魔法の射手を無詠唱溜めなしで29矢・最大で101矢、詠唱で
最大299矢まで展開出来る

本契約・仮契約
紫稀と本契約

名前表記 OOCOUTI ACIRA

称号 水に愛されし者

色調 銀 (argentum)

徳性 希望 (spes)

方位 南 (auster)

星辰性 水星 (Mercurius)

アーティファクト 海神の三叉鉾

形状 三叉の鉾

能力

生物体内以外に存在する水の操作 水棲生物の支配
水中での自由移動・呼吸可

二つ名 まだなし

名前 相坂さよ (あいさか さよ)

性別 女 年齢 大体64歳

種族 人間 (元幽霊?) 不老

容姿は原作同様

ステータス値

筋力：A+ (S+)
耐久：A A (SSS)
敏捷：A A (SS+)
魔力：A A (SS)
気力：A+ (S+)
神通：A A A (SSS+)
幸運：S S (SS)

基本リミッターなし

() 内は紫稀からの供給時

神通力は紫稀との仮契約によるもの

幸運値の高さも仮契約によるものスキル

スキル

剣術・武術に准ずるもの

体術を基本に使用可

メインの合気柔術の錬度は達人クラス

その他の体術の錬度は達人クラスに若干劣る

剣術などの錬度は一流クラスよりは上だが、体術よりの錬度は劣る

ネギま！世界の魔法

全てに並程度の適正 中級呪文まで使用可

サキタ・マジカ魔法の射手を無詠唱溜めなしで59矢・最大で199矢、詠唱で

最大499矢まで展開出来る

本契約・仮契約
紫稀と仮契約

名前表記 A I S A C A S A Y O

称号 悩み中

色調 堇色 (viola)

徳性 信仰 (fides)

方位 北 (septentrio)

星辰性 天王星 (Uranus)

アーティファクト 悩み中

形状 悩み中

能力 悩み中

二つ名 まだなし

紫稀側現状設定【薬味麻帆襲来時】（後書き）

つ、疲れたぜ・・・。

茶々丸とさよのアーティファクト悩み中。

茶々丸には「空とび猫」の魔強化版でも持たせようかと思ったけどやめた。

遠隔操作できる機体で考えてみようかな。

今更ですが軽い不死性の説明。

紫稀とエヴァ・忍は完全な不死性（体の一部さえ残っていれば即復活）の持ち主ですが、

紫稀との本契約で得られる不死性は軽傷から中傷程度なら規模によつて1〜10分で完治、重傷の場合は2、3日で完治程度です

疑問に答えようのコーナー！

紫「疑問らしい疑問がないから今回はお休みだ」

裂「誤字脱字、言い回しなどに変なところがあればご報告ください」

第42話（前書き）

【総PV】111万【総ユニーク】1万【お気に入り】900件突
破！！

素晴らしい駄文なのに、読んでいただき感謝です！！

なお様、なおぼん様、杉ちゃん様、神夜 晶様
感想ご意見感謝です！

紫稀側の面々の二つ名募集中なり。

アリカ・木乃香・刹那・ちうたん・アキラ・千鶴・ゆーな・茶々丸、
さよ

さよに斬魄刀か文殊を持たせるならどっち？
斬魄刀が選ばれたら虹霞に決定になります

薬味、麻帆良襲来！

そんな42話、どうぞ！！

第42話

Side・紫稀

2月某日、薬味襲来当日。

私はぬらりひょんとガトウ、タカミチの3人と学園長室で薬味が来るのを会話をしながら待っている。

「ガトウ、教師ってもっと早くに来なきゃいけないんだよね？」

「そ、そうだな・・・遅いな、ネギ少年」

遅いって、始業開始まで10分切ってるぞ？

「そういえばガトウはナギの息子には会ったことがあるのか？」

ずっと気になってたんだよね。タカミチは何度か会ってたらしいけど。

「ああー2、3回、タカミチと会いに行ったことがある」

「それじゃ、面識はあるんだな？」

「ある」

なるほどね。ガトウは普通に薬味を薬味として見てるようだね。タカミチのほうは、多分だけど薬味にナギでも幻視してるんだろうな。

「タカミチ、遅すぎるから迎えに行つて来い」

「は、はい…」

言われる前に行けよ……。ああー初日からこれとか、嫌になる
ぜ。。。。

「わし、一言も喋っておらん……」

ぬらりひょんぬらりひょんが何か言ったが気のせいだな。

Side・end

Side・other

紫稀たちがそのような会話をする10分前。始業開始まであと20分といったところで、アスナとマナ、木乃香、刹那の姿は駅にあった。

「いくらなんでも遅くない？」

「そ、そやねー」

「そ、そうですね・・・」

「そうだな」

アスナの額には若干青筋が見えていた。幼馴染3人はその青筋と声に含まれる不機嫌を感じて無難な返答をする。刹那以外は気にしてる風には見えないが。

アスナが不機嫌なのも当然で、彼女たちは40分前の7時から駅の改札口前にいたのだが。

何故そんな時間から駅前に行ったかということ、学園長に頼まれた新任教師の出迎えであった。

彼女たちには新任教師が10歳の子供とはいえ教師としてやってくるのだから、7時には駅付近で待っているのではないかという考えがあったからだ。

結果、その考えに裏切られ既に40分も待たされたわけだが。

因みに、アスナの不機嫌オーラが伝わっているのか、彼女を中心とした円の半径5メートルの距離にいるのは幼馴染の3人だけで、一般生徒たちは急いでいても横を通り過ぎる気が一切起きなかったらしい。

始業開始10分前。遅刻ギリギリの生徒たちと共に駅の改札口か

ら出てきた大きなリュックと魔法発動体の杖を背負った赤毛の少年をアスナたちは視認し、近づいていく。

少年の魔法秘匿意思の低さでアスナの不機嫌度が増していたようで、都合よく少年のそばにいくのは簡単だった。

少年は、自分に近づいてくる4人に気付いたのかいないのかわからないが、立ち止まっていた。

そしてそんな少年のそばについた4人はアスナの不機嫌を充分に理解していたためマナが声を掛けた。

「君が新任の、ネギ・スプリングフィールド少年かい？」

「あつ、はい。えーと、あなたたちは？」

「挨拶が遅れてしまったな。私は学園長先生に君の案内を頼まれた神儀真名だ」

「ウチは近衛木乃香や」

「桜咲刹那です」

「・・・神儀明日菜よ」

マナの確認とその後の自己紹介となった。アスナは不機嫌さを隠さずに自己紹介したが。

「で、では改めて。この度、この学校で英語の教師をやることになりました。ネギ・スプリングフィールドです」

ネ・・・薬味はアスナの不機嫌さに気付いていないようで普通に挨拶をしていた。

「それじゃ、学園長室まで案内しよう」

「お、お願いし「お久しぶりでーす！！ネギ君！」・・・あ、久しぶり、タカミチーッ」

空気が読めていないのか、それともただの偶然か薬味の言葉を遮るタカミチ。そしてそれに返事を返すネギ。返事は最後まで言い切つてからにしろよ、薬味！

「まあーいい。早く学園長室に行こう。時間もかなりおしているしね」

「そつやね、早くいこか」

「そ、そうしましょう（ア、アスナの不機嫌さが増してて怖いです）」

アスナは自分の名前を言った以外、終始不機嫌さを撒き散らしながら無言だった。

Side・end

Side・紫稀

何か嫌な予感がする・・・。物的被害はなさそうだけど、誰かが

不機嫌になっている予感がするぜ……。

「高畑です。ネギ君たちをつれてきました」

「はいっとくれ」

「では、失礼します」

「……失礼します」「……」

「し、失礼します！」

やっと来たか……。あれ？なんかアスナが不機嫌なんだけど……。もしかして私の予感どおりなの？木乃香辺りに確認してみるか。

『木乃香。なぜアスナは不機嫌なんだ？』

『大したことじゃないんよ。駅前に50分も待たされたっただけやし』

『な、なるほど……』

そりゃ不機嫌になるよな……。

「しかし、まずは教育実習とゆーことになるかのう」

「はあ」

「今日から3月までじゃ……」

どうやら修行がどうたらって件は終わっていたらしい。

「ところでネギ君には彼女はおるのか？どーじゃな？うちの孫娘このかな・

」

「じじい、一体何様のつもりだ？」

「ややわ、じいちゃん」

「じよ、ジヨークじゃ！お茶目なジヨークじゃよ！！」

「当然だよな？婚約者がいるのに二股かけるなんていわないよな」

「そつやねー。ウチには将来を誓いおつた相手がいるんやし」

ああー、なにやら木乃香の発言で火に油を注いってしまった感が・
・。アスナたちの無表情ぶりが、こ、怖いです・・・。

「ネギ君。この修行はおそらく大変じゃぞ。だめだったら故郷に帰らねばならん。二度とチャンスはないがその覚悟はあるのじゃな？」

「は、はいっやります。やらせてくださいっ」

こいつら魔法秘匿する気あるのか？一般人とも魔法関係者とも明言していないのが5人もいるのに、修行がどうたらって・・・。

「……うむ、わかった！では今日から早速やってもらおうかの。
ネギ君には高畑君のかわりに2・Aの副担任をやってもらう。指導
教員のしずな先生を紹介しよう。しずな君」

「はい」

「む」

ラッキースケベめっ！？でも私はいいや、嫁いるし。

「あら、ごめんなさい」

「わ・・・」

「分からないことがあったら彼女に聞くといい」

「よろしくね」

「あ、ハイ・・・」

「そうそうもう一つ。このか、アスナちゃん、刹那ちゃん、マナちゃん。しばらくはネギ君をお前達の部屋に泊めてもらえんかの。まだ住むとこ決まっとらんの「はい、ダウト」じゃ・・・」

「嘘はいけないな？3学期開始直後あたりに住む場所は問題ないと言ったよな？もしかして、最初からアスナたちの部屋に住まわせる気だったのか？」

「うっ・・・」

「・・・何ですって？女子中学生と同学校の男性教師が同室？なるほど、その少年は淫行教師なんですか」

「え？ええ？」

「おい薬味が何か起こってるのかわからないって感じだな。どうでもいいが。」

「よーし。これを教育委員会に報告しよーかな。てことで学園長は首ですね。お元気で」

「学園長先生、お世話になりました」

「これからお元気で、学園長」

「あなたのことは忘れません、学園長先生」

「ウチも忘れないえ、じいちゃん」

上から私、アスナ、マナ、刹那、木乃香だ。ナイスチームワーク！

「ちょ、ちょっと待っとくれ！これもジョークじゃよ、ジョーク！」

当たり前だろ。強行してたらその首すぐに刎ねてるわ！

「教員寮に住ませる。空きがないならガトウかタカミチのどっちかと同室でいいだろう。その場合はタカミチは出張が多いからガトウのほうがいいか」

「そ、そうだな。学園長が妄言を実行してたらどうなるかと思った」

「そ、そうですね……。僕もそれが無難だと思います」

ガトウとタカミチもアスナたちと同室にするのはどうかと思った

らしく顔が引き攣ってるな。まあー同室になったとしても、アスナたちを屋敷に住まわせれば何の問題もないんだけどな！

「そ、それでは、紫稀殿とヴァンデンバーグ君以外は教室に向かつてくれ」

「……………では、失礼します」……………

「こ、これで失礼します」

「先に行ってますね」

あいつらを先に向かわせたか。

「さて、何の話だぬらりひよん？」

「分かっておってきいておるじゃろ？」

「そりゃ、そうだろ。なあー、ガトウ？」

「そうだな。学園長、流石にさっきのはやりすぎです」

「それでもないと思うんじゃないか？」

「どうせ4人と同室にして魔法関係者だとバラして、あわよくばパトナーに。って考えていたんだろ？」

「…………やはりお見通しかの」

「当然だ。と言つかあいつらは既に他の人間の従者になんてなれん

「がな」

「どづいうことだ、シキ？」

「いやいや、分かるだろ。」

「簡単だ。あいつらは既に私と本契約を結んでいる。つまり誰かの主にはなれても従者にはなれん」

「い、いつの間にしてたんだい？」

「気付いてたら襲われてアッー！状態で本契約してたって話だ」

「く、苦勞してるんだな、シキも・・・」

「ガトウもな・・・こんなぬらりひよんの部下なんてやらされてな・・・」

「本当だな・・・どこかにもっといい仕事ないもんかな・・・」

お互いぬらりひよんを見ながらため息を吐く。

「な、なんじゃ！わしは何か間違っておるのか！？」

「分かってないのか・・・。」

「なんでもないですよ、学園長」

「なんでもないさ、ぬらりひよん」

「そんな、呆れたような諦めたような目でわしを見るんじゃない！
それにわしは人間じゃ！！」

人間かそうじゃないかなんてどうでもいいよ……。

「ガトウ。そろそろ教室に戻ろっぜ」

「そうだな、シキ」

キティとアリカたちに癒してもらおう……。あと釘刺しておかないと

「ぬらりひょん。神儀家とその関係者にあたる人間が魔法関係者だとあのガキにばらすなよ。私とエヴァ、アリカ、アスナが【紅き翼】アラルブラとその関係者であることは特にだ。日常生活で認識障害を使用しているからこっちがバラさない限りはバレないだろうが……」

「魔法関係者であるのを隠すのはやぶさかではないが、【紅き翼】アラルブラとその関係者であるのを隠すのはどういう意味じゃ？」

「ガトウとタカミチに聞いた話を纏めると、あのガキは悪魔襲撃の頃から英雄ナギに執着しているらしい。」

そこに私たちがナギを知っていると分かればこちらの都合もお構いなしに聞きに来るだろう。

息子として親のことが知りたいという気持ちなら話してやってもいい。だが、あのガキは父親ナギとしてでなく英雄ナギとしてナギを求めている。

悪魔襲撃以前ではそれなりに母親のことを知ろうとしていたらしいが、最近では母親であるアイネ姫にはあまり見向きもしてないらしいじゃないか。周囲の人間にも母親アイネ姫のことはあまり聞いてないら

しいからな」

それ以前に聞いたとしても答えられる人間はそうはいなかっただろうが。あの村ではスタンの爺さんと【紅き翼^{アラルブラ}】に近いのしかアイン姫とのこと知らんしな。

「それに周囲の人間は本当のナギを知らず、^{フロバガンダ}宣伝のナギのことしか知らん。あのガキの周りにはそんな奴らしかいなかったようだしな。さらに裏でもナギとの情報が出回っていない母親であるアイン姫は失われたとはいってもウエスペルティア王国の血筋だ。狙われる可能性のある王族とは教えられないから素晴らしい人だった程度にしかガキは知らんだろ。周りは母親のことは知らん奴らばかりだったろうが。」

だから何も教えてやらない。それだけだ。ガトウもくれぐれも頼んだぞ。タカミチには前から言っているから問題ないか」

自称『千の呪文の男』^{サウザンドマスター}だったもんな……。千とはいかないまでもそれなりに呪文は仕込んでやったんだけどな……。原作よりも強くなってるはずだし、多分だけど。

「わかったぞい」

「シキがそこまでいうなら」

「じゃあなぬら^{つじこ}りひょん。私たちは教室に行く」

「失礼します」

ああーあ。平穏な生活は送れるのかねー？

そう思いながら私は学園長室を後にする。

S i d e · e n d

第42話（後書き）

ようやつと薬味が・・・。

長かったなー。というか薬味が果てしなく空気っぽい！

そういえば派遣社員様元気かなー？

ここからは原作を基礎として構築かな？

やっぱ、話を進めるにはアスナに魔法を見られなきゃならんな・・・。

疑問に答えようのコーナー！

裂「なお様からの質問だ『なんですがちうつたん（ry）しょうか？』

」

734

紫「アーティファクト自体はRHEとBDAだが、原作の『力の王』スケプトルム・ウィルト
ウアーレの」

紫「能力も備わっている。つまり千人長七部衆もいる、アデアット時だけだな」

紫「ぶつちゃけ都合が良すぎるよな！」

裂「なんてーか、七部衆が勿体無かったからだけどなー！」

紫「今回はこの辺で。誤字脱字、言い回しなどに変なところがあれば報告ください」

第43話（前書き）

色々なところで原作ブレイクしすぎた。
どうやって物語を進めるべきか・・・。

なおぼん様、杉やん様×2、グラムサイト2様、神夜 晶様
感想ご意見感謝です！

紫稀側の面々の二つ名募集中なり。
アリカ・木乃香・刹那・ちつたん・アキラ・千鶴・ゆーな・茶々丸、
さよ

さよに斬魄刀か文殊を持たせるならどっち？
斬魄刀が選ばれたら虹霞に決定になります

薬味襲来1日目後編！

そんな43話、どうぞ！！

第43話

Side・other

紫稀とガトウ、ぬらりひよんが魔法関係の話をするために学園長室から追い出されたアスナとマナ、木乃香、刹那、タカミチ、しずな、薬味の7人は2-Aの教室に向かっていた。

途中、生徒であるアスナたち4人は教師3人（内一人は見習い）に一言残して、先に教室に向かった。

その場に置き去り（？）にされたタカミチとしずなは、立ち去ったアスナたちと同じ道を歩きながら薬味にクラス名簿を渡していた。教室の前についた薬味は廊下の窓から教室の中を見て驚き、急いでクラス名簿を確認し、再び驚いていた。

そんな薬味を確認しながらタカミチたちは薬味に先を譲り教室に入るよう促した。

そして、扉を開けた薬味に待っていたのは。

Side・end

Side・アスナ

今日は朝から散々な目にあった。

第一に駅前に50分も待たされたこと。

第二にナギとアイネの子供が私たちの副担任になること。
第三に私とマナ、木乃香、刹那の4人部屋にその子供を住まわされかけたこと。

2番目はまだ許容できる。1番目もまだ子供だから社会人の自覚が芽生えていないと考えれば仕方がないと思える。

だが、3番目だけは論外だ。

確かに私たち4人は魔法関係者だ。

それでも、魔法関係者と同室にさせるなんて間違っている。魔法は秘匿すべきものと言うのに。メガロメセンブリアMMの下の魔法使いは秘匿意識が低すぎる。早々に私たちに魔法使いだとバラさせて、こちらも魔法関係者だと教えるように仕向けさせたかったのだろう。

魔法関係者だとバレた後は、なし崩し的に未来の英雄の従者にさせたかったのだろう。残念ながら従者なんてものにはなれないけどね。

さらにいつてしまえばナギは大戦の英雄だ。最終的にコスモエンテ【完全なる世界】レイクイアの親玉である私の祖先の造物主を倒して戦争を終わらせた。だが、そのコスモエンテレイクイア【完全なる世界】の存在を知る前にはヘラス帝国側の多くの者たちを殺してきたのだ。

そのような戦争の英雄の息子と同室にさせるなんて、私たちに死ねと言っているようなものじゃないか。まあー私たちは自分のことは自分で護れるし、護れない事態になってもシキが助けてくれると思う。

私としては甘えているつもりではないけれど、甘えなんだと思うけどね。

教室にきてから長々と思考に没頭していたみたい。

やっとナギとアイネの息子のあのガキが教室の前まで来たらしい。

美空と双子がシキのとき同様のトラップを仕掛けたようね。

あの子供、トラップの存在に気付かずに扉を開けたわね。で、黒板消しが落下と・・・。可哀想に、頭に黒板消しが・・・。って何で障壁切つてないのよー！？

S i d e ・ e n d

S i d e ・ o t h e r

数々のトラップだった。

まず1つ目の黒板消しトラップ。その存在に気付いていない薬味は常時展開している障壁で一瞬受け止めた。

それを確認したエヴァとアリカ、アスナといった2 - Aの神儀家 + 関係者の面々は呆れたり、苛立っていた。

黒板消しに気付いた薬味はすぐさま障壁を切る。

続いて足元のロープに引っかかり、転がりながら落下してくるバケツの水をもろに浴び、後頭部に迫るオモチャの矢を3本とも綺麗

に当たり、そのまま教壇の側面に逆立ち状態で背中からぶつかつた。

『あはははははは』

それを見ていた2 - Aの生徒たちは一部を除き爆笑、引つかつたのが薬味だと気付くと慌てて近寄って怪我の有無を確認していた。

「えーっ子供!？」

「君大丈夫!？」

「ゴメン、てつきり新任の先生かと思って」

入室からトラップに引つかつたのを見ていた神儀家+関係者はため息をついていた。

(あれで、魔法学校主席卒業だなんて・・・)

と思いながら。

「いいえ、その子があなた達の新しい先生よ。さ、自己紹介してもらおうかしら」

騒ぎをタカミチとしずなが収めて薬味に自己紹介するよう促す。

「ネギ君」

「は、はい」

しずなの言葉に従い、教壇に立つ薬味。

「ええと、あ．．．あの．．．ボク．．．ボク．．．今日からこの学校でまほ．．．英語を教えることになりました、ネギ・スプリングフィールドです。3学期の間だけですけどこのクラスの副担任にもなりました。よろしくお願いします」

この自己紹介で再び神儀家+関係者はため息をついた。

(秘匿はどうした．．．)
と思いながら。

一方で魔法の知らない一般生徒たちはというと。

『．．．．．キャアアツ！かわいいい〜〜〜？』

と言いながら薬味に襲撃をかけていた。

「何歳なの〜！？」

「えっつ！？その10歳で．．．」

「どっから来たの！？何人！？」

「ウエ、ウエールズの山奥の」

「ウエールズってどこ？」

「今どこに住んでるの！？」

「いや、まだどこにも．．．」

などと質問をしていた。それに薬味は律儀に返答していた。

「ホントにこの子が今日から副担任なんですかー！？」

「こんなカワイイ子もらっちゃっていいの〜！？」

「コラコラ、あげたんじゃないのよ。食べちゃダメ」

「ホントに先生なんだー」

色々と危ない発言をする2-Aの生徒としずな。薬味はその対応に困惑していた。

「ねえ、君つてば頭いいの!？」

「い・・・一応大学卒業程度の語学力は・・・」

「スゴー！ー！ー！ー！」

「あー！ーん、カワイー！ー！ー」

「わわー！ー！ー」

（よかったなんとか歓迎されてるみたい・・・ちょっと危なかったけど）

「ネギ君はちゃんと教師の資格を持つてるけど、見てのとおりあなた達より年下よ。お手やわらかにね」

『『ハイ！』』

薬味は誤魔化せたと思っているが、魔法関係者たちにはバレバレであった。

委員長である雪広あやかが騒ぎを収めようと立ち上がろうとした時、教室の扉が再び開いた。

「で、この騒ぎは一体なんだ？」

「確かにこの騒ぎ様は見過ごせないかな？」

そこにいたのは二人の男。

一人は女子中等部2・A担任であり、広域指導員も兼任している「デスマーカー」のガトウ。

もう一人は女子中等部唯一の男子生徒であり、特別広域指導員も兼任している、「麻帆良の最終兵器」と名高い紫稀。

結果、一瞬にして騒ぎが収まり周囲は静寂に包まれたのだった。

Side・end

Side・紫稀

「で、この騒ぎは一体なんだ？」

「確かにこの騒ぎ様は見過ごせないかな？」

おおつ。私たちの登場だけでさっきまでの姦しい騒音が止んだぜ。

「可愛らしい子供が自分達のクラスの副担任になってはしゃぎたい気持ちも分からなくてもないが、いくらなんでも騒ぎすぎかな？」

個人的には可愛らしいかは興味ないのだがな。キティの方が可愛いし。

『『は、はい……』』

「よーし、ガトウ。騒いでいた連中の罰則はお前に任せよう」

「そうかい？それなら数学の課題プリント2枚なんてどうだ？勿論、席について騒いでいなかった面々は免除だ」

「それでいいんじゃないか？それじゃ私は席に座るとするか」

自分の席に向かおうとした矢先に、クラスメイトがいつせいに口を開いた。

『『横暴だー！』』

「ほーし。罰則が足らなかつたようだな。よーし、課題プリント10枚追加で12枚なんてどうだ？」

そんな私の発言で態度を改める該当者たち。

『すいませんでしたー!!!』

「分かれればいい。それじゃ、次は英語だったか。じゃあー新任子供教師、授業を始めてくれ」

「は、はいー!」

そう言っつて薬味の返事は聞かずに自分の席に戻る。

「(それで、何があつたんだ?)」

ちうつんがかなり震えてるから何かあつたんだろうな……。

「(いや、何。あのぼーやが魔法障壁を解除し忘れて一瞬黒板消しが浮いていたのと、自己紹介の際に魔法と言いつけただけだ)」

キティの証言で頭を抱えなくなった……。

「(魔法の秘匿はどうしたあ……)」

「(確かにその通りだな)」

……
どうやら私は感想を呟いていたらしい。ああー私の平穏な生活が……。

その後の授業は薬味が黒板の高いところに背が届かなくあやかに世話されていたのを除けば普段通りに終わったのだった。

そんな感じで全授業が終了し放課後。

私とアスナはクラスメイトに頼まれて薬味の歓迎会の買い出しに出ていた。

買い出しも終わりその帰り際薬味の姿を発見。それと同時に階段から落下した宮崎を視認。

薬味が杖を構え、落下中の宮崎を一瞬浮かせ、地面と宮崎の間に滑り込む。

それを確認した私は一般人用の人払いと認識阻害結界を周囲に展開、アスナに薬味の事情聴取というかそんな感じのことをさせる。

アスナの姿を確認した薬味はなんだか白くなっていた。その薬味をアスナが宮崎からでは見えないところまで連行。

私は宮崎の状態を確認する。

「宮崎、怪我とかはないか？」

「な、ないですー」

「それは重畳。後で新任子供教師に礼を言ってやれ」

「は、はいー」

「念のためもあるから保健室にいくように。本は私が図書館島まで運んでおく」

「あ、ありがとうございます」

「お礼はいいから保健室に行って来い。早くしないと歓迎会に遅れるしな」

「は、はいー」

保健室に向かう宮崎の後姿を確認しつつアスナたちの確認へ。勿論忍んでな！バレルなんて真似はしないでござる！！と言っか『知_ミスターアンノウン

られざる英雄』使ったんだけどね！！

どうやら既に記憶消去の魔法を使うところらしい。まあーアスナには効かないんだけどな。

魔法に失敗したことに驚いていた薬味だが、アスナが色々説明させて、その説明を聞いて一般人が理解したように演技をして口外しないと約束していたようだ。

私はそれを確認後は図書館島に本を返却しアスナたちが教室に戻ってくるまでに戻っていたよ。

歓迎会では原作どおり宮崎が薬味にアタックしたり、あやかが銅像をプレゼントしていた。

私と神儀家＋関係者は持ち込んでいた酒飲んでたんだけどね！勿論一般生徒にはれるへまなんてするわけないし。

タカミチのところ薬味が寄ってくるので、ガトウとしずなを含めた3人を一纏めにして私たちから遠いところに座らせてたから、薬味が近寄ってくることもない！飲酒バンザイ！！

歓迎会終了後、今夜は寮のアスナたち全員が屋敷に泊まることに。

何をしていたかって？『別荘』内でストレス発散だな。特にアスナが凄かった……。

ストレス発散後は私とキティ、茶々丸で腕によりをかけて作った夕飯を食べて入浴。

入浴後はナニをした。人数分の影分身を出してな……。

ああー騒がしくも平穩だった日々よ、カムバック・・・。

S i d e . e n d

第43話（後書き）

薬味襲来1日目の続きですね。

次回以降は原作に沿うように進めていきます。

でも惚れ薬の件はアスナの機嫌を取る必要がないから除去かな？

疑問に答えようのコーナー！

裂「疑問じゃないがなおぼん様の『学園長暗殺兼紫稀学園長代理計画発案、審議開始』なんだが」

紫「実行してもいいか？」

裂「私も実行したくなった。と言うか、じじい害悪にしか思えないんだよな……。」

紫「次は杉やん様の『なぜ薬味は（ry）のかな？』」

裂「指摘されて気付いたんだよな。理由としては当時の老害の駆除には成功した。」

裂「ナギに怨みのある奴は復讐として狙う。そして新たな老害が出現。」

裂「その中の一部が最重要機密のナギとアイネ姫の関係を知っているから」

裂「ウエスペルタティアの血統としてネギを狙っている。その他の人間はナギとアイネ姫の」

裂「関係を知らないから教えれないなんてのでどうかかな？」

裂「42話を改稿したからそっちを参照してほしいけど」

紫「今回はこの辺で。誤字脱字、言い回しなどに変なところがあれば」報告ください」

第44話（前書き）

【感想】 300件突破！！

すごく嬉しいです！

十六夜様、なおぼん様、杉ちゃん様、グラムサイト2様
感想ご意見感謝です！

紫稀側の面々の二つ名募集中なり。

アリカ・木乃香・刹那・ちつたん・アキラ・千鶴・ゆーな・茶々丸、
さよ

さよに斬魄刀か文殊を持たせるならどっち？

斬魄刀が選ばれたら虹霞に決定になります

大して時間が経過しない！

そんな44話、どうぞ！！

第44話

Side・紫稀

薬味が麻帆良に来て数日。

原作であった2日目の惚れ薬騒動は無かった。いや、事前に阻止したと言った方が正しいか。

どうやら薬味は「アスナさんは約束してくれたけど、もしものうっかり口が滑ったら・・・」みたいな考えでご機嫌を取ろうとしていたようだ。賄賂みたいだが、確かに有効だと思う。物を渡して約束を強固にするってことだし。まあアスナには意味無いけど。

私は、薬味がアスナに惚れ薬を見せていた隙に惚れ薬の効能を気付かれないように打ち消しておいた。そして、その元惚れ薬をアスナが薬味に飲ませたけど、勿論効果はなし。

結果、惚れ薬騒動は起こらなかった。

どうやら薬味の自信が若干だが、薄らいだようだ！思わぬ副産物だった。

そんな感じで平穩を壊されながら日々を過ごす。

現在は、特別広域指導員の仕事で昼休みの学校周辺の見回りを
終え、教室に戻る道を歩いていた。

すると校舎前の広場に人だかりと喧騒が。

ん？騒動の中心にいるのはアキラとゆうーなか？

あっ、あの高等部の生徒たちアキラにボール当てやがった。あれ
くらいなら別に怪我しないだろうけど、私のアキラにボールをぶつ
けるとはな……。

フッフッフ……指導員の仕事だな。

そう思い声を掛けようとした時、ある声に遮られた。

「コラー、君たち待ちなさーい」

あれは……。薬味が……。

「僕のクラスの生徒をいじめるのは誰ですか？ い・いじめは
よくないことですよっ！？ 僕、担任だし怒りますよっ」

とりあえず静観しておくか。薬味が騒動を収められるのなら重畳
だし。出来ないなら私が出ればいいだけだな。

『キヤーーーーッ？かわいい~~~~ん』

「10歳の先生だつて~~~~」

「ウソー！この子が噂の子供先生か〜!!」

ああー……。やっぱ無理だよな……。薬味だもんな……。

「やめてください。やめ……。やめっ……。わーん」

そろそろ止めに入らんな……。と思つてたらまた遮られたよ。ボールつて誰だよ!？」

「いい加減におよしなさい、おばサマ方!!」

ああー……。あやかか……。シヨタコンだもんな……。アスナも一緒っぽいけど、連れてこられたみたいない感じが。

「ここはいつも私たち2・Aの乙女が使っている場所です。高等部の年増の方々はお引取り願えます?」

「なっ……。何ですって〜!？」

ああー。今度は取っ組み合いにまで発展しやがった……。と言
うかあやか。「私のネギ先生」って本音が駄々漏れじゃねーか……。
。しかも争いの趣旨が場所取りから薬味に変わってやがる……。

はあー……。今度こそ本当に止めるか……。

「はいはい、お前たちそこまでだ」

瞬動であやかの後ろに回ってそのまま襟首を引っ張る。

「シキさん!？」

私のほうを振り向きながら、私の名前を呼ぶシあやかヨタコン。

『麻帆良の最終兵器!？』

『鎮圧者!？』

あやかが私の名前を言ったことで、私の正体を知ったらしいウルスラの生徒たちは、若干青ざめていた。

「さて、大体の事情は遠目から確認してたんだが。あやかが先に手を出してしまったのだからクラスメイトとして謝罪させてもらうよ」

私がそういうとさっきまで青ざめていたのを一転させ、調子に乗ろうとするウルスラの生徒たち。

だが、それを阻止するぜ!

「話がわか「それでも、後からやってきて場所を奪おうとするのは高校生としてどうなのかな?」そ、それは・・・」

「それに、幸い擦り傷程度で済んだが、当たり所が悪ければ捻挫や骨折してたって不思議ではないんだがな」

『『『!』』』

私の言葉で上から目線で喋れないウルスラの生徒!なんだか、楽しくなってきた。

「さらに言ってしまうえば、よくも私のアキラにボールをぶつけてく

れたな？つまり私には仕返しする権利があるわけだ。私が言ってること分かるよな？」

「は、はい……」

「まあー今回はこちらまああやかが手を出したってことで喧嘩両成敗としてやる。以後気をつけろよ」

「わ、分かったわ」

ありやーまた何かしでかしそうだな。何か手を打っておくべきかな？まあーその時に考えればいいか。

「さて、あやか。お前の行動理由は分からんでもない」なら、何故止めたんですの！？」だが、先に手を出してしまっただけならこちらにも非が出来る。つまり、それではいたちごっこの始まりだ」

「そ、そうですね……。冷静さを欠いていたようですわ。以後気をつけましょう」

「そうしてくれ。そろそろ昼休みが終わるからな、教室に戻るぞ」

『『はあーい！』』

「いいお返事だ。それじゃ行くかうか」

そうして、私たちは広場から立ち去った。

「シキさん、す、すい……」

その場に置き去りにされた薬味のそんな眩きは私の耳には届かなかった。

昼休みの騒動から5間目の体育の時間。バレーボールのため屋上のコートへ。

私は別室で動きやすい服装に着替え、一足先に向かった。

キティたちは教室で着替えているよ。別にキティたちの着替えの見るのに抵抗はないけど、それ以外のクラスメイトの着替えを見るのは、流石に、ねえー？

そして屋上Now。

薬味がウルスラの生徒たちに捕まっていました。

「で、お前達は何でここにいるんだ？」

「あ、アンタは！？」

「わ、私たちは自習でバレーやるためにここに来たのよ！そういうアンタこそなんでここにいるのよ」

「そう。私がここにいるのは簡単。授業で使うからだ」

え？冷静になれよ、あやか……。昼休みに気をつけるって言ったばかりじゃないかよ……。

「ドッジボールで数が多いのはハンデにならん。逆に不利になるだけだ」

「ちっ、ばれたか……」

「いやいや、普通に考えれば気付くんだった。舌打ちなんてしてんじゃねーよ。」

「人数のほうはもういいわ。それで、私たちが勝ったらネギ先生を教生としてゆずってもらおうわ。いいわね？」

「は？何言ってるのこの人たち？意味分からんよ。薬味を引き取ってもらえるなら嬉しいけど辞令的に無理だからな？」

「な……」

「え~~~~~っ!？」

「いやいや、信じるなよ、シヨタコンあやかとまき二人！」

「まあーいいや。新任子供教師はウルスラ側のメンバーとして参加してくれ。こっちは不利な22人で結構。勿論私は2-Aとして参加させてもらう」

「な、シキさん！先ほど自分で不利だと言っておいて何をおっしゃいますの!？」

「安心しろ、あやか。22人だろうが一人もアウトにならん。エヴァ、アリカ、アスナ、マナ、木乃香、刹那、茶々丸、ゆーな、アキラ、千雨、さよ。お前達も強制参加な。別に負けても新任子供教師がウルスラに持っていかれることはないが、本気で叩き潰すぞ。いい加減うざいからな（薬味を持って行ってくれるなら嬉しいんだけどな……。現実問題そうならないし……）」

「面倒だがいいだろう」

「しょうがないのう」

「ご命令ならば」

「分かりました」

「なんで、私まで……」

似たような台詞が何個かあったけどいいか。

「今私が名前を挙げた以外は後ろにいる。邪魔になる」

『はい！』

「それじゃ、始めようか。
人数は十分か!？」

ウルスラ女子高等部2・D!参加

ワンサイドゲーム
一方的試合の開始だ。

そんな感じで、麻帆良の最強パーティーと準最強パーティーの参加によって女子中等部2 - A対ウルスラ女子高等部2 - D + 薬味の試合は22対0という圧倒的大差で私たち2 - Aが勝ったのだった。

「いやあー試合にかこつけて、薬味に思いっきりボールぶつけて爽快だったー！少しだけストレスも発散できたわ！」

試合終了後にロスタイムといってボールを誰かにぶつけようとしていたウルスラの生徒には別のボールを出してぶつけてやった。

そんな感じに阻止された女生徒とそのほかの面々は「お、覚えてなさいよ~~~~ッ」なんて三下でやられ役の台詞をはいて屋上から立ち去った。

「それじゃ、普通にバレーやりますかね」

「そ、そうですね（まさか最強パーティーと準最強パーティーがあれほどは・・・）」

「そ、そうだねー（相手に当てたボールが何故かこっこのコートに戻ってきてた・・・）」

「そ、そうしましょー（ウルスラの先輩方は1回もボール触れてなかったような・・・）」

「なんだか、噂をされているような気配を感じたけど、なんだ？」

余談だが、ウルスラの2・Dの生徒たちが教室に戻ったとき、ウルスラの生活指導員に怒られたらしい。

まあー通報したのは私なんだけどね！ざまあーみさらせ。ってな？

S i d e ・ e n d

第44話（後書き）

ドッジボール話でした。

んーなんだか、無理やり感たつぷりな言葉責めでした。

今回は2学年末考査かな？

果たしてバカ四天王は図書館島地下に行くのか？

刮目して次回を待て！！by 麦人

疑問に答えようのコーナー！

裂「では杉やん様の『魔法の秘匿』についてメルディアナ（ry）ダメな点ですね。』だ」

紫「魔法学校では秘匿について一応教えてはいる。だが『魔法』学校なために」

紫「周囲の人間は関係者のみだから気兼ねなしに魔法を使えるんだ。それに旧世界に」

紫「ある魔法学校はメガロの下部組織でもあるため秘匿意識が低いんだ」

紫「ガトウやタカミチもその辺のことを教えてはいるが、薬味はきちんと理解してないんだ」

裂「次はグラムサイト2様の『秘密裏に始末しちゃ駄目でしょうか』だが」

紫「めっちゃやりたい……。けどやったらやっただで面倒なことになるから実行できないんだ」

裂「今回はこの辺で。誤字脱字、言い回しなどに変なところがあればご報告ください」

第45話（前書き）

初投稿から30日です。

それだけで57部も投稿してるなんて・・・。

頑張りすぎじゃね、私？

杉ちゃん様、グラムサイト2様、なおぼん様、神夜 晶様

感想ご意見感謝です！

紫稀側の面々の二つ名募集中なり。

アリカ・木乃香・刹那・ちうたん・アキラ・千鶴・ゆうな・茶々丸、
さよ

さよに斬魄刀か文珠を持たせるならどっち？

斬魄刀が選ばれたら虹霞に決定になります

2学年度期末考査と春休み！

そんな45話、どうぞ！！

第45話

Side・紫稀

やあー、神儀さん家の紫稀さんだ。

キャラが崩壊している？何を今更。電波の力量不足で前からあつたじゃないか。

まあー今回のキャラ崩壊にはそれ以外の理由があるのだが・・・。

ガトウとタカミチ、瀬流彦という風の噂でぬらりひよんがなにやら企んでいるらしい。因みに2学年期末考査の十数日前に噂はキャラツチした。

「そんなわけで学園長室に特攻仕掛けにきました」

おおー、驚いてる。傑作だ。

「そんなわけって、どんなわけじゃ！と言っかいちいち扉を蹴り破らんでくれんかのう・・・」

ああーん？そこかよ。スルーするけどね！

「なにやら企んでるらしいじゃないか、ぬらりひよん？」

「フオツ！？何のことじゃ？」

うわあー誤魔化しきれてないよ。もろ何か企んでますって感じじ

やん！

「・・・期末考査。少年薬味。正式教諭。最終課題」

「ど、どこでそのことを!？」

単語を口に出しただけでバラすとか・・・ないわあー。

「やっぱり何か企んでやがったじゃねーか!? 因みに単語はガトウたちに聞いた噂にあったのを適当に言っただけだ」

「は、はめられた・・・」

いやいや、自爆したのはお前じゃん!? 私は鎌かけただけだし。

「で、何を企んでる?」

「いやなに。今度の期末考査で前回の2学期期末考査の学年順位より5つ上げたら正式な教員にしてあげようかと思ってる」

「ふーん。という事は期末考査の数日前から授業とかはガトウに静観させて少年薬味に全部任せるとか」

それにしても前回は10位だったから学年5位ってところか。できるとかね?」

「そついつごとじゃのう」

「で、他にも何か企んでいるんだろ?」

「な、なんのことかのう」

「いやいや、滅茶苦茶動揺してるじゃねーか。隠せてねーよ!」

「・・・実はのう、今回の期末考査で「ワースト100位の面々を小学生からやり直し」とかって噂を流して、2・Aのバカ四天王じやったかの？その面々に「図書館島地下にある魔法の本」を探しに行かせようかと思っておる」

こいつバカじゃね？

「普通に考えてそれはねーよ!中学卒業までは義務教育だからそんな噂を信じるわけがないだろ。それに魔法の本ってお前本当に魔法秘匿する気あるの?」

あれ?今更だけどやりなおしの部分、バカ四天王なら信じるんじやね?

「魔法の本自体は昔から図書館島探検部の中で噂になっておるやつじゃから心配はいらん」

「それで、そんなことして何か意味があるのか?」

意図が読みきれん。薬味はアスナたちと同室になってないから連れて行かれるわけないし・・・。

「なに、魔法の本搜索隊の中にネギ君を混じらせて、幻の「地底図書館」とか呼ばれてるところで勉強させようと思つてのう」

「ふーん。無断欠勤プラス無断欠席させる気か。私は基本ノータツ

手だからな。私の『家族』に当たる人間が混ざってたら手は出させ
てもらうが」

「分かっておるよ。それじゃ、基本はノータッチで頼んじやぞ」

ああーいやだいやだ。これだからぬらりひよんは……。

そんなやりとりをしたのは数日前。どうやら薬味に最終課題が出
されたようだ。

「えーと、みなさん聞いてください！今日のHRホームルームは大・勉強会に
したいと思います」

いやはや、中々いいこといつてるね。最終課題もらったからだろ
うけど。

「あのっ、そのっ……実はうちのクラスが順位をあげないと
大変なことになるので〜（僕が……）みなさんがんばって猛勉
強していきましょう〜」

何を言ってるんだあの薬味は？

「（おい、シキ。大変なことって一体なんだ？）」

「（前回の学年順位から5つあげないとあの薬味が正式な教員にな

れないだけだ)」

「（それだけなのか？）」

「（それだけだ。恐らくあの薬味は言葉を曲解して成功しなかったらクビになるとでも考えてるんじゃないか？）」

「（やはりあやつはナギの息子ということじゃな）」

「（アリカの言うとおりだな。全く面倒だ）」

「（まあー私はこの件には基本ノータッチだから、どうでもいいけどな）」

うーむ。「大変なこと」の部分でキティが反応するとは思わなかった。アリカも途中から会話に入ってきたしな。

ん？キティとアリカと話してる間に結構進んでるっぽいな。

「では！！お題は『英単語野球拳』がいーと思いまーすっ！！」

野球拳ね。

「よしっ、桜子。そんなに私に裸を見せたいのか。じゃー集中砲火で剥いてやるっか？」

「えっ！？」

今の声は薬味か？私の発言がなければ許可してそうだったしな。もしかして野球拳の内容を知らないのに許可しようとしたのか？

「新任子供教師。さつき私の発言がなければ許可しそうだったが、野球拳の内容を知らんのか？」

「え？野球を取り入れた勉強法じゃないんですか？」

「うわぁー。知らずに許可する気だったのか。」

「野球拳とはじゃんけんをして負けた方が一枚ずつ着衣を脱いでいくゲームだ。今回の場合は英単語の意味を答えられなければ脱ぐところだな。で、桜子は脱がされる準備は十分か？」

「い、いや。ただの冗談だよ。冗談」

「いくらここが女子校でも当然だろ。さらに私や新任子供教師という男がいるんだからな」

本気で提案してたのなら剥いてたけどな！？

「それじゃ、普通に自習形式でいいな。分からないところがあれば私とエヴァ、アリカ、茶々丸、超、葉加瀬、あやか、宮崎、和美、木乃香、さよ、千鶴、新任子供教師のところに質問に来い」

『『『はい！』』』

と言つてもクラスの3分の1が神儀家+関係者だからな。残りの15人を超、葉加瀬、あやか、宮崎、和美、千鶴、薬味が担当するくらいか。

そんな感じで勉強会は終了。放課後なり。というか夜だ。そして私がどこにいるかというのだな……。

図書館島NOW！

なんでそんなところにいるかって？理由は簡単。

例の「やりなおし」の噂のことを風呂場でバカ四天王が知る、信じる

バカブラックが「魔法の本」の噂を出し探しに行くことに

噂をしていた時に腕の立つアスナと木乃香と刹那が風呂場にいたから連行

アスナが全責任を押し付ける為に薬味を連行

『家族』が3人も連行されたので引率 今此処

な？簡単だろ。本当やになっちゃうぜ……。

で、状況説明という名の現実逃避から帰ってみると既に本の安置場所だったらしい。

「あれは伝説のメルキセデクの書ですよ！……」

なんか薬味が騒いでる。それを聞いたバカ四天王が騒ぎ出した。

「ホ、ホンモノも何も、あれは最高の魔法書ですよっ」

こいつって本当に秘匿する気あるの？事あるごとに魔法魔法って
言いやがって……。

「(で、シキ。あれは本物なの?)」

「(本物なわけないだろ。どうみたって写本の写本のそれまた写本の写本に魔力を少々付加した程度のものだ)」

「(という事は偽者の中の偽物という事ですか、シキ君?)」

「(そういうこつたな。ぬらりひよんとは後でOHANASHI
ないとな)」

「(それならウチも連れてってな。ウチも一緒にOHANASHI
するえ)」

「(まあー期末考査終了後でいいか。このあと何らかの理由で地下
に落とされるしな)」

「(私たちは大丈夫だけどもき絵と夕映はどうにかするべきね。ガ
キは楓か古に任せましょ)」

あれ？なんか私たち以外の姿が見えないんだが？話すのに集中し
すぎて周囲の確認が疎かになってたっばいな。

おっ、いたいた。あれは……。英単語TWISTER Ver.

「フオフオフオ……この本が欲しくば……わしの質問に答えるのじゃーフオフオフオ？」

ゴーレムか……。それにしても？なんてつけんなよ、気色悪い。

「（なあーこの声って……まさかな）」

「（この声って……いやいやまさか）」

「（今の声って……そんなわけが）」

「（そのまさかを否定してやろう。あれはぬらりひよんだ）」

上から木乃香、刹那、アスナでそれを否定した私。

「……なにやってんのやー（やってるんですかー）（やってるんだ）」

おー小声で叫ぶなんて器用な真似を良くできるな。さらにハモってるし。

あれ？気付いたらもう最終問題じゃん。

えーと、「お」を楓が、「さ」を綾瀬が、最後の「ら」をまき絵が押すも「ら」じゃなくて「る」だったと言っ。

ということまで地盤を砕かれて地下へゴー！

「楓は子供教師を、アスナはまき絵を、^{クイーフェイ}古菲は綾瀬を、刹那は木乃香を頼んだ」

「」「」「了解でござる（アル）（わかったわ）（わかりました）」「」

うむ、みんな落ちていったな。それじゃ、事情聴取と。

「よしつ、ぬらりひよん。^{つじこ}何か弁解することはあるか？」

「フオ！？紫稀殿、その殺気を抑えてくれんかの。流石に老体には厳しいのじゃが……」

「これでも抑えてる方だ。変態学園長」

「な、なにを言っておるのじゃ!？」

「いやいや、弁解の余地も無いと思うんだが。その位置からの景色はよかつたんだろ？」

「よかつたぞ。……あつ」

掛かった。つつかあれで釣れるって……。

「私とアスナ、木乃香、刹那の4人は明日は欠席にさせてもらうかな。エヴァたちにそのことは伝えてあるから無断欠席ではないな。他の4人と1人は無断欠席と無断欠勤だろうがな。じゃ、アスナたちも待つてるだろうから私は行くぞ」

「分かっておるわい。それじゃ気をつけての」

ああー面倒だな・・・。

そんなわけで地底図書館NOW！

既に日曜日。翌日に期末考査である。私たちは薬味主導による勉強会をしていた。

と言つても私は全く参加していないがな！だって全教科満点取れる私が今更勉強してどうなると？それよりもアスナ、木乃香、剎那に勉強教えていたほうが有意義だって。

バカ四天王は薬味に任せて、3人は私が担当しているということさ！バカ四天王は最初勉強することを渋っていたが、私が色々脅したら自主的に勉強する気になったようだ。

何を言つたかつて？簡単だ。

赤点を取り続けていたら部活動に一切参加できない。とか、高校に進学したときに赤点とつて留年に留年で最終的に自主退学することになって何の仕事にも就けなくなる。って感じかな？

普通に考えれば赤点取りまくつてたら部活動に参加できないと思うんだけどな？麻帆良は一体どうなってるんだか・・・。

バカ四天王の3人が水浴びしているところを薬味が覗いたらしい。最悪だな。どこが英国紳士なのか分からん。

さらにその後、またぬらりひょんが操っているゴーレムに襲われていた。

薬味は当然のように魔法の射手を使おうとしていたが、原作どおり封印していたらしい。それでも秘匿意識が低すぎるよな。

とりあえず落下のとき同様に楓に薬味、アスナにまき絵、古菲に綾瀬、刹那に木乃香を滝の裏にある非常口に運ばせて、私はゴーレムの前に残った。

「よしっじい。ちよつと鬱憤が溜まってるから発散させてもらおう」

「ちよつ、待つと」

誰が待つか。無詠唱で展開した魔法の射手集束閥の5矢を足に乗せて一気に蹴りぬく！

「フォー・・・」

結果、ゴーレムは原型を留めず瓦礫となったとき。終了式の存在があったので無意識に少々手加減をしてしまったようだ。精々全治2週間の肉体的ダメージ程度しか本体であるぬらりひょんにフィードバックしなかったようだ。残念だ。

瓦礫となったのを確認した私はアスナたちに合流して螺旋階段を
どンドン昇っていく。途中にあった壁の問題は全てバカ四天王にや
らせてある。きちんと勉強できていたようでスムーズに進めた。そ
してエレベーターで地上へ。

途中、綾瀬が連絡したのか宮崎とパルが近くで待っていたらしい。

地上へ出た私たちはその場で解散し、それぞれの住居へ。アスナ
たち3人は私と一緒に屋敷の方だったがな。

そんな図書館島地下での勉強合宿を終えた私たちは期末考査を遅
刻もせずに受け、特にアクシデントも無く順位発表へ。

平均点は84・3点。次点の2・Fに3・5点の差をつけての1
位だった。

どうやら薬味がクビというデマを信じたショあやかタコンが神儀家+関
係者と成績上位を除いた下位組を奮起させていたらしい。そこにバ
カ四天王の成績も上がったので一気に1位になったようだ。

ついでにいうとラッキー仮面桜子は食券100枚、準ラッキー仮
面の私は150枚を2・Aの1位に賭けていたので食券長者になっ
ていた。

余談だが、薬味とバカ四天王は無断欠勤+無断欠席によって順位
発表後、新田先生に説教されていた。どうでもいいな。

3月25日火曜日、2学年度終了式。薬味が新年度からの正式な教員として紹介された。

昼間から期末考査のときに手に入れた食券の山で「学年トップおめでとうパーティー」なるものを開催。

終了式を早退したちうたんは初め参加する気はなかったようだが、なにやら嫌な予感がしたので、無理やり参加させることに。私の嫌な予感ほど当たるものはないからな。当たらなくても別にいいんだけどさ！

後で知ったことだが、薬味が早退したちうたんを心配して寮の部屋まで行っていたらしい。参加させてなかったら大変なことになっていたな……。コスプレがばれていただろうし。

そのことを知ったちうたんにも感謝されたよ。本当によかった……。。

2週間の春休み。薬味は鳴滝姉妹とさんぽ部の活動をして頼にキスされたり、シヨ^{あやか}タコンの実家を訪問して襲われかけたらしい。

後、イギリスからのエアメールで薬味の王子説が広まったらしい。

まあー説というか実際に血筋的には王子なんだがな。私は王女の夫だしな。

クラスの連中が逆玉の輿とか言って追いかけ、逃げる為に薬味が空を飛んだりしたらしい。

だから魔法の秘匿はどうしたー！？

4月7日月曜日、3学年度新学期始業式。騒がしくわりと平穏だった春休みが終わりを告げ、波乱の3学年の日々が始まる。

と云うか波乱にさせる企みごとを2、3個考えているのは私だけどね！

S i d e . e n d

第45話（後書き）

色々ためちゃくちや。

何か色々と省いているようないないような？

次回は遂にエヴァ様にスポットを！

原作順守形式で最終的にはエヴァ様がどうなるかな？

疑問に答えようのコーナー！

裂「グラムサイト様からの『しかし、もうぬらりひょん（ry）も
うことも、カンタン。』だ」

紫「そうしたいのは山々だが、そうするとメガロがうるさくなるん
だ」

紫「一応土地を貸すときに過干渉はしなかったからな」

裂「今回はこの辺で。誤字脱字、言い回しなどに変なところがあれば
ばご報告ください」

3 - A組名簿 現在状況（前書き）

2 - A時からの変化状況。

追加者あり。

3 - A組名簿 現在状況

01番 相坂さよ

・・・神儀家関係者、元？幽霊、不老者、パーティーメンバ

┆【仮契約者】

02番 明石裕奈

・・・神儀家関係者、魔法生徒、不老者、ハーレムメンバー

┆【本契約者】、神儀紫稀零崎蒼識ファンクラブ会員、紫稀の婚約者4

03番 朝倉和美

・・・一般人、パパラッチ、彼氏持ち？

04番 綾瀬夕映

・・・一般人、哲学者見習い？、ネギへの生贄、バカ四天王、

夢想する少女

05番 和泉亜子

・・・一般人、保健委員

06番 大河内アキラ

・・・神儀家関係者、魔法関係者、不老者、ハーレムメンバ

┆【本契約者】、紫稀の婚約者6

07番 柿崎美砂

・・・一般人、チア部、彼氏持ち？

08番 春日美空

・・・魔法生徒、シスター見習い

09番 神儀明日菜^{アスナ}

・・・黄昏の姫御子、ハーレムメンバー【本契約者】、紫稀の4人目の妻

10番 神儀アリカ

・・・紫稀の2人目の妻、元王女、ハーレムメンバー【本契約者】、^{神儀紫稀}零崎蒼識ファンクラブ発足者+会長（シリアルNo.0持ち）、今は無きウエスペルタティア王国王位継承権第二位

11番 エヴァンジェリン・A・K・M・神儀

^{ハイテライト・ウオーカー}・^{ダーク・エヴァンジェル}・^{アラルブラ}真祖の吸血鬼、闇の福音、【紅き翼】、紫稀の1人目の妻、ハーレムメンバー【本契約者】

12番 神儀紫稀

・・・エヴァ・アリカ・忍の夫、マナの師匠、このせつの幼馴染、^{アラルブラ}【紅き翼】、大戦の英雄、生ける伝説、神鳴流史上最強の剣士

13番 神儀茶々丸

・・・ガイノイド、エヴァの2代目従者、ハーレムメンバー【本契約者】、紫稀の5人目の妻

14番 神儀真名

・・・紫稀の弟子、半魔族、ハーレムメンバー【本契約者】、紫稀の婚約者1

15番 釘宮円

・・・一般人、チア部

16番 古菲

・・・一般人、バカ四天王

17番 近衛木乃香

・・・神儀家関係者、膨大な潜在魔力の持ち主、ハーレムメン
ンバー【本契約者】、紫稀の婚約者2

18番 早乙女ハルナ

・・・一般人、腐女子

19番 桜咲刹那

・・・神儀家関係者、烏族とのハーフ、神鳴流剣士、ハーレ
ムメンバー【本契約者】、紫稀の婚約者3

20番 佐々木まき絵

・・・一般人、バカ四天王

21番 椎名桜子

・・・一般人、ラッキー仮面、チア部

22番 超鈴音

・・・神儀家関係者、魔法関係者、火星未来人、紫稀と悪巧
みの下準備中、薬味の子孫

23番 長瀬楓

・・・忍者、バカ四天王

24番 那波千鶴

・・・一般人、A組一のゲフンゲフンの持ち主、ハーレムメ
ンバー【未契約者】

25番 鳴滝風香

・・・一般人、中学生？

26番 鳴滝史伽

・・・一般人、中学生？

27番 葉加瀬聡美

・・・神儀家関係者、魔法関係者、天才科学者、マッドサイ
エンティスト

28番 長谷川千雨

・・・神儀家関係者、魔法関係者、認識阻害類に強い耐性持
ち、ハーレムメンバー【本契約者】、紫稀の婚約者5

29番 宮崎のどか

・・・一般人、本屋、男性恐怖症、ネギへの生贄

30番 村上夏美

・・・一般人、普通、演劇部

31番 雪広あやか

・・・シヨタコン、一般人？、お嬢様

32番 四葉五月

・・・一般人？料理人

33番 ザジ・レイニーデイ

・・・魔族、基本無口

おまけ

神儀忍（キスシヨット・アセロラオリオン・ハートアンダーブレイド）

・・・ハイデライト・ウォーカー真祖の吸血鬼、紫稀の3人目の妻、ハーレムメンバー

【本契約者】

チャチャゼロ

・・・キリングドール殺戮人形、エヴァの初代従者、最近影が薄い

ガトウ・カグラ・ヴァンデンバーグ

・・・アラルブラ【紅き翼】、ヘビースモーカー、大戦の英雄、タカミチの師匠、デスマーカー

タカミチ・T・高畑

・・・アラルブラ【紅き翼】、ガトウの弟子、紫稀に少々鍛えられる、師匠さえ違えばもっと強くなってた人、デスメガネ

フィリウス・ゼクト

・・・アラルブラ【紅き翼】、図書館島地下で隠居中、度々旅行に出る、大戦の英雄

アルビレオ・イマ

・・・アラルブラ変態、【紅き翼】、図書館島地下で隠居中、大戦の英雄

ジャック・ラカン

・・・アラルブラ【紅き翼】、魔法世界で隠居中、大戦の英雄、筋肉達磨

クルト・ゲードル

・・・アラルブラ【紅き翼】、元老院議員、神鳴流剣士、新オステイア

総督

近衛詠春 旧姓青山

アラルブラ

・ ・ ・ 【紅き翼】、関西呪術協会会長、大戦の英雄、神鳴流剣士、木乃香の父、一応紫稀の義父予定

近衛木乃璃

・ ・ ・ 関西呪術協会会長補佐、陰陽師、木乃香の母、紫稀の義母予定

ナギ・スプリングフィールド

アラルブラ

・ ・ ・ 【紅き翼】、大戦の英雄、千の呪文の男（自称）、アインの夫、行方不明、一応紫稀の義兄

アイン・スプリングフィールド 旧名 アイネ・アナルキア・エン

テオフュシア

・ ・ ・ 元女王、ナギの妻、行方不明、紫稀の義姉、今は無きウエスペルタティア王国王位所持者

ネギ・スプリングフィールド改め春野薬味

・ ・ ・ 正義の魔法使い（笑）志願者、ナギとアインの息子、一応紫稀とアリカの甥、一応アスナの血縁者、今は無きウエスペルタティア王国王位継承権第一位

近衛近右衛門

・ ・ ・ 関東魔法協会会長、ぬらりひょん^{人間}、木乃香の祖父

瀬流彦

・ ・ ・ 神儀家関係者、魔法先生、比較的まとも、ファーストネーム不明

明石夕子

・・・神儀家関係者、魔法先生？、裕奈の母、神儀紫稀零崎蒼識ファンクラブ会員、紫稀の義母予定

明石教授

・・・神儀家関係者、魔法先生、裕奈の父、ファーストネーム不明、紫稀の義父予定

ガンドルフイーニ

・・・魔法先生、正義の魔法使い（笑）

高音・D・グッドマン

・・・魔法生徒、正義の魔法使い（笑）

佐倉愛衣

・・・魔法生徒、まとも

葛葉刀子

・・・魔法先生、神鳴流剣士、神儀紫稀零崎蒼識ファンクラブ会員

用語解説

バカ四天王・・・アスナがバカじゃないので。

ハーレムメンバー・・・紫稀側ハーレムメンバー
種類 本契約者、仮契約者、未契約者の3つ
【内は契約の

パーティーメンバー・・・ハーレムメンバーにはなれないけど紫稀パーティー（戦闘など）に当たる者、借り契約者のみ

神儀家関係者・・・紫稀が認めている人物や懇意にしている人物、共犯者に当たる人物の総称 前提条件として魔法関係者であること

神儀紫稀 零崎蒼識ファンクラブ・・・【アラルプ紅き翼】が活躍したときにアリカが蒼識紫稀と連想して発足した今は無きウエスペルタイア王国公認のファンクラブ

3 - A組名簿 現在状況（後書き）

次話より3年進級になるのでA組状況を簡潔に説明。

アスナの実年齢は既に100歳を超えているので妻扱い。
他のハーレムメンバーは戸籍的にはまだ14なので婚約者扱い。

紫稀側現状設定【3 - A進級時】（前書き）

錬度の表示方法を変更。

数値などは薬味襲来時より変動なし。

一部該当者のスキルの追加、錬度表示の変更程度。

ヴラドゥツエペシユ様、グラムサイト2様、杉やん様

感想ご意見感謝です！

紫稀側の面々の二つ名募集中なり。

アリカ・木乃香・刹那・ちうたん・アキラ・千鶴・ゆーな・茶々丸、
さよ

さよに斬魄刀か文珠を持たせるならどっち？

斬魄刀が選ばれたら虹霞に決定になります

紫稀側現状設定【3 - A進級時】

名前 表 神儀紫稀 (かみぎ しき) 裏 零崎蒼識 (ぜろざき あおしき)

性別 男 年齢 約3020歳(転生前込み)

種族 人間であり人外 不老不死

懸賞金 元1500万ドル 大戦の英雄となったことで完全失効

総合ランク 最強位の最上

最強位の最上・上・中・下>準最強位>上位の上・中・下>中位の上・中・下>下位の上・中・下
こんな感じ。

ガトウは最強位の下、タカミチと詠春(引退時)は準最強位、ナギとラカン是最強位の上、アルとゼクトと詠春(大戦期)は最強位の中
容姿は能力により変幻自在、老若男女問わず

本来は『空の境界』の両儀 式の外見を男性よりに近づけて14、5歳くらいにした姿
身長は170cm前後、体重は60kg強、服装は基本着流しに革ジャンという式リスペクト

ステータス値(数値はリリなの+ネギま+Fateのをごちゃ混ぜにしてみました) 大戦時から変動なし

筋力：A	+	+	筋力：A	(S)	【SSS+】	☐	SSS
耐久：A	+	+	耐久：A	(S)	【SSS+】	☐	SSS
敏捷：A	+	+	敏捷：A	(SS)	【SSS+】	☐	SSS
魔力：B	+	+	魔力：B	(A)	【SSS+】	☐	SSS
気力：B	+	+	気力：B	(A)	【SSS+】	☐	SSS
神通：B	+	+	神通：B	(A)	【SSS+】	☐	SSS
幸運：SSS+			幸運：SSS+	(SSS+)	【SSS+】	☐	SSS
S+			S+	E			

通常時はリミッター付き

()内はリミッター時での【咸卦法】 or 【闇の魔法】^{マギア・エレベア} (種類を問わず)

【】内はリミッターのみ解放時

☐内はリミッター解放+【咸卦法】 or 【闇の魔法】 (上記と同種)

内はギャグ補正 O H A N A S H Iを受ける

最大数値はSSS+ EX+にしてもよかつたかな?とか思ってた
りするけれど、結局は全存在最強なので意味が無い

リミッターは基本、魔力と気と神通力を優先的に制限 それに伴い
幸運値以外の能力値が劣化

スキル

剣術・武術などに准ずるもの

殆ど最上位レベルの錬度で習得済み だが使う機会があまりない

最上位 >>>> 上位の上 >>> 上位の中 >> 上位の下 >>>>>
中位の上 >>> 中位の中 >> 中位の下 >>>>> 下位の上 >>>> 下位
の中 >> 下位の下 >>> 付け焼刃 > 素人
錬度的にはこんな感じ

ネギま！の世界の魔法・技術

適正は全て 全種類使用可 オリジナル魔法もあり 今後も使用
予定

【闇の魔法】

肉体に魔法を取り込む 相応のリスク有なのだが人間であり人
外なのでリスクは無

基本は【無銘】に装填するので肉体へのリスクはなし

余程のことがない限り通常時・リミッター解放時であろうと肉
体には取り込まない

例外は治癒系を取り込む場合 その時は傷や病気といった害と
判断されるものを悉く回復するのでリスクは無

【太陰道】

【闇の魔法】^{マキア・エレベア}の最終到達点 敵の魔法を己に取り込み己の力
とする

【無銘】に施した術式を起動し、敵の放出系の魔法を【無銘】
に吸収し己の力にする

【咸卦法】

究極技法のひとつ、シユンタクシス・アンティケイメノイン 気と魔力の合一

たまに神通力と気、神通力と魔力、神通力と魔力と気を合一することもある

三つのときは【神卦咸】かんかかんになる

【影の倉庫】

日用品と言われる類のものを収納

本来の姿で使うナイフはここに収納している

【神鳴流】

二の太刀を含む全てを使用可 免許皆伝

神鳴流を原型に自身にしか使えない神鳴流神儀型という亜流を創る

リリなの世界の魔法

全て使用可 飛行魔法以外はあまり使わない

非殺傷設定のSLBはスターライトブレイカーOHANASHIには便利

型月世界の魔法・魔術・能力

作者が知っているものだけ使用可

ゲート・オブ・バビロン

【王の財宝】武器貯蔵庫

アンリミテッド・ブレイド・ワークス

【無限の剣製】使うことはない

【真名解放】宝具を使用しないからやらない

【直死の魔眼】両儀式・遠野志貴を基にした外見のときのみ使用

【魔法】使うことすらない

【その他諸々】詳しくは知らないから使わない

西尾世界の異常・過負荷・能力

ほぼ使用可 基本使いどころがない

【見稽古】使いどころが少ないと言うか既がない

【異常】完成があるため既に完成形しかない だが使うことはあまりない

【過負荷】大嘘憑き、不慮の事故などを使えるが使わない 勝負が一方的になるため

とある世界の魔術・超能力・技術

ほぼ使用可だが殆ど出番はない

能力の使用は演算能力に依存するので魔力・気・神通力は消耗しない 強いて言うなら体力と精神力の消耗

技術は超の未来技術と同等かそれ以上

灼眼のシャナ世界の異能

フレイムヘイズの能力・宝具を使用可

能力の使用には魔力、宝具の使用には神通力を消耗

ぶっちゃけ【闇の魔法】で再現できるから陽の目を見ることはない

【アラストール】コキュートスネギま！世界の魔法使用のための魔法発動体

身に着けていると炎属性の魔法の威力が強化される 因みに創造の力で創ったものなので人格はない

【夜笠】創造で創った魔法・物理衝撃をそれなりに緩和するマン

トにダイオラマ魔法球の仕組みを流用してオリジナルを再現 【無銘】を始めとする武器を数種類収納 【闇の魔法】で『燃える天空』

を付与することで、炎翼を再現出来る様に加工した

基本シヤナを基にした外見の時のみ使用

烈火の炎世界の能力

烈火のように炎術を使用できる

火影忍軍魔道具を全種類保管、使用可

【火竜】 壱式から捌式の炎の型がある

壱式碎羽：腕に炎の刃を形成

貳式崩：炎版のリリなのアクセルシューター

参式焰：炎の鞭

肆式刹那：火竜の目が開いたときにその目を見たものを燃やし尽くす

伍式円：点と点を繋ぐことで出来る面の結界 最低でも3つの点が必要とする

陸式累：相手の心理的に嫌悪している幻術を見せる

漆式虚空：炎版のリリなのデイバインバスター

捌式裂神：死者の肉体と魂を炎に変えて使役する

【火竜合成】

それぞれの炎の型を合成する 虚 崩のように数の多い方から字を書くことが必須であり、二匹以上を合成するにはかなりの精神力を必要とする

【魔道具】

土星の輪：力の基礎能力をアップ

風神：風を操りカマイタチや竜巻を起こす

閻水：水を固定化させて刃にする 氷紋剣という剣術を使える

その他諸々

緋弾のアリア世界の技術・物質

銃や剣やナイフの扱いに長ける

ヒステリア・サヴァン・シンドロームという体質はあるにはあるが稀である

緋々色金といった珍しい物質を使った道具がある

その他の世界の能力・技術

BLEACHやONE PIECE、伝勇伝など使用可 だが使うことはない

ネギま！世界の魔法などで再現はする 特にBLEACHの斬魄刀とか

特殊スキル

創造

あらゆるものを創ることが出来る

仕組みなどの知識も同様に貰っているため完璧なものが出る

完全変化

外見を老若男女問わず完全に変化させることが出来る

副次的なもので他者の肉体を成長・退化させることも可（不老者にも作用する）

後者の使用は大戦終了後から原作1巻開始までの20年間に何度か予定

アスナには使用不可 害あるものではないが魔法無効化能力によって弾かれる

マジックキャンセル

【ノワール】モデルは白純里緒

【ブラン】モデルは荒耶宗蓮

【シャナ】モデルはシャナ 変化するときには肉体年齢15歳Ver

アカシック・レコードへのアクセス

あらゆるものの現在と過去の『記録』を閲覧可

稀に未来を閲覧することも出来るが基本、未来は閲覧不可

生物の『記憶』を閲覧することは出来ない

黄金律

お金に困らない 数値的にはSS相当

幸運

数値的には最大値 それでも麻帆良のラッキー仮面・椎名桜子のほうが高い

能力発現

他者にネギま！世界以外の能力を副作用なしで発現させることが出来る

とある世界の超能力など

【王の財宝】などといった強力ものは不可

【魔眼】劣化品のみを発現させる

現状使う必要性がない

上限値撤廃

鍛えれば鍛えるほど強くなる だが現状では殆ど意味がなくなっている

バクティオー
本契約・仮契約

紫稀の力が強力すぎるため従者にはなれず主にしかなれない
仮契約すると相手に神通力が流れ神性を持つことになり、幸運値
が上がり不老者になる

本契約すると上記に加え軽い不死性をもつことになる
本契約は破棄出来ないが、仮契約は破棄出来、破棄後不老性がな
くなる

1人と本契約しても他の人との本契約・仮契約は無効にならない
本契約は最大12人、仮契約は20人くらいまではいける

現在の契約者

本契約：エヴァ、アリカ、忍、アスナ、マナ、茶々丸、木乃香、
刹那、ゆーな、千雨、アキラ

仮契約：さよ

二つ名 外見時で分けてはいるが既に同一人物だと知られているの
で意味は無い

紫稀時

レジエント・アライヴ

【生ける伝説】

【鎮圧者】

【麻帆良の最終兵器】

ム男】

【麻帆良最強パーティーの要】

ノワール時

【破滅を齎す黒】

【吸血姫の守護者】

カウンター・キル

ブラン時

【白き救済者】

【幻の聖人】

シャナ時

【炎髪灼眼】

名前 エヴァンジェリン・A・K・M・神儀 (エヴァンジェリン・
アタナシア・キティ・マクダウエル・かみぎ) 裏 零崎音織
(ぜろぞき おとおり)

性別 女 年齢 約600歳

種族 吸血鬼(真祖) 不老不死

懸賞金 元1000万ドル 大戦の英雄となったことで完全失効

総合ランク 最強位の最上と上の間

容姿は身長が150cm前後、スリーサイズは15歳の平均より大きい

ステータス値

筋力	: S +	(S S S +)	【 S S S + 】	
耐久	: A A A +	(S S S)	【 S S S + 】	
敏捷	: A A A +	(S S S)	【 S S S + 】	
魔力	: S S	(S S S +)	【 S S S + 】	
気力	: A A A +	(S S S)	【 S S S + 】	
神通	: A A A +	(S S S)	【 S S S + 】	
幸運	: S S	(S S)	【 S S 】	E

基本リミッターなし

() 内は【闇の魔法】使用时

【】内は紫稀からの供給時

神通力は紫稀との本契約によるもの
幸運値の高さも本契約によるもの

紫稀の麻帆良入り時より神通力がA A AからA A A +に

それに伴いブースト時の出力もアップ

スキル

剣術・武術に准ずるもの

基本的に使用可

メインは合気柔術 錬度は最上位

合気柔術以外の錬度は上位の上クラス

ネギま！世界の魔法

適正は氷・闇 一応全種類使用可 適性により威力などが増減

氷・闇>>水>>雷・風>土>>>>>光・火・癒

【闇の魔法】

肉体に魔法を取り込む 吸血鬼の真祖なため肉体的リスクは無

取り込むのは氷・闇系統が主流 たまに風や雷も取り込む

本契約・仮契約

紫稀と本契約

名前表記 ATHANASSIA ECATERINA MACDO

VELL EVANGELINA

称号 月に愛されし者

色調 虹 (prisma)

徳性 愛 (caritas)

方位 北 (septentrio)

星辰性 月 (Luna)

アーティファクト 月の加護

形状は防具類なら自由に变化する

能力

名の通り夜間に最大性能を發揮、日中は1ランクダウン

1・最大で準最強クラスの魔法攻撃を無力化^{物理}、最強位下位クラスからは緩和する^{衝撃}

日中では上位の上クラスまでを無力化^効

2・対象を不可視にする 同時に気配遮断なども発動 最大で最強位中位クラス相応まで發揮

ただし気配遮断は日中に最大性能を發揮する

これは日中でも月が出ているのに見えるのにくいというのを逆手にとっている

契約

チャチャゼロとドール契約

二つ名

ダークネスアイス・エンブレスターク・エヴァンジェル

【闇氷の女帝】 【闇の福音】 【人形使い】 【不死の魔法使い】 【

マガ・ノスフェラトウ

童姿の闇の魔王】 他

名前 チャチャゼロ

性別 不明 年齢 約500から600歳

種族 自動人形

懸賞金 元300万ドル エヴァたちが大戦の英雄となったことで
同時に完全失効

総合ランク 準最強位

ステータス値

筋力：A A A +

耐久：A A +

敏捷：S S

エヴァから供給される魔力量によって増減する
人形だから魔力も気も神通力も幸運も関係なし
人形のため基本スペックは大戦時から変動なし

スキル

剣術？

とりあえず切断に関しては最上位クラス

契約

エヴァとドール契約

二つ名

【殺戮人形】キリングドール 【吸血姫の従者】

名前 神儀アリカ (かみぎ ありか) 旧名 アリカ・アナル
キア・エンテオフユシア

性別 女 年齢 40歳前

種族 人間 不老と軽い不死

総合ランク 最強位の下

容姿は肉体年齢を14、5歳に下げたくらい

ステータス値

筋力：AA+ (SS+)
耐久：AAA (SSS)
敏捷：AAA (SSS)
魔力：S+ (SSS+)
気力：AAA (SSS)
神通：AAA (SSS+)
幸運：SS (SS)

基本リミッターなし

() 内は紫稀からの供給時

神通力は紫稀との本契約によるもの
幸運値の高さも本契約によるもの

スキル

剣術・武術に准ずるもの

基本的に使用可

錬度は上位の中クラス

ネギま！世界の魔法

全属性に中位魔法使い同等の適正 全種類使用可

上位魔法は高位・最高位クラスの魔法使いに比べれば威力・範囲が数段劣るものの魔法使いとしては充分

王家の魔力を使用できる

本契約・仮契約

紫稀と本契約

名前表記 CAMIGI ARICA

称号 太陽に愛されし者

色調 虹 (prisma)

徳性 知恵 (sapientia)

方位 中央 (centrum)

星辰性 太陽 (Sol)

アーティファクト 太陽の加護

形状は武器と防具の一体型

武器は剣のみ、防具類なら自由に变化する

能力

名の通り太陽が昇っているときに最大性能を発揮、夜間は1ラ

ンクダウン

1・最大で準最強クラスの物理攻撃^{衝撃}を無力化^効、最強位下位クラスからは緩和する

夜間では上位の上クラスまでを無力化^効

2・対象を不可視にする 同時に気配遮断なども発動 最大で最強位中位クラス相応まで発揮

ただし気配遮断は夜間に最大性能を発揮する

夜間に太陽は昇っていないからである。

3・氷・水・闇属性に対して絶大な攻撃力を誇る剣（晴天時、数值的にS）

快晴時ならばさらに威力があがる（数值的にSS）

曇天時は0・5ランクダウン（AAA+）夜間は1・5ランクダウン（AA+）

エヴァの「月の加護」の反対版であり王家の魔力があるため魔法に対する無力化^効がない

「月の加護」と違いこちらには剣といった攻撃手段がある

二つ名 まだなし

名前 神儀明日菜（かみぎ あすな） 旧名 アスナ・ウエス
ペリーナ・テオタナシア・エンテオフュシア

性別 女 年齢 大体120歳

種族 人間 不老と軽い不死

総合ランク 最強位の下

容姿は原作より少し背が高く、スタイルも若干いい

ステータス値

筋力：SS	(SSS+)
耐久：SS	(SSS+)
敏捷：SS	(SSS+)
魔力：AAA	(S+)
気力：AAA+	(S+)
神通：AAA	(SSS+)
幸運：SS	(SS)

基本リミッターなし

() 内は紫稀からの供給時

神通力は紫稀との本契約によるもの

幸運値の高さも本契約によるものスキル

スキル

剣術・武術に准ずるもの

剣術と体術を使用可

メインは剣術 錬度は上位の上クラス

体術は上位の中クラスから上位の下クラス

ネギま！世界の魔法

マジックキャンセル
魔法無効化能力

紫稀が創造した偽ぎ・破魔はまのつるぎ乃劍なまによって「無極トメイ・アルカイスアナルキアス而太極斬」トメイ・アルカイスアナルキアスを行使出来る

咸卦法を使用可

【咸卦法】

究極技法のひとつ、シユンタクシス・アンテイケイメノイン気と魔力の合一

本契約・仮契約

紫稀と本契約

名前表記 CAMIGI ASUNA

称号 傷だらけの戦士

色調 銀 (argentum)

徳性 勇氣 (audacia)

方位 東 (oriens)

星辰性 火星 (Mars)

アーティファクト キマノツルギ (鬼魔之劍)

形状 ハマノツルギの大劍、フルトサオガ『吸血鬼』の西洋劍、ハリセンの3つに変化

能力 ハマノツルギとフルトサオガ『吸血鬼』の合体版。

フルトサオガ魔力や気を流すことで吸血鬼の能力が発動する。

ハマノツルギの能力も付加されているため、トメイ・アルカイスアナルキアス『無極而太極斬』キアースを使用できる。

二つ名

【黄昏の姫御子】

名前 神儀忍 (かみぎ しのぶ) 本名 キスショット・アセ
ロラオリオン・ハートアンダーブレード

性別 女 年齢 約600歳

種族 吸血鬼(真祖) 不老不死

総合ランク 最強位の中

容姿は阿良々木暦が初めて会った時のまま

ステータス値

筋力	: S +	(S S S +)
耐久	: S	(S S S +)
敏捷	: S	(S S S +)
魔力	: S S	(S S S +)
気力	: A A A	(S S S)
神通	: A A A	(S S S +)
幸運	: S S	(S S)

基本リミッターなし

()内は紫稀からの供給時

神通力は紫稀との本契約によるもの
幸運値の高さも本契約によるもの

スキル

剣術・武術に准ずるもの

基本的に使用可

メインは剣術 錬度は最上位クラスと上位の上クラスの間
他の錬度は全て上位の上クラス

ネギま！世界の魔法

適正はエヴァと全く同じ 威力や範囲などは若干エヴァより劣る

西尾世界の能力

怪異の中の怪異、吸血鬼の力の行使

怪異殺し「心渡り」を使う

本契約・仮契約

紫稀と本契約

名前表記 CAMIGI SINOBU

称号 星に愛されし者

色調 虹 (prisma)

徳性 信仰 (fides)

方位 北 (septentrio)

星辰性 太陽 (Sol)

アーティファクト 星の加護

形状 武具と防具の一体型
防具は羽衣のみ、武具は変幻自在能力

夜明け時と夕暮れ時のそれぞれ2時間に最大性能を発揮、その他の時間は1ランクダウン

1・最大で準最強クラスの魔法攻撃を無力化^{物理 衝撃 効}、最強位下位クラスからは緩和する

性能ダウン時では上位の上クラスまでを無力化^効

2・対象を不可視にする 同時に気配遮断なども発動 最大で最強位中位クラス相応まで発揮

3・発動時、星の加護を中心に半径20メートル内の月の加護と太陽の加護の性能を1ランク強化

二つとも範囲内であれば1・5ランク強化する

エヴァの「月の加護」とアリカの「太陽の加護」の性能補助
「太陽の加護」と違いこちらにはあらゆる武具に変化する。

二つ名

【怪異殺し】

名前 神儀真名 (かみぎ まな) 本名：マナ・アルカナ

性別 女 年齢 大体14歳

種族 半魔族(人間と魔族のハーフ) 不老と軽い不死

総合ランク 最強位の下

容姿は原作と同等

ステータス値

筋力：A A A	(S S)	【 S S S + 】
耐久：A A +	(S +)	【 S S + 】
敏捷：A A A +	(S S +)	【 S S S 】
魔力：A A A +	(S S +)	【 S S S 】
気力：A A A +	(S S +)	【 S S S 】
神通：A A	(A A)	【 S S S + 】
幸運：S S	(S S)	【 S S 】

基本リミッターなし

() 内は魔族化した時のスペック

【 】 内は紫稀からの供給時

神通力は紫稀との本契約によるもの

幸運値の高さも本契約によるものスキル

スキル

剣術・武術に准ずるもの

銃器に関しては最上位クラス

剣の扱いに関してはと上位の上クラスと中クラスの間で中クラス寄り

他は上位の下クラス

ネギま！世界の魔法

魔族とのハーフなので使用可能か不明

左目に魔眼がある

緋弾のアリア世界の技術・物質

銃や剣やナイフの扱いに長ける

紫稀に師事していたこともあり「銃弾撃ち」^{ピリヤード}「鏡撃ち」^{ミラー}「弾丸切

り」「跳弾」を使いこなす

「バリッ^{バリッ}・トウ・ドウ」をこなす

本契約・仮契約

紫稀と本契約

名前表記 CAMIGI MANA

称号 刀剣と銃を体現せし者

色調 黒 (nigror)

徳性 節制 (temperantia)

方位 西 (occidens)

星辰性 冥王星 (Pluto)

アーティファクト 貌なき剣銃

形状 二振りの刀、剣、ナイフ、二挺の銃への任意による形状変化

能力 障壁を破壊する切れ味の鋭い刀、剣、ナイフと同様の魔力

弾を撃てる銃

二つ名

【双剣双銃】
カトラ

名前 神儀茶々丸 (かみぎ ちゃちゃまる)

性別 女 年齢 大体2歳

種族 ガイノイド

総合ランク 準最強位

容姿は原作の最新話よりも人間に限りなく近い

ステータス値

筋力	: S	(S S S +)
耐久	: S +	(S S S +)
敏捷	: A A A +	(S S S)
魔力	: A	(A A A)
気力	: A	(A A A)
神通	: A A A	(S S S +)
幸運	: S S	(S S)

基本リミッターなし

() 内は紫稀からの供給時

神通力は紫稀との本契約によるもの
幸運値の高さも本契約によるものスキル

ガイノイドのため魔力、気、神通力はほぼ関係なし

スキル

剣術・武術に准ずるもの

無手に関するものは上位の中クラスよりも上

それ以外は上位の中クラスより若干劣る

ネギま！世界の魔法

ガイノイドのため使用不可

本契約・仮契約

紫稀と本契約

名前表記 CAMIGI CHACHAMARU

称号 悩み中

色調 白(album)

徳性 愛(caritas)

方位 西(occidens)

星辰性 金星(Venus)

アーティファクト 悩み中

形状 悩み中

能力 悩み中

二つ名 まだなし

名前 近衛木乃香 (このえ このか)

性別 女 年齢 大体14歳

種族 人間 不老と軽い不死

総合ランク 準最強位

容姿は原作よりもスタイルがいい

ステータス値

筋力：A	(SS)
耐久：A+	(SS+)
敏捷：A+	(SS+)
魔力：SS	(SSS+)
気力：AA+	(SS)
神通：AAA	(SSS+)
幸運：SS	(SS)

基本リミッターなし

() 内は紫稀からの供給時

神通力は紫稀との本契約によるもの
幸運値の高さも本契約によるものスキル

スキル

剣術・武術に准ずるもの

合気柔術をメイン

メインの合気柔術の錬度は上位の中クラス

その他の錬度は中位の上クラス

ネギま！世界の魔法

適正は癒し・光・風 適正属性の魔法は全部使用可 適性によ

り威力などが増減

癒・光・風 >>>> 水・土 >>> 火・氷・雷 >>>>>>>>> 闇

魔法の射手を無詠唱溜めなしで69矢・最大で299矢、詠唱で

最大1001矢まで展開出来る

【陰陽術】

符術や式紙を扱う

とある世界の魔術・超能力・技術

ハイポイント座標移動と空間移動テレポートの混合型、ハイブテレポート空標移動をレベル5相当を使用可

戦闘時には使わず、主に逃走時に使用する

紫稀の特殊スキルにより発現した

本契約・仮契約

紫稀と本契約

名前表記 CONOE CONOCA

称号 癒しを運びし巫女

色調 白 (album)

徳性 愛 (caritas)

方位 北 (septentrio)

星辰性 木星 (Jupiter)

アーティファクト 医療神の蛇杖、健康神の蛇杯

形状 蛇が一匹巻き付いた装飾のある杖と杯

能力

杖：怪我人を全快、魔力・気を回復させる 1日に6回使用可

杯：病気を全快 1日に2回使用可 体力を回復させる 1

日12回使用可

刹那と仮契約 (主)

二つ名 まだなし

名前 桜咲刹那 (さくらざき せつな)

性別 女 年齢 大体14歳

種族 半妖 (鳥族と人間のハーフ) 不老と軽い不死

総合ランク 準最強位

容姿は原作よりもスタイルがいい

ステータス値

筋力：A A A	(S S +)
耐久：A A A +	(S S S)
敏捷：S +	(S S S +)
魔力：A A +	(S S +)
気力：S	(S S S +)
神通：A A A	(S S S +)
幸運：S S	(S S)

基本リミッターなし

() 内は紫稀からの供給時

神通力は紫稀との本契約によるもの
幸運値の高さも本契約によるものスキル

スキル

剣術・武術に准ずるもの

剣術をメイン

メインの剣術の錬度は上位の上クラスより上
その他の錬度は上位の中クラスか少し上

ネギま！世界の魔法

【神鳴流】

紫稀に教わり二の太刀を使用可 免許皆伝相当

【陰陽術】

剣術の補助程度

本契約・仮契約

紫稀と本契約

名前表記 SACURAZACI SETUNA

称号 空を舞いし剣士

色調 黒 (nigror)

徳性 正義 (justitia)

方位 北 (septentrio)

星辰性 太陽 (Sol)

アーティファクト 斬魄刀

形状 初期は斬月の始解状態 解号などで天鎖斬月と千本桜景蔵に変化する

能力

千本桜：意思を持つて解号の「散れ、千本桜」唱えると始解と卍解の能力を使用可能になる

斬月：卍解の名「天鎖斬月」を使うという確たる意思を持って唱えることで使用可能になる

この状態で魔力・気・神通力のどれかを刀に喰わせることで月牙天衝を使用可

木乃香と仮契約（従者）、称号やアーティファクトは原作通り

二つ名 まだなし

名前 明石裕奈 (あかし ゆうな)

性別 女 年齢 大体14歳

種族 人間 不老と軽い不死

総合ランク 準最強位

容姿は原作魔法世界突入時と同等

ステータス値

筋力：A A +	(S S +)
耐久：A A +	(S S +)
敏捷：A A A +	(S S S)
魔力：A A A	(S S)
気力：A A +	(S +)
神通：A A A	(S S S +)
幸運：S S	(S S)

基本リミッターなし

() 内は紫稀からの供給時

神通力は紫稀との本契約によるもの
幸運値の高さも本契約によるものスキル

スキル

剣術・武術に准ずるもの

銃器の扱いと体術全般

銃器の扱いは上位の上クラス

体術の錬度は上位の下クラスより劣る程度

ネギま！世界の魔法

闇・影以外の属性にそれなりの適正 中級呪文までは使用可

サキタ・マギカ

魔法の射手を無詠唱溜めなしで39矢・最大で101矢、詠唱で最大333矢まで展開出来る

本契約・仮契約

紫稀と本契約

名前表記 A C A S I J U N A

称号 元気な射撃手

色調 金 (a u r u m)

徳性 勇気 (a u d a c i a)

方位 東 (o r i e n s)

星辰性 太陽 (S o l)

アーティファクト 貌なき銃砲

形状 様々な銃や砲に変化

能力 自身が想像した銃や砲に変化 属性などはその時の形状によって変化

二つ名 まだなし

名前 長谷川千雨 (はせがわ ちさめ)

性別 女 年齢 大体14歳

種族 人間 不老と軽い不死

総合ランク 準最強位

容姿は原作よりスタイルがいい

ステータス値

筋力：A A	(S+)
耐久：A A +	(SS)
敏捷：A A A	(SSS)
魔力：A +	(S+)
気力：A +	(S+)
神通：A A	(SSS+)
幸運：S S	(SS)

基本リミッターなし

() 内は紫稀からの供給時

神通力は紫稀との本契約によるもの
幸運値の高さも本契約によるものスキル

スキル

剣術・武術に准ずるもの

体術や槍術、棒術を使用可

錬度は上位の中クラスより劣る

ネギま！世界の魔法

雷・光・闇に並以上の適正あり 風・影に並程度の適正、その他は並以下 中級呪文までは使用可

サキタ・マギカ魔法の射手を無詠唱溜めなしで49矢・最大で149矢、詠唱で最大399矢まで展開出来る

本契約・仮契約

紫稀と本契約

名前表記 H A S E G A W A T I S A M E

称号 桃色の閃光

色調 虹色 (prisma)

徳性 節制 (temperantia)

方位 中央 (centrum)

星辰性 土星 (Saturnus)

アーティファクト レイア少佐クセリボルティア少将ト R H E、B D A

形状 リリなのの R H E と B D A と同様能力

なのはとフェイトの戦闘方法をトレースし実行できる 魔砲も撃てる 使用時の思考能力の高速化

R H E と B D A は原作千雨のアーティファクト『スケプトルム・ウィルトウアーレ力の王笏』

も兼ねている

二つ名 まだなし

名前 大河内アキラ (おおこうち あきら)

性別 女 年齢 大体14歳

種族 人間 不老と軽い不死

総合ランク 上位の中

容姿は原作魔法世界突入時よりも若干スタイルがいい

ステータス値

筋力	: A A +	(S S S)
耐久	: A +	(S S S)
敏捷	: A A	(S S +)
魔力	: A A	(S S)
気力	: A A	(S S)
神通	: A A A	(S S S +)
幸運	: S S	(S S)

基本リミッターなし

() 内は紫稀からの供給時

神通力は紫稀との本契約によるもの
幸運値の高さも本契約によるものスキル

スキル

剣術・武術に准ずるもの

棒術や槍術をメインに無手での合気術や柔術

錬度は全て上位の下クラス相当

ネギま！世界の魔法

水・氷属性に高い適正 他は並程度の適正 中級呪文まで使用可

魔法の射手を無詠唱溜めなしで29矢・最大で101矢、詠唱で

最大299矢まで展開出来る

本契約・仮契約

紫稀と本契約

名前表記 OOCOUTI ACIRA

称号 水に愛されし者

色調 銀 (argentum)

徳性 希望 (spes)

方位 南 (auster)

星辰性 水星 (Mercurius)

アーティファクト 海神の三叉鉾

形状 三叉の鉾

能力

生物体内以外に存在する水の操作 水棲生物の支配
水中での自由移動・呼吸可

二つ名 まだなし

名前 相坂さよ (あいさか さよ)

性別 女 年齢 大体64歳

種族 人間(元幽霊?) 不老

総合ランク 準最強位

容姿は原作同様

ステータス値

筋力	: A +	(S +)
耐久	: A A	(S S S)
敏捷	: A A	(S S +)
魔力	: A A	(S S)
気力	: A +	(S +)
神通	: A A A	(S S S +)
幸運	: S S	(S S)

基本リミッターなし

() 内は紫稀からの供給時

神通力は紫稀との仮契約によるもの
幸運値の高さも仮契約によるものスキル

スキル

剣術・武術に准ずるもの

体術を基本に使用可

メインの合気柔術の錬度は上位の中クラス

その他の体術の錬度は上位の下クラスに若干劣る

剣術などの錬度は中位の上クラスよりは上だが、体術より錬度は劣る

ネギま！世界の魔法

全てに並程度の適正 中級呪文まで使用可

サキタ・マギカ魔法の射手を無詠唱溜めなしで59矢・最大で199矢、詠唱で

最大499矢まで展開出来る

本契約・仮契約

紫稀と仮契約

名前表記 A I S A C A S A Y O

称号 悩み中

色調 堇色 (viola)

徳性 信仰 (fides)

方位 北 (septentrio)

星辰性 天王星 (Uranus)

アーティファクト 悩み中

形状 悩み中

能力 悩み中

二つ名 まだなし

紫稀側現状設定【3 - A進級時】（後書き）

茶々丸とさよのアーティファクトはまだ悩み中。
どうするかなー・・・。

超一流や達人クラスだとどちらが上位か分かりにくいとの声があったので変更してみました。

疑問に答えようのコーナー！

裂「ヴラドゥツェペシュ様の『そっぴや紫稀は（ry）ナギとかは？』だそうだ」

紫「私に王位継承権はない。王位継承権を持っているのはアイネ姫は女王だから除外して」

紫「現状では薬味とアリカの二人だ。優先順位は女王はアイネ姫だから薬味のほうが上だ」

紫「王国が健在だったのなら薬味が18歳になる前にアイネ姫が亡くなった時アリカに簡易の」

紫「王位が回ってくる。そして薬味が18歳になったときに薬味が正式に王位につくことになる」

紫「18歳になる前に薬味が死んだ場合、いるなら薬味の実弟妹が18歳になった時に正式に」

紫「王位が移る。いなかった場合はアリカが正式に王位につき、私とアリカの子供に継承権が」

紫「発生する。だから私とナギには王位継承権はない。爵位とかは与えられるがな」

紫「まあー国が崩落したから意味無いんだけどな」

裂「今回はこの辺で。誤字脱字、言い回しなどに変なところがあれば」報告ください」

第46話(前書き)

【総PV】129万【総ユニーク】1万1千突破!!
こんな駄文なのにいいのかな？

杉ちゃん様、Dai様、なおぼん様
感想ご意見感謝です！

紫稀側の面々の二つ名募集中なり。
アリカ・木乃香・刹那・ちうたん・アキラ・千鶴・ゆーな・茶々丸、
さよ

茶々丸とさよのアーティファクトは存外悩む。
さよにはアスラクラインから引つ張ってこようかな。

ネギま！で新しいの書きたい。
ネギの双子の兄弟姉妹のどれかに転生タイプで。

桜通りの吸血鬼序章！
そんな46話、どうぞ!!

第46話

Side・紫稀

4月8日火曜日、3学年1学期開始。それに伴い企み事1を始動。下準備は万全。ぬらりひよんにも協力させている。

内容はなにかつて？原作既読な読者なら簡単だろ。3巻だよ、3巻。

『3年！A組！！ネギ先生ーっ？ガトウ先生ーっ！高畑先生ーっ
『！』

（バカどもが……）

（アホばっかです……）

神儀家＋関係者以外は騒いでやがるし……。少しは静かに出来ないもんかな……。

「えと……改めまして3年A組担任になりました、ネギ・スプリングフィールドです。これから来年の3月までの1年間よろしくお願いします」

ああー最悪だな……。

「3年A組の副担任になったガトウ・カグラ・ヴァンデンバーグだ。ネギ少年に経験を積ませる為に担任補佐である副担任になった」

ガトウは副担任になったのか……。

「担任・副担任補佐になった高畑・T・タカミチです。僕は出張が多いからあまり顔を出せないけどよろしくね」

タカミチ、いらなくね？

『はーい』

『よろしくー？』

「ん？」

ようやく薬味はこっちを見たか。私とキティでさつきからずっと殺気をほんの僅か視線に込めてたのに今更気付くのかよ。

ん？名簿を見てるな。何か書いてるのか？ちょい確認してみるか。

『ガトウ、タカミチ。お前らクラス名簿に何か書いて少年薬味に渡したのか？』

『薬味？ああーネギ少年のことか。俺は知らんが、タカミチ何か書いたのか？』

『あつ、はい。シキさんとエヴァのところ困った時相談するようにつて』

『』
『』
『』

『な、なんですか、その視線は!?!』

『いや、さ。いくらなんでも、それはねーよ』

『俺もそれは無いと思うぞ、タカミチ。確かにエヴァンジェリンは面倒見がいいけど流石に・・・なあ?』

タカミチは一体何を考えてそんなこと書いてんだよ・・・。

『てか、エヴァのところを書くのは分かるけど、なんで私のところにまで書いてんだよ!』

『何だかんだ言ってもシキさんも面倒見がいいからですけど?』

『やめてくれ・・・。私は『家族』に当たる人間以外はどうでもいいんだよ・・・。ナギやアイネ姫ならともかくその子供まで面倒見る気はない』

知り合いの息子だからって面倒見てやるのなら他にも色々面倒見てやらなきゃならんじゃないか。

ん? 誰か着たな。しずなか。てことは。

「ネギ先生、今日は身体測定ですよ。3・Aのみんなもすぐ準備してくださいね」

「あ、そうでした。ここですか!?! わかりました、しずな先生」

『よし、ガトウ、タカミチ。即刻教室を出るぞ。薬味が次の何かを言う前にだ!』

『わ、分かつた！』^{りました}』

嫌な予感がするから私は念話で二人に指示を出して、ガトウとタカミチが何のことが分からないけどそれに従う。

「で、では皆さん。身体測定ですので……えと、あのっ、今すぐ脱いで準備してください」

「ネギ先生のエッチ〜ツツ？」

「うわ〜〜ん。まちがえました！」

か、間一髪だぜ……。

「シキのお陰で助かった……」

「本当ですね……」

「私の嫌な予感ほど当たるものはない……。それにしてもあの薬味。私の嫁たちの裸体を見ようとしたのか……。どんなお仕置きしてやるのかな？」

「シ、シキ。ネギ少年はまだ子供だから勘弁してやってくれよ」

「そ、そうですね、シキさん。他の人から見たら児童虐待で通報されかねませんよ」

「……しょうがないか。今回は不問にしよう」

さて、終わるまで廊下で待つとするかね。私は測定する必要ないしな。好きに体を変化させれるし。

Side・end

Side・エヴァ

ぼーやは本当にあのナギとアイネ女王の息子なのか？全くダメダメではないか。

さつきも考えなしに脱ぐように言っし。。。。

「あれー？今日ゆーなは？」

「。。。。さあ？」

そういえば何でシキはあんな企みごとをしようと思ったんだ？
体どういっつもりなんだ？

「いいんちよ65kgね」

「ひいっ！？桜子さんマジメにお測りなさーい」

「冗談じゃーん」

騒がしい奴らだ。。。。考え事も出来やしない。。。。

「ねえねえ、ところぞ。最近寮ではやってる。。。。あのウフ

サぞつ思つっ。」

「え……なによソレ柿崎」

「ああ、あの桜通りの吸血鬼ね」

そういえば春日美空は魔法生徒だったか。

「えー何！？何ソレー！？」

「知らないの？しばらく前からある噂だけど……何かね……満月の夜になると出るんだって。寮の桜並木に……真っ黒なボロ布につつまれた……血まみれの吸血鬼が……」

「キ……キヤーツ」

ふふふ、そこまで恐怖されると嬉しいではないか。

「（エヴァ。エヴァ。その噂ってどういう事？）」

「（エヴァさん、一体どういう事なんですか？その噂の正体って、もしかしてあなたですか？）」

「（ん？アスナと刹那か。噂の正体は私であっているが、今回のことはシキが考えたものに私が協力しているだけだ。学園長のじじいも何枚か噛んでいるらしいが……）」

「（じゃー、その目的ってのは分かってないの？）」

「（目的と言うか理由は分かっているよ。何でもあのぼーやを怖が

らせたいとか何とか。じじいの方は経験を積ませたいって話だったかな?」

「なるほど。つまり学園長はネギ先生に戦闘の経験をさせて向上心や自信を持たせたいという事ですか。エヴァさんなら手加減の仕方も分かっている上に、女子供は殺さないという矜持がありますからね。そしてあわよくばネギ先生に勝たせて、箔をつけたいといったところでしょ?」

「(学園長のほうは分かったわ。けど、シキの目的はいつたい・・・? 怖がらせただけってのも何か違う気がするのよね・・・)」

「(私もシキの考えていることは分からん。しかしナギには『インフェルヌス・スコラスティクス登校地獄』なんてふざけた呪いを掛けられた恨みもあるからね。ぼーやで晴らさせてもらおう)」

「(あまりやりすぎないようにね。やりすぎることがあったら流石に止めさせてもらうけど。一応あいつが魔法使いつて知ってるのは现阶段では私しかいないことになってるからね)」

「(分かっているさ。やりすぎていらぬ問題を起こすつもりもないからな)」

「(それならいいわ)」

ん? 廊下の方が騒がしいな? 誰か来たのか?

「先生ーっ大変やーっ。ゆーなが・・・ゆーながーっ」

「何!?! ゆーながどうしたの!?!」

おいおい……。そんな格好で扉を開けるんじゃない……。

Side・end

Side・紫稀

3 - A教室前廊下Now!

私たちが何やってるかって？少年薬味を混ぜて麻雀やってるんだ、4人で。

薬味にはルールと役の説明をガトウとタカミチにさせた。流石天才少年か。すぐに理解してくれたよ。

「それにしても彼女たちは長いですね」

「そうだな。あ、それポンド」

「なんか楽しそうですよねー。それチーです」

「騒がしいけどな。槓、ツモ！嶺上開花、対々和、三暗刻、清一色、ドラ3！！子ツモの数え役満は16000・8000だ」

嶺上開花っていいよね。咲読んだとき憧れたね！というか咲の槓したらどうにかなるのは謎だけどさ……。

「親のタカミチは飛んだな。 - 6000だ」

「ま、またですか……。シキさん、強すぎですよ。何連勝する気ですか……」

「ど、どんまい、タカミチ！」

「タカミチが弱いだけなんじゃね？私は堅実にやってるだけだし」

タカミチが何か言ってるが知らんね。それに、どうやら教室の中では吸血鬼の話題のようだしな。

ん？なんか走ってきてるな？あれは……。亜子か。

「先生ーっ大変やーっ。ゆうなが……。ゆうながー」

「何！？ゆうながどうしたの!？」

お前ら……。廊下に私たちがいるのを忘れてないか？

「ほれ、お前ら教室内に入って扉を閉める。ゆうなのほうは私たちが見てくるから。ガトウとタカミチはぬらりひよんのところに報告して来い」

「あー分かった」

「そうします」

「さて、子供教師。保健室にいくぞ」

「あっ、はい」

「待つて！私も行くわ」

『『私もー！』』

はぁー……。これだからA組は……。

「測定が終わった連中ならいいぞ」

アスナと木乃香、アキラ、桜子、鳴滝姉妹か。無難かな？

「それじゃいくぞ。他のクラスはまだ身体測定の途中だと思っから静かにな」

「……はい」

さーて。薬味は気付けるかな？

てことで保健室NOW！

ゆーなはベッドで寝てるよ！

「ど……。どーしたんですか、ゆーなさん！？」

「何か桜通りで寝てる場所を見つかったらしいのよ……」

ゆーなの姿を確認して若干焦ったか？

「（シキ、シキ。エヴァから少し聞いたけど今回の件はどういうつもりなの？）」「

「（ウチも気になるえー）」「

アスナと木乃香か。アスナのほうはエヴァに話を聞いたみたいだな。

「（別に大した目的があるわけじゃないさ。簡単に言えば修学旅行があるからな）」「

「（どういうことや？）」「

まだ知らないか。しょうがないとも言えるな。薬味は黙り込んで何か考えてるけどな！

「（3 - Aの今回の修学旅行の行き先は京都・奈良だ）」「

「（なるほどね。関西呪術協会の強硬派や過激派の妨害工作があるかもしれないってことね）」「

「（そういうことだな）」「

アスナと木乃香と話してる間に薬味はキティの魔力の残滓を感じたようだな。

「（アスナ、薬味が一段階目に気付いたようだ。少し声を掛けてや

れ」

「（分かったわよ）」

これでやっと一段階目だからな。てかあんなに強調されている残滓に気付かなかつたら魔法使いやめてくれって言いたいんだが。

「ネギ。ネギ。ちょっとネギ。なに黙ってるのよ」

「あ、はいはい、すみませんアスナさん。ゆうなさんは心配ありません。ただの貧血かと・・・」

「そう。ならいいわ」

やっぱり誤魔化したか。ナギなら話すんだろうけどな。やっぱりアイネ姫の性格かね？

はてさて、どうなるかなー？

Side・end

Side・other

世界に夜が訪れた。

空には満たされた月が昇り、風によって桜の花弁が舞う。

そんな桜並木には、背の高い一人の少女、大河内アキラの姿があ

った。

彼女はいつもは一緒にいる明石裕奈や佐々木まき絵、和泉亜子とは別に一人で寮を目指していた。

実際には彼女の想い人で師匠である彼と彼女の指示でもあるわけだが。

アキラはいつもどおり桜並木を寮に向かって歩く。

自動販売機の横を通り過ぎた頃近くの街灯の上に黒い小さな人影があった。その小柄さや髪の長さで少女だと判断出来た。

「6番大河内アキラか・・・悪いけど少しだけその血を分けてもらうよ」

『アキラ。私が動いたら悲鳴を上げて気絶したフリをしる』

目の前の人影からのいきなりの念話に一瞬驚くも、アキラは自身を知る少女と同じ声の指示に従い、悲鳴を上げる。

「キヤアアアア」

超棒読みな悲鳴だったが。

そんな悲鳴を聞いてかけつけた少年が一人。春野薬味・・・ではなく、ネギ・スプリングフィールドだ。

「待てーっ。ぼ・・・僕の生徒に何をしますかーっ。ラス・テル・マ・スキル・・・ウンテキム・スピリトゥス・アエロゾリス・フアクティイニミクム・カフテント風の精霊11人縛鎖となりて敵を捕まえる魔法サキの射手・戒めの風矢!!!」

少女は拘束魔法を見ても冷静に懐から魔法薬を取り出し、唱える。

「もう気付いたか。氷楯」
レフレクシオー

発生した楯は薬味の呪文を全てはね返す。

「僕の呪文を全部はね返した!？」

(や、やっぱり犯人は……魔法使い……!?)

薬味は自身の呪文をはね返されたことに驚きながらも、冷静に敵について分析していく。

魔法がぶつかったことで発生した強風によって少女の被っていた帽子が飛んでいく。

「くっ……驚いたぞ。凄まじい魔力だな……」

帽子に隠されていた少女の顔を見た薬味は驚きをあらわにする。

「えっ……き、君はウチのクラスの……エ……エヴァンジェリンさん!？」

「フフ……新学期に入ったことだし改めて歓迎のご挨拶と行こうか、先生。……いや、ネギ・スプリングフィールド」

そんな薬味の言葉に少女、エヴァンジェリンは答える。

「10歳にしてこの力……さすがに奴の息子だけはある」

エヴァンジェリンがある人物を示唆したような言葉を聞いて薬味は再び驚く。

「な……何者なんですかあなたは？。僕と同じ魔法使いのくせに何故こんなことを！？」

その驚きを抑えながら薬味はアキラを庇いながらエヴァンジェリンに質問する。

アキラとエヴァンジェリンはその問いに顔には出さず心の中で呆れ、エヴァンジェリンは「いい魔法使いと悪い魔法使いがいる」とだけ答え再び魔法薬を取り出し、それを触媒に武装解除を唱える。

薬味は咄嗟に左手を前に出して武装解除を抵抗した。薬味が突き出した服の裾は凍り碎けたが、狙っていない上に自身も魔法を使えるアキラは無事である。

そして、さらに新たな闖入者が現れる。

「何や今の音！？」

「ネギ、どうしたの！！」

それは二度の魔法を行使した音を聞きつけたアスナと木乃香であった。

アスナは神儀家の一員であって魔法関係者であるが、薬味にとっては一般人同然なため、エヴァンジェリンは場所を移す為にこの場から離れる。

薬味は倒れている一般人であるはずのアキラを一般人であるはずの木乃香に頼みエヴァンジェリンを追う。

姿が見えないエヴァンジェリンを追う最中薬味は先ほどの言葉を思い返していた。

「いい魔法使いと悪い魔法使いがいるだって・・・！？世のため人のために働くのが魔法使いの仕事のはずだろっ」
（それに「奴の息子」って。あの人、僕のお父さんのことを知っているのかな・・・？）

全く世界が、周りが見えていない子供の考えであった。それよりも薬味にとっては「奴の息子」の部分の方が気になっていた。

そんな考えを振り払いながら走り、薬味はエヴァンジェリンの姿を見つけさらに追いかける。

エヴァンジェリンは逃走手段を陸から空に移す。薬味もそれに倣い杖で空を飛ぶ。

薬味は空を飛び追いかけ、様々なことを考えながらエヴァンジェリンに静止を呼びかける。

「待ちなさい！エヴァンジェリンさん。どーしてこんなことするんですか！先生としても許しませんよー！！」

その言葉にエヴァンジェリンは挑発を返す。

「奴のことを知りたいんだろ？私を捕まえたら教えてやるよ」

その安い挑発に薬味は乗り捕縛呪文を唱えていく。

その光景を始めから観察していた三つの人影が現場から少し離れた建物の屋上にあつた。

今回の件の発案者である神儀紫稀と妻である神儀アリカと神儀忍の3人であつた。

アリカは自身のアーティファクト『太陽の加護』を発動させ、この場にいる3人の気配を遮断していた。

神儀家+関係者でも現段階では最強位の中以上の紫稀とエヴァ、忍、ナギ、ラカン、アルビレオ、ゼクト、現役時代の詠春くらいしか気配を探ることは不可能だ。

「シキ。私たちは何故こんなところで見物しているのじゃ？」

「んー特に理由は無いよ」

「なら儂が来る必要はなかったのか。おっ？エヴァが風属性の武装^{エクサ}解除を食らつたぞ^{マテイオー}」

「まあーあれくらいなら許容範囲・・・かな？」

「シキ、必死に我慢しとるようじゃの・・・」

「と、当然だ！キティを含めお前達の下着姿は私以外が見ていいものじゃない！？」

アリカと忍は暴走しそうになっている自分達の夫をどうにか抑えるのに苦労していた。

フランス 風花・エクサルマティオー 武装解除を受けたエヴァンジェリンは下着姿のまま女子寮の屋根に着地していた。

「……やるじゃないか先生」

「こ……これで僕の勝ちですね。約束どおり教えてもらいますよ。何でこんなことしたのか。それに……お父さんのことも」

薬味は片手で目を隠しながらエヴァンジェリンの下着姿を視界にいれないようにしていた。

「お前の親父……すなわち……「サウザンドマスター」のことか。ふふ……」

（ ……！！何故それを……！！？ ）

エヴァンジェリンはナギのことを口に出す。薬味はその事実を揺るがす。

その動揺を隠すつもりでエヴァンジェリンに投降を促す薬味。だが、それは新たな闖入者によって遮られる。

「さあ、お前の得意な呪文を唱えてみるがいい」

薬味は新手の登場に先ほどよりは少ない動揺をするも、エヴァンジェリンの言葉通り迎撃するために呪文を詠唱しようとする。

しかし、その呪文が完全に詠唱されることはなかった。闖入者の妨害によって。

「紹介しよう。私のパートナー。3 - A 出席番号13番“魔法使^{ミニステル}の従者”神儀茶々丸だ」

エヴァンジェリンの紹介で茶々丸が従者であるのを知った薬味は驚く。

「そうだ。パートナーのいないお前では私には勝てんぞ」

「なっ……パ、パートナーくらいいいなかったっ！」

そう言っただけ薬味は新たに呪文を詠唱する。だが、それも茶々丸によって妨害されてしまう。

それを見ながらエヴァンジェリンは口を開く。

「元々「魔法使^{ミニステル}の従者」とは戦いの道具だ。我々魔法使いは呪文詠唱中、完全に無防備となり攻撃を受ければ呪文を完全に詠唱することは出来ない。そこを盾となり剣となって守護するのが従者本来の使命だ」

パートナーのいないお前は我々に勝てない。とエヴァンジェリンは続ける。

「茶々丸」

「申し訳ありません、ネギ先生」

「うぐっ!？」

エヴァンジェリンの指示で茶々丸に拘束され薬味は動くことが出来ない。

「情けないな。サウザンドマスターなら、この程度笑って切り抜けたものだが」

「ど、どうして父さんのことを・・・」

「15年前に少しあってな。呪いをかけられた。さらに魔力もそれなり封じられこの学園に閉じ込められたのさ。呪い自体は2年前に解呪出来たが、事情があつてこの地を離れられないんだよ」

エヴァンジェリンの言葉の後半の部分は薬味に聞こえなかったよ
うだが、再び驚いていた。

「そんな・・・父さんが・・・」

英雄と呼ばれる自分の父親が彼女にそのようなことをしたのを信じられなかったらしい。

「ぼーやにすることでもないんだが、呪いをかけられたことに対する恨みを多少だけでも晴らさせてもらっ」

そう言ってエヴァンジェリンは薬味の首元に顔を近づけ、血を吸う。

吸い始めて十数秒だろうか。そんな時、再びの闖入者によって吸血を遮られた。

「あんた達何やってるのー！？」

その正体は神儀アスナであった。

『アスナ、ちょうどいいタイミングにやってきた。少し驚いた演技をしる。2、3言葉を交わしたら私たちは撤退する』

『分かったわ』

「あっあれー！？エヴァじゃない。どういうこと！？」

アキラ同様、アスナも棒読みだった。

「今日はこれぐらいにしておこう。せいぜい頑張るんだなほーや」

「それではアスナさん、また明日」

「あ、ちょっと！ 待ちなさいよー！」

そう言ってエヴァンジェリンと茶々丸は屋根から飛び降り、撤退した。

アスナはそれを止める演技をしながら見送る。

エヴァンジェリンたちを見送ったアスナが薬味のほうを見ると、

泣きはじめる薬味をあやし始めたのだった。

S i d e ・ e n d

S i d e ・ 紫 稀

薬味が全然使い物にならなかったのをアリカと一緒に女子寮近くの空に浮かびながら見物してた私たちは、キティと茶々丸と合流して屋敷に戻ったのだった。

アスナはあやしている薬味が泣き止んだらガトウかタカミチに引き渡すだろう。一応、途中でガトウに女子寮の近くにいるように連絡しておいたし。

さて、明日はきちんと授業に出てくるのかな？

ガトウかタカミチが連行するから大丈夫かな？

ああー茶々丸襲撃がなければいいなあー。

S i d e ・ e n d

第46話（後書き）

薬味を担任に押し上げることに。こうしないと色々大変だからさ・
・・。

思った以上に考えるのが大変だった。

実を言うと私はその場のノリで今まで書いているんだ。

どっという流れにするか程度しか考えてないんだぜ？

期待しないでくださいな！！

次回で桜通りの吸血鬼編終わるかな？

後1話で終わればいいし、終わらなければ2、3話でどうにかする
さ！

疑問に答えようのコーナー！

裂「今回は疑問らしい疑問がないからお休みだ」

紫「誤字脱字、言い回しなどに変なところがあればご報告ください」

第47話（前書き）

【お気に入り】1000件突破！！
こんな駄文なのにいいのか・・・？

TATSUYA様、杉ちゃん様、グラムサイト2様、なおぼん様、ざくろ様

感想ご意見感謝です！

紫稀側の面々の二つ名募集中なり。

アリカ・木乃香・刹那・ちうたん・アキラ・千鶴・ゆうな・茶々丸、
さよ

さよに斬魄刀か文珠かアスラ・マキーナ機巧魔神を持たせるならどっち？
斬魄刀が選ばれたら虹霞に決定になります

吸血鬼事件終幕！

そんな47話、どうぞ！！

第47話

S i d e . 紫稀

4月9日水曜日、朝。昨夜キティに襲われた恐怖で登校拒否をしようとするもガトウに連行された薬味。教室にキティがいないのを確認して安堵するし、茶々丸に声を掛けられただけで驚くし……。

薬味の授業を受ける気にならなかったから教室に分身を置いて屋上でキティとサボタージユ。

分身とはリンクしていたので授業がどんな感じだったかも知っている。授業中なのに薬味が「パートナーが10歳の年下の男の子なんてイヤですよね」なんて言い出しやがった。薬味王子説がクラス内で再燃したし……。いや、王子なのは間違いはないけどさ。心配したアスナが追いかけるときに意味深な台詞を言ってしまったからな……。

同じ頃に学園結界内に侵入者。私とキティは別れて搜索することに。侵入者の正体は知ってるんだけどね！

アスナ以外の2-Aの神儀家+関係者には「薬味を元気づける会」なるものに参加しないように放課後は屋敷に行くように指示しておいた。念のために女子寮にオコジヨ妖精が侵入出来なくした結界をその時間だけ張っておいた。

その結果、「薬味を元気づける会」は何のアクシデントもなく終わったらしい。女子寮の外では侵入しようとして、結界に阻まれ無理やり入ろうとして黒焦げになったオコジヨがいた。

薬味が女子寮から出てくるのを待っていたオコジヨは薬味が出て

きたところで再会。職員寮に戻ったときに嘘の事情説明をしたエロガモに感動したらしい薬味。その後混乱した薬味は部屋を飛び出したらしい。その時に薬味に来た手紙をエロガモは処分したが、アスナのところに同じ内容の手紙が来ていたらしい。

翌日の4月10日木曜日、放課後。薬味と宮崎を騙して仮契約させようとしたエロガモだが、アスナに阻止され未遂に終わる。パクティオー

その時にアスナに下着ドロ二千枚の件を問いだされて妹がどうたら説明したらしい。それに感動した薬味がペットとして雇うことになったとか。よく分からん。

さらに翌日の4月11日金曜日、朝。途中でアスナと木乃香と遭遇した薬味と一緒に登校。生徒玄関の近くで拳動不審となっていた。丁度キティと茶々丸と登校していた私は目撃しただけだけど。

「なあゝに落ち込んでんだよ？相談にのるぜ兄貴！！」

「うーん・・・じ、実はうちのクラスに問題児が・・・」

薬味とオコジヨが喋っているところへエヴァの先制口撃！

「おはよう、ネギ先生。今日もまったりサボらせてもらおうよ。」

フフ、ネギ先生が担任になってからいろいろ楽になった」

「エ、エヴァンジェリンさん、茶々丸さん！！」

おいおい、この程度で杖に手を掛けるなよ。秘匿意識が低すぎるぞ。認識障害の結界のお陰でバレにくいとはいえな。

「おっと、勝ち目はあるのか？校内では大人しくしておいた方がお

互いのためだと思うがな。

そうそうタカミチや学園長に助けを求めようなどと思うなよ。また生徒を襲われたくはないだろう？フッフ・・・」

「うぐっ、うわあああん！」

ええー、これだけで逃げんのかよ・・・。ナギやアイネ姫なら言い返してきただろうに。アスナが念のために追いかけたみたいだな。

ああーこのままだとアスナが原作どおりになってしまいそうだな。まあー今だけだろうけど。

Side・end

Side・アスナ

エヴァに脅されて逃げたネギを追いかけた。

私が追いついた時には色々とお話してたわね。

あのエロオコジョとは知り合いたくなかったけど顔見知りと言いか私がネギ経由で魔法について知っていることを知られたのよね・・・。本当はもつと昔から知ってるんだけど。

「舎弟の俺っちがぶつちめて来てやんよーっ」

なんて最初は粹がってた。それも次のネギの言葉で一転したんだけどね・・・。

「……あのエヴァンジェリンさんは、実は、吸血鬼なんだ……
しかも真祖……」

「く……故郷へ帰らせていただきます……」

まあー逃亡なんてこと私がさせないけどね。

その後一応現在のエヴァの状況について説明しておいたのよ。

「何か魔力が弱まってるらしいのよ。次の満月まではおとなしくして
るつもりらしいけど……」

エヴァに聞いたって設定で。そしたらこのエロオコジョが最悪な
ことを言い出したわ……。

「ネギの兄貴と姐さんがサクツと仮契約を交わして……相手の片一
方を二人がかりでボコつちまうんだよ！」

最悪だわ……。本当最悪だ……。そんなことしたらシキの報
復が怖いわよ！良くて半殺し。悪ければ死ぬわよ、こいつが……。

魔法について最近知ったという設定になっているからそんなこと
私の口から言えないんだけど。

「で、でも二人がかりなんて卑怯じゃ……」

「ひきよーじゃねーよ！！兄貴だつて二人がかりでやられたんだ
ろ！？やられたらやり返す！！漢オトコの戦いは非常さ……」

確かに戦いに卑怯も何もないけど。でも、その理論だと前提が間違ってるわよ。

「私が聞いた話だと最初に魔法を使ったのはネギらしいわよ。理由がアキラを助ける為だったのは分かるけど、あなたの理論からするとネギにやられたからエヴァがやり返したようなものじゃない。それにエヴァは漢^{ネグ}じゃなくて女だし」

一応フォローしてみたけど、このオコジヨ聞いてないわね。それにネギが口で丸め込まれたわ……。自分の意思ってないのかしら……。本当にナギとアイネの子供かと疑ってしまう私は何も悪くないと思うわ。

「お・・・お願いします、アスナさん。一度だけ！一回だけでいいですから！」

そんなこと言われても私はシキと本契約済だから仮契約でも主にはなれても従者にはなれないのよね。それにシキ以外とするなんてもっての外だし。

「イヤよ。私には決めた相手がいるの。だから、例えば一回だろうと他の相手と軽いキスでもしないわ。それと、あんたたちが茶々丸を襲ったりするのは自由にしなさい。だけど、覚悟しておかないと大変なことになるわよ」

そう言っただけで私は一人で教室に向かった。

Side・end

あの後、教室にやってきたアスナに聞いて知ったのだが、あのオコジヨ、キテイが真祖の吸血鬼と知ったら逃げようとしたらしい。拳句の果てに、アスナと薬味を仮契約させて茶々丸を襲撃するように唆したらしい。当然のようにアスナは断ったみたいだけど。

放課後は茶々丸を護衛でもしてみるかな。薬味にやられることは無いだろうけど、念の為だな。そうとなったらキテイと忍のアーティファクト使うかな。

放課後NOW！

ぬらりひよんに呼ばれているってタカミチからの伝言でキテイと茶々丸が別行動を取った。その後一人になった茶々丸を尾行する薬味とエロオコジヨをキテイのアーティファクト『月の加護』を使って不可視化と気配遮断をして尾行。

茶々丸は普段どおり人助けをしている。女の子の風船を取ってあげたり、おばあさんを背負ってあげたり、川に流されている子猫を拾ってあげたり。

薬味はその行動で感動していたらしい。それと薬味はエロオコジヨに指摘されるまで茶々丸がガイノイド、つまりロボットだと気付いていなかったらしい。あいつ本当に魔法使いか？

その後も尾行を続け教会近くの公園で猫に餌をあげている茶々丸を観察中。薬味は茶々丸のその姿を隠れて覗き中。私は『月の加護』を使っているから茶々丸のすぐ近くにいる。

全ての猫が餌を食べ終え去っていったのを確認したのが、エロオコジョが薬味に襲うように発破を掛けていた。

薬味はその発破に乗ってしまったらしい。呪文の詠唱を開始している。

「光の精霊11柱・・・集い来りて・・・」

「兄貴やれ！」

「魔法の射手・連弾・光の11矢！！」
サキタ・マギカ セリエス ルーキス

「・・・油断しました。すいませんマスター、シキ様・・・もし、私
が動かなくなったらネコのエサを・・・」

「その心配はいらん。去れ、来れ」
アヘアット アテアット

『月の加護』をしまつて『星の加護』を出す。通常ならマスターであろうとも近くにいない従者のカードからアーティファクトは出せないんだが、私は普通じゃないからいいのさ。

「薬味程度の実力なら『星の加護』じゃなくても充分だったな。去れ」
アヘアット

「ありがとうございます、シキ様。ところでどうしてここに？」

「礼はいらん。私は私の大切な『家族』を護っただけだ。アスナか

ら報告があつてな、茶々丸を襲撃しようとしていると。だから隠れて尾行していた。それで、子供教師。アスナに言われたら？茶々丸を襲うなら覚悟しろと。よくも私の『家族』に手を出そうとしたな。今回は初回だから手加減しておいてやるう。来い【不殺刀】」

さて、OHANASHIとOSHIOKIだな。【不殺刀】コトナシタマってところで私の優しさが出てると思うんだ。

「子供教師。自分が何をしたのか理解しているか？」

「え？え？」

「その顔を見る限り分かつてなさそうだな。お前は自分の生徒に手を出そうとしたんだ。教師として恥ずべき行為だな」

私の発言よりも私がいることに驚いているのか？

「やいやい！アンタは一体何モンだ！変なこと言ってるじゃねーよ！」

「黙れよ下等生物。貴様は処分してもいいのだぞ、下着泥棒二千枚話が逸れたが子供教師。お前は自分の都合だけで自分の生徒を殺そうとしたんだ。『魔法の射手』サギタ・マギカ一矢でも人を簡単に殺せるんだ。それを11矢つてのは完璧に殺すことの出来る数だ」

「そ、そんな……」

私の「殺せる」発言で大分混乱しているらしいな。よしっ、トドメを刺そう！

「そういえばお前は魔法使いはいい魔法使いしかいないって言うていたらしいじゃないか？お前の言い分なら不意打ちはいい魔法使いのすることなんだな。それじゃ、悪い魔法使いは正面から堂々と勝負するってことか。これじゃあ、どちらがいい魔法使いでどちらが悪い魔法使いか分からんな」

「.....」

「そろそろOHANASHIするのも飽きた。そろそろOSHI OKIの時間だ。安心しろ殺しはしない」

「何をするつもりでい!？」

下等生物はスルーする。相手になんかしてられない。

「せいぜい半殺し程度だ」

そう、薬味に言って私は【不殺刀】こころぎやうとうで薬味を斬る。斬ると言っても肉体的なダメージはないんだよな。半殺し状態になって動けなくなるけど。

「タカミチ、そこにいるんだろ？こいつらを運んでおけ」

「ばれてましたか」

ばれてないと思うほうがすごいだろ。

「茶々丸帰るぞ」

「分かりました、シキ様」

そうして私たちは屋敷に帰った。一応襲撃の件はキティに話しておいたけど、特に何もしないらしい。予め予想してたらしい。良かったな薬味。死なずにすんで。

そして翌日の4月12日土曜日。どうやら下等生物はキティが元賞金首だと知ったらしい。英雄の一人とは気付いてないけどな。理由としては私自ら使っている特殊な認識妨害魔法の結果だ。

まず、私とキティが大戦の英雄だと認識されなくなる。

次に、元賞金首エヴァンジェリン・A・K・マクダウエルと大戦の英雄の零崎音織ゼロザキオトオリが同一人物だと認識出来なくなるって感じた。

同一人物だと自分の目で認識した奴らには意味がないんだけどな。

この認識妨害魔法は修学旅行が終わるまでは使っておく。どうせ、詠春がバラすんだしな。

そういえばキティが元賞金首だと知って、下等生物が色々と言ったことで薬味が失踪したらしい。行き先は山。

13日の日曜日には帰ってきたらしい。どうせ楓が何かしたんだろ。どうでもいいけど。

翌日の4月14日月曜日。学園結界によって魔力を抑えられているキティが風邪を引いた。私と茶々丸は看病のために休むことに。アリカたちは普通に学校に行かせてる。

すると薬味が屋敷にやってきた。最初は居留守使っていたのだが、勝手に入ってきた。不法侵入で訴えようか……。

「子供教師、何のようだ。用がないなら不法侵入で訴えるぞ」

「エヴァンジェリンさんにちよつと用事が」

「そうか、だとしても出迎えていないのに勝手に入ってくるのは犯罪だぞ。それとエヴァは風邪で寝ている」

「シキ様の仰るとおりマスターは病気です」

「不老不死の彼女が病気なんてありえないでしょう」

「そのとおりだ。よく一人で来たな」

「エヴァ。ベッドを出るな」

「エ、エヴァンジェリンさん!!」

何かキティに向かって出してるな？何だ？

「何だソレは？」

キティも同じらしい。

「は、果たし状ですつ。僕ともう一度勝負してくださいっ」

その後授業に出ないと卒業出来ないとか何とか言ってたけど、その辺のことは既に手を打ってるしな。

「まあいい。じゃあ、ここで決着をつけるか？私は一向に構わないが……」

「……いいですよ。そのかわり僕が勝ったらちゃんと授業に出てくださいね……!」

あれ、こいつら家主の許可なしに何をしようとしてんの？

「あの……マスター」

あつ、落ちる。この距離なら問題はないな。落ちる前に受け止める。

「あう……」

「だから言っただろうが」

「風邪って本当だったんですか」

「2階にあるマスターの部屋のベッドに寝かせて来てください。マスターは風邪のほかに花粉症も患っていますので」

「この人ホントに吸血鬼ですかっ!?!」

キティの部屋NOW!

薬味にキティの麻帆良内での状況を説明した。状況と言っても魔力を封じられているから体の構造が見た目の肉体年齢と変わらないとだけ。

茶々丸は私と薬味に看病を任せて大学病院に薬を貰いにいった。

「ハアハア……のどが……」

少し血を飲ませるか。

「ほら、エヴァ。飲め」

やっぱり可愛いな。茶々丸がいれば録画していただろうに……。残念だ。

「うう……あつい……」

「子供教師、カーテンを閉めろ」

「あっ、はい！」

「うううことくらいしか薬味は役に立たんからな。つつかいるか

いらないかだといらなし。

「ハアハア寒い……」

ん？寝汗か。

「で、子供教師、何故目隠ししようとしている？」

「え、着替えさせようかと思って。見るわけにもいきなすし」

その心意気は買ってやるつ。買ってやるがその心配は要らない。キティに触れさせるわけにもいかなしな。

「暫く部屋を出ている。部屋から出たら扉の前で立っている」

「は、はい……」

さて、着替えさせるか。着替えはこの辺のでいいか。

「キティ、脱がすぞ」

「んっ……」

そうやって私はパジャマを脱がして下着姿にする。そしてタオルで体中の汗を拭き取り、下着も新しいのにかえ、新しいパジャマを着させる。

平時なら18禁になるな、絶対に。

「子供教師、入ってもいいぞ」

「し、失礼します」

そろそろ一回起きるだろうしお粥でも作っておくか。

「子供教師、私はお粥を作ってくるからエヴァを見てる。それとこの部屋から出ずにじっとしている」

「わ、分かりました！」

そう言っって私は部屋を出てキッチンに向かう。

キッチンNOW!

「こんなもんか」

よしっ、お粥は完成っつと。持っていくか。

ん？何か騒がしいな？

「何を見た！？どこまで見たんだ。言え貴様ーっ」

「べ、別に何も……」

「嘘をつけーっ。き、貴様らは親子そろって……殺すー！やっぱり

今殺すーっ」

ああー薬味め……。夢を覗いたのか。最悪だ……。

あれから時間が経って翌日、4月15日火曜日Now! 20時から24時までの4時間、メンテナンスで学園全てが停電になる。

その時にキティは薬味と勝負をする。

20時、キティはゆるいなをに見せかけた幻術半吸血鬼化にし薬味の前に登場させて大浴場まで来るように言わせる。

その時に薬味と下等生物がなにやら言い争っていたが、結局一人で大浴場に向かっていた。下等生物もどこかに行った。

因みにこのやり取りを私はアリカのアーティファクト『太陽の加護』を使って不可視化と気配遮断をして近くから見学していた。始業式の日の夜と同様にアリカと忍も一緒にな。

女子寮大浴場NOW!

薬味が来る前に先回りしたんだ。キティは私たちに気付いている。

『太陽の加護』の気配遮断は夜間では最大最強位の中クラスにギリギリ気付かれる程度だ。忍の『星の加護』と同時使用ならば1ランクアップで上クラスまで引き上げれるが、キティは最強位の上より上だ。つまりバレている。

と言つても『ミスターアンソウン知られざる英雄』も併用しているから私は気付かれていない！バレているのはアリカと忍だけだ！でも私がいるってことは予想していると思うけどね！

それなのに何も言つてこないという事は好きに見学していいつてことだ。

おっ、薬味が来たぞ。

「エヴァンジェリンさん！！・・・どこですか？」

「ふふ・・・ここだよ坊や」

そういうキティの後ろには茶々丸とゆーながいる。薬味はそれを確認して口を開く。

「ゆーなさんを放してください・・・!!」

「いいだろう」

「へ？」

薬味は、キティが素直にゆーなを解放したのが不思議だったのだらう。

「明石裕奈は元々お前をおびき寄せる為の餌だ。それが済んだらもう用は無い。それと今回のことについての記憶処理は既にしてある。安心するんだな」

実際は記憶処理してないんだらうけどね！だって元々こっち側の人間だし。

「そ、そうですか・・・」

「それじゃあ始めようか。行けっ、茶々丸！」

「はい、マスター。失礼しますネギ先生」

やっと試合開始か。どうせ今回の一件は茶番だしな。

「リク・ラク・ラ・ラック・ライラック 一氷の精霊17頭《セプ
テンデキム・スピリトウス・グラキアーレス》一集い来りて敵を切
り裂け《コエウンテース・イニミクム・コンキダント》」

「うわうーっ」

おー流石だ茶々丸。一撃で薬味の重装備の大半を削ったわ。

「食らえつ。『魔法の射手・連弾・氷の17矢!!!』」

窓を突き破って逃げるか。戦法としては間違っていないな。それとあの手に持つてるのは魔法銃か。

「ほう……魔法銃とは珍しいな」

「全弾撃破確認　　ネギ先生は骨董魔法具のコレクターだそうです」

キティも少し関心しているっぽいな。それにしても茶々丸、その情報源はどこだ？

薬味はキティと茶々丸をどこかに誘導したいっぽいな。大方そこに罠を仕掛けているんだらうけど、無意味だらうな。

Side・end

Side・アスナ

あのエロオコジヨが女子寮の私たちの部屋までやってきた。マナと木乃香と刹那は気付いてはいるけど、寝たふりをしている。関わりたくないからね。私もあまり関わりたくないんだけどさ……。

エロオコジヨの話聞くに、どうやらあのガキは一人でエヴァと茶々丸の二人と戦うらしい。恐らく既に戦いは始まっているでしょうね。

しょうがないか……。一応血縁者だし、手助けくらいはしてあげよう。

茶々丸の抑止力としてエヴァとの一騎打ちにしてあげますか。

Side・end

Side・紫稀

薬味は逃げ続けるだけで一切攻撃を仕掛けない。ふざけてるのかな？

「ニウイス・カースス
氷爆！！」

今ので薬味の装備は杖だけしか残ってないっばいな。

私とアリカ、忍は浮遊術で追いかけているよ。勿論『太陽の加護』
を使用しながら。面倒になったので『ミスターアンノウン知られざる英雄』は解除して
いる。

「クリュスタリザティオー・テルストリス
こおる大地！！」

ああー地面に落ちたか。

「ふ……。なるほどな。この橋は学園都市の端だ。2年前のまま
なら、私は呪いによって外に出られなかったな。前提条件はなくな
っているが……。意外にせこい作戦じゃないか。え？先生」

薬味のあの顔は何か企んでるっぽいな。てことはここに誘導したかったのか。

「これで決着だ。ふふ・・・」

ん？あの魔法陣は・・・捕縛結果か。

「！！なっ・・・！！」
「これは・・・」

「・・・！！」

あ、引っかかった。と言っても確かアレがあったな。

「や・・・やったーっ。エへへ引っかかりましたねエヴァンジエリンさん」

あの程度で喜ぶのか・・・。

『のう、シキ。あやつは阿呆なのか？』

『そうなんじゃね？まともな戦闘訓練受けてないだろうしな』

『普通ならあそこで『魔法の射手』サキタ・マキカを十数発か中級呪文を使うだろうに・・・』

『ナギのやつなら間違いなくやっておったるうに』

全く持ってその通りだな。おっ、キティが動く。

「そうだな。本来ならばここで私の負けだろう。茶々丸」

「ハイ、マスター。結界解除プログラム始動。すみませんネギ先生・
」

ハイテクつてやつですね。もしものときは私から魔力供給してもよかったんだけどね。

「ううっ……ラス・テル、あうっ」

あつ、茶々丸が薬味が持ってた杖を奪ってそれをキティが受け取って投げた！茶々丸も若干驚いてるっぽい。

「うわーんひどいー。あれは僕の何よりも大切な杖……ひ、ひどいですよーエヴァさん　ズルイですよ。うあくくくんっ。ー対一でもう一回勝負してくださいーっ」

えっ、あの程度で泣くの？マジで？つつかさりげなくエヴァって呼んでるんじゃないよ。縊り殺すぞ？

『のう、あれが本当に姉上とナギの息子なのか……？』

『私も本当は違うんじゃないかって思えてきたぞ……』

ん？キティが薬味を叱責してるな。あれ？こっちに向かってくる人影は……アスナか？何でまた。ああー……下等生物か……。

「エヴァ！ストップよ」

「アスナか。どうしたんだ」

キティは冷静だな。

「流石にちょっとやりすぎだと思ったのよ。エロガモ!!」

「合点姐さん。オコジョフラーツシュ!!」

「!」

「ごめん茶々丸、エヴァ」

「なっ!」

下等生物で目くらましをして、キティの腕を掴んで普通に放り投げた!その一瞬の隙にネギを回収して離れたか。流石だな。

「茶々丸、私は手を出さない。だからエヴァとネギを一对一の魔法戦をさせてあげて」

「どうしますか、マスター」

「アスナがそう言うならいいだろう。仕切りなおして一对一の魔法戦をしてやる。坊や、アスナに感謝するんだな」

「アスナさん、ありがとうございます」

「それなら私も一緒に観戦しますかね」

「「「え!?!」」」

およっ?キティ以外は私の登場に驚いてるな。どういっ!っ!ちや。

「私は気付いていたが、他のは気付いていなかったんだから驚くに決まっているだろう・・・」

「そういえばそうだな。最初から観戦してたから忘れてたわ。エヴァア頑張れよー」

「心配してはいなくせにわざとらしい声援なんぞいらんわ!・・・それじゃ坊や、始めようか」

「はいっ!」

確かに心配も何もしてないしね。最後に勝つのはキティだし。

「リック・ラク・ラ・ラック・ライラック」

「ラス・テル・マ・スキル・マギステル 一風の精霊17人へセブ
テンデキム・スピリトウス・アエリアルレス」コエウンテース集い来たりて・・・

薬味の手にあるのは初心者用の練習杖か？魔法発動体は複数用意するのは定石だからな。でも初心者用杖はねーよ・・・。

「ハハハ、何だそのカワイイ杖は。喰らえ。魔法の射手・連弾・氷サキタ・マギカ
セリエスの17矢!」

「うつつ・・・魔法の射手・連弾・雷の17矢!」サキタ・マギカ
セリエス
フルグラーリス

「ハハ!!雷も使えるとは!!!だが詠唱に時間が掛かりすぎだぞ!
!リック・ラク・ラ・ラック・ライラック 一闇の精霊58柱へウン

デトリーギンタ・スピリトウス・オブスクーリー》！！」

（あつえつ、ご……58人！？）

「ラス・テル・マ・スキル・マギステル ― 光の精霊29柱《ウン
デトリーギンタ・スピリトウス・ルーキス》！！」

「サギタ・マギカ 魔法の射手・連弾・闇の58矢！！」

「セリエス 魔法の射手・連弾・光の29矢！！」

あれー？原作より数が多くなってない？数の差で相殺しきれなかつた数発が薬味にあたったな。込められてる魔力はそこまでじゃないからかすり傷程度か。

「アハハ、いいぞ。よくついて来たな！！」

「ラス・テル・マ・スキル・マギステル ウエニアント・スゼラキオス・フルグリエンテイス 来れ雷精風の精！！」

「リク・ラク・ラ・ラック・ライラック ウエニアント・スゼラキオス・オブスクーランテイス 来れ氷精闇の精！！」

キティが同種の魔法を使ったことに薬味は驚いてるな。キティは笑っているから打ち合うつもりだな。遊びすぎだろう。

「クム・フルグロティオーネフレット・テンベスター・スアウストリーナ 雷を纏いて 吹きすさべ 南洋の嵐」

「クム・オブスクラビオトエテンベスター 闇を従え吹雪け常夜の氷雪 来るがいいぼーや！！」

「ニウイス・テンベスター・オブスクラヨグニス・テンベスター・フルグリエンス 闇の吹雪！！！！」「ニウイス・テンベスター・オブスクラヨグニス・テンベスター・フルグリエンス 雷の暴風！！！！」

おー拮抗してるな。それもキティが魔力をあまりこめてないから

だけどな。

あつ、キティは徐々に魔力を込め始めたみたいで、薬味が押され始めたな。ん？薬味の魔力がくしゃみをした一瞬押したけど、再びキティが押したな。

最終的にキティの『ニライス・テンペスターズ・オブスクランス闇の吹雪』が打ち勝ったか。当然といえば当然なだけどな。

「ふはは、私の勝ちだな」

「うっ……うぁ……」

「！いけないマスター！戻って！！」

ん？停電が復旧し始めたな。薬味が危なくなっただから学園結界を起動しなおすつもりか。けどそれもあまり意味無いけどな。

「な……何！？」

「予定より7分27秒も停電の復旧が早い！！マスター！！」

「ええいつ、いい加減な仕事をしおって！」

「シス・メア・パルス契約執行600秒間！ミニストラ・シキイ紫稀の従者『エヴァンジェリン』！！ほら、エヴァ。今のうちに降りろ」

「魔力供給か。そういえば20年ぶりか？まあいい。それじゃ降りるか」

学園結界で魔力を封印されたとしても、私から供給される魔力は対象外だからな。余裕で浮遊術使えるわな。

「さて、これで一件落着だな」

「ふん、そうなるな」

「え？シキさん！エヴァンジェリンさん！それってどういうことですか！」

「うるさいぞ、子供教師。今日は遅い。明日にしろ。ほら、エヴァ、茶々丸、アスナ帰るぞ。それと『太陽の加護』で気配遮断しているアリカと忍も行くぞ」

「『え！？』」

またか……。隠れて観戦しているのが私だけだと思ってたのか。

「そうじゃな。私もそろそろ眠い」

「儂もじゃ。ふあゝ……。」

二人は私の近くに下りてきてそう言う。本当に眠そうだな。急いで帰るとするか。それなら転移使ったほうが速そうだ。

「それじゃあな、子供教師。さっさと職員寮に帰れよ」

そう言って私はキティ、アリカ、アスナ、茶々丸、忍を対象に入れて影を使った転移をして屋敷に戻った。

こうして桜通りの吸血鬼事件は終わったのでした。めでたしめでたし。ってな。

因みに魔力供給が途切れたキティは屋敷に戻ったときに、再び学園結界の封印を喰らって「きゃんっ」と言っつて、一瞬仰け反ったよ。めがっさ可愛かった。その後はキティを美味しく頂いたとき。茶々丸が仰け反った時の映像を録画していたっばいから後でコピーを貰うことにしよう。

S i d e . e n d

第47話（後書き）

昨日に引き続き遅れました。
内容を詰めすぎたようだ。

この調子だと魔法世界編までどのくらいかかるのやら。

最終的にやっぱりエヴァが勝つ！
淫獣を処分したかったがすると、ネギ側の仮契約者がいなくなってしまう……。

今回は修学旅行前と1日目かな？
どこまで書くかは不明だ。

疑問に答えようのコーナー！

裂「まずはグラムサイト2様からの『そう言えば、紫稀（ry）らしいですか？』だ」

紫「薬味くらいの年齢なら下着姿を見るのは『ギリギリ』許容範囲内だ」

紫「ブラかパンツのどちらかをつけていない状態を見るのはアウトだ」

紫「18歳以上は下着姿を見るのすらアウトだ。後は握手程度はいいが、」
紫「不可抗力だろうと体に触れるのは大罪だ！！」

裂「次はなおぼん様からの疑問ではないけど『神儀家誰か迫（ry）期待したいwww』だ」

紫「刹那に期待するな。すぐにテンぱるから無理だ。キティとアリカ、忍なら出来ると思うが」

裂「今回はこの辺で。誤字脱字、言い回しなどに変なところがあれば報告ください」

第48話（前書き）

35日間で62部。

なんかやり過ぎな気がします。

卯月様、一雫様、なおぼん様、十六夜様

感想ご意見感謝です！

紫稀側の面々の二つ名募集中なり。

アリカ・木乃香・刹那・ちつたん・アキラ・千鶴・ゆーな・茶々丸、
さよ

さよに斬魄刀か文珠かアスラ・マキーナ機巧魔神を持たせるならどれ？

斬魄刀が選ばれたら虹霞に決定になります

桜通りの吸血鬼事件のネタバレと修学旅行前風景！

そんな48話、どうぞ！！

第48話

Side・紫稀

4月16日水曜日。暇つぶしの企みごとだったキティと薬味の果し合いの翌日である。

昼休み、私とキティ、アリカ、茶々丸の4人は喫茶店でのんびりしていた。

するとやってきた。私たちの安らぎを邪魔する者が！

「こ・・・こんにちは、エヴァンジェリンさん、シキさん」

「シキとエヴァにアリカ。それと茶々丸じゃない」

「フン！ネギ・スプリングフィールド。貴様と気安く挨拶を交わす仲になったつもりはないぞ。アスナはどうしてこんなの一緒にいるんだか・・・」

「よお、アスナ。私もエヴァに同意だな」

「うむ、こんにちはだな、アスナ」

「こんにちは、アスナさん、ネギ先生」

茶々丸は薬味に挨拶しなくてもいいのに。アリカもしてないしね！

「それで何か用か？」

「昨夜別れ際に事件のことを話してくれるって言うてたじゃないですか」

「ああーそういえば言ったな。しつこそうだから「詳しくは明日」みたいなことを。」

「そういえばそうだったな。桜通りの吸血鬼事件ってのはただの茶番だ」

「ち、茶番!？」

「そう、茶番だ。計画発起人は私と学園長のぬらりひょん。協力者はエヴァとアスナ、茶々丸、ゆーな、アキラと言ったところか。アリカと忍はただの観客だな」

「な、なんでそんなことしたんですか!？それに協力者にアスナさんとゆーなさんとアキラさんって一体!？」

「ぬらりひょんの目論見は子供教師に魔法戦闘の経験をさせること。私のは目論見というよりただの暇つぶしの娯楽だがな。それとアスナとゆーな、アキラの3人は子供教師が麻帆良に来る前から魔法の存在は知っていた。以上だ（本音を言うと薬味がうざかったからだけだな・・・）」

「え、ええー!?!アスナさんたちが魔法を知っているってどういうことですか!？それになんでアスナさんはそのこと話してくれなかったんですか!?!」

「え?こいつ阿呆じゃね?」

「子供教師。いや、ネギ・スプリングフィールド。お前はふざけているのか？魔法は秘匿されるものだと充分に理解していないだろう」
「そ、そんなことは・・・」

「アスナに初日から魔法バレした時点で秘匿されていないではないか」

「あう・・・」

「それとアスナが隠していた理由も秘匿されるものを扱う者として当然だ。いくら相手がお前のような魔法使いで魔法関係者だったとしても、大して親しくもない相手に態々話すことでもないからだ」

「シキの言うとおりよ。高々クラスの担任ってだけで不用意に話すわけ無いじゃない」

「うう・・・」

「ところでその下等生物を焼却なり抹殺なり処分したいんだが」

「なっ!?!?」

「ど、どうして!?!?」

「いやいや理由なんて簡単じゃん？」

「下着泥棒二千枚。女にとってこれ以上ないくらいの敵だよな」

「「「「確かに」」」」

「「あぐっ……!?!?」」

まあー今回は特に私の『家族』に害は出てないから不問というか無視してやってもいいか。

「今回に限ってだけは私が言う条件を守れるなら無視してやってもいい。条件は一つだ。今後一切、私の『家族』が不快になることをしないことだ。私の『家族』はさつき挙げた7人以外にも数人いるからな。特に女の敵になるようなことをするとかなりの確率で死刑処分になるだろうがな。その場合は連帯責任でネギ・スプリングフィールドにもそれなりの対処をさせてもらう。クッククック……」

おや、薬味と下等生物がガクブルってるぞ？謎だな。

「……シキ。今の笑い方はやりすぎだ。流石に私でも冷や汗が出そうになった」

「私もよ……」

「私もじゃ……」

「私もです……」

え？マジで？今後は自重することにするよ。『家族』を怖がらせるわけにはいかないからね！

「それと、子供教師にも一つ条件というか契約してもらおう。内容は私と私の『家族』に魔法関係で接してこないこと。それを容認出来るのなら「はい」と言え」

因みにこの契約をすると私の任意で薬味に色々と出来る。死なないように感電させたりとかな？

「契約のことは分かりました。そ、それですわね！父さん サウザンドマスターのことを少しでいいので教えてもらえませんか！？」

何を言ってるんだ？結局負けたくせに、図々しいな。それにいきなり契約を破っているではないか。まあ！初回だし仕置きは免除しておくか。

「坊やは私に負けたんだ。だからその権利はないし、私にもその義務はない」

「エヴァの言う通りじゃな。約束は「勝ったら教える」と言っておつたはずじゃし」

「そうね。負けたのだから聞ける権利は全くないわね」

「アリカさんの言うとおり、私も「勝ったら教えてやる」と記憶されています」

「うう……。そ、それでも少しでいいんです！教えてください！！」

これ以上突き放そうとしても無理そうだ……。こんなことで仕置きするのも面倒だし。アレの情報くらいなら教えてやっても大丈夫か。

『エヴァ、アリカ、アスナ。アレの情報くらいなら教えてやってもいいかも』

『アレ？アレとは一体……。ああーアレか。なら問題ないか』

『私にはアレといえる程度の情報が沢山あるのじゃが……。どれ

「じゃ？」

「私にも結構あるわね。んーどれかしら？」

キティは気付いたっぽいな。アリカとアスナはアレだけじゃ分かんかったか。

「京都の別荘だ」

「『あーソレか！』」

「確かにソレなら大したものじゃないのう」

「それにもうすぐ修学旅行だったわね」

「そういつだった」

きちんと理解してくれて助かるぜ。

「しょうがない。しつこい坊やの為に一つだけ教えてやるう」

「お、教えてくれるんですか！？」

「うわあー……目がキラキラしてるわー」

「「京都に奴の別荘があったはずだ」」

キティの台詞に八もらせてもらったー！

「シキ……ふざけすぎじゃ」

「そうよ・・・流石にそれはだめでしょ」

「シキ様・・・お戯れはあまりなさらない方が・・・」

「人の台詞を読んだ上に勝手に重ねるんじゃない！！」

やっべ、怒ってる顔が可愛い！

「以心伝心ってやつだよ！」

『茶々丸、録画録画！！』

『愚問です、シキ様。私がマスターの可愛い映像を逃すわけありません』

『Good Jobだ！流石私の嫁だ！愛してる！！』

『ありがとうございます。私も愛しています』

茶々丸とも以心伝心っぽいことしてみた。それにしても茶々丸が既に壊れてるな。実際は2年に進級前からこんな感じになってたけど。

因みに薬味は「別荘」のことを聞いた時から私たちの会話は聞こえていないっぽい。

帰りのHRNOW！
ホームルーム

「えーと皆さん。来週から僕達3-Aは京都・奈良へ修学旅行へ行くそーで・・・！！」

やっぱり京都・奈良になりました。てか、担任なのに今更言っつてどうなのよ？

あやかが薬味に修学旅行のことを説明したり握手してるし、鳴滝姉妹とはしゃいでやがる。あんなんが教師でいいのかなあ・・・。

「ネギ先生。学園長が呼びですよ」

「あ、はーい」

ああー東西の融和の為の親書ってやつか？どうでもいいな。

けどー応話の内容だけは聞いておかないとな。分身と入れ替わってキティの『月の加護』を忍の『星の加護』で強化すればいいか。

そんじゃ準備も出来たし、レポート空間転移つと。

学園長室NOW！

空間転移使ったから薬味よりも速くついたぜ。勿論スリぬらりひよん

たちには気付かれちゃいない。

状況説明してたら薬味が来ていたようだ。

「え……し、修学旅行の京都行きは中止……!?」

そんなわけないじゃないか。大体東西の不和は若干だが改善させてるんだぜ、私たち神儀の名で。

「この親書を向こうの長に渡してくれるだけでいい。ただ、道中向こうからの妨害があるかも知れん。ネギ君にはなかなか大変な仕事になるじゃろ……どうじゃな？」

「……わかりました。任せてください学園長先生」

でもその親書の内容があれだしなあ……。詠春が長じゃなかったらさらに不仲になると思うんだが……。

「ほ……いい力才をするようになったの。やはりあの一件が功をそつしたようじゃな」

「最初、茶番だって聞いたときはビックリしましたが、いい経験になりました！」

ん？ぬらりひょんが何かを言おうとしてるな。たぶんあのことだろっな。

「おい、ぬらりひょん。木乃香の話題は出すなよ？」

「フオ!? 紫稀殿、一体どこに？」

『そんなことはどうでもいい。木乃香の話題さえ出さなければな。子供教師には少々契約させてあるからな。その内容に木乃香に関わることもあるということだ』

『わ、わかったぞい』

うむ、脅しが程よく利いたようだ。

「どうしました、学園長？」

「なんでもない。では修学旅行は予定通り行おう。頼むぞネギ君」

「はいっ」

それじゃ私も戻るとするかな。

時間が一気に飛ぶよ！そんな感じで4月21日月曜日、放課後。神儀家＋関係者総勢でアスナの誕生日会を實行。というより半分宴会になっていたが……。

「瀬流彦。お前さんも今度の修学旅行の引率だつてな。頑張れよ」

「ははは。シキさん、励ましありがとうね。でもガトウさんとあなたがいれば何の問題もない気がするよ」

そうかもしれないな。でも、今回はあいつが出てくるっばいしな。

「まあー何か問題が起きたら私たちが出るから瀬流彦たちは他の一般生徒の守護を任せるかな」

「分かったよ。あなたの期待に応えられるように頑張るさ」

「まあー今日は無礼講だ。明日に残さない程度に騒げ」

「そうさせてもらうよ。あなたが来る前とは打って変わって中々に充実しているからね。こうやって騒げることが夢みたいだ」

「やっぱそうなんだな。瀬流彦も大切なものさえ護ればって感じだったからな。周りが正義の魔法使い（笑）ばっかだったから肩身が狭かったろうな。」

「そうだ、今度会社でも興してみるか。私が卒業するとき^じにぬらりひよんに苦勞させられてるガトウやタカミチ、瀬流彦^い辺りを優遇してスカウトしてやるうっと。」

そんな感じで夜は過ぎていき、4月22日火曜日。麻帆良学園女子中等部3・Aの修学旅行1日目の朝が訪れる。

Side・end

第48話（後書き）

結局修学旅行の前振りが終わってしまった。
どうなるかなー？

今回は修学旅行1日目と2日目の模様かな？

疑問・質問に答えようのコーナー！

紫「卯月様からの質問だ』ところで今作はアンチですか？』どうな
んだ？」

裂「はつきり言って分からない。今のところは微アンチってところ
ですね」

裂「修学旅行中に完全に分岐すると思うけど、その時の私の気分で
す」

紫「次は一雫様から『オリ主は明日菜をどうしたいの？』だな。卯
月様と似た感じだ」

裂「とりあえず、修学旅行が終わるまでにその辺はどうにかします。
アスナを完全に」

裂「薬味から訣別させるならそこに換わりを宛がわなきゃいけない
んですよね」

紫「今回はこの位だな。誤字脱字、言い回しなどに変なところがあ
れば報告してくれ」

第49話（前書き）

この作品って残酷描写とかってあるのかな・・・？
作者ですら分かっていない作品って一体・・・。

SILVER様、グラムサイト2様、ブルック様、なおぼん様、杉
やん様

感想ご意見感謝です！

紫稀側の面々の二つ名募集中なり。

アリカ・木乃香・刹那・ちうたん・アキラ・千鶴・ゆうな・茶々丸、
さよ

さよに斬魄刀か文珠かアスラ・マキーナ機巧魔神を持たせるならどれ？
斬魄刀が選ばれたら虹霞に決定になります

修学旅行1日目！

そんな49話、どうぞ！！

今回の紫稀は壊れています。お気をつけください。

第49話

Side・紫稀

4月22日火曜日。麻帆良学園女子中等部3学年の修学旅行一日目である。行き先が京都・奈良なのはADHSの5クラスだ。

そんな私たち神儀家+関係者総勢14名と1体は集合時間の30分前の8時30分には大宮駅にいた。

14名と1体が誰かって？私とキティ、ゼロ、アリカ、アスナ、マナ、茶々丸、木乃香、刹那、ゆーな、ちうたん、アキラ、さよ、ガトウ、瀬流彦だ。

ガトウと瀬流彦は引率の教師として、影の薄かったゼロは何となく連れてきた。ほかは当然、生徒としてだ。

よくある二次創作だとキティが「15年ぶりの外だー！ー！」みたいなものがあるけど、家のキティはそんなことはしない。ここ2年は何度か麻帆良から出れたからそこまでハイテンションではなかった。まあー行き先が京都だから一般人よりはテンションは高いっぽいけどな……。

そういえば班割り教えていなかったな。

1班 柿崎美砂・釘宮円・椎名桜子・鳴滝風香・鳴滝史伽
2班 春日美空・古菲^{クフエイ}・超鈴音・長瀬楓・葉加瀬聡美・四葉五月
3班 朝倉和美・那波千鶴・村上夏美・雪広あやか・ザジ^レレイ
ニーデイ

4班 綾瀬夕映・和泉亜子・早乙女ハルナ・佐々木まき絵・宮崎

のどか

5班 相坂さよ・明石裕奈・大河内アキラ・近衛木乃香・桜咲刹那・長谷川千雨

6班 神儀アスナ・神儀アリカ・エヴァンジェリンⅡAKMⅡ神儀・神儀紫稀・神儀茶々丸・神儀真名

以上の6班編成だ。

5班と6班のメンバーが狙いすぎだが、気にしてはいけない。人生とは得てしてそんなものなのだよ。

ぶっちゃけると2つの班に固めてれば動きやすいからだけどさ。基本5班と6班は同じコースを回る予定だから。と言うよりもそうさせたんだけどさ。

それと2つの班が一緒の部屋で寝れるようにぬらりひよんとはOHANASHIした。私は絶対間違っていない！権力強大な力を使うためにある！？

決して！決して！！キティとアリカ、アスナや他のメンバーに脅されたから、ぬらりひよんとOHANASHIをしたわけじゃない！！

おっと話が逸れたようだ。ん？逸れてたっけ？どうでもいいな。

現在、私たちはひかり213号の車内だ。省き過ぎだったって？そうでもないだろ。あさま506号の車内では何もなかったからな。

薬味は車内販売のカートに轆かれてたりしたかな。ひかり213号での話しだけど。どうでもよかったな。

またキンクリだ。既に清水寺まで来ている。ひかり213号での強硬派・過激派の妨害はどうしたかって？そんなもんあるわけないだろう？

仕掛けてくると事前に分かっているのに対策を打たないのはありえないだろう。私たち3・Aがいる車両だけに式紙や符術を発動出来ないようにする結界を張っておいたんだ。

つまりは、原作であったかえる騒動も薬味が親書を奪われることもなかったわけだ。お陰でのんびりと出来たよ。

状況説明は終わったから現実に帰ろう。

「京都おーっ！っ！」

「これが噂の飛び降りるアレ」

「誰かつ！！飛び降りれっ」

「では拙者が」

「おやめなさいっ」

現実逃避もしたくなるってモンだ。クラスメイトが元気すぎるんだよ……。

はぁー……。生徒として修学旅行を楽しみたいのに「出張版！特別広域指導員！」なんてのもやらなきゃいけないだよな……。夜間は免除してくれるらしいけど。

そんな感じに意気消沈している私を励ましてくれる茶々丸が唯一の癒しだよ……。

「ここが清水寺の本堂。いわゆる「清水の舞台」ですね。本来は本尊の観音様に能や踊りを楽しんでもらうための装置であり、国宝に指定されています。有名な「清水の舞台から飛び降りたつもりで……」の言葉どおり、江戸時代では実際に234件もの飛び降り事件が記録されていますが、生存率は85%と意外に高く……。」

「うわっ！？変な人がいるよ!？」

「夕映は神社仏閣映像マニアだから」

そんな無駄知識詰め込むならまずは中学の勉強に関する知識を詰め込んでくれよ……。

他の奴は他の奴でカメラのシャッターを到るところで切ったりしてるし……。自由奔放すぎだろ……。

「そうそう。ここから先に進むと恋占いで女性に大人気の自主神社にあるです」

「え?」

「では、ネギ先生。一緒にその恋占いなど・・・」

「あ、ネギ君、私も私もー！」

いつの時代も女性は恋占いが好きだねー。と言ってもそこまで対人関係なかったけどさ・・・。

私の『家族』たちは冷静だったよ。既に結ばれてるから今更必要ないって感じで。

と言いつつも、恋占いの石とやらを見に。

「で、では早速、クラス委員長の私から・・・」

「あーずるい。私もいく」

「わ、私も・・・」

あやかとまき絵、宮崎の3人が挑戦するらしい。

「ターゲット確認！行きますわよ！」

そういえばあやかは多少だったか武術の心得があったな。これくらい距離なら楽勝かね？

確かあの先って何かあった気がするな……。何だっけ？

「あンツ！？」

「きゃあ」

ああー落とし穴だったか。それと確かあの穴の中には

「キヤーーーツ！？」

「カエルー！？」

カエルだったね。でも、あれって式紙だからそこまで忌避しなくてもいいんだよな。精々がオモチャってところだろうし。

さて次に行くか。次は確か音羽の滝だったかな？

つつか私が移動するだけで十数人の大移動になるんだよな。はっきり言つと他の観光客の通行の迷惑じゃね？

音羽の滝に着いたときには結構混んでいた。そりゃ当然っちゃ当然だわな。

「あー！なんかスゴイ混んでるよ！」

「ゆえゆえっ、どれが何だっけー!？」

「右から健康・学業・縁結びです。」

『左・左ーッ?』

「お前らー。他の観光客の迷惑にならんようにしろよー」

それにしてもなんだか酒臭いな?匂いの発生源はどこだ?

「……何かみんな、酔いつぶれてしまったようですが……」

「いいんちよっ、しっかりしなさいよっ!!!」

「はひー?」

私が思考というか探査をしている間に酔いつぶれてしまったらしい。

音羽の滝の水を飲んで酔いつぶれたつてことは屋根か。そう思っ
て思い飛び乗ってみると。あつたあつた。良質の地酒っぽいな。こ
れは後でみんな飲むとするか。

「ん……?何かお酒くさくないですか?」

「あー!その「新田先生。どうやら音羽の滝にお酒が混ざってい
たようで、飲んでしまった生徒たちの一部が酔いつぶれてしまいま
した。恐らく観光客を対象にした悪戯か何かでしょう」あぶぶっ・
」

薬味が隠そうとするから出張特別広域指導員として新田先生に報告する。

「なっ！？それは本当かい、神儀君！」

「先ほど屋根の上にお酒の樽があつたのを確認したので間違いないです。私たちは酔いつぶれた彼女たちをバスに乗せて一足先に旅館に向かおうと思います」

「うむ、そうしてくれ。私たちは市役所の方に連絡しておく。瀬流彦君も神儀君たちの手伝いをしてやってくれ」

「はい、分かりました。それじゃ、酔いつぶれた彼女たちをバスに運んでしまおう」

慌てふためく薬味を放置して私は新田先生と瀬流彦の二人と今後の予定について決めた。

はつきり言って、薬味いらない子！！

そんな感じでホテル嵐山Now！風呂の時間は教員、生徒の順なのだが、今回は例外の男子生徒である私がいるから結構揉めたりしい。それで修学旅行前に意見を聞かせてほしいと言われたから全教員、全女子生徒が入った後にのんびり入りたいと答えたんだったか

な。

そしたらなんと意見が通っていたらしい。何でも言ってみるもんだね。それと勿論5班と6班のメンバーは私と一緒にいるんだけどね。昼間の地酒を飲みながら。

ほら、原作で薬味と刹那が浴場で鉢合わせて木乃香が攫われ掛けたことがあったじゃない？見事にぶっ壊してやったよ。刹那たちの裸体を見せるわけにはいかないからね！

混浴後は5班と6班合同の部屋へ。数組に分かれて麻雀したりトランプといったカードゲームやったりしてたよ。

確か式紙返しの結果だっけ？あれも既に貼り終わっている。お猿が侵入することはないと思う。薬味は木乃香が狙われていることを知らないはずだから外に見回りに行ったりしないだろうし。

行ってたとしても何とかなるんだけどね。

麻雀やカードゲームに飽きた私たちは部屋全体にそれなりに強力な遮音と認識障害の結果を張った。理由？そんなのがった・・・ゲフンゲフンするために決まってるじゃないか！修学旅行中にするってのが、背德的でそそのものがある。

忍は麻帆良においてきたし、さよのほうも既に対策済みでどんなことをしても朝まで決して起きないだろう。という事で本体と影分身の9体の10人で嫁たちとの愛をさらに育むとしますかねー！

てか私のキャラのそれに関することが崩壊してない？昔はかなりストイックだった気がするんだが……。アリカを嫁にしたときから崩壊してたような気もするけど……。

一応言っておこう。……。どうしてこうなった？

過去を振り返りつつもやることはやるわけで。

あれから数時間後の今。最後まで立ってたというか残ってたのはキティで、その少し前に脱落したのがマナと刹那だったかな。茶々丸はガイノイドなのに一番早い脱落だったね。30分くらいで復活してたけど1時間くらいでまた脱落したし。

と言うか影分身を使用してかなりやっけているから腰と言うか疲れ知らずになりつつある。神にもらった上限撤廃スキルがこれにも活きているのか？だとしたら凄いやつか、スキルの無駄遣いとか言えないな。

とりあえず断言できることがある。

私の嫁はみんな可愛い！

さて、何だかんだ状況説明をしているうちにみんな復活しだしているからまた可愛がるうつつ。と言っても脱落してもそのまま可愛がってたけどね！

外道？鬼畜？上等だね！バツチ来いだよ！？

そんな感じで大したアクシデントもなく私たちは修学旅行の二日目の朝を迎えたのだった。

S i d e . e n d

第49話（後書き）

なんか気付いたら紫稀のキャラが壊れました。
読者が離れていきそうだ。

どうしてこうなったし・・・。

次回は2日目の出来事です。

パパラッチが魔法の存在を知ること。

原作では魔法バレしなかった相手にバレることに。薬味がな！？

疑問・質問に答えようのコーナー！

裂「グラムサイト2様からのだ。紫稀は小太郎、千草、月詠をどうするつもりなんですか？」で？」「

紫「私ですら分からんよ。1日目では登場すらしてないし。どうしろと？」「

紫「裂やーん！説明しろー！？」

裂「流れに任せるだけだけど？とりあえず3日目には登場するだろ」

紫「それでいいのか、裂やん・・・」

裂「それでいいんだ。今回はこの辺で。誤字脱字、言い回しなどに
変なところがあればご報告ください」

アーティファクト案

ずっと前にネギハーレムなりに入れてあるあやかのアーティファクトに関してだけ決めてないなと今更気付いた次第。

原作でもまだネギと仮契約バクティオーしていないこともあって、オリジナルのアーティファクト案を募集したいと思います。

何かいいものを考えたり知っていたら教えてほしいです。

茶々丸のアーティファクトも未だに悩み中です。

魔法世界編なりオリジナル話を出さない限りは出番が無いんです
けどね……。

さよも虹霞か文珠、アスラ・マキーナ機巧魔神か決めかねてますからね。

さよに関しては修学旅行が終了するまでの期間でアンケートして
決定したいと思いますので、よろしく願います。

第50話（前書き）

この作品の方向性ってどこだろう？
まあーなんとかなるか・・・？

杉ちゃん様×2、グラムサイト2様
感想ご意見感謝です！

紫稀側の面々の二つ名募集中なり。
アリカ・木乃香・刹那・ちつたん・アキラ・千鶴・ゆーな・茶々丸、
さよ

さよに虹霞か文珠かアスラ・マキーナ機巧魔神を持たせるならどれ？

修学旅行2日目！

そんな50話、どうぞー！！

第50話

Side・紫稀

4月23日水曜日。修学旅行2日目の朝だ。

「それでは麻帆良中のみなさん。いただきます」

『いただきますーす』

私たち3-Aの一部は音羽の滝で酔いつぶれて昨夜の記憶が無いもの、また一部は平穩だったもの、またまた一部では腰をさすっているものがいた。

ぶつちやけ最後のは私のせいだけどな!?

朝食時の席は隣にキティが右にとアリカが左に、正面には右から茶々丸・アスナ・マナとなっていた。

「シキ。あ〜ん、だ」

「ん、あ〜ん・・・」

「ほれ、こっちもあ〜んじゃ」

「ああ、あ〜ん・・・」

隣に座っているキティとアリカがあ〜んしてくるんだ。お返しに私もするんだけどさ。別に『家族』しかない時に、したりされた

りするのはいつものことだけど、他のみんながいる前でつてのは流石に恥ずかしい……。それに、したりされたりすると正面の3人の顔が無表情になって怖いんだよね……。

何これ拷問？天国だけど地獄なんだけど！？

「シキ、こっちもあ〜んよ！」

「師匠、あ〜んだよ！」

「シキ様、あ〜んです！」

「膝立ちになるな。行儀が悪い」

「そうじゃ。行儀が悪いぞ」

キティとアリカの真似をしてあ〜んしようとするアスナ・マナ・茶々丸だが、すぐさまキティとアリカが自分たちのことを棚にあげて窘める。

「う、ウチもやりたい……」

「なんで私は5班なんだろう……」

「私もやってみたい……」

「くうう〜っ、あの二人だけ優遇されてる気がするにや……」

「バカばっかだ……」

「楽しそうですねー」

『修羅場か？修羅場なのか！？』

周りからは変な声しか聞こえないしさ……。

こんな感じで朝食の時間は終わったとき。味なんて覚えてないよ……。

2日目は奈良で班別行動だ。私たち5班と6班は適当に見て回る予定だ。

「ネギくん、今日ウチの班と見学しよー」

「わーっ」

「ちよっ、まき絵さんネギ先生はウチの3班と見学を！」

「あ、何よー私が先に誘ったのにー」

「ずるーい。だったら僕の班もー」

ああー薬味争奪戦か。どうでもいいや。騒がしいな。このままだと他の一般客に迷惑になるな。そろそろ止めるか。

と思っっていたら。

「あ……あの、ネギ先生!!よ、よろしければ今日の自由行動・私たちと一緒に回りませんかー!?!」

「え……み、宮崎さん……え、えーと、あの……わかりました、宮崎さん!今日はぼく、宮崎さんとまき絵さんの4班と回ることにします!」

『おお〜〜つ』

「本屋が勝った！」

「本屋ちゃん動いた！」

どうやって決めたんだ？薬味には木乃香のことは知られていないからよく分らんね。一番最初にまき絵が誘ったのと宮崎からの誘いだったので決めたのかね？どうでもいいか。

奈良での判別行動を私たちは寺社仏閣を大まかに周りながら甘味処を堪能して回ったとき。

そういえば帰ってきてからの薬味の様子がおかしかったな。耳にした話だと、宮崎が告白したらしいな。同じ班だったまき絵は告白せず、今回は宮崎が勇気を出して誘ったということで告白を手伝ったらしい。

誰かが薬味に告白したというのを聞いて4・5・6班以外の人間が和美に調べるように言ったらしい。どう考えても主動はあやかだろうけどな。

で、そこからはふらふら歩いていた薬味を見つけた和美が後を追って、薬味が魔法を使って車に轢かれそうになったネコを助けたのを目撃して、風呂場で一悶着あって完全に魔法バレしたらしい。どうでもいいか。

アスナとアキラから休憩処で落ち込んでいる薬味を発見したと報告があったので、行って見ることに。

「あの和美に魔法がバレた〜!?」

「ネギ君、君は本当に魔法を秘匿する気あるのかな？」

「えう、ぐし……」

今のはアスナとアキラに薬味か。どうやら事情聴取は終わったらしい。

「和美にバレたってことは世界にバラされるということだね」

「ダメだわ。アンタ世界中に正体バレてオコジヨにされて強制送還ね」

「そんな〜っ。一緒に弁護してくださいよアスナさん、アキラさん」

いつもというか契約どおりなら仕置きなんだが、今回はこちらから声を掛けたわけだから契約に問題は無い。とりあえず様子見でいいか。

と思ったけどいじっておこう。

「子供教師。さようならだ」

「シ、シキさん！？こ、これは、その……」

「ああー契約のことは気にするな。今回はそっちからではなくこっちからの干渉だからな。契約内容はそっちからの魔法関係による干渉だから問題はない」

「そ、そうですね。よかったです……って全然事態は好転してないい……」

おーおーテンパってるね。面白いから眺めとこう。

「おーいネギ先生ー」

「ここにいたか兄貴ー。って、シキの旦那！？」

嗜虐心を煽られる薬味の慌てっぷりを眺めると声が聞こえてきた。

「和美と下等生物か」

「およっ？シキ君にアスナにアキラじゃない。ってことは3人も魔法関係者なの？」

「まあーな。その辺は後回しにするとして、和美にバレたのなら子供教師と下等生物には良い情報を与えよう」

「な、なんですか!？」

(もしかして父さんに関すること!?)

「子供教師。お前が考えていることはよく分かるけど、あいつの事じゃないぞ?」

「え!?!なんで分かったんですか!?!」

「いやいや、誰だつてわかるつて。アスナやアキラも分かってるよ
うだし。よく知らない和美は分かってないけどな。」

「顔と言つかお前の行動理由を考えればすぐに思いつく。で、今回はそつちから干渉してはいけない人間についてだ。3-Aの神儀の名を冠する者は全員該当者だ。てことで気をつけるよ?」

「つて、真名さんもそうなんですか!?!」

「ん?どういうこと?何の話?」

「和美は知らなかったな。修学旅行前の桜通りの吸血鬼事件あった
だろ?あれの首謀者というか計画立案者が私でその時に色々あって、
子供教師と私の間で契約を結んでいるんだ。内容は私の『家族』に
子供教師や下等生物からは魔法関係で干渉出来ないつてやつを。8
人くらいは教えたことになるな。他にも何人かいるけどな」

「ふうーん?それじゃ魔法について話しているけど今回はどうなん
の?」

「今回はこちらから干渉したから問題は無い。それで和美。魔法の
存在を知つてどうするんだ?一番優しいので魔法に関する記憶を消

「され、最悪だと存在消されるからな？」

「え？それってマジ？」

「マジもマジだ。こっちの世界に関わるならその辺は気をつけるべきだな。記者なら分かるだろ。それで？」

「そ、それなら消されることもないね。カモっちの熱意にほだされてネギ先生の秘密を守るエージェントとして協力することにしたら」

「そうか。まあ興味本位でこちらの世界に来るのは構わないけど、死んだら自己責任な？」

「え！？なにその不穏な言葉！さっきの消される発言よりも怖いんだけど！？」

「ええー？知らないうちに消されるより自分が死ぬのを認識出来るのと同じや気持ち的に違うと思うんだけどな？私は死なないけど。」

「下等生物に何を言われたか知らんが、もしかして魔法を便利だけなものと思ってる？それならその認識は間違いだ。確かに魔法は便利だが、攻撃魔法ってやつもあるんだ。つまり簡単に人を殺せるし、当たれば自分も死ぬぞ？」

「カモっちー！？そんな話聞いてないよー！？」

「まあー子供教師のそばにいればそれなりに安全だろうな。一応こいつの父親は魔法の世界では超のつく有名人で憧れの的だ。その恩恵があれば余程のことがない限りは護ってもらえるだろうさ」

「そ、それも先に言っつてよ……。命の心配はそれほど無いわけね。例えばだけどシキ君も護っつてくれるっつてことはないの?」

「それはないな。世界が滅びる可能性よりも無に等しい。まあー和美が私の『家族』と呼ばれる存在になれば話しは変わるが、その可能性もあまりないからな。まあー私が考えうる最悪な事態になった場合なら助けてやらんこともないな。一応クラスメイトだし」

「そ、その考えうる最悪な事態っつてどんなの……?」

聞くの?聞かない方がいいと思うんだけどな。優しい表現で教えてやるか。

「走馬灯が見えたときかな?」

「それっつて、死に際じゃないのよー!?!」

「これでも優しい言い方なんだけどな。他のはグロテスクっつていうか聞いたら絶対気分悪くなるぜ?」

「そ、そっか。ま、まあー、私はネギ先生の秘密を守るから安心してよ」

「よ、よかった。問題が一つ減りましたー」

「それはよかったな。あまり私たちからは魔法に関しては干渉しないからそのつもりでな?」

「は、はい。分かっています!」

「和美もそのつもりでな？」

「分かったわ。というか今更だけどこんなところでこんな話しても大丈夫なの？」

「その辺は大丈夫だ。和美が来た時から認識障害の魔法を使っていたから、一般人にはありふれた会話で盛り上がってるように見えるからな。まあー話も終わったからそろそろ解くけど、あまり魔法魔法言っなよ」

「分かってるって。気をつけるよ」

それじゃ解きますか。

「どうしたんですのネギ先生？」

ん？あやかたちが出てきたってことは次は私の時間か。

「あ、皆さん。おつかれさまです。実は今、朝倉さんと仲良くなつたところなんですよ」

「そーそー？」

「ちよっ……ネギ先生それは……」

「あやか、静かに。お前達ももうすぐ就寝時間になるから部屋に戻れよ。これはクラスメイトとしてではなく出張特別広域指導員としての言葉だからな。従うように」

『うつ・・・』

広域指導員って肩書き結構便利だね。

「神儀君の言うとおりだ。それぞれの部屋に戻るように。ネギ先生もあまり生徒を甘やかさないで」

「あつ、新田先生」

「は、はい。すみません」

「神儀君もそろそろ風呂に入ってくるように。君の場合は最後だから就寝時間を少し越す程度なら許すからのんびりしてきなさい」

「ありがとうございます。なるべく遅くならないようにしますね」

本当、新田先生っていい先生だね！教員職を定年退職したら私が卒業後かわからんけど興す予定の会社の管理職あたりに就職してもらおうかな？

さて、今夜はのんびりと一人で露天風呂を満喫しようかな。

Side・end

Side・other

紫稀と新田先生に窘められた3-Aの面々は自分たちの部屋に戻った。が、再び騒ぎだし駆けつけた新田先生に怒られ、朝まで班部

屋からの退出禁止を突きつけられた。見つけたらロビーで正座という罰則付きで。

因みに5班と6班は紫稀が張った遮音と認識阻害の結界のお陰で怒られはしなかった。

「ブーつまんな〜い。枕投げしたいのにな〜い」

「ネギ君とワイ談したかったんだけど・・・？」

「ネギ君と一緒に布団で寝たかったのにー」

「いーからあなた方は早く部屋に戻りなさい！！」

一部の内容が不穏だが、気にしないでおこう。と、その時。

「くつくつく・・・怒られちゃんの・・・」

「朝倉さん〜!?!」

朝倉和美が現れた！最悪なことを企みながら。

「3 - Aで派手にゲームして遊ばない？」

「何をいつてるんですか。委員長として許しませんよ、そんなこと賛成ー」

「ゲームってどんなゲームなの？」

「反対ー。正座イヤー」

各々の意見を言い出す3 - A。

「名づけて『くちびる争奪！』！修学旅行でネギ先生・シキ君とラブキッズ大作戦？』！！！！ネギ君のマナージャーの了解もとってあるよ」

たかが10歳の子供教師にマネージャーも何も無いと思うのだが、
ようはあのエロオコジョだということ。

朝倉の言葉の最後の方は聞こえていなかったようで5班と6班以
外のメンバーは朝倉にルールの確認などを行っていた。

「朝倉さん・・・」

「ん？やっぱダメか、いんちよ」

「やりましょう。クラス委員長として公認しますわ」

どう見ても委員長としてではなく私欲として公認しているあやか。

「よし。各班10時半までに私に選手2名を報告！！11時から
ゲーム開始だー」

『おーーーっ』

こうして特別企画は実行直前となった。

ところで、廊下になかった5班と6班には朝倉が出向いてゲー
ムの説明をしたところ両班とも不参加を表明。その際に別の班から
もう1人ずつ出してはどうかと提案され、1班から4班までの参加
は3人ずつとなった。

企画参加者は以下の12名。

- 1班 椎名桜子・鳴滝風香・鳴滝史伽
- 2班 古菲・超鈴音・長瀬楓^{クワフエイ}
- 3班 村上夏美・雪広あやか・ザジィレイニーデー
- 4班 綾瀬夕映・佐々木まき絵・宮崎のどか

以上の通りだ。そのメンバーが選ばれた模様をお伝えしよう。

回想・1班

風「僕たちが出るよー！」

史「お姉ちゃん、私はいやですー！」

柿「それじゃあ双子に任せようっか」

桜「そうしようか」

円「丁度2人だしね」

『ルール変更を伝えるよ。5班と6班が不参加を表明。その際に他班から1名ずつ増員したらとの提案があったから参加人数は各班3人ずつに変更。早めに決めて頂戴ね』

円「変更だつて」

風「もう1人誰にする？」

史「私は決定のままなんですネ・・・」

柿「適役ならいるじゃない」

桜「へ？あたし？んー・・・。まあいつか」

柿「てことで桜子と双子の3人ね」

回想・2班

古「シキが出るなら私が出るアル！」

楓「ならば拙者も」

超「それなら二人に任せるヨ」

葉「私はこういうのに向いてませんからね」

春「アタシもいやっすー」

五「私も運動は得意じゃないですからね」

『ルール変更を伝えるよ。5班と6班が不参加を表明。その際に他班から1名ずつ増員したらとの提案があったから参加人数は各班3人ずつに変更。早めに決めて頂戴ね』

春「らしいっすけどどうします？」

葉「私はさっきの通り向いてませんから」

五「私も先ほどと同じくです」

超「・・・しょうがないネ。私が出るヨ」

古「超が出るアルカ」

楓「これはなかなか楽しそうでごぎるな」

回想・3班

雪「当然私が出ますわ!」

那「それじゃもう一人どうしようかしら?」

夏「私は無理だよ!。朝倉は司会役みたいだから出ないみたいだし」
ザ「・・・」(私が出ます)

雪「ザジさんが一緒に出てくれるなら頼もしいですわ」

『ルール変更を伝えるよ。5班と6班が不参加を表明。その際に他班から1名ずつ増員したらとの提案があったから参加人数は各班3人ずつに変更。早めに決めて頂戴ね』

那「あらあら。それなら夏美ちゃんでなさい」

夏「えっ!?!」

雪「朝倉さんが出れないなら夏美さんしかいないでしょう」

ザ「・・・」(多分大丈夫)

雪「ザジさんもこう言ってますし、報告に行ってくださいわ」

夏「そ、そんなあ・・・」

那「夏美ちゃん。適当に頑張っで見つからないように部屋に戻ってくればいいわ」

夏「ちづねえ・・・」

回想・4班

ま「はいはい!私が出るよ!」

パ「それじゃもう1人はのどかね!」

タ「そうですね。のどかでもいいでしょう」

亜「2人とも頑張つてーな。応援するで」
の「え?え?」

「ルール変更を伝えるよ。5班と6班が不参加を表明。その際に他班から1名ずつ増員したらとの提案があったから参加人数は各班3人ずつに変更。早めに決めて頂戴ね」

ま「あと1人だつて。どうする?」

パ「私はあまり向いてないからな」

亜「ウチもこういうことは向いてへんからな」

タ「それなら私が出るです」

の「夕映が一緒なら心強いね」

タ「私はお2人を援護するのでキスは順番を決めて2人でやると思います」

ま「それなら本屋ちゃんに先を譲ってあげるよ」

の「あわわ」

こんな感じだった。

ついでに朝倉が5班と6班に説明にいった時のも教えとこう。

回想・5班&6班 アスナ⇨菜 アリカ⇨カ アキラ⇨明

朝「ねえーねえーちょっとしたゲームやるんだけど参加しない？」
菜「何企んでるの？」
ゆ「なにやるのかにやー？」
朝「企むなんて人聞きの悪い。ネギ先生シキ君とキスするゲーム。
ルールは　　ね」
エ「私たちは別に不参加でいいな」
カ「そうじゃな」
木「そうやね」
刹「やる必要がないですね」
朝「それでいいの？クーちゃんとか長瀬あたりがシキ君を狙うと思
うんだけど」
エ「それこそ心配は無用だ」
千「確かにいらさないな」
さ「隙についてキスを出来る人がいないと思いますしね」
マ「出来る人がいたら尊敬するね。エヴァなら出来そうだけど必要
ないしね」
茶「確かにマスターなら出来るかもしれませんが、キス程度なら参
加しなくてもいいですからね」
エ「ということだ。だから私たちは参加しない」
朝「そっかー。それじゃ参加者4人減るわけね」
カ「他の班は参加するのであるう？それなら1人増やして3人ずつ
に変更したらよいのではないか？」
明「それなら予定人数とは変わらないから有効なんじゃない？」
朝「なるほど。その案もらうね。後トトカルチョもやるんだけどそ
っちはどう？」
木「そんなら、4班からのどかが出るなら4班一点買いやな」
刹「そうですね。というかシキ君が言ってたとおりの展開になりま
したよ」
朝「言ってたとおりにってどういうこと？」

マ「師匠が風呂に行く前に言ってたんだよ」

千「確か「朝倉がなにか企んでると思うけど参加せずに賭けだけにしとけ。その場合は宮崎が出る班に賭ける」ってな」

朝「す、すごいね……。シキ君って一体何者なのさ」

エ「その辺は時期に分かる」

菜「そうね。多分だけど京都・奈良から麻帆良に帰ったときには知ってるんじゃない？」

朝「なにその具体例。まあ15、16班は不参加で他班から増員つとみんなに伝えないとね」

カ「騒ぐのは勝手だが程ほどのつ。確か今夜はシキも見回りに参加するといっておったからのつ」

朝「忠告ありがとねー。じゃあこれで」

こんな感じで、紫稀が若干ネタバレをしていた。

そうして11時。ゲーム開始の時間である。因みに紫稀は露天風呂を未だに堪能していた。人払いの結界を張った上で。なんとという能力の無駄遣い！

『修学旅行特別企画！！「くちびる争奪！！修学旅行でネギ先生・

シキ君とラブラブキツス大作戦」~~~~~!!!」

「キヤー始まったー」

「なかなか本格的じゃんー」

『では、選手の紹介に入りましょうまずは1班から・・・』

1班

「あぶぶぶ。お姉ちゃ~~~~ん、正座いやです~~~~」

「大丈夫だつて僕らはかえで姉から教わってる秘密の術があるし、ラッキー仮面がいるんだから」

「んーこつちかなー?」

2班

「シキと勝負が出来るアル」

「拙者も頑張るでござる」

(ころあいを見て一人でとんずらするネ)

3班

「なんで私がこんなことを・・・」(まあーちづねえの指示通りに途中で逃げよう)

「つべこべ言わず援護してくださいな。ネギ先生の唇は私が死守します」

「・・・」(微力ながら、手伝います)

「ありがとうございますわ、ザジさん。頑張りましょう」

4班

「エへへー?ネギ君とキスカー?んふふ?」

「ゆ、ゆ、ゆえ~~~~」

「絶対勝つてのどかにキスさせてあげます。行くですよっ」

「う、うんー」

「私もキスしたいから、夕映ちゃんの指示に従うよー」

『ではゲーム開始!!』

こうして、ゲームは始まった。

そのころの薬味。

「うつつ……？何だろこの寒気は……。やっぱり見回りに行くべきかな……。でも部屋から出ないようになって新田先生たちに言われたんだよね……。どうしようかな……」

ターゲット
標的の一人にされている薬味は部屋で悩んでいた。

Side・end

Side・紫稀

1時間も満喫してしまった。それはそうとやっぱり騒がしいな。和美が例の企画をやったか。

まずはロビーで捕まった面子の確認かな。

旅館ロビーNow!

3人?誰だろ。

「正座は楽しいか?」

「あつ、シキだー」

「シキ君ですー」

「……」(こんばんわ)

結構楽しそうだな。それにしても双子とザジか……。

「就寝時間なのにシキも出歩いているー新田先生に報告して道連れだー!」

そんな考えか。だが、残念。

「そうはならないんだよな。実は今夜の見回りに私も入ってるから出歩いて問題ないわけだ」

「ずるーいーいー!」

「ずるいですー……私も巻き込まれただけですのにー……」

さてそろそろ他の面子の回収に行くか。恐らくあい「いたアル!」
……。

「やっば、お前らも参加してたのか・・・」

「勝負ヨ、シキー!」

「拙者も混ぜてもらおうでござる」

「私、逃げてもいい力？」

「超、逃げるなら今のうちだぞ。古と楓は正座決定な」

「勝てば正座しなくていいアル!」

「今回は勝たせてもらうでござる」

「それなら逃げさせてもらうネ。二人とも頑張るといいヨ」

よし、速攻で捕まえて正座させよう。

「行く「残念。ゲームオーバーだ」なっ!？」

「一体何をしたでござる?」

えー何って簡単だよ。

「お前らが追えないほど速く動いただけだ。てことで正座な?私がいなくなつて逃げようとするなよ。既に新田先生には報告済みだ」

「しょうがないアル・・・大人しく正座してるヨ」

「潔く正座するでござる」

「そういえばキスの対象に私も入ってたのか?」

「そうアル!だからシキと勝負したヨ!」

そっか。私も対象に入っているのか。それなら下等生物にはそれ相応の罰を与えないとな。

さて後はあやか辺りを探るか。

そんな感じに大雑把に歩いていたらあやかに遭遇した。

「おしつ、あやか。ロビーで正座な？」

「逃げますわ！」

「残念だが、そうは問屋が卸さない。てことでロビーに連行だ」

暴れるあやかを肩に担いでロビーへ。

「そういえばなんでシキさんは連行する側ですの？」

「それは今夜の見回りに私も広域指導員として参加しているから」

「なるほど、そうでしたか」

「恐らくだが、子供教師も勝手に見回りとかしてそつだな。見つけたらロビーで正座させるか」

「シキさん！是非そうしてくださいな！？そしてネギ先生の隣は私にお願いしますわ！！」

えー……。これで釣れるなんて……。ちよろすぎるだろ。あと確認しないと。」

「そういえば3人1組での参加なんだろ？ザジは既に捕まってたけどあと1人はどこいったんだ？」

「夏美さんですか？気付いたらいなかったんですのよね」

「そうか夏美だったか」

（それなら恐らく千鶴辺りが途中で逃げてきなさい。とでも言っただろうな）

「あとザジさん以外に誰が捕まっていますの？」

「双子と古、楓だな」

「4班以外は殆ど壊滅ですわね。捕まった班の残りの人はどうなっていますの？」

「超は逃げたから既に部屋に戻っているだろう。桜子は……。多分持ち前の運で捕まらずに部屋に戻ってそうだな」

「確かに桜子さんならありえますわね。それにしても4班はどうなっているのでしょうか？」

「さあーな」

さて、ロビーに着いたから正座させようつと。

「いいんちよ捕まったんだー」

「正座させられるメンバーが増えたでござるな」

「残りはどうなるアル」

「んじゃ、適当に回ってくるか」

Side・end

Side・other

『ネギ先生のいる教師部屋に潜入した4班ですが、教師部屋はもぬけの殻！現在旅館内を搜索しております。残りの班は壊滅状態！1班と3班の大乱戦の隙に椎名と村上は逃げ出し見回りのいない通りを歩いて自分たちの部屋に。2班の超もシキ君と古菲と長瀬が戦っている隙に逃げ帰りました。結果、残っているのは4班だけとなりました。一体どうなるのかー！？』

「ゲーム中に戻ってきたときは驚いたけどどうしたのよ？」

「なんか嫌な予感がしてねー。夏美ちゃんと一緒に逃げてきた」

「ということは1班と3班の優勝はなかったってことね」

「ふうーやっと戻ってこれたネ」

「おかえりー」

「おつかれさまでした」

「超りん、最初から逃げるつもりだったでしょ？」

「そうヨ。こんなので正座なんてバカらしすぎるネ」

「ただいまーちづねえ」

「夏美ちゃんおかえりなさい」

「桜子と一緒に逃げれてよかったよー・・・」

「ネギ君どこいったのかな？」

「急いで探しましょう」

「う、うん！」

「あっ！あれは」

「いたね」

薬味は外に見回りに行っており丁度戻ってきたのを見た4班の3人は急いでロビーへと向かった。

Side・end

944

Side・紫稀

ロビーNOW！

薬味が外から戻ってくるのが見えたからとりあえず隠れている。

スニーキングといえばダンボールだろ、jk！

話がそれたな
閑話休題。

ん？あれは宮崎に綾瀬にまき絵か。綾瀬が宮崎を押ししたな。

「あ……宮崎さん……」

「せ……ネギ先生……」

向かい合っただけで真っ赤になるなよ、若いな。

「あの……お昼のことなんですけど……」

「あっ……」

ああー、薬味が告白がどうとかって言っていたな。薬味はまだ10歳だから恋愛感情なんて分からんだろうに。

「あの、と、友達から……お友達から始めませんか？」

「……はいッ？」

やっぱりそうなるよなー。青春ってやつですね。どうでもいいや。

「えーとじゃあ……も、戻りましょうか」

「は、はい」

「……」

おっ。綾瀬が足で宮崎を引っ掛けた。この軌道なら……。

「あっすすすすいませっ……」

「いえっ、あの」

そうなるわな。ん？まき絵はリボンなんか出してどうするんだ？

「たー！。えい？ちゅ」

あつれー？宮崎だけじゃねーの？まき絵もっすか？こりゃ3日目が大変になりそうだ・・・。

「そこで青春やってる4人」

「「「え？」「」」

「揃って正座な？子供教師も寝ているように指示されたはずだから一緒にな」

「「「えー！」「」」

「というかシキさんにそのような権限があるのですか？」

「私が特別広域指導員の肩書きを持っているの忘れていないか？」

「「「あ！」「」」

「？」

一人だけ分かっていないっぽい。当然薬味のことな。

「てことだから仲良く正座な。私はそろそろ元締めを捕まえに行かなくちゃいけないからな。な？和美」

私は和美が仕掛けたであろうビデオカメラに視線を向けながら言

う。

「だから共犯者共々そこを動くなよ？」

そうしてその場から動けなくなっていた和美を回収してロビーに正座させたのだった。勿論、私たち5、6班が取り分のトトカルチヨは回収させてもらった。

共犯者である下等生物にも相応の罰を与えて。今度やったら去勢して矯正するかな。

余談だが、部屋に戻った私は嫁たち相手に昨夜同様頑張ってた。

S i d e . e n d

第50話（後書き）

やっと修学旅行2日目だよ！

長いな……。色々とおかしいし……。

今回はやっと天ヶ崎たち一行の登場だ。

唯一出てきたのは1日目の新幹線で薬味をカートで轆いただけ……。

前回、忘れていたアンケート。

麻帆良祭での「まほら武道会」の空きが1つあるのですが、誰がいいでしょうか。以下の5人から選んでください。

- 1 . 忍
- 2 . ゆーな
- 3 . アキラ
- 4 . 千雨
- 5 . さよ

疑問・質問に答えようのコーナー！

紫「今回はないらしいから休みだ」

裂「誤字脱字、言い回しなどに変なところがあればご報告ください」

第51話（前書き）

ぶつちやけ紫稀パーティーの総合力は異常だ。
作者の私と言えることじゃないけれど・・・。

グラムサイト2様、天使ちゃん様、もみじ様、
杉ちゃん様×2、joker様、なおぼん様、Dai様
感想ご意見感謝です！

紫稀側の面々の二つ名募集中なり。

アリカ・木乃香・刹那・ちうたん・アキラ・千鶴・ゆーな・茶々丸、
さよ

さよに虹霞か文珠かアスラ・マキナ機巧魔神を持たせるならどれ？
虹霞1 文珠1 アスラ・マキナ機巧魔神1

修学旅行三日目前半！

そんな51話、どうぞー！！

第51話

Side・紫稀

4月24日木曜日。修学旅行3日目の朝だ。

今日も今日とて周りが騒がしい。姦しい。

「へーこれが豪華商品かー」

「あー見して見してー」

「本屋とまき絵の絵が描いてあるー」

「あースゴイー。これは欲しかったなーっ」

「ラブラブキッズ大作戦の優勝者にふさわしいねー」

そう、昨夜に和美と下等生物主導となつて行われた^{バクティオー}仮契約大会の
景品として贈呈された宮崎とまき絵のコピーカードの話題である。

あいつらとは少しOHANASHIないといけないな。昨夜だけでは時間が足らなかつたし。・・・でもしなくても別にいいのか。
私たち『家族』には被害が出ていないのだし。

ふむ。なら今回はちよつとした注意を促す程度でいいか。

恐らくアスナとアキラが既に向かつてるだろうし、アリカを連れて行くか。

昨夜と同じ休憩処NOW!

「まったくもー・・・これどーすんの、ネギ？2枚も成立カードなんて作って、どうやって責任取るつもり？」

「えっつ！？僕ですか!？」

「まあまあ姐さん」

「そーだよ、アスナ。もーかったってことでいいじゃん」

「和美とエロガモは黙りなさい」

「全くその通りだな。一応昨夜、和美にはこちらの世界の危険性を教えてやったというのに、意味がなかったな」

「なんじゃ、そんなことしておったのか」

「シキとアリカじゃない。どうしたのこんなところにきて？」

ただの注意をしに来ただけだな。

「大した理由じゃない。ちょっとした注意をしにな」

「「注意？」」

和美と薬味・・・いや、本物の薬味にも失礼だ。こいつは「これ」とか「あれ」でいいな。

閑話休題

和美と薬味は私が言った注意の意味が分かっていないらしい。まあー少し説明しておくか。

「そう軽い注意だ。今回は運がよかったとだけ言っておこうか。もしかしたら昨夜のゲームに私の『家族』も参加していた可能性があり、参加していたら間違いなく契約違反になるところだったからな」

「そういう事じゃな。もしも私たち『家族』が間違っパクティオーてその教師と仮契約しておいたら、和美はクラスメイトで魔法についてちよつと知っただけの一般人だから軽いお仕置きで済ませたかもしれんが、その教師とオコジョ妖精は間違いなく社会的にも抹殺されていたかもしれんのじゃからな」

私とアリカの言葉で涙目になって言葉が出ないあれ。

「つまりはそういうことな」

「私たちの話は以上じゃな。それじゃお主らの本題に戻ろう」

私たちの登場で本題から逸れてたからね。

「さて、子供教師。アスナじゃないが、成立カードを2枚も作ってどうするつもりなんだ？」

「そうだね。まき絵と宮崎は一般人だからこちら側の厄介ごとには巻き込めない。イベントの景品だったからコピーカードは渡すしかなかったけどマスターカードの使用は厳禁かな」

「そうじゃな。魔法使いと言うこともバラしてはいかんじやる」

「そ、そうですね。のどかさんには全て秘密にしておきます」

「惜しいなカード強力そうなんだけどな」

この下等生物は懲りていないらしい。

「なあー下等生物。お前さんが子供教師に仮契約させたいかなんてのは分かってるんだぞ？仲介量として5万オコジヨドルだったな。大方和美もその辺の事情で昨夜の企画を実行したんだろうがな」

「うっ……」

「まあーいい。下等生物が起こしたことの責任は飼い主である子供教師が取るんだしな。それで子供教師はアーティファクトカードの機能を知ってるか？」

「いえ。実はそういった方面には疎くて……」

「まあー、一応教えとくか。アリカ、出してくれ。今回は剣は出さなくてもいいから、不可視化してくれ」

「分かった。それじゃ『^ア来れ^ア』」

「「おおー」」

「このアーティファクトは・・・!?!?」

和美とあれは感心と言うか驚いているな。それも当然か。いきなり見えなくなっただんだし。下等生物のほうは『太陽の加護』のことを知っているみたいだな。

「シキの旦那!あのアーティファクトってまさかとは思うが・・・
『の加護』シリーズじゃ?」

「ほおー。下等生物のくせに博識ではないか。その通り。私のアーティファクトは『太陽の加護』じゃ」

「カモ君、『の加護』シリーズって何?」

「知らねえんですかい、アニキ!?アーティファクトの中で最も有名な『の加護』シリーズを!?!?」

「う、うん・・・」

「加護シリーズは最も有名で幻とも言える程、使用者が現れないアーティファクトですぜ。シリーズと言っても3種類しかないんですがね。その性能が並みの魔法や物理衝撃を完全に無効化する上に、その許容威力を超える強力な衝撃すらも許容ダメージ分を軽減して超えた分しかダメージを食らわない。さらに不可視化と完全な気配遮断を行なえるんですぜ。」

後は防具だけのとたくさんの武具になるっていうのもありやすし、使用している時間帯で性能ランクが上がったり下がったりするって話ですぜ。

そしてこれが有名な理由なんです。作成者が『レジェンド・アライヴ生ける伝説』なんじゃねーかって話があるんですけど」

「カモ君、それって本当なの!？」

「『レジェンド・アライヴ生ける伝説』？誰それ？」

何でこの下等生物は詳しいんだ？特に作成者の部分。公式の図鑑でも作成者は不明になってたはずなんだがな・・・？どこで洩れたんだ？とりあえず和美に説明するか。

「和美、『レジェンド・アライヴ生ける伝説』ってのは魔法使いじゃ知ってて当然、知らないのはおかしいと言ってくるらしいの有名な人だ。分かりやすく言えばというよりそのまんまなんだが、魔法使いに伝わる御伽噺があつて、その主人公と言うか題材になっているのが『レジェンド・アライヴ生ける伝説』なんだわ」

「え？ええー!？つまりそれって御伽噺になるような人が、呼ばれ方どおりなら今も生きているってことなの!？」

「そういつこつた。と言うかかなり高位の魔法使いでも閲覧禁止になつてるアーティファクト図鑑にも作成者の名前は書いてないと思ふんだが、どうやって知つたんだ？」

「あつしらオコジョ妖精には代々伝わってる噂程度なんですけどね。旦那。正直なところ作成者の話ってどうなんです？」

「まあー確かに作成者は『レジェンド・アライヴ生ける伝説』であつてるんだがな。もう戻してもいいかな」

「そうじゃな。これの性能もアーティファクトカードの意味も理解

したじやろうしな『去れ』」

ふむ、これで宮崎はカードの使い方が分かったようだな。近くで聞いているの気付いているし。

「で、子供教師。親書を渡す役目を受け持ってただろ？今日中に行つて来い」

「は、はい!？」

よし、アレはいったん部屋に行ったな。

「和美。お前にいい情報をやろう」

「ん?どういうこと?」

「ああー大した情報ではないんだが、子供教師と宮崎辺りに発信機なりGPS携帯仕込め。面白くなるぞ。それにお前らの班はシネマ村に行くんだろ?私たちもシネマ村に行く予定だしな」

「オツケー。ネギ先生と宮崎ね。それとシネマ村で合流ってことね。それで、そんなこと教えてどうすんのよ?」

「別に何も。ただの親切心だ。と言うか子供教師を宮崎は追うだろうしな。既にパルが子供教師を追いかけ気満々だからな。もしもよきの為の保険だよ」

「そういうことねー。了解したよ。任せなさい!」

さーて。これで粗方の種は蒔いたな。後は誰を連れて行くかだな。

まあー今じゃなくていいな。

てことでシネマ村NOW!

ここに来るまでに甘味処とか色々と回ってただけだね。と言うか途中でパルと綾瀬、亜子も回収しちまったんだよね。ついでに詠春にも連絡しておいた。協会前の鳥居のところに行くように。原作でちび刹那がやってた役割をやらせようかと思っただけ。

丁度ゲーセンから出てきたところであれと宮崎とまき絵を探していたらしい。まさか、まき絵までついて行くとは思わなかった。

まあーあいつらには和美に頼んでGPS携帯仕込ませてもらったから安心するように言っただけだね。

合流してからシネマ村に向かっている途中で飛針で襲撃してきた。まあー何の問題もないから普通にスルーしたんだけどな。手で回収する必要もなかったし。

因みに私がこんな回想しているのには理由がある。まあー簡単なんだけどな。

「待たせたな」

「お待たせ」

「じゃーん？」

「お待たせしました」

「どうかな？」

そう、みんなで貸衣装に着替えていたわけだ。私は普通に着流しなんだがな。嫁 + は着物だったり洋物だったりする。とりあえず一言。

「みんな似合ってるじゃないか」

これは絶対必須だろ？という刹那とアキラが男物なのは何故だ？いや、突っ込まないでおこう。さてと。多分いるだろうから合流するか。

「お、シキ君来たねー！十何人もの女の子侍らしてリアルハーレムだねー」

「何か問題があるか？パルや綾瀬、亜子は違うし、さよも若干違いますが別に構わんだろう？法律がなんとかーってのも私に対しては絶対に為り得ないからな」

自信？違うよ。これは絶対なんだ。まあー和美のことは放っておくとして、そろそろかな。

「どうも 神鳴流です〜〜」

ほら来た。面倒だな。事件後のこいつどうしようかな。

結局こいつフェイト側に行ってたしな。どうせならこっちに引き入れるか。その場合のメリットはフェイト側の戦力低下でデメリットは戦闘狂バトルジャンキーってところだな・・・。

「そうはさせんぞ！このかお嬢様は私が守る！」

「キヤーーせつちゃん？格好えー？」

ん？大分周囲が騒がしいと思っただらここまで進んでいたのか。あ
あー思考のし過ぎか。

おっ！刹那に手袋投げつけたか。刹那も律儀に受け取るんだよな
ー。まあー現段階なら月詠の相手も苦勞しないだろう。

それじゃ決闘場所に向かいますかね。

シネマ村「日本橋」NOW！

既に戦闘は始まっている。あやかたちが参戦してきて困ったけど、
まあーあの式紙程度なら大丈夫だろ。

刹那は月詠と相手している。刹那はマナとよく模擬線をしている
から二刀流には結構なれている。マナが双剣^{カドヲ}双銃だからな。夕凧で
も十分に相手できるだろう。

ところで私が何をしているかというと、木乃香をお姫様抱っこし
て逃げてるフリしてるんだ。別に逃げる必要ないんだけど、やつぱ
危機的状況に陥ったように見せるってのが重要だと思うわけだよ！

ということと誘導されているのを理解している上で城の中に入った。そしたら見事に天ヶ崎千草とフェイトとエンカウント！私に気付いたフェイトは若干動揺しているっばいよ？まー別にそれも狙いだからいいんだけど。

その後は原作の薬味を演じて城の上に。つまりは鬼に狙われているってことなんだけど、実際は何の問題もないんだ。あれ程度なら現状の木乃香でも防げるし。でも現段階で木乃香が魔法を使えることは隠しておかなきゃならんしね。

「 一歩でも動いたら射たせてもらいますえ。さあ、おとなしくお嬢様を渡してもらおか」

うん、天ヶ崎は私の正体に気付いていないっばい。んー・・・昔一度会ったと思うんだけどな・・・まーいいや。丁度よく風も吹いたことだしわざと矢を射たせてやるか。

「も ぼ？えい」

「へ？あーいーい！？何で射つんやーいっ！お嬢様に死なれたら困るやろーっ」

さて、どつやってとめようかな。面倒だから普通に掴むか。そんなじゃ。

「えいつ」

『はっ』

おやー？観客のみなさんまで同じ反応だぜ？ふむふむ。フェイト

が動かないってことは今は様子見ってことか。まあー私には関係ないんだけどね？

「何を暢気に観客気取ってるんだ？」ティルティウム『三番目』」

「ッ！？」

一瞬でフェイトの背後に回り込む私！

どうやったかって？普通に空間テレポート転移しただけなんだよね。『直死の魔眼』を出して殺しても構わないんだけど、このあとどうなるかわからないから別にいいか。

「流石だね、『全てを統べる者』。一体どうやって移動したんだい？魔力も気も使っていないようだけど」

「おー久々に言われたなそれ。それはあれだ。『フリームム一番目』の時同様、企業秘密ってやつだよ」

「そうかい。流石に僕でも勝てはしなくてもいい勝負は出来ると思っていたんだけどね。その前提条件が崩されてしまったよ。千草さん、ここは一旦退くべきだ。彼は逃げるなら追わないようだから今退かないと死んでしまう。計画どころじゃないよ」

「な、そんな奴があるなんて聞いてへん！それならさっさと撤退するで！月詠はん！」

「はい〜」

うむ。撤退したようだな。そんなら次の段階に進むかな。

「さて、木乃香。近衛家に行くぞ」

「りょーかいや」

『ということだ。エヴァ、アリカ、アスナ、マナ、茶々丸、刹那は一緒に近衛家へ。他は旅館に戻ることに。戻ったらガトウと瀬流彦の2人と一緒に警戒しておいてくれ。それと近衛家に行くメンバーはすぐに着替えてこい』

『分かった(のじゃ)(わ)(りました)(よ)(よ)』
『了解しました(したにゃー)()』

そういえばあれって生きてるかな？

っと行く前に和美に話をしないと。和美はどこかなー？お、いたいた。

「和美、ちよつと話がある」

「うおっ！？いきなり現れないでよ。それで話って？」

「子供教師と宮崎に仕込んだGPS携帯を頼りにパル、綾瀬、亜子の3人だけを連れて来い。念の為に2時間有効の私の携帯のGPS暗号をお前の携帯に送っておくから子供教師達のが使えなかったらこれでこい。目的地に着いたときに用を聞かれたら神儀紫稀に来るように言われましたって伝えればいい」

「シキ君の名前を言えばいいのね。了解っと」

「シキ、着替えてきたぞ」

全員着替えが終わったようだな。

「それじゃ行くぞ」

さーてあれはどうなったかなー？

Side・end

Side・other

フリー視点、三人称……。どれでもいいな。その視点だと「あれ」や「それ」じゃ人なのか物なのか分からなくなるのでいたし方が無いが「薬味」で通すことにする。

時は、紫稀たちが近衛家に向かう数時間前。薬味が旅館を出たところまで遡る。

旅館から出た薬味は関西呪術協会に向かっていた。が、途中といつか出だしにパルによって邪魔をされてしまう。

パルたちの一緒に回ろうと言う誘いを無碍にも出来ず、薬味は承諾することに。

そして薬味を連れ立って向かった場所はゲーセンであった。

プリクラを撮ったり、カードゲームの筐体で遊んだりして楽しんでいた。

暫くしてから薬味は隙を窺ってゲーセンから脱出、そのまま関西呪術協会へと向かう。

しかし宮崎のどかと佐々木まき絵は薬味が外に出たのに気付きどこに行くのか知る為に薬味の後をつけていた。

幸か不幸知らないが、薬味はそのことに気付いてはいなかった。

そして、走ったり電車に乗ったりしながら薬味と彼女たちが辿り着いた先は？ 毘古社。

薬味は畏が仕掛けられているとも考えずに鳥居をくぐった。

それから30分ほど走ったときに異変に気付く。閉じ込められたと。

^ブ「無間方処の呪法」半径500メートルほどの半球状の堂々めぐり型結界である。

そのころ宮崎とまき絵は千本鳥居の最初の部分、立入禁止の看板があるところで立ち止まっていた。

宮崎はふと「ネギ先生」と溢す。それに反応した読心系アーティファクト「イドの絵日記」が淡く発光し、宮崎は中を確認した。そうして宮崎とまき絵は罨の中に入っていく。

薬味が休憩所で一時休息とこれからのことを考えていた時、場の雰囲気の変化した。

その直後、薬味の前に巨大な蜘蛛に乗った少年が現れる。

唐突の登場に混乱するも徐々に冷静さを取り戻し、『サギタ・マキカ魔法の射手』数矢で蜘蛛を還す。

それを機に少年は接近戦を仕掛ける。

当然のごとく薬味に接近戦の心得など無く、防戦一方。

なんとか隙を見つけて魔法を目くらましとして使用して一時撤退する薬味。

視界が開けた少年は逃げた薬味に向かって吼えていた。

薬味と少年の戦いをアーティファクト越しに読^みていた宮崎とまき絵は何とか薬味を探そうとしていた。

その時だった。二人は誰かが来ると判断して宮崎はアーティファクトを仕舞った。それと同時に目の前に薬味と戦っていた少年が現れた。

少年は二人を注意した上で何回か会話をした。

引止めようとした宮崎に名乗られ、名前を聞かれた。まき絵は何のことが分からないが一応自分もと思い自身の名も告げた。

そして少年は致命的なミスをした。本名を教えてしまったのだ。

そうして少年・犬神小太郎は二人の前から去っていった。

それを確認した宮崎とまき絵は自身のアーティファクトを出して、薬味の援護に向かうのだった。

薬味は通りに出て小太郎を迎え撃っていた。

精霊召還による自身のコピーと雷系の『魔法の射手』サギタ・マギカ 17矢、小太郎がそれを防いでいるうちに詠唱をし、『白き雷』フルグラティオー・アルヒカンスを直撃させた。

しかし、それだけで仕留めきれず反撃をもらってしまふ。

再び防戦一方になった薬味は殴られ続けた。

小太郎の攻撃を耐えに耐え続け、とどめを刺そうと大振りした小太郎を確認して、自身への無理な魔力供給によって反撃をし、何とか倒せたかと思ったとき、小太郎が奥の手を使用した。

先ほどまでよりも機動力の増した小太郎が薬味に迫るも、第三者の声の指示を聞いて小太郎の攻撃を避ける。

薬味は宮崎とまき絵の存在を目視し、迫る小太郎を宮崎の指示通りにかわしていく。そこへまき絵も加わり、爆弾のボールや自在なリボン、粉碎する棍棒を使って小太郎を牽制していく。

そして、宮崎が小太郎に脱出方法を聞き、印の場所を薬味に伝える。

薬味が印を壊したことで発生した亀裂を、まき絵が棍棒を使い破壊して脱出に成功する。

まき絵はボールとリボン、切り裂く輪っかで牽制を仕掛けながら薬味たちの元へ向かい、時折捕縛する縄で動きを制限させようとする。

小太郎も何とか追いつがるうとするが、まき絵の物量攻撃によって中々進めなかった。

そうやって結界の範囲から出た薬味たちのところへ紫稀から連絡をもらった詠春が現れ、それを確認しても小太郎は追いかける。

詠春と小太郎の攻撃範囲が重なるうとしていた時にフェイトが現れ、詠春と小太郎は若干動揺し、その隙にフェイトは小太郎を気絶させて離脱した。

— 先ずフェイトと小太郎が去ったことを確認した詠春は、薬味たちを連れて関西呪術協会の総本山であり、自身の家に戻ったのだ。た。

S i d e . e n d

S i d e . 紫稀

関西呪術協会総本山 & 近衛家 N O W !

どうやら私の連絡が上手くいってあれは死なないで済んだようだ。別に死んでくれても構わないんだけどね。

私たちが総本山についたときには治療中だったよ。

そして私たちがついてから20分後くらいに和美たちが合流。和美には私の名前を出すように言っておいたからそれを巫女さんが確認に来たんだよな。

で、さらに10分待つてあれたちが詠春と謁見することに。

実を言うと私たちがここにいるのを知っているのは和美くらいだからまだ会ってないんだよね。というより私とキティ、アリカの登場で驚かせたいからわざと会ってないんだけど。

謁見の間でいいのかな？そこにあれと図書館3人娘、和美、まき絵、亜子が待機している。

「お待たせしました」

そう言っただけ階段を降りていく詠春の後ろを私たち神儀家+木乃香、刹那、木乃璃嬢が降りる。

『え！？』

私たちが詠春の後に降りてきたのを見てあれたちは驚いていたよ。うだ！悪戯成功ってな？

「なんで神儀家一同と木乃香と桜咲さんがいるのー！？しかもそんなところから現れるなんてどういうことー！？」

「誰か説明してー！？」

「わけが分からないです・・・！？」

すげーリアクションだ！これは期待以上じゃないか。

「ふむ。まずは木乃香と刹那がここにいる理由から教えよう。実はな」

『実は？』

おー一気に聞く体勢になったな。流石だよ。

「ここが木乃香の実家だからだ」

『は？はああああああああ！？』

「マジで？」

「大マジ」

「お嬢様ってこと？」

「そういうことだ」

『なんだってええええええええええ！？』

なんかすげー。言葉で表せない程にすげーよ。

「そんで、今度は神儀家がここにいる理由なんだが、これも簡単でな？それはな」

『それは？』

「神儀家と近衛家が昔から付き合いがあったからだ」

『はいはいはいはいはいはい！？』

「てことはシキ君もどこかのお坊ちゃんだったりするわけ！？」

「おいおいどういことだ！？」

「話の流れについていけそうにないです・・・」

「お坊ちゃんかどうかは別として資産はかなりあるな。この規模の屋敷なら10個くらいは建てれるくらいには」

あつ、これを聞いて啞然としてやがる。実際あるしな。特殊スキル使えば株で儲けられるし、創ることも出来るしな。創りはしないけど。

「あ、あの。長さん、これを……東の長、麻帆良学園学園町近衛近右衛門から、西の長への親書です。お受け取りください」

「確かに承りました、ネギ君。先ほどは大変でしたね。紫稀殿、木乃璃さん。これをどう思います？」

「お父様つたらしょうがないわね……」

木乃璃嬢は苦笑しているっぽい。なら私はシニカルな笑いをお届けしよう。

「あのぬらりひょんを近衛家から絶縁するって言うのはどうだ？」

アスナとマナ、茶々丸は分かっているようだが、キティとアリカ、木乃璃嬢は笑いを堪えている。詠春は苦笑しているな。

ぬらりひょんを近衛家から絶縁するってことは西への影響力がなくなるわけだしね。詠春との義理の親子関係がなくなるわけだし。

「その辺は後で決めましょうか。返事は紫稀殿に頼んでも？」

「ああーそれくらい、いいぞ。ぬらりひょんが読んだときの顔が見たいからな」

「その時は私も同行するぞ」

「私もじゃ。あやつの引き攀った顔が見てみたい」

「それじゃあ私は、その時の表情をとった映像か写真が欲しいですね」

「やっぱこの3人は分かってるね。素晴らしいよ！」

「木乃璃嬢、その件了解した。無駄に高画質なやつをとろう」

「この返事は別口でさせてもらいます。任務ご苦労！！ネギ・スプリングフィールド君」

「あ……ハイ！！」

「おー何かわかんないけどおめでとー先生！」

「ご苦労様ー？」

「やっぱ3・Aの騒ぎ好きは少数でも発揮されるかー。そこへ詠春が歓迎の宴を用意するといったからさらに騒ぎが……。」

「私たちは宴の席では適度に話していた。今回の襲撃の件も含めて詠春には要警戒と。」

宴の後、詠春たちが風呂に入った後に私は嫁たちと入った。

そして風呂から上がった私はキティとアリカにはアーティファクトを展開させておくように言っておいた。ここにいない忍の『星の加護』を展開させてから渡してから。

私は屋敷の屋根の上で時を待つ。

修学旅行三日目の夜はまだ続くのだった。人によって幻のような夢のような絵空事のような夜が……。

S i d e . e n d

第51話（後書き）

あれ？神儀家は全く活躍してないぞ？しょうがないか……。
バランスブレイカーってレベルじゃないしな。

次回、遂に！遂に！あの伏線を回収するときが！？
でもなんだか延びそうな気がする……。。

「まほら武道会」の後1枠は誰？

2票千雨 1票さよ・忍 0票アキラ・ゆうな

疑問・質問に答えようのコーナー！

裂「今回もないんだぜ……。」

紫「誤字脱字、言い回しなどに変なところがあれば報告してくれ」

第52話（前書き）

更新が遅れたような、そうでないような？

Dai様、空知 日向様、ファミリア、もみじ様×2、
mukade様、なおぼん様、ブルック様

感想ご意見感謝です！

紫稀側の面々の二つ名募集中なり。

アリカ・木乃香・刹那・ちつたん・アキラ・千鶴・ゆーな・茶々丸、
さよ

さよに虹霞か文珠かアスラ・マキーナ機巧魔神を持たせるならどれ？

虹霞1 文珠1 アスラ・マキーナ機巧魔神2

修学旅行三日目後半！

そんな52話、どうぞ！！

第52話

Side・紫稀

4月24日木曜日、修学旅行三日目の夜。私と神儀家＋は関西呪術協会の総本山にいた。

私は屋敷の屋根の上で一人で酒を飲んでいる。私の近くに気配があるんだけどさ。

「来たか、『テイルテイウム三番目』」

「出来ればフェイトと呼んでほしいな。その呼び名は好きじゃないんだ『スモエンテレケニア全てを統べる者』」

「そうかい。それじゃフェイト。今回のお前の目的はなんだ？『コスモエン全なる世界』としての仕事じゃないんだろ」

「本当、どうやって調べているのか疑問だよ。今回の僕は『コスモエン完全なる世界』のメンバーとしてではなく、傭兵みたいなものさ」

傭兵ね。なるほどなるほど。

「後は^{リョウメンスクナ}両面宿儺がどのようなものかの確認かな」

スクナの調査か。

「^{リョウメンスクナ}両面宿儺ね。あれってきちんとした状況が揃わないと完全に封印解かれないって知ってるか？」

「初耳だよ、それ。一体どういうことだい？」

「どういうことも何も、当時両面宿儺リョウメンソクナを封印したのが私だからだよ」

「は？史実では日本の昔の人間が退治して封印したんじゃないのかい？」

「だからそれ自体が間違いなんだよ。退治したと思ってるやつらは偽物をつかまされたってことだ。本物の両面宿儺リョウメンソクナは私が封印したんだから」

「そういうことかい。それでその状況って一体なんだい？」

「一つは藤原の系譜で魔力量が多い人間。一つは夜であること。そして最後は高位の陰陽術者であることだな。天ヶ崎千草はギリギリボーダーラインを超えているから大丈夫だろう。系譜なら木乃香がいる。さらに夜だ。お前は木乃香を誘拐しにきたんだろ？」

「そつだよ。情報提供感謝するよ。それでどうするんだい？」

「今回は木乃香を誘拐しても構わん。追いかけるがな。私の目的も両面宿儺リョウメンソクナでな。1600年前の約束を果たそうと思つてな。まあ！約束つて言つても一方的なやつだけだ」

「本当に誘拐してもいいのかい？」

「構わんぞ。本人にも了解は取つてあるしな。屋敷にいる人間は通常ヘトリファイケーションの『石化』ならやつてもいいしな」

「そうかい？それなら遠慮なくやらせてもらおうよ。また後でね、
全てを統べる者」

さーて、やっと再会出来そうだ。

S i d e ・ e n d

S i d e ・ o t h e r

紫稀とフェイトの対談？が終わってから屋敷の雰囲気は一変した。
風の音が大きく聞こえるほどの静寂に包まれた。

薬味は下等生物と屋敷の廊下を歩いていた。そして悲鳴を聞く。

悲鳴の発信源であろう部屋にたどり着き、薬味は一瞬呆然とした。

朝倉和美、和泉亜子、早乙女ハルナ、佐々木まき絵、宮崎のどか
の5人が石化していたからだ。

そこを下等生物の声で何とか持ち直し、他の人の搜索へ移る。

刹那は屋敷の雰囲気の変化を感じ取り、屋敷内を走っていた。

自身にとって大事な人である木乃香を探すために。

詠春は本山の守護結界を過信して油断していた。

その油断をフェイトに衝かれて不意打ちを喰らい石化の呪文をかけられた。

この事を誰かに伝えるべく一人廊下を進む。

アスナと木乃香は屋敷内を歩いていた。この二人も異変を感じ取り、部屋から出てきていたのである。

そして屋敷の人間の殆どが石化しているのを知って、周囲を警戒しながら誰かと合流しようと屋敷内を歩き続ける。

刹那と詠春、薬味は合流した。

詠春は刹那と薬味に白い髪の少年・フェイトに気をつけるように忠告して完全に石化した。

刹那はアスナと木乃香の二人に念話で連絡を取り合い、四人は風呂場で合流することに。

刹那と薬味は風呂場へ急いで向かう。

綾瀬夕映は走っていた。山の中を。

信じられないことに数分前に目の前で友人が石になった。その際に朝倉和美に逃がしてもらった。助けに呼ぶようにと。

この非現実的な事態に対応してくれる機関など知りえなかった。だが、彼女は思い出す。クラスメイトの彼女たちならと。

そうして彼女たちへと連絡するのだった。

長瀬楓は宿泊している旅館のロビーにいた。

ロビーでのんびりしていると携帯に着信が入った。

その内容は非現実的な事態だが、自身もそれなりに知っている世界の一片だった。

故に彼女はその救援要請を受けた。古菲クフエイと言う一般人最強クラスの友人と共に。

アスナは刹那と念話で連絡を取り合ってから、木乃香と一足先に風呂場についていた。

風呂場についてからもアスナは周囲を警戒し続けていた。

そして背後に気配を感じ、一閃。

襲撃者に一撃を加えることは出来たが、攻撃直後の隙を衝かれてアスナは無力化され、木乃香は攫われた。

木乃香は攫われた。攫われたといっても事前にこうなることを彼女は知っていた。紫稀との計画で。

計画の目的の一つは関西呪術協会の強硬派・過激派の処分。二つ目は紫稀の我が侂であるが、リョウメンスクナ両面宿儺の完全覚醒。

その為にわざと攫われる手筈になっていたのだ。

故に木乃香は慌てないし、戸惑わない。時が来るまで彼女は待ち続ける。

刹那と薬味は風呂場にたどり着く。

しかし、既にそこに木乃香の姿はなく、一時的に無力化された状態のアスナが床に転がされていただけだった。

だが、未だに脅威は去っていなかった。

そのアスナに気を取られ周囲の警戒を怠った刹那はその隙を衝かれフェイトの攻撃を喰らう。

その後、暫く睨み合いが続いたが、フェイトは薬味に二つ三つ言葉を残してその場を去った。

アスナと刹那、薬味はフェイトを追うことに。

その三人に合流するようにマナも現れ四人で木乃香の救出に向かう。

その頃、楓と古は旅館を抜け出し、連絡者・綾瀬がいるであろう山へと向かっていた。

四人は天ヶ崎千草とフェイトに追いつく。

追いついてきた四人を見た天ヶ崎千草は木乃香の魔力を使って大量の鬼を召還した。その数ざっと600体以上。

さらに隠れていたのか犬上小太郎と月詠までもいた。

下等生物は薬味に作戦会議のための時間稼ぎを頼み、薬味は一風花旋風風障壁《フランス・パリエース・ウエンティ・ウエルテンテイス》を展開した。

風の中で決めた作戦はとりあえず鬼の数を減らして隙をついて木乃香の元へいくと言うもの。

刹那は月詠の対応に、薬味は小太郎の対応に追われるために、実質、鬼の殲滅はアスナとマナの仕事だった。

時間的猶予もあまり無い為彼女たち3人は奥の手を出すことにした。

そして風が止んだときこの場の全員は声を聞いた。

「やあやあ威勢がいいねえー。何かいいことでもあったのかい？」

この場の雰囲気こそぐわなない飄々とした声で登場したのは、紫稀だった。

S i d e · e n d

アスナたち四人が木乃香の救出に屋敷を出て行ったのを確認した私は、キティとアリカ、茶々丸を伴って石化した詠春を床に寝かせていた。

「キティ、『偽・盾舜六花』の出番だ」

「ん？双天帰盾か？」

「そうだよ。実を言うと使いこなせることが出来れば永久石化も解呪出来るバグ技だからね」

「「「は？」」」

ん？三人揃って啞然としているな？

「本当なのか？」

「本当本当」

「悪魔の永久石化も？」

「可能可能」

「なんだそれはー！？」

いきなり叫ばないでくれよ。

「いいから早く詠春の石化を解呪して解呪専攻の治療術者のも解呪させなきゃいけないんだから」

「ああ、分かった。何を言っても無駄になりそうだしな……。」「
双天帰盾、私は拒絶する。」「

「……ここは？確か私は石化されたはずでは……。あれからどのくらいの時が？」

よしっ、成功だね。状況説明をしないと。

「あれからそれ程時間は経っていない。今夜総本山にいた治療術者の名前を速やかにリストアップしろ。数人の石化を解呪したら私たちも出るからな」

「分かりました。確か執務部屋に専攻ごとに総本山に属している術者のリストが置いてあったと」

木乃璃嬢の日頃の補佐のお陰かな？

あれから十数分。10人ほどの治療術者の石化を解呪して、キティと茶々丸を置いて、詠春を引き連れて3人と1体で戦場へ向かう。

あれは一風花旋風風障壁《フランス・パリエース・ウエンティ・ウエルテンティス》か？てことは作戦会議中ってことか。そろそろ

止みそうだな。派手に・・・いや、地味に登場しよう。

丁度止んだな。行くぜ。

「やあやあ威勢がいいねえー。何かいいことでもあったのかい？」

あっ、滑ったっばい。くっそー・・・。

「ときどき思っくんじゃが、シキってアレじゃよな？」

「そうですね。私もアレだと思います」

アレって何？なにやらそこはかたなくバカにされてる気分なんだけ？思い切って聞いてみよう。

「アレって何さ？」

「「バカじゃよな」ですよね」「

・・・orz

「旦那、ガンバレヨ」

ゼロが優しい・・・だと！？よし気を取り直そう。アスナたちも呆然としてるし、そろそろ戻らないと。

「で、作戦会議は終わったんだろ？」

「あ、うん。私とマナが鬼の殲滅、刹那がそこにいる二刀流の神鳴流剣士、ネギが狗族の少年ね」

「んじゃ、私たちも鬼の殲滅か。ああーああー600体程度か。両ウメンスクナ面宿儺の封印を解くための魔力が必要とはいえ最低でも1000体くらいなら軽く召還できたらうに。数が少なすぎて詰まらん。そう思わないか、酒吞童子に茨木童子」

『酒吞童子に茨木童子だつて!?!』

流石に驚くか。日本三大悪妖怪だしな。

「なんじゃなんじゃ。膨大な魔力で召喚されたかと思ったらあんさんがいるとは思わなかったわ、神儀の旦那」

「そうですね、親分。こりゃあ、本気でかからないと一瞬で還されちまうで」

んーバトル気満々だな。しょうがないか。

「アスナたちの作戦通りに。アリカとゼロ、詠春もアスナたちの加勢に回れ。子供教師は接近戦でやろうとするな。あの少年は狗族だろうからな、接近戦の心得のないお前では勝てる見込みが少ないからな。そして酒吞と茨木は私一人でいい」

「「「わかりました」」」

「わかった」

「わかったのじゃ」

「久々ニ暴レラレルゼ」

さて、殺し合いの開始なら名乗りを上げねば!

「神鳴流最強、神儀紫稀。

殺す気で来い。或いはその力、この

身に届くかもしれん　！」

「上等じゃあ、神儀の旦那!?!」

「旦那、この戦いを楽しみましょうや!?!」

「ただし、その頃にはお前らは八つ裂きになっているだろうけどな」
「やっべー!色々と混ざりすぎてる。麻婆神父だったり虚しい刀だつたり。」

Side・end

Side・other

紫稀の名乗りと共に他のメンバーも動き出す。

「「「「<sup>ア
テ</sup>来れ」「」」」」

紫稀の従者である四人はアーティファクトを展開する。

まずは、アリカ・アスナ・マナ・ゼロ・詠春と多勢の鬼たち。

「『太陽の加護』」

「『鬼魔乃剣Ver・大剣』」

「『貌なき剣銃Ver・炎刀・銃』」

「おぬしら行くぞ」

「わかつてるわ」

「わかつてるよ」

「斬り刻ンデヤルゼ」

「錆びたとはいえ私も英雄の一人ですからね」

アリカは『太陽の加護』の防具を羽衣に変化させ、鬼達の攻撃を受け流しながら王家の魔力を込めた剣で近くの鬼を送り還す。

アスナは咸卦法で身体能力を上げ、トメー・アルカイスアナルキアース無極而太極斬を一閃し周囲の鬼たちを送り還す。

マナは炎刀・銃で速射性と連射性の魔力弾で弾幕を張り接近させずに次々と送り還す。

ゼロは接近して手に持つ自身の身の丈より長い片刃剣で次々と切り刻んでいく。

詠春は神鳴流の奥義や秘剣を駆使しながら送り還していく。

それぞれがそれぞれの特性を十全に理解した上での攻撃は、僅か5分ほどで2分の1の300体程を削っていた。

鬼殲滅組はかなり順調であった。

刹那と月詠の戦いは開始から刹那が押していた。その理由は刹那のアーティファクトにあった。

「散れ、千本桜」

斬魄刀・千本桜。解号と共にその刀身は無数の刃に枝分かれ、対象を切り刻む。その無数の刃のことごとくが月詠に迫っていたからだ。

月詠が一方向を警戒していると別の方向から桜色の刃が迫り、そちらに注意を向けるとまた別方向から迫る。

そしてその無数の刃を潜り抜けて刀身が消えた刀を持つ刹那に迫っても、刀身が消えると言う弱点を夕凧によってカバーされ防がれる。

しかし、月詠の顔に苦痛は無い。

「いいどすなあゝ。刹那センパイ、もっと楽しみまひよ」

あるのは恍惚とした顔だった。強い相手と戦えると言う戦闘バトルマニア狂としての喜びがそうさせていた。

だが、その戦いも長くは続かない。

「お前には付き合っていられない！次で決めさせてもらう！卍解

」

刹那は力を揮う。自身のために。

刹那は力を揮う。大切な人たちのために。

刹那は力を揮う。彼女の笑顔のために。

刹那は力を揮う。あらゆるモノからその全てを護るために。

その力は、護りたいと言う確たる意思によって、その全てに仇名すモノを打倒するための形と成す。

「天鎖斬月！！」

その名と共に斬魄刀は全てが漆黒に染まった日本刀へとなる。

「月牙」

刹那は刀に自身の神通力を喰わせ、月詠の背後に一瞬で回りこむ。

あまりの速度に反応が数瞬遅れた月詠に刹那の刃が迫る。

「天衝！！」

その言葉と共に月詠は防ぐ為に回した二刀を折られ、防ぎきれなかった衝撃で遠くまで飛ばされたのだった。

「アヘアツ
去れ」

それを確認した刹那は斬魄刀をカードに戻し、夕風を持って木乃香の元へ急ぐ。

こうして神鳴流剣士対決は刹那の勝利に終わった。

薬味・・・しょうがないから今回はネギにしておこう。

ネギと小太郎の戦いはあまり見栄えのしないものだった。その理由は明快で、ネギが紫稀の助言どおり接近戦を避けた『魔法の射手』サキタ・マキカや『精霊召還』を主立って使って中遠距離だったからだ。

それに業を煮やした小太郎は吼える。

「くらあーネギーー！ちまちま遠くから魔法使ってないで、男なら拳で勝負せえんかい!？」

「わざわざ相手の土俵で勝負する必要なんてないからね。シキさんのアドバースどおりいかせてもらうよ」

そう言つとネギは30本もの雷の『魔法の射手』サキタ・マキカを展開し、弾幕を張っていく。小太郎はその30本もの矢を狗神や気を纏わせた拳と足で防いでいく。

その間にもネギは新たに『魔法の射手』サキタ・マキカを展開して攻め立てる。

そんな感じで千日手になりつつあるネギと小太郎の戦いに変化が訪れた。

刹那の「月牙天衝」の余波が襲ったのだ。ネギはその余波に怯み、小太郎が懐に攻め入ろうとした。その時、ネギと小太郎の中間に巨大な手裏剣が刺さり、何者かの掌底で小太郎が近くの木に叩きつけ

られた。

その何者かの姿を確認したネギは驚きを露にする

「な……長瀬さん！！夕映さん！？」

「あらゆる事態を想定しなければすぐに負けてしまう……精進が足りぬでござるよ、ネギ坊主」

「そうアル。絶対と言うものはないアル。ところであっちのデカイの本物アルかー？強そアルねー？」

「おや、古も来たのかい？」

「……何や、姉ちゃん達は」

その何者は長瀬楓、綾瀬夕映、古菲クイフェイの三人だった。たまたま近くの鬼を殲滅していたマナはそう言って殲滅を続けながら遠ざかっていく。

どうやら彼女は楓は来るものと思っていたらしく、古菲の登場にはそれなりに驚いていた。因みに古菲はマナの後を追っていった。

「え……？な、長瀬さん……で、でも、あれ？な、何でここに……」

「私が携帯電話で呼んだです、ネギ先生」

「ゆ、夕映さん」

ネギの疑問に夕映が答える。

「さあ、ここは拙者に任せ行くでござる。急ぐのでござるう？ 刹那も行ったようござるしな」

楓は小太郎を任せて、ネギに先に行くように促す。それにネギは反対しようとするも楓に押され先に行くことに。

それを追おうとした小太郎を楓は進行方向の地面に苦無？を投げて妨害する。

そうしてネギ对小太郎の戦いは、楓对小太郎の戦いに変更となった。

楓は多数の分身と共に攻め、小太郎が本物と分身の見極めきれないのを理解して分身に紛れて掌打。

その戦いが続き、小太郎の反応が遅れる始めたころに楓が小太郎の背後に回って腕を取って地面に叩きつけ押さえ込んだ。

こうしてネギ对小太郎の戦い改め、楓对小太郎の戦いは楓の勝利で終わった。

そしてこの戦いを目撃していた夕映は「魔法」の存在を知ることになった。

多数の鬼達を殲滅していたアリカ・アスナ・マナ・ゼロ・詠春の

元に増援として古菲が加わった。

「アイヤー。さすが真名アルね　しかし私、本物のオバケ見るの初めてアルよ」

「古。お前は人間大の弱そうなのだけ相手してくれればいい」

関心していた古菲にマナが指示を出す。が、その内容を聞いて少し怒っていた。

「あ、バカにしてるアルね〜。中国四千年の技なめたらアカンアルよ〜」

そう言っている古菲の背後に数体の鬼が迫る。

「ハッ」

「なにふうっ」

その鬼たちに「マーティーパーンチュアン馬蹄崩拳」を繰り出し、他の面々を関心させていた。

「アリカ、ゼロ、マナ、詠春！私もそろそろ先に進むわ。ここは任せるわね！古もあんま無茶しないようにね」

「任せるとのじゃー！」

「任されたよ」

「任サレナクテモ斬り刻ムぜ！」

「木乃香を頼みます、アスナくん！」

「頑張るアルよー、アスナ！」

そう言ってアスナは戦線から離脱し、先に進んだ刹那たちを追う。
この場に残されたのはアリカ、ゼロ、マナ、詠春、古菲の4人と
1体。

未だにいる鬼は中級クラス以上のものが120体程。

彼女たちの戦いはまだ終わらない。

その頃の紫稀対酒呑と茨木の戦い、というか遊びの範囲だった。

酒呑は刀を振りかぶって斬りかかり、茨木は石で出来た棍棒を振り回す。それらを紫稀は【無銘】で捌いていく。

紫稀が斬りかかっても、酒呑と茨木は連携して翻弄しながらかわしていく。

「流石だな、酒呑・茨木」

「旦那こそ流石や」

「全く技術が錆びないなんてずるっこいなあ」

喋りながらもお互い攻撃の手は緩めていない。紫稀は時々「神鳴流神儀型」の奥義を使ったりもしていた。

「あらゆることに対処するために日頃の努力は大切だったことだ」

「その通りやな」

「それにしても何百年ぶりでっしゃるな、旦那との戦いなんて」

最初から分かるのとおり、彼らは何百年前に出遭い、戦ったのだ。

その時の紫稀は虫の居所が悪く、酷いやられ方だったらしい。そのせいで酒呑と茨木は若干トラウマを負ったらしい。既に完治はしているらしいが。

因みに虫の居所が悪かったのは正義の魔法使い（笑）のせいであつた。

そんな初対面だったにも関わらず、紫稀と酒呑・茨木の関係が成り立っているのは、その後の付き合いのお陰である。

強者であったこともあり、紫稀を気に入った酒呑は自らが率いていた鬼達との酒宴に誘ったのだ。酒宴に参加した際に紫稀の機嫌が直り、初対面での戦闘のことを紫稀が謝罪したことで水に流し、以降は友人のように接してきたのだ。

接してきたと言っても神鳴流に滞在する際に毎度毎度暇つぶしで勝負したり酒を飲んだりしてただけだが。そして、必ずと言っていいほど、その時の神鳴流の門下生たちに迷惑を掛けていたらしい。主に戦闘後の後始末的に。

そんな彼らの戦いは、無駄の一切を省いた舞とも取れるほどに昇華され続けた。

（そろそろ頃合いか）

「酒呑、茨木悪いが今回はこれで終わりだ。そろそろ私の目的が果

たせるからな」

「そんなこと言わんで、もうちよいつきおつてや」

「そやでー旦那。久々に戦つてんやから」

「そうも言つてられないんだ。時間的にあいつが目覚める」

「あいつ？誰やそれ」

「目覚めるってことは封印されとるってことかいな？てえと誰だ」

「まあーすぐに分かる。あの光の柱が見えるだろう？」

「あれか？あそこつて確か・・・」

「ああーなるほど。あいつですか、旦那」

「そういうこつた。てことで私は戦場から離脱させてもらつ。今回は引き分けてことだな」

「しょうがあらへんな」

「それじゃまた機会があれば戦いましょうや」

「分かつてるさ。じゃあな」

そう言つて紫稀は「空間転移」テレポートでこの場から去つた。

「またけつたいな力使いおつてからに」

「ほんま、神儀の旦那は見てるだけで飽きまへんな」

紫稀が去つたその場では酒吞と茨木はそう呟いていた。

Side・end

Side・紫稀

うーん・・・酒呑と茨木との戦いは殺し合いと言うよりは遊びっぽいらな。まあ楽しいからいいんだけど。

さーてきちんと覚醒してくれたかね？

「儀式はたった今、終わりましたえ」

とりあえず潜んでるんだ。刹那は先に来てたと思うんだが、フェイトにも見つかったか？

「クム・フルグラティオーネフレット・テンベスタースアウストリーナ 雷を纏いて 吹きすさべ 南洋の嵐 ヨウイス・テンベスタース・フルグリエンス 『雷の暴風！！！！』」

完全に出る前にやろうとしたか。でもあの程度だとনা・・・。最低でも『キーリフル・アストラペー千の雷』クラスは必要だし。

「このかお嬢様の力でこいつを完全に制御可能な「それ無理」今・・・へ？」

「シキさん!？」

「さっきの言葉はどついでいってや!」

まあー知らなくてもしょうがないよな。

「どつやって両面宿讎リョウメンスクナの封印を解く為の祝詞を知ったか知らんが、封印されてから一度も両面宿讎リョウメンスクナの封印が正しく解かれたことは無い」

「な、なんやて！？あんさんは何を知ってるんや！？」

「知ってるも何も1600年ほど前にそいつを封印したのは私だからな」

「あんさんが封印した？封印したのは神鳴流最強の神儀紫稀様のはずやで！！」

「ああーそういえば忘れていたな。というか関西呪術協会では私が封印したと教えなおしたのか。」

「すまん、忘れていたよ。日常では基本的に認識阻害の魔法を用いてるからな。ほれ。これで私が誰かわかるだろ？」

「そう言いながら私は認識阻害の魔法を解除する。」

「そ、そんな・・・なんで神儀様がここにおるんや・・・」

「ああー絶望しきってるわ。どうすっかなー。とりあえずは説明でいいか。」

「まあー取り合えずだ。お前は中々の術者だったようだな。これで私の目的が一つ果たせる」

「目的？神儀様は一体なにを考えておるんや？」

「何簡単だ。両面宿讎リョウメンスクナの完全覚醒。その為には木乃香と実力のある

術者が必要だったただけだ」

「スクナの完全覚醒・・・？一体どういう・・・」

「ほれ、スクナがそろそろ起きるぞ。その前にやることがあるか。
エウオケ^{エウオケ}・ミワ^{ミワ}・トネ^{トネ}・シキ^{シキ}、
召還紫稀の従者『エヴァンジェリン・A・K・M・神儀』、^{カミキ}神儀ア
スナ^{アスナ}、^{サクラザキセトウナ}桜咲刹那、^{カミキチャチャマル}神儀茶々丸」

「やっと私の出番か」

「こんなことなら走ってくるんじゃないわ・・・」

「もう少しで危ないところでした・・・」

「私は何をすればいいのでしょうか？」

「とりあえず刹那は天ヶ崎千草から木乃香を受け取って来い。天ヶ崎千草。今回の誘拐計画立案者その他もろもろを挙げるなら私の一存で不問にしてやれる。明日の朝までに考えとけ」

「分かりましたえ」

「アスナは子供教師、刹那はそのまま木乃香、天ヶ崎はそいつらと一緒に陸地の方まで下がっておけ。エヴァと茶々丸は待機だな」

「ふん、わかった」

「わかったわ（りました）」

「はい」

指示を出して私はスクナの眼前で浮く。

「久しぶりだな、^{リョウメンスクナ}両面宿儺。1600年振りだ」

「……ここは？って貴様は神儀紫稀！ここであつたのが運の尽きだな！一発殴らせてもらう！」

って言ってる途中から殴ろうとしてんじゃねーか！まあー怖くないけど。

「はあーすつきりした。って何で貴様は怪我一つしておらんのだ！？」

「私の標準能力だ。とりあえず、時代が変わったからな。お前さんの封印を完全に解いたわけだ」

「……どういうつもりだ？貴様の考えることは何一つ理解出来んぞ」

理解ねえー。一存在が他の存在のことを理解出来る訳もないんだけどさー。

「あれだな。お前さんに世界を見せてやるう。その為に一旦お前さんの核を回収させてもらうが、いいな？答えは聞いてない！」

「って、貴様はまたかー！？またなのかー！？人の話くらい聞けよー！？」

「嫌だよ、めんどくさい。そんじゃ回収させてもらうわ。明日までには新しい肉体やるから」

はっはっはー！スクナの核を回収出来たわ。スクナの力の源はこちらの手にあるからな。

「キティー」

「もういいのか？」

「オツケーだ。ここに残ってるのは張りぼてのようなものだから一
気にやってくれ」

あんなのがあっても邪魔だし、もう暫くしたら暴れるだけだし。

「マスター、結界弾セットアップ「やれ」了解」

「さて、ぼーや見ているな？最強クラスの魔法使いの力を見せてや
ろう」

「は、はい！」

自慢したいお年頃？可愛いからいいけど。楽しいのかな？魔法使
いの役目についても教えてるし。

「クリュスタリナー・バズビゲネーラク・ラク・ラ・ラック・ライラック ト・シユンホライオン契約に従い デイアーコネート・モイ・ヘー我に従え
氷の女王来れ とこしえのやみとこしえのやみ！ ハイオーニエ・クリュスタレえいえんのひょうが！！ 全
ーサイス・ソーサイスの命ある者に トシ・インソン・タナトシ等しき死を ホス・アタラクシア其は安らぎ也 コスミケー・カタストロフエー『おわるせかい』」

おー張りぼてとはいえ、それなりに力が残ってたんだけどな。流
石といえば流石なんだけどな。

「くくくく、アハハハハ」

高笑いしているキティが可愛すぎる、

『茶々丸、怠っていないな?』

『勿論です。最高画質で録画中です』

『後でコピーをくれ。そして愛してる』

『了解です。それと私もです』

順調に茶々丸が壊れてるな。まあいいや。そんな茶々丸も可愛
いし。

「スゴかったです、エヴァンジェリンさん」

「そーかそーかよしよし?」

何人が集まってきたているな。ということとは。

「他の場所での戦闘も終わったようだな」

それらに混じって怪しい気配があるな……。これは……。って、
何をしたいんだ、あいつ?

ト・ティコス・テト並母タ快テチス
「障壁突破石の槍」

「残念。それは誰にも当たらない。てことで消滅するか帰れ」

「そうだね。流石に『全てを統べる者』と『闇の福音』ダーク・エヴァンジェルが相手では
勝ち目なんてないわけだからね。帰らせてもらうよ」

次はいつ関わることになるんだか……。

「シキ、今のはアーウェンルクスじゃないか?」

「そうだな。まあーあいつらがしようとしていることの前提条件を私が崩すから放っておいても構わないんだけど。面倒だ・・・」

さて、今度こそ一件落着になるかな？

「総本山に戻ろう。道中、他の面子を拾いながら」

ふあー。疲れた。屋敷に戻ったら風呂入ってさっさと寝よう・・・。

こうして波乱の修学旅行三日目が終わりを告げたのだった。

S i d e · e n d

第52話（後書き）

まさか三日目を2話かけるとは思わなかった・・・。
桜通りの吸血鬼事件の時も思ったけど。

次回、修学旅行四日目！

つまりはナギの別荘行きですね。
どういつ展開になるかな。

「まほら武道会」の後1枠は誰？

3票千雨 2票忍 1票さよ 0票アキラ・ゆうな

疑問・質問に答えようのコーナー！

裂「なおぼん様から『まき絵のバトルセンスが薬味を抜いている気がするww』どうなんだ？」

紫「薬味はまだ無詠唱を使えないから詠唱中に小太郎に接近されてしまうわけだ」

紫「だが、まき絵のはアーティファクトだから投げたりするだけで効果を発揮するからな」

紫「時間の掛からないまき絵なら牽制くらい出来るってことだ」

紫「その隙に薬味が詠唱を完成させればいいだけだしな」

裂「今回はこの辺で。誤字脱字、言い回しなどに変なところがあればご報告ください」

第53話（前書き）

1日1話更新になるかな？

なおぼん様、杉ちゃん様、グラムサイト2様、もみじ様、
Dai様×3、一雫、Testament様

感想ご意見感謝です！

紫稀側の面々の二つ名募集中なり。

アリカ・木乃香・刹那・ちつたん・アキラ・千鶴・ゆーな・茶々丸、
さよ

さよに虹霞か文珠かアスラ・マキーナ機巧魔神を持たせるならどれ？

虹霞1 文珠1 アスラ・マキーナ機巧魔神2

修学旅行終了！

そんな53話、どうぞ！！

第53話

Side・other

4月25日金曜日、修学旅行4日目の朝を紫稀たちは関西呪術協会総本山の屋敷で迎えた。

原作であった刹那が出て行くこととする件はなかった。既に神儀家+関係者内では周知の事実で、昨夜は翼を出してさえいなかったからである。

薬味と図書館3人娘、運動部2人、朝倉、楓、古菲ケーフェイは詠春が手配した身代わりの紙型が暴走していると聞いて慌てて旅館に戻っていた。

「ネギ君たちも大変やなー」

「私たちは関係ないけどな」

「関係あるのはネギ先生側だけですからね」

「さて、これからどうする？」

「シキは作業しておるしろう」

「流石にあの作業を手伝うことは私にも出来んしな」

「お茶を淹れてので、みなさんどうぞ」

神儀家+木乃香と刹那の方の身代わりは木乃香が準備したもののため、暴走もせず、本物の行動と寸分違わぬ行動をするため、本人たちは未だに屋敷でのんびりしていた。

詠春と薬味の待ち合わせの時間まで身代わりは薬味たちとは別行動をし適当に過ごし、千雨やアキラたちが回収することになってい

る。

そして、先ほどから姿の見えない紫稀は、持ってきていた実験専用の魔法球である作業をしていた。と、その時。

「茶々丸、私にもお茶を淹れてくれ」

後ろに男女を一人ずつ引き連れて紫稀がエヴァたちの前にやってきた。

Side・end

Side・紫稀

「茶々丸、私にもお茶を淹れてくれ」

「すぐにお淹れします」

ああー流石にあれを魔法球内の1週間で完成させるのは疲れたわ。

「シキ様、どうぞ」

「ありがとう、茶々丸」

ああー茶々丸の淹れる茶はいつも美味しいなあー。そんな感じに私が浸っているとキティが話しかけて来る。

「で、成功でいいのか？」

「ああー成功だ。月光^{げっこう}、陽光^{ひなた}。みんなに挨拶をしてくれ」

そう言って二人に挨拶をするように促す。

「「はい」」

「両面宿儺^{リョウメンソクナ}の陽気、月光です」

「同じく両面宿儺^{リョウメンソクナ}の陰気、陽光です」

「陽なのに月、陰なのに太陽なんて・・・名を与えたのはシキか？」

「ああ、そうだ」

月光と陽光の自己紹介を聞いてキティが私に問いかけてきたから答えた。

「シキ、どういう意図でその名前にしたん？」

今度は木乃香か。意図って大したことじゃないけどな。

「意図なんてない。エヴァと木乃香は何となく理解しているようだから聞いたんだらうけどな」

「どういうこと？」

「どういう意味です？」

「ところでどうして二人なのじゃ？」

「核は1つのはずでは・・・？」

私の答えにアリカたちは混乱しているようだ！

「簡単に言えば陰陽だ。」

神なんてものに男女の区別はない。男であつて男でない、女であつて女でない。両方を内包していて、内包していない。

そして両面宿儺リョウメンソクナの陽と陰を分けたことで男と女の二つになった。

で、名前のほうは太極図だな。太極図を見れば白と黒に分かれているが、それぞれに反対の色の部分があるだろ？その意味は陽中の陰、陰中の陽だ。

だから陽である男の方の名前に陰の月を、陰である女の方の名前に陽の太陽を入れた」

『ほおー（へえー）』

どうやらみんなは納得したようだ。

「因みに月光と陽光は任意で一つに戻ること二つに分かれることも出来る。ドラゴンールのフュージョンみたいなもんだ」

一つに戻ったら名前は両面宿儺リョウメンソクナになるわけだけだ。

そうそう、二人の容姿だけど一つに戻った場合は男にも女にも見えて、二つに戻るとその顔を男性的、女性的にした感じになる。身長は月光が170程度、陽光が160程度だ。因みに陽光はモデル体系って奴だな。どういう造詣かは適当に妄想してくれ。

「さて、時間まで一眠りしますか」

そうやって私は、割り振られた部屋に戻った。

S i d e ・ e n d

S i d e ・ o t h e r

詠春との待ち合わせの時間まで薬味たちは思い思いに過ごしていた。

朝倉は班別記念写真のために盗撮したり、普通に撮ったりしていた。

下等生物はその状況を朝倉の肩の上に乗って、眺めていた。

古菲は超たちに肉まんを口に放り込まれ、それを朝倉に撮られ、追いかけてりしていた。

楓はその状況を眺めていた。

図書館3人娘と運動部2人は露天風呂に入ったり仮眠を取っていた。

薬味は・・・知らない。

そうして時間になり、薬味と図書館3人娘、運動部2人、朝倉は詠春との待ち合わせ場所に向かった。

「やあ皆さん。休めましたか？」

「どうも 長さん！」

「この奥です。3階建ての狭い建物ですよ」

そう言っつて詠春は先導して案内する。

「ねえねえ、どこ行くの？」

「なんでもネギ先生の父親の別荘に……」

「へ？」

「ネギ先生せんせいの……」

「ネギ君のかー」

「どんなところやるか」

薬味と朝倉以外の同伴者は目的地を知らずについて来ていた。

「長さん……小太郎君は……」

「それほど重くはならないでしょうが、それなりの処罰があると思います。天ヶ崎千草についても本来よりは軽減されると……まあその辺りは私達にお任せください」

その言葉を聞き薬味は少々安堵した。

「ここです」

「なんか秘密の隠れ家みたいねー」

「10年の間に草木が茂ってしまいましたが、中はキレイそのものですよ。どうぞ、ネギ君」

「……」

そうして薬味たちが足を踏み入れた、その時。

「やっと来たか。遅かったな」

薬味たちは紫稀に声を掛けられた。

Side・end

Side・紫稀

現在、ナギの別荘NOW!

「やっと来たか。遅かったな」

詠春たちが来る前に先回りしてみました!詠春以外は呆然として
いるぜ!

「紫稀殿、来ていたのですか」

「まあーな」

詠春の質問に私はそう答える、すると。

「どうして、また神儀家一同がここにいるのー!?!?」

「何故、ここのことを知っているのでしょうか?」

「えええええ!?!?つて、ええええええ!?!?」

慌てふためいているぜ!?!?

「このことを知っているのといるのは簡単だ。それはな」

『それは?』

「子供教師にこのことを教えたのが私だから。いるのは暇だったから」

『はあああああああ!?!?』

ナイスリアクション! 楽しいなこいつら。

「シキ君って一体何者……」

「シキさんが謎過ぎます……」

「あわわわわ……」

「シキ君のことがよおわからへん!?!?」

「ふうーん」

一人だけなんか変な反応だな。あつ、バカピンクまき絵か。だったらしょうがない。

「ここにある本を読んでもいいが故人の物だからあまり手荒に扱
なよ」

「りょーかい!」

「はいです」

「は、はい!?!?」

そう指示すると思い思いに行動し始めた。やっぱり順応性高いって
こいつら……。

「どうですかネギ君」

「ハ、ハイ！見たいものや調べたいものがたくさんあって
」
「どうやら詠春は子供教師のところに行ったようだ。」

それにしてもここは懐かしいな。

「紫稀殿たちもこちらへ」

「ん？なんだ？」

「なんでも良いですから来てください」

しょうがないか。どうせ写真だろうし。

あれ？宮崎とまき絵もいるな？子供教師が呼ばれたときに近くに
いたのか？

「……………この写真は？」

「サウザンドマスターの戦友達……………黒い服が私です」

「戦友…………？」

「ええ、20年前の写真です。私の隣にるのが15歳のナギ…………
サウザンドマスターです」

「わひゃ　　これ父様？わか　　い？」

「・・・・・・・・父さん・・・」

「へ どれどれ？どれがネギ君のお父さん？」

「この人らしいです・・・」

「ん？この右にいる男の人と女の子見たこと無い？」

「そういわれてみれば私もみたことがあるような・・・」

「それはシキとエヴァじゃ」

「へ？」

「おー、大分懐かしいな」

「あの時のか」

それにしてもアリカは余計なことを・・・。

「それってどういうこと！？それにシキ君の見た目が変わってない！」

「この写真の人がシキさんとエヴァンジェリンさんで、クラスメイ
トもシキさんとエヴァンジェリンさん・・・あわわわ・・・」

ああー、宮崎はショートしたようだな。

「「私^{たち}は不老不死だからだ」」

「あー！ー！？」

下等生物か。うるさいな。

「やっと思い出したぜ！シキの旦那！どこかで見たことあるなと思

「だったらあなたは『レジエント・アライフ生ける伝説』の零崎蒼識じゃねーっすか！？それにエヴァンジェリンもゼロザキオトオリ零崎音織じゃねーか！？何で俺っちは今まで気付かなかったんだ・・・」

「どうして分かった？ああーそうか。きちんと認識したからか。認識妨害魔法の効力がなくなったからか。」

「私たちのことは一旦置いておけ。詠春続きを」

「子供教師がうるさくなりそうだから詠春にパスしよっと。」

「はい。私と紫稀殿、エヴァ殿はかつての大戦でまだ少年だったナギと共に戦った戦友でした。・・・そして20年前に平和が戻ったとき、彼は既に数々の活躍から英雄・サウザンドマスターと呼ばれていたのです」

「と言っても、出会った当初は魔法学校中退の上に使える魔法は5、6個だったがな。しかもその異名が自称だったからな」

「まあーその後はシキや他の奴らの指導のお陰で50個くらいなら魔法を使えるようになったがな」

（大戦・・・？二次大戦・・・ではないですね・・・）

「詠春はナギのことを話し、それに補足する私とキティ。近くで綾瀬が聞いているようだが、いいな。放っておこう。困るのは子供教師だし。」

「その話もおいておいて、天ヶ崎千草の両親もその戦で命を落としています。彼女の西洋魔術師への恨みと今回の行動もそれが原因か」

もしれません」

「む……なるほどな」

「以来、彼と私は無二の友であったと思います。しかし・彼は10年前、突然姿を消す……彼の最後の足取り、彼がどうなったかを知る者はいません。ただし公式記録では1993年、死亡」

「だが、あいつは確実に生きているはずだ」

「そうじゃな。あやつがそう簡単に死ぬはずが無い」

「そうだ。詠春も分かっているのだろうか？」

「ええ、勿論です。しかし、それも私たちだから思えることです。これ以上のことは私にも……すいません、ネギ君」

「い、いえ、そんな。ありがとうございます」

まっ、子供教師が知ろうが知りまいがどうでもいいな。

ん？詠春が子供教師に何か渡しているな。確か麻帆良の地図みたいなのだっけ？どうでもいいけど。

「ハ イ、そっちのみなさん。難しい話は終わったかな（シキ君たちにはバレてるぜーゆえっちー）記念写真撮るよ 下に集ま
って」

「記念写真？」

「そーそー忘れてたの。4班以外はもー撮ってんだよ」

うむ、子供教師と4班だけか。私たちののは多分アキラたち5班と身代わりが撮ったんだろう。まあー地味に上のほうに私たちも映ってるんだけどな。

その後は薬味たちとは別れ、適当に京都観光をして私たちは旅館に戻った。

そんな修学旅行四日目が終わりに、4月26日土曜日。修学旅行最終日、私たちは月光と陽光を連れて京都駅で新幹線に乗って麻帆良に帰還したのだった。

こうして、波乱に満ちた修学旅行の全日程は終わりを告げた。

S i d e . e n d

第53話（後書き）

やっと修学旅行が終わりました。

なーんか変な終わりかたですが・・・。

リョウメンスクナ両面宿讎の処置が受け入れられるか分からない！？

次回は弟子入りテスト編ですね。

結果はどうなるか予想済みな方もいるでしょう。

どうなるかなー？

ああークロスしたい・・・。

あれとクロスしたい！

弟子入りテスト後、やってみようかな・・・。

「まほら武道会」の後1枠は誰？

3票千雨 2票忍・さよ 0票アキラ・ゆうな

疑問・質問に答えようのコーナー！

紫「今回は疑問らしいものはなかったらしい」

裂「誤字脱字、言い回しなどに変なところがあればご報告ください」

第54話（前書き）

毎日1話更新ー！

余裕があれば2話更新したいけど。

グラムサイト2様、なおぼん様、ブルック様

感想ご意見感謝です！

紫稀側の面々の二つ名募集中なり。

アリカ・木乃香・刹那・ちつたん・アキラ・千鶴・ゆーな・茶々丸、
さよ

さよに虹霞か文珠かアスラ・マキーナ機巧魔神を持たせるならどれ？

虹霞1 文珠1 アスラ・マキーナ機巧魔神2

弟子入りテスト編！

そんな54話、どうぞー！！

第54話

Side・薬味

昨日までの修学旅行で、僕は何も出来なかった。

2日目の夜にのどかさんとまき絵さんとわざとではないにしても仮契約バクテリオしてしまったし、翌日の3日目にはのどかさんやまき絵さんを巻き込んでしまった上に助けられてしまった。

そして、その夜に木乃香さんが攫われた時も何も出来なかった。小太郎君との戦いも途中で長瀬さんに代わってもらったし、あの大神の封印が解かれたときにも僕の力は全く通じなかった……。それにあの白髪の少年は今の僕なんかでは勝てないくらいに強いと分かってしまった……。

僕は弱い……。あの雪の日から6年も経っているのに、変わらず弱いまま……。

……。だから、力が！力がほしい！みんなのことを守れるくらい強い力が！？

そして　　に　　する為の力を！！

今は、一体・・・？よく分からない。考えちゃいけない気がする・・・。

力を手に入れるには修行するしかない・・・。だとしても、誰か魔法のことを教えてくれる先生・・・いや、魔法に関しての師匠になれるほどに強い人に教えてもらえれば・・・。でも、知っている人で誰かいるかな？

タカミチ？ううん。タカミチが魔法を使っているのを見たことが無いし、それに出張でよくいない。

ガトウさん？ううん。ガトウさんも魔法を使っているところを見たことがない。

なら学園長？・・・それも無理だと思う。仕事が沢山あるだろうから、時間が取れないと思う。

じゃあ他には？魔法関係者で父さんのように強い人・・・。いた！

そうだよ。あの人たちなら師匠として申し分がない！実力も確かだし、何より父さんについても聞ける！

よーし！そうと決まったら、早速弟子にしてもらえるように頼んでみよう！

Side・end

ああー出だしが最悪だな。なんで作者はあいつにしたんだ？

丁度よかつたんだ

ん？何か電波をキャッチしてしまったようだな。どうでもいいか。

薬味を合法的にボロボロに出来る機会なんだからいいだろ？

ほおー。今回はそういう話なのか。話？一体私は何を考えているのだろうか？

「何？私たちの弟子にだと？アホか貴様」

ああー今の言葉で完全に現実逃避から現実に帰還してしまった・・・くつそー。現実逃避したままでいたかった・・・。

「あの事件は茶番だったとはいえ、一応、貴様と私はまだ敵同士なんだぞ！？貴様の父、サウザンドマスター『千の呪文の男』ナギ・スプリングフィールドには恨みもある。大体、私たちは正義の魔法使い（笑）を指している奴が嫌いだし、そんな奴なぞ弟子に取らん。戦い方などガトウかタカミチにでも習えばよかるう。それに修学旅行の前の一件で貴様は契約をしたではないか」

分かってる人もいると思うが、薬味が弟子にしてくれて我が家を強襲しやがったんだよ。茶々丸が丁寧に対応してリビングに案内してしまつたし・・・。さらに最初からか途中からか分かんが、まき絵まで一緒にいやがるし・・・。因みにキティの（笑）の部分は私以外に気付ける奴はいない。だって心の中で思っていることだ

もの。

「それを承知で今日は来ました。タカミチは海外に出張して学園に
いませんし、ガトウさんが魔法を使っているところを見たことない
ですし・・・何より京都での戦いをこの目で見て魔法使いの戦い方
を学ぶならエヴァンジェリンさんたちしかいないと！」

あつ、キティが「しかない」との部分に反応した・・・。

「・・・・・・・・ほう。つまり私の強さに感動した・・・と」

「ハイ！」

嫌な流れだ……。流れ変わらないかなあー…………。

「・・・・・・・・本気か？」

「ハイ!!！」

「フン…………よかるう。そこまで言うならな「え…………」ただし・
…………！ぼーやは忘れていたようだが…………私は悪い魔法使いだ。
悪い魔法使いにモノを頼むときにはそれなりの代償が必要だぞ…………
…………」

やっぱりこの流れなんですね…………。原作では明日菜がいたんだけ
ど、今はまき絵だしな…………。まあ、言わせないけどな？

「まずはあ「エヴァこっち向け」なんっん…………んっ…………うあ・
…………あ…………!!！」

唇で唇を物理的に封じてみた。今更だが、私たちの体勢はソファに座っている私の膝の間にキティが座っていたんだ。

そんな体制で後ろを振り向かせてキスなんて……。すごいやらしいというか、興奮するというか……。とにかくいいよね！？てか、なんで私はこんな軽い奴になっただー！？

読者の希望^{みんな}によって少し軽くするしかなかったんだ！

また電波を受信してしまった……。しかもしたくないのを……。

「……んっ……。ぷはぁ！」

そんな感じで3分ほどやってた。ごちそうさまでした！？とふざけていないで現実に帰還しよう。

すると薬味とまき絵が真っ赤になってた。ゆでだこ状態だな。ガキにはまだ早かったか。どうでもいいや。

「エヴァ、私が口を塞がなかったら足をなめるとか言うつもりだっただろ？そんなこと天や地が許そうとも私が許さない。エヴァにそんな風に触れていいのは私だけだと覚えているだろう？」

「うつ！？つい悪ノリで……。まあー弟子入りの件は今度の土曜にまた来い。その時にテストしてやる。それでいいな？」

誤魔化した！そして、やっぱりそうなるのか……。

「え……。あ……。ありがとうございます！」

面倒だな……。どうしようかな……。薬味も帰ったし、と

りあえずアイツ呼ぶかなー。

『ゼクト、今どこ？』

『この声はシキか？図書館島地下におるが、一体どうしたんじゃ？』

『旅行に出る予定なんかはある？』

『いや、ないが。それがどうしたのじゃ？』

『詳しくは私の家で話すから来てくれないか？ヘンタイは放置して置いていいから』

『うむ、分かったのじゃ。10分後くらいにはつくように行こう』

『それじゃ待ってる』

よおーし。後でぬらりひょんにちよつと準備させるか。

「キティ、これからゼクトくるから」

「ん？どういうことだ？」

「いやさー。弟子入りテストをしてやるとは言ったけど、受かんなかった場合しつこそうだから適当に言い含めてゼクトに放り投げようかなって」

「あぁー、そういうことか。確かにゼクトなら適任だろうな。アルビレオの方は色々とあれだからな・・・」

そうなんだよね……。だから、あいつは放置なんだ。

それから私とキティ、茶々丸で他愛も無い会話をしていると、気配察知の結界に反応あり。

「茶々丸、そろそろ客が来るから出迎え頼む」

「分かりました」

テスト内容どうするかなー。それにしても茶々丸の淹れるお茶は美味しい。

「いらっしやいませ。ゼクトさんですね？お待ちしておりました」

「うむ、その通りじゃ。邪魔させてもらうぞ」

「ではこちらへどうぞ」

そうして茶々丸がゼクトを案内してリビングに戻ってきた。

「久しぶりだ、ゼクト」

「やっぱり変わってないな」

「そういうエヴァンジェリンは大分成長したようじゃな。どういう

「とじや?」

「やっぱそこに気がつくか。」

「そこは私の特殊スキルのような成長薬みたいな?」

「嘘は言っていない。全部本当のことだ。」

「それで、何用じゃ?」

「麻帆良にナギの息子が来たのは教えたから知ってるよな?」

「うむ、そうじゃったな」

「それでそいつが弟子にしてくれと私たちに頼んできたんだ」

「それならしてやればよいではないか」

「いやだよ、めんどくさい。それに私はあいつの為に使ってる時間はない!」

「そこまで断言するのか……。それでわしを呼んだこととどろつながらるのじゃ?」

「弟子入りテストをやってやることにしたんだが、あいつが失敗した後にしつこそうだから、ゼクトに押し付けようと思って」

「なるほど……。エヴァンジェリンとナギの弟弟子にしるということじゃな?」

「そういうことだな。私たちは別にあのぼーやを弟子にするつもりはないから、無理難題を押し付けてやるつもりだから、確実にゼクトに押し付けることになる」

「それはそれで酷い話じゃ。それで、テスト内容はどうするのじゃ？そしてわしが弟子に取った場合はどこに住めばよいかのう？」

「その辺はじじいに準備させる。後、修行開始日には私たちも呼んでくれ。あのガキ、一般人に魔法バレしているからな。それに従者もいるし」

「なんとも手が早いのじゃな。ナギでさえ17歳でアイネ姫と婚約したののう」

「それと必要とあらば魔法球を1つ貸し出す。24倍速のを」

「それは助かるのじゃ。教師としてこの地にやってきたのなら時間が圧倒的に足らんからのう」

「んじゃ、簡単な部分は決まったから今日はこれくらいでいいな。ゼクトは住居を1週間ほどで準備させるからその間はここに泊まっていってくれ」

「助かるのじゃ。ナギの息子がどれくらいやれるのか知りたいしのう」

さてぬらりひよんのところに行くか。詠春からの親書も今朝届いたし。キティも連れてアホ面を観賞するとしよう。

そんなわけで学園長室前NOW！

「邪魔するぞ、ぬらりひよん」

二人揃って学園長室の扉を蹴り破る。

「なんでいつも扉を蹴り破って入ってくるんじゃ……」

そんなこまけえこたあいいんだよ！

「ぬらりひよん、1週間で2、3人で住める程度の家を建てれる土地を確保しろ。それとこれ詠春からの親書に対する返事の親書だ」

「とりあえず、土地に関しては理由を聞きたいんじゃがのう。親書の方は感謝するぞい」

さあーて反応が楽しみだ。

「ええーと、なにに？……近衛近右衛門を近衛家から絶縁……する？今後一切の……関西呪術協会への……発言権を剥奪……する……？……一体これはなんじゃ？」

やべえー笑いが……。堪えるんだ私！？キティだつて堪えて
いるんだから！！

「さらに関東魔法協会、もしくはメガロメセンブリア元老院に20

年前の魔法世界での大戦により亡くなった関西呪術協会所属だった者の遺族に対する謝罪等を要求する……？……紫稀殿、これは一体どういうことじゃ？」

顔が真っ青だ！眉間に皺もよっているし、汗が沢山出てやがる。キティなんてもう堪えきれなくなっているし。いやぁーこれを木乃璃嬢に送ったらどういう反応するか楽しみだ！

「どういうこともそういうことだろ？遂にぼけたか。関西は未だに大戦に巻き込まれて亡くなった同胞の遺族に対する謝罪を望んでいるってことだろ？20年の間、一切誠意のこもった謝罪が無かったのだから当然だろ？」

そして、お前の絶縁は必然だろう。関東魔法協会のトップなんだから、お前がいの一番に謝罪するべきなのにまともにもせず、その上詠春と義理の親子と言う関係をいいことに関西を関東の下部組織にしようとしていたんだから関西の幹部達から反発必至。よって関東と関西の融和は现阶段では不可能となったとさ。はい、おしまい」

普通こうなるよな？これで納得しなかったらどうするんの？麻帆良から追い出すか？それもいいな。その手段は最終だけど。

「ということは親書は無意味じゃったという事か？」

「そういうことだな。あの親書を読んだら詠春と木乃璃嬢以外は怒り心頭になるだろ。まぁー安心しろ。今後関西からの襲撃はないから」

「それもどういうことじゃ？融和が為されぬ以上、襲撃が増加すると考えるんじゃが……」

「襲撃を仕掛けてきていた強硬派・過激派は修学旅行中に処分した。今、関西呪術協会に残っているのは穏健派とそれに准ずる派閥だけだ。それに私が麻帆良にいるのも抑止力になっているしな」

「なるほど……。安全面の方は確保されるところということじゃな……。とりあえず、謝罪等は本国に取り合ってみないとなんとも……。」

それで話は変わるが、土地というのは？」

「ああー薬味が私たちに弟子入りしたいとか言ってきたな。無理難題押し付けて弟子入りを拒絶するつもりなんだが、その後がしつこそうだから、ある人物に押し付けることにしたわけだ。押し付けるのは確実にあったんだが、魔法関係者だから一般人とは極力関わらせないほうがいいと思ってな。それで確保できた土地に家を立ててそこに住まわせようと思ったわけだ」

「薬味……。？ネギ君のことか？それでその人物とは信用に足る人物なのか？」

「あいつが信用に足らなかつたら誰も信用できなくなるな」

「確かにあいつ程、信用出来る奴はいないだろうな」

「ふむ。二人がそこまで言うのなら大丈夫じゃな。確認のほうは1日ほどで確保するから待ってくれ」

「そんじゃ私たちは帰るか」

「そうだな。用も済んだわけだし。じゃあなぬらりひょん」

「あばよ!?!」

そう言って私たちは即座に学園長室を後にした。

学園長室で会話をしたのも既に数日前。現在5月3日土曜日、2時55分だ。

1日の早朝散歩時にキティが古菲クーフエイに弟子入りした薬味と遭遇し、テスト内容を茶々丸に一撃いれることにしたらしい。やっぱここは原作どおりなわけですね。

どうせなら、私は体術のみ薬味は魔法関係ありでのテストの方が楽しそうだったのに。薬味をポコポコに出来ると言う私の気分的に!?!

それと既にゼクトのための家は建てている。原作でエヴァの住んでいたログハウスだ。

おつとやってきたようだ。キティが薬味にテスト内容を確認をしているようだな。

「手も足も出ずに貴様がくたばればそれまでだが。わかったか」

「……その条件でいいんですね?」

ちよつどいい。嫌な予感がするから若干内容を変更させてもらお

う。

「ん？ああ「私から少し変更したいところがる」・・・どうした？」
言葉を遮ったのは悪いが、それだけで不機嫌にならないでくれ。

「弟子入り対象に私も含まれていたのだから決定権などは当然私にもあるわけだ。

子供教師が対戦相手に一撃を入れることは変わらないが、時間制限を設けさせてもらう。時間は有限だからあまり無駄に出来ないんだ。つまり30分以内に対戦相手に一撃を入れることだ」

薬味が悔しそうな顔をしている。やっぱり私が言い出さなかったら粘る気だったんだろうな・・・。無駄な時間を過ごすわけにはいかないし。

「そして対戦相手は私だ」

「なっ！？」

キティに茶々丸にゼロ、アリカ、アスナ、木乃香、刹那、ゆうな、アキラ、まき絵、亜子、古菲クフエイが観客として来ていたわけだが、まき絵と亜子以外は啞然としている。開いた口がふさがらないってやつだな。

「一体どういいうつもりだ、お前は？」

「んー特に意味は無い。それに一人を除いて関係者なんだし、その一人の親友三人は知っているのに一人だけ知らないってのも可哀想だしな」

「はぁ……。自らバラすという事は面倒を見るといふ事が……」

「そういうことだな。亜子！今から世界の秘密とやらを教えてやる
う」

「へ？それってどういふことや？」

フォローはアキラとゆうーなに頼むか。

「この世界には魔法は存在し、魔法使いがいる。お前の親友でもあるその三人は既に魔法関係者だ。内緒にされていたのを怒りたいかもしれないが、魔法とは秘匿されるべきものだから教えるわけにも
いかないんだ。その辺は後でアキラとゆうーなに聞いてくれ」

『お前こそ秘匿する気あるのかー！？』

あーあー、うるさいな。自分でバラしたら面倒見るんだからいい
んだよ！薬味みたいに軽い認識じゃないから平気だよ！

「それじゃあ、子供教師。これでこの場にいるのは魔法関係者のみ
だ。体術のみではなく魔法も使っても大丈夫だぞ。ああー私は一切
魔法は使わない。使うのは体術と魔法ではない移動術くらいだ」

「……亜子さんに魔法のことを話したのはいいことではありませ
んが、そのことについては今はやめておきます。それではお願いし
ます」

さーて、これで合法的にフルボッコに出来るぜ！ストレス発散な
り！？

Side・end

Side・other

「それでは弟子入りテスト、魔法なしのシキと無差別のぼーやの試合を始める。それでは」

エヴァの言葉でネギは魔法発動体の初心者杖を持って構える。

対する紫稀は普段どおりに立ち、構えてはいなかった。

「始めるがいい!!」

その言葉と共にネギは自身への無理やりな魔力供給を行う。

「・・・攻めてこないんですか？シキさん」

紫稀はネギが詠唱している間動かずにいた。

「ハンデというやつだ。私が初めてナギとあつたときの實力よりもお前は劣っているからな。先手を譲ってやる。詠唱して魔法を使え」

「くっ！それならお言葉に甘えて。ラス・テル・マ・スキル・マギ
ステル 来れ雷精風の精!!
ヨウイス・テンベスターズ・フルグリエンス
『雷の暴風!!!!』」

紫稀はネギに先手を譲り、それに従ってネギは紫稀に向かって現

時点で自身が使える魔法で一番強い『雷の暴風』を使った。

「『雷の暴風』か。術式はそれなりだが、ナギには遠く及ばないか・
」

「なっ!?!」

しかし紫稀はそれを拳一つで打ち破った。魔力も気も神通力さえも纏っていない拳である。

「ここからは私も攻撃に移るとするか。子供教師それなりに手加減はしてやる。だから」

紫稀の言葉を聞いてネギは中国拳法の構えを取り警戒する。しかし。

「うっかり死ぬなよ?」

既にシキがいた位置に紫稀はおらず、ネギが気づいたときには真正面に現れており、直後にネギの腹部に紫稀の蹴りが入る。

ネギは何とか打撃位置の魔法障壁を強化し防ぐ。が、そんなものがないように肉体に蹴りが入り吹き飛ばされ、壁に叩きつけられる。

「あ、痛っ」

それを見た観客の一部が悲鳴に似た声を上げていた。

「やはりこの程度か。障壁を抜いた後の威力は精々が古菲の蹴りと同程度なんだがな。弟子にする価値もないな」

紫稀は悲鳴など聞こえないといった感じに言って背を向けた。しかし、その背に声が掛けられる。

「まだ……です……」

「立てるのか。だが、ふらふらじゃないか」

「いえ、まだ時間は25分……はありますし……何より……僕はくたばっていません」

「そうか。ならその言葉で後悔するなよ？」

ネギの続行宣言を聞いて、紫稀は再び瞬動でネギに接近し、蹴り技主体のサバットで攻め立てる。

それをネギは何とか腕を回したり、後ろに下がったりしながら防いぎながら、反撃の糸口を掴もうとする。

だが、そんな糸口など存在せず、再び障壁を抜かれて地面に突っ伏す。が、再び何とか立ち上がる。

それを見たエヴァが呆れたように声を掛ける。

「ぼーや、諦めるんだな。既に立つことすら俣ならないだろ。所詮貴様はその程度だったという事だ」

「い、いえ、ま、まらあきらめないでふ」

エヴァの言葉に未だに粘り続けるネギ。そこへ紫稀が声を掛ける。

「そろそろ時間の30分だ。お前に付き合うのにも飽きた。私の『家族』で、現時点最弱のアキラの全力相当の力で攻撃をしてやる。これで立ち上がれないようなら私たちの弟子になる資格はないと思え」

「わ、わかり、まひら」

紫稀のトドメ宣言に答えるネギ。

「それじゃあ、いくぞ」

その言葉と共に現状のネギでも視覚出来る程度の速度で右足での蹴りをいれる。

それをネギは障壁と両腕で防ごうとするが、障壁は簡単に破られ、防御に回した両腕は蹴りの勢いに弾かれわき腹に入り再び壁に叩きつけられた。

紫稀はその叩きつけられたネギの意識の有無を確かめに近づき顔の前に手を翳してみた。

「気絶しているな。エヴァ！弟子入りテストは不合格だ」

結果、ネギは気絶しており弟子入りテストは不合格となった。それを聞いたまき絵と亜子は泣き、古菲は若干悔しそうな顔をしていた。他は一切表情を変えずにいた。

「まき絵、亜子、古菲。一応子供教師の傷は治癒してある。起きたらテストは不合格、今日の夕方に家にまた来るように伝えておいて

くれ。亜子はアキラとゆうーなに魔法について説明してもらってくれ。まき絵も再び聞いておくといい。それじゃ解散だ」

その場には気絶したネギと介抱するまき絵と亜子、古菲とそれを見ているアキラとゆうーが残り、他はそれぞれに帰路についた。

Side・end

Side・紫稀

やっぱり薬味は雑魚だった！

ん？なんか前にも同じようなこと思ったような……。

「てことで、ゼクト。あのガキの修行はお前に押し付ける！」

「どどういうことか分からんのじゃが、修行くらいはつけてやるのじゃ。それでどの程度使えるのじゃ？」

どの程度か……。

「私が初めてあったナギよりも使えない。因みに同年齢が知らんが10歳のときだ」

あの頃のナギの方がまだ強いぜ？『千の雷』も使えてたし。

キラブル・アストラペー

「それはちょっとアレじゃな……」

「まあー一応戦闘センスはあるだろう。メルディアナでは戦闘訓練なんてしてないだろうし、あれくらいが妥当かもしれんが・・・」

「とりあえず頑張ってみるかのう・・・せめて学園祭前までにはわしが出会ったときくらいのナギの半分くらいの実力にはしてやらんと・・・」

ふーん。あのくらいか。全盛期のナギを100とするとあの頃は精々70くらいか？今の薬味だとナギ基準で10行けば良いくらいか。なら35程度まで育てば良い方だな。

爵位級の悪魔が来襲するはずだから、頑張ってもらわないとな。

まあードロップアウトしてくれても構わないけどな！？

Side・end

第54話（後書き）

とりあえず薬味は紫稀とエヴァの弟子にはならない。
ヘンタイアルビレオの弟子にもするわけにはいかない！

次回、ゼクト師匠3人目？の弟子誕生！
修行初日鑑賞！

あの作品とクロスするのかな・・・？

「まほら武道会」の後1枠は誰？
3票千雨 2票忍・さよ 0票アキラ・ゆうな

疑問・質問に答えようのコーナー！

紫「グラムサイト2様からだ『小太郎は（ry）はあるのかな？』
らしいがどうなんだ？」

裂「流石に出番はないかなあー？」

裂「過激派たちを処罰したから関西のほうも人材不足になりかけてるし」

紫「次はブルック様の『武道会の投票枠に月光と陽光も加えてみては？』どうだ？」

裂「それは無理だ。片方だけ出す訳には行かない。出すなら両方だ」
裂「このせつがセットなように月光陽光もセットなんだ」

紫「今回はこの位だ。誤字脱字、言い回しなどに変なところがあれ

第55話（前書き）

前話の薬味育成度を若干修正。

麻帆良祭までにオステイア戦時のナギまでは流石に無理だと判断しました。

ファミリア様、なおぼん様、月神楽様

感想ご意見感謝です！

紫稀側の面々の二つ名募集中なり。

アリカ・木乃香・刹那・ちうたん・アキラ・千鶴・ゆうな・茶々丸、
さよ

さよに虹霞か文珠かアスラ・マキーナ機巧魔神を持たせるならどれ？

虹霞1 文珠1 アスラ・マキーナ機巧魔神3

弟子入りテストと魔法バレの後始末、それと+
そんな55話、どうぞ！！

第55話

S i d e . 紫稀

5月4日日曜日。薬味の弟子入りテストから既に16時間が経っている。

現在私とキティの前には薬味と亜子がいる。後ろのほうには茶々丸とアキラ、ゆうなが控えている。

薬味たちが何でここにいるかって？それは簡単だ。

薬味はテスト終了時に来るように伝言してあった。

亜子の方はアキラとゆうなに魔法のことを説明してもらって、アキラたちが屋敷に来るからついて来たのだろう。

「さて、子供教師。お前の弟子入りテストは不合格で終わったわけだ」

「はい・・・」

「で、なんで私がここに呼んだか分かるか？」

「いえ・・・もしかして、再テストでもしてくれるんですか？」

ポジティブすぎじゃね？いやだなー、こんなガキ。

「そんなわけあるわけないだろう。まあーそういうと思っていたか

らばーやを呼んだわけだが」

「それってどういうことでしょうか……？」

普通に考えれば「家に来い」だけじゃ理由が分からんよな。

「私たちが呼んで無くても、また「テストしてください」とか言っ
てきそうだから先手を打っただけだ」

「うっ……」

やっぱり凶星だな。私が時間制限出さなければ当てるまで粘るつもりだったみたいだし。

「それで、呼んだ理由だが。しつこくされるのが嫌だったから師匠
足りえる知り合いを紹介してやろうと言う、私たちからのほんの気
遣いだ」

気遣いじゃなくてしつこくされなくなかったからだけどな！

「ほ、本当ですか!？」

「本当だとも。さらに言っつてしまえばお前なら確実に弟子入り志願
するだろうな」

「そうだろうな。なんたって私たちが紹介するのは『アラルブラ紅き翼』の人
間だし」

「そ、それって本当なんですか!？」『アラルブラ紅き翼』ってシキさんや長さ
んと同じで父さんの仲間だったことですよね!？」

「うぜーうぜー。」

「その通りだ。それじゃゼクト、入ってきてくれ」

「うむ、お前がナギの息子のネギか？」

「は、はい！ネギ・スプリングフィールドです！！」

「元気がよいのう。わしはフィリウス・ゼクト。お前の父、ナギ・スプリングフィールドの師匠であり共に戦った仲間でもある。それとエヴァンジェリンの魔法の師匠でもあるがの」

「ゼクト、余計なことを言うんじゃない！」

キティがキレた（笑）。「みたいな？」

「エヴァンジェリンさんの師匠ということとは、エヴァンジェリンさんが此処まで強くなったのはゼクトさんが鍛えたからですか？」

残念。それは違うぞ子供教師。

「そうではない。確かにわしはエヴァンジェリンの師匠ではあったが、現在までの実力になったのは一通り教えて離別してからじゃ。それ以前に弟子になる前から実力は充分じゃったしな」

「そうだな。ゼクトとは魔法理論に関する考察を論じる間柄みたいなものだったしな。特別に魔法戦闘で鍛えこまれたわけじゃない。鍛えこんだと言うならシキのほうだしな」

「そういえばエヴァとゼクトが魔法戦闘で修行してたのってあんまり無かったな」

「魔法戦闘に関する修行はシキだけで充分だったからな」

「そうじゃな。あの300年間はかなり有意義じゃったな」

「300年間!?!」

薬味と亜子が驚いている。亜子はしょうがないと思っけど薬味はどうしてだ?

「なんか驚愕しているが私たちは見た目相応の年齢じゃないぞ?それと知っているはずの子供教師は何故驚く?」

「い、いえ。てっきり魔法世界での大戦の時に弟子入りしていたものだと思っていたので・・・」

ああーそういう事か。

「確か弟子入りしたのは600年くらい前で、300年前に京都に行ったときに行動を別にするまでだったからな。それで大戦期に再会したってところだったからな」

「そうだな。再会したときの出来事は忘れられない・・・。あんなことはもう懲り懲りだ・・・」

全くだな・・・。あれだけで広域殲滅魔法まで持ち出そうとしていたからな・・・。

あの時程焦ったのは中々なかったわ……。

閑話休題。

「まあー今日は顔見せだけの予定だから修行は明後日から勝手にやってくれ。子供教師にも何か用事でもあるだろうしな。一応初日だから私たちも見学させてもらうつもりだしな。そんじゃ、子供教師は帰れ」

「は、はい！明日からよろしく願います！！」

さて、薬味は帰らせたし本題に入るか。

「それでは亜子。魔法のことを知ってお前は どうする？アキラとゆーなの二人にはそれなりに説明してもらったんだらう？」

「一応聞いたで。ウチは自分のしつとる世界の裏側にそないなもんがあるとは思つとらんかった。怖くてたまらへんけど、ウチは関わっていいこうと思つねん。やからシキ君。ウチに身の守り方を教えてほしいんや！それに、アキラやゆーな、まき絵がしつとるのにウチだけ知らんのは寂しいから」

流石は、未来の英雄（笑）の従者にする為に集められたA組か。

「和泉亜子。お前の決意は分かった。それならば私たちがお前を鍛えてやるう。自分の身だけでなく近くの大切なモノも守れるくらいに強くしてやるぞ」

「ありがとうな、シキ君」

「何、元々魔法については私が教えたから最初から面倒を見るつもりだった。気にするな」

「頑張つてね、亜子」

「私も何かあれば手伝つからね」

「ありがとうな。アキラ、ゆうな。ウチ頑張るわ」

「まあー今日はもう帰ってゆつくり休むといい。亜子の修行も明日からだ。その前に子供教師の修行は見学しておくといい」

「分かったわ。それじゃ帰るわ。じゃあまたや」

「ああ、気をつけて帰れよ」

明後日から亜子の修行も開始か。んー魔法に関してはキティに任ずるか。

「そろそろ夕飯作るか。ゼクトは今夜も食っていくだろう?」

「お言葉に甘えるとするかの。シキの料理は美味しいの」

「そうかい。アキラとゆうなも今夜は泊まっていくんだろう?」

「泊まっていこー」

「今日は体を動かしたいからね。それじゃレーベンスシュルトの『別荘』に1時間程行ってくるね」

「オツケー。適度に動かしてこい」

えーとアスナとマナ、木乃香、刹那、ちうたんもいるから14人分か。

「さてと、作るとしますか。茶々丸手伝いよろしくー」

「了解しました」

いつもどおりのメニューでいいな。

あの後夕飯を食べ、適当に過ごし警備の時間。

関西方面の襲撃がなくなったからかなり暇だ。他方面からの襲撃もあまり来ないからな……。

まあー平穩が一番だけどな！

と思つてたら異変発生。やっぱりフラグなのかな……。

とりあえず他のエリアを警備している連中に報告して近くに来ないように連絡し、発生地点に向かう私。

現場 Now!なんてふざけてみたけど、目の前の現実を信じたく
なかった。

何故かって？だってさ、目の前の二つの人影、15歳くらいの女
子のせいなんだ……。

それだけならまだ侵入者ってことで捕縛すれば済む話だけど、そ
の二人の格好が一人は、白を基調とした服装で栗色の髪を白いリボ
ンでツインテールなのと、もう一人が、黒を基調とした服装で金髪
を黒いリボンでツインテールなんだ……。

これだけ描写すれば特定個人を連想出来るだろ？出来ない方が少
ないと思うが……。この世界線に作品が存在していなかった理由
はこれか……。

白・栗色の髪・ツイン（サイド）テール・リボン、黒・金髪・
ツインテール・リボン。ときたら彼女たちしかいないだろ、jk

忍の前例があっただけさ……。電波は何考えてんだよ……。

何にも考えていない！強いて言うならあの世界に飛ばすかも知
れないとだけ

だとしてもだよ？なんでだよ……。

第55話（後書き）

やっちまったただあー！

リリカルな世界から引つ張ってきちまったよー。

どうすんだよ、私！？

次回、リリカルな二人の対処。

薬味の修行初日見学の2本かな？

「まほら武道会」の後1枠は誰？締め切りはヘルマン襲来解决時。

4票千雨 2票忍・さよ 0票アキラ・ゆうな

疑問・質問に答えようのコーナー！

紫「今回は疑問や質問がない」

裂「誤字脱字、言い回しなどに変なところがあればご報告ください」

第56話（前書き）

【総ユニーク】15万【文字数】30万突破していました！
感謝の極み！！

35巻購入。週マガ最新話でアスナが……。
それと記憶封印なければ頭がパーにならずに済んだんだな……。
原作のガトウエ……。タカミチエ……。

dgo様、White Seal様、もみじ様、なおぼん様
感想ご意見感謝です！

紫稀側の面々の二つ名募集中なり。
アリカ・木乃香・刹那・ちつたん・アキラ・千鶴・ゆうな・茶々丸、
さよ

さよに虹霞か文珠かアスラ・マキーナ機巧魔神を持たせるならどれ？
虹霞1 文珠1 アスラ・マキーナ機巧魔神3

リリなの世界と繋がる！
そんな56話、どうぞぞ！！

第56話

Side . . . ? ? ? ?

その日、私はフェイトちゃんと一緒にある任務でロストロギアらしきものを探していたの。

「らしき」ものって言うのは秘められている力が凄まじくて、さらに今まで一度も観測されたことのない力の波長らしくて、形状とか能力とかの正体が特定出来ないから暫定的に準ロストロギア扱いなんだって。

どういったものか分からない以上、危険度も跳ね上がるから観測された次元世界には管理局での最上位戦力である私とフェイトちゃん、それにクロノ君やエイミーさんにはやてちゃんを含む八神家にも上位戦力である局員も何十人単位で動員されていたんだ。

無限書庫の司書であるユーノ君も発見されたときのために召集されていたっけ。

クロノ君は司令官として、エイミーさんとはやてちゃんはその補佐として情報処理や指示を出していて私とフェイトちゃんはペアになって行動していたの。シグナムさんとヴィータちゃんもペアで捜索、シャマルさんとザフィーラさんは何かあったときのために後方支援として待機だったの。

それで捜索中に私とフェイトちゃんは遺跡みたいな建物を発見、それをクロノくんやはやてちゃんたちに報告してそのまま内部を捜索してたの。

そして建物最深部と思われる祭壇のような場所に鍵みたいな形状の剣らしきものが刺さっていたの。恐らくこれが今回のロストロギアかな？

とりあえず調べようと思い、それに手を触れた瞬間、周囲に白い光が溢れたの。

「なのはっ!?!」

その時、フェイトちゃんが私の名前を呼びながら手を伸ばしてくられて、私はその手を掴んだんだけど、益々光が強くなっていった目が開けられないほどになり、私たちは何も出来ずに光に飲み込まれたの。

それから数分が経ったところには光が納まっ^ていて目を開けたら、周りには木しかなかったの。

此処は一体何処なの!?!

Side・end

Side・??.??.?

「クロノ提督!高町なのは二等空尉とフェイト・テスタロッサ・T・ハラウン執務官からの報告にあった遺跡らしき建造物があるらしい座標地点で管理局史上類を見ないほどの魔力反応!」

なんやて!?!

「なんだとっ!? 急いで二人に通信を繋げる!!」

「はいっ!?・・・通信、繋がりません!?」

どないなっつてんのや!

「現場付近に誰か局員は!」

「両名の搜索範囲が広すぎて半径30キロには誰も!」

「そんなら私とシャマル、ザフィーラの三人が出るで!」

二人とも無事でいてや!

「待つてください! 魔力反応急速に減少しています。今、完全に反応ロスト」

「それで二人は!」

「それが・・・高町二等空尉ならびにハラウン執務官、両名の魔力反応も同時にロスト。通信も繋がりません」

「どういうことだ!?!」

一体何があったんや!

「分かりません! ログを確認してみます!」

膨大な魔力反応が消失したと思ったらなのはちゃんとフェイトち

やんの魔力反応までロストするやなんて……。これはただことやないで！

「ログの確認結果出ました！どうやら魔力反応が最大値になった瞬間にロストした模様。その後は分かりません」

「現場に局員を数名向かわせて確認させる！急げ！！」

「は、はい！？」

本当に何があったんや……。二人とも無事でいてや……。

Side・end

Side・???

光が納まったと思って目を開けてみたらさっきの遺跡みたいなところではなくて此処は森みたいだった。隣には手を繋いでいたなのはがいる。

手を離して二人で周囲を警戒しながら、状況を整理することにした。

さっきのロストログアと思われるものは転移系？でもそれならあんな光は必要ないし……。それと此処はどこだろう？

とりあえずバルディッシュに周囲をサーチしてもらって半径20メートルの範囲に建造物はなく木しかないと分かった。

森を抜けようと思ってなのはと警戒しながら歩いていると向かっている先からこっちに来る人の気配がした。

「なのは」

「分かってるの」

敵対するつもりは無いけど一応警戒しておくべきだと思い、私はバルディッシュを、なのははレイジングハートをすぐに起動出来るように構えながら気配がこっちに来るのを待つことにした。

それから一分ほどで私たちは向かってくる人と対面した。

「お嬢さん方。この地に何のようだ？」

私となのはは彼を見て、声を聞いて驚いた。

「……」

だってそこには、6年前の私となのはが出会った時に唐突に私たちの前に現れて、同じく6年前の闇の書事件解決後に唐突に私たちの前から姿を消した、大切な少年が「そのまま成長すればこんな感じ」な人がいたのだから。

Side・end

Side・紫稀

とりあえず二人に接触しないとな……。管理局の白い魔王と魔王の嫁と接点持つなんて怖いけどな！

「お嬢さん方。この地に何のようだ？」

「……」

なんか私を見て驚いているんだけど？え？なにこれ？私何かやったの？記憶にないんだけど！？

「おーい？お嬢さん方？聞こえてますかー？」

「……」

し？なんだろう？市じゃないだろうし、死じゃないだろ？後者だったら怖いけど！

「「シクキ……？」」

へ？待て待て。私は魔王様やその嫁なんかと接点なんてないぞ！？

「確かに私の名前は紫稀だけど？」

「本当にシキなんだね？」

「6年前に私たちの前から急にいなくなって、心配したの！」

いやいや、何言ってるのこの人たち！てか、かなり嫌な予感がする！久々にボロ雑巾にされるような嫌な予感が！？

「ちよつと待て。確かに私の名前は紫稀だが、お嬢さん方とは初対面のはずだ！」

「え？じゃ人違い……？」

「そ……そんな……」

「うおー！かなり落ち込んだぞ！これがキティたちにバレたら色んな意味でやばい！？」

「そ、その君たちが知っているシキという人物の特徴を教えてくださいませんか？」

「えっと。容姿はあなたをそのまま9、10歳にした感じで勉強や家事とか何でも出来る」

「私たちの世界にはない技術や技を使ったり、ナイフで私たちの技を容易く防いでいた」

「それで名前は神儀紫稀カミキムネキって名乗ってた（の）」「

「はい？その、名前ってそれで合ってる？」

「間違いないよ（の）」「

「あるえー？リリなの世界の私だったりするのかな？とりあえず素性の確認が先だな。」

「その少年？はどこから来たかとか言ってた？」

「確か私たちの世界とは異なる世界から来たって言ってたの！」

「私たちの世界とは全く違う進化をした世界って言ってた」

いやいや……。そんなバカな！私は異世界以前に私が存在していないネギま！の別の世界線にすら渡ったことはないぞ！もしくは、神がミスって私の転生先を間違った世界線だともいうのか？

「それと女の子も三人一緒にいたの」
「名前はエヴァと千雨とさよだった」

まさか……。ここまで共通点が多いと私が考えている通りなんだろうな……。

「今の話で大体は理解した。恐らく二人が言っている神儀紫稀は私だ」

「やっぱりシキだったんだ！」
「やっと会えたの！」

「いきなり飛びつこうとしないでくれ。それと私の話はまだ終わっていない」

「ほえ？」
「ん？」

「恐らく私で間違いないと思うが、二人が知っている私は多分『未来』の私だ。今の私に君たちと過ごした記憶も記録もないからな」

「『未来？』」

普通に考えれば信じられないだろうな……。それにリリなの世界の魔法は科学の進化によるものだからな。古代ベルカとかは分からんけど。

「そう、『未来』だ。とりあえずもう遅いから私の家に行こう」

「分かった(の)」

はぁー……。何やってんだよ、未来の私……。何でリリなの世界に飛んでる上に肉体年齢下がってんだよ……。しかもキティとちうたんにさよの三人も一緒とかありえねーよ……。

「そつだ改めて自己紹介といこう。(まぁー知識としては二人を知っているんだがな)」

「そつだね。私はなのは。高町なのは。役職は時空管理局武装隊戦技教導隊教導官なの」

「私はフェイト。フェイト・T・ハラオウン。テスタロッサ役職は時空管理局執務官だよ」

「私は神儀紫稀だ。役職じゃないが二つ名は【全てを統べる者】【レジエント・アライン生ける伝説】だ。後は世界最強をやっている。それとこの世界に時空管理局なんてものは存在しない」

「「え!?!」」

やっぱり時空管理局が存在しないと知れば驚くか。

後はぬらりひょんへの二人の報告だけど……。明日でいいか。今は捕縛したとでも言っとけばいいや。この地での決定権は私が一番なわけだしな。

余談と言っか、おまけと言っか……。とりあえずは今回のオチ。

私かなのはとフェイトを連れて家に戻ったらまだ起きてリビングにいたキティとアリカと茶々丸かなのはとフェイトを視界に捉えた直後、感情の無い目で私の方に近づいてきて口数少なげにOHANASHIされた。さらになのはとフェイトにも『未来』の私が心配掛けたと言っ『今』の私には関係の無い理不尽な理由で一緒にOHANASHIされた。その後、私がどうなったかは想像に任せる。暫く私は精神的に使い物にならなくなったので、『別荘』の一つに入って静養することにした。

私が悪かったです……。ごめんなさい……。ごめんなさい……。もうしません……。月怖い……。太陽怖い……。口ケツトパンチ怖い……。桜色怖い……。金色怖い……。

Side・end

第56話（後書き）

魔王様と魔王の嫁が何故この世界線にやってきたかの説明です。
なのはが触れた鍵のような剣のような？の名称考えていないんですよね。

とりあえず募集してみます。

次回、なのはとフェイトの報告と、
薬味の修行初日見学の2本かな？

「まほら武道会」の後1枠は誰？締め切りはヘルマン襲来解決時。
4票千雨 2票忍・さよ 0票アキラ・ゆーな

疑問・質問に答えようのコーナー！

紫「White Seal様の『15才くらいってことは、A・S
最終話あたりの年代ですかね？』だ」

裂「長谷川光司氏が作画担当したStS1巻の1話の少し前だと考
えてください」

紫「今回はこのくらいだ。誤字脱字、言い回しなどに変なところが
あれば報告してくれ」

原作との相違点【弟子入りテスト終了後】（前書き）

ファミリア様、もみじ様、零崎 針織様、一向一揆様、7 p a p a
7様、なおぼん様

感想ご意見感謝です！

さよに虹霞か文珠かアスラ・マキナ機巧魔神を持たせるならどれ？

虹霞1 文珠1 アスラ・マキナ機巧魔神3

原作との相違点【弟子入りテスト終了後】

今回は原作との相違点をまとめることに。

決して本編の執筆が面倒だったからじゃないよ！

・・・スランプ気味なだけさ・・・。

エヴァの師匠にゼクト

紫稀が神鳴流最強に

ナギ10歳時のまほら武道会は紫稀との同時優勝

エヴァの懸賞金が原作より増額、大戦終了時に取り消し

チャチャゼロにも懸賞金、大戦終了時に取り消し

『アラルプラ紅き翼』にエヴァ同行

ウエスペルタティアの王女が双子 アイネとアリカ

ナギとアイネ、紫稀とアリカ

オスティア崩落時の死者なし

魔法世界大戦期の三国の老害除去

アイネ・アリカは「災厄」ではない

ゼクト・ガトウ・明石夕子生存

原作に描写されていない木乃香の母親がいる

明日菜が神楽坂でなく神儀アスナでクーデレ、記憶封印なし

真名が龍宮ではなく神儀マナ

茶々丸が絡繰ではなく神儀茶々丸

麻帆良の規模が原作より縮小

相坂さよに肉体あり（成長する肉体に憑依）

エヴァ・茶々丸の住居がログハウスではなく、『屋敷』

2001年（アスナたち中1）時点でエヴァの『登校地獄』の解呪

インフェルナス・スコラスティクス

明石裕奈・和泉亜子・大河内アキラ・近衛木乃香・佐々木まき絵・
長谷川千雨が魔法を知る時期が早い

中1時点で木乃香は魔法の存在を知る

相坂さよ・明石裕奈・大河内アキラ・長谷川千雨が魔法生徒扱い

物語シリーズから忍、リリなのからなのはとフェイト

木乃香・刹那のすれ違いがない

1、2年時担任ガトウ、副担任タカミチ

A組生徒が2人増加

原作開始以前からのA組の成績はそこまで悪くは無い

2年連続でウルティマホラ優勝が紫稀、準優勝に古菲

アスナ・マナ・木乃香・刹那の寮部屋は4人部屋で同室

3年時副担任ガトウ

エヴァ対薬味、勝者エヴァ

修学旅行時点での薬味との仮契約者、のどかは変わらずまき絵追加

アスナ・刹那・木乃香除外

両面宿儺リョウメンスクナの人化、月光げっこうと陽光ひなた

薬味の師匠がエヴァではなくゼクト

関東魔法協会・関西呪術協会の融和が不確定状態

原作との相違点【弟子入りテスト終了後】（後書き）

「まほら武道会」の後1枠は誰？締め切りはヘルマン襲来解決時。
4票千雨 2票忍・さよ・ゆーな 0票アキラ

疑問・質問に答えようのコーナー！

紫「複数の方から『キープレード？キープザトワイライト？』だとよ」

裂「鍵のような剣のような？にはモチーフはありません。」

裂「イメージ的には世界と世界の垣根を越えるための能力を持っているみたいなの」

裂「空中に挿して鍵を開けるように回すと世界を繋げる扉が目の前に！みたいなの？」

紫「次は一向一揆様の『なのはの世界に（ry）でも興味を持ったのか？』だが」

裂「なのフェイがやってくる。世界線・異世界移動するための研究・実験を紫稀が行う。」

裂「初実験で失敗、暴走、近くにいたエヴァ・ちうたん・さよを巻き込んで無印時期の」

裂「リリなの世界に飛んでしまう。みたいなの？」

紫「今回はこの位だ。誤字脱字、言い回しなどに変なところがあれば報告してくれ」

第57話(前書き)

【総合評価】 3000PT 【文章評価】 300PT 【ストーリー評
価】 300PT

【総PV】 200万 【総ユニーク】 18万突破！
感謝の極み！！

作者の別作品、バカとテストと召喚獣の二次小説
「俺の日常と召喚獣」もよろしくお願いします。

なおぼん様、シンシア様、紅茶ラテ様、アイリス様、haki様
感想ご意見感謝です！

さよに虹霞か文珠かアスラ・マキナ機巧魔神を持たせるならどれ？
虹霞1 文珠1 アスラ・マキナ機巧魔神3

約3週間ぶりの更新！
そんな57話、どうぞ！！

第57話

Side・紫稀

5月5日月曜日、早朝。

深夜のキティたち5人によるOHANASHIを受け、その後、倍率を96倍速にした『別荘』に6時間（別荘内で24日間）程籠もってなんとか復活した私。

屋敷のリビングで、どうやってキティ、アリカ、茶々丸以外の面々になのはとフェイトのことを説明しようかと珈琲を飲みながら悩んでいると、お使いを頼んでいた茶々丸から念話で連絡があった。

『シキ様、ネギ先生が出席番号4番の綾瀬夕映さんと29番の宮崎のどかさんと一緒に図書館島の地下に向かったのですが、どうしたらいいでしょうか？』

図書館島の地下？なんかそんなイベントあった気がするな・・・。

確かあれってアスナたちと同部屋だから綾瀬と宮崎に連絡が行ったはずだよな？これが原作の修正力？

でも、あの神達が言うには修正力ってないんじゃないかな？

ああ、そうか。あそこにはアルビレオヘンタイがいたな。魔法世界に行く為の前提条件ってやつか。

『命の危険に触れるまではそのまま尾行して監視を続行。私も暫くしたら向かうからよろしく』

『了解しました。それでは後ほど』

茶々丸がいるなら私が行く必要ないんだけど、念の為だな。

さて、面倒だ。

Side・end

Side・夕映

修学旅行での出来事やネギ先生に見せてもらった図書館島の地図を見て、この世界が魔法というファンタジー溢れる世界だと知って私はとても興奮したです。

ネギ先生のお父さんに関する手がかりを地図で見つけて、それを調べに行くときに連れて行ってもらうように頼んだですが、やはり断られてしまったです。

しかし、私はその程度で諦めません！

色々な手を使い、私たちを出し抜いて朝早くに調べに行こうとしたネギ先生を捕まえ、手がかりの情報の正当の代価として同行を許してもらったです。

そこからはネギ先生の杖にのどかと一緒に乗せてもらって様々なトラップを潜り抜けて例の手がかりがあるとされる扉の前にやってきたのです。

杖で飛んだときは本当に魔法があるのだと実感したですが。

扉を調べ始めたネギ先生をそのままに、私はのどかと地図を確認してみること。

ビシヤ。ペチャツ。

「わ、ベタバター？」

「何ですか、コレは……へ……」

私とのどかが地図を確認していたとき頭上からなにやら液体が降ってきたです。それに触れて、降ってきた場所を確認してみると、そこには

「「は？」

なにやらでつかいトカゲがいたです。

「ドツ……ドツドツ」

「グルル。ゴアアアアアッ」

「竜^{ドラゴン}！……につ、逃げっ、夕映さん、のどかさん。逃げて　　っ

なにやらネギ先生が喋っていましたが、私たちはそれどころではなかったです。

のどかと一緒に、トリップしながら色々と喋っていたらトカゲが

迫ってきましたです。

ですが、私たちがトカゲに踏まれることはありませんでした。私たちは

「ちゃ……茶々丸さん！？シキさん！？」

クラスメイトの茶々丸さんとシキさんに助けられていたのです。

Side・end

Side・紫稀

ほら、やっぱり面倒なことになった。

「ちゃ……茶々丸さん！？シキさん！？」

子供教師が何かいつてるが無視だ、無視。そして、私はドラゴンの方を向く。

「うるさい、『叫ぶな』。そしてその場から『動くな』」

「え？え？」

私がそう言うと門番のドラゴンは動きを止めた。それを見ていた子供教師が困惑していたがどうでもいいな。

「それじゃ、帰るぞ」

「はい」

茶々丸にそう言って子供教師が扉を名残惜しそうに見ながら後をついてくるのを知りながら地上へと戻った。

地上へ戻ってきたわけだが、期末テストの時にあったエレベーターがなくなっていた。どうでもいいな。

「シキさん、茶々丸さん。ありがとうございます」

子供教師に礼を言われた。どうでもいいな。

「……何で助けに来てくれたんですか？どこから……」

「子供教師の為じゃない。ここの司書長とは知り合いでな。不法侵入者がいるから迎えに来て欲しいとあったからだ」

「うっ！」

普通に考えれば許可なしで入れれば不法侵入だろうに。

なんでこいつらはこんなにも常識が欠落してるんだ？

「さて、茶々丸。家に帰るぞ」

「はい。シキ様」

なにやら子供教師や綾瀬たちがわめいていたが知ったことじゃないので無視して私たちは帰宅したのだった。

S i d e . e n d

第57話（後書き）

とりあえず薬味、夕映とのどかを連れてドラゴンに遭遇です。
久しぶりすぎてやばい感じです。

次回こそはなのはとフェイトの報告と、
薬味の修行初日見学となる予定です。

「まほら武道会」の後1枠は誰？締め切りはヘルマン襲来解決時。
4票千雨 2票忍・さよ・ゆーな 0票アキラ

疑問・質問に答えようのコーナー！

紫「haki様の『ネギの闇の魔法は（ry）反応は無かったんだ
ろっか？』だとよ？」

裂「マギア・エレベア闇の魔法は麻帆良にいる間はゼクトが下地を作ります。」

紫「そして、魔法世界でラカンから巻物を受け取って習得する予定。

」

裂「薬味をベリアルドール副葬処女にしたら物語が続かなくなるので別のを使用。」

裂「ネギま！、リリなの世界問わず、ちうたんのアーティファクト
はRHEとBDAの色が逆なので」

裂「周りは大して反応しませんでした」

紫「今回はこの位だ。誤字脱字、言い回しなどに変なところがあれ
ば報告してくれ」

第58話(前書き)

【総ユニーク】20万突破!

こんな駄文を読んでいただき恐悦至極!

グラムサイト2様、もみじ様、なおぼん様、
翠濤様
感想ご意見感謝です!

再び3週間ぶりの更新!
そんな58話、どうぞ!!

第58話

S i d e ・紫稀

図書館島地下にバカが不法侵入し、それに対処してから数時間後の昼。

私はなのはとフェイトを連れて、女子中等部にある学園長室に来ていた。

「おい、ぬらりひょん。この二人の戸籍を準備しろ」

「ふおっ！例によつて、いつもの無茶ぶりかのう？まあ、構わぬが。と言うより、何故戸籍を作る必要があるのじゃ？」

ああ、説明忘れてた。

「昨夜の侵入者つてのはこの二人でな。異世界からの迷子つてと」
「るだ。危険性がないのは私が保証する」

「迷子つて酷いの・・・」

「好きで迷子になつたわけじゃないのに・・・」

客観的に見れば迷子としか言えないんだからいいだろうに。

それにしても、なのはとフェイトの今後をどうしようかな・・・。

まだ15歳つて話だから中等部に通わせるか。

「そういうことかの。それじゃあ、この用紙に戸籍を作る上での最低限の情報を書いてもらえるかのう？」

「あ、はい」

「わかりました」

そういえば月光げっこうと陽光ひなたのことも忘れていたな・・・。

。と言つても、あいつらを学校に通わせる必要もないしなあ・・・。

・・・まあ、考えても仕方がないし、いいか。

「ふむ・・・二人はまだ15歳なんじゃな？それならば、あと一年もないが、ここに通つてみないかのう？」

「此処こゝつて言つと・・・」

「中学校ですか・・・？」

「丁度いいんじゃないか？二人の成績は優れている方だし、ここはエスカレーター式だしな」

私も考えてたことだしな。渡りに船つてやつだろ。

「「シキしくがそう言うならそうしようかな・・・？」」

「そうと決まればぬらりひょん。戸籍と二人の編入手続き諸々を早めに準備しとけよ。クラスは二人も魔法関係者だから、3-Aでいい」

「了解したぞ」

さて、帰りますか。

時間は飛んで翌日の放課後。

薬味の修行初日だよ！

見学者は私とキテイ、アスナ、木乃香、刹那、茶々丸、アキラ、
ゆーな、亜子、綾瀬、クーフエイ古菲、クーフエイ下等生物だ。

「では、始めるとするかのう」

「いきます。システイス・メアエ・バルテース契約執行300秒間！ミニストラエ・ネギイミヤザキネギの従者宮崎のどか 佐々木
まき絵」

「「あ（ん）」」

契約執行は従者持ちにとっては必須だからな。
と言つても、私たちには殆ど必要ないんだが。

「次にアンチ・マテリアル・シールド対物・魔法障壁を全方位に全力展開じゃ！」

「ハイ！」

「次にアンチ・マジック・シールド対魔・魔法障壁を全力展開！！」

「ハイ！」

対物・対魔障壁も魔法使いにとっては重要だからな。

これがあるのとないとじゃ生存率が大幅に変わるからな。
これまたキティとアリカ、忍に関してはアーティファクトがあるから気にしなくてもいいんだがな。

「そのまま3分持ち堪えた後、北の空へ魔法の射手199本！結界は張っておるから遠慮はいらん！」

「うぐつ・ハ、ハイ！！ 一光の精霊199柱《ウンデトウオケンティ・スピリトウス・ルーキス》コエウンティス・イニミクス・サキテント集い来りて敵を射て」

薬味の手の前方から魔法の射手が放たれる。
それを見た最近魔法に関わった面々は

「おおー」

「これが、魔法……ですか」
「まーな」

「キレー……」

「花火みたーい！」
「こんななんかー」

そんな反応をしていた。

それにしても、あの程度の結界すら破れないって駄目すぎだろ。
結界を張ったのは、二年前まで魔法のまの字すら知らなかった木乃香だったのに……。

「あつう？」

「せんせー？」

「ネ、ネギくーん」

どうやら薬味は気絶したらしい。

「この程度で気絶するとはな。やはり私の弟子にせんで正解だったな」

「全くだな。いくら、あのバカ譲りのバカ魔力があったとしても使いなせていなければ宝の持ち腐れもいいところだ」

一体こいつは、魔法学校で何を習ってきたんだか分からんな。

「よーよー旦那にエヴァンジェリンさんよお。そりゃ言い過ぎだろ。兄貴は10歳だぜ。二人同時契約5分+魔法の矢199本なんて修学旅行の戦い以上の魔力消費じゃねーか。気絶して当然だぜ。並みの術者だったらこれでも十分……」

「ふざけた事をぬかすな、下等生物。魔力運用がきちんと出来ていれば、並みの術者でも気絶なんてことにならん」

「それにあのバカはこいつと同じ10歳の時には『千の雷』キリブル・アストラペーを4、5回使っても気絶なんてしなかった」

でも、アイツの場合、気絶しないのはバグだからなのかなー？

「ついでに言うと、子供教師の魔力量を考えればさっきので気絶すること事態がありえないことだ。さっきのでも三分の一も減っていないはずだ」

「シキのいうとおりじゃ。本来なら倒れるはずがないんじゃないのう……」

今まで思った以上に薬味が使えないと言う新事実が発覚した！どうでもいい。

「シキ。手本を見せてやったらどうじゃ？」

「まあ、それくらいならいいか。今の魔力量はリミッターかけてあるから子供教師よりも少ないくらいか。契約執行300秒間紫稀の従者『エヴァンジェリン』、『神儀アスナ』、『近衛木乃香』、『桜咲刹那』、『神儀茶々丸』、『大河内アキラ』、『明石裕奈』。対物魔・三重魔法障壁展開。魔法の射手閥サキタ・マギカの1001矢オブスクリー……つとこれくらいでいいか？」

神儀家関係者の目が語っている。「シキ（君）（さん）だから仕方がない」と

それ以外は呆然としている。
何故だ？

「相変わらずのバグっぷりじゃな……魔力量の少ない現状であれだけのことをするとはの……」

「あれくらいなら、エヴァも出来るんだがな……」

「いやいや！流石の私でもさっきのをやれと言われると結構厳しいぞ！」

ええ〜？それでもないでしょ。契約執行してなくても、少量だけで魔力は供給されてるはずなんだぜ？

供給していると言うよりも洩れているだけなんだがな。

「まあ、いいや。本来の目的の亜子に魔法を見せるは達成したことだし、家に戻るか。それじゃあな、ゼクト」

「うむ、またじゃ」

さてと。亜子の修行メニューはどうするかなー？

Side・end

第58話（後書き）

今回は難産でした……。

っと、言ってみたかった。

ふざけては見たものの、結構マジで難産でした。

変な妄想が頭の中に生まれ、それを実行したくなり、
急ぎ足ではないですが、早めに麻帆良祭を終わらせたいと思っ
てお
ります。

今回はヘルマン襲来となります。

果たして、薬味はこの危機を乗り越えることができるのか!?

「まほら武道会」の後1枠は誰？

5票千雨 2票忍・さよ・ゆーな 0票アキラ

次話公開までが締め切りとなります。

アキラの人氣がない……舞台的には一部を除けばアキラ無双可
能
なのに……。

さよのアーティファクトアンケート締め切ります。

虹霞1 文珠1 アスラ・マキナ 機巧魔神4

という事でアスラ・マキナ機巧魔神で決定とします！

持たせるものは鋼とか鋼とか？ 鐵・改とか鋼とか？ 鐵・改とか鋼で
いいと思う。

やりたいこともあるから。

疑問・質問に答えようのコーナー！

裂「グラムサイト2様の『ドラゴンを動かなくした（ry）死んじやわないか？』」

紫「言霊とか真言ではなく、『言葉の重み』つまり『人心支配』によるものだ」

紫「つまり対象から離れれば自動で回復するというわけだな」

裂「今回はこの辺で。誤字脱字、言い回しなどに変なところがあればご報告ください」

第59話(前書き)

【総PV】250万突破！

更新不定期中にも関わらずありがとうございます！

カルト様、もみじ様、なおぼん様、GMS様
感想ご意見感謝です！

大体2、3週間ぶり！
そんな59話、どうぞ！！

第59話

Side・紫稀

子供教師の修行初日を見学してから数日が経った。

子供教師がゼクトの下で修行を開始した週の週末に、あやかが子供教師を実家所有の南の島へ誘ったらしい。

そのことを知った和美とパルに、私たちも誘われたが、所持している魔法球の中に南国タイプがあり、いつでも南国気分を味わえる為、断った。

てか、今更南の島如きではしゃぐ気にもなれんしな……。

で、週があけての月曜日。

無事に戸籍と編入手続きも終え、なのはとフェイトは無事(?)

3-Aの一員となった。

なんて言うか……カオスです(汗)

人外魔境、ここに極まれり……?

あれ?人外魔境って、自分で言ってみただけど、洒落になってないか?

最強の魔法使いで真祖の吸血姫のキティ、創造主の血を引くウエスペルタティア王家のアリカとアスナ、魔族とのハーフのmana、魔法と科学の融合体の茶々丸、烏族とのハーフの刹那、膨大な魔力量を誇る木乃香、元(?)幽霊のさよ、甲賀中忍の楓、中国拳法の達人の古菲クワイフェイ、魔族のザジ、未来人の超、そして全存在最強の私。

これだけでもアレなのに、さらに白い魔王や金色の死神が加わったんだよな……？

本当に人外魔境じゃねーか……っ！

どうしてこうなった……orz

なんか話が変わる方向に向かったな。
それはさておき 閑話休題。

とりあえず現在、絶賛授業中だ。

教壇に立って、授業をしている子供教師は、ヤツれている、の一步手前状態で、フラフラとしている。

「ネギ君、疲れてるってゆか、ヤツれてない？」

「五月病か？」

「気の早い夏バテとかー」

クラスの連中もその様子を見て心配しているようで、ひそひそと話している。

まあ、私を含め、3分の1は心配も何もしていないのだがな。

キーンコーンカーン……

「じゃ、じゃあ今日はここまで……」

授業終了のチャイムを聞くと、子供教師はそう言って、フラフラと教室から出て行った。

その後をまき絵を筆頭に綾瀬、宮崎、和美、古菲クーフェイが追いかけていた。

私は特に気にならないから、部活に向かう連中やらと別れて普通に帰宅することに。

駄菓子菓子、そうは問屋が卸さなかった。

問屋と言うよりは、今回は世界と言うべきか。どっちでもいいか。私とキティ、アリカ、茶々丸が帰宅するために歩いていると、子供教師を追いかけている5人と遭遇。

「ママー。アレ何やってんのー？」

「見ないのっ！」

通りすがりの親子に、残念な風に思われてるのを見て哀れに思っ。

「で、お前らはいつまでストーキングしているんだ？」

面倒だと思いながらも声を掛けることにしたわけだが。

「……シキ（君）（さん）！」「……」

「ストーキングだなんて人聞きの悪い」

「そちらこそどうしてここに？」

驚いたまき絵や宮崎、古菲を放って和美と綾瀬は誤魔化しながらも返してきたな。

それにしても、いつの間にか、子供教師とゼクトが合流しているな。

「お前らは子供教師の行き先が知りたいがためにストーキングしていただんだろう?」

「ええ、まあ」

私の問いかけに、若干戸惑いを含めながら肯定する綾瀬。他の4人も同様のようで、頷いて肯定する。

「ああっ！ネギ君、見失っちゃった・・・」

およ?さっきまで視界にいたはずのゼクトと子供教師がいねーや。

・・・ゼクトのところに案内してやるか。

原因の一つに、私が話しかけたこともあるだろうしな。

丁度、ゼクトに貸した魔法球に忘れ物と言うか、最近研究しているやつに関する理論書とか回収し忘れてたし。

「ついでだ。案内してやる。ついてこい」

そう言って、私は和美たち5人を加えて、ゼクトの現在の住居に向かった。

Side・end

第59話（後書き）

こんな駄文を書くためだけに時間が掛かりました……。

次話は魔法球内での出来事になる予定です。

「まほら武道会」の後1枠決定！

5票千雨 2票忍・さよ・ゆーな 0票アキラ

という事で、ちうたんとなります。

と言うか、アキラの不人気さに絶望しました！

武道会アンケートに協力くださった下記のユーザー様方に感謝を。
杉ちゃん様、もみじ様、天使ちゃん様、グラムサイト2様、幽愧様、
空知様、ブルツク様、Dai様、月神楽様、一向一揆様、翠濤

前回公表した

さよのアーティファクトアンケートにご協力くださった下記のユーザー様方にも感謝を。

杉ちゃん様、ブルツク様、Dai様、ファミリア様、月神楽様

疑問・質問に答えようのコーナー！

紫「まずはカルト様の『千鶴さんはいつなんだ』らしい」

裂「千鶴の出番はここからです。スポットが当たるのは原作と同時期という事で」

裂「千鶴を絡ませるには小太郎が結構大切なのです！」

紫「次はGMS様の『持たせるアスラ・マキーナ（ry）無しですか？有りですか？』だが？」

裂「考えてはあります。考えてはあるんですが、前話の後書きでも言ったように、」

裂「本編でアスラ・マキーナ機巧魔神を使う機会がないんです・・・」

紫「今回はこのくらいだ。誤字脱字、言い回しなどに変なところがあればご報告してくれると助かる」

特別閑話 トリック・オア・トリート！（前書き）

【お気に入り】 1500件突破！

なおぼん様、もみじ様、G戦場の特別高等人様
感想ご意見感謝です！

大体10日ぶり！
そんな特別閑話、どうぞ！！

特別閑話 トリック・オア・トリート！

Side・紫稀

中等部三学年度の夏季休暇を利用して、魔法世界を永續させることに成功した私は、普通に麻帆良学園女子中等部の日々を送っていた。

2学期の目玉である体育祭も終了し、その後に襲い掛かってきた2学期中間考査もやり過ごし、10月31日を迎えた。

10月31日。そう。ハロウィンだ。

ハロウィンとは、魔女やお化けに仮装して、「Trick or treat・ご馳走をくれないと悪戯するよ」と言って、お菓子を集めるイベントだ。

起源は、古代ケルトのサウィン祭　つまり収穫祭が他民族の間に行事として浸透したものとされているらしい。

・・・今更言わなくても、イベント内容はみんな知ってるだろうけどな！

因みに、お菓子をもらえなかった場合は報復として、軽度の悪戯をするのも可らしい。

はなしがそれた
閑話休題。

で、何故、今頃そんな話題になっているかと言うと、ぶっちゃけ

ると、今年までハロウィンの存在を、当日である今日まで忘れていただけなんだよな。

ハロウィンのことを思い出したわけだが……やる意味あるのか？

仮装する必要性ないよな、私たち。

だって、本物の魔法使いだし、キティは吸血鬼、茶々丸はガイノイド、マナは魔族とのハーフ、刹那も烏族とのハーフ、ザジにいたっては魔族そのものだし、未来人の超^{チャオ}……は、人類だから違うか。

毎日がリアルハロウィンだしな。

……ああ、だからハロウィンのことを忘れていたのか！
至極納得できる！

と言うか、近所に住んでる人いなかったじゃないかっ!？

ハロウィンやる為だけに女子寮に行くのもなんだしな……。

夜用にお菓子だけでも作っておくか。

結局、夕食後に作っておいたお菓子をみんなで食べただけで、ハロウィンイベントはやらなかった。

お菓子を食べるときに、なのはとフェイトが「翠屋のと同じ味!?!」って、驚いていたのは余談だ。

S i d e · e n d

特別閑話 トリック・オア・トリート！（後書き）

前回の更新から約10日。

最近では短い間隔です。

10月31日がハロウィンなので、それに関する話題を。

舞台背景は本編冒頭の通り。

魔法世界を救ったあとのはなしですね。

疑問・質問に答えようのコーナー！

紫「今回はそれらしいものがないんだ」

裂「誤字脱字、言い回しなどに変なところがあればご報告ください」

第60話(前書き)

大変長らくお待たせしました。

なおぼん様、駄猫様

感想ご意見感謝です！

4週間ぶりの更新！

そんな第60話、どうぞ！！

第60話

Side・紫稀

道案内を開始してから、特筆するようなアクセントもなく、無事にゼクトの現住居に到着し、そのまま魔法球へ。

「ここはどこアルか？」

「先程のボトルシップの中でしょうか？」

「此処までくると、魔法つて何でもありだねえー」

「す、すごいですー」

「わあ、あの建物すごく高いよー」

上からクイフエイ古菲、綾瀬、和美、宮崎、まき絵の順に感想を漏らす。
因みに、キティ、アリカ、茶々丸は我関せずと言った具合に、魔法球に入るなり居住スペースの方に向かっていった。

ドカーン！

ん？何の音だ？つと、この方角は、修練用広場のほうか。となる
と、絶賛模擬戦中つてことか？
とりあえず、連れて行くか。

「今の音で子供教師の居場所も分かったからついて来い」

そう言つて、音のした方に向かって歩く。

この魔法球には、大きく分けて3つのスペースがある。

まず最初に、先程も言った居住スペース。これは、キッチン、浴場、寝床などといった、一般家庭の生活に必要な設備に、農場や牧場といった食料関係のものや、日常生活に関係するその他諸々を一つに纏めた空間だ。外見は、6、7階と同等の高さのビルみたいな感じだな。

次に、娯楽スペース。ボーリング場とかサッカー場、ホッケーといったスポーツやゲームが入り乱れている。外見は、ボーリングやホッケーといった屋内でも出来るものと、スケートやアイスホッケーといった屋内でしか出来ないものを詰め込んだお陰で6階相当のビルと規定のサッカーグラウンドが丸々2つ入るほどのグラウンドが併合されている感じ。

そして、最後に修練スペース。模擬戦をする為の平地の広場、紛争地域のような荒地、サバイバルの出来るジャングルのような森林と山、その他諸々といった感じた。剣道や柔道といった武道に関するものはこちらに詰め込んでるので当然のように道場も建ててある。ついでに滝業も出来るように滝まで作ったが、そのまま放置したりする。

明言してはいないが、勿論、そのスペースを結ぶ為の舗装された道などもある。

割合的には、居住3：娯楽1：修練5：道1といったところかな？ ついでに言うと、外と中を出入りする為の魔法陣や私が所持している他の魔法球とのリンク魔法陣も道に含む。

因みに、そのリンク魔法陣は、私が所持している他の魔法球に入ったことのあるものとしか行き来出来ない。簡単に言えば1から5

の魔法球があつて、1しか入ったことが無ければ2から5にはいけないという事だ。今回連れてきた5人と子供教師はこの魔法球にしか入ったことがないので、使用は不可だな。

と言うか、何故私は説明をしているんだ？

それは、これが二次小説だからだよ

ああ、なるほど。電波だな。

さて、何だかんだ私の脳内が変なことになりつつも、模擬戦用の広場に着くと近くに刃を漬した刀を持つ陽光ひなたと素手のゼクトが立ち、月光げっこうに組み伏せられている子供教師がいた。

「もちこたえられたのは、たったの12秒か。いくら、鬼神の月光と陽光に長き年月を生きたワシと言う強者3人が相手とはいえ、せめて1分はもたせてみせよ。この程度では、お主の父、ナギの背中に追いつくのはかなり時間が掛かることになるぞ」

ふむ。ゼクトが多対一で一気にレベルアップを図りたいと言っていたから月光と陽光を派遣したが、そう簡単にはいかないみたいだな。

因みに、月光たちを派遣した理由はそれだけでなく、暇を潰せるようにという意味もあるんだが、余計なことだな。

「続けていくぞ。手加減するから、耐えてみせよ」

っと、ゼクトがなにやらやるらしいな。

空中で接近してやったのは、無詠唱の魔法の射手か？で、あの詠唱は……。ああ、そういうことか。

「ディオス・テュコス『雷の斧！！！』」

無詠唱魔法の射手の後に、威力はソコまで高くはないが詠唱の早いディオス・テュコス『雷の斧』。シンプル故に、使いやすい戦法で、ナギもよく使っていたな。

「ネギくん！大丈夫ー！？」

「あわわ！ネ、ネギ先生ー！？」せんせい

「ネギ坊主は大丈夫アルか？」

「これが魔法使いの戦い……」

「結構派手だねー」

「み、みなさん。どうしてここに！？」

ゼクトのディオス・テュコス『雷の斧』でしびれている子供教師の下に5人が向かった。

案内は済んだし、もういいか。

さて、自分の用を済ますかな。

Side・end

第60話（後書き）

危うく、11月に更新しないところでした。

まあ、駄文なんですけどね……。

そして、ヘルマン襲撃終了後の麻帆良祭では色々なことを企んでいます。

一部の方々はもうご存知ですが。

なので、頑張つて更新して行こうと思います！

因みに、今回登場した魔法球の名前を募集してみようかなあと思っ
ていたり。

次回は少々ネタを出す予定。

そこまで多くはないので精々6、7行くくらいだと思います。

疑問・質問に答えようのコーナー！

裂「今回はなかったなのでこの辺で」

紫「誤字脱字、言い回しなどに変なところがあれば報告してくれ」

第61話(前書き)

【総合PV】 3,000,000 【総合ユニーク】 260,000

【総合評価】 4,000pt 【文章評価】 400pt 【ストーリー

リー評価】 400pt

各々突破!!

感謝の極み!?

アイリス様、もみじ様、なおぼん様、大喰らいの牙様、ケフィア様
感想ご意見感謝です!

全体には大体1週間ぶり、枠外単体で10日ぶりの更新!
そんな第61話、どうぞ!!

第61話

Side・紫稀

。。
PCがフリーズして、大体2時間分が飛んで鬱になりかかった・

.....。

って、私は一体何を言っているんだ？そんな事実、私自身には確認されていないぞ!？

ゴホンッ！さて。若干メタ発言があったが、やり直した。やり直し！

和美たちを修行中の子供教師のところへ案内し終わった私は、この魔法球『アヌビス』の蔵書庫・研究室がある地下層に来ている。元々、私は『アヌビス』の蔵書庫・研究室に用があったから、案内の方はついだったしな。

まあ、全ての魔法球には蔵書庫が、一部を除き研究関連の区画が必ずあるんだがな。修学旅行のときに使った研究関連しかない魔法球もあるが。

研究関連の区画が無いのは、完全リゾートや憩い系の魔法球だな。宴会とかした後の二日酔いを何とかするためにガトウたちを放り込んだり、OHANASHIされて療養の為に入ったりする魔法球『ザナドゥ無何有界』や『EVANGELINE'S RESORT』とか他にも色々だな。

因みにそれぞれの魔法球の由来は、『アヌビス』はエジプト神話に出てくる冥界の神の名前で、ケフィア様のところのスタツフうううう！から、『ザナドゥ無何有界』はユートピア　つまり理想郷　からだ。本当は『界』じゃなくて『郷』なんだがな。

それで、ここに用があつた理由は、研究途中の資料を回収する為だな。この研究を子供教師に見られるわけにはいけないんだ。

あつ。別に魔法世界に関係する研究じゃないからな？崩落なんて神通力を使えば簡単だったりするし。

その話は置いて
閑話休題。

と言つても、蔵書関連はある処置を施してはいるんだがな。

ここの蔵書は、己に見合つた実力相応かそれ以下　実力云々の基準は勿論私だったりする　の物しか閲覧できない。上位の物を閲覧しようとすると、本のページが全て白紙になったり、持った手

ごと本が燃えたり凍ったりする幻覚を見せるようになっていた。

確か、実力的に『家族』で一番下のアキラが3ヶ月くらい前に、
ここの蔵書全てを閲覧出来るようになったんだっただか？そうだとす
ると、現状の子供教師では2割閲覧出来ればいい方か？

研究資料自体は蔵書と同じ処置をしてあるが、私自らのメモ書き
とかは、その処置をしていないからな。だから回収に来たわけだし。

っと、これで全部か？

カチッ。

カチッ？何の音だ……？って、隠し階段？こんなところに階段な
んて作ってあったかな？

そう思いながら、私はその階段を下りていく。

「この陣の配置に種類は……保管か封印か？」

そう言いながら、更に階段を下りていく。

配置されている陣を確認しながら下りること大体3分。

目の前には『ある魔道書』の原典と同格の1冊の写本と、それを封印保管する為に幾重にも重ね掛けされた魔法陣。

.....。

……うん、前言撤回。アキラが閲覧云々ってところ撤回する。

なんで、『コレ』がここにあるんだ？下手すればキティがギリギリ閲覧出来るかどうかの代物じゃないか。

『— Lib er A L v e l L e g i s 《法の書》』。

20世紀最大と称されている魔術師『アレイスター・クロウリー』が記したセラマの根本聖典。

アレイスターが自身の聖守護天使と見なしたアイウス もしくは、エイウス から伝え聞いた、「人間には使えない」「天使の術式」が書き記されたもの」だとか、「解説と同時に十字教の時代が

終わる」など言われている。

だが、それよりも有名なのは、『誰にも正しい内容に解読できない』という点にあり、その言葉の通り、今まで誰一人として、『正しい』解読をできた者はいない。

しかし、これは『正しい』解読が出来ないだけであって、『誤った』解読は出来、『それらしい文章』になる解読法が無数に存在している。

そして、冒頭の『汝の意志するところを行え。それが法の全てとならん』だけは、どの解読法で解読しても同一のものとなる。

……まあ、やる気になれば、私は解読出来ると思うがな。

てか、なんでここに保管されてるんだ？

『法の書』は魔道書の中でも最高峰に位置する物だから、『Lavicular Salomonis』《ソロモンの鍵》『ya』—『Sefer Razel Hamalak』《天使ラジエルの書》、『—The Book of Shadows』《影の書》ムンドウス・アベオ・ムンド』と言った、有名故に強力な原典辺りと一緒に、『世界から外れた世界』ウス命名、もみじ様の魔法球で保管していたと思っただがな？

で、何故私が、『法の書』の原典と同格の写本を持っているかと

言つと、1920年代くらいに一人でぶらついていた帰りに、欧州のあるところで、野垂れ死に掛かっていたアレイスター本人と出会ったからだ。

その後、色々あつて、「『法の書』の原典をくれ」的なことをふざけて言った際に、「原典は無理だが、原典に劣らない写本なら作成して譲つてもいい」となつて、もらったわけだ。

とりあえず、今から移動させるとなると魔法球の中とはいえ、時間が足らないな。今いる『アヌビス』は24倍速にされてるから尚更。

……となると、現状で配置されている封印保管の魔法陣の上に更に重ね掛けるか。

封印保管処理を魔法球内時間で1時間ほど使い、無事に終わらせ、階段を上り、研究室に戻ってきた。

さて、それじゃあ、万が一、億が一にも、子供教師が隠し階段を見つけないように嚴重に妨害の魔法陣を配置して、キティたちのところに戻るかな。

S i d e ・ e n d

S i d e ・ o t h e r

刻は、少々遡^{とき}る。

紫稀が、和美たち5人を薬味が修行している魔法球『アヌビス』に案内し終えた頃、現実世界では雨が降っていた。

「ネギ先生大丈夫かなー」

「風邪かしらねえ・・・」

そんな中、外には麻帆良学園女子中等部の制服を身に纏った2人の少女の姿があった。

一人は、3 - A組出席番号24番の那波千鶴。

もう一人は同じく、3 - A組、出席番号30番の村上夏美である。

彼女たちは、自分達の担任であるネギ・スプリングフィールドのことを心配しながら、相合傘をして女子寮への帰り道を歩いていた。

「あら？行き倒れよ、夏美」

「行き倒れ!？」

そんな時、千鶴が何かを発見し、そんな千鶴のイキナリの言葉に夏美は驚いた。

「……あ。何だ、犬か……」

夏美が確認すると、確かにそこには、人間的には行き倒れ状態の犬がいた。

「しかもケガしてるわ、この子」

「わ。バツチくない？ちづ姉」

その犬に、千鶴は近付くと抱き上げ、ケガをしていることに気付いた。

夏美はそんな千鶴を見てそう言う。

そして、2人は、犬を自分たち2人ともう1人が暮らす、女子寮の自室に向かったのだった。

こうして、着々と役者は揃いつつある。

今夜の舞台は誰が何を為すのか……。

それを知る者は……まだいない。

S i d e . e n d

第61話（後書き）

やっとここまで来ました……。

最後に出てきた犬。原作既読の方々はお分かりですよ？
次話でヘルマンが登場するかもしれません。

PCフリーズして、大体2時間分のデータが飛びました。

なので、飛ぶ前のは少しばかり変わってる部分もありますね。
と言うより、完璧に思い出せませんし、一晚経ってるので……。

前回ネタを出すと言いましたが、6 / 7行とか言いつつ関係している部分で1000文字超えてました。

……正直、ネタなのか分かりませんが。

そして、もみじ様、ケファイア様。

魔法球の名称アイディアありがとうございます！

もみじ様の『ムウンドウス・アベオ・ムウンドウス世界から外れた世界』。

ケファイア様の『アヌビス』。

早速使わせていただきました。

紫稀はかなりの魔法球持ちと言う設定なので、まだまだ沢山募集していきたく思います。

名称だけでなく、内装の方のアイディアもあればどんどん感想やメッセージをお願いします。

そしてそして！なんと枠外単体で300万PVを達成したので、これから記念番外編を書いてみようかと思えます。どういった話を書いて欲しいか感想で頂けたら嬉しく思います。希望が多ければ、今まで節目記念をやってませんでしたので、2、3話書けたらなあと思っております。どしどし希望してください。待ってます！

疑問・質問に答えようのコーナー！

裂「なおぼん様より『英雄とスクナが相手とかやばいよなあw』」

紫「はつきり言ってやばいって次元じゃない。一応三者とも力を抑えてはいる。

大体原作のキティとゼロ、茶々丸と同程度で、8巻冒頭の通りと思ってくればいい」

裂「今回はこの辺で。誤字脱字、言い回しなどに変なところがあればご報告ください」

第62話（前書き）

久方ぶりの短間隔での更新と相成りました！

なおぼん様、ケファイア様

感想ご意見感謝です！

今回は視点が二転三転します。

それでは、ほんの少しシリアス気味！

そんな第62話、どうぞ！！

第62話

Side・エヴァンジェリン

「な、なんでエヴァンジェリンさんにアリカさん、茶々丸さんまでいるんですかーっ!？」

「エヴァンジェリンにアリカも来ておったのか」

いきなりなんだ、ぼーやは？

……ゼクトの方はいつもと変わらんが。

「彼女たちから聞いていないのか？お主の後ろにいる彼女たちを案内してきたのはシキで、そのシキがこの魔法球『アヌビス』に用があるとのことで一緒に来たんじゃない」

「と言うか、元々この魔法球はシキの所有物の1つで私たちが日常的に使っていた物をぼーやの修業の為に使うと言うから、ゼクトに貸してるだけだ」

故に、私たちがここにしようが、何の問題も無いわけだ。

「そ、そうだったんですか!？」

「ところで、さっきから魔法球って言ってるけど、ここって一体何なの?」

そういえば、説明をしていなかったか。

「ここは、正式名称は総称をジオラマの英語発音に基づいた「ダイオラマ」を取ってダイオラマ魔法球、所有者名称として『アヌビス』と言います。」

簡単に言つと、ここはさっき見たミニジオラマの中です。ここは1日単位でしか利用出来ないようになってるので、丸一日は皆さん出ることは出来ません」
『ええー?!』

茶々丸が魔法球の説明をすると、小娘共は途端に慌てだした。と言つが、名称とかはいらんだらうに。

「じゃ、明日まで出れないアルか？」

「聞いてないよっ」

「明日の授業どうするのーっ」

ああ、うるさいな。もう少し、静かに出来んのか、こいつらは。

「安心しろ。昔話にある浦島太郎の竜宮城があつただらう。ここはその逆で、この中で一日過ごしても、外の現実世界では1時間しか経過していない。まあ、出入りの問題は設定を弄れば、いつでも出れるようになるが、下手に倍速を弄った状態でそれをやると時差ボケを起こしかねんがな」

私の説明を聞くと、連中はすげーだのなんだの言い出した。

「……………てことは、ネギ君って一日先生した後、もう一日ここで修業してること？」

「ゼクトが言うには、教職の合間にちまちま修業しても埒があかないらしいからな。」

……………まあ、ゼクトが言わなくても分かりきつてることだがな。

因みに、今はいないが、アスナにマナ、木乃香、刹那たちも同じように少ない時間を魔法球で増やして修業している」

私がそう言うと、大変だぁー、とか連中はいうが、そうでもな…
…いや、修業開始当初の刹那や木乃香、千雨は大変だったか。

昼は学校で授業を受け、放課後は現実世界の数時間を魔法球内で魔法の実技修業に学業神秘問わずの座学講義。

これの繰り返しに順応し始めたのは、現実世界で1月が経ったくらいだったか。

木乃香と千雨にとっては、魔法関係の修業と講義、刹那にとっては、学業の講義は地獄だっただろうな。

刹那は木乃香を護るために、『力』周りの鍛錬にかまけて学力面が所謂、アホの子になってたからな……。シキがいなかったら間違いないく、今頃バカ四天王とか言うやつに組み込まれてただろうな。地獄だったが、不名誉な呼び名をつけられなかっただけ良かっただろうな。うんうん。

S i d e ・ e n d

S i d e ・ 夏美

ど、どうもーこんにちはー…。

麻帆良学園3-A、30番の村上夏美です。

ほっぺのそばかすがちよいコンプレックスの、カワイイ・キレイ
どこそろいの3-Aでは比較的目立たないごくフツウの女子中学生
です。

何故か、男の子に首元に爪を突きつけられるという、デンジャーな状況になってますが、フツの女子中学生のはずなんです！

とりあえず、何故こうなったかと言うと、少し時間を巻き戻しますね。

「あらあら……」

「な、何で男の子が……？」

ちづ姉と一緒に連れてきたノラ犬の体をタオルで拭こうとしたら、さっきまで犬がいたところには私たちの担任のネギ先生と同じくらしい男の子がいたんです。

「さっきのワンちゃんがこの子になっちゃったのかしらねえ」

いやいや、ちづ姉。そんな非科学的な、オカルト染みたことあるわけないじゃない。

「でもどうするちづ姉？」

「まって」

私がそう言うと、ちづ姉が静止の声を出してきた。

「まあ大変。スゴイ熱よ？」

男の子のおでこに手を当てて熱を簡単に測ったちづ姉の指示通り、私はその子を躊躇いながらも運ぶ為に近付いた。

その際に、その子を観察して言うのかな？よく見てみると、割とカッコイイかも……。

って！私は一体何を考えて？！

……それにしてもこの耳の飾りみたいな何だろう？

『もしもし。医務室ですか？はい、あの……』

つと、いけないいけない。ちづ姉が医務室に電話してるから早く運ばなきゃ。

ひょい。

へ？しつぽ……？

今、手が動い……た……？

「きゃー！？」

次の瞬間、近いような遠いような場所から、何かが壊れる音がしたと思うけど、正直、私はそれどころじゃないよ。

「・・・やめる。誰にも連絡するんやない」

気付いたら私は、男の子に、首に爪を突きつけられてました。

とまあー、そんなカンジなんです……。

「あ……あの……あのっ、あなた誰……。一体何の……」「黙れ」「うひゃいっ」

だ、誰かあ……。本当に説明してほしいよあ……。

「そ……そこの姉ちゃん。何か・俺が着るものと、食い物を持ってきてくれ」

「……」

そ、そうだよ！ちづ姉！助けて！？

「あなた。。名前は？どこから来たの？教えてくれないかしら？私たちが何か協力できるかもしれないわ」

た、確かに、こういう場面なら適切な対応なのかもしれないけど、少しは私のことも心配してよぉ〜…………。

Side・end

Side・千鶴

私は今、夏美を人質のようにしている男の子と対峙しているわ。

「な、何やて……。名前……？俺の名前？……あれ。誰やったっけ俺……？」

さっき額に手を当てて分かったのだけれど、この子はかなりの高熱を出している。恐らく、そのせいで、状況判断や情報の整理が出来ていないのね。

「違う。俺、あいつに会わな……」

「「あいつ」って誰かしら？」

男の子の言葉に反応して、私は思わず近付いて質問してしまった。

「！？ち、近寄るなっ！」

「！」

「ちっ、ちづ姉！？」

少し焦りすぎたようね。警戒させてしまったようで、左肩の方を浅くだけれど、爪で引っかかれたみたい。

でも、これくらいなら大丈夫。

「あっ……」

「……ダメよ。そんなに動いては。また倒れてしまうわ。40度近くも熱があるのよ、あなた」

そう言っつて、私は、彼を落ち着かせる為に抱き寄せる。

「え……うあ……？」

「ね？腕の傷の手当もしなくちゃ」

少しすると、高熱の影響で意識が混濁したのか、彼は再び気を失ったわ。

解放された夏美が、彼のことを心配して様子を聞いてきたけれど、多分大丈夫ね。

「でも、ホント何なんだろう、この子……」

夏美の言っつとおり、本当何者かしらね。ただの家出少年でないことは確かだけれど。

ね。……さてと。とりあえずは、この子を、服を着せて寝かせないと

左肩から血が出てるのを夏美が気付いて、テンパってたけど、ま

あ、大丈夫でしょう。

Side・end

Side・アリカ

「ん〜 うまいアル」

「あ、コラ、お前ら。それは私とシキの秘蔵の食料……。わ。バカ！未成年がそんなもん飲むんじゃないっ！」

「え？だって、ジュースって書いてんじゃないん」

「ただのジュースじゃないんだよ！」

「まあまあ、堅いこと言いなさんな、エヴァちゃん〜ん？」

そこらにある食料飲料を食い飲み散らかす、和美にまき絵、クワイフェイ古菲。
飲食を止めようとするエヴァ。

目立たずゴミなどを片付けている茶々丸。

……………何て言うべきか。この状況を俗にカオスと言うのか？

「ねえねえ、エヴァちゃん。コレって飲んで良いの？」

そう言ってまき絵がエヴァに見せた物は一本のボトルに入ったワイン……………。って、ワイン?!

「なっ!？それは、私とシキの秘蔵の1945年物のシャトー・ムートン・ロートシルト!？あ、開けるなよ!佐々木まき絵!開けたら日本円で最低でも100万は払ってもらっぞ!？」

『ひゃ、100万円!?!』

なん……じゃと……?!なんでそんな物がこんなところにあるの
じゃー!

「元々美味しいものが、魔法球内で時間が経ってるからさらに味もま
してるんだ!茶々丸!佐々木まき絵の持ってるものを落としたりし
ないように取って来い」

「はい、マスター」

エヴァがそう指示を出し、茶々丸が丁寧にまき絵から受け取って、
エヴァのもとに戻った。

「ソレはそのまま、お前が持っていくか、姉妹人形に頼んで『天照』
に運んでもらえ」

「了解しました」

茶々丸に次の指示を出し、行動に移ったのを確認すると安堵の息
をつくエヴァ。

と言うか、何故そんな高級ワインがあるのじゃ?

……まあ、いいか。魔法球の所有者はシキじゃしな……。

S i d e . e n d

S i d e . エヴァンジェリン

シャトー・ムートン・ロートシルトをどうにかした後、連中はさ
っきのことを忘れるかの如く、再び飲食していた。

……まあ、一般人の、ましてや一介の女子中学生じゃ手の出しようが無い金額だからしょうがないが。

そんな時だ。私のところに、綾瀬夕映と宮崎のどかがやってきた。

「　　という訳なのですが」

どうも、私に魔法を教えて欲しいらしい。

なんで私がこいつらに教えてやらなきゃいかんのだ。

「そう言うことは、向こうの先生がいるんだからそっちに頼め。魔法先生にな。それがその師匠に頼むんだな」

そう言って、追っ払ってやった。

それから数分後。どうやら、ぼーやたちに頼み込んだらしく、さっきの2人にゼクトとぼーやを加えて戻ってきた。

「あー、いいんでしょうか、師匠？エヴァンジェリンさん？」

何故、そこで私も含まれるんだ？そこはゼクト師匠だけだろうに。

「まあ、ワシはそっちの前髪の長いのと、向こうの桃色の髪のを鍛えるのであれば、各かではないのう」

「勝手にしろ。そいつらが魔法に関わることは、私やシキ、引いては『神儀家』は関与していないからな」

千雨やさよ、アキラに和泉のことはシキが引き込んだようなもの

だから、私も面倒を見ているだけだしな。そうでなければ、私はなにもせん。

「……あの。のどかやまき絵さんはよくて、何故私はダメなのでしょう？」

はっ？こいつは本気で聞いているのか？すぐに考えれば分かることだろうに。

そのことを口に出そうとした瞬間。横槍を入れられた。

「面白い話をしているようだ。私も混ぜてもらおうか」

……まあ、シキだったんだがな。

Side・end

Side・紫稀

話を整理してみると意外と簡単だった。

「綾瀬が疑問に思っていることは、宮崎とまき絵がよくて、お前がダメだったことでもいいんだよな？」

「はい、その通りです」

……こいつ。何も分かっていないな。

恐らく、こつちの世界を、^{魔法}夢と希望の溢れるファンタジーの様なものと勘違いしているな。

「と言うか、お前らが教わりたい教わりたくないって以前の問題だ」
「……どういうことでしょうか？」

「宮崎とまき絵は、なし崩し的にだが、子供教師と修学旅行の時に
仮契約したからだ。仮とはいえ、子供教師の従者になった2人の場
合は、否応なく自衛の手段を可及的速やかに手にする必要があつて、
お前にはそういった必要性がまだないということだ」

「ネギ先生と仮契約をしたことと自衛の手段とは、どういう風に繋がっているのですか？私には全く無いとしか思えないのですが……？」

やはり……か。

綾瀬は本気で勘違いをしているな。自身の知的好奇心という欲求を満たしたいがために魔法を習おうとしているんだろう。

……子供教師の方も、自分の立ち位置を正確に理解しているとは思わないがな。

「子供教師は『大戦の英雄』の息子だ」

「大戦の英雄の息子……？それは一体どういう……」

「お前がこの意味の真意を分からなくても私たちには関係ないがな。決めるのはお前だし、自分でやると言ったのならその責任はお前自身のものだからな。」

……魔法を習うなら、ゼクトか子供教師に習え。私たち『神儀家』は、お前らの魔法習得に一切関与しないからな」

そう言っただけで私は、話を終わらせた。

その後、子供教師が、初心者用の魔法発動体をいくつか出して和
美たちに『アイルテスカット火よ灯れ』を教えていた。
綾瀬も、私が言ったことはあまり深く考えずにやっていたな。

……まあ。いずれ後悔するかしないかは、私の知ったところでは
ないからな。どうでもいいな。

S i d e ・ e n d

S i d e ・ のどか

私たちは、ネギ先生せんせいに教えてもらった呪文の練習をして、魔法球
内で夜になったので、出る時のために、一種の時差ボケをなくす為
に眠ることにしました。

そんな中、私は夜中にお手洗いにいきたくなくなって起きました。

そしてお手洗いの帰りに、表の方でなにやら物音が聞こえたので、
なんだろうとちょっと怖かったです。確認してみることになりました。
た。

私が確認する為に表に出た時には、既に物音は聞こえなくなっ

いて、かわりに誰かが話しているのが分かりました。

『頑張りすぎるのもいいが、やりすぎると逆効果じゃぞ』

『あ、マスター。わかつてはいるんですけど、体を動かさないと落ち着かなくて』

どうやらそれはネギ先生せんせいとゼクトさんだったみたいです。

『で、結局のところどうするのじゃ？』

『どうするとは何のことですか？』

私の位置からだ、お2人が何を話しているのか分かりませんが、秀囲気で重要な話だったことは分かりました。

『お主が、ナギを求める理由じゃよ。お主を慕っておる彼女たちには話さないのかのう？』

『……話そうと思ってるんですが、どうにも機会がなくて』

どんな話をしているのかとても気になりました。

私のアーティファクトは「他人の表層意識を探る」物なので、それを使えば、今いる位置からでも何の話をしているか知ることは可能です。ですけど、そう言うのって、プライバシーの侵害になりますし、でもでも、気になってしかたがないし、あつうつ。

こ、この場合、ど、ど、どうすればいいんでしょう？！

『それなら丁度良いのう』

『えっ？』

『そこにおるのじゃろ？娘』

「うひゃいっ！？」

『の、のどかさん?!』

ど、どうやら私がここに居ることは、ゼクトさんには気付かれていたみたいです……。あつうつ……。あつうつ……。

S i d e ・ e n d

S i d e ・ o t h e r

同・時・刻
。

女子寮の千鶴と夏美の部屋では、2人が少年 犬上小太郎
の看病をしていた。

「この子、どうしたらいいのかな?」

「あやかが帰ってきたら何て言うのかしらね」

夏美は小太郎のことをどうしたらいいか言うが、千鶴の方は、ただ帰ってきていないもう一人のルームメイトのあやかがどういう反^{リアク}応をとるのか興味があるようだ。

「う・・ネギ・・ネギ・・」

「ん？なんか寝言でネギとか言ってるよーっ」

そんな時、小太郎は寝言で「ネギ」と連呼した。

夏美が千鶴に寝言のことを報告すると、千鶴の反応は。

「あら？そういえば、風邪の時は葱をお尻にさすと温熱効果で体温が上がっていいらしいわよ」

お尻に葱をさすというものだった。

と言うか、さすじゃなくて、首に巻くだと思っただが……？

「ちょうどあるわ？やってみましょう。プスッと」

「わー、ダメダメ。ちづ姉。そんな見ず知らずの子にイキナリ」
「うっっん」

なおも実行しようとする千鶴を諫めようとする夏美。

その時、小太郎が再び寝言を喋りだした。

「あいつに・・伝えな……危険が・・迫ってるって・・」

奇しくも、その寝言を千鶴たちが聞くことは無かった。

また、別の場所では。

「ネギ・スプリングフィールド……カミギ・アスナ・そして」

雨が降りしきる麻帆良学園都市都市部。そこには何者かが迫っていた。

「カミギ・シキ」

その何者かは、3人の人物の名前を呟き、再び姿をくらました。

こうして、全ての役者がこの地　麻帆良に集結することになった。

残るは舞台の完成。

まもなく、開幕の時を告げる。

S
i
d
e
.
n
d

第62話（後書き）

前書きどおり、久しぶりに2日で更新出来ました。

興がのってしまって、俺日ではなく枠外を更新してしまいましたが、こんな短間隔での更新っていつ振りなんでしょうか……？

と言うよりも、連載当初、よく30日近く毎日更新出来たものかと思えます。

どうして出来てたんでしょうか？謎ですね……。

今回の最後に出てきました、謎の存在！

みなさまは何者かはご存知のはず！！

彼には悪いですが、不遇な扱いを受けてもらいます……次々回辺りで。

初めてアリカと夏美とのどかの視点を書いた気がします。

前にアリカ視点書いたか覚えてないんですけどね！

ケファイア様から頂きました、魔法球の名称案『天照』を今回使わせて頂きました。

『天照』の概要は、まあ、宴会用も兼ねた修業も出来る日本の夏と秋の間のような環境の魔法球と思ってください。

それと、同じく夷と言うかケファイア様から贈り物として『回復薬』を頂きました。

紫稀「不死性の高い私やキティ、忍以外が重傷を負った際に使用させてもらう」

結局、記念番外話やらないかもしれないかもしれません……。

それではこの辺で。誤字脱字、言い回しなどに変なところがあれば
ご報告ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6941u/>

世界の枠から外れた者

2011年12月11日09時47分発行